岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 262

勝負峪遺跡
桑山遺跡
桑山古墳群

一般国道 53 号（津山南道路）改築工事に伴う発掘調査２

２０２３

岡 山 県 教 育 委 員 会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 262

勝負峪遺跡
桑山遺跡
桑山古墳群

一般国道 53 号（津山南道路）改築工事に伴う発掘調査２

２０２３

岡 山 県 教 育 委 員 会



１　調査地遠景（北から）



２　勝負峪遺跡・桑山５号墳遠景（南から）

巻頭図版２



１　勝負峪遺跡土坑墓群と石列１（北東から）



２　桑山２号墳横穴式石室遺物出土状況（北東から）



１　桑山３号墳箱式石棺遺物出土状況（南西から）



２　桑山５号墳横穴式石室袖部遺物出土状況（北東から）

巻頭図版４



M 62



M 62 環状部拡大



M 63



M 63 環状部拡大



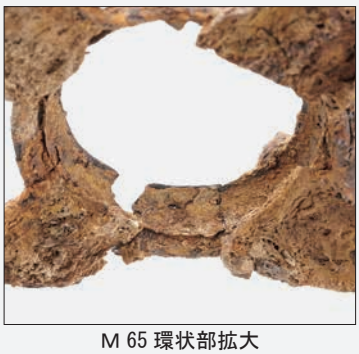
M 64



M 64 環状部拡大

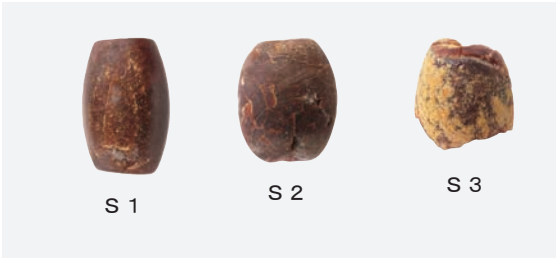


M 65



M 65 環状部拡大

桑山２号墳出土雲珠・辻金具



１　桑山１号墳出土玉類



２　桑山２号墳出土耳環



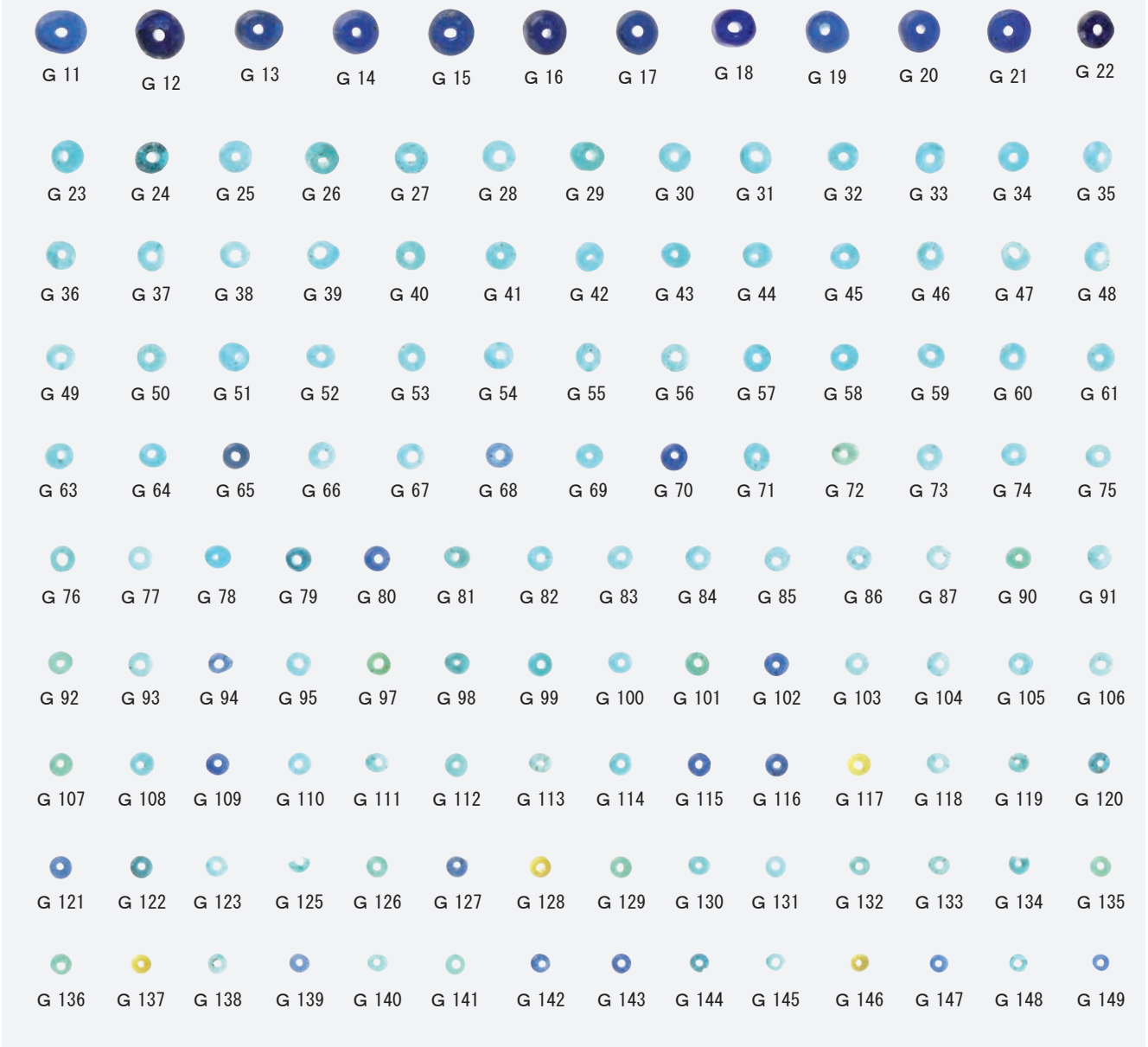
３　桑山３号墳箱式石棺出土玉類



４　桑山４号墳竪穴式石室１出土玉類

巻頭図版６





桑山５号墳出土玉類

序

一般国道 53 号は、岡山市から鳥取市に至る延長約 140㎞の主要幹線道路です。津山南道路は、このうち久米郡美咲町打穴中から津山市平福に至る区間に並行する延長 5.4㎞の道路として計画され、津山周辺圏と県南部地域との連携強化を促進し、沿線地域の発展を図ることを目的としています。

岡山県教育委員会では、計画路線内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、関係機関と協議を重ねてまいりましたが、現状のまま保存することが困難な部分についてはやむを得ず記録保存の措置を講じることとし、発掘調査を実施いたしました。

本書は、一般国道 53 号（津山南道路）改築に伴う発掘調査報告書の第２冊目であり、平成 30 年度から令和２年度にかけて行った、津山市高尾・平福に所在する勝負峪遺跡・桑山遺跡・桑山古墳群の発掘調査記録を収載しています。

勝負峪遺跡では弥生時代から古代にかけての遺構・遺物が確認され、特に弥生時代中期には９ｍ四方の範囲に 20 基の土坑墓が造られていました。桑山遺跡では、弥生時代以降の集落跡と、古墳時代以降の生産関連遺構が検出されました。６世紀中頃に築かれた５基の古墳で構成される桑山古墳群では、桑山１・２・５号墳が横穴式石室、３号墳が箱式石棺と木棺墓、４号墳が２基の竪穴式石室という様々な埋葬施設が確認されました。これらは遺存状況が良く、土器・武器・馬具・装身具などの豊富な副葬品が出土しました。なかでも桑山１号墳から出土した石突、桑山２号墳から出土した素環頭大刀や馬具、桑山５号墳から出土した装飾壺や鈴付高杯は、当時の有力者が保有した優品として注目されます。

これらの調査成果を収めた本書が、地域の歴史研究に寄与するとともに、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また学術研究のための資料として、広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたりましては、国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所をはじめとする関係機関や地域住民の皆様から御理解と御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和５年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　大　橋　雅　也

例　言

1　本書は、岡山県教育委員会が一般国道 53 号（津山南道路）改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所と岡山県の委託契約に基づき実施した、勝負峪遺跡・桑山遺跡・桑山古墳群の発掘調査報告書である。契約事項は文化財課が行い、発掘調査及び報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。なお、桑山１～４号墳の調査中に確認された弥生時代以降の集落跡は、その検出範囲が桑山１～４号墳と同じものの遺跡の種類が異なることから、この範囲を含む尾根上の集落遺跡として、桑山遺跡と称する。

2　勝負峪遺跡は津山市平福、桑山遺跡・桑山古墳群は津山市平福・高尾に所在する。

3　発掘調査は平成 30 年度から令和２年度に実施した。平成 30 年度は、亀山行雄・尾上元規・小嶋善邦・藤井翔平が担当し 1,190 ㎡を、令和元年度は尾上・小嶋・藤井翔・藤井雅大・四田寛人が担当し 2,430 ㎡を、令和２年度は尾上・小嶋・氏平昭則・藤井雅・藤田京佑が担当し 2,345 ㎡を調査した。

4　発掘調査及び報告書作成に当たって「一般国道 53 号（津山南道路）改築工事に伴う埋蔵文化財保護調査指導会」を設け、次の委員各位から指導・助言をいただいた。記して謝意を表する。

小郷　利幸（津山弥生の里文化財センター）　令和元年度まで
可児　通宏（津山市文化財保護委員）　令和元年度まで
澤田　秀実（くらしき作陽大学）
清家　　章（岡山大学）
富岡　直人（岡山理科大学）　平成 30 年度まで
仁木　康治（津山弥生の里文化財センター）　令和２年度から
南　健太郎（岡山大学）　令和元年度から

5　報告書の作成は令和３年度に実施し、小嶋・藤井雅が担当した。

6　本書の執筆は、第２章第１節を大橋雅也・柴田英樹が行い、その他は尾上・小嶋・氏平・藤井翔・藤井雅・四田が担当した。全体の編集は小嶋・藤井雅が行った。

7　遺物に関する鑑定・分析を次の諸氏に依頼し有益な教示を受けた。記して謝意を表する。

人骨の鑑定・分析　鈴木真太郎・山下　勝行・岩本　紗采（岡山大学）
須恵器・埴輪の胎土分析　白石　　純（岡山理科大学）
石材の鑑定　鈴木　茂之（岡山大学）

8　遺構埋土・炭化物・馬具の自然科学的分析と素環頭大刀・鹿角装大刀の保存処理等は、次の機関と業務委託契約を行い実施した。

遺構埋土・炭化物・馬具の自然科学的分析　パリノ・サーヴェイ株式会社
素環頭大刀・鹿角装大刀の保存処理・材質分析　公益財団法人　元興寺文化財研究所

9　遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。

10　本書に関連する遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻 1325-3）に保管している。

凡　　例

1　本書に用いた高度値は標高であり、挿図に示す北方位は平面直角座標Ⅴ系（世界測地系）の座標北である。

2　挿図・報告書抄録の座標値・経緯度は、世界測地系に準拠している。

3　遺構・遺物の縮尺は個々に明記している。

4　各遺跡及び古墳群の遺物番号は種類ごとに通し番号とした。また、土器・埴輪以外の遺物はその材質を示すため、番号の頭に次の記号を付している。

　土製品：C　　石製品：S　　金属製品：M　　ガラス製品：G

5　土器実測図において、口縁部または底部を示す上端・下端の線が中軸線の左右で途切れているものは、復元径が不確実であることを示している。

6　土層の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）による。

7　次の挿図は、国土地理院発行の地形図を複製・加筆したものである。

　第２図　　1/25,000 地形図「津山西部」

　第３図　　1/50,000 地形図「津山西部」

8　横穴式石室の袖・側壁等の左右は、文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき―各種遺跡調査編―』2013 に従い、入口から奥壁側をみた場合の左右とした。

9　本書で使用した時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、必要に応じて文化史区分・世紀などを併用している。

目　　次

巻頭図版

序

例　言

凡　例

目　次

第１章　地理的・歴史的環境 …… 1

第２章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯 …… 9

第２節　調査の経過 …… 12

第３節　報告書作成の経過 …… 15

第４節　発掘調査及び報告書作成の体制 …… 16

第５節　日誌抄 …… 17

第３章　勝負峪遺跡

第１節　遺跡の概要 …… 19

第２節　弥生時代の遺構・遺物 …… 21

1　竪穴住居 …… 21

2　段状遺構 …… 22

3　土坑墓群 …… 25

4　被熱痕跡 …… 35

5　遺構に伴わない遺物 …… 36

第３節　古墳時代以降の遺構・遺物 …… 37

1　掘立柱建物 …… 37

2　柱穴列 …… 37

3　段状遺構 …… 38

4　土坑 …… 39

5　道 …… 42

6　遺構に伴わない遺物 …… 42

第４章　桑山遺跡

第１節　遺跡の概要 …… 43

第２節　弥生時代の遺構・遺物 …… 43

1　竪穴住居 …… 43

2　段状遺構 …… 52

3　遺構に伴わない遺物 …… 54

第３節　古墳時代以降の遺構・遺物 …… 55
1　竪穴住居 …… 55
2　段状遺構 …… 57
3　土坑 …… 59
4　埋葬遺構 …… 62
5　炉 …… 63
6　製炭窯 …… 64
7　粘土採掘坑 …… 65
8　溝 …… 66
9　遺構に伴わない遺物 …… 68
第５章　桑山古墳群
第１節　遺跡の概要 …… 71
第２節　桑山１号墳 …… 74
1　墳丘と周溝 …… 74
2　横穴式石室 …… 77
3　石室及び墓道内遺物出土状況 …… 80
4　石室及び墓道内出土遺物 …… 82
5　周溝及び墳丘出土遺物 …… 86
第３節　桑山２号墳 …… 89
1　墳丘と周溝 …… 89
2　横穴式石室 …… 92
3　石室内遺物出土状況 …… 93
4　石室内出土遺物 …… 94
5　周溝内出土遺物 …… 101
第４節　桑山３号墳 …… 103
1　墳丘と周溝 …… 103
2　箱式石棺 …… 105
3　木棺墓 …… 113
4　その他の遺物 …… 114
第５節　桑山４号墳 …… 115
1　墳丘と周溝 …… 115
2　竪穴式石室１ …… 117
3　竪穴式石室２ …… 121
第６節　桑山５号墳 …… 126
1　墳丘と周溝 …… 126
2　横穴式石室 …… 127
3　石室内遺物出土状況 …… 129
4　石室内出土遺物 …… 133

5　周溝内遺物出土状況 …… 140
第７節　その他の遺構・遺物 …… 148
1　概要 …… 148
2　箱式石棺墓 …… 150
3　土器棺墓 …… 150
4　遺構に伴わない遺物 …… 150
第６章　自然科学的分析
第１節　桑山遺跡・桑山３号墳採取土壌及び出土炭化物の自然科学分析
…… パリノ・サーヴェイ株式会社　151
第２節　桑山２号墳出土雲珠・辻金具の顕微鏡観察及び蛍光Ｘ線分析
…… パリノ・サーヴェイ株式会社　159
第３節　桑山古墳群出土遺物の胎土分析
…… 岡山理科大学　白石　純　164
第４節　桑山３号墳出土人骨の観察結果の報告
…… 岡山大学　鈴木真太郎・山下　勝行　172
第５節　考古人骨における歯石残存デンプン粒の分析
…… 岡山大学　岩本　紗采・鈴木真太郎　186
第７章　総　括
第１節　遺跡の変遷について …… 197
第２節　勝負峪遺跡の土坑墓群と石列について …… 200
第３節　桑山古墳群の形成とその動向 …… 205
第４節　導入期の横穴式石室について …… 211
第５節　桑山２号墳の素環頭大刀について …… 216
第６節　桑山３号墳箱式石棺の幼児埋葬について …… 219
第７節　美作地域における後期埴輪の展開と終焉 …… 223
遺構一覧表
遺物観察表
図　版
報告書抄録
奥　付

図 目 次

第１章　地理的・歴史的環境

第１図　遺跡の位置（1/1,500,000）…… 1
第２図　周辺の遺跡分布（1/25,000）…… 2

第２章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第３図　計画路線（1/50,000）…… 9
第４図　計画路線と調査対象遺跡（1/4,000）…… 10
第５図　勝負峪遺跡・桑山５号墳
　　トレンチ配置（1/3,000）…… 11
第６図　調査区割と桑山遺跡・桑山１～４号墳
　　トレンチ配置（1/2,000）…… 13
第７図　勝負峪遺跡・桑山遺跡・桑山古墳群全体図
　　（1/1,000）…… 14

第３章　勝負峪遺跡

第８図　遺跡全体図（1/400）…… 20
第９図　竪穴住居１（1/60）・出土遺物（1/2）…… 21
第 10 図　段状遺構１（1/60）・
　　出土遺物（1/4･1/3）…… 22
第 11 図　段状遺構２（1/60）…… 23
第 12 図　段状遺構３（1/60）・
　　出土遺物（1/4）…… 24
第 13 図　段状遺構４（1/60）・
　　出土遺物（1/2）…… 24
第 14 図　段状遺構５（1/60）・
　　出土遺物（1/4）…… 25
第 15 図　土坑墓群（1/100）・断面図（1/80）…… 26
第 16 図　石列１（1/60）…… 27
第 17 図　石列２（1/60）…… 27
第 18 図　土坑墓１・２（1/30）…… 28
第 19 図　土坑墓３～６（1/30）…… 29
第 20 図　土坑墓７・８（1/30）…… 30
第 21 図　土坑墓９・10（1/30）…… 31
第 22 図　土坑墓 11 ～ 13（1/30）・
　　土坑墓 13 出土遺物（1/4）…… 32
第 23 図　土坑墓 14・15（1/30）…… 33
第 24 図　土坑墓 16 ～ 19（1/30）・
　　土坑墓 16 出土遺物（1/4）…… 34
第 25 図　土坑墓 20・21（1/30）…… 35
第 26 図　被熱痕跡１（1/30）と
　　その周辺の出土遺物（1/4・1/2）…… 36
第 27 図　遺構に伴わない遺物
　　（1/4・1/3・1/2）…… 36
第 28 図　掘立柱建物１（1/60）…… 37
第 29 図　柱穴列１（1/60）…… 37
第 30 図　段状遺構６（1/60）…… 38
第 31 図　段状遺構７（1/60）…… 38
第 32 図　段状遺構７出土遺物（1/4・1/3）…… 39
第 33 図　土坑１・２（1/30）…… 40
第 34 図　土坑３～６（1/30）・
　　土坑５出土遺物（1/4）…… 41
第 35 図　道１（1/30）・出土遺物（1/4）…… 42
第 36 図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2）…… 42

第４章　桑山遺跡

第 37 図　遺跡全体図（1/400）…… 44
第 38 図　竪穴住居１（1/60）・
　　出土遺物（1/4）…… 45
第 39 図　竪穴住居２（1/60）・
　　出土遺物（1/3・1/2）…… 46
第 40 図　竪穴住居２（1/60）…… 47
第 41 図　竪穴住居２出土遺物（1/4）…… 48
第 42 図　竪穴住居３（1/60）・
　　出土遺物（1/3）…… 49
第 43 図　竪穴住居４（1/60）…… 50
第 44 図　竪穴住居４変遷図（1/120）…… 51
第 45 図　竪穴住居４出土遺物
　　（1/4・1/3・1/2）…… 51
第 46 図　段状遺構１（1/60）・
　　出土遺物（1/4・1/2）…… 52
第 47 図　段状遺構２（1/60）…… 53

第 48 図　段状遺構３（1/60）・
出土遺物（1/4）…… 53
第 49 図　遺構に伴わない遺物
（1/6・1/4・1/3・1/2）…… 54
第 50 図　竪穴住居５（1/60）・カマド（1/30）・
出土遺物（1/4・1/3）…… 55
第 51 図　竪穴住居６（1/60）…… 56
第 52 図　段状遺構４（1/80）・
出土遺物（1/4）…… 57
第 53 図　段状遺構５・６（1/80）・
出土遺物（1/4）…… 58
第 54 図　段状遺構７（1/80）…… 59
第 55 図　土坑１（1/30）…… 59
第 56 図　土坑２（1/30）・出土遺物（1/4）…… 60
第 57 図　土坑３（1/30）・出土遺物（1/4）…… 60
第 58 図　土坑４（1/60）…… 60
第 59 図　土坑５・６（1/30）・
土坑５出土遺物（1/3）…… 61
第 60 図　土坑７（1/30）…… 62
第 61 図　埋葬遺構１（1/20）・出土遺物（1/4）…… 62
第 62 図　埋葬遺構２（1/30）・
出土遺物（1/4・1/3）…… 63
第 63 図　炉１（1/30）…… 63
第 64 図　製炭窯１（1/60）・出土遺物（1/4）…… 64
第 65 図　粘土採掘坑１（1/100・1/60）…… 65
第 66 図　粘土採掘坑１出土遺物（1/4・1/3）…… 66
第 67 図　粘土採掘坑２(1/100・1/60）…… 67
第 68 図　粘土採掘坑２出土遺物（1/4）…… 68
第 69 図　溝１・２(1/30)・
溝１出土遺物（1/4）…… 68
第 70 図　遺構に伴わない遺物①（1/4）…… 69
第 71 図　遺構に伴わない遺物②（1/4・1/3）…… 70

第５章　桑山古墳群

第 72 図　桑山１～４号墳周辺の調査前の地形
（1/600）…… 71
第 73 図　桑山１～４号墳全体図（1/400）…… 72
第 74 図　桑山５号墳全体図（1/400）…… 73
第 75 図　桑山１号墳墳丘（1/150）…… 74
第 76 図　桑山１号墳墳丘・石室内土層断面①
（1/100）…… 75
第 77 図　桑山１号墳墳丘・石室内土層断面②
（1/100）…… 76
第 78 図　桑山１号墳墳丘盛土下の溝状遺構
（1/120）…… 77
第 79 図　桑山１号墳石室及び墓道①（1/60）…… 78
第 80 図　桑山１号墳石室及び墓道②（1/60）…… 79
第 81 図　桑山１号墳石室奥壁及び袖部見通し
（1/60）…… 80
第 82 図　桑山１号墳石室石材崩落等模式図
（1/100）…… 80
第 83 図　桑山１号墳閉塞施設・墓道（1/60）…… 81
第 84 図　桑山１号墳玄室遺物出土状況（1/30）…… 82
第 85 図　桑山１号墳石室及び墓道出土遺物
（1/4）…… 83
第 86 図　桑山１号墳石室内出土遺物①（1/4）…… 84
第 87 図　桑山１号墳石室内出土遺物②
（1/3・1/2）…… 85
第 88 図　桑山１号墳周溝内遺物出土状況
（1/200）…… 86
第 89 図　桑山１号墳周溝及び墳丘出土遺物①
（1/6・1/4）…… 87
第 90 図　桑山１号墳周溝及び墳丘出土遺物②
（1/6）…… 88
第 91 図　桑山２号墳墳丘（1/150）…… 89
第 92 図　桑山２号墳墳丘・
石室内土層断面（1/80）…… 90
第 93 図　桑山２号墳石室①（1/60）…… 91
第 94 図　桑山２号墳石室②（1/60）…… 91
第 95 図　桑山２号墳閉塞施設（1/60）…… 92
第 96 図　桑山２号墳石室内遺物出土状況
（1/30）…… 93
第 97 図　桑山２号墳石室内遺物出土状況
〈鉄器集中部拡大〉（1/8）…… 93
第 98 図　桑山２号墳石室出土遺物①（1/4）…… 95
第 99 図　桑山２号墳石室出土遺物②（1/4）…… 96
第 100 図　桑山２号墳石室出土遺物③（1/3）…… 97

第 101 図　桑山２号墳石室出土遺物④（1/3）…… 98
第 102 図　桑山２号墳石室出土遺物⑤（1/3）…… 99
第 103 図　桑山２号墳周構内遺物出土状況
（1/200）…… 101
第 104 図　桑山２号墳周構内遺物出土状況
〈東部拡大〉（1/60）…… 101
第 105 図　桑山２号墳周構内出土遺物
（1/6・1/3）…… 102
第 106 図　桑山３号墳墳丘（1/150）…… 103
第 107 図　桑山３号墳墳丘・
主体部内土層断面（1/80）…… 104
第 108 図　桑山３号墳箱式石棺①（1/30）…… 105
第 109 図　桑山３号墳箱式石棺掘り方
（1/30）…… 106
第 110 図　桑山３号墳箱式石棺②（1/30）…… 107
第 111 図　桑山３号墳箱式石棺遺物出土状況
（1/20）…… 108
第 112 図　桑山３号墳箱式石棺遺物出土状況
〈拡大〉（1/5）…… 108
第 113 図　桑山３号墳箱式石棺出土遺物
（1/4）…… 109
第 114 図　桑山３号墳箱式石棺内出土遺物①
（1/2）…… 110
第 115 図　桑山３号墳箱式石棺内出土遺物②
（1/2）…… 111
第 116 図　桑山３号墳箱式石棺内出土遺物③
（1/3）…… 112
第 117 図　桑山３号墳箱式石棺内出土遺物④
（1/2・1/1）…… 113
第 118 図　桑山３号墳木棺墓（1/60）…… 114
第 119 図　桑山３号墳周溝及び墳丘出土遺物
（1/6・1/4・1/3）…… 114
第 120 図　桑山４号墳墳丘（1/150）…… 115
第 121 図　桑山４号墳墳丘・主体部内土層断面
（1/80）…… 116
第 122 図　桑山４号墳竪穴式石室１①
（1/30）…… 117
第 123 図　桑山４号墳竪穴式石室１②
（1/30）…… 118
第 124 図　桑山４号墳竪穴式石室１
石室内遺物出土状況（1/30・1/10）…… 119
第 125 図　桑山４号墳竪穴式石室１内出土遺物①
（1/4・1/3・1/2・1/1）…… 120
第 126 図　桑山４号墳竪穴式石室２①
（1/30）…… 121
第 127 図　桑山４号墳竪穴式石室２②
（1/30）…… 122
第 128 図　桑山４号墳竪穴式石室２
石室内遺物出土状況（1/30・1/5）…… 123
第 129 図　桑山４号墳竪穴式石室２内出土遺物①
（1/4）…… 124
第 130 図　桑山４号墳竪穴式石室２内出土遺物②
（1/4・1/3）…… 125
第 131 図　桑山５号墳墳丘（1/150）…… 126
第 132 図　桑山５号墳墳丘・石室内土層断面
（1/80）…… 127
第 133 図　桑山５号墳石室掘り方（1/60）…… 128
第 134 図　桑山５号墳石室（1/60）…… 129
第 135 図　桑山５号墳石室内遺物出土状況
（1/30・1/20）…… 130
第 136 図　桑山５号墳石室内鉄器出土状況
（1/30・1/10）…… 131
第 137 図　桑山５号墳石室内玉類出土状況
（1/30・1/10・1/2）…… 132
第 138 図　桑山５号墳石室内出土遺物①
（1/4）…… 135
第 139 図　桑山５号墳石室内出土遺物②
（1/4）…… 136
第 140 図　桑山５号墳石室内出土遺物③
（1/4）…… 137
第 141 図　桑山５号墳石室内出土遺物④
（1/4）…… 138
第 142 図　桑山５号墳石室内出土遺物⑤
（1/4）…… 139

第 143 図　桑山５号墳石室内出土遺物⑥
(1/4) …… 140
第 144 図　桑山５号墳石室内出土遺物⑦
(1/3) …… 141
第 145 図　桑山５号墳石室内出土遺物⑧
(1/3) …… 142
第 146 図　桑山５号墳石室内出土遺物⑨
(1/3・1/2) …… 143
第 147 図　桑山５号墳石室内出土遺物⑩
(1/1) …… 144
第 148 図　桑山５号墳周溝内遺物出土状況
(1/60) …… 145
第 149 図　桑山５号墳周溝内出土遺物①
(1/6・1/4) …… 146
第 150 図　桑山５号墳周溝内出土遺物②
(1/6) …… 147
第 151 図　箱式石棺墓１土層断面（1/30）…… 148
第 152 図　箱式石棺墓１・出土遺物
(1/30・1/4) …… 149
第 153 図　土器棺墓１・出土遺物
(1/20・1/4) …… 150
第 154 図　遺構に伴わない遺物（1/2）…… 150

第６章　自然科学的分析

第 155 図　竪穴住居２試料の植物珪酸体含量 …… 152
第 156 図　暦年較正結果 …… 155
第 157 図　桑山古墳群出土須恵器（杯、高杯）の
産地推定① …… 166
第 158 図　桑山古墳群出土須恵器（杯、高杯）の
産地推定② …… 167
第 159 図　桑山古墳群出土須恵器（杯、高杯）の
産地推定③ …… 167
第 160 図　桑山古墳群出土須恵器（壺、提瓶、瓶）の
産地推定① …… 168
第 161 図　桑山古墳群出土須恵器（壺、提瓶、瓶）の
産地推定② …… 168
第 162 図　桑山古墳群出土須恵器（壺、提瓶、瓶）の
産地推定③ …… 169
第 163 図　桑山古墳群出土埴輪と
津山市内出土埴輪の比較① …… 169
第 164 図　桑山古墳群出土埴輪と
津山市内出土埴輪の比較② …… 170
第 165 図　桑山古墳群出土埴輪と
津山市内出土埴輪の比較③ …… 170
第 166 図　古人骨における歯石の評価基準
(V.Tiesler 提供）…… 186
第 167 図　デンプン粒の形態分類基準 (a) と
現生植物 17 種の形態分類図 (b) …… 192

第７章　総　括

第 168 図　弥生時代（1/2,000）…… 198
第 169 図　桑山古墳群造営時（1/2,000）…… 198
第 170 図　桑山古墳群造営後～中世
(1/2,000) …… 199
第 171 図　製錬滓の分布状況（1/2,000）…… 199
第 172 図　勝負峪遺跡土坑墓と周辺遺跡土坑墓の比較
(1/100) …… 202
第 173 図　勝負峪遺跡土坑墓群と周辺遺跡土坑墓群
(1/300) …… 203
第 174 図　須恵器蓋杯の型式（1/8）…… 205
第 175 図　出土須恵器蓋杯の法量散布図 …… 207
第 176 図　出土須恵器蓋杯の
形態別法量散布図 …… 207
第 177 図　出土須恵器杯身の受け部角度と
立ち上がり高さ散布図 …… 207
第 178 図　桑山２号墳と正籠３号墳の横穴式石室
(1/100) …… 212
第 179 図　１期の桑山南古墳群（1/500）…… 213
第 180 図　桑山１～４号墳（1/1,000）…… 213
第 181 図　素環頭大刀の分布（1/1,500,000）…… 216
第 182 図　岡山県域の素環頭大刀（1/6）…… 217
第 183 図　正籠３号墳の素環頭大刀（1/6）…… 217
第 184 図　箱式石棺の床面規模と出土人骨の
年齢・性別 …… 219
第 185 図　美作地域における円筒埴輪の編年 …… 225
第 186 図　美作地域における
２種のヘラ記号の分布 …… 228

第 187 図　美作地域における
石見型埴輪の分布 …… 228
第 188 図　岡山県における
６世紀の埴輪の分布 …… 230

表 目 次

第２章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過
第１表　本書関連調査一覧 …… 12
第２表　文化財保護法に基づく提出書類一覧 …… 18
第６章　自然科学的分析
第３表　花粉分析結果 …… 152
第４表　植物珪酸体含量 …… 152
第５表　炭化材・種実同定結果 …… 154
第６表　放射性炭素年代測定結果 …… 155
第７表　蛍光Ｘ線分析結果（%） …… 160
第８表　桑山古墳群出土須恵器・
埴輪の分析結果（%） …… 171
第９表　桑山３号墳出土の小児人骨における
歯牙資料（乳歯） …… 175
第 10 表　桑山３号墳出土の小児人骨における歯牙資料
（形成途中の永久歯歯冠） …… 175
第 11 表　桑山３号墳分析資料一覧 …… 180
第 12 表　桑山南５号墳出土人骨の歯牙資料遺存状況と
歯石の付着状況 …… 187
第 13 表　飯盛山東１号墳出土人骨の歯牙資料遺存状況
と歯石の付着状況 …… 187
第 14 表　富田村貝塚出土人骨の歯牙資料遺存状況と
歯石の付着状況 …… 187
第 15 表　桑山南５号墳出土人骨歯石で検出された
デンプン粒の計測結果 …… 188
第 16 表　飯盛山東１号墳出土人骨歯石で検出された
デンプン粒の計測結果 …… 190
第 17 表　富田村貝塚出土人骨歯石で検出された
デンプン粒の計測結果 …… 190
第７章　総　括
第 18 表　津山盆地周辺の土坑墓小口間距離 …… 201
第 19 表　桑山古墳群一覧 …… 209
第 20 表　桑山２号墳と正籠３号墳の比較 …… 212
第 21 表　桑山南古墳群における１期の墳墓 …… 213
第 22 表　桑山古墳群の墳墓 …… 213
第 23 表　岡山県域出土の素環頭大刀 …… 217
第 24 表　桑山２号墳と正籠３号墳の素環頭大刀の
比較 …… 217
第 25 表　古墳時代における箱式石棺出土幼児・
小児人骨（岡山県・鳥取県・島根県）…… 221
第 26 表　美作地域における主なⅤ期の埴輪 …… 223
第 27 表　桑山・桑山南・細畝古墳群における
埴輪・陶棺の出土状況 …… 230

写 真 目 次

第２章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過
写真１　埋蔵文化財保護調査指導会
（令和元年 10 月 30 日） …… 15
第３章　勝負峪遺跡
写真２　１区調査風景（北西から） …… 19
写真３　２区調査風景（南西から） …… 19
写真４　石列１（西から） …… 27
写真５　段状遺構７調査風景（東から） …… 39
写真６　段状遺構７遺物出土状況（南東から） …… 39
第４章　桑山遺跡
写真７　１～３区調査前風景（南から） …… 43
写真８　竪穴住居４周辺調査風景（東から） …… 43
写真９　竪穴住居１遺物出土状況（南西から） …… 45
写真 10　竪穴住居２北壁炭化材（南東から） …… 48
写真 11　竪穴住居２炭化材⑤木口面
（南東から） …… 48

写真 12　竪穴住居３作業風景（南東から）…… 49
写真 13　竪穴住居４作業風景（北西から）…… 49
写真 14　段状遺構１作業風景（南西から）…… 52
写真 15　竪穴住居５カマド断面（北から）…… 56
写真 16　竪穴住居６（南東から）…… 56
写真 17　炉１検出状況（南から）…… 63
写真 18　製炭窯１作業風景（西から）…… 64
写真 19　製炭窯１煙道付近作業風景（南から）…… 64
写真 20　粘土採掘坑１作業風景（西から）…… 66
写真 21　粘土採掘坑１断面（南西から）…… 66
第５章　桑山古墳群
写真 22　桑山１号墳調査前（南から）…… 73
写真 23　桑山３・４号墳調査前（南東から）…… 73
写真 24　桑山１号墳側壁崩落状況
〈左側壁奥壁側〉（南から）…… 80
写真 25　桑山１号墳側壁崩落状況
〈右側壁玄門付近〉（北から）…… 80
写真 26　埴輪 38 表面の傷状痕跡 …… 88
写真 27　桑山２号墳遺物検出状況
（北から）…… 94
写真 28　桑山２号墳石室作業風景
（北西から）…… 94
写真 29　桑山４号墳竪穴式石室２
M 139 出土状況（南西から）…… 123
写真 30　桑山４号墳竪穴式石室２作業風景
（北西から）…… 123
写真 31　桑山５号墳玄室奥壁・左側壁
（南から）…… 128
写真 32　桑山５号墳装飾壺ほか出土状況
（北から）…… 129
写真 33　桑山５号墳周溝内埴輪出土状況
（東から）…… 148
第６章　自然科学的分析
写真 34　花粉分析・植物珪酸体 …… 157
写真 35　炭化材・種実 …… 158
写真 36　分析試料 …… 161
写真 37　マイクロスコープ観察 …… 162
写真 38　電子顕微鏡観察 …… 163
写真 39　右頭頂骨（資料番号１）に見られる
黒色の変色 …… 174
写真 40　右眼窩面に認められた軽度の
クリブラ・オルビタリア …… 174
写真 41　下顎骨歯列 …… 176
写真 42　上顎左右切歯（唇面）…… 176
写真 43　上顎左右切歯（舌面）…… 176
写真 44　過剰歯 …… 177
写真 45　ビーズの原位置 …… 178
写真 46　桑山３号墳小児人骨
左下顎第１大臼歯 …… 182
写真 47　桑山南５号墳男性成人人骨
左下顎第２大臼歯 …… 183
写真 48　試料作製の様子 …… 188
写真 49　脱凝集剤
ヘキサメタリン酸ナトリウム …… 188
写真 50 ～ 55　桑山南５号墳出土人骨歯石で
検出されたデンプン粒 …… 189
写真 56 ～ 60　桑山南５号墳出土人骨歯石で
検出されたデンプン粒 …… 189
写真 61 ～ 63　飯盛山東１号墳出土人骨歯石で
検出されたデンプン粒 …… 190
写真 64 ～ 68　富田村貝塚出土人骨歯石で
検出されたデンプン粒 …… 191
写真 69　コムギデンプン粒の形態変化 …… 191
第７章　総　括
写真 70　最下段突帯製作技法 …… 226
写真 71　底部調整 …… 226

巻頭図版目次

巻頭図版１　１　調査地遠景（北から）
　　２　勝負峪遺跡・桑山５号墳遠景（南から）
巻頭図版２　１　勝負峪遺跡土坑墓群と石列１（北東から）
　　２　桑山２号墳横穴式石室遺物出土状況（北東から）
巻頭図版３　１　桑山３号墳箱式石棺遺物出土状況（南西から）
　　２　桑山５号墳横穴式石室袖部遺物出土状況（北東から）
巻頭図版４　桑山２号墳出土雲珠・辻金具
巻頭図版５　１　桑山１号墳出土玉類
　　２　桑山２号墳出土耳環
　　３　桑山３号墳箱式石棺出土玉類
　　４　桑山４号墳竪穴式石室１出土玉類
巻頭図版６　桑山５号墳出土玉類

図 版 目 次

勝負峪遺跡

図版１　１　勝負峪遺跡１区　西半（南東から）
　　２　勝負峪遺跡２・３区（南東から）
図版２　１　竪穴住居１（北東から）
　　２　段状遺構１（西から）
　　３　段状遺構２（北西から）
図版３　１　段状遺構３（東から）
　　２　段状遺構４（南から）
　　３　段状遺構５（北東から）
図版４　１　土坑墓群（北東から）
　　２　土坑墓群と石列１・２（上が南西）
図版５　１　石列１（北から）
　　２　土坑墓１（北東から）
　　３　土坑墓２（北東から）
　　４　土坑墓３（北東から）
　　５　土坑墓４（南西から）
　　６　土坑墓５（東から）
　　７　土坑墓６（北東から）
図版６　１　土坑墓７（南東から）
　　２　土坑墓８（北から）
　　３　土坑墓９（北東から）
　　４　土坑墓 10（北東から）
　　５　土坑墓 11（北から）
　　６　土坑墓 12（北東から）
　　７　土坑墓 13（南西から）
　　８　土坑墓 14（北東から）
　　９　土坑墓 15（南西から）
　　10　土坑墓 15 木棺痕跡（南東から）
図版７　１　土坑墓 16（北から）
　　２　土坑墓 17（北東から）
　　３　土坑墓 18（北から）
　　４　土坑墓 19（北西から）
　　５　土坑墓 20（東から）
　　６　土坑墓 21（北東から）
　　７　被熱痕跡１と周辺での土器・石材の出土状況（北西から）
図版８　１　掘立柱建物１（東から）
　　２　段状遺構７（東から）
　　３　柱穴列１（北西から）
　　４　土坑３（南から）

5　土坑５（南から）
6　土坑６（南西から）
図版９　勝負峪遺跡出土遺物
桑山遺跡
図版 10　1　竪穴住居１（南東から）
2　竪穴住居１土器出土状況（南西から）
3　竪穴住居３（北東から）
図版 11　1　竪穴住居２炭化材検出状況（南東から）
2　竪穴住居２炭化材検出状況（北西から）
3　竪穴住居２北西部炭化材検出状況（北東から）
4　竪穴住居２北西部床面炭化材検出状況（北から）
5　竪穴住居２中央部炭化材検出状況（南から）
図版 12　1　竪穴住居２（南東から）
2　竪穴住居４（東から）
3　竪穴住居４断面（西から）
図版 13　1　段状遺構１（北東から）
2　段状遺構２（北東から）
3　段状遺構３（南から）
図版 14　1　竪穴住居５（南から）
2　竪穴住居５カマド（南東から）
3　竪穴住居６（南西から）
図版 15　1　段状遺構４（東から）
2　段状遺構６（東から）
3　段状遺構６柱穴遺物出土状況（南西から）
図版 16　1　土坑１（北から）
2　土坑２・３（北から）
3　土坑４（南西から）
図版 17　1　土坑５礫検出状況（東から）
2　土坑５（東から）
3　埋葬遺構１（南東から）
図版 18　1　埋葬遺構２礫検出状況（南西から）
2　埋葬遺構２（南西から）
3　炉１（南から）
図版 19　1　製炭窯１（南西から）
2　製炭窯１＜窯体片あり＞（南西から）
3　製炭窯１（南東から）
4　製炭窯１＜煙道付近＞（南西から）
5　製炭窯１＜煙道＞（南東から）
図版 20　1　粘土採掘坑１（南西から）
2　粘土採掘坑１断面（南西から）
3　粘土採掘坑１底面の小穴（南から）
図版 21　1　粘土採掘坑２西半（南から）
2　粘土採掘坑２断面（北東から）
3　溝１（東から）
図版 22　桑山遺跡出土土器①
図版 23　桑山遺跡出土土器②
図版 24　桑山遺跡出土鉄器・石器
桑山古墳群
図版 25　1　桑山１～４号墳遠景（南から）
2　桑山１～４号墳（北から）
図版 26　1　桑山１号墳調査前（北西から）
2　桑山１号墳全景（南西から）
図版 27　1　桑山１号墳全景（上が北東）
2　桑山１号墳石室（北東から）
3　桑山１号墳石室奥壁（南西から）
4　桑山１号墳石室袖部（北東から）
図版 28　1　桑山１号墳石室（南西から）
2　桑山１号墳石室（北西から）
3　桑山１号墳玄室右側壁（北から）
4　桑山１号墳石室（南東から）
5　桑山１号墳玄室左側壁（北東から）
図版 29　1　桑山１号墳羨道右側壁（北西から）
2　桑山１号墳羨道右側壁（南西から）
3　桑山１号墳玄門部右側壁（北から）
4　桑山１号墳羨道左側壁（南東から）
5　桑山１号墳羨道左側壁（南から）
6　桑山１号墳羨道左側壁（北東から）
7　桑山１号墳梱石（北東から）
8　桑山１号墳梱石（南東から）
図版 30　1　桑山１号墳閉塞石（北東から）
2　桑山１号墳閉塞石（南東から）
3　桑山１号墳閉塞石除去後（南東から）
4　桑山１号墳墓道（南西から）

5　桑山１号墳墓道右側壁（西から）
6　桑山１号墳墓道左側壁（南東から）
図版 31　1　桑山１号墳石室内遺物出土状況（南東から）
2　桑山１号墳石室袖部遺物出土状況（北東から）
3　桑山１号墳石室左側壁際遺物出土状況（南東から）
図版 32　1　桑山１号墳周溝内遺物出土状況（西から）
2　桑山１号墳墳丘横断西側土層断面（南西から）
3　桑山１号墳墳丘縦断北側土層断面〈溝状遺構付近〉（西から）
図版 33　1　桑山２号墳調査前（北東から）
2　桑山２号墳全景（南西から）
図版 34　1　桑山２号墳石室（北から）
2　桑山２号墳石室（上が北東）
3　桑山２号墳石室（北東から）
4　桑山２号墳左側壁（南東から）
5　桑山２号墳右側壁（北西から）
図版 35　1　桑山２号墳羨道及び閉塞（北西から）
2　桑山２号墳羨道及び閉塞（北東から）
3　桑山２号墳板石閉塞状況（南西から）
4　桑山２号墳玄門梱石付近（北西から）
5　桑山２号墳遺物出土状況（北西から）
図版 36　1　桑山２号墳須恵器等出土状況（北東から）
2　桑山２号墳須恵器等出土状況（北から）
3　桑山２号墳素環頭大刀（M 27）出土状況（北東から）
4　桑山２号墳右袖部遺物出土状況（南西から）
図版 37　1　桑山２号墳鉄鏃等出土状況（北西から）
2　桑山２号墳轡（M 59）等出土状況（南西から）
3　桑山２号墳雲珠（M 62）出土状況（南西から）
4　桑山２号墳辻金具（M 64・65）出土状況（南西から）
5　桑山２号墳鋲具（M 66）等出土状況（南西から）
6　桑山２号墳鞍（M 61）出土状況（北西から）
図版 38　1　桑山２号墳周溝内埴輪出土状況（東から）
2　桑山２号墳墳丘縦断北側土層断面（東から）
3　桑山２号墳墳丘横断東側土層断面（南西から）
図版 39　1　桑山３号墳調査前（南西から）
2　桑山３号墳全景（南東から）
3　桑山３号墳全景（北西から）
図版 40　1　桑山３号墳箱式石棺蓋石及び土器検出状況（南西から）
2　桑山３号墳箱式石棺蓋石検出状況（南東から）
3　桑山３号墳箱式石棺蓋石及び土器検出状況（南東から）
4　桑山３号墳箱式石棺蓋石検出状況（南西から）
5　桑山３号墳箱式石棺蓋石検出状況（東から）
図版 41　1　桑山３号墳箱式石棺（南西から）
2　桑山３号墳箱式石棺西側壁（南東から）
3　桑山３号墳箱式石棺東側壁（北西から）
図版 42　1　桑山３号墳箱式石棺控え積み除去後（南西から）
2　桑山３号墳箱式石棺側石検出状況（南西から）
3　桑山３号墳箱式石棺控え積み除去後（南東から）
4　桑山３号墳箱式石棺側石補強状況（南東から）
5　桑山３号墳箱式石棺側石補強状況（南西から）
6　桑山３号墳箱式石棺掘り方（東から）
図版 43　1　桑山３号墳箱式石棺遺物出土状況（南東から）

2　桑山３号墳箱式石棺遺物出土状況
〈北半〉（南東から）
図版 44　1　桑山３号墳箱式石棺頭骨１除去後の
遺物出土状況（南西から）
2　桑山３号墳箱式石棺頭骨除去後の
遺物出土状況（南西から）
図版 45　1　桑山３号墳木棺墓完掘（南東から）
2　桑山３号墳木棺墓完掘（北西から）
3　桑山３号墳木棺墓短軸断面南半
（南西から）
図版 46　1　桑山４号墳調査前（南から）
2　桑山４号墳全景（南西から）
図版 47　1　桑山４号墳全景（上が北）
2　桑山４号墳墳丘縦断南側土層断面
（東から）
3　桑山４号墳墳丘縦断北側土層断面
（東から）
図版 48　1　桑山４号墳竪穴式石室１（東から）
2　桑山４号墳竪穴式石室１西壁（東から）
3　桑山４号墳竪穴式石室１北壁（南から）
4　桑山４号墳竪穴式石室１南壁（北から）
5　桑山４号墳竪穴式石室１東壁（西から）
図版 49　1　桑山４号墳竪穴式石室１遺物出土状況
（東から）
2　桑山４号墳竪穴式石室１遺物出土状況
（南から）
3　桑山４号墳　Ｓ 41・Ｓ 47 出土状況
（南東から）
4　桑山４号墳竪穴式石室１木棺痕跡
（東から）
図版 50　1　桑山４号墳竪穴式石室２（東から）
2　桑山４号墳竪穴式石室２西壁（東から）
3　桑山４号墳竪穴式石室２北壁（南から）
4　桑山４号墳竪穴式石室２南壁（北から）
5　桑山４号墳竪穴式石室２東壁（西から）
図版 51　1　桑山４号墳竪穴式石室２遺物出土状況
（西から）
2　桑山４号墳竪穴式石室２
北小口遺物出土状況（南東から）
図版 52　1　桑山５号墳調査前（北西から）
2　桑山５号墳全景（北西から）
図版 53　1　桑山５号墳全景（南西から）
2　桑山５号墳石室（北東から）
3　桑山５号墳石室（南西から）
図版 54　1　桑山５号墳石室奥壁（南西から）
2　桑山５号墳石室左側壁（南東から）
3　桑山５号墳石室左側壁（北東から）
図版 55　1　桑山５号墳石室遺物出土状況（北東から）
2　桑山５号墳石室袖部遺物出土状況
（北東から）
図版 56　1　桑山５号墳石室遺物出土状況（南西から）
2　桑山５号墳石室奥壁際遺物出土状況
（南から）
3　桑山５号墳石室奥壁際遺物出土状況
（南から）
図版 57　1　桑山５号墳石室袖部遺物出土状況
（東から）
2　桑山５号墳石室袖部遺物出土状況
（南東から）
3　桑山５号墳石室奥壁際鉄器出土状況
（南西から）
4　桑山５号墳石室玉類出土状況
〈範囲Ａ〉（南から）
図版 58　1　桑山５号墳周溝南半遺物出土状況
（東から）
2　桑山５号墳周溝北半遺物出土状況
（南から）
3　桑山５号墳埴輪（215）出土状況（北から）
4　桑山５号墳埴輪(218)出土状況(南西から)
図版 59　1　桑山５号墳墳丘横断土層断面（南西から）
2　桑山５号墳墳丘縦断土層断面（北西から）
3　桑山５号墳石室縦断土層断面（北から）
図版 60　1　桑山古墳群箱式石棺墓１（南東から）
2　桑山古墳群箱式石棺墓１遺物出土状況
（南西から）

3　桑山古墳群土器棺墓１（南東から）
図版 61　桑山１号墳石室内出土土器①
図版 62　１　桑山１号墳石室内出土土器②
２　桑山１号墳石室内出土鉄器
図版 63　桑山１号墳周溝及び墳丘出土遺物
図版 64　１　桑山２号墳石室内出土土器
２　桑山２号墳石室内出土鉄器①
図版 65　桑山２号墳石室内出土鉄器②
図版 66　１　桑山２号墳石室内出土鉄器③
２　桑山２号墳周溝及び墳丘出土遺物
図版 67　１　桑山３号墳箱式石棺出土土器
２　桑山３号墳箱式石棺内出土鉄器①
図版 68　桑山３号墳箱式石棺内出土鉄器②
図版 69　１　桑山４号墳竪穴式石室１内出土土器・鉄器
２　桑山４号墳竪穴式石室２内出土土器
図版 70　桑山４号墳竪穴式石室２内出土鉄器
図版 71　桑山５号墳石室内出土土器①
図版 72　桑山５号墳石室内出土土器②
図版 73　桑山５号墳石室内出土土器③
図版 74　桑山５号墳石室内出土土器④
図版 75　桑山５号墳石室内出土土器⑤
図版 76　桑山５号墳石室内出土土器⑥
図版 77　桑山５号墳石室内出土土器⑦
図版 78　桑山５号墳石室内出土鉄器①
図版 79　桑山５号墳石室内出土鉄器②
図版 80　桑山５号墳周溝及び墳丘出土遺物①
図版 81　１　桑山５号墳周溝及び墳丘出土遺物②
２　桑山古墳群箱式石棺墓１・土器棺墓１出土土器

第１章　地理的・歴史的環境

遺跡の位置と地勢

勝負峪遺跡・桑山遺跡・桑山古墳群は、岡山県北東部の津山市高尾・平福に所在し、古代の行政区域では美作国久米郡長岡郷にあたる。桑山古墳群は、学史上著名な佐良山古墳群(1)の一角をなしている。

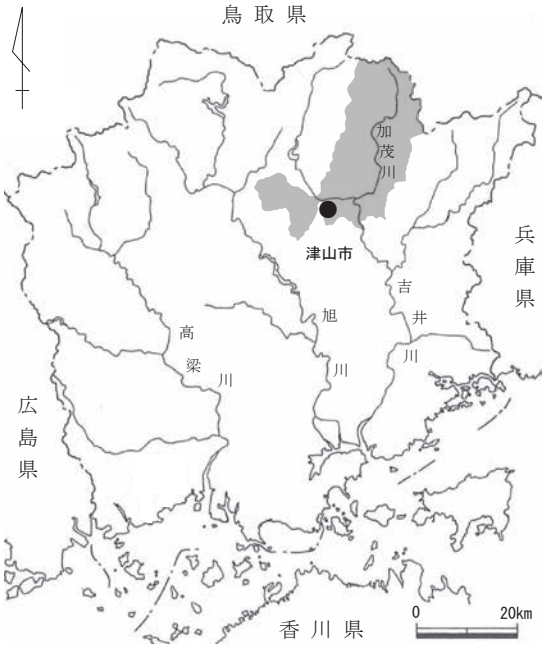
津山市は、標高1,000ｍ前後の山々が連なる中国山地脊梁部の南から吉備高原の北縁まで、南北に長いおよそ500㎢の市域で、調査地はその南端に位置する。市の中心部が所在する津山盆地は、吉井川と加茂川が合流する付近に形成された標高約75～200ｍの盆地である。岡山県東部を北から南に貫いて流れる吉井川は、この津山盆地で東西方向に大きく向きを変え、吉井川及びそれに注ぐ諸河川の流域にいくつもの小盆地を形成し、それらが東西に連なるように展開している。このような地勢から、津山盆地は河川に沿って美作地域を東西につなぐとともに、吉井川や津山往来（現国道53号）を介した備前地域との交通においても重要な位置を占めていることが分かる。さらに、盆地を横切って通る出雲道や、加茂川を遡る加茂往来、因幡道などで山陰地方にも通じており、東西及び南北に至る交通の結節点となっている。

旧石器時代

美作地域において人々の生活の最初の痕跡が認められるのは旧石器時代である。この時代の遺跡は、真庭市蒜山高原や鏡野町恩原高原など中国山地脊梁に近い地域において、厚く堆積した火山灰に覆われた状態で良好に残されている(2)。津山市内では、天神原遺跡(3)や大開遺跡(4)のナイフ形石器、大田茶屋遺跡(5)の細石刃・細石核などが報告されているが、いずれもわずかな石器類の出土のみで、生活の痕跡を留めていない（以下、津山市内の遺跡については市名を省略）。

縄文時代

縄文時代では、まず草創期に遡る石器が挙げられる。領家遺跡(6)で局部磨製石斧、稲荷遺跡(7)で有茎尖頭器が出土しており、勝央町大河内遺跡では局部磨製石斧とともに打製石斧、尖頭器、石鏃など多くの石器類が出土している(8)。早期になると、大田西奥田遺跡において竪穴住居が確認されている(9)。壁際に杭列が廻る構造で、鏡野町竹田遺跡(10)に類例がある。前期から中期にかけての遺跡は少ないが、前期の遺物が西吉田北遺跡(11)、山ノ奥遺跡(12)など、中期の遺物が堀坂宮ノ前遺跡(13)で出土している。いずれも少量の出土で、この時期の遺跡の希薄さを示している。後期以降になると遺跡数が増加する。沼京免遺跡(14)で後期の土坑、大田茶屋遺跡、押入兼田遺跡(15)



第１図　遺跡の位置（1/1,500,000）



第２図　周辺の遺跡分布（1/25,000）

1 勝負峪遺跡
2 桑山古墳群
3 桑山遺跡
4 高尾桑山遺跡
5 桑山南古墳群
6 細畝古墳群
7 正京茶畠古墳
弁慶岩古墳群
8 高尾北ヤシキ古墳
9 高尾北ヤシキ遺跡
10 高尾廃寺跡
11 高尾上ノ畑遺跡
12 高尾宮ノ前遺跡
13 西ノ岡古墳群
14 院庄毘沙門前遺跡
15 院庄五輪鼻遺跡
16 戸島丸山古墳
17 院庄大塚古墳
18 院庄権現ノ前遺跡
19 院庄大滝遺跡
20 二宮野辺遺跡
21 院庄奈良順古墳
22 二宮飛峪遺跡
23 二宮円通寺北遺跡
24 二宮円通寺遺跡
25 鐘つき堂古墳
26 大開遺跡
27 大開古墳群
28 二宮杉澤古墳
29 二宮尺當遺跡
30 後山古墳
31 二宮恵下遺跡
32 二宮天王遺跡
33 美和山古墳群
34 二宮岡の屺遺跡
35 二宮岡東遺跡
36 中禅奥古墳群
37 二宮俵田遺跡
38 二宮みのり学園古墳
39 二宮風呂屋峪遺跡
40 松原Ａ遺跡
41 松原Ｂ遺跡
42 二宮大成遺跡
43 二宮大成古墳
44 小田中狐塚古墳
45 小田中戌亥谷古墳
46 一方北遺跡
47 津山口十文字遺跡
48 一方岸上遺跡
49 一方今屋敷遺跡
50 井口井手端遺跡
51 井口宮下遺跡
52 一方北古墳群
53 神南備山城跡
54 門の山古墳群
55 寺山古墳群
56 煙硝庫古墳群
57 皿丸山遺跡
58 皿西寺坂遺跡
59 皿穴田遺跡
60 皿寺坂東遺跡
61 寺池東古墳群
62 カキ谷Ａ古墳群
63 カキ谷Ｂ古墳群
64 皿佐良山遺跡
65 皿高妻遺跡
66 皿立宿遺跡
67 皿山城跡
68 高尾ズリ谷古墳群
69 中曽根古墳群
70 高尾安廣遺跡
71 丸山古墳群
72 御笠美下古墳群
73 三ツ塚古墳群
74 高尾堂免南遺跡
75 御笠美下大塚古墳
76 大塚上古墳
77 御笠美古墳
78 比久尼塚古墳
79 高尾中宮上古墳群
80 中宮古墳群
81 丸山古墳群
82 高野山根古墳群
83 剣戸古墳群
84 小屋谷古墳群
85 小屋谷窯跡
86 若林古墳群
87 福田登尾遺跡
88 高清水古墳
89 奥山田古墳群
90 ウノメ古墳
91 福田ウノ免遺跡
92 丸山城跡
93 奥の屺古墳
94 三ツ塚古墳群
95 天神山城跡
96 福田湯田遺跡
97 岡道東遺跡
98 岡の屺古墳
99 山の谷古墳
召出山古墳群
太平古墳群
100 天笠山遺跡
101 小坂遺跡
102 散布地
103 奥禅寺跡
104 小坂古墳群
105 松ヶ崎古墳
106 古墳
107 散布地
108 後谷古墳
小麦尾古墳群
うるしざこ古墳群
109 散布地
110 鰻谷古墳群
111 方の谷古墳群
112 古墳
113 大久保古墳群
114 中山横穴墓
115 散布地
116 嵯峨山城跡
117 三ツ塚古墳群
118 中堂古墳群
119 片山古墳
120 平福向山遺跡
121 平福向山古墳
122 平佐古墳
123 祇園畝古墳群
124 火の釜古墳群
125 高塚古墳
126 下山田上古墳
127 中山田古墳群
128 高尾中山田遺跡
129 城成古墳

でも晩期の土坑が発見され、後期の堀坂星ヶ坪遺跡では土器多数や石器類が出土している[16]。また、鏡野町久田原遺跡[17]及び久田堀ノ内遺跡[18]では、後～晩期の竪穴住居や土坑、多量の遺物が確認され、長期間にわたり集落が営まれた様子が窺える。そのほか、縄文時代の落とし穴遺構が多数の遺跡で検出されている。

弥生時代

弥生時代前期の遺跡はわずかしか知られていないが、前期後半の高橋谷遺跡[19]、天神原遺跡、沼京免遺跡などがいくつか確認されている。中期中葉～後期になると集落は増加し、沼遺跡[20]、沼Ｅ遺跡[21]、紫保井遺跡[22]、大田十二社遺跡[23]などの集落が形成される。後期の沼京免遺跡では環濠を廻らせる大規模集落がみられ、天神原遺跡や上部遺跡[24]では直径 11 ｍに達する大型竪穴住居が検出されている。竪穴住居は建て替えや拡張が多く認められ、比較的長期間にわたる居住が窺える。

弥生時代の墳墓では、中期以降、木棺墓群を中心とした集団墓がみられる。集落内に小規模な墓域を形成する竹ノ下遺跡[25]などのほか、後期には丘陵上に台状墓や区画墓が出現する。下道山遺跡では、方形台状墓２基に加えて 135 基の木棺墓群が検出され、特殊器台や供献土器が出土している[26]。有本遺跡Ｂ地区では、３基の区画墓とその内外に 140 基の木棺墓が検出され、特殊器台が出土したほか、ガラス製管玉や鉄鏃などの副葬品を伴うものもある[27]。今回の調査においては、勝負峪遺跡などで中期後葉から後期前葉にかけての集落が展開しており、その一角に木棺墓群が形成されている。また、皿丸山遺跡では、遺跡の性格は不明ながら鼓形器台や特殊器台などが出土している[28]。

古墳時代

古墳時代に入ると各地に大型前方後円墳（後方墳）が出現する。美作最大の勝央町植月寺山古墳[29]（墳長約92ｍの前方後方墳）や銅鏡３面などを出土した鏡野町郷観音山古墳[30]（墳長約43ｍの前方後円墳）が古く、津山市内ではやや遅れて、銅鏡などを出土した日上天王山古墳[31]（墳長約57ｍの前方後円墳）、さらに市内最大の美和山１号墳[32]（墳長約80ｍの前方後円墳）が築かれる。以上は前期前半頃に位置づけられ80～90ｍ級の大型古墳を含むが、美作では以後これを上回る規模の古墳は築かれていない。続いて前期中葉～後半には、銅鏡や竪矧板革綴短甲を出土した奥の前１号墳[33]（墳長約68ｍの前方後円墳）、竜山石製[34]の石棺をもち銅鏡２面などの出土を伝える正仙塚古墳[35]（墳長約56ｍの前方後円墳）が築造されている。津山の東に位置する勝英地域では、植月寺山古墳以降も美作市楢原寺山古墳[36]（墳長約46ｍ）、勝央町岡高塚古墳[37]（墳長約56ｍ）、同町美野高塚古墳[38]（墳長約65ｍ）など前期を通じて前方後方墳が多くみられる。

中期（４世紀末～５世紀頃）には、県南部において巨大前方後円墳が築かれたが、美作地方では前方後円墳がみられなくなり途絶えてしまう。代わって、国分寺飯塚古墳[39]（径約38ｍの円墳）や多数の武器を副葬する橋本塚１号墳[40]（径約30ｍの円墳）、美作最大の方墳とされる大日古墳[41]（一辺約34ｍ）など、30～40ｍ級の大型円墳・方墳が首長墓として認められる。

５世紀末頃、津山盆地の中央部に墳長約60ｍの前方後円墳である十六夜山古墳が出現する。二重の盾形周濠を伴い、円筒・朝顔形・盾形・石見型など多量の埴輪が出土している[42]。二重周濠や石見型埴輪は、備前あるいは畿内地域との関係を示しており、突如現れた前方後円墳の背景に、そうした外部勢力との関わりを想定することができる。このあと後期前半にかけて、津山盆地周辺で築造される古墳には、十六夜山古墳を頂点とする階層性が認められる。井口車塚古墳[43]、日上畝山58号墳[44]、玉琳大塚古墳[45]、高野山根１号墳[46]、中宮１号墳[47]など、十六夜山古墳の半分程度の規模をもつ前方後円墳ないし帆立貝形古墳が吉井川流域に分布しており、さらに下位に小規模な円墳群が位置づけられる。佐良山古墳群もこの頃から形成され始め、中でも笹山南西麓（ＪＲ津山線佐良山駅南方）には、高野山根１号墳、中宮１号墳などの首長墳が集中している。

後期中葉（６世紀中葉頃）には、美作地域にも横穴式石室が導入され、以後急速に普及する。美作地域の横穴式石室は、全長９ｍ前後以上のものが地域の首長墓と考えられ、そのうち万燈山古墳[48]や鏡野町井上大塚古墳[49]など大規模なものは全長11～12ｍに達する。横穴式石室を内蔵する前方後円墳は、津山市内では中宮１号墳、高野山根２号墳[50]、鴻の池２号墳[51]の３基のみで減少傾向にあり、いずれも墳長30ｍ前後の小規模なものである。６世紀末頃には前方後円墳はつくられなくなり、以後は首長墓でも主に円墳を採用する。佐良山古墳群には、中宮１号墳、桑山１・２号墳など導入期の横穴式石室が集中しており、また高野山根２号墳、剣戸13・14号墳[52]などの大規模な石室も多くみられる。先進的な墓制をいち早く導入した有力な地域であったといえよう。

有力首長墓とされる前方後円墳や大型円墳・方墳のほかに、各地に密集して築かれる小墳群がある。佐良山古墳群の調査を行った近藤義郎は、このような小規模墳の大多数が古墳時代後期の所産であり、この時期急速に、爆発的に古墳の数が増えると指摘した。そしてこれらを「家父長的家族」の墓と考え、古い共同体の分解を示す大きな社会的変化と評価した[53]。近藤による調査と論文は考古学・古代史学界に大きな影響を与え、「群集墳」という概念を定着させた。しかし、その後の大規模な発掘調査成果の蓄積により、小型古墳の群集は古墳時代後期だけでなく、弥生時代以来古墳時代全般にわたっ

て存在することが知られるようになった[54]。それらは、①中期中葉頃までは低平な方墳が中心だが、②中期後葉以降、比較的高い盛土をもつ円墳に変わって築造数が増加し、③後期後半になると竪穴系埋葬施設から横穴式石室に変わる、という変化をたどる[55]。以上のうち①を弥生時代以来の小型墳墓群の流れをくむものと考え、②③を特に「群集墳」とし、さらに②を「古式群集墳」あるいは「初期群集墳」と呼ぶことが多い[56]。美作地域では、①の例として真庭市中原古墳群[57]、②の例として日上畝山古墳群[58]、③の例として糠山古墳群[59]などが挙げられる。ただし、佐良山古墳群では桑山古墳群、桑山南古墳群[60]など②から③にかけて連続して造営がなされており、必ずしも明確に区分できるものではない。これら群集墳の盛行の背景には、農耕、鍛冶、製鉄、製陶など著しい生産力の発展によって小規模ながらも古墳を築き得る新興勢力や有力家族が台頭し、そうした階層をヤマト王権が直接掌握しようとする状況などが想定されている。さらに、有力家族の軍事的編成、渡来系氏族の組織化なども指摘される。

前方後円墳の築造が停止する古墳時代終末期（６世紀末～７世紀頃）に至っても、横穴式石室を内蔵する小規模墳は築造が続く。この時期の美作地域を大きく特徴づけるのが、土師質亀甲形陶棺である。陶棺は全国でおよそ 800 の遺跡から出土しているが[61]、そのうち約７割が岡山県内で、さらに県内の約７割を美作地域が占め、市町村別では津山市が最多である。終末期も後半（７世紀後半）になると古墳の築造数は徐々に減り、横穴式石室の規模も縮小する。この時期の群集墳は糠山古墳群などで調査されている。

古　代

和銅６（713）年、備前国の６郡を割いて美作国が新設された。国府や国分寺・国分尼寺などの主要な施設が現在の津山市内に置かれ、美作国の中心をなしている。国府は津山市街地北方の高台に位置し、発掘調査によって国府前身官衙（苫田郡衙か）を含む７世紀後半から 12 世紀にかけての遺構が明らかになっている[62]。国府の北約 1.5㎞に所在する大田茶屋遺跡では、８世紀後半から９世紀前半にかけての建物群が検出されている。性格は不明であるが公的な宗教施設、軍事施設等の可能性が示されている[63]。国分寺は、吉井川と加茂川の合流点近くに置かれ、国府から直線で約 4.9㎞の距離にある。２町四方の寺域の中に、国分寺式伽藍配置をとる主要遺構が確認されており、創建は８世紀中頃で、13 ～ 14 世紀頃に廃絶したと推定されている[64]。国分尼寺は国分寺の西約 450 ｍにあり、発掘調査によって礎石建物などが検出された[65]。郡衙と推定される遺跡として、宮尾遺跡がある。長大な建物が東西及び南北方向に棟を揃え、久米郡衙に比定されている[66]。宮尾遺跡に近接する久米廃寺は、７世紀後半に創建されたとみられる寺院で、宮尾遺跡との関連が深い[67]。

美作における製鉄は、６世紀後半に遡るとされる大蔵池南遺跡[68]が初現で、７世紀の緑山遺跡[69]、８世紀のキナザコ遺跡[70]などと続く。８世紀を中心とする一貫西遺跡では、製鉄炉とともに、鉄滓や羽口を多く出土する集落遺構が検出されており、鉄生産に関わった集団の居住あるいは作業空間であったと推測されている[71]。今回の調査地点においても横口付製炭窯の検出や鉄滓の出土があり、周辺で古代に製鉄が行われていたとみられる。

中　世

中世には美作にも守護職が置かれたが、守護所と推定されている院庄館跡は、一部発掘調査が行われ、平安時代末期から鎌倉時代前半頃の掘立柱建物や井戸、土塁などの遺構が検出されている[72]。また、美作地域は山陰と山陽を結ぶ交通の要衝であり、周辺諸勢力がたびたび侵入し攻防を繰り返した。南

北朝時代には播磨赤松氏や伯耆山名氏、戦国時代には出雲尼子氏、安芸毛利氏、備中三村氏、備前浦上氏、宇喜多氏などが攻め込み、戦場となっている。中世の城館遺跡数は美作で約 400 か所が確認されている[(73)]。

室町時代の中頃、美作守護となった山名教清は、その一門の将、山名忠政に命じ、美作国中央の鶴山に城砦を築かせた。これが津山城の起源とされるが、応仁の乱後、山名氏の退去により廃城となる。

近　世

関ヶ原の戦い後、美作国は岡山城を拠点とする小早川秀秋が支配したが、彼の死後の慶長８（1603）年、森忠政が 18 万 6,500 石を領して入国し津山藩が成立する。山名氏旧塁の鶴山を津山と改めて城地とし、城と城下町の建設に着手した。石垣に使われた石材は「津山石」と通称される凝灰岩で、吉井川の南側一帯などから切り出された。城下町は、津山城を中心として吉井川北岸に形成され、現在の津山市街の基礎となった。津山藩主は森氏４代の後、松平氏に替わり明治に至る。

近　代

明治４（1871）年の廃藩置県により津山県が置かれ、間もなく美作地域全体が北条県となった。明治９（1876）年には岡山県と合併し、ほぼ現在の岡山県となる。近代国家建設に向け、津山においても産業の育成や交通網の整備などが進められた。吉井川の高瀬舟も大いに栄え、津山と西大寺（現岡山市東区）との間には客船が運行された。明治 31（1898）年には中国鉄道（現ＪＲ津山線）の津山（現津山口駅）－岡山間が開通し、現津山口駅周辺は津山の玄関口として栄えた。付近に今も残る作州民芸館（旧土居銀行本店）、旧中島病院本館などの洋館がそれを物語っている。　（尾上）

註

（１）近藤義郎・中島壽雄 1952『佐良山古墳群の研究』津山市

（２）稲田孝司編 1996『恩原２遺跡』岡山大学考古学研究室
　　稲田孝司編 2009『恩原１遺跡』恩原遺跡発掘調査団　ほか

（３）岡山県教育委員会 1975「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』７

（４）津山市教育委員会 1994「大開遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 51 集

（５）岡山県教育委員会 1998「大田茶屋遺跡２・大田西奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』129

（６）岡山県教育委員会 1975「領家遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』８

（７）津山市教育委員会 1990「稲荷遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 35 集

（８）岡山県教育委員会 2008「大河内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』216

（９）註５

（10）土居徹 1986「竹田遺跡」『岡山県史』第 18 巻　考古資料　岡山県

（11）津山市教育委員会 2006「西吉田北遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 76 集

（12）岡山県教育委員会 2004「山ノ奥遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』180

（13）津山市教育委員会 1997「堀坂地内遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 58 集

（14）津山市教育委員会 1982「京免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 11 集

（15）津山市教育委員会 2000「押入兼田遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 69 集

（16）註 13

（17）岡山県教育委員会 2004「久田原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184

(18) 岡山県教育委員会 2005「久田堀ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』192
(19) 中山俊紀 2020「高橋谷遺跡」『新修津山市史』資料編　考古　津山市
(20) 近藤義郎ほか 1957『津山弥生竪穴住居群の研究―西地区―』津山市・津山郷土館
(21) 津山市教育委員会 1981「沼Ｅ遺跡Ⅱ」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第８集
津山市教育委員会 2001「沼Ｅ遺跡Ⅰ」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 71 集
(22) 中山俊紀 1993「津山市紫保井遺跡と中期小住居群」『古代吉備』第 15 集　古代吉備研究会
(23) 津山市教育委員会 1981「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 10 集
(24) 津山市教育委員会 1990「上部遺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 30 集
(25) 註 14
(26) 岡山県教育委員会 1977「下道山遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』17
(27) 津山市教育委員会 1998「有本遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 62 集
(28) 河本清 1975「津山市丸山遺跡発見の遺物」『津山市文化財年報』１　津山市教育委員会
(29) 光永真一 1986「植月寺山古墳」『岡山県史』第 18 巻　考古資料　岡山県
(30) 梅原末治 1938「美作郷村観音山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』３　日本古文化研究所
(31) 津山市教育委員会 1997「日上天王山古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 60 集
(32) 津山市教育委員会 1992「史跡美和山古墳群保存整備事業報告書」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』
第 42 集
(33) 澤田秀実 2020「奥の前１号墳」『新修津山市史』資料編　考古　津山市
(34) 間壁忠彦・間壁葭子 1974「石棺研究ノート（一）石棺石材の同定と岡山県の石棺をめぐる問題」『倉敷考古館研究集報』第９号　倉敷考古館
(35) 津山市教育委員会 1996「正仙塚古墳測量調査報告」『年報津山弥生の里』第３号
(36) 近藤義郎 1986「楢原寺山古墳」『岡山県史』第 18 巻　考古資料
澤田秀実 2006「楢原寺山古墳」『美作町史』資料編１　美作市
(37) 倉林眞砂斗・澤田秀実編 2000『美作の首長墳―墳丘測量調査報告―』吉備人出版
(38) 註 37
(39) 津山市教育委員会 2014「国分寺飯塚古墳測量調査」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 83 集
(40) 津山市教育委員会 2003「橋本塚古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 73 集
(41) 津山市教育委員会 2014「大日古墳測量調査」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 83 集
(42) 岡山県教育委員会 1998「十六夜山古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』130
(43) 津山市教育委員会 1994「井口車塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 52 集
(44) 津山市教育委員会 2007「日上畝山古墳群Ⅱ―範囲確認調査報告―」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』
第 78 集
(45) 今井堯 1961「津山市川崎玉琳大塚調査報告」『津山市文化財調査略報』第１集　津山市教育委員会
平井泰明 2020「玉琳大塚古墳」『新修津山市史』資料編　考古　津山市
(46) 安川豊史 1986「高野山根１号墳・２号墳」『岡山県史』第 18 巻　考古資料　岡山県
(47) 近藤義郎 1952「中宮第１号墳発掘調査報告」『佐良山古墳群の研究』津山市
(48) 岡山県苫田郡加茂町文化財保護委員会 1974『万燈山古墳』
豊島雪絵 2020「万燈山古墳」『新修津山市史』資料編　考古　津山市

(49) 土居徹 2000「井上大塚古墳（まかべ 13 号墳・井上火の釜)」『鏡野町史』考古資料編　鏡野町
(50) 内山敏行・大谷晃二・田中弘志 1991「佐良山古墳群高野山根２号墳について」『古代吉備』第 13 集
古代吉備研究会
(51) 澤田秀実 2020「鴻の池２号墳」『新修津山市史』資料編　考古　津山市
(52) 安川豊史 1986「剣戸塚西塚・東塚」『岡山県史』第 18 巻　考古資料　岡山県
平井泰明 2020「剣戸古墳群」『新修津山市史』資料編　考古　津山市
(53) 近藤義郎 1952「問題の所在」『佐良山古墳群の研究』津山市
(54) 石部正志 1980「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座』第４巻　朝鮮
三国と倭国　学生社　ほか
(55) 和田晴吾 1992「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』第５巻　近畿Ⅰ　角川書店
安川豊史 1992「古墳時代における美作の特質―群小古墳の動向と評価―」『吉備の考古学的研究』(下)
山陽新聞社　ほか
(56) 註 54、白石太一郎 2000『古墳と古墳群の研究』塙書房　ほか
(57) 岡山県教育委員会 1995「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93
(58) 津山市教育委員会 1998「日上畝山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 63 集、註 44
(59) 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1980『糠山遺跡群』Ⅱ
(60) 岡山県教育委員会 2022「桑山南古墳群・細畝古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』255
(61) 津山郷土博物館 2013『平成 25 年度特別展図録　土の棺に眠る―美作の陶棺―』
(62) 岡山県教育委員会 1973「美作国府跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』６
津山市教育委員会 1984「美作国府跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 15 集
津山市教育委員会 1994「美作国府跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 50 集
津山市教育委員会 1995「美作国府跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 56 集
津山市教育委員会 1999「美作国府跡発掘調査概要」『年報津山弥生の里』第６号
岡山県教育委員会 2011「美作国府跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』228
(63) 岡山県教育委員会 1994「大田茶屋遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』96、註５
(64) 津山市教育委員会 1980「美作国分寺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第５集
津山市教育委員会 2002「美作国分寺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 72 集
(65) 津山市教育委員会 1983「美作国分尼寺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 12 集
(66) 岡山県教育委員会 1973「宮尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』４
(67) 岡山県教育委員会 1973「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』４
(68) 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1982『糠山遺跡群』Ⅳ
(69) 津山市教育委員会 1986「緑山遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 19 集
(70) 加茂町教育委員会 1980『キナザコ製鉄遺跡』
(71) 津山市土地開発公社・津山市教育委員会 1990「一貫西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 33 集
(72) 津山市教育委員会 1974「史跡院庄館跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第１集
津山市教育委員会 1981「史跡院庄館跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第７集
(73) 岡山県教育委員会 2020『岡山県中世城館跡総合調査報告書』第３冊―美作編―

第２章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

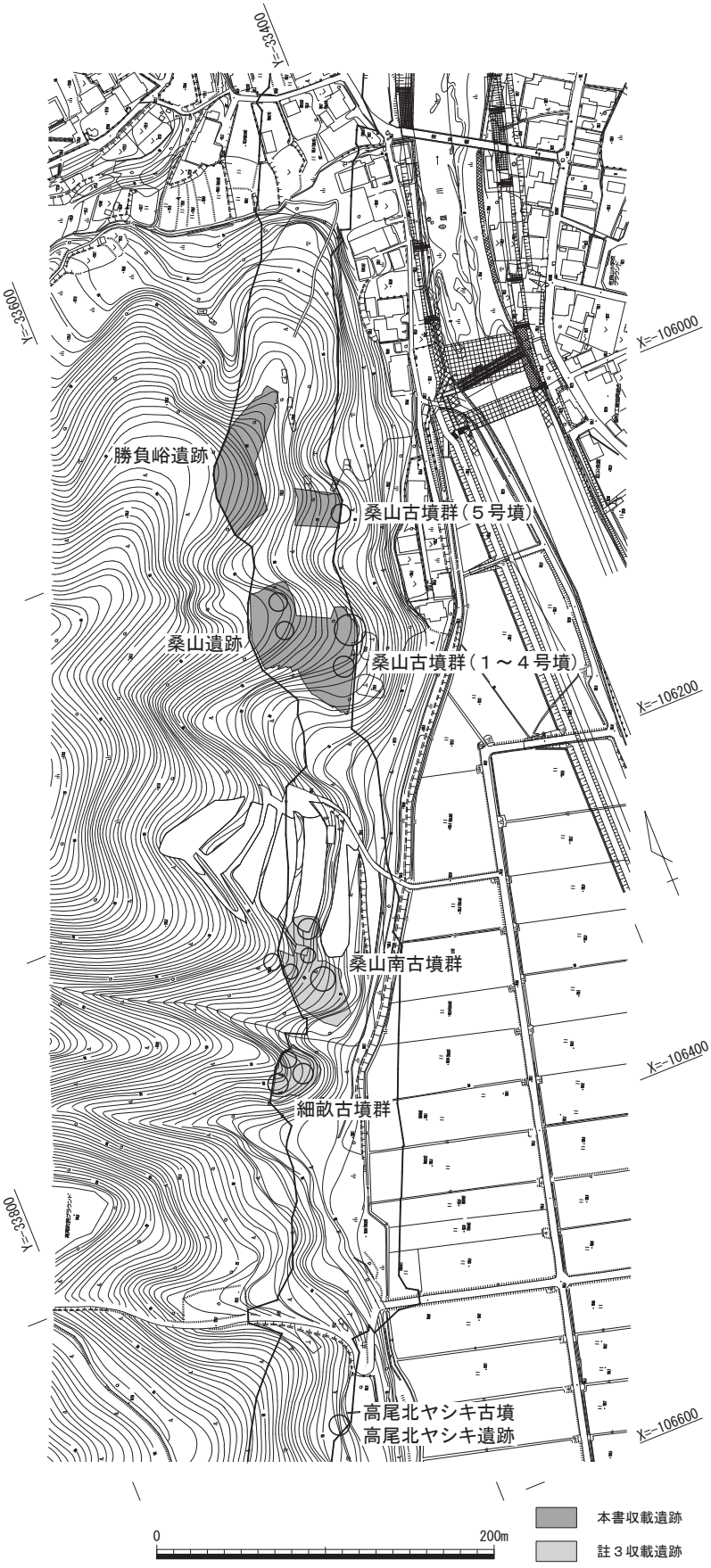
一般国道 53 号は、岡山市北区から鳥取市までを結ぶ延長約 140 ㎞の主要幹線道路である。津山南道路は、この国道 53 号の久米郡美咲町打穴中から津山市平福に至る区間に並行する延長 5.4 ㎞のバイパスであり、地域高規格道路「空港津山道路」の一部を構成する。交通安全や災害時の代替ルート確保、救命救急活動支援をはじめ、県南部と津山周辺圏の連携強化を促進し、沿線地域の発展を図るため、久しく待ち望まれ、平成 15 年度に都市計画決定され、翌 16 年度に事業化、19 年度に用地化着手、26 年度から工事着手されている。

路線内の埋蔵文化財の取り扱いは、都市計画決定以前から今日に至るまで、岡山県教育庁文化財課（当初は文化課、以下県文化財課）と事業を管轄する国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所（以下国道事務所）間で協議を重ねてきた。

まず、平成 14 年９月に県教育委員会教育長宛「直轄道路事業の実施に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて」の文書によって、国道事務所から計画区域内における埋蔵文化財包蔵地の有無、名称、位置、及び法的手続きについての照会があった。これに対し 10 月、県文化財課は周知の埋蔵文化財包蔵地として７基の古墳と集落遺跡等３遺跡の存在を回答するとともに、現地において計画路線範囲の確認が困難であったため、計画が決定し、路線境界の確定後、再度分布調査が必要であると示した。計画路線内に所在する古墳は佐良山古墳群の支群として知られていた。佐良山古墳群は、津山市市街の南西部、皿川流域の丘陵に築造された６～７世紀の古墳群の総称で、複数の支群からなる約 170 基を超える群集墳である。昭和 20 年代の近藤義郎氏による発掘調査や詳細な分布調査に基づく『佐良山古墳群の研究』(1) は、古墳時代後期の墓制や家父長制社会に関する研究の原点として後の研究に多大な影響を与え、学史的にも重要な古墳群として著名である。また、支群の一つである中宮古墳群は県の重要遺跡となっ



第３図　計画路線（1/50,000）



第４図　計画路線と調査対象遺跡（1/4,000）

ている。このことに鑑み、県文化財課は埋蔵文化財保護に関する重要な課題として認識した。

平成 16 年３月、県文化財課は地元津山市教育委員会職員の支援を得、分布調査を実施したものの、荒廃が進む山林の中で現認できなかった古墳が複数あった。この後も現地確認を行い、平成 22 年１月に分布調査成果を国道事務所に示したが、なお所在不明な古墳があり、現認した古墳にも名称と位置の錯誤があった。

さらに平成 23 年度に再び詳細分布調査を実施し、不明であった古墳を現認し、ようやく『佐良山古墳群の研究』に記載された古墳名称と位置をほぼ整合させ、特定した。こうして平成 24 年度に、倭文川以北の路線内に 10 基、以南に２基の古墳が所在することを国道事務所に改めて提示し、その保存について重ねて要望し、協議を継続した。

平成 26 年 10 月には、平成 23 年度の分布調査によって倭文川以南の津山市福田地内で新たに発見した高まりについて試掘調査を実施し、古墳であることを確認し、マンドウ山古墳と名称した[(2)]。

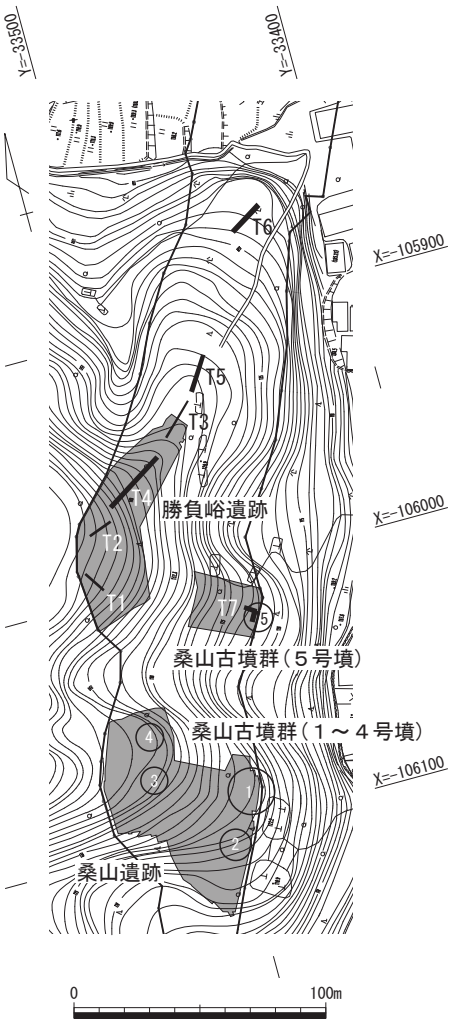
文化財課としては、この時点までに路線内の所在が明らかとなった計 13 基の古墳の

取り扱いと保存についての基本方針を以下のように整理した。まず、第１に実施設計にあたり現状保存の配慮を求める、第２に路線境界に接する古墳については工事の影響が及ばないように求める、第３にやむなく現状保存ができない古墳については、十分な体制と調査期間を確保して記録保存の措置を講ずる。この方針をもとに、平成 27 年４月、国道事務所に再度要望を行い、この後も協議を継続した。また、所在が明らかな古墳以外の遺物散布地等については、内容と広がりを把握するため順次確認調査を実施し、その結果に基づき記録保存調査の対応を図ることとした。

同年５月には、平成 14 年 10 月の県文化財課回答に基づいて現地に用地幅杭が打設されたことから、国道事務所から「直轄道路事業の実施に伴う埋蔵文化財の取扱について」の再照会があった。これに対し６月に県文化財課は、路線内の包蔵地位置を明示するとともに、文化財保護法第 94 条に基づく通知が必要であること、実施設計に際して文化財保護に十分な配慮をすること、事業実施にあたっては事前の発掘調査が必要であること、さらに調査の結果、重要遺構等の発見時には別途保存について協議を求める、と回答した。この後、用地取得状況及び工事施工計画と具体的な発掘調査実施計画の調整を進めた。こうした中で、平成 28 年９月７日付で国道事務所から文化財保護法第 94 条に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」が提出され、県文化財課は発掘調査の実施を勧告した。

以上の経緯を経て、平成 30 年１月から着手した桑山南古墳群の発掘調査[(3)]は、同年後半の終了予定であり、その後桑山古墳群の調査を開始する計画であった。そのため県文化財課では、平成 29 年度当初から国道事務所に対して、調査までに桑山古墳群の樹木伐採を完了させることや作業ヤード確保などの条件整備を依頼していた。また、以後の調査計画を策定するために、順次予定路線内において試掘確認調査も予定しており、対象となる地区の樹木伐採も早めに実施するよう依頼していた。

そうしたなかで平成 29 年 11 月、国道事務所から、桑山古墳群の北側丘陵にパイロット道路を優先して造る計画になったので、その部分の調査を先行させるよう要望があった。当時、そこでは埋蔵文化財包蔵地が確認されておらず、大きく地形が改変されている部分も多いが、その他の地点については地形などから判断して埋蔵文化財包蔵地が存在する可能性があった。県文化財課としては、桑山古墳群の調査は計画どおりに実施するが、埋蔵文化財包蔵地が未確認の場所を早めに試掘し、調査対象になるかどうかの判断をしたほうがよいと考えていたので、要望に応じて試掘調査を実施するために樹木伐採を依頼した。一方、桑山古墳群の樹木伐採は、工事工程等の都合により調査前の時点では対象地のおよそ３分の１にとどまることになったが、その他の条件が整備できたことから平成 30 年 11 月に発掘調査を開始した。



第５図　勝負峪遺跡・桑山５号墳トレンチ配置（1/3,000）
T1 ～ T3：平成 30 年度
T4 ～ T7：令和元年度

北側丘陵の試掘調査については、工事工程等の都合で樹木伐採が最小限の範囲となったが、その中に３本のトレンチ（第５図Ｔ１～３）を設定し、平成 30 年 12 月 10 日～ 20 日に調査を実施した(4)。トレンチで遺構は確認できなかったものの土師器片や鉄滓などが出土し、さらに丘陵北端の工事用道路崖面で土器片を確認できたことなどから、追加調査が必要と判断し、北側丘陵の樹木伐採を急ぐよう依頼した。

それを受けて令和元年９月に国道事務所が伐採を行ったところ、北側丘陵で石室とみられる石材が発見され、令和元年９月 17 日～ 27 日にその石材周り及び丘陵上に４本のトレンチを設定して試掘調査を実施した(5)。その結果、丘陵上で弥生時代の段状遺構２基を確認し、一方丘陵先端部は大きく削平されていることが分かり、また石材は横穴式石室であることが判明した。これによって前者を勝負峪遺跡、後者を桑山５号墳として本発掘調査が必要になったので、年度末までに樹木伐採や駐車場・作業ヤード確保などの条件整備を完了し、令和２年４月から発掘調査を開始した。　　（大橋・柴田）

註

（１）近藤義郎・中島寿雄 1952『佐良山古墳群の研究』第１冊　津山市

（２）岡山県教育委員会 2015「一般国道 53 号（津山南道路）改築工事に伴う試掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』45

（３）岡山県教育委員会 2022「桑山南古墳群　細畝古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』255

（４）岡山県教育委員会 2019「一般国道 53 号（津山南道路）改築に伴う試掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』49

（５）岡山県教育委員会 2020「一般国道 53 号（津山南道路）改築工事に伴う試掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』50

第２節　調査の経過

１　調査対象遺跡と発掘調査工程

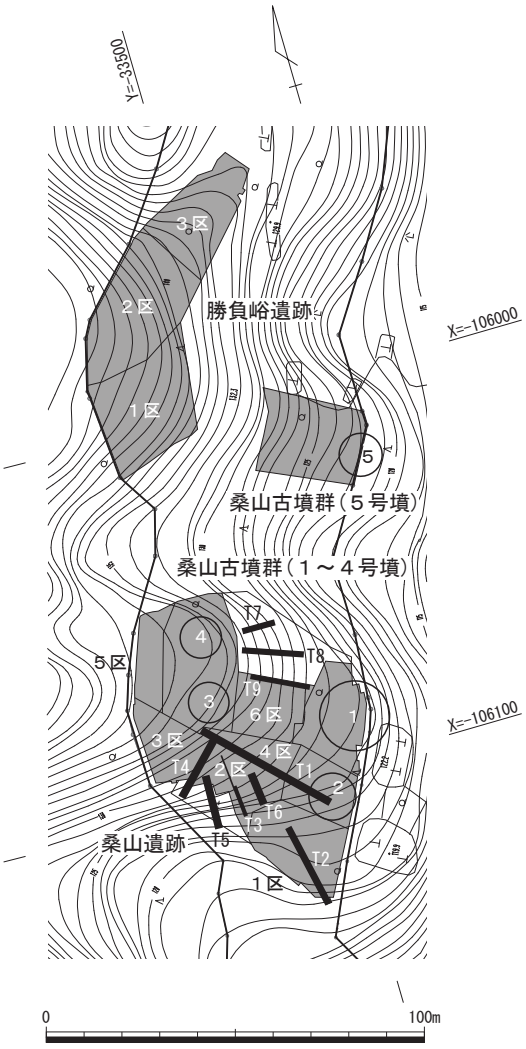
本事業の予定路線内にあり嵯峨山東麓に所在する遺跡は、第２図のとおり計 10 遺跡がある。このうち桑山南古墳群と細畝古墳群は令和４年１月に報告書を刊行し(1)、高尾北ヤシキ古墳以南の遺跡は調査中もしくは調査予定で、本報告書に収載する遺跡は勝負峪遺跡、桑山遺跡、桑山古墳群である。

第１表　本書関連調査一覧

	遺跡・地点等	種別	年度	期間	面積（㎡）	担当者
1	桑山古墳群（桑山２号墳） 桑山遺跡（桑山２号墳周辺）	発掘調査	平成 30	H30. 11. 6 ～ H31. 3. 15	1,190	亀山行雄・尾上元規・小嶋善邦・藤井翔平
2	桑山古墳群（桑山１・３・４号墳） 桑山遺跡（桑山１・３・４号墳周辺）	発掘調査	平成 31 令和元	H31. 4. 8 ～ R2. 2. 26	2,430	尾上元規・小嶋善邦・藤井翔平・藤井雅大・四田寛人
3	桑山古墳群（桑山５号墳）	発掘調査	令和２	R2. 4. 6 ～ R2. 10. 16	555	尾上元規・小嶋善邦・氏平昭則・藤井雅大・藤田京佑
4	勝負峪遺跡	発掘調査	令和２	R2. 4. 6 ～ R2. 10. 16	1,790	尾上元規・小嶋善邦・氏平昭則・藤井雅大・藤田京佑
5	津山市平福６４６ほか	試掘調査	平成 30	H30. 12. 10 ～ H30. 12. 20	35	河合忍
6	津山市平福６８８ほか	試掘調査	令和元	R1. 9. 17 ～ R1. 9. 27	134	尾上元規

これら遺跡の調査は、平成 30 年度から開始し、本事業の工事工程の都合で桑山南３・５号墳や高尾北ヤシキ遺跡の調査による中断があったものの、令和２年度に終了した。

なお桑山遺跡は、桑山１～４号墳の調査中に確認された弥生時代から中世にかけての集落跡及び生産遺跡であり、その調査範囲は桑山１～４号墳と同じものの桑山古墳群とは遺跡の種類が異なることから、名称を追加した遺跡である。そのため、文化財保護法に基づいて報告及び通知した埋蔵文化財発掘調査の報告（法第 99 条）及び埋蔵文化財発見通知（法第 100 条第２項）において、桑山遺跡の内容は桑山古墳群の中に含まれている。



第６図　調査区割と桑山遺跡・桑山１～４号墳トレンチ配置（1/2,000）

２　平成 30 年度

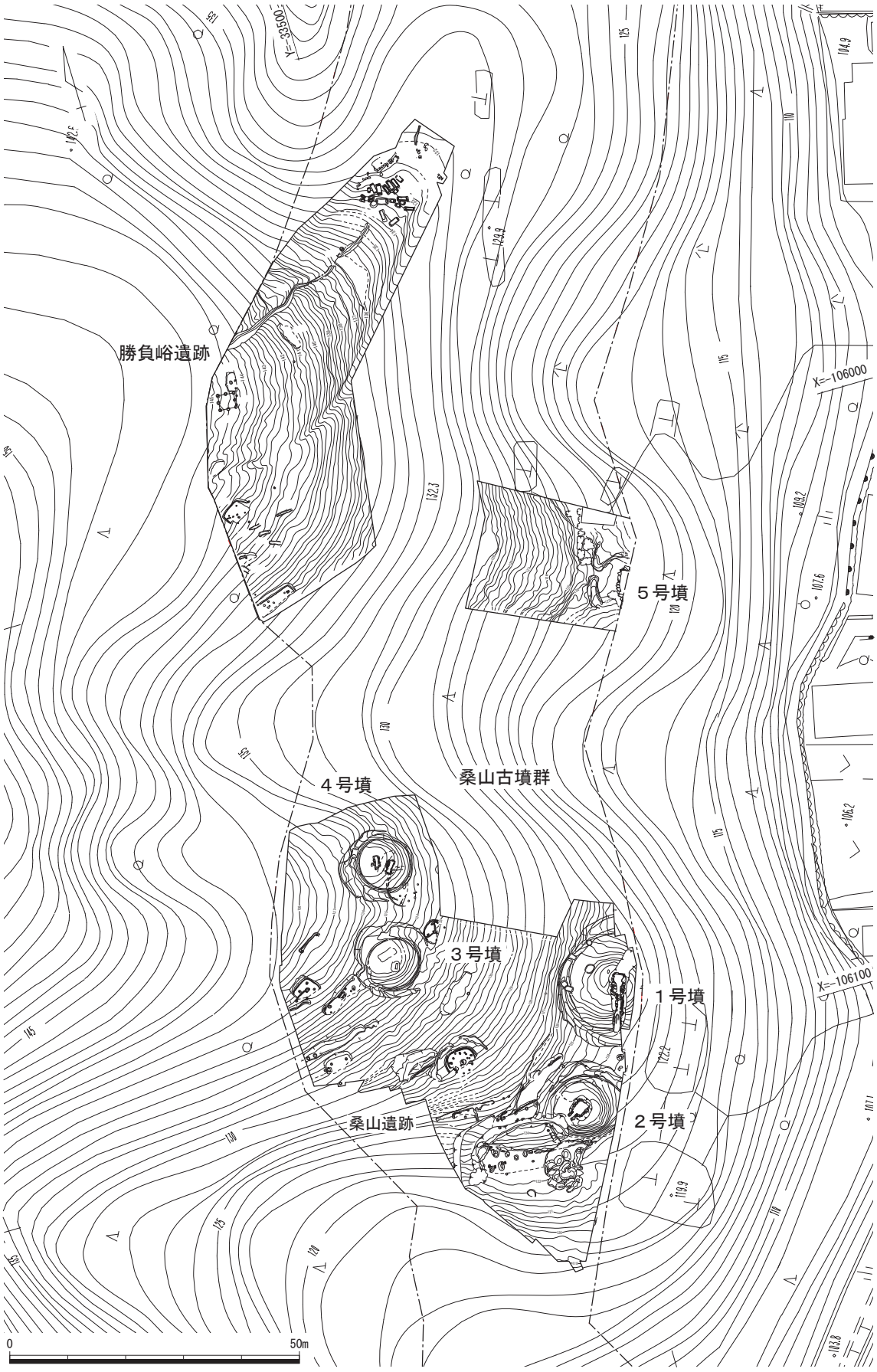
年度当初は桑山南古墳群や細畝古墳群の調査を行っていたが、これら遺跡の調査が一段落し始めた 11 月から桑山２号墳及び桑山遺跡（１～３区）の調査を少人数で開始し（第６図）、細畝古墳群の調査が終了した２月以降本格的に実施した。担当調査員は４名で、調査面積は 1,190 ㎡である。

調査地は、古墳の存在は明らかであったものの、その南側斜面地の様子が不明なため、Ｔ１～６のトレンチ設定し調査を行った。その結果、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が認められたことから、古墳が所在する尾根上及びその南斜面の調査を古墳と併せて実施した。

調査の結果、２号墳は墳丘及び石室が攪乱を受けていたものの、床面から素環頭大刀をはじめとする多数の鉄器がほぼ埋葬当時の位置で出土し、桑山遺跡（１～３区）は弥生時代の竪穴住居、飛鳥時代以降の竪穴住居、鍛冶炉、製炭窯などが検出された。２月 14 日に開催された埋蔵文化財保護調査指導会では、上記の成果を報告し、委員方々から有益な指導を受けた。

３　令和元年度

本年度は、桑山１・３・４号墳と桑山遺跡（４～６区）の調査を行った（第６図）。調査面積は 2,430 ㎡で、従事した調査員は６月までが３名、７月以降が４名である。桑山遺跡については、トレンチ（Ｔ７～Ｔ９）調査の結果、Ｔ９以南の範囲のみ全面調査を行うこととなった。年度当初から調査を行っていたが、11 月以降本事業の工事工程の都合で桑山南３・５号墳と高尾北ヤシキ遺跡を優先的に調査を行ったため、桑山１・３・４号墳と桑山遺跡の調査終了が２月までかかることになった。



第７図　勝負峪遺跡・桑山遺跡・桑山古墳群全体図（1/1,000）

桑山１・３・４号墳はいずれも６世紀中頃に築かれた古墳で、１号墳は美作地域においては最古級の横穴式石室を持つ古墳、３号墳は初葬が豊富な遺物が副葬された小児を埋葬した箱式石棺を持つ古墳、４号墳は副葬品の内容が異なる２基の竪穴式石室が造られている古墳であり、注目すべき調査成果が得られた。また桑山遺跡では、弥生時代の竪穴住居や古代の土坑などが検出された。これらの調査成果を広く周知するため、11 月６・７日には現地説明会を開催し、171 名の参加者を得た。続いて 11 月 14 日には、ドローンによる空中写真撮影を行った。なお、７・10・２月には、埋蔵文化財保護調査指導会を開催し、委員から有益な指導を受けた。

４　令和２年度

令和２年度は、４月から 10 月にかけて勝負峪遺跡と桑山５号墳の調査を同時に行い、その後高尾北ヤシキ遺跡と高尾北ヤシキ古墳（本書未収載）の調査を行った。調査面積は勝負峪遺跡が 1,790 ㎡、桑山５号墳が 555 ㎡で、担当調査員は４名である。

勝負峪遺跡は、調査工程上１～３区に分け（第６図）、順次調査を進めていった。この遺跡は弥生時代から古代にかけての集落跡であるが、弥生時代中期には３区周辺が墓域として利用されており、21 基の土坑墓が検出された。桑山５号墳は、路線内に含まれる西半のみの調査で、路線外となる東半は現地で保存している。石室内からは、土器・鉄器・玉類が 300 点以上検出され、特に石室袖部から出土した装飾壺や鈴付高杯は重要な遺物として注目される。９月８日にはドローンによる空中写真撮影を行い、調査成果を記録した。埋蔵文化財保護調査指導会は、８月と 11 月に開催した。



写真１　埋蔵文化財保護調査指導会
（令和元年 10 月 30 日）

なお、桑山５号墳の横穴式石室は路線の切り土工事範囲から外し、石室内を砂などで充填した上で現地にて保存している。

註

（１）岡山県教育委員会 2022「桑山南古墳群　細畝古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』255

第３節　報告書作成の経過

報告書の作成は、令和３年４月から令和４年３月にかけて行った。対象遺構は、勝負峪遺跡が竪穴住居や段状遺構を含む 35 遺構、桑山遺跡が竪穴住居や段状遺構を含む 27 遺構、桑山古墳群が古墳５基と土器棺墓１基、箱式石棺墓１基である。対象遺物数は、整理箱（コンテナ）に換算して 94 箱である。

整理作業は、石室内出土遺物が非常に多く、その実測に多くの時間を費やすこととなった。しかしながら、令和４年１月には実測を終了させ、３月には編集作業を完了させた。なお、図面の浄書は遺構、鉄器、玉類の実測図をデジタルトレース、土器、石器、土製品を手書きトレースで行っている。（小嶋）

第４節　発掘調査及び報告書作成の体制

平成 30 年度

岡山県教育委員会

教 育 長	鍵本　芳明

岡山県教育庁

教育次長	日比謙一郎

文化財課

課　　長	大西　治郎
参　　事（文化財保存・活用担当）	横山　　定
総括副参事（埋蔵文化財班長）	柴田　英樹
主　　幹	上栫　　武
主　　任	原　　珠見

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	向井　重明
次　　長（総務課長事務取扱）	髙田　　亮
参　　事（文化財保護担当）	大橋　雅也
＜総　務　課＞	
総括主幹（総務班長）	甲元　秀和
主　　任	浦川　徳子
主　　任	東　　恵子
＜調査第二課＞	
課　　長	亀山　行雄（調査担当）
総括副参事（第二班長）	尾上　元規（調査担当）
主　　幹	小嶋　善邦（調査担当）
主　　事	藤井　翔平（調査担当）

令和元年度

岡山県教育委員会

教 育 長	鍵本　芳明

岡山県教育庁

教育次長	髙見　英樹

文化財課

課　　長	大西　治郎
参　　事（文化財保存・活用担当）	横山　　定
総括副参事（埋蔵文化財班長）	柴田　英樹
主　　幹	河合　　忍
主　　任	原　　珠見

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	向井　重明
次　　長（総務課長事務取扱）	佐々木雅之
参　　事（文化財保護担当）	大橋　雅也
＜総　務　課＞	
総括主幹（総務班長）	甲元　秀和
主　　任	東　　恵子
主　　任	多賀　克仁
＜調査第二課＞	
総括参事（調査第二課長事務取扱）	亀山　行雄
総括副参事（第二班長）	尾上　元規（調査担当）
副 参 事	小嶋　善邦（調査担当）
主　　事	藤井　翔平（調査担当）
主　　事	藤井　雅大（調査担当）
＜調査第三課＞	
主　　事	四田　寛人（調査担当）

令和２年度

岡山県教育委員会

教 育 長	鍵本　芳明

岡山県教育庁

教育次長	髙見　英樹

文化財課

課　　長	小林　伸明
参　　事（文化財保存・活用担当）	大橋　雅也
総括参事（埋蔵文化財班長）	柴田　英樹
主　　幹	河合　　忍
主　　事	九冨　　一

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	小見山　晃
次　　長（総務課長事務取扱）	佐々木雅之（～ 10 月 14 日）
参　　事（文化財保護担当）	亀山　行雄
＜総　務　課＞	
課　　長	甲元　秀和（10 月 15 日～）
総括副参事（総務班長）	甲元　秀和（～ 10 月 14 日）
総括主任（総務班長）	多賀　克仁（10 月 15 日～）
主　　任	多賀　克仁

（～ 10 月 14 日）

主　　任　　井上　裕子

〈調査第二課〉

課　　長　　澤山　孝之

総括副参事（第一班長）　尾上　元規（調査担当）

副 参 事　　氏平　昭則（調査担当）

主　　事　　藤井　雅大（調査担当）

総括副参事（第二班長）　小嶋　善邦（調査担当）

主　　事　　藤田　京佑（調査担当）

令和３年度

岡山県教育委員会

教 育 長　　鍵本　芳明

岡山県教育庁

教育次長　　池永　　亘

文化財課

課　　長　　小林　伸明

副 参 事（文化財保存・活用担当）　尾上　元規

総括主幹（埋蔵文化財班長）　河合　　忍

主　　幹　　松尾　佳子

主　　事　　九冨　　一

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　大橋　雅也

次　　長（総務課長事務取扱）　浅野　勝弘

参　　事（文化財保護担当）　亀山　行雄

〈総　務　課〉

総括主幹（総務班長）　多賀　克仁

主　　任　　井上　裕子

〈調査第二課〉

課　　長　　澤山　孝之

総括副参事（第二班長）　小嶋　善邦（整理担当）

主　　事　　藤井　雅大（整理担当）

第５節　日誌抄

平成 30 年度

11 月 6 日（火）　桑山古墳群（２号墳）、桑山遺跡（２号墳周辺）調査開始、埋蔵文化財保護調査指導会開催

12 月 10 日（月）　津山市平福 646 ほか地点試掘調査開始

12 月 20 日（木）　津山市平福 646 ほか地点試掘調査終了

２月 14 日（木）　埋蔵文化財保護調査指導会開催

令和元年度

平成 31 年

４月 １日（月）　桑山古墳群（１・３・４号墳）、桑山遺跡（１・３・４号墳周辺）調査開始

令和元年

７月 12 日（金）　埋蔵文化財保護調査指導会開催

９月 17 日（火）　津山市平福 688 ほか地点試掘調査開始

９月 27 日（金）　津山市平福 688 ほか地点試掘調査終了

10 月 30 日（水）　埋蔵文化財保護調査指導会開催

11 月６・７日（水・木）　桑山古墳群現地説明会開催（参加者 171 名）

11 月 14 日（木）　桑山古墳群空中写真撮影

２月 20 日（木）　埋蔵文化財保護調査指導会開催

２月 26 日（水）　桑山古墳群（１～４号墳）・桑山遺跡調査終了

令和２年度

４月 １日（水）　桑山古墳群（５号墳）、勝負峪遺跡調査開始

８月 18 日（火）　埋蔵文化財保護調査指導会開催

９月 ８日（火）　桑山古墳群（５号墳）、勝負峪遺跡空中写真撮影

10 月 16 日（金）　桑山古墳群（５号墳）、勝負峪遺跡調査終了

11 月 13 日（金）　埋蔵文化財保護調査指導会開催

令和３年度

４月 １日（木）　報告書作成作業開始

８月 ６日（金）　埋蔵文化財保護調査指導会開催

２月 ８日（火）　埋蔵文化財保護調査指導会開催

３月 31 日（木）　報告書作成作業終了

第２表　文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

番号	文書番号 日付	周知・ 周知外	種類 名称	所在地	面積（㎡）	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第 86 号 H31. 1. 7	周知外	－	津山市平福 646 ほか	35. 0	一般国道 53 号（津山南道路）改築	無	岡山県古代吉備文化財センター所長	河合　忍	H30. 12. 10 ～ H30. 12. 20
2	岡吉調 第 84 号 R1. 9. 30	周知外	集落跡・古墳 勝負峪遺跡・ 桑山５号墳	津山市平福 688 ほか	134. 0	一般国道 53 号（津山南道路）改築	有	岡山県古代吉備文化財センター所長	尾上元規	R1. 9. 17 ～ R1. 9. 27

埋蔵文化財発掘の通知（法第 94 条）

番号	文書番号 日付	種類 名称	所在地	面積（㎡）	目的	通知者	通知日	主な 勧告事項
1	教文埋 第 857 号 H28. 9. 28	古墳 桑山１号墳ほか	津山市高尾	－	道路	国土交通省中国整備局岡山国道事務所長	H28. 9. 7	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第 99 条）

番号	文書番号 日付	種類 名称	所在地	面積（㎡）	原因	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第３号 H30. 4. 2	古墳 桑山南古墳群・ 細畝古墳群・ 桑山古墳群	津山市高尾 1585 ほか	2, 280	一般国道 53 号 （津山南道路）改築	岡山県古代吉備文化財 センター所長	亀山行雄 澤山孝之 尾上元規 小嶋善邦 藤井翔平	H30. 4. 2 ～ H31. 3. 29
2	岡吉調 第１号 H31. 4. 1	古墳 桑山古墳群ほか	津山市高尾・平福	4, 550	一般国道 53 号 （津山南道路）改築	岡山県古代吉備文化財 センター所長	尾上元規 小嶋善邦 藤井翔平 藤井雅大 四田寛人	H31. 4. 1 ～ H32. 3. 31
3	岡吉調 第１号 R2. 4. 1	集落跡・古墳 勝負峪遺跡・ 桑山古墳群ほか	津山市平福 688 ほか・高尾 1423 ほか	4, 025	一般国道 53 号 （津山南道路）改築	岡山県古代吉備文化財 センター所長	尾上元規 小嶋善邦 氏平昭則 藤井雅大 藤田京佑	R2. 4. 1 ～ R3. 3. 31

埋蔵文化財発見通知（法第 100 条第２項）

番号	文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文埋 第 1472 号 H30. 12. 27	土器（土師器）・鉄滓 計　整理箱１箱	津山市平福 646 ほか	H30. 12. 10 ～ H30. 12. 20	岡山県教育委員会教育長	国土交通省	岡山県古代吉備 文化財センター
2	教文埋 第 1961 号 H31. 3. 27	土器（弥生土器・須恵器・土師器）・土製品（埴輪・陶棺）・金属製品（鉄刀、鉄鏃、刀子、馬具）・玉類・鉄滓ほか 計　整理箱 10 箱	津山市高尾 1582 ほか 桑山古墳群	H30. 4. 2 ～ H31. 3. 15	岡山県教育委員会教育長	国土交通省	岡山県古代吉備 文化財センター
3	教文埋 第 1062 号 R1. 10. 2	弥生土器・須恵器 計　整理箱１箱	津山市平福 688 ほか 勝負峪遺跡 ほか	R1. 9. 17 ～ R1. 9. 27	岡山県教育委員会教育長	国土交通省	岡山県古代吉備 文化財センター
4	教文理 第 1876 号 R3. 3. 22	土器（弥生土器・須恵器・土師器）・土製品（埴輪）・金属製品（鉄刀・鉄鏃・馬具・刀子）・玉類・鉄滓ほか 計 整理箱 26 箱	津山市平福 667 ほか 桑山５号墳	R2. 4. 6 ～ R3. 3. 19	岡山県教育委員会教育長	国土交通省	岡山県古代吉備 文化財センター
		土器（弥生土器・須恵器・土師器）・石器（石包丁・石鏃・剥片）ほか 計 整理箱５箱	津山市平福 668 ほか 勝負峪遺跡				
5	教文理 第 1608 号 R4. 1. 25	土器（弥生土器・須恵器・土師器）・土製品（埴輪）・金属製品（鉄刀・鉄鏃・刀子・石突）・玉類・鉄滓・人骨ほか 計　整理箱 51 箱	津山市平福 666 ほか 桑山古墳群	H31. 4. 8 ～ R2. 3. 13	岡山県教育委員会教育長	国土交通省	岡山県古代吉備 文化財センター

第３章　勝負峪遺跡

第１節　遺跡の概要

勝負峪遺跡は、吉井川の支流である皿川左岸の嵯峨山から東に張り出した支尾根上に位置する（第２図)。東に約 50m 離れた同じ支尾根上の標高が低くなった先端には桑山５号墳がある（第７図）。また浅い谷地形を挟んで南に約 50 m離れた支尾根上には桑山遺跡と桑山１～４号墳が立地する（写真２)。勝負峪遺跡は標高 132m ～ 145 mにかけて立地し、皿川西岸の現水田面からの比高は約 30 ～ 43 mである。眼下には皿川により形成された南北に細長い平地が広がり、北東方向を望むと吉井川と皿川の合流地点を見ることができる（写真３)。

勝負峪遺跡は、本事業に伴う試掘調査で新たに発見された遺跡で、調査前は山林であり、段状遺構６と竪穴住居１の間にあたる地点では東西方向に山道が通っている状態であった。地形は、調査区中央の西端が最も標高が高く、そこから北・東・南の方向に向かって下がる。

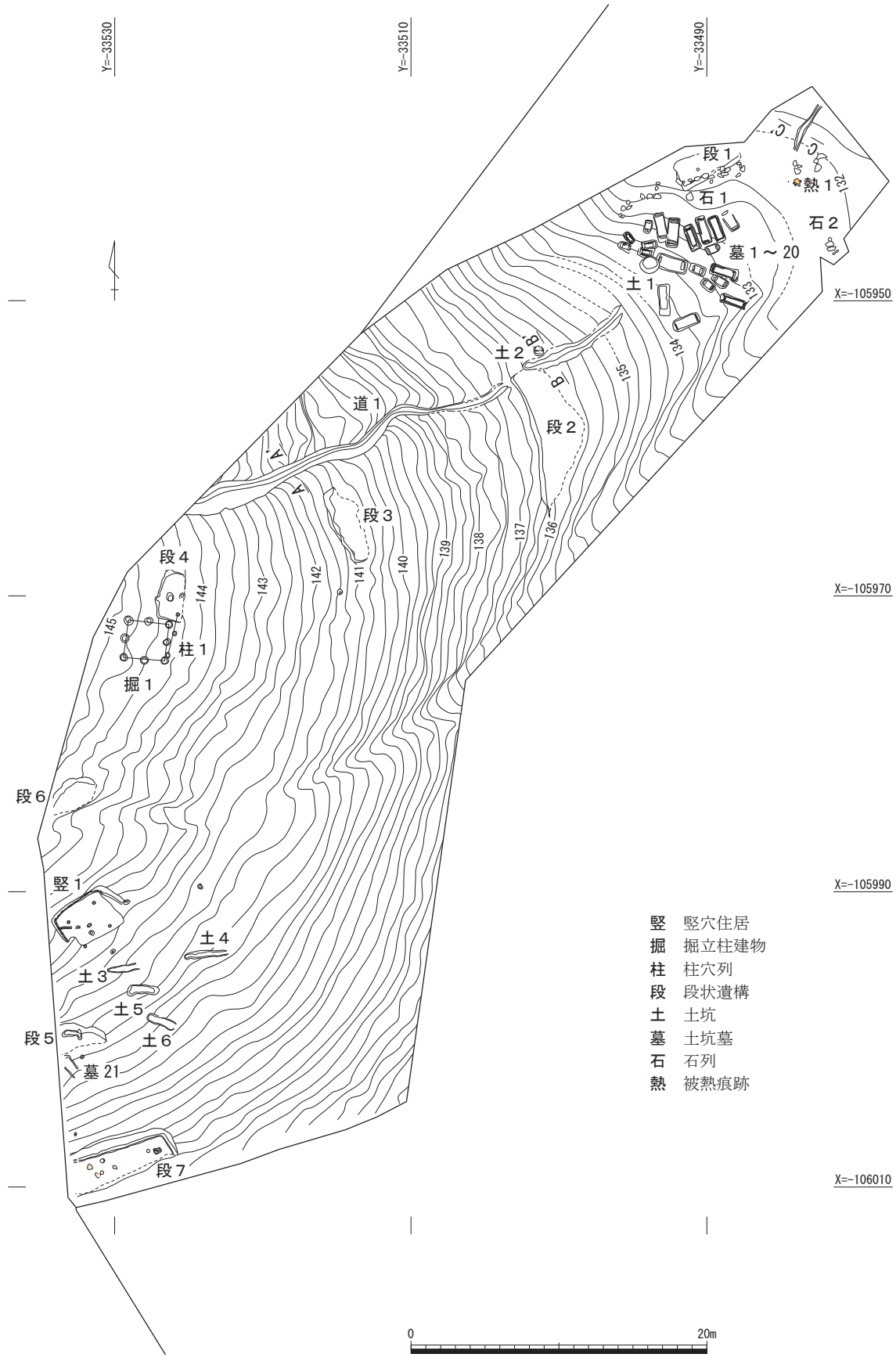
調査の結果、弥生時代の遺構として竪穴住居１軒、段状遺構５面、土坑墓 21 基、石列２列、被熱痕跡１基を、古墳時代以降の遺構として、掘立柱建物１棟、柱穴列１列、段状遺構２面、土坑６基、道１条を確認した（第８図)。遺構の分布は、調査区北端の土坑墓群を除くと散在的である。調査区の最高所付近からは、弥生時代の段状遺構、古墳時代以降の掘立柱建物と柱穴列、段状遺構を確認した。これらの遺構近辺では、西側の調査区外から流れ込んだと考えられる甕や台付鉢などの弥生土器、磨製石包丁などの遺物が多数出土しており、遺跡の範囲は西側に広がるようである。調査区の最高所から南方向の斜面は傾斜が相対的に緩やかで、弥生時代の竪穴住居と段状遺構、古墳時代以降の段状遺構や土坑が確認された。最高所から北東方向の斜面には弥生時代の段状遺構が散在していた。調査区北東部の標高約 132 m～ 134 m付近は平坦になっており、この部分で弥生時代中期の土坑墓群とそれに伴うと考えられる石列、その下層に段状遺構を検出した。南東方向の斜面は最高所から急な斜面になっており、遺構は認められなかった。　（藤井雅）



写真２　１区調査風景（北西から）



写真３　２区調査風景（南西から）



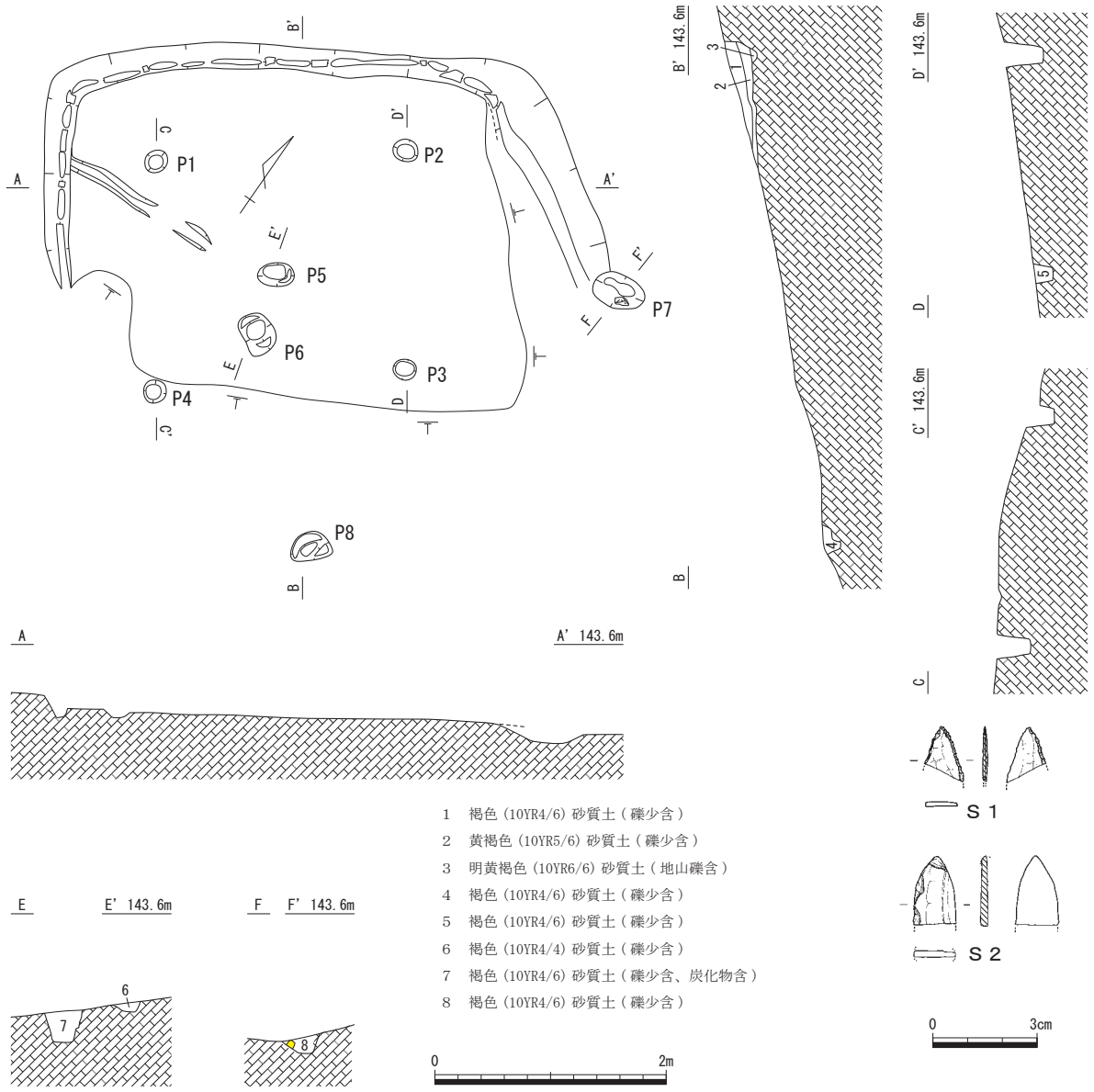
第８図　遺跡全体図（1/400）

第２節　弥生時代の遺構・遺物

１　竪穴住居

竪穴住居１（第９図、図版２－１・９）

調査区内では尾根頂部に近い、標高 143 ｍ付近のやや平坦な部分に立地する。北西端では深さ最大約 30cm を測るが、斜面下方側では残りは悪く掘り方北端から３ｍより南側が失われている。堆積状況は壁体溝及び埋土の合計３層に分かれ、埋土は土質が地山類似である。住居形状は方形であるが、東側の壁体が外へ開いた状態で確認された。この部分の壁体溝は東・北側に比べ幅が広く、残存状況も悪かったので元来の形状を表していない可能性がある。床面には、直径 20cm 程度を測る主柱穴Ｐ１～Ｐ４、ピットＰ５～Ｐ８と、西側に溝１条が確認されたが、貼り床層は認識できなかった。また、



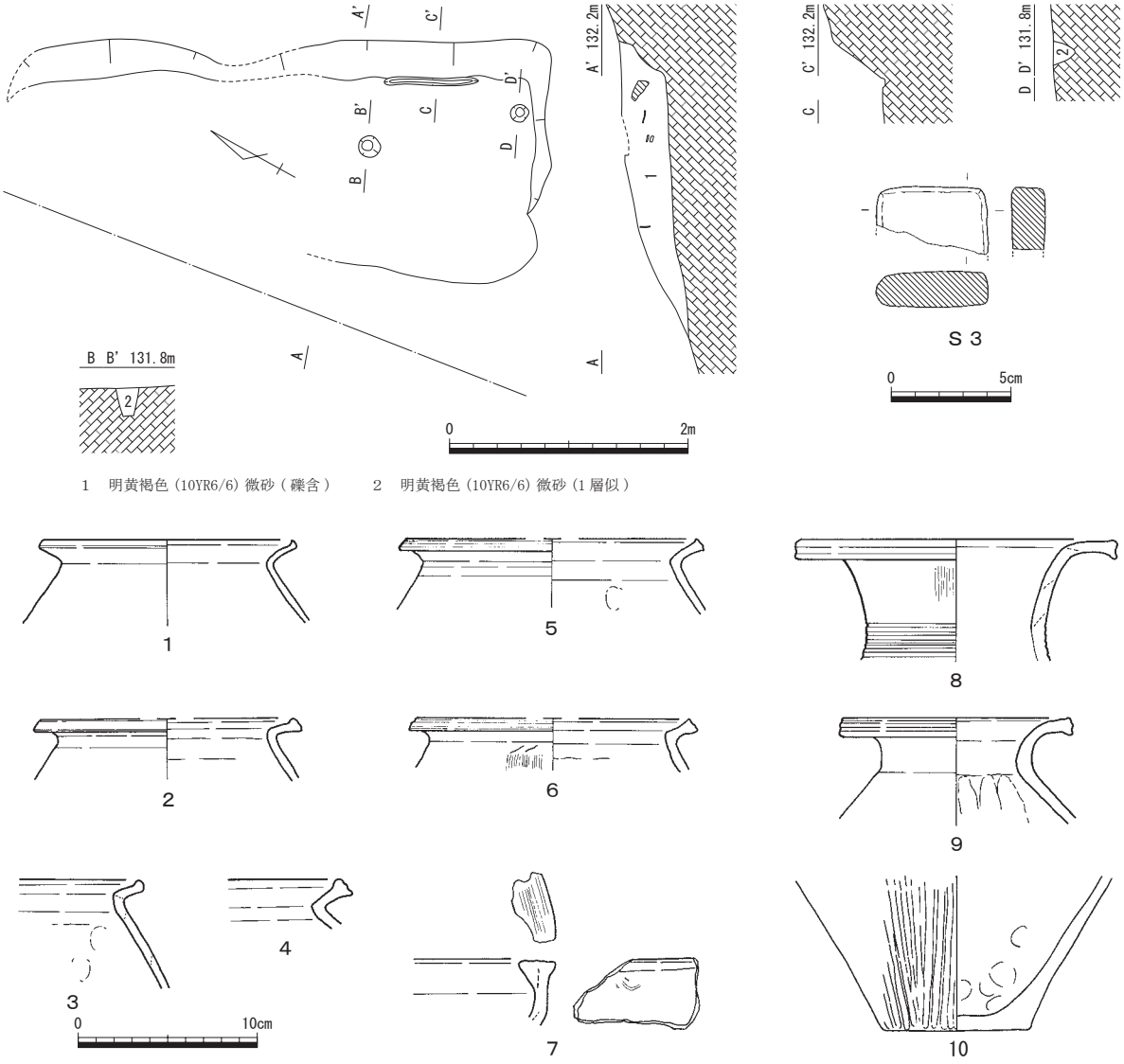
第９図　竪穴住居１(1/60)・出土遺物（1/2）

ピットのうち東端と南端のＰ７・Ｐ８に関しては住居に伴わない可能性が高い。出土遺物は、埋土中からは甕形土器の口縁部片を含む弥生土器の小片とサヌカイト製の石鏃（Ｓ１）および剥片が検出された。また、Ｐ５からはサヌカイト製剥片およびＳ２が出土した。遺構の埋没時期の断定は難しいが弥生時代中期の可能性が高い。（氏平）

２　段状遺構

段状遺構１（第 10 図、図版２－２・９）

調査区北東端の調査区境に接して位置する。石列１の並びに直交して設定したトレンチで岩盤を掘削した掘り方を確認したが、石列１に伴うものにしては規模が大きかったので、別遺構として検出を進めた結果段状遺構と認識したものである。埋土は地山に似た色調･質感で､地山と区別が困難である。南側壁面は直線的に残存するが、北側壁面は現在の山道の削平で消失していた。床面上で直径 16 ～ 18cm の柱穴を２本と東端の一部に深さ３㎝程度の壁体溝を検出した。出土遺物は、弥生土器が重量に



第 10 図　段状遺構１(1/60)・出土遺物（1/4・1/3）

して合計約 2.5kg と比較的多めであった。甕形土器で口縁端部の拡張が少ないことから、遺構の埋没時期は弥生時代中期中～後葉と考えられる。　（氏平）

段状遺構２（第 11 図、図版２－３）

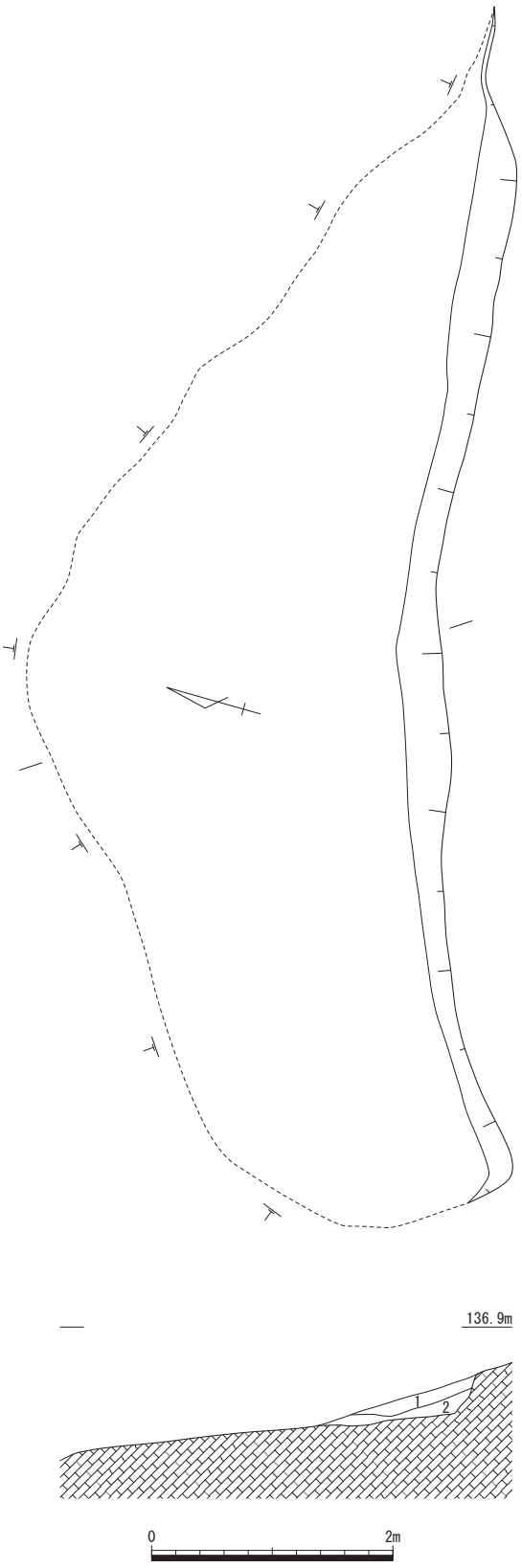
調査区北側で標高 136 m付近に位置する。平面北側は道１で、南側は現道で削平されるため、両端は不明である。埋土は色調・質感共に地山に似る。壁面は直線的ではなく凹凸が見られるが、これは基盤層が岩盤と風化土からなり、風化土と埋土の区別が困難なため岩盤まで掘削した結果である。掘り方平面は等高線に沿った形で、床面に貼り床・壁体溝・柱穴は未確認である。遺物は重量で約 200g の弥生土器が出土し、段状遺構１に近い弥生時代中期に埋没したのであろう。　（氏平）

段状遺構３（第 12 図、図版３－１・９）

調査区中央付近で段状遺構２の上方、標高 141 m付近に位置する。土層の上層は地山とは明確に区別ができる褐色土を呈する。壁面と平坦面には凹凸が見られ南北端部も不明瞭だが、地山と包含層の区別が困難で岩盤まで掘削した結果で、本来の形状より掘りすぎの可能性もある。また、明確な貼り床層、床面上の遺構は検出できなかった。出土遺物は、図示した **11 ～ 14** 以外には甕形土器口縁部片などがごくわずか出土しており、弥生時代中期後葉に埋没したものと思われる。　（氏平）

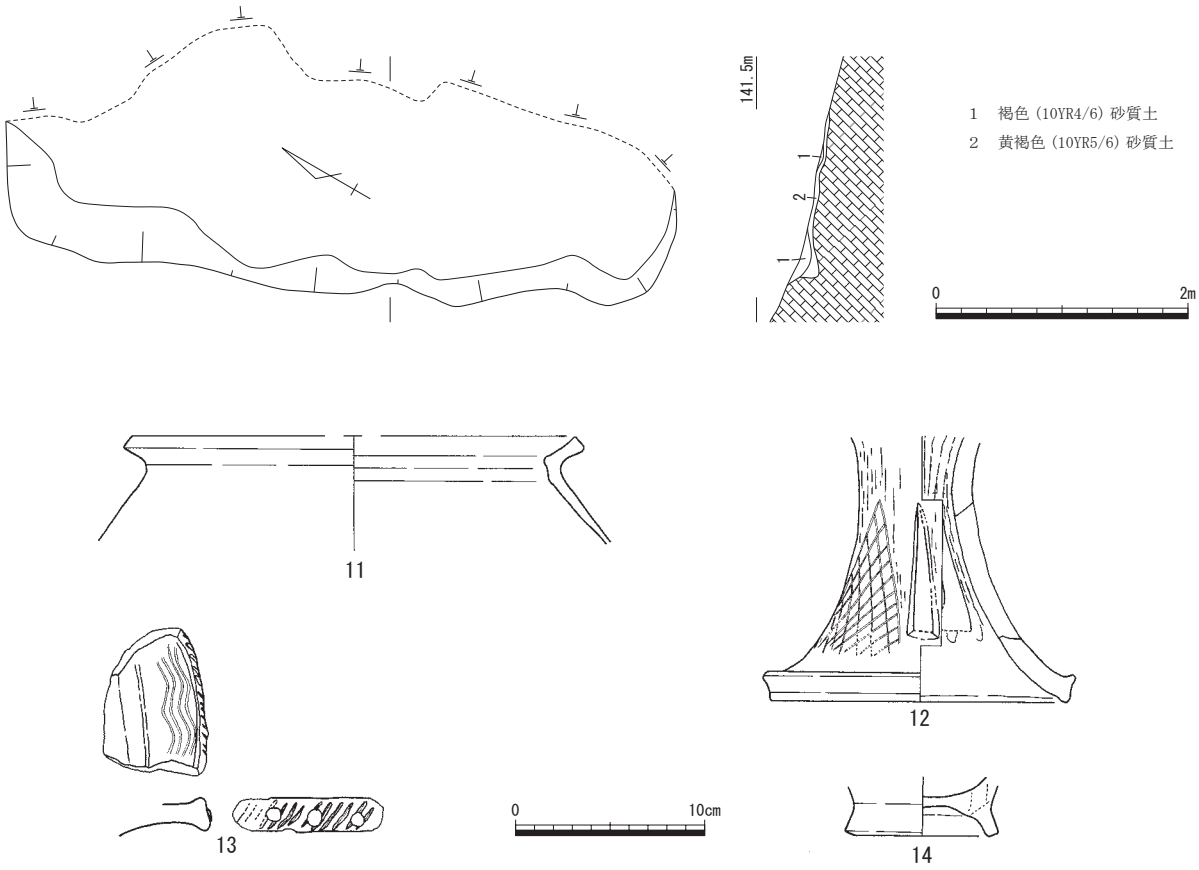
段状遺構４（第 13 図、図版３－２・９）

調査区中央頂部付近の傾斜が緩やかな標高 144.5 mに位置する。建物１などを検出中に平面で炭化物の散布が見られたため、トレンチを設定し遺構の範囲を確認して掘削した。検出面からの深さは最大 16cm を測り、平面形は方形を呈する。検出面が底面に近いため、貼り床層が存在しているかどうかは判断できなかった。中央のＰ１には幅 16cm、深さ 22cm の柱痕跡状の凹みが認められ、Ｐ２の埋土は焼土と炭化物を含む。埋土は色調・質感とも地山に似る。出土遺物は石鏃（**Ｓ４**）の他ごく少量の弥生土器片があり、弥生時代中期に埋没した可能性が高い。　（氏平）

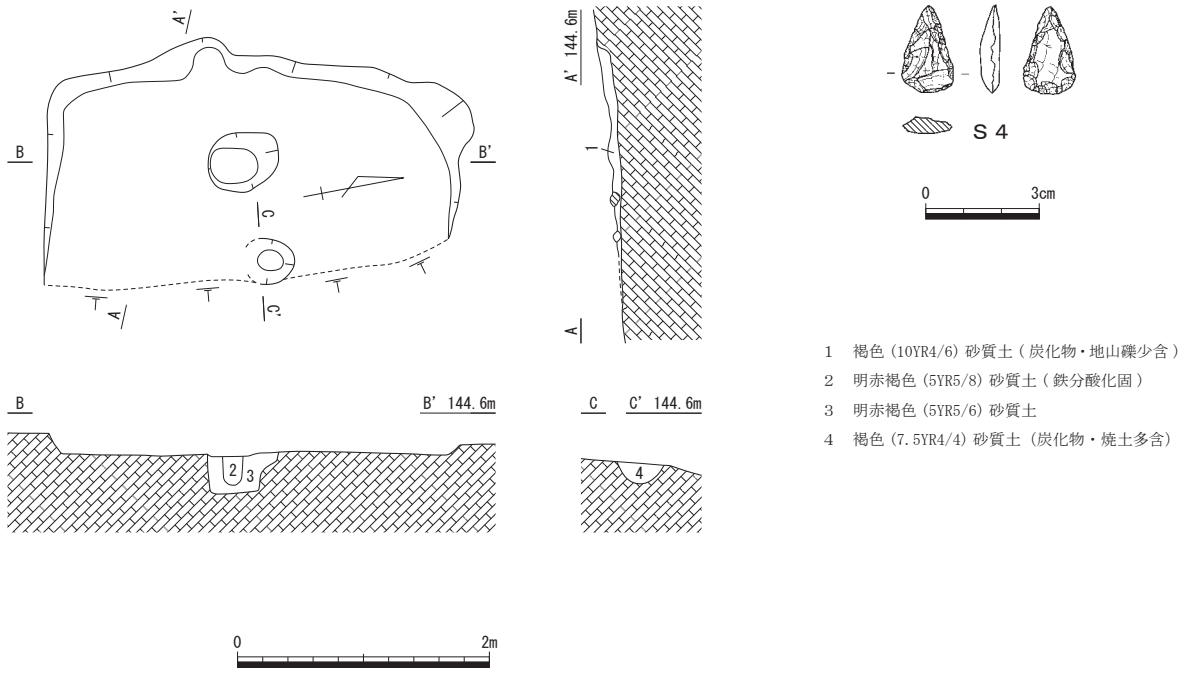


1　明黄褐色（10YR6/6）砂質土（地山礫多含）
2　黄褐色（10YR5/6）砂質土（地山礫少含）

第 11 図　段状遺構２(1/60)



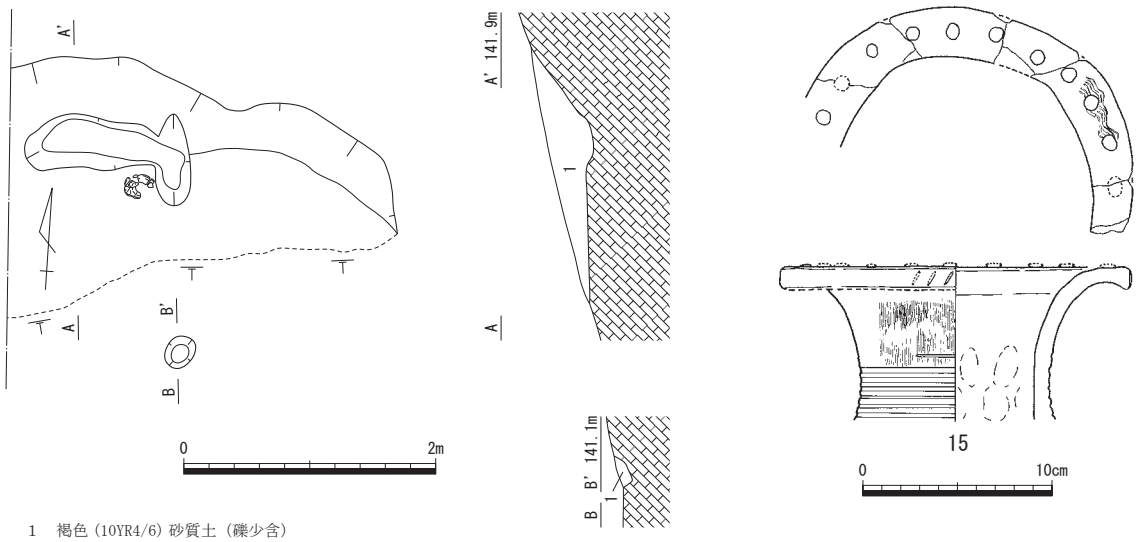
第 12 図　段状遺構３(1/60)・出土遺物 (1/4)



第 13 図　段状遺構４(1/60)・出土遺物 (1/2)

段状遺構５（第 14 図、図版３－３・９）

調査区南西側で標高 141.5 ｍ付近に位置し、西側は調査区外へ伸びる。埋土は色調・質感共に地山に似る。床面は凹凸が見られ、壁面付近に溝状の凹みと南に離れてピット１基を確認した。隣接する墓 21 との直接的な切り合い関係は不明である。遺物は図示以外で約 130g の弥生土器が出土しており、床面に張り付いていた壺形土器(15)より弥生時代中期後葉に埋没したのであろう。　（氏平）



1　褐色（10YR4/6）砂質土（礫少含）

第 14 図　段状遺構５(1/60)・出土遺物（1/4）

３　土坑墓群

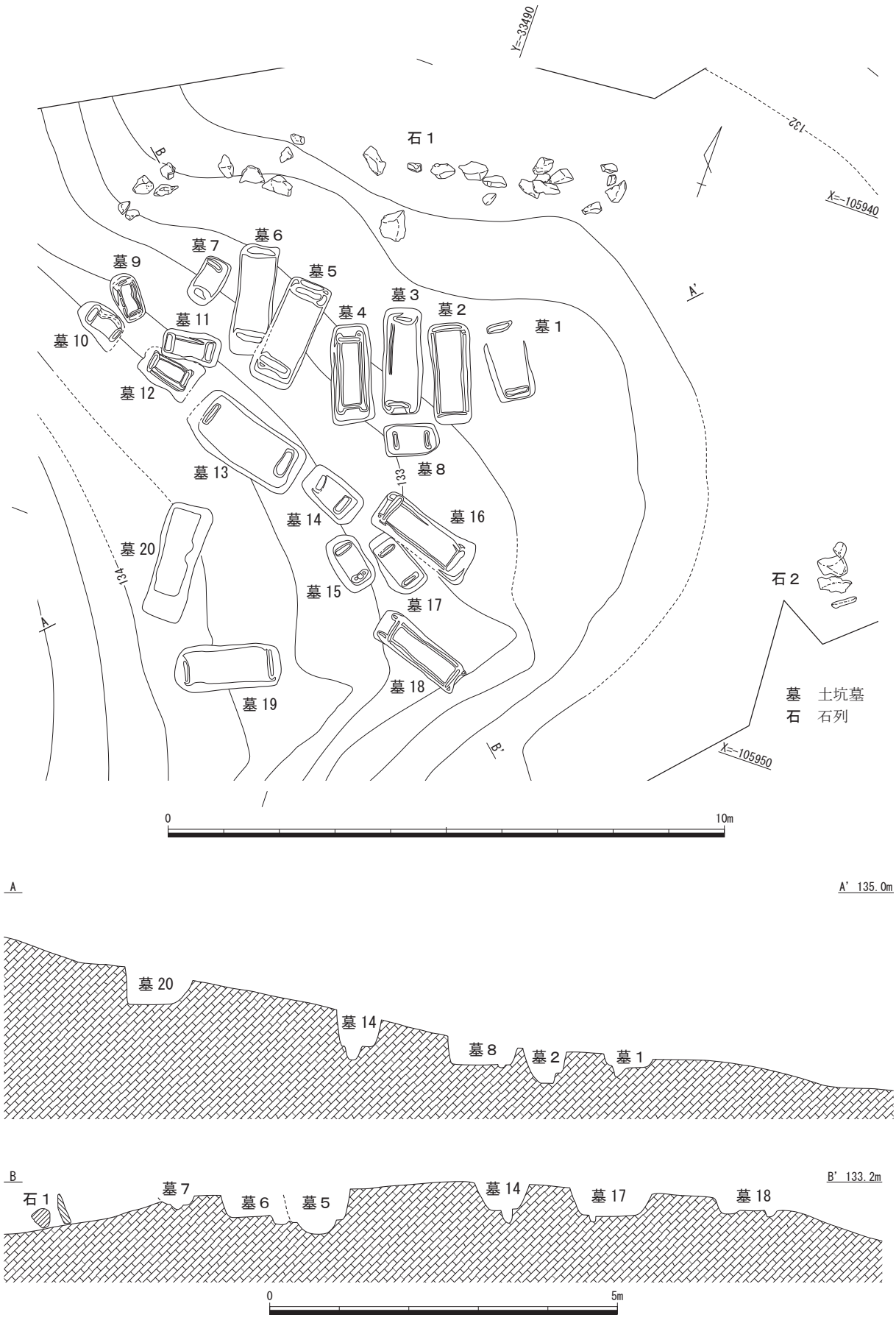
調査区北端の標高約 132.5 ｍ～ 134 ｍの間に 20 基の土坑墓が密集している（第 15 図、巻頭図版２－１）。土坑墓の主軸は複数あり、①北北西－南南東方向を意識している土坑墓１～４・６・８・11・19、②北北東－南南東方向の土坑墓５・７・20、③西北西－東南東方向の土坑墓９・10・12 ～ 18 に分けられるようである。立地から考えると中央に位置する③が最も早く掘削され、土坑墓５と６の切り合い関係から③→①→②の順番で埋葬されたと考えられる。

土坑墓群の墓坑底の標高は、北東－南西方向（Ａ－Ａ’）では高低差があるが、北西－南東方向（Ｂ－Ｂ’）では近似し、この方向は土坑墓掘削時には平坦であったと考えられる。

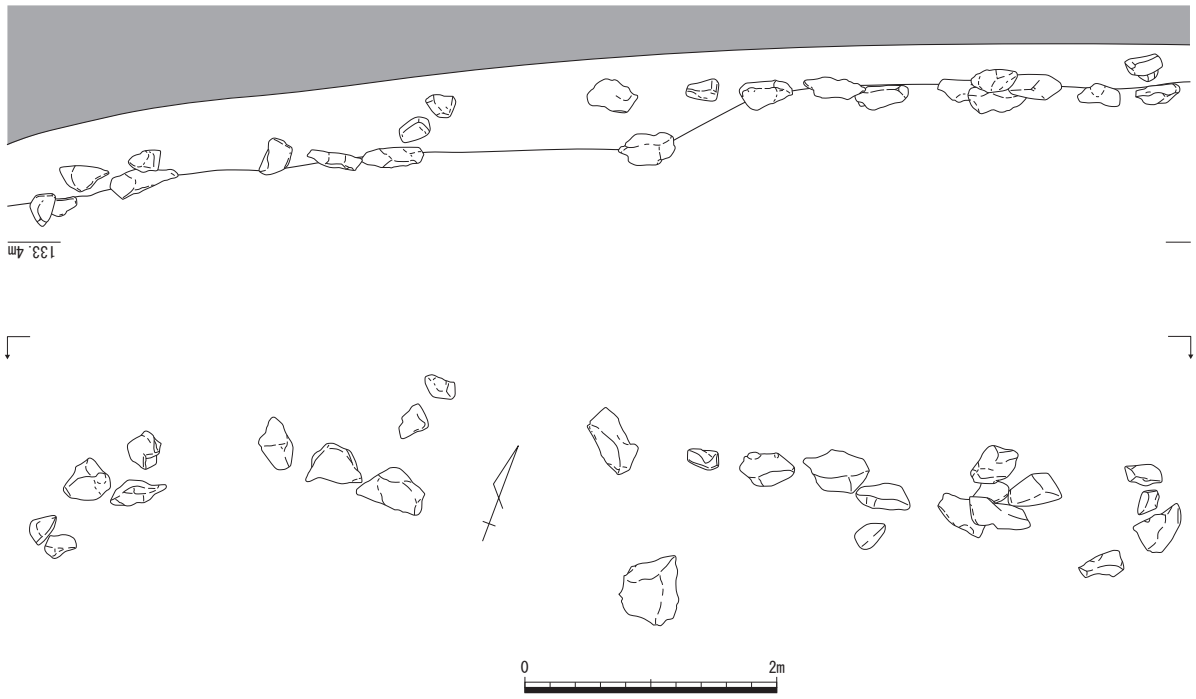
ほとんどの土坑墓で木棺の小口穴や側板溝が掘られており、木棺が据えられていたことが確認できた。また、副葬品は認められず、埋土に土器片が混じるのみであった。

土坑墓群の北辺には、石列１があった（第 16 図）。石列は一部で平たい石材を貼石のように使用している部分があるが、平たい石材の小口部分を外側に向けていたり、石塊を不規則に使用している部分があるなど、規則性は認められなかった（写真４）。この石列の石材の並びは①グループの土坑墓８・19 の主軸と同じ方向を向くため、土坑墓群を区画するものであったと考えられる。また土坑墓群の東側では石列２が確認された（第 17 図）。板状の石材の小口を土坑墓側に向けて立てるなど石列１と配石の仕方が異なり、土坑墓群や石列１との明確な関係性を確認できなかったが、石材の並ぶ方向から考えると石列１と共に土坑墓群を囲むものであった可能性も考えられる。

土坑墓 21 に関しては土坑墓群から離れた調査区南西に１基単独で立地していた(第８図)。(藤井雅)



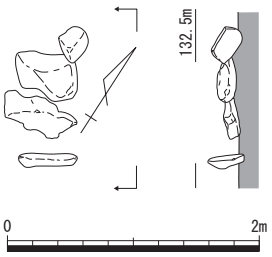
第 15 図　土坑墓群 (1/100)・断面図 (1/80)



第 16 図　石列１(1/60)



写真４　石列１（西から）



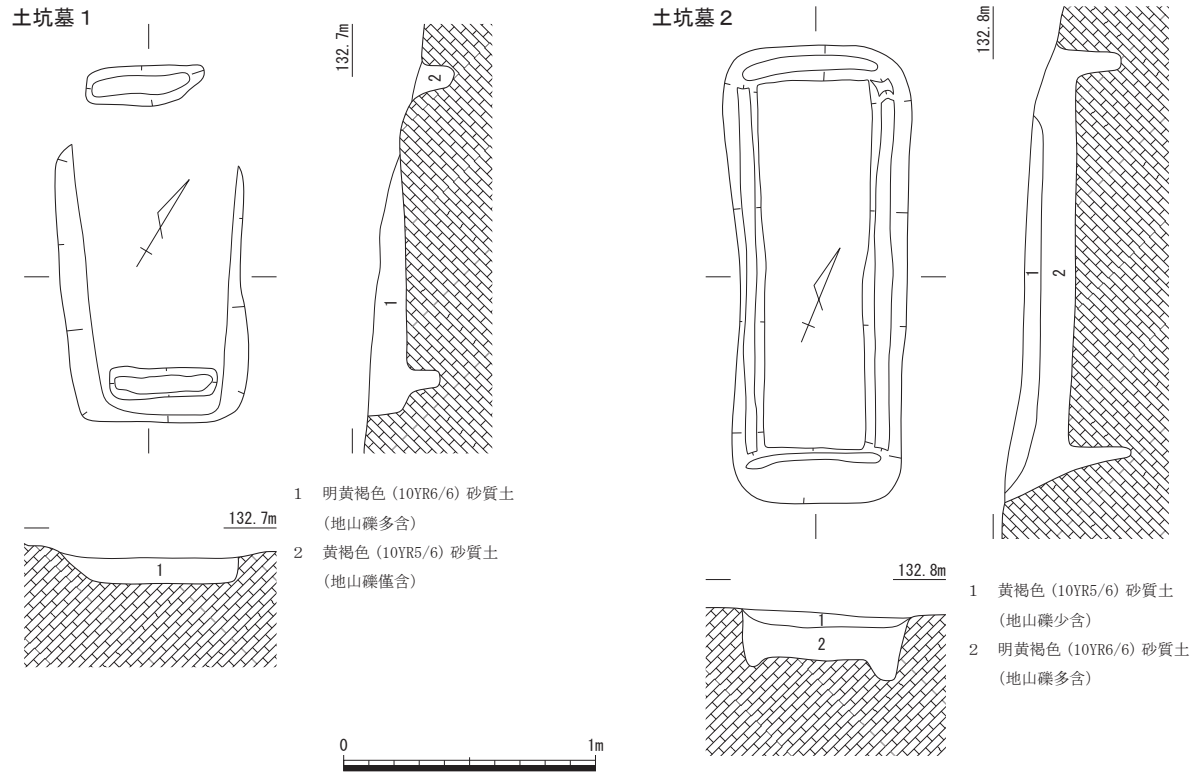
第 17 図　石列２(1/60)

土坑墓１（第 18 図、図版５－２）

土坑墓群内で北東端に位置する。土坑墓２～４と平行に並ぶ。掘り方の北西側は検出ができなかった。掘り方規模は残存長軸長 141 ㎝、短軸長 74 ㎝で、深さは確認面から 16 ㎝である。両小口付近に小口溝が残り、木棺墓であったことがわかる。小口溝は墓坑底の下端から６㎝離れて掘られており、掘り方の上端間の距離は 104 ㎝である。遺物は出土していない。（藤井雅）

土坑墓２（第 18 図、図版５－３）

土坑墓１の西隣に位置する。掘り方の規模は長軸長 182 ㎝、短軸長 66 ㎝で、深さは確認面から 26 ㎝である。小口溝と側板溝が、墓坑底の掘り方の下端に接して掘られていた。小口溝は深さ 18 ㎝と 25 ㎝で、側板溝よりも 10 ㎝以上深く掘削されている。掘り方の上端間の距離は、小口溝間が 146 ㎝で、側板溝間が 38 ㎝である。埋土から器種不明の弥生土器片が出土している。（藤井雅）



第 18 図　土坑墓１・２(1/30)

土坑墓３（第 19 図、図版５－４）

わずかな距離を隔てて土坑墓２・４・８に周囲を囲まれる。掘り方規模は長軸長 192 ㎝、短軸長 72 ㎝で、深さは確認面から 40 ㎝である。両小口に小口溝が、西側では一部で浅い側板溝が認められた。小口溝と側板溝は墓坑底の下端から５㎝と 10 ㎝離して掘られている。小口溝掘り方の上端間距離は、143 ㎝である。遺物は出土していない。（藤井雅）

土坑墓４（第 19 図、図版５－５）

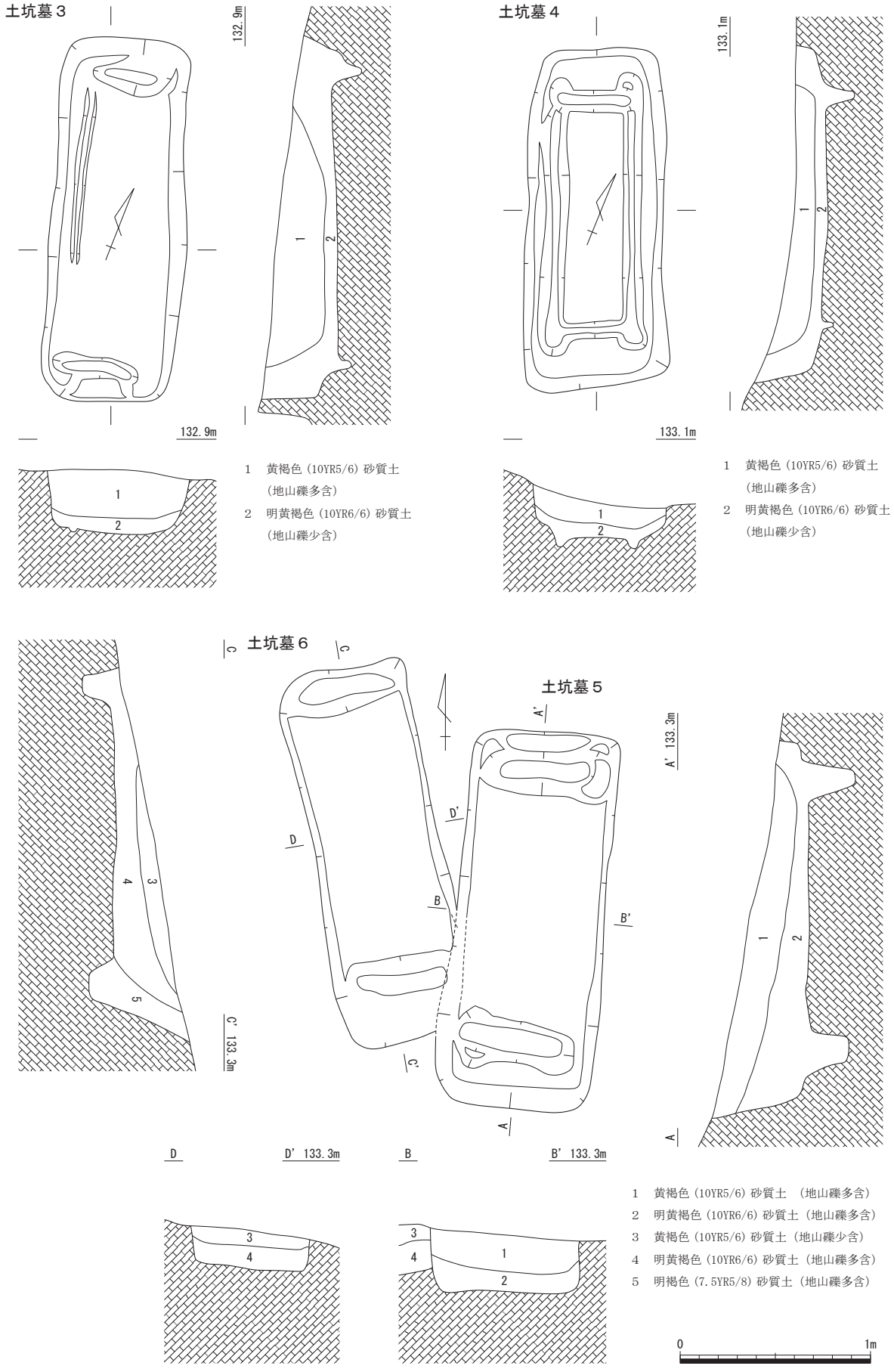
土坑墓３の西隣に近接する。掘り方規模は長軸長 176 ㎝、短軸長 70 ㎝で、深さは確認面から 38 ㎝である。小口溝は下端から 17 ～ 19 ㎝離れて、側板溝は下端から６～８㎝離れて掘られている。側板溝は小口溝を挟み込んでいた。北側の小口溝は側板溝よりも 10 ㎝ほど深くなっていた。掘り方の上端間の距離は、小口溝間が 110 ㎝で、側板溝間が 28 ㎝である。遺物は出土していない。（藤井雅）

土坑墓５（第 19 図、図版５－６）

土坑墓４の西側に位置する。掘り方規模は長軸長 198 ㎝、短軸長 78 ㎝で、深さは確認面から 50 ㎝である。両小口の下端から８㎝と 12 ㎝離れて小口溝が掘られている。小口板の両端付近では側板溝と考えられる掘り込みが認められる。このことから側板で小口板を挟み込む木棺があったと考える。掘り方の上端間の距離は、小口溝間が 119 ㎝で、側板間が 36 ㎝ほどであったと考えられる。埋土からは器種不明の弥生土器片が出土している。（藤井雅）

土坑墓６（第 19 図、図版５－７）

東側の土坑墓５により南東端が切られている。掘り方規模は長軸長 200 ㎝、短軸長 64 ㎝で、深さは確認面から 40 ㎝である。墓坑底の掘り方の下端に接して小口溝が掘られていた。小口溝の掘り方の上端間の距離は、130 ㎝である。遺物は出土していない。（藤井雅）



第 19 図　土坑墓３～６(1/30)

土坑墓７（第 20 図、図版６－１）

土坑墓６の西側に位置する。墓坑の主軸から考えると土坑墓 10・12 などと同じ傾きを指向していたと考えられる。掘り方規模は長軸長 90 ㎝、短軸長 52 ㎝で、深さは確認面から 24 ㎝である。小口溝が掘られており、南側では墓坑底の掘り方の下端に接し、北側では下端から５㎝離れて小口溝が掘られていた。小口溝の掘り方の上端間の距離は、37 ㎝である。遺物は出土していない。　（藤井雅）

土坑墓８（第 20 図、図版６－２）

土坑墓２の南側に位置する。掘り方規模は長軸長 98 ㎝、短軸長 58 ㎝で、深さは確認面から 35 ㎝である。両小口には墓坑底の掘り方の下端から 11 ㎝離れて小口溝が掘られていた。小口溝の掘り方の上端間の距離は、47 ㎝である。遺物は出土していない。　（藤井雅）

土坑墓９（第 21 図、図版６－３）

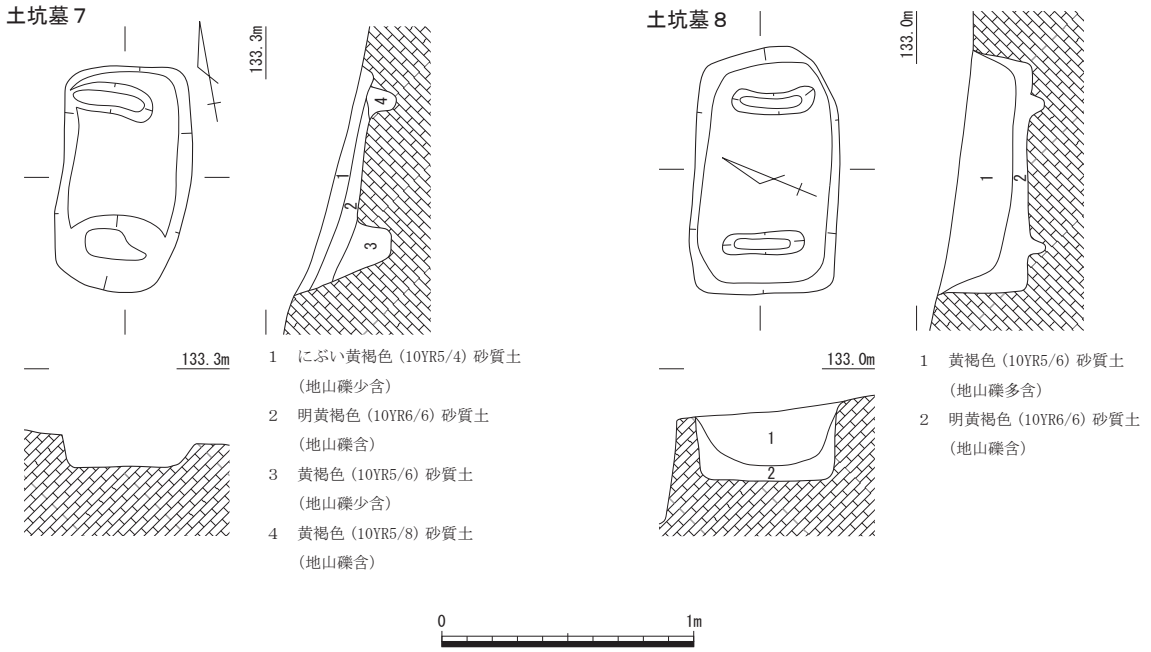
土坑墓群の北西端で土坑墓７の南西側に位置する。掘り方規模は長軸長 88 ㎝、短軸長 50 ㎝で、深さは確認面から 20 ㎝である。両小口の下端から６㎝離れて小口溝があり、側板溝も下端から４㎝ほど離して掘られている。側板溝は湾曲する部分や底面に凹凸が見られる。掘り方の上端間の距離は、小口溝間が 49 ㎝で、側板溝間が 16 ㎝である。図化できないが脚部片が埋土から出土した。（藤井雅）

土坑墓 10（第 21 図、図版６－４）

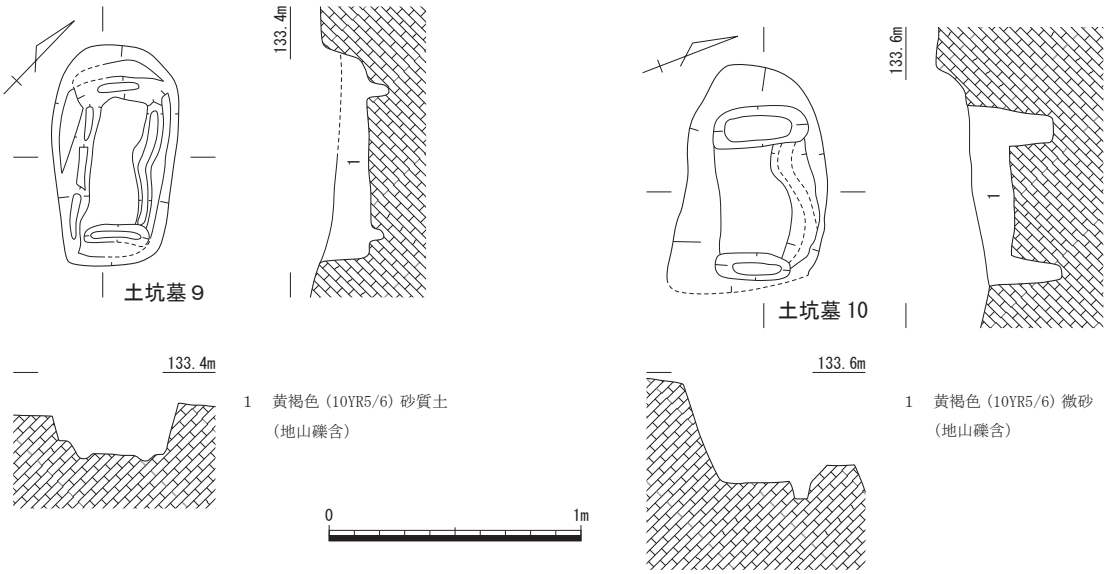
土坑墓群の北西端で土坑墓９の南西側に隣接する。東の小口側の掘り方は検出することができなかった。掘り方規模は残存長軸長 90 ㎝、短軸長 54 ㎝で、深さは確認面から 50 ㎝である。墓坑底の掘り方の下端に接して小口溝が掘られていた。小口溝の掘り方の上端間の距離は、42 ㎝である。北側には湾曲して掘られた側板溝と考えられる溝を検出した。遺物は出土していない。　（藤井雅）

土坑墓 11（第 22 図、図版６－５）

土坑墓７の南側で土坑墓９の東側に位置する。小児墓である土坑墓７・９・10・12 と固まって立地している。また主軸の傾きが隣接する土坑墓６の主軸と垂直であり、配置において両者の関係性が指



第 20 図　土坑墓７・８(1/30)



第 21 図　土坑墓９・10(1/30)

摘できるかもしれない。掘り方規模は長軸長 104 ㎝、短軸長 50 ㎝で、深さは確認面から 32 ㎝である。墓坑底の掘り方の下端に接して小口溝がある。小口溝の掘り方の上端間の距離は、56 ㎝である。北側には墓坑底の掘り方の下端に接して掘られた側板溝を検出した。遺物は出土していない。　（藤井雅）

土坑墓 12（第 22 図、図版６－６）

土坑墓 11 に切られる。隣接する土坑墓 10･13 と同じ主軸の傾きである。掘り方規模は長軸長 102 ㎝、短軸長 64 ㎝で、深さは確認面から 42 ㎝である。墓坑底の掘り方下端に接して小口溝と側板溝が掘られていた。小口溝は側板溝より６～ 10 ㎝深い。掘り方の上端間距離は、小口溝間が 52 ㎝で、側板溝間が 22 ㎝である。遺物は出土していない。　（藤井雅）

土坑墓 13（第 22 図、図版６－７）

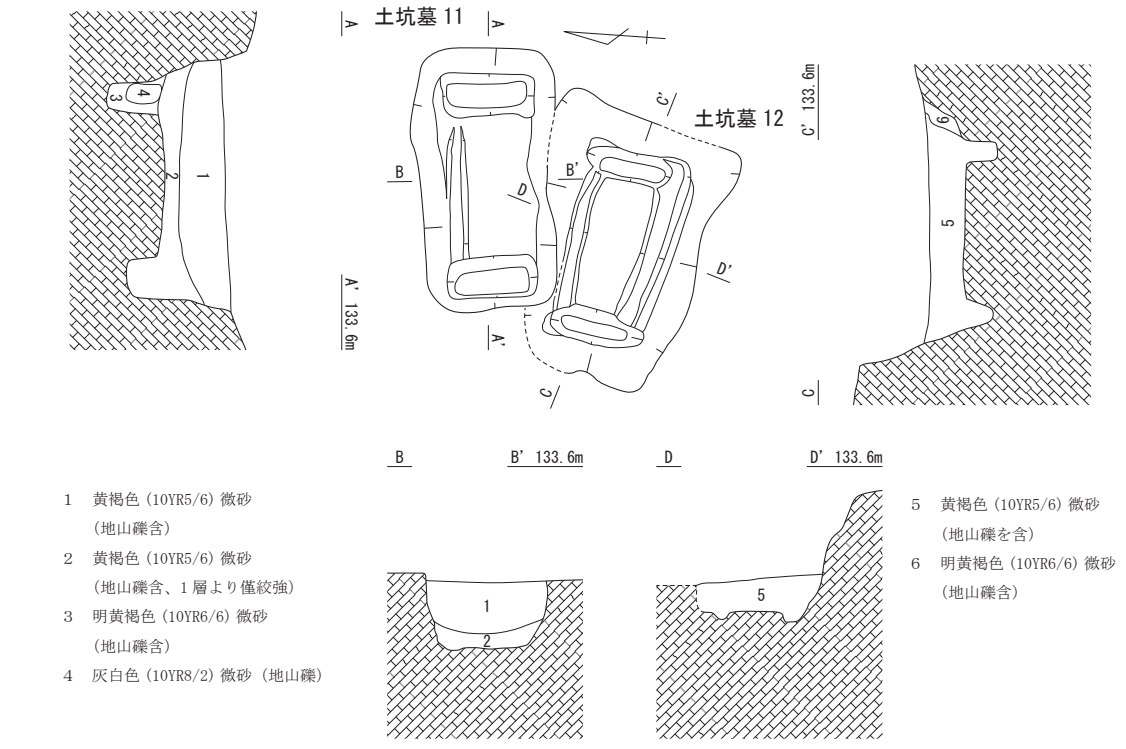
土坑墓群の中央のやや北西寄りに位置する。掘り方規模は長軸長 220 ㎝、短軸長 100 ㎝で、土坑墓群で最も大きな土坑墓である。深さは確認面から 49 ㎝である。墓坑底の掘り方の下端から４～６㎝離れて小口溝が掘られていた。小口溝の掘り方の上端間の距離は､142 ㎝である。埋土からは高杯(16)と考えられる脚部片が出土している。　（藤井雅）

土坑墓 14（第 23 図、図版６－８）

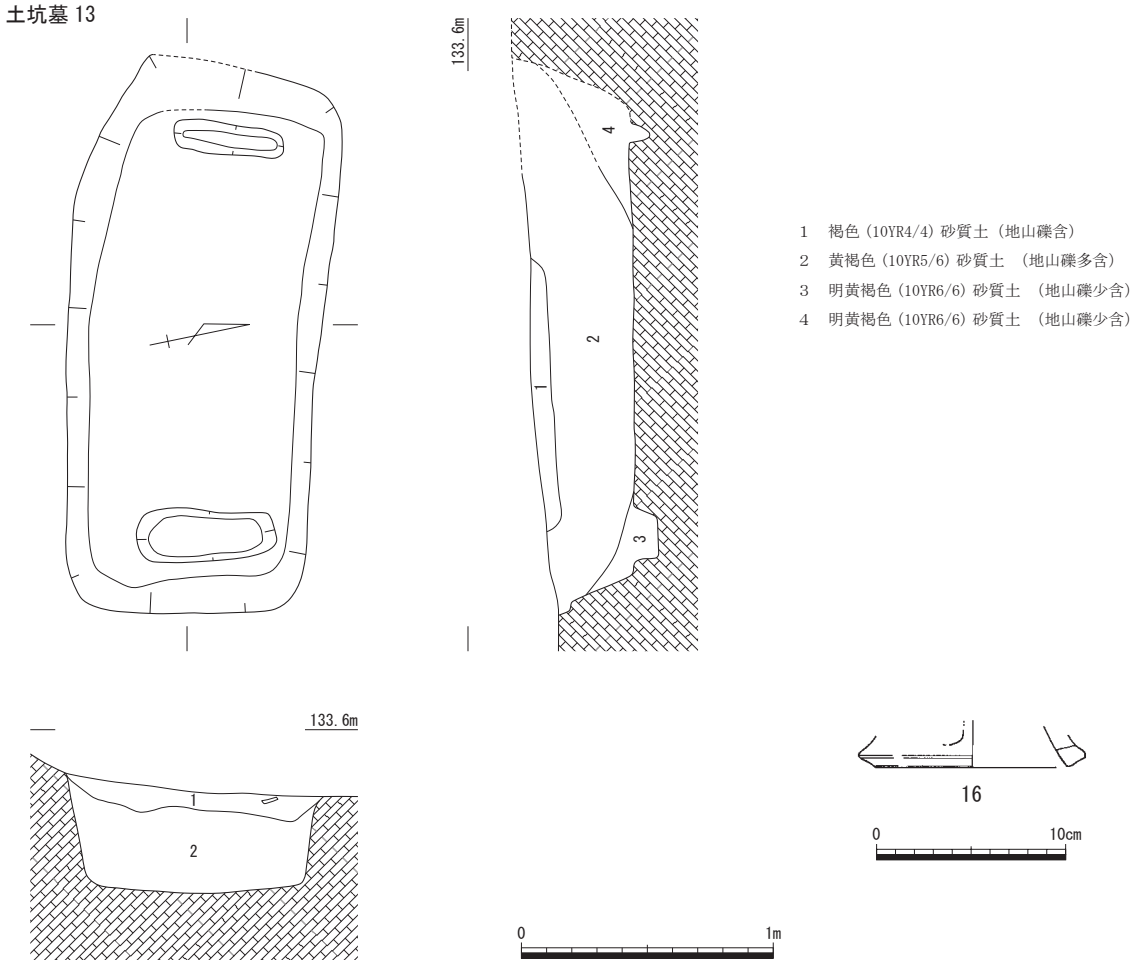
土坑墓群の中央のやや南東寄りに位置する。土坑墓 13 の東に 12.5 ㎝離れて隣接している。掘り方規模は長軸長 112 ㎝、短軸長 65 ㎝で、深さは確認面から 45 ㎝である。小口溝は、西側が墓坑底の掘り方の下端に接しており、東側が下端から９㎝離れていた。小口溝の掘り方の上端間の距離は、38 ㎝である。埋土からは器種不明の弥生土器片が出土している。　（藤井雅）

土坑墓 15（第 23 図、図版６－９・６－ 10）

土坑墓 14 の南東に隣接する。掘り方規模は長軸長 105 ㎝、短軸長 61 ㎝で、深さは確認面から 44 ㎝である。墓坑底の掘り方の下端から８㎝と４㎝離れて小口溝が掘られていた。東側の小口溝は中央よりも両端がやや深くなる。小口溝の掘り方の上端間の距離は、45 ㎝である。側板の木棺痕跡も一部で認められ、痕跡間の距離は 28 ㎝であった。また木棺痕跡から側板は小口板を挟んでいたと考えられる。埋土からは器種不明の弥生土器片が出土している。　（藤井雅）

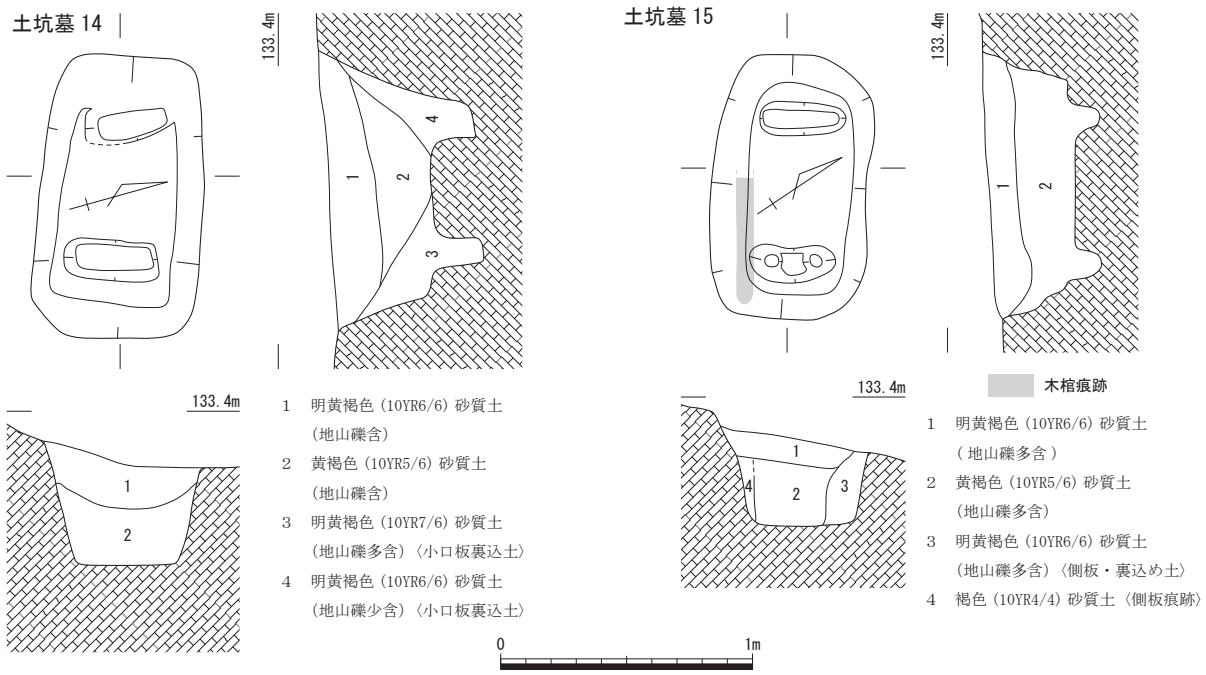


1　黄褐色（10YR5/6）微砂
（地山礫含）
2　黄褐色（10YR5/6）微砂
（地山礫含、１層より僅絞強）
3　明黄褐色（10YR6/6）微砂
（地山礫含）
4　灰白色（10YR8/2）微砂（地山礫）
5　黄褐色（10YR5/6）微砂
（地山礫を含）
6　明黄褐色（10YR6/6）微砂
（地山礫含）



1　褐色（10YR4/4）砂質土（地山礫含）
2　黄褐色（10YR5/6）砂質土　（地山礫多含）
3　明黄褐色（10YR6/6）砂質土　（地山礫少含）
4　明黄褐色（10YR6/6）砂質土　（地山礫少含）

第 22 図　土坑墓 11 ～ 13(1/30)・土坑墓 13 出土遺物 (1/4)



第 23 図　土坑墓 14・15(1/30)

土坑墓 16（第 24 図、図版７－１）

土坑墓14の東に隣接する。掘り方規模は長軸長194㎝、短軸長65㎝で、深さは確認面から56㎝である。西側の小口溝は墓坑底の下端から７㎝ほど離して掘られ、東側は墓坑底の下端に接する部分もあるが６㎝ほど離して掘削されたようである。側板溝は掘り方下端に接して掘られていた。側板溝は深さ５㎝と浅く、西小口では小口溝を挟み込むことが確認できた。掘り方の上端間の距離は、小口溝間が 132 ㎝で、側板溝間が 38 ㎝である。埋土からは高杯（17）と考えられる脚部片が出土している。（藤井雅）

土坑墓 17（第 24 図、図版７－２）

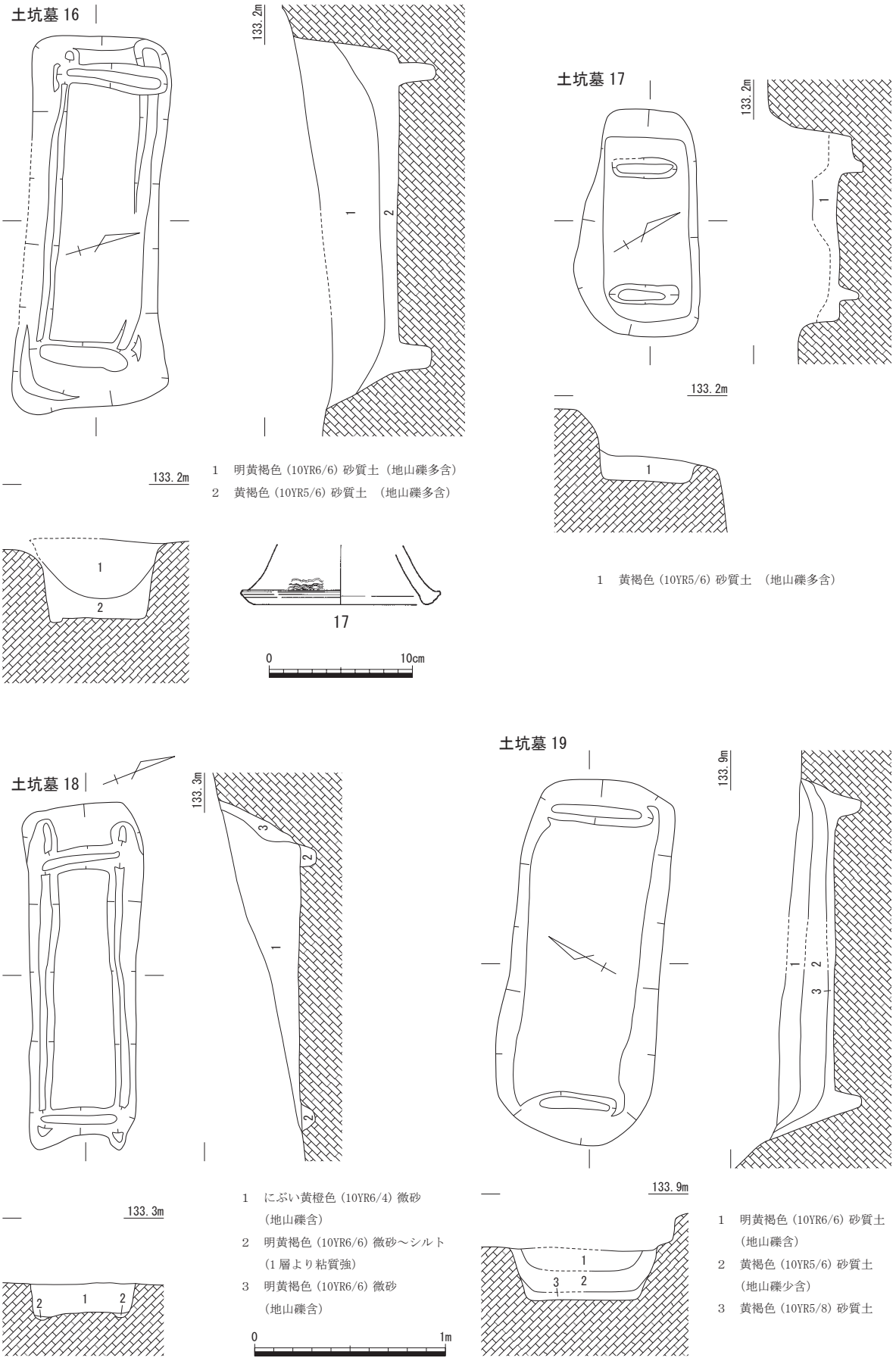
土坑墓 16 と切り合っている。検出できた高さが墓坑底近くであったため、土坑墓 16 との前後関係を確認することができなかった。掘り方規模は長軸長 119 ㎝、短軸長 66 ㎝で、深さは現存する最深部で 35 ㎝である。墓坑底の掘り方の下端から９～ 10 ㎝離れて小口溝が掘られていた。小口溝の掘り方の上端間の距離は、56 ㎝である。遺物は出土していない。（藤井雅）

土坑墓 18（第 24 図、図版７－３）

土坑墓群の南東側に位置する。東側は現代の山道により削平されている。掘り方規模は長軸残存長 173 ㎝、短軸長 56 ㎝で、深さは確認面から 42 ㎝である。小口溝と側板溝は下端に接して掘られている。側板溝は小口溝を挟み込むように掘られて、小口溝より５～６㎝ほど浅い。掘り方の上端間の距離は、小口溝間が 125 ㎝で、側板溝間が 25 ㎝である。遺物は出土していない。（藤井雅）

土坑墓 19（第 24 図、図版７－４）

土坑墓群の南側、土坑墓 18 の西側に位置している。主軸は土坑墓８と同じ向きを意識しているようである。掘り方規模は長軸長 192 ㎝、短軸長 78 ㎝で、深さは確認面から 36 ㎝である。小口溝は墓坑底の掘り方の下端に接して掘られていた。深さは東側が 12 ㎝、西側が 16 ㎝である。小口溝の掘り方の上端間の距離は、140 ㎝である。遺物は出土していない。（藤井雅）



第 24 図　土坑墓 16 ～ 19(1/30)・土坑墓 16 出土遺物 (1/4)

土坑墓 20（第 25 図、図版７－５）

土坑墓群の南端、土坑墓 19 の北西に位置している。土坑墓群の中では最も標高が高い位置にある。主軸の向きは土坑墓５もしくは土坑墓６に近い向きである。掘り方規模は長軸長 210 ㎝、短軸長 65 ㎝で、深さは確認面から 56 ㎝である。墓坑底からは小口溝と側板溝の双方とも認められなかった。埋土からは器種不明の弥生土器片が出土している。（藤井雅）

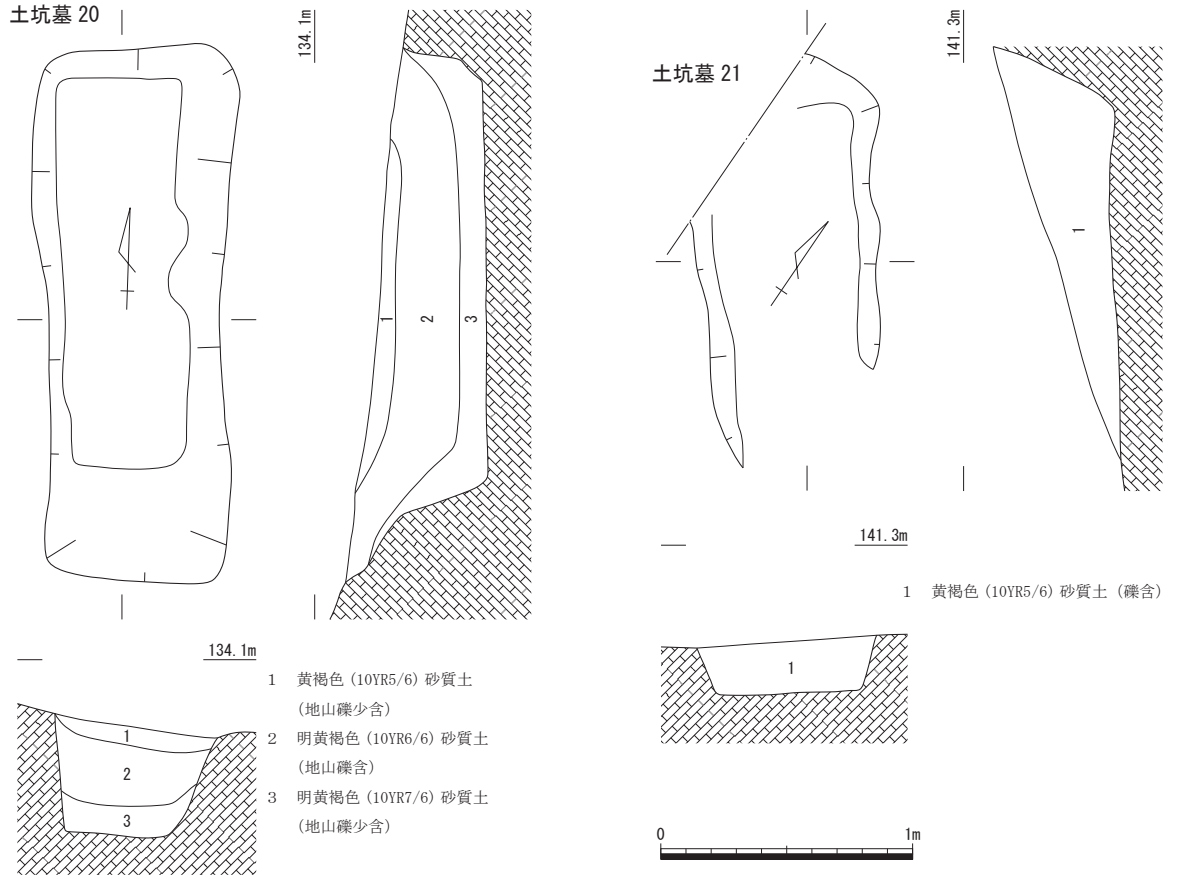
土坑墓 21（第 25 図、図版７－６）

他の土坑墓とは離れた調査区南西に１基単独で立地する。北西端は調査区外に続いており、斜面下方側の南東側の小口は自然流出により消失していた。掘り方規模は残存長軸長 162 ㎝、短軸長 72 ㎝で、深さは最深部で 47 ㎝である。墓坑底からは小口溝と側板溝の双方とも認められなかった。遺物は出土していない。（藤井雅）

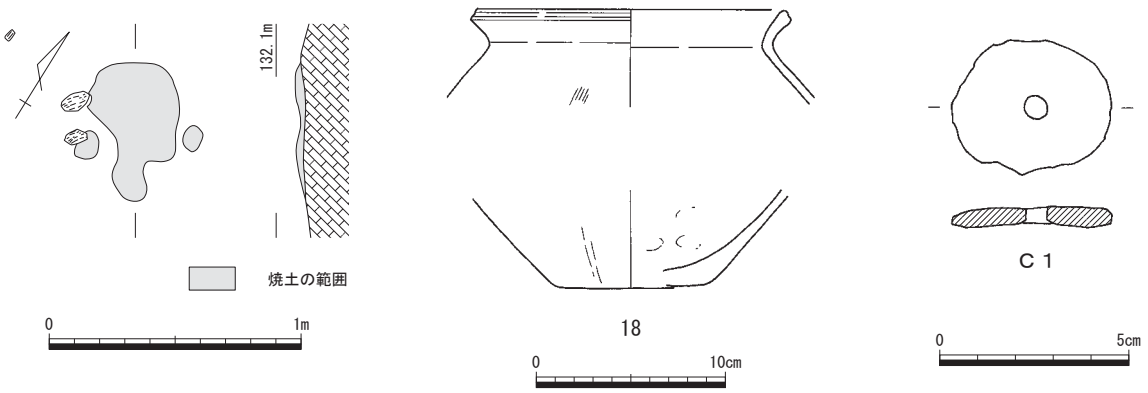
４　被熱痕跡

被熱痕跡１（第 26 図、図版７－７・９）

調査区北東端で土坑墓群の北東側の平坦部分、標高 132 ｍに位置する。この地点は平坦で表土・包含層除去中にも 30 ～ 70㎝大の礫が点在していたため、遺構の可能性を考えて検出を行ったが、被熱痕跡１と石列２以外には明瞭な遺構は確認できなかった。被熱痕跡は地山直上で赤黒い色調を示す。周辺からは図示以外に甕形土器口縁部片など弥生土器が 400g ほど出土し、弥生時代中期中葉～後葉の時期にあたる。（氏平）



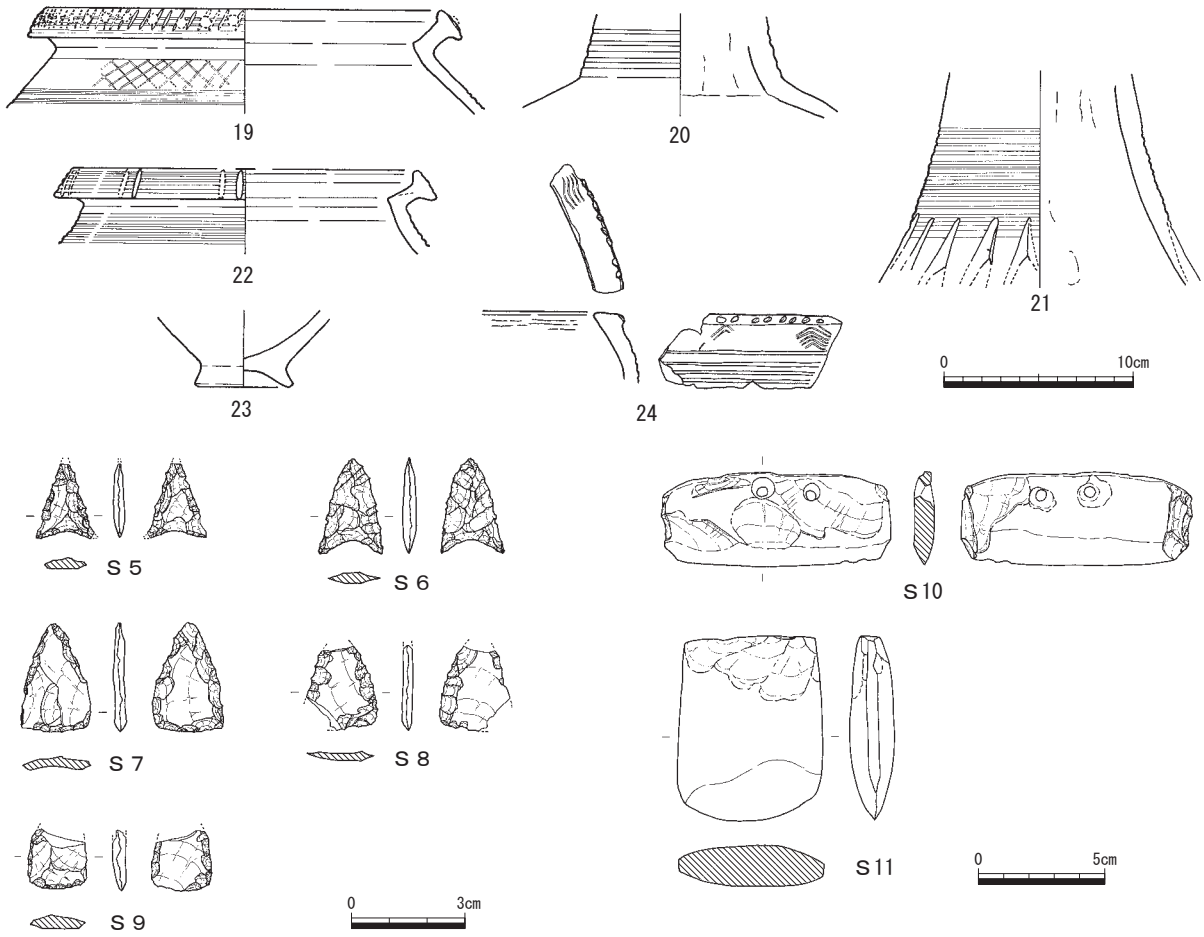
第 25 図　土坑墓 20・21(1/30)



第 26 図　被熱痕跡１(1/30) とその周辺の出土遺物 (1/4・1/2)

５　遺構に伴わない遺物

遺物は、調査区中央から調査区北～西側境までの包含層で、特に段状遺構４から比熱痕跡１の間を掘削中に検出したものが多い。出土位置は、20 ～ 23・Ｓ６・Ｓ７は調査区頂部で段状遺構４付近、Ｓ５は段状遺構２と３の間、19・24・Ｓ 10 は段状遺構２と３の間の調査区西側境、Ｓ 11 は段状遺構１北西の調査区境出土で、Ｓ８・Ｓ９は段状遺構７混入である。時期としては、ほぼ弥生時代中期に相当する。　（氏平）



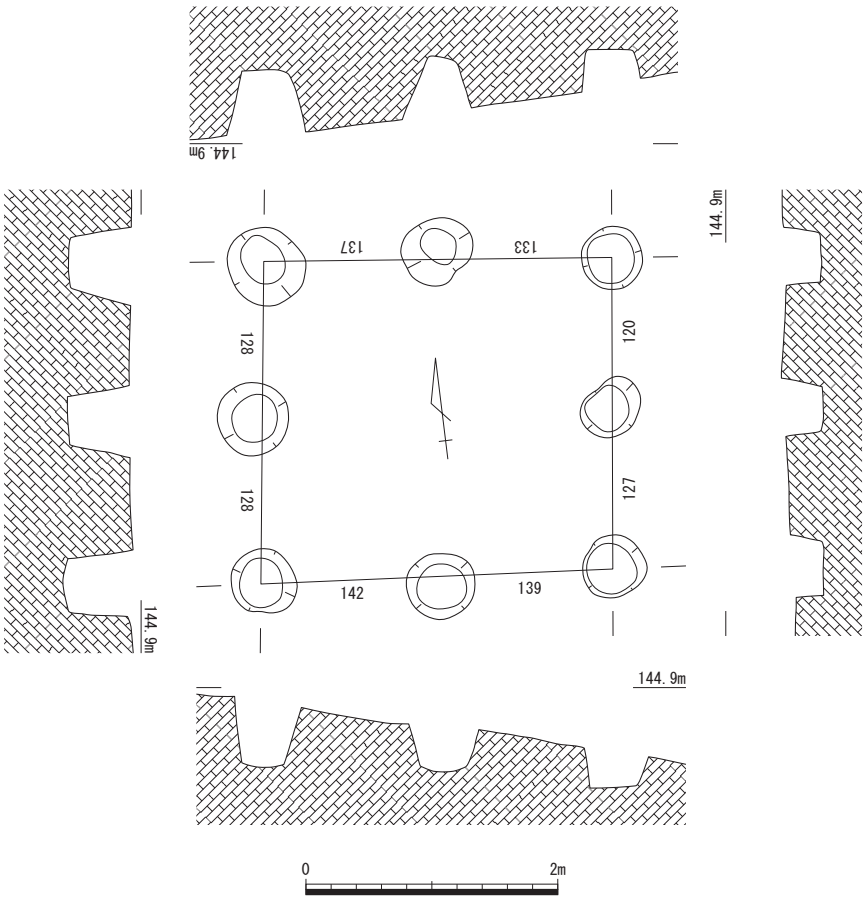
第 27 図　遺構に伴わない遺物 (1/4・1/3・1/2)

第３節　古墳時代以降の遺構・遺物

１　掘立柱建物

掘立柱建物１（第 28 図、図版８－１）

調査区内最高所の標高 144 ～ 145 ｍの緩斜面に位置する。２×２間で棟方向は真北を志向する。柱穴列１と重複するが、建物１を先に検出できたため建物１の方が新しい可能性が高い。柱穴の掘り方は平面が直径 48 ～ 60cm の円形、断面が方形で、埋土はにぶい黄橙色の単層で柱痕跡は認められなかった。柱穴内からは須恵器甕胴部片や土師器片が出土しており、古墳時代後期に埋没したものと思われる。（氏平）

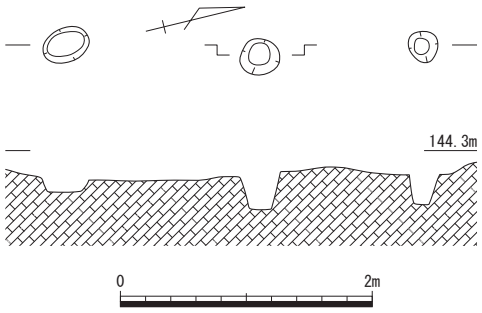


第 28 図　掘立柱建物１（1/60）

２　柱穴列

柱穴列１（第 29 図、図版８－３）

調査区内最高所で建物１と重複するが、建物１よりも後に検出できたためそれより古い可能性が高い。柱穴の掘り方は平面が直径 24 ～ 38cm の円～楕円形、埋土は単層で柱痕跡は検出できなかった。（氏平）

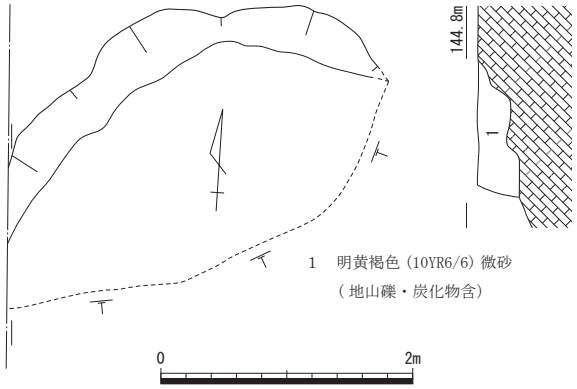


第 29 図　柱穴列１（1/60）

３　段状遺構

段状遺構６（第 30 図）

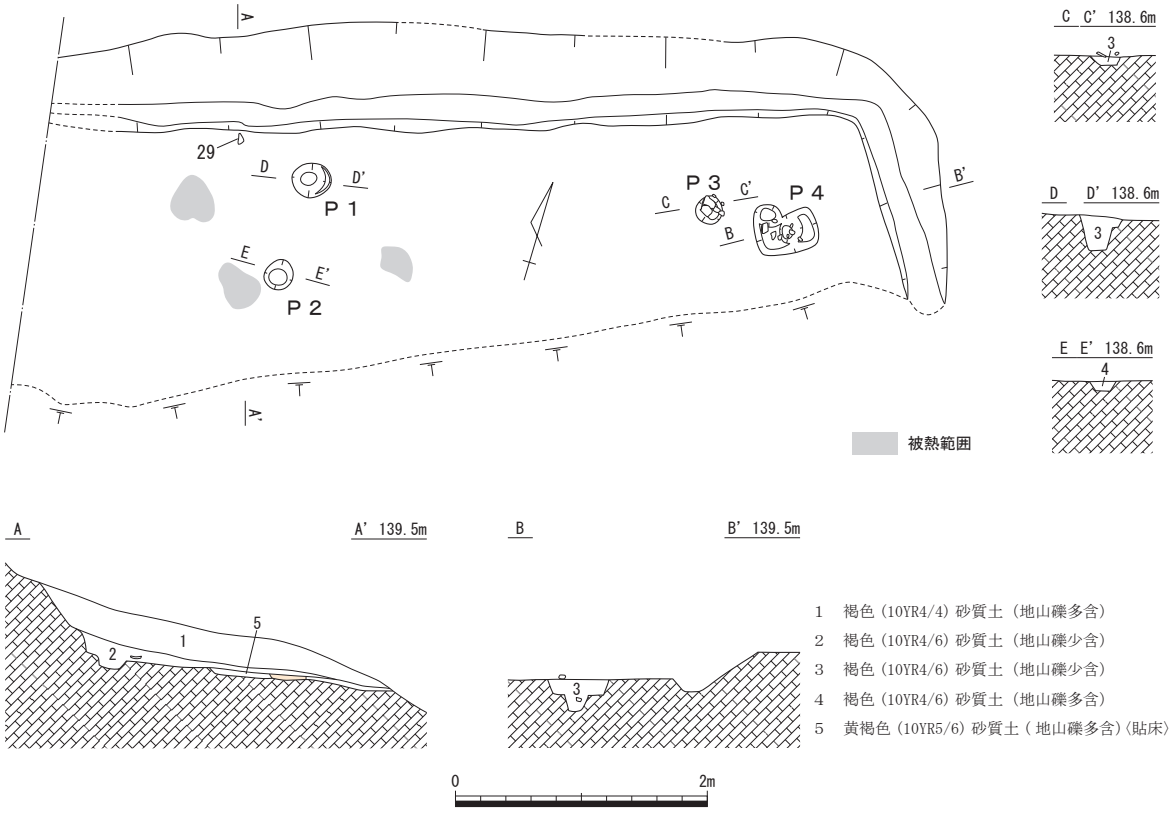
調査区西境で最高所に近い、標高 144.7 ｍの緩斜面に位置する。南～東側は現在の山道で切断されるが、東側は山道とは関係なく流失していた。床面の形状は、断面計測位置の形状とは異なり平坦であった。出土遺物は土師器、須恵器甕胴部片が 100g ほどあり、古墳時代後期に埋没したのであろう。　（氏平）



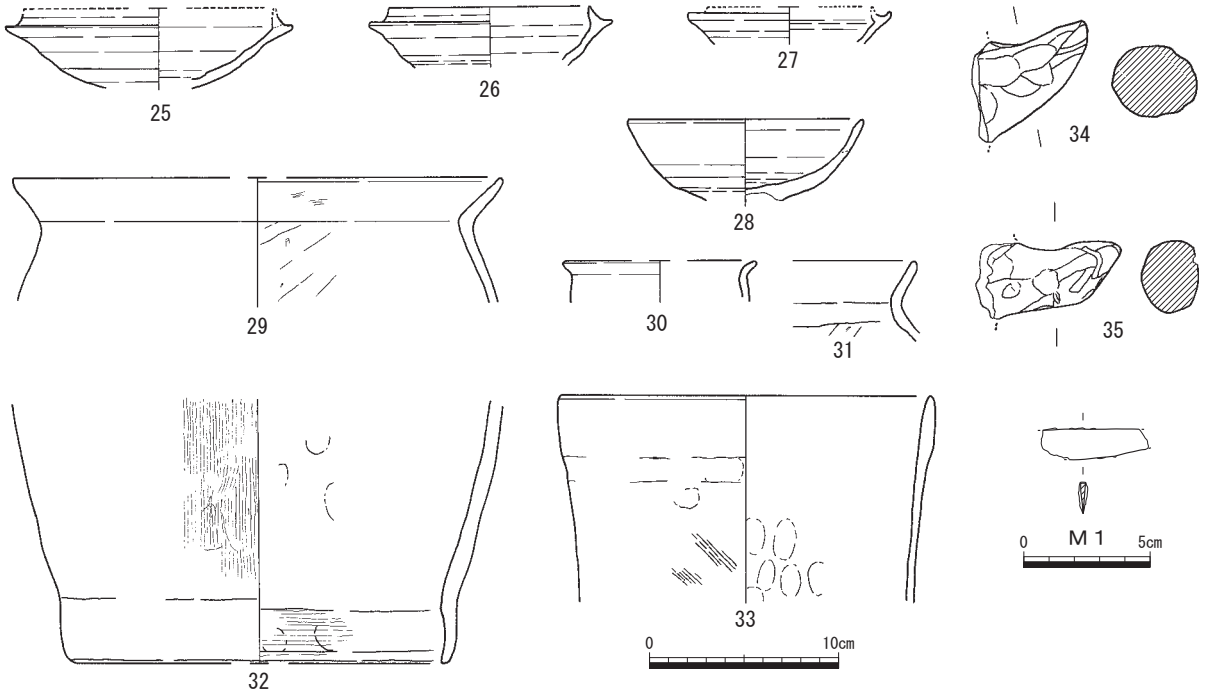
第 30 図　段状遺構６(1/60)

段状遺構７（第 31・32 図、写真５・６、図版８－２・９）

調査区南西端で標高 139 ｍの南向き斜面に位置する。調査区内では東西 6.4 ｍ分を検出したが、西側は調査区外へ伸び、南側は急激に下がる地形となっており削平されている。表土から床面までは最大で 1.1 ｍの深さで埋没し、埋土は地山に似る褐色土である。床面で壁体溝、ピット、貼り床、被熱面と土器集中部分を検出した。壁体溝は底面の幅が 10 ～ 20cm を測る。ピットはＰ１～Ｐ４で、直径は最小がＰ３の 22cm、最大がＰ４の 50cm で、深さはＰ１では最大 28cm を測る。貼り床層は床面南側に５cm の厚さで残るが、地山層に酷似するため平面では認識が難しかった。被熱面は全体が赤褐色を呈し、検出面から５cm の深さで熱影響が残っていた。土器集中部分はいずれも東端のＰ３・Ｐ４上



第 31 図　段状遺構７(1/60)



第 32 図　段状遺構７出土遺物 (1/4・1/3)



写真５　段状遺構７調査風景（東から）



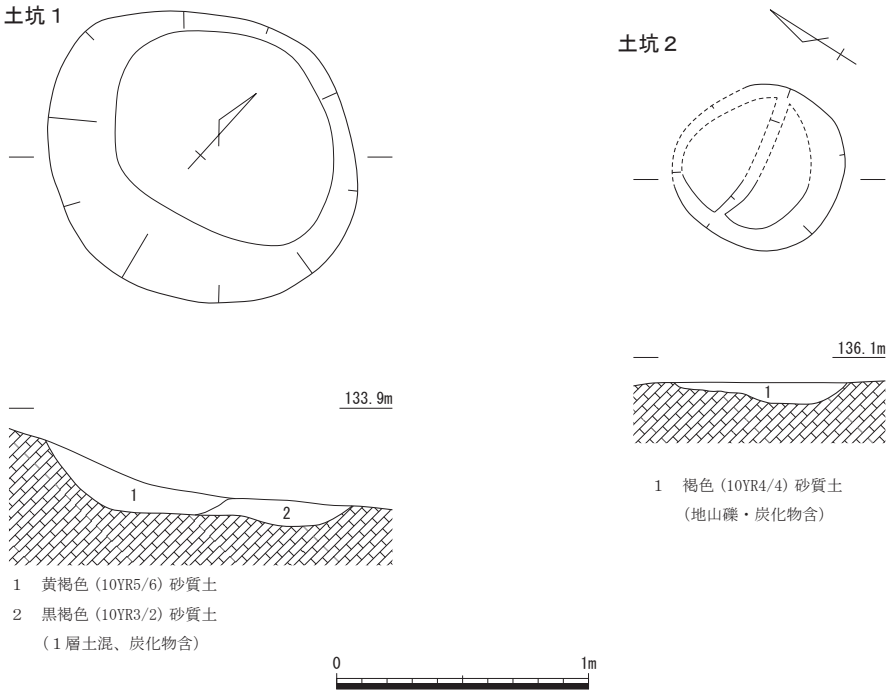
写真６　段状遺構７遺物出土状況（南東から）

で検出した土師器片で、掲載できたものでは 33 がＰ３、34 がＰ４上部からの出土である。出土遺物は図示以外に土師器、須恵器片が約 3.6kg、鉄滓が約 1.7kg と炉壁片４点がある。須恵器杯身 (25 ～ 27) の身が深くなる傾向と無蓋高杯 (28) の形状から６世紀末～７世紀前半が遺構の埋没した時期と言える。　(氏平)

４　土坑

土坑１（第 33 図）

調査区北東部の弥生時代土坑墓群の上側で検出した。埋土は灰色の色調を呈し、地山や弥生時代土坑墓群と明らかに異なるため容易に区別がついた。埋土の下層は炭化物を含み、色調は濃い灰色を表している。遺物が出土していないが、道１と同じ時期と考えられる。　(氏平)



第 33 図　土坑１・２(1/30)

土坑２（第 33 図）

調査区北東部の道１北側に接して検出した。埋土は地山に似るが炭化物を含み、一部には炭化物を層状に含む部分が存在する。遺物は見られなかったが、これも道１と同時期の可能性が高い。（氏平）

土坑３（第 34 図、図版８－４）

調査区南部の西側で、土坑４～６の近くで検出した。埋土は地山に似る均質な褐色土である。掘り方は東西に長く深さが最大 10cm で、斜面上方側は明確ではなく、下方側は流失していた。遺物は検出できなかったが、埋没時期は土坑５と同時期の古墳時代後期と見てよいだろう。（氏平）

土坑４（第 34 図）

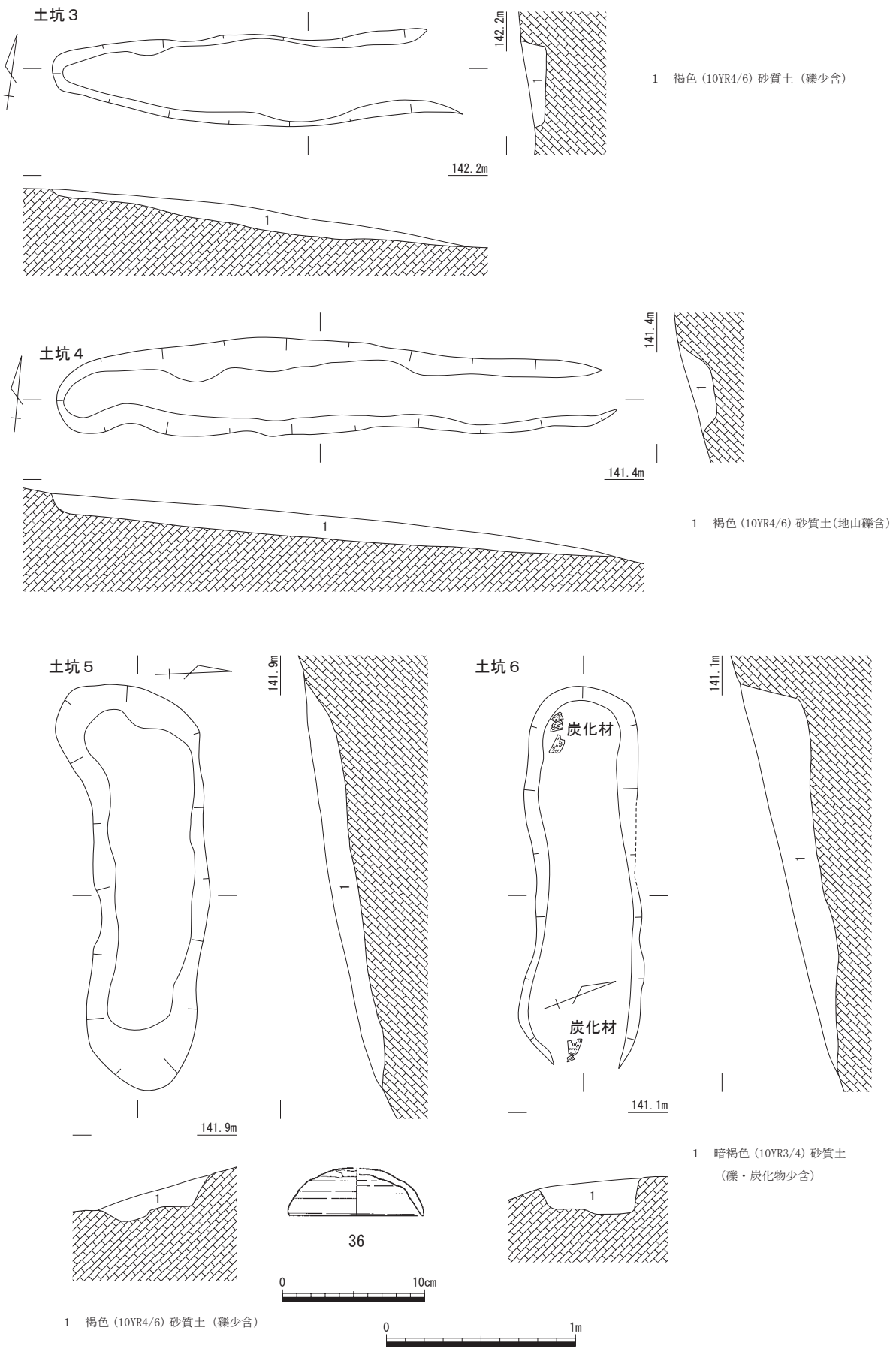
調査区南部の西側で、土坑３の東下方に検出した。埋土は地山に似る均質な褐色土である。残存状況はあまりよくなく、斜面下方側は流失する。土坑３と長軸が直線上に並び、形状と埋土が似るためこの２つを併せて道である可能性を考えたが、現状では明確な根拠はないため別々の遺構として扱った。遺物は土師器かと思われる小片だけで、埋没時期は古墳時代後期と考えられる。（氏平）

土坑５（第 34 図、図版８－５）

調査区南部の西側で、土坑３と６の間に検出した。埋土は均質な褐色土である。残存状況は底面に凹凸が目立ち、西端が下方へ折れることから段状遺構の壁体溝の可能性もある。遺物は土器が土師器片と、須恵器が杯蓋 36 と口縁小片が見られ、鉄滓１点と炉壁２点も出土している。出土遺物から、埋没時期は７世紀前半が妥当であろう。（氏平）

土坑６（第 34 図、図版８－６）

調査区南部の西側で、土坑５の南側に検出した。埋土は地山に似る褐色土で、炭化物を含む。また、埋土中底面から 10 ～ 17cm 上で、長さ５～ 10cm 大の炭化材を検出している。底面は凹凸があるように掘削できたが、埋土と地山の区別が困難であったためで、本来の形状かどうかは疑問が残る。遺物は須恵器・土師器の小片で、埋没時期は古墳時代後期と考えられる。（氏平）

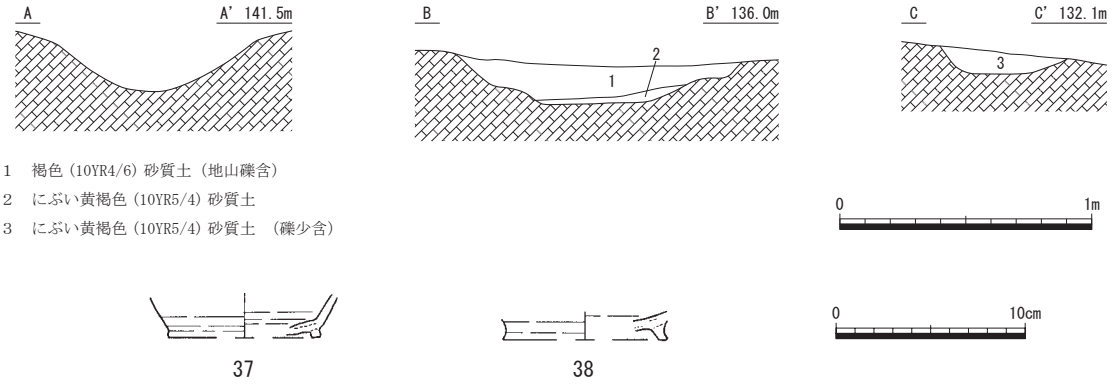


第 34 図　土坑３～６(1/30)・土坑５出土遺物 (1/4)

５　道

道１（第８・35 図）

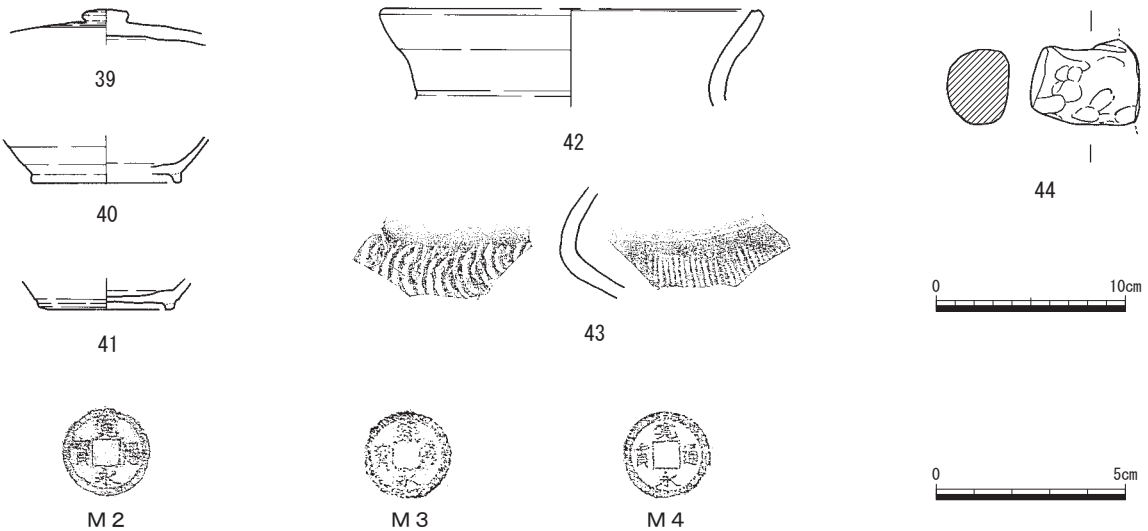
調査区中央西端から調査区内を通る溝として検出し、土坑墓群までで 320 ｍを測る。調査区北端までつなぐと調査区内の全長は 520 ｍとなる。土坑２周辺から土坑墓群まででは（B-B’断面参照）、埋土は粗砂・礫混じりで、底面の地山との境が青っぽい色調を帯びる。出土遺物は須恵器杯身底部が３点と土師器小片、鉄滓６点である。遺物からは９世紀前半に埋没した可能性が高い。　（氏平）



第 35 図　道１（1/30）・出土遺物（1/4）

６　遺構に伴わない遺物

39 は土坑２より北側で表土除去後、40 は段状遺構７付近、41 は建物１東側～道１付近、42・44 は建物１東側、43 は道１北端付近からの出土である。39 ～ 43 は総じて道１と同じ９世紀前半に該当しそうだ。また、遺物観察表の通り調査区全域の包含層から鉄滓・炉壁が出土している（勝負峪遺跡鉄滓一覧）。Ｍ２～Ｍ４の寛永通宝は、段状遺構６と竪穴住居１の間を通る現在の山道のすぐ南側で、標高約 140 ｍ付近の包含層から同じ日に相次いで出土した。なお、その周囲に近世墓は確認されていない。　（氏平）



第 36 図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2）

第４章　桑山遺跡

第１節　遺跡の概要

桑山遺跡は、標高約 290 ｍの嵯峨山から吉井川の支流である皿川が形成した平坦地に向かって樹枝状に伸びる尾根の先端に位置する（第２図）。調査前の地形は、調査区南側に畑地造成に伴う削平段があり、それ以南が傾斜 20° 前後の緩斜面となっている一方で、削平段より北側は傾斜 25° 前後を測る急な斜面であった（第 37 図）。

遺跡の種別は、尾根筋及びその南西側斜面地に営まれた弥生時代から中世にかけての集落跡と飛鳥時代以降の生産遺跡である。検出した遺構は、弥生時代中期の竪穴住居４軒と段状遺構３面、飛鳥時代以降の竪穴住居２軒、段状遺構４面、土坑７基、土器棺墓１基、土坑墓１基、炉１基、製炭窯１基、粘土採掘坑２基、溝２条で、これらは斜面下方側が自然流出により消失しているものが多い。古墳築造や畑地造成によって削平を受けている可能性もあるものの、弥生時代の遺構は標高 128 ｍより上方のみで検出されている。古墳時代にはこの場所は墓域（桑山１～４号墳）となるが、飛鳥時代以降、小規模な集落が展開する。その際には桑山１・２号墳墳丘の削平や周溝の埋め立てなどの地形改変が行われたようである。　（小嶋）

第２節　弥生時代の遺構・遺物

１　竪穴住居

竪穴住居１（第 38 図、写真９、図版 10 －１・10 －２・22）

調査区最高所付近の南東向き斜面に位置する竪穴住居で、平面形は一辺約４ｍの方形を呈する。床面の周縁には壁体溝がめぐるが、南西辺については検出されなかった。柱は４本で、それぞれ住居床



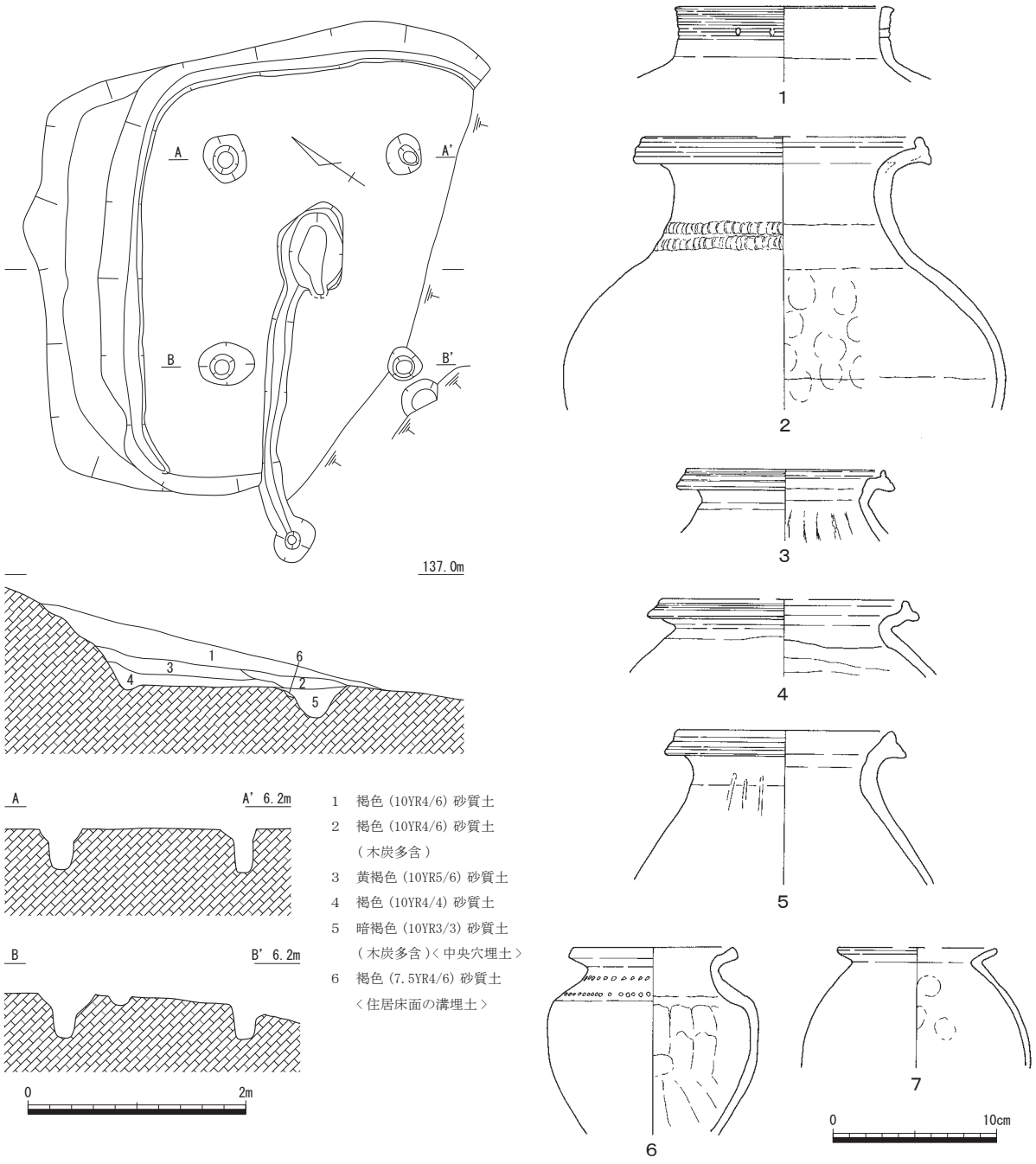
写真７　１～３区調査前風景（南から）



写真８　竪穴住居４周辺調査風景（東から）



第 37 図　遺跡全体図（1/400）



第 38 図　竪穴住居 1(1/60)・出土遺物（1/4）

面から深さ 40cm 前後の柱穴を穿っている。床面中央には長径約 90cm、深さ約 26cm を測る楕円形の穴が認められ、埋土には木炭が多く含まれていた。その中央穴から南西方向に向けて１条の溝が認められ、住居外まで伸びており、その末端はピット状に深くなっている。この溝と中央穴との関係については、溝の埋土を中央穴が切っており、最終的な中央穴の掘削時点では、溝は埋没していたことが

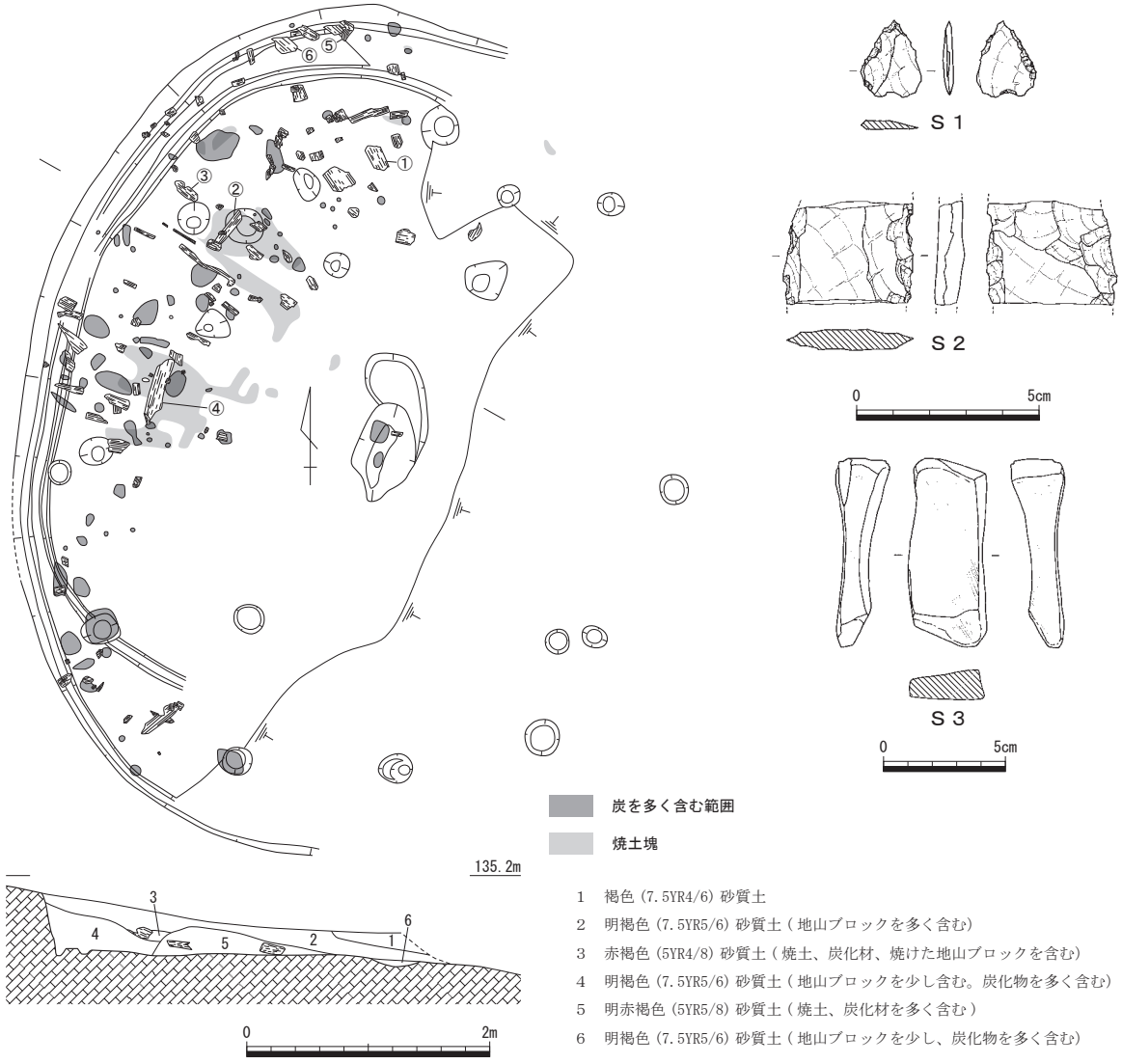


写真９　竪穴住居１遺物出土状況（南西から）

分かる。床面上からは弥生土器片や礫が出土しており、土器の特徴から中期後葉に位置づけられる住居と考えられる。（尾上）

竪穴住居２（第 39 ～ 41 図、写真 10・11、図版 11・12 － 1 ・22・24）

桑山４号墳の直下で検出した。東側の約半分は流失している。二重の壁体溝と柱穴の配置から、1 度建て替えて拡張されたようである。住居内からは住宅部材と考えられる炭化材が検出でき、その上には焼土が認められた。炭化材はすべて板状であり、多くは２㎝以下の薄いものであった。炭化材⑤は幅 16 ㎝、厚さ６㎝で壁体溝の上に立った状態で出土し、板目材を使用した壁材と考えられる（写真 10・11）。樹種は炭化材同定の結果すべてがクリと同定され（第６章第１節）、使用部位にかかわらずクリが用いられている。炭化材の上には茅は認められず、土壌分析結果からも堆積物の内容を知ることはできなかった（第６章第１節）が、炭化材の中には厚み５㎜以下の脆いものも多くあり、その中に茅が含まれていた可能性もある。炭化材や焼土、床面の被熱範囲は住居中心部では少なかった。また焼土や被熱痕跡の範囲は倒れた建築部材があった所を示すように見受けられる。柱穴の埋土は第 39 図の６層に似る。残存している周堤溝の南端部は旧表土直下で検出し、周堤溝の南側が消失した後に古墳築造前の旧表土が形成されたことがわかる。時期は中期後葉と考えられる。（藤井雅）



第 39 図　竪穴住居２（1/60）・出土遺物（1/3・1/2）



第 40 図　竪穴住居２(1/60)



写真 10　竪穴住居２北壁炭化材（南東から）

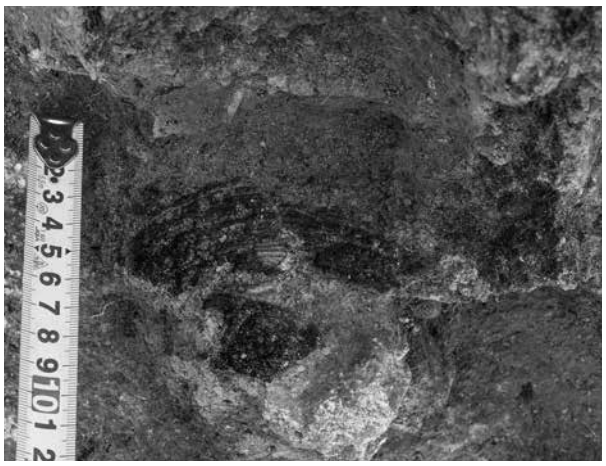
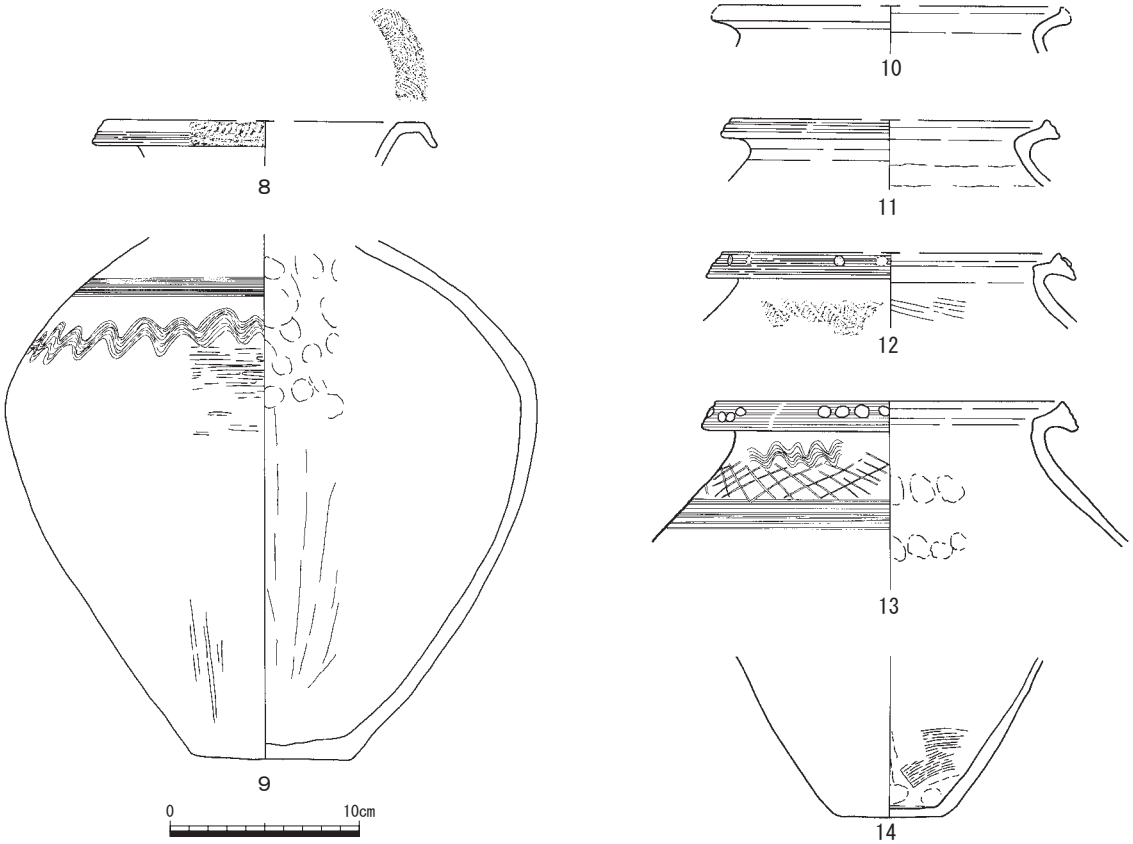


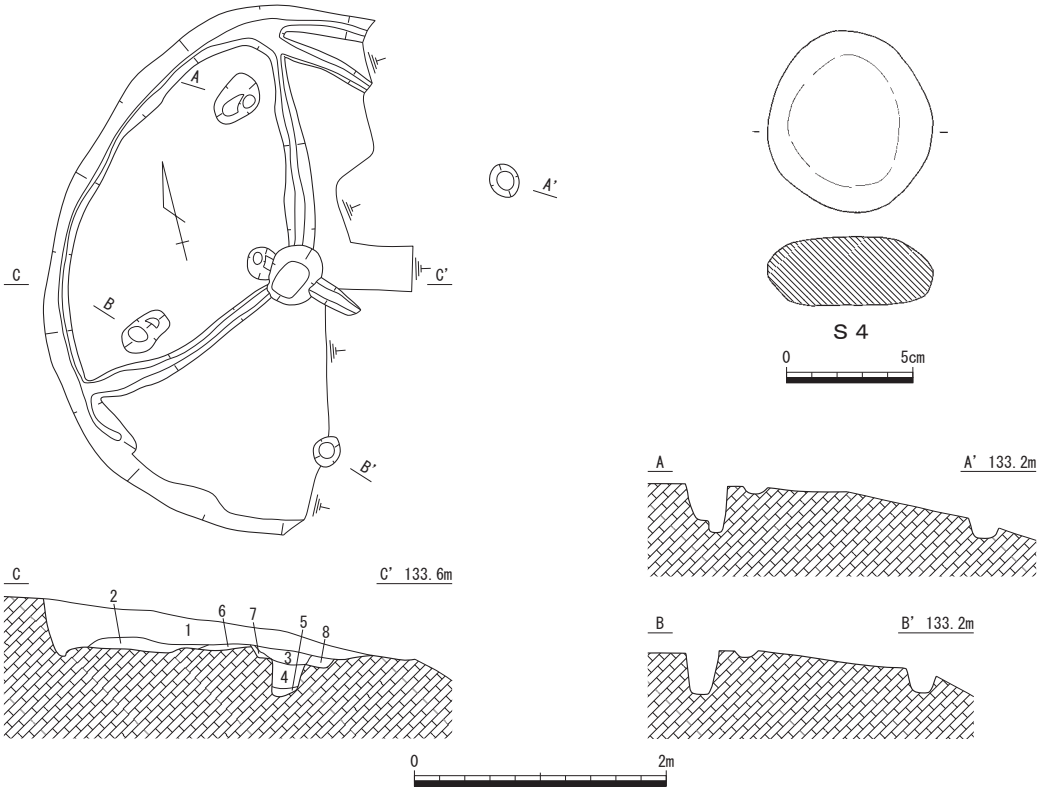
写真 11　竪穴住居２炭化材⑤木口面（南東から）



第 41 図　竪穴住居２出土遺物 (1/4)

竪穴住居３（第 42 図、写真 12、図版 10 － 3）

桑山３号墳の東側で、周溝に接するように検出された竪穴住居で、南東向きの斜面部にあたる。平面形は直径約 4.2 ｍの円形で、東側約半分を流失している。床面の周縁には壁体溝がめぐるが、南側は途切れている。柱は４本で、それぞれ住居床面から深さ 40cm 前後の柱穴を穿っている。床面中央には長径約 50cm、深さ約 30cm を測る楕円形の穴が認められ、埋土には木炭や焼土粒が含まれていた。その中央穴から放射状に３条の溝が伸び、機能は不明ながら室内をほぼ３等分する間仕切り状をなしている。住居内から閃緑岩製の磨石（**Ｓ４**）１点が出土している。出土遺物から時期を決定することは困難であるが、周辺の弥生時代遺構と同様に中期後葉と考えられる。　（尾上）



1　明褐色（7.5YR5/6）砂質土（炭粒含）
2　褐色（7.5YR4/6）砂質土（炭粒含）
3　褐色（10YR4/6）砂質土
4　黄褐色（10YR5/6）砂質土（炭粒含）
5　褐色（7.5YR4/6）砂質土（炭化材、炭粒、焼土粒含）
6　暗褐色（10YR3/4）砂質土（炭粒、焼土粒多含）
7　褐色（10YR4/4）砂質土＜住居内溝埋土＞
8　褐色（10YR4/4）砂質土＜住居内溝埋土＞

第 42 図　竪穴住居３（1/60）・出土遺物（1/3）

竪穴住居４（第 43 ～ 45 図、写真８・13、図版 12 － 2・12 － 3・22・24）

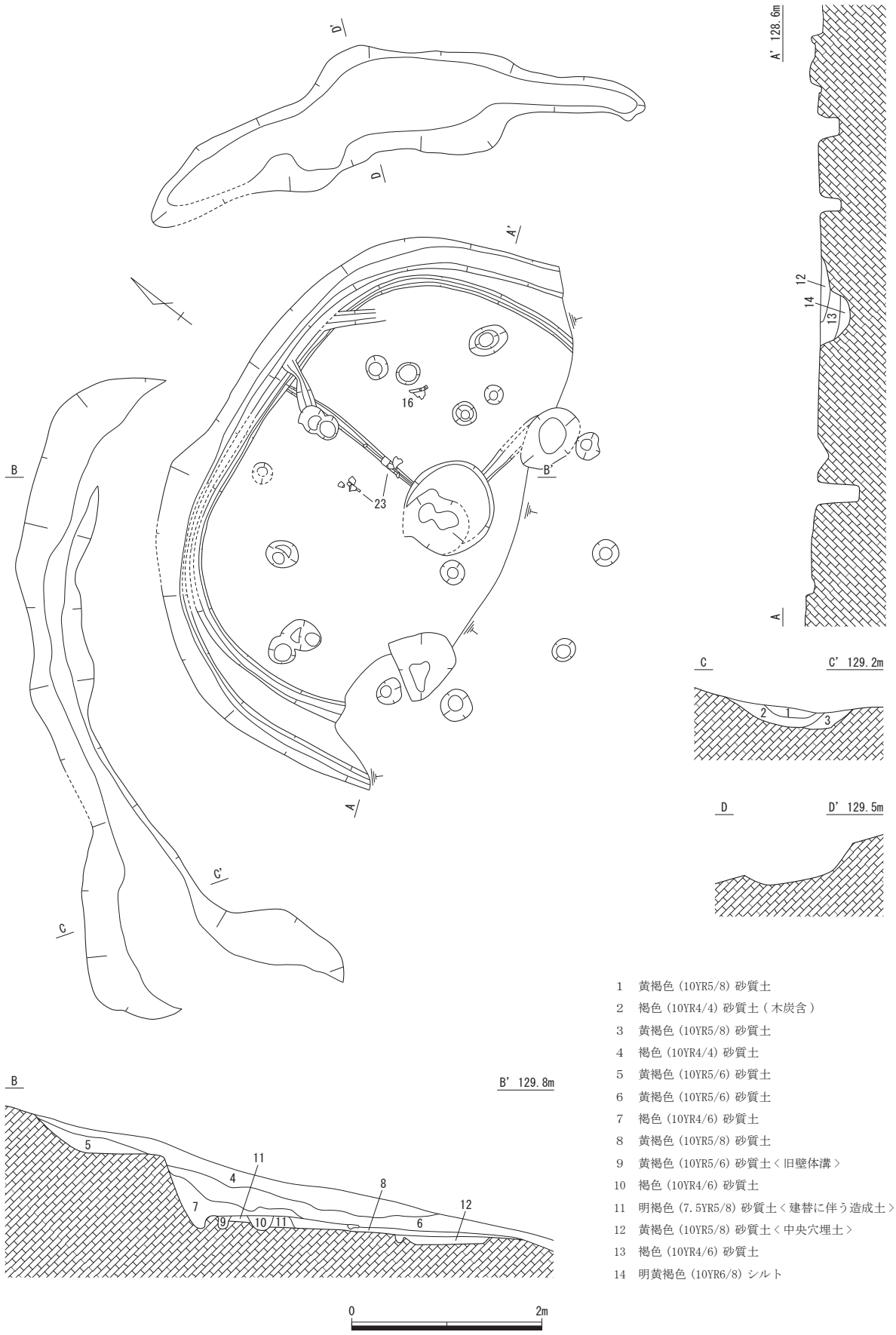
桑山２号墳と桑山３号墳の間の南東向きの斜面部に位置する。平面は円形で、南側の約半分が流失している。二重になった壁体溝と床面上を通る溝の関係から、住居を拡張する建て替えが１度行われたことが確認された（第 44 図）。新段階の床面の溝は旧段階の溝より 10 ㎝程高い位置で検出し、新段階では床面が高くなったと想定できる。この溝は深さが新旧段階双方とも２～４㎝ほどの深さで極めて浅いことから、排水溝の用途よりは間仕切りとしての用途が推測される。住居内の出土遺物は、弥生土器は壺（15 ～ 18）、甕（19 ～ 24）、高杯（25 ～ 27）が、石器は磨製石剣を分割し再加工した用



写真 12　竪穴住居３作業風景（南東から）

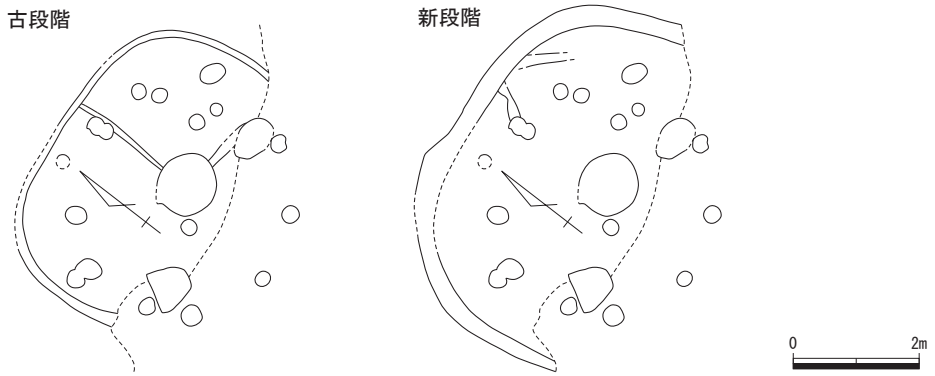


写真 13　竪穴住居４作業風景（北西から）

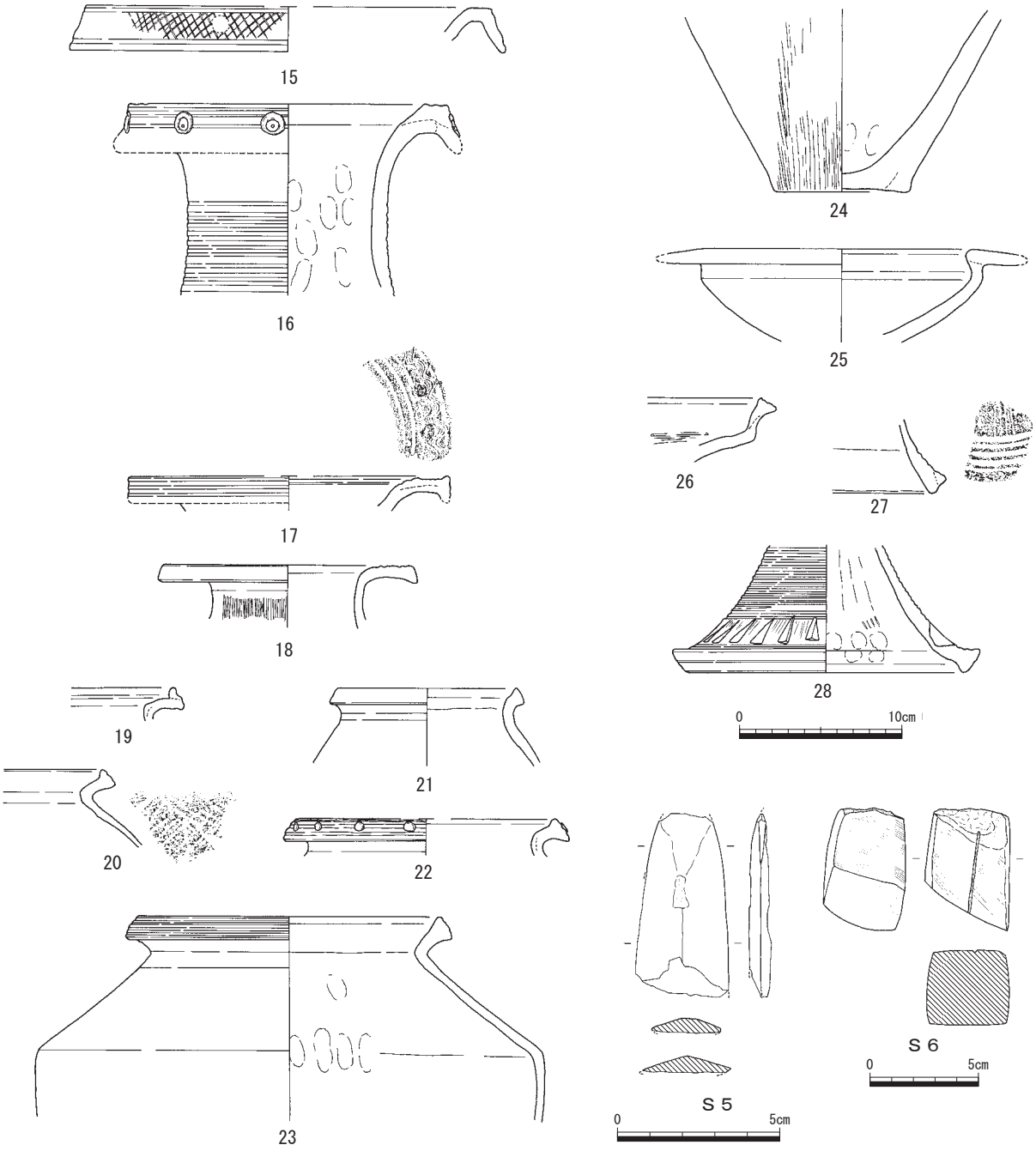


1　黄褐色（10YR5/8）砂質土
2　褐色（10YR4/4）砂質土（木炭含）
3　黄褐色（10YR5/8）砂質土
4　褐色（10YR4/4）砂質土
5　黄褐色（10YR5/6）砂質土
6　黄褐色（10YR5/6）砂質土
7　褐色（10YR4/6）砂質土
8　黄褐色（10YR5/8）砂質土
9　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜旧壁体溝＞
10　褐色（10YR4/6）砂質土
11　明褐色（7.5YR5/8）砂質土＜建替に伴う造成土＞
12　黄褐色（10YR5/8）砂質土＜中央穴埋土＞
13　褐色（10YR4/6）砂質土
14　明黄褐色（10YR6/8）シルト

第 43 図　竪穴住居４（1/60）



第 44 図　竪穴住居４変遷図 (1/120)



第 45 図　竪穴住居４出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

途不明石器（Ｓ５）と、中央ピットから出土した砥石（Ｓ６）がある。周堤溝の東側からは高杯（28）が出土した。遺構の時期は土器から中期後葉であると考えられる。（藤井雅）



写真 14　段状遺構１作業風景（南西から）
写真中央に見えるのは、桑山古墳群箱式石棺墓１

２　段状遺構

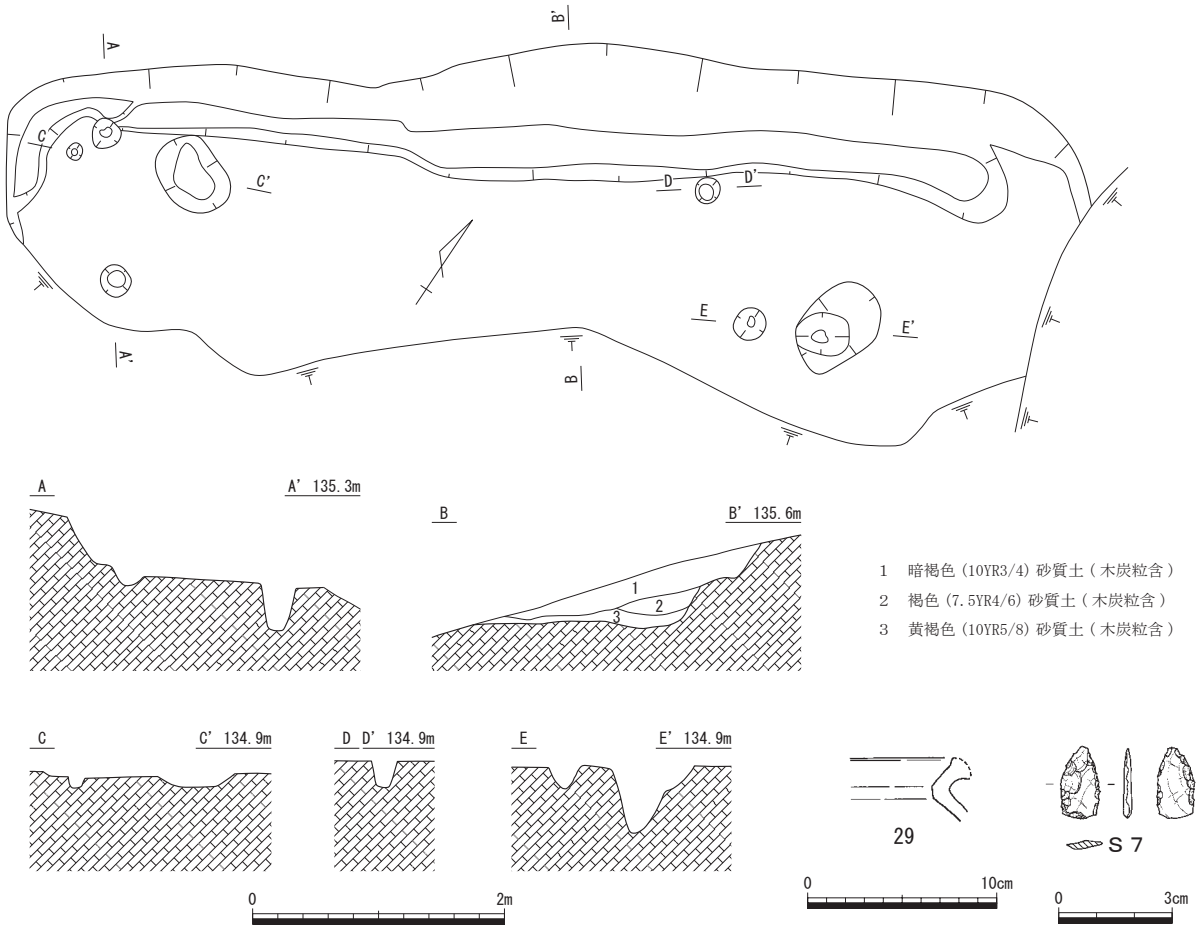
段状遺構１

（第 46 図、写真 14、図版 13 － １・24）

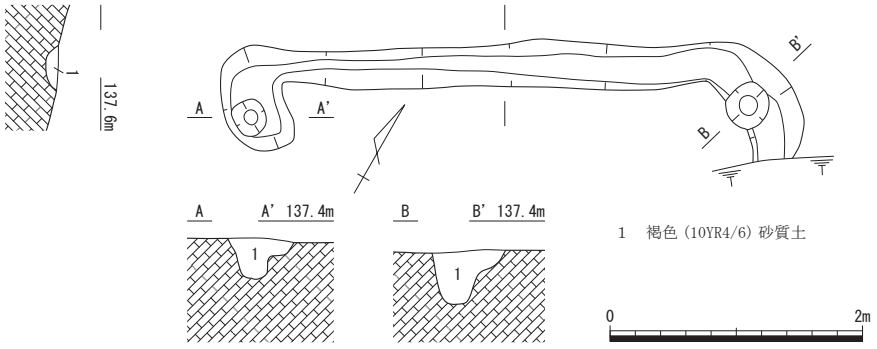
南東向きの斜面地で、竪穴住居１の下方に位置する段状遺構である。東西長は約 8.6 m に及ぶが、東端は桑山３号墳の周溝によって破壊されている。床面の北辺に沿って、浅い壁体溝が認められるが、東西両端まで達していない。また、床面には大小のピットが掘削されているが、大きさや形態、深さが様々であり、機能や性格は不明である。遺物は、弥生土器の小片（29）とサヌカイト製の石鏃（Ｓ７）が出土しており、遺構の時期は中期後葉と考えられる。（尾上）

段状遺構２（第 47 図、図版 13 － ２）

検出された遺構の中では一番標高が高い場所に占地している段状遺構で、竪穴住居１の北約３ｍに



第 46 図　段状遺構１（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）



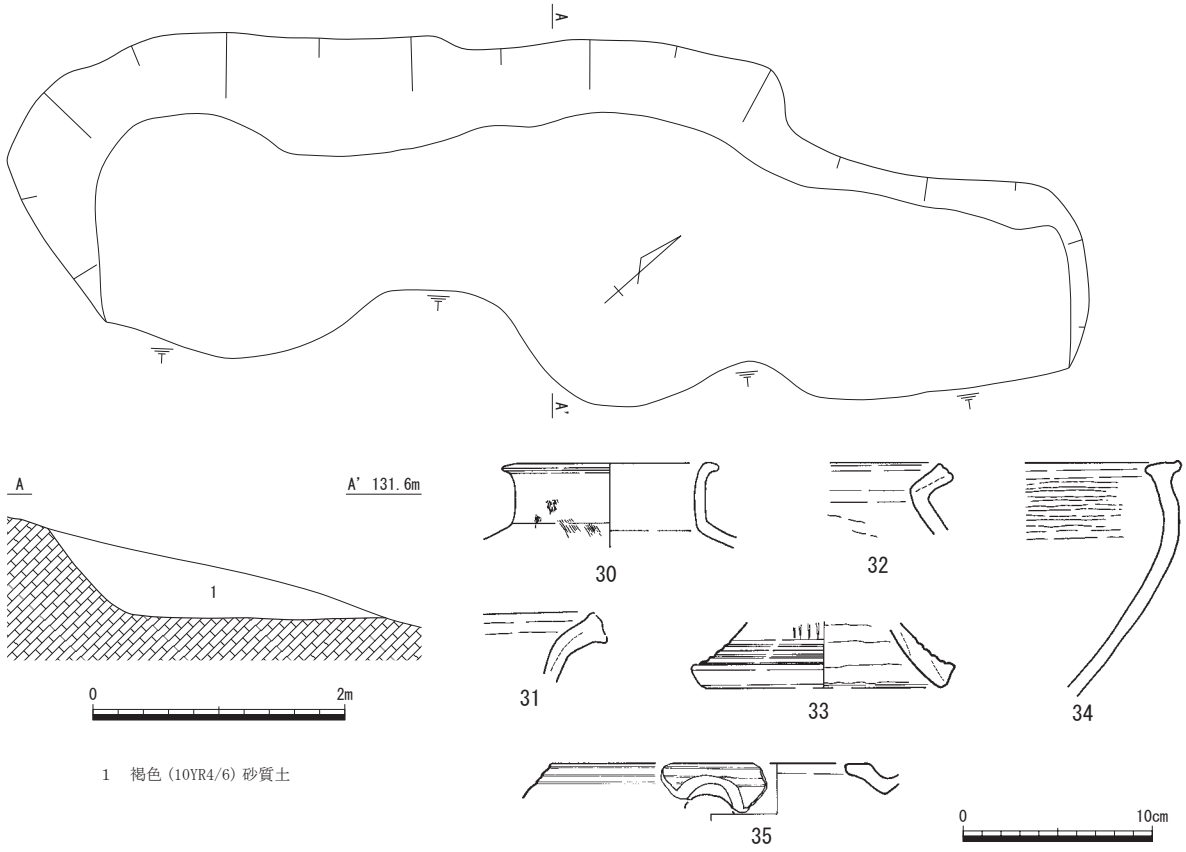
第 47 図　段状遺構２(1/60)

所在する。残存状況は非常に悪く、壁際に掘られたと思われる幅約 40cm、深さ約 10cm を測る溝のみが検出された。この溝は両端部で 90° 向きを変えているが、その場所には径約 40cm、深さ約 40cm の穴が掘られている。埋土中から弥生土器の小片が出土しており、他の遺構と同じく中期後葉に属すると思われる。（小嶋）

段状遺構３（第 48 図、図版 13 － 3 ・22）

竪穴住居４の北側約４ｍで検出したもので、おおむね尾根筋上に立地している。斜面を長さ 864cm、幅 290cm 以上の「コ」字形に掘り込み造りだした平坦面は、その斜面下方側が流出している。

埋土中から 30 ～ 35 の弥生土器が出土した。30 は口縁部が短く直立する壺で、口縁端部をやや拡張させている。32 はやや肥厚する口縁端部に凹線を２条巡らしている甕である。これらは中期後葉に比定される。（小嶋）

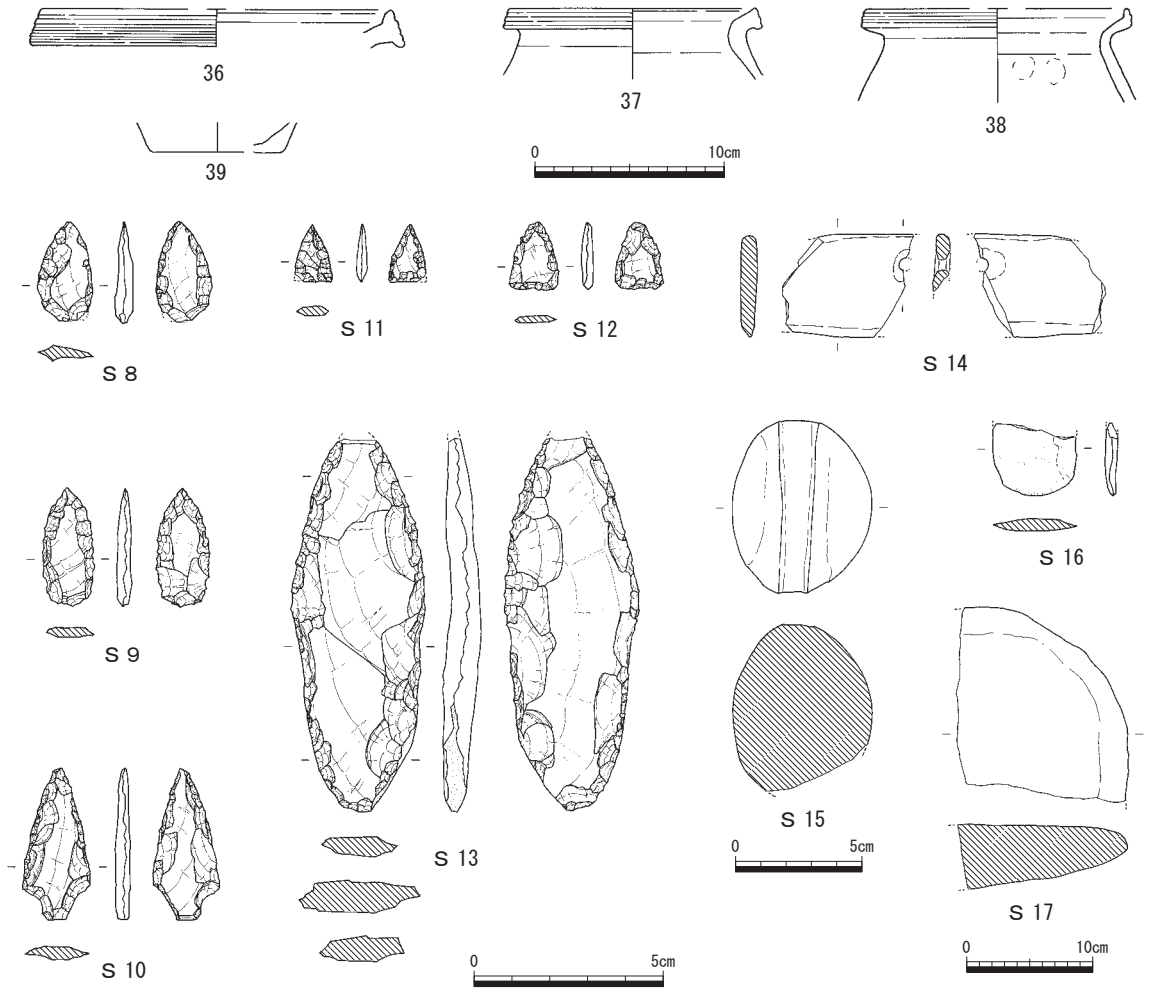


第 48 図　段状遺構３(1/60)・出土遺物 (1/4)

３　遺構に伴わない遺物

ここでは表土や流土、さらには桑山古墳群の周溝内・盛土中などから出土した弥生時代の遺物を示す（第 49 図）。

出土した弥生土器は小片が多く、図示可能であったのは 36 ～ 39 のみである。36 は、上下に拡張した口縁部に凹線を巡らす壺である。37 はやや肥大した口縁端部に、38 は上方につまみ上げた口縁端部に凹線を巡らしている。Ｓ８・Ｓ９は基部がやや凸気味を呈する石鏃で、打点が 180°転移するような石核から剥離された剥片を使用しているＳ８は、表裏面とも縁辺部のみに調整を施している。主に腹面側からの調整で茎を作出しているＳ 10 は、打点が 180°移動した石核から剥離された剥片を使用している。Ｓ 11・12 は平面三角形を呈する石鏃である。Ｓ 11 は、表面が器面全体を覆う斜平行剥離が施されるのに対し、裏面は縁辺のみの調整で、その中央部に素材剥片の主要剥離面が観察できる。Ｓ 12 は、表裏面とも縁辺部のみ調整を施す。Ｓ 13 は先端部が欠損している尖頭器である。表面右側縁下半に残された原礫面を取り除くように調整が施されているが、取りきれていない。おそらく基部であるため、入念な調整を行わなかったのであろう。Ｓ 14 は両側が欠損した磨製石包丁、Ｓ 15 は切れ目石錘と思われる。Ｓ 16 は器表面に研磨痕が認められる磨製石斧の刃部で、その刃部の厚さは薄い。Ｓ 17 は磨石で、その表面は使用によってやや滑らかな手触りである。（小嶋）



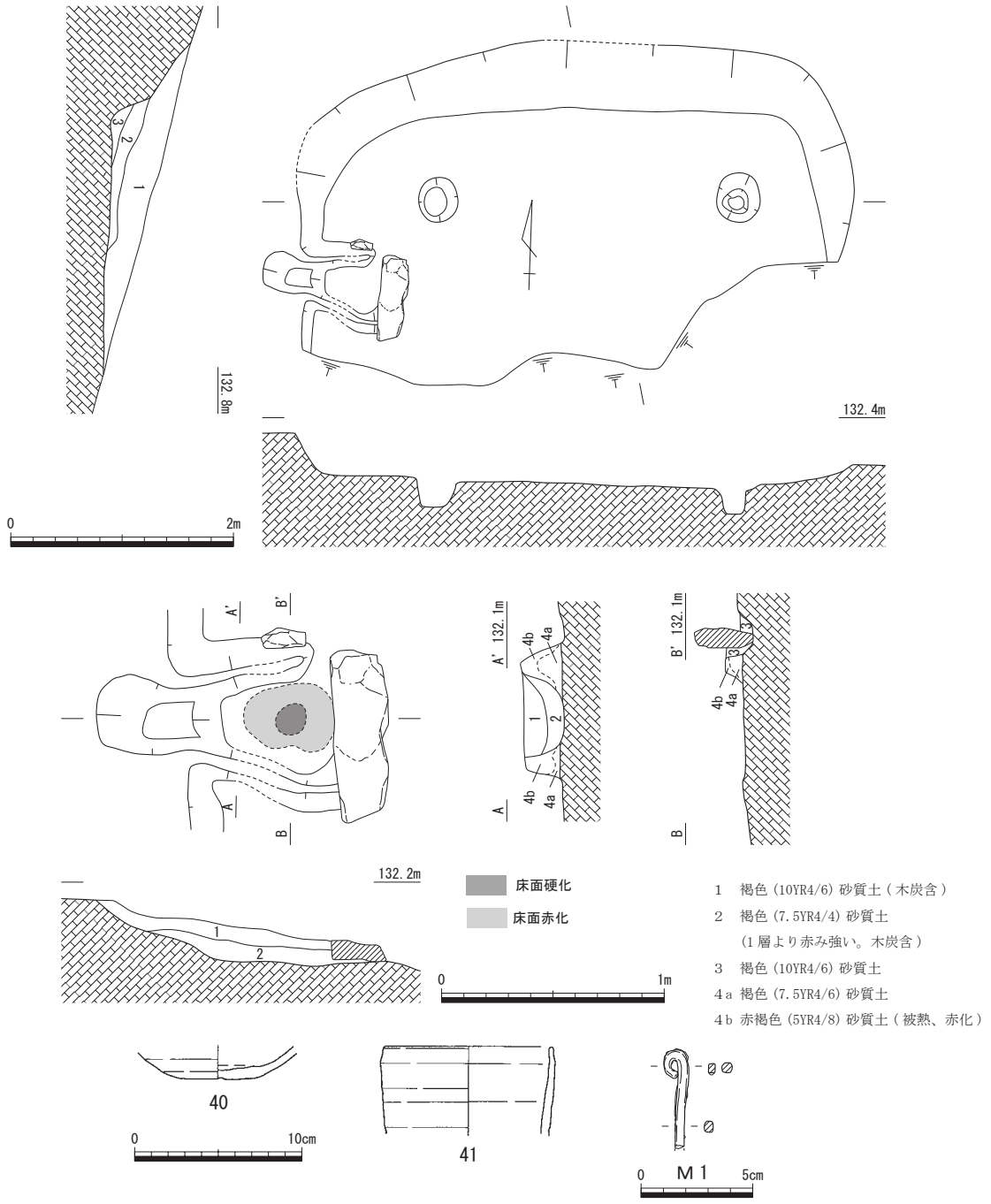
第 49 図　遺構に伴わない遺物（1/6・1/4・1/3・1/2）

第３節　古墳時代以降の遺構・遺物

１　竪穴住居

竪穴住居５（第 50 図、写真 15、図版 14 － 1 ・14 － 2 ・24）

調査区西端部の南向き斜面に位置する竪穴住居で、平面形は一辺約５ｍの方形を呈するが、南半を流失しているため正方形になるかどうかは分からない。床面はやや凹凸があり、全体に東側より西側



第 50 図　竪穴住居５(1/60)・カマド（1/30）・出土遺物 (1/4・1/3)



写真 15　竪穴住居５カマド断面（北から）

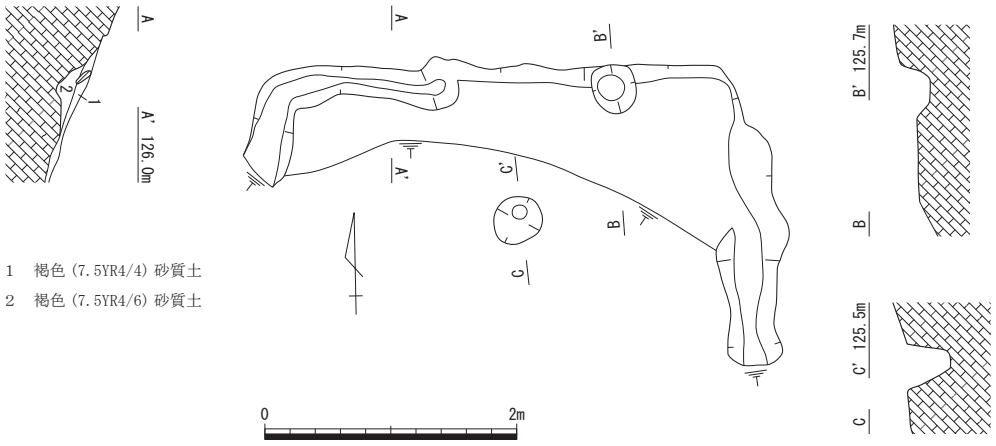


写真 16　竪穴住居６（南東から）

の方が若干高くなっている。壁体溝は認められず、柱は南側を流失しているものの４本と推定される。柱穴の深さは床面から約 25cm で、小規模なものである。住居の西辺にはカマドが作り付けられている。カマド中央の床面は強く被熱、硬化し、煙道は住居外に伸びている。カマドの南北両側には土壁を築き、東側には長さ約 1.5 ｍの長方形の石材を置く。北側の土壁背面にも小さな石が立てられており、石囲いとしていた可能性がある。遺物は、須恵器の小片数点と、先端を蕨手状に曲げる不明鉄製品（Ｍ１）、鉄滓が出土している。鉄滓の出土から工房等の可能性も想定したが、周辺各所で鉄滓が出土するため明瞭でない。出土遺物から遺構の詳細な時期を特定することは困難だが、周辺の遺構との関係から、７世紀代の遺構と考えられる。（尾上）

竪穴住居６（第 51 図、写真 16、図版 14 － 3）

調査区南西部の南向き斜面において、製炭窯１と重複して検出された遺構である。大半を流失しているものの遺構の北辺は残存しており、一辺約４ｍの方形をなすものと推測される。床面は凹凸が著しく、周縁には不明瞭な壁体溝を伴うが部分的で連続しない。壁も、ほぼ直立する箇所もあれば緩やかな斜面となる箇所もある。また、柱穴の可能性をもつピットが床面のほぼ中央に１個、壁際に１個認められたが、この遺構に伴うものかどうか不明である。出土遺物はなく時期も明らかでないが、製炭窯１の床面を壊して構築されており、それより新しい７世紀以降の遺構と考えられる。なお、竪穴住居として報告するが、遺構の性格も不明である。（尾上）



第 51 図　竪穴住居６(1/60)

２　段状遺構

段状遺構４（第 52 図、図版 15 － 1 、23）

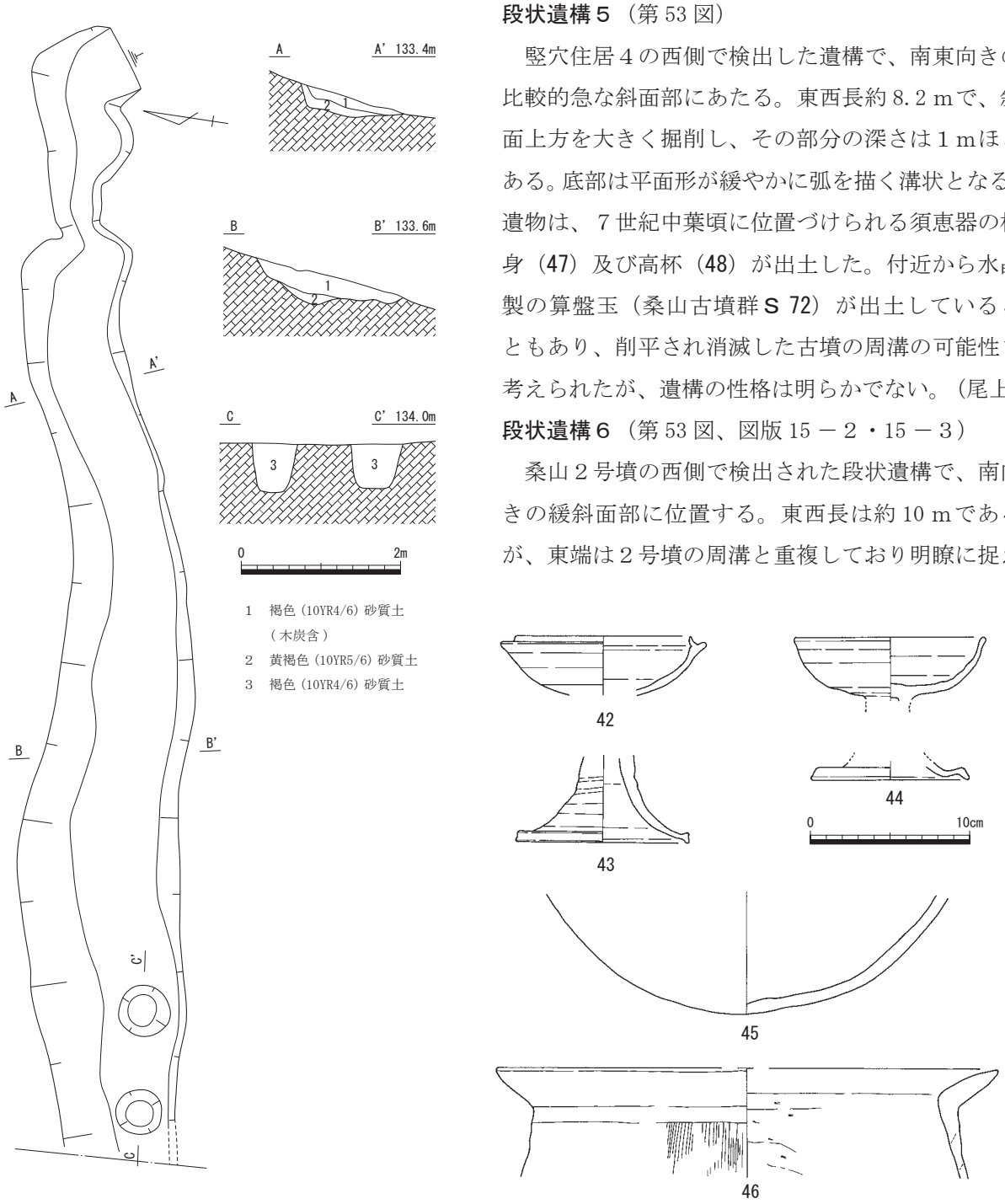
竪穴住居５の斜面上方に近接して検出された遺構で、長さ約 14 ｍを測るが、西側はさらに調査区外に伸びる。浅い溝状をなし、南側は流失している。西端には径 60cm 前後、深さ 60cm 前後のピットが２つ並んで検出された。柱穴の可能性もあるが、調査区外の状況が分からないため詳細は不明である。遺物は、７世紀中葉頃の須恵器や土師器、鉄滓が出土しており、竪穴住居５とほぼ同時期の遺構と推定される。（尾上）

段状遺構５（第 53 図）

竪穴住居４の西側で検出した遺構で、南東向きの比較的急な斜面部にあたる。東西長約 8.2 ｍで、斜面上方を大きく掘削し、その部分の深さは１ｍほどある。底部は平面形が緩やかに弧を描く溝状となる。遺物は、７世紀中葉頃に位置づけられる須恵器の杯身（47）及び高杯（48）が出土した。付近から水晶製の算盤玉（桑山古墳群Ｓ 72）が出土していることもあり、削平され消滅した古墳の周溝の可能性も考えられたが、遺構の性格は明らかでない。（尾上）

段状遺構６（第 53 図、図版 15 － 2 ・15 － 3）

桑山２号墳の西側で検出された段状遺構で、南向きの緩斜面部に位置する。東西長は約 10 ｍであるが、東端は２号墳の周溝と重複しており明瞭に捉え

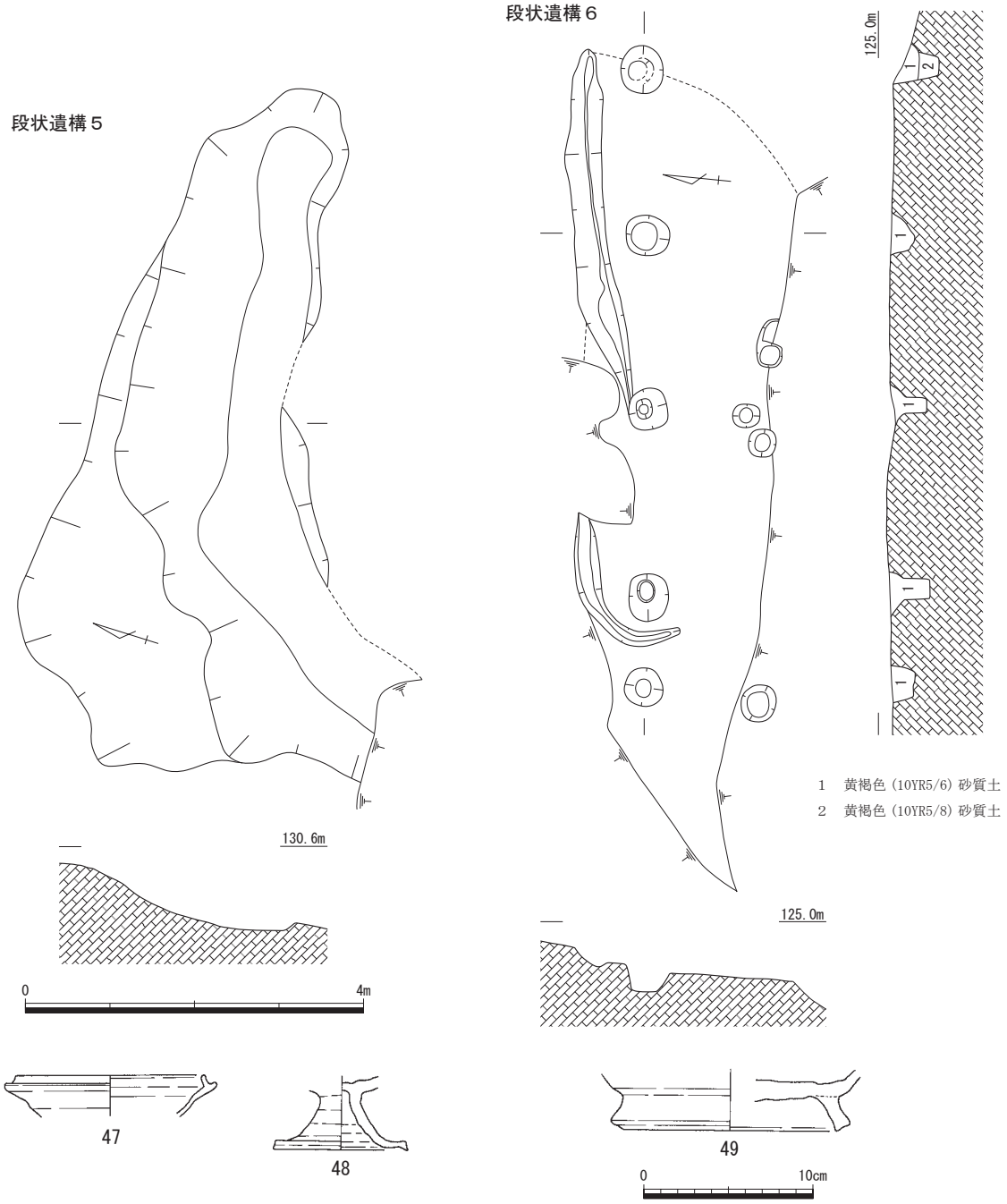


第 52 図　段状遺構４(1/80)・出土遺物 (1/4)

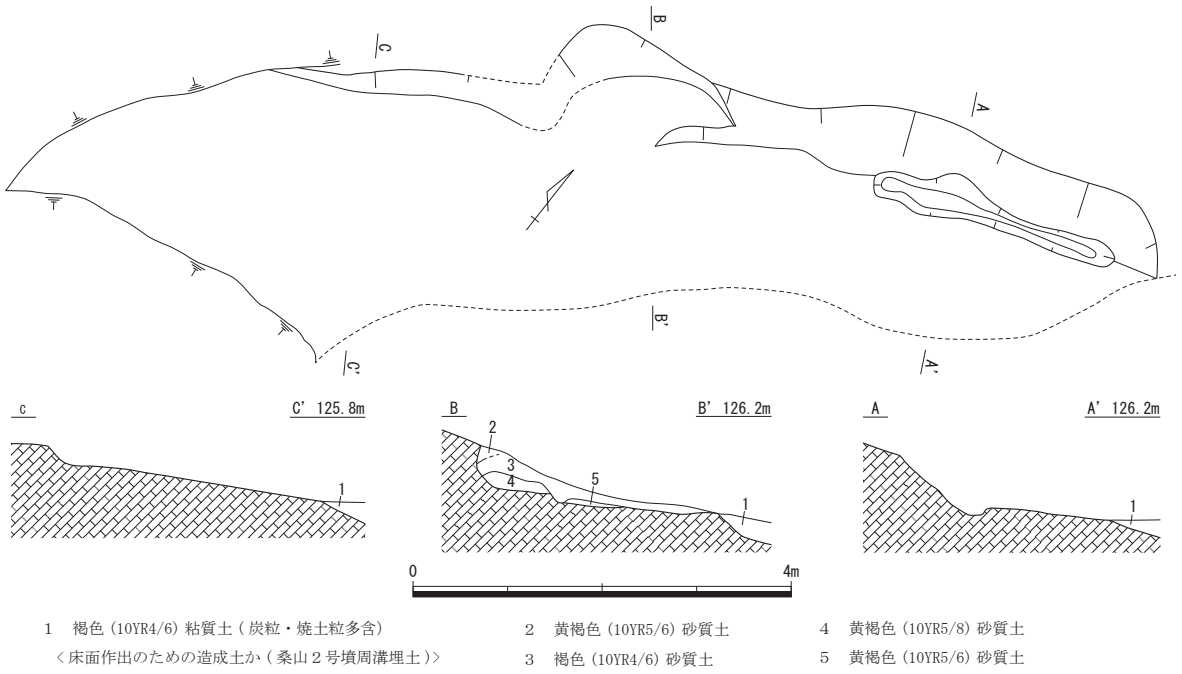
られなかった。南側は流失しており、床面北縁には不明瞭な壁体溝をめぐらせている。壁体溝は西側でほぼ直角に屈曲するが、その外側にも平坦面が続いており、複数の段状遺構が重複しているものと推定される。床面には東西方向の柱穴列１条が認められ、壁体溝の内側において柱４本分を検出しており、柱間距離は約 190 ～ 215cm、床面からの柱穴の深さは約 30 ～ 50cm である。遺物は、柱穴埋土の上層から須恵器片（**49**）が出土しており、古代の遺構と考えられる。（尾上）

段状遺構７（第 54 図）

段状遺構６の北西側に隣接して検出された遺構であるが、段状遺構６との先後関係は明らかでない。幅は現状で約 2.4 ｍであるが、桑山２号墳の周溝を優先的に掘り下げたことによって、この遺構の床



第 53 図　段状遺構５・６(1/80)・出土遺物 (1/4)



第 54 図　段状遺構７（1/80）

面を削平した可能性が高く、本来は南東方向にもう少し床面が広がっていたものと思われる。山側には幅が狭く浅い壁体溝が認められるところもある。

遺物は出土していないものの、周辺の状況から古代に帰属すると思われる。　（小嶋）

３　土坑

土坑１（第 55 図、図版 16 － 1）

調査区の北東端で検出した土坑で、１号墳の墳丘と周溝の境目付近に位置する。周溝が埋まった後に掘り込まれたもので、南半は墳丘盛土まで掘削していた。径 97cm のやや不整な円形を呈し、検出面からの深さ 16cm を測る底面は、北側に向けて傾斜している。出土した土器細片から、古代に帰属するものと想定される。　（小嶋）

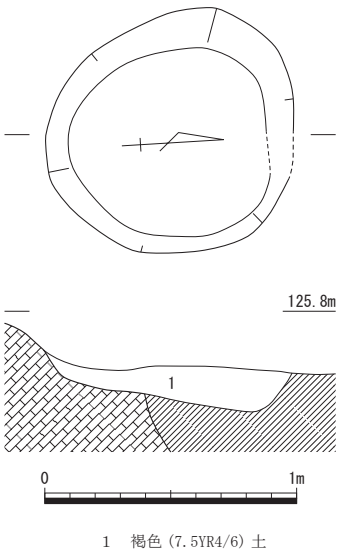
土坑２（第 56 図、図版 16 － 2 ・23）

土坑１の南西約８ｍで検出した土坑で、土坑３を切っている。１号墳の周溝が埋まった後に掘削されたもので、その平面形は長辺 115cm、短辺 112cm の隅丸方形を呈し、検出面からの深さは 11cm を測る。

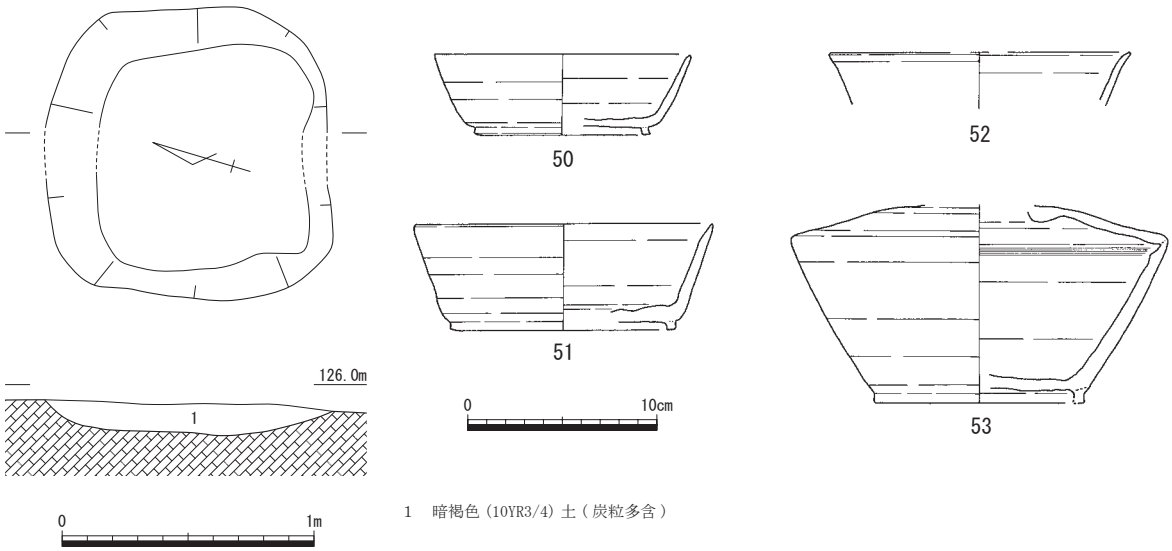
口径 13.6cm、器高 4.3cm の **50** と口径 15.8cm、器高 5.7cm の **51** は、平坦な底部に高台が付いた須恵器杯で、口縁部に向けてやや外方する直線的な体部となっている。**52** は壺の口縁部である。口頸部を失っている **53** は、肩が張り稜角を呈する体部をもつ壺で、平底の底部に高台を付けている。これら出土遺物から、土坑の時期は８世紀代と考えられる。　（小嶋）

土坑３（第 37 ・57 図、図版 16 － 2）

土坑２に隣接する土坑で、土坑２より先に掘削されたものである。



第 55 図　土坑１（1/30）



第 56 図　土坑２(1/30)・出土遺物 (1/4)

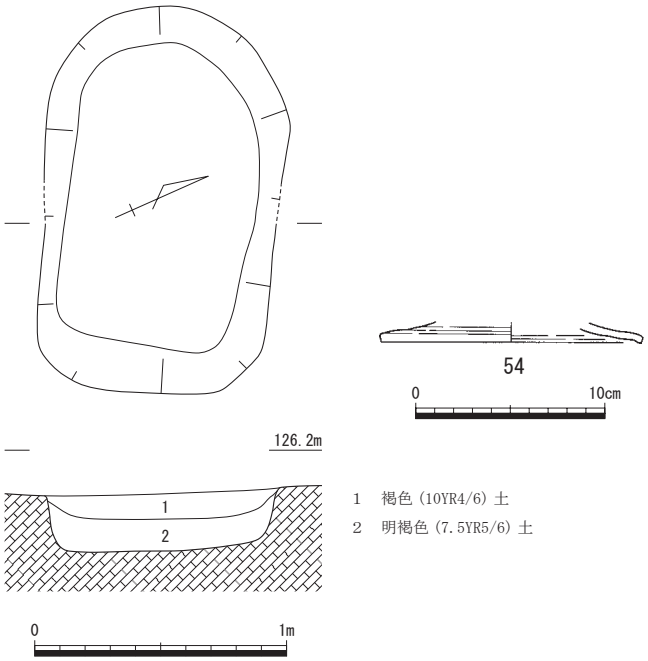
平面形はやや隅丸長方形を呈し、その規模は長軸 154cm、短軸 96cm を測る。検出面から 22cm の深さである底面は、平坦であった。

出土した須恵器蓋 (54)から、土坑の時期は８世紀代に帰属する。　（小嶋）

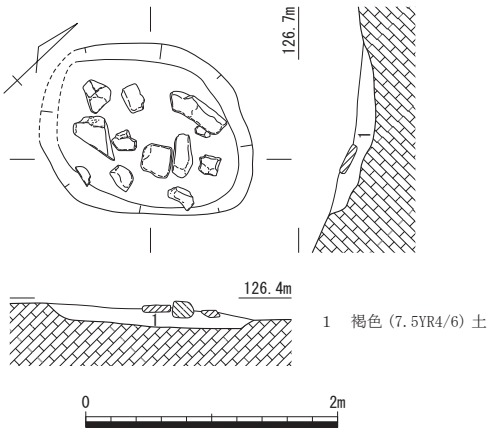
土坑４（第 58 図、図版 16 －３）

１号墳の墳丘上で検出した土坑で、土坑１の南約５ｍに位置する。長軸 168cm、短軸 135cm の楕円形を呈し、深さは検出面から 15cm を測る。表土を除去すると、埋土上面に 10cm ～ 30cm 大の角礫が検出されたが、意図的に配されたものか判然としない。

出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、古代以降と思われる。　（小嶋）



第 57 図　土坑３(1/30)・出土遺物 (1/4)



第 58 図　土坑４(1/60)

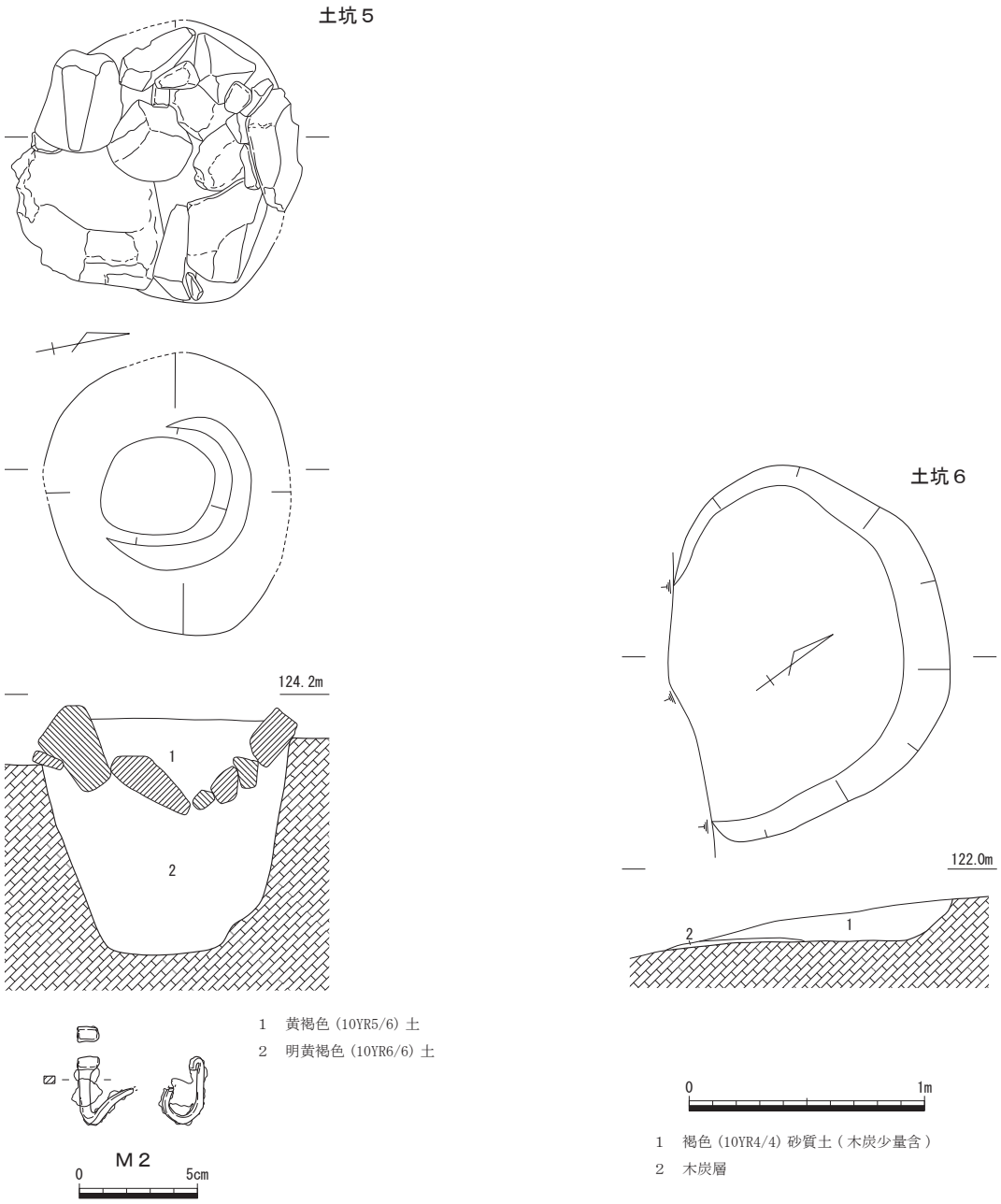
土坑５（第 59 図、図版 17 －１・17 －２・24）

調査区東端で、１号墳と２号墳に挟まれた位置で検出された土坑である。検出時には、20cm ～ 60cm 大の角礫がすり鉢状に落ち込んだ状態で検出された。これらの礫を除去すると、長径 120cm、短径 104cm の平面円形を呈し、検出面から深さ 100cm を測り北半に狭いテラス面がある底面を持つ土坑が確認された。このような検出状況から、座棺を埋葬した土坑と思われるが、確証はない。掘り方内に落ち込んだ礫は、木蓋等の上に置かれていたものかもしれない。

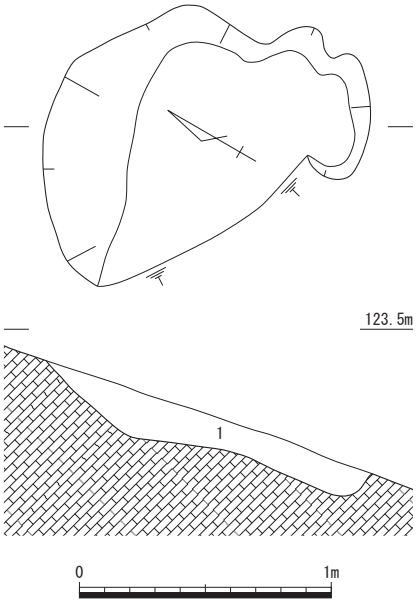
土器は出土していないが、埋土等の状況から時期は近世と思われる。　（小嶋）

土坑６（第 59 図）

調査区の南端付近で検出した土坑で、粘土採掘坑１の西約３ｍに位置する。南側を畑地造成等で失っているが、径 160cm 程度の円形を呈していたものと思われる。検出面からの深さ 16cm を測る底面は



第 59 図　土坑５・６(1/30)・土坑５出土遺物 (1/3)



1　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土

第 60 図　土坑７（1/30）

平坦であり、その南半には厚さ２～３㎝の木炭層が広がっていた。ただし、明瞭な被熱痕跡を確認できないため、この土坑での火の使用は不明である。

出土した土器片から、時期は古代と推測できる。（小嶋）

土坑７（第 60 図）

粘土採掘坑１の北側に隣接している土坑で、２号墳の周溝を切っている。畑地耕作等で南西側を失っているが、長軸 129cm の不整円形を呈していたものと思われる。検出面から 16cm の深さを測る底面は、南側に向かって傾斜している。

出土遺物がなく、時期は不明である。　（小嶋）

４　埋葬遺構

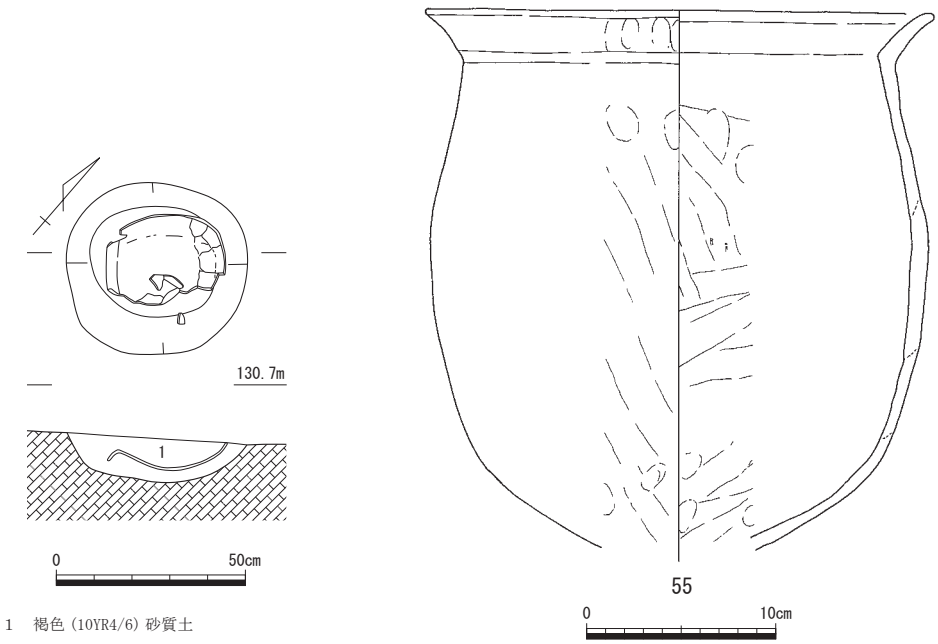
埋葬遺構１（第 61 図、図版 17 －３・23）

調査区の中央で検出した土器棺墓で、弥生時代の段状遺構３の南東約１ｍに位置する。径約 50cm の掘り方内に口縁部を南西に向けて横位に埋葬していたと思われる土師器甕（55）は、検出時には土器の半身が失われていたものの、やや長胴形を呈する。時期は８世紀代と思われる。（小嶋）

埋葬遺構２（第 62 図、図版 18 －１・18 －２・24）

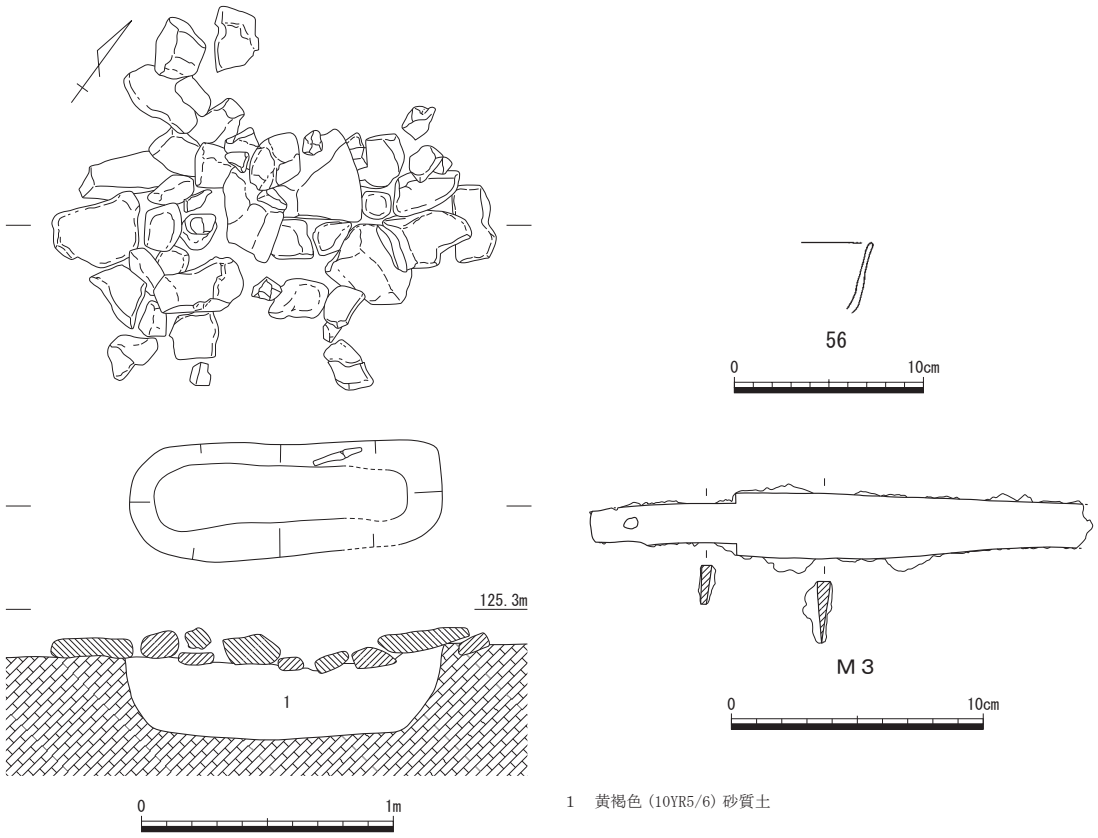
２号墳の周溝上で検出した土坑墓で、長軸 125cm、短軸 48cm の長楕円形を呈している。検出面からの深さ 35cm を測る底面は平坦で、北西辺際に短刀（Ｍ３）が副葬されていた。墓坑上及びその周辺には、配置の規則性が認められないものの、人頭大の角礫が置かれていた。

出土した土師器椀（56）から、時期は中世である。（小嶋）



1　褐色（10YR4/6）砂質土

第 61 図　埋葬遺構１（1/20）・出土遺物（1/4）

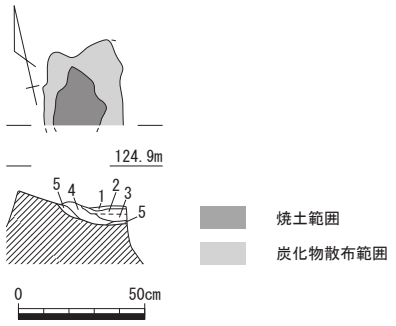


第 62 図　埋葬遺構２（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

５　炉

炉１（第 63 図、写真 17、図版 18 －３）

桑山２号墳西側の周溝内にあり、周溝が 20 ～ 30cm ほど埋没した上に設けられている。皿状に掘りくぼめられた炉床が強く被熱、硬化しており、平面形は不明ながら径 30 ～ 50cm 程度の不整円形を呈すると考えられる。周辺から鉄滓が出土することなどから、鍛冶炉と推定している。炉内から出土した炭化物を分析した結果、平安時代（10 世紀頃）の年代が示されている（第６章第１節）。　（尾上）



第 63 図　炉１（1/30）

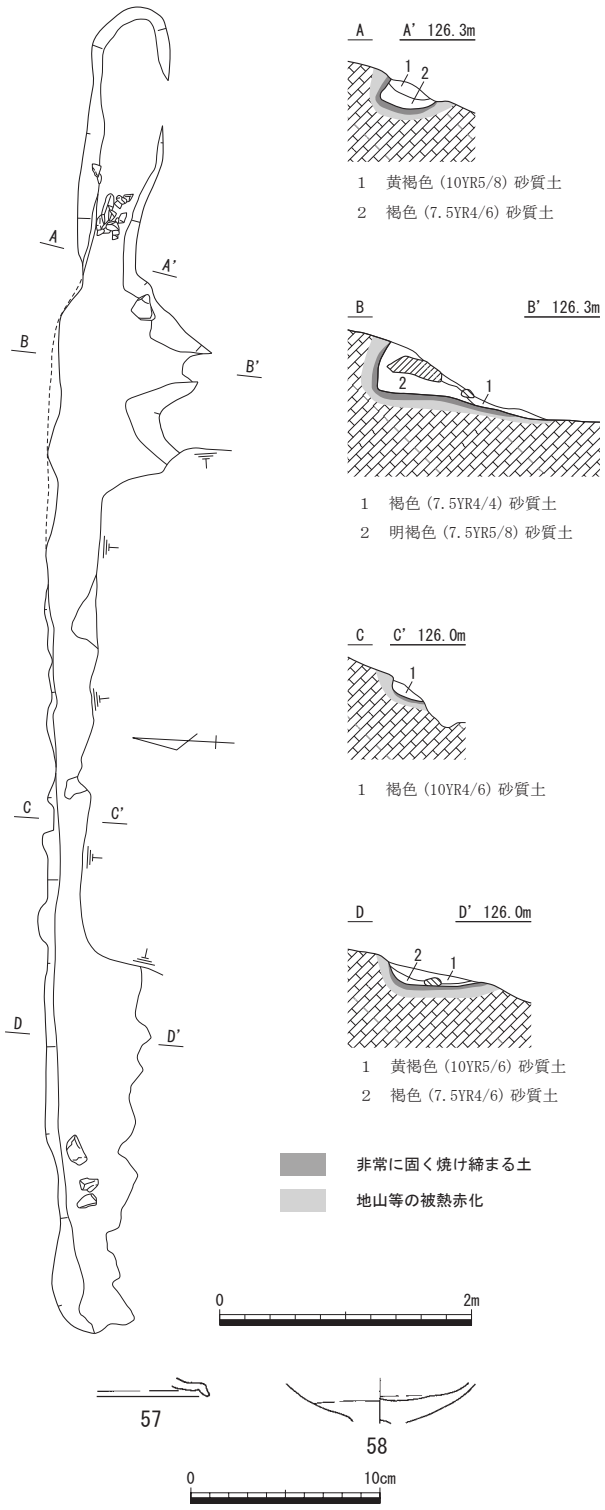


写真 17　炉１検出状況（南から）

６　製炭窯

製炭窯１（第 64 図、写真 18・19、図版 19）

調査区南西部の南向き斜面において検出された横口付の製炭窯である。削平が著しいが、焚口から煙道までほぼ残存しており、全長約 10.5 ｍを測る。そのうち焼成部が約 8.4 ｍ、煙道部が約 2.1 ｍ



第 64 図　製炭窯１（1/60）・出土遺物（1/4）



写真 18　製炭窯１作業風景（西から）



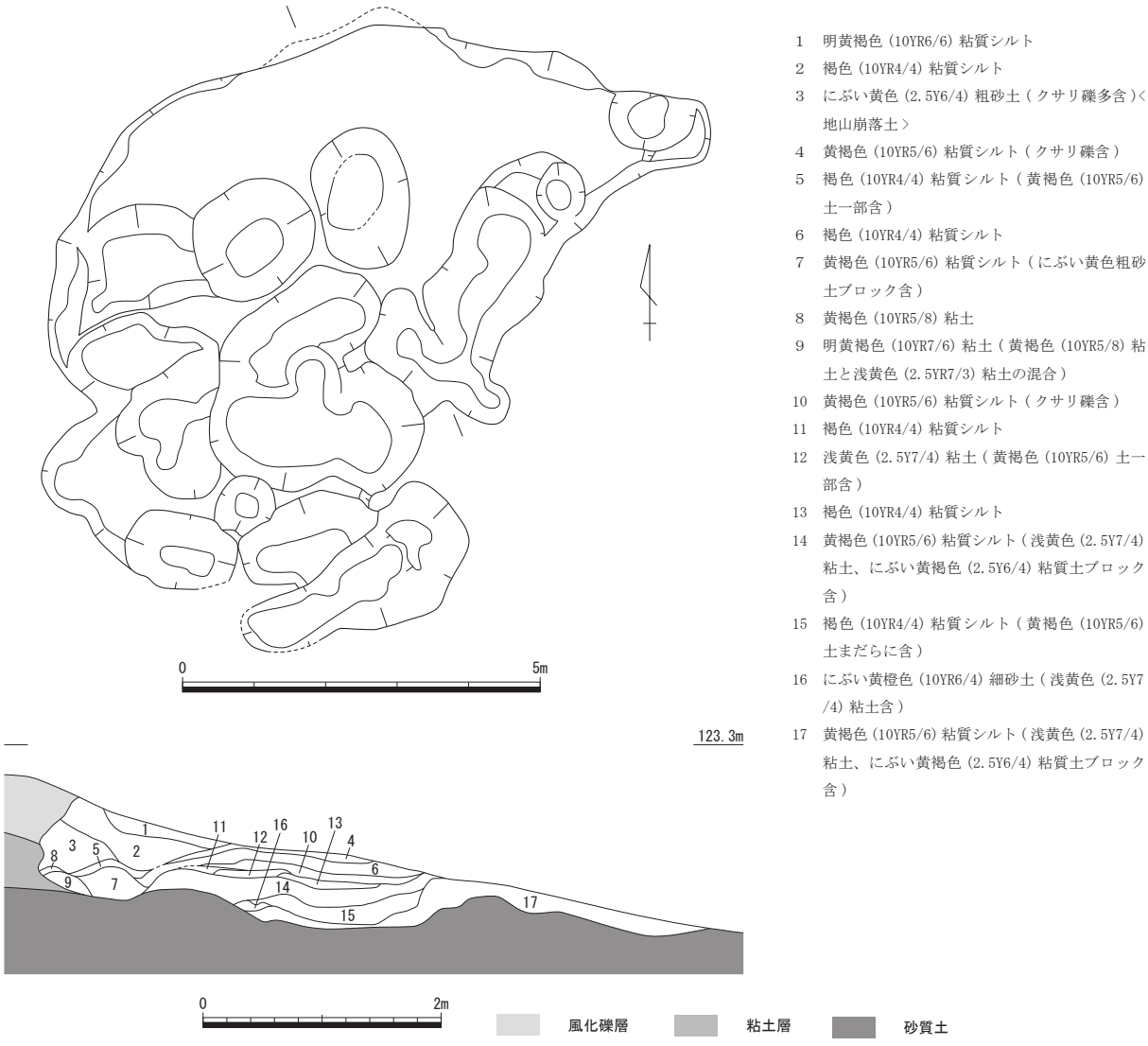
写真 19　製炭窯１煙道付近作業風景（南から）

であり、横口は焼成部の東端でわずかに残存していた。床面は西から東に向かって緩やかに上昇しており、東西両端の床面高の差は約 30cm である。床面及び壁面は非常に固く焼け締まっており、崩落した天井や壁体の破片が窯内部に落ち込んでいた。また、煙道の一部には礫を積んだような状況が認められた。遺物は、７世紀代の須恵器片がわずかながら出土しており、遺構の時期を示している可能性がある。周辺から鉄滓が出土することからも、通説どおり製鉄に関わる製炭窯と考えられるが、窯の内部から木炭はほとんど検出されていない。（尾上）

７　粘土採掘坑

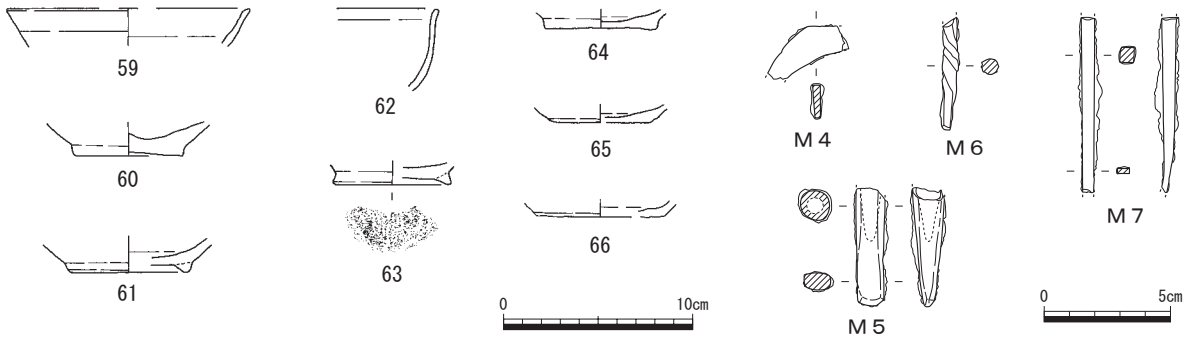
粘土採掘坑１（第 65・66 図、写真 20・21、図版 20・24）

調査区の南半に位置する。南北約８ｍ、東西約９ｍの範囲に多数の土坑状の掘り込みと、北側斜面に向かって抉るような掘り込みが認められる。掘り込みは地山の風化礫層と砂質土の間にある浅黄色の粘土層を狙っており、粘土採掘坑と判断できる。土層断面からは、まず南側の土坑群を掘削した後、これらを埋めながら北側斜面に向かって掘削を進めていった様子が窺える。遺構の埋没時期は、出土遺物から古代末から中世と考えられる。（藤井翔）



1　明黄褐色（10YR6/6）粘質シルト
2　褐色（10YR4/4）粘質シルト
3　にぶい黄色（2.5Y6/4）粗砂土（クサリ礫多含）＜地山崩落土＞
4　黄褐色（10YR5/6）粘質シルト（クサリ礫含）
5　褐色（10YR4/4）粘質シルト（黄褐色（10YR5/6）土一部含）
6　褐色（10YR4/4）粘質シルト
7　黄褐色（10YR5/6）粘質シルト（にぶい黄色粗砂土ブロック含）
8　黄褐色（10YR5/8）粘土
9　明黄褐色（10YR7/6）粘土（黄褐色（10YR5/8）粘土と浅黄色（2.5YR7/3）粘土の混合）
10　黄褐色（10YR5/6）粘質シルト（クサリ礫含）
11　褐色（10YR4/4）粘質シルト
12　浅黄色（2.5Y7/4）粘土（黄褐色（10YR5/6）土一部含）
13　褐色（10YR4/4）粘質シルト
14　黄褐色（10YR5/6）粘質シルト（浅黄色（2.5Y7/4）粘土、にぶい黄褐色（2.5Y6/4）粘質土ブロック含）
15　褐色（10YR4/4）粘質シルト（黄褐色（10YR5/6）土まだらに含）
16　にぶい黄橙色（10YR6/4）細砂土（浅黄色（2.5Y7/4）粘土含）
17　黄褐色（10YR5/6）粘質シルト（浅黄色（2.5Y7/4）粘土、にぶい黄褐色（2.5Y6/4）粘質土ブロック含）

第 65 図　粘土採掘坑１(1/100・1/60)



第 66 図　粘土採掘坑１出土遺物（1/4・1/3）

粘土採掘坑２（第 67・68 図、図版 21 －１・21 －２・23）

粘土採掘坑１の西側に位置する。南北約５ｍ、東西約 22 ｍの範囲に多数の土坑状の掘り込みと、斜面を抉るような掘り込みが認められる。掘り込みは粘土層を狙っており、粘土採掘坑と判断できる。出土遺物について、**67** は勝間田焼の椀、**68** は土師器の杯、**69** は土師器の椀である。遺構の時期は出土遺物から古代末～中世と考えられ、粘土採掘坑１とあまり時間差なく掘削され、ほぼ同時期に埋没した遺構と考えられる。（藤井翔）

８　溝

溝１（第 37・69 図、図版 21 －３）

調査区の西端、竪穴住居１の斜面下側で検出された溝である。等高線に平行して走っており、長さ約４ｍ分を検出したが、西側はさらに調査区外に延びる。遺物は、須恵器の小片がわずかに出土しているに過ぎない。古代以降に埋没した溝と考えられる。（尾上）

溝２（第 37・69 図）

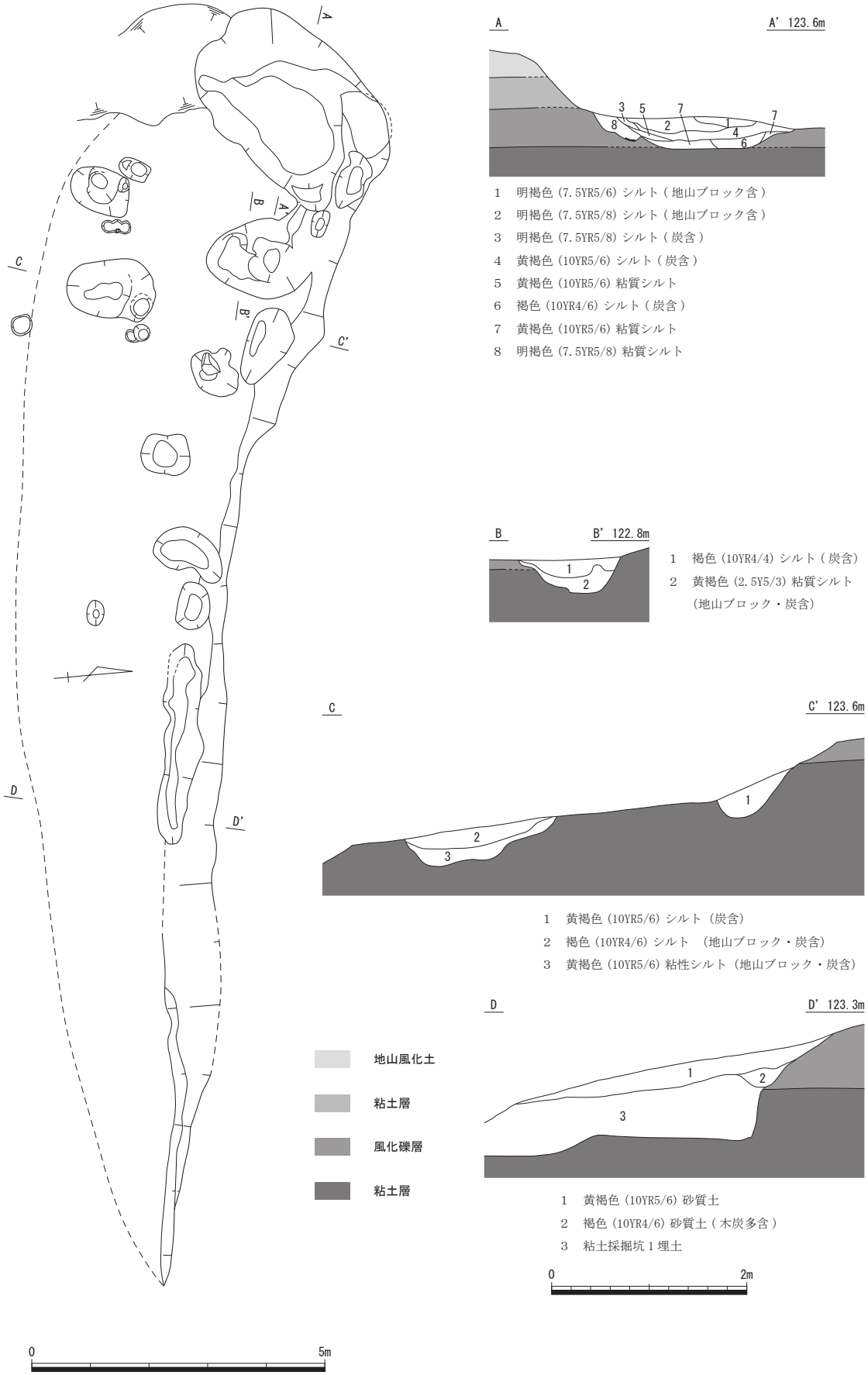
竪穴住居４の西側で検出された細く浅い溝で、等高線に平行して走っている。長さ約５ｍ分を検出したが、東端は竪穴住居４の周溝と重複しており不明瞭であった。流失した段状遺構の壁体溝の可能性も考えられたが、性格不明である。出土遺物はなく、時期も不明である。（尾上）



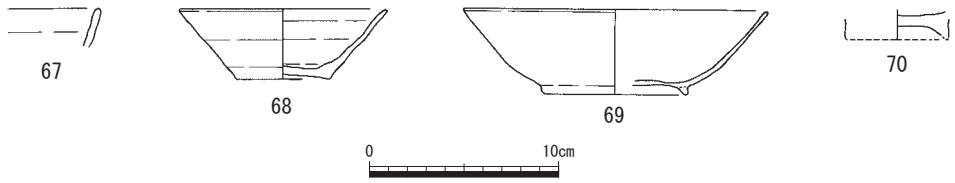
写真 20　粘土採掘坑１作業風景（西から）



写真 21　粘土採掘坑１断面（南西から）



第 67 図　粘土採掘坑２(1/100・1/60)

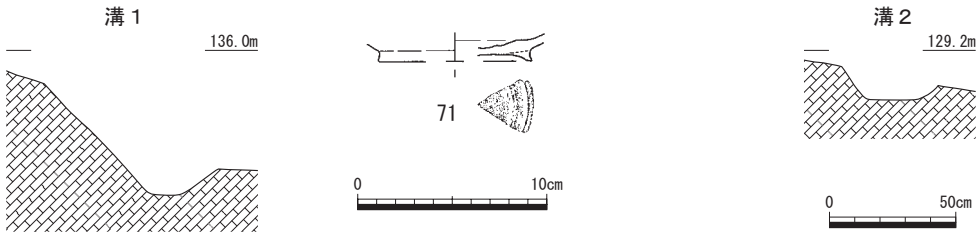


第 68 図　粘土採掘坑２出土遺物 (1/4)

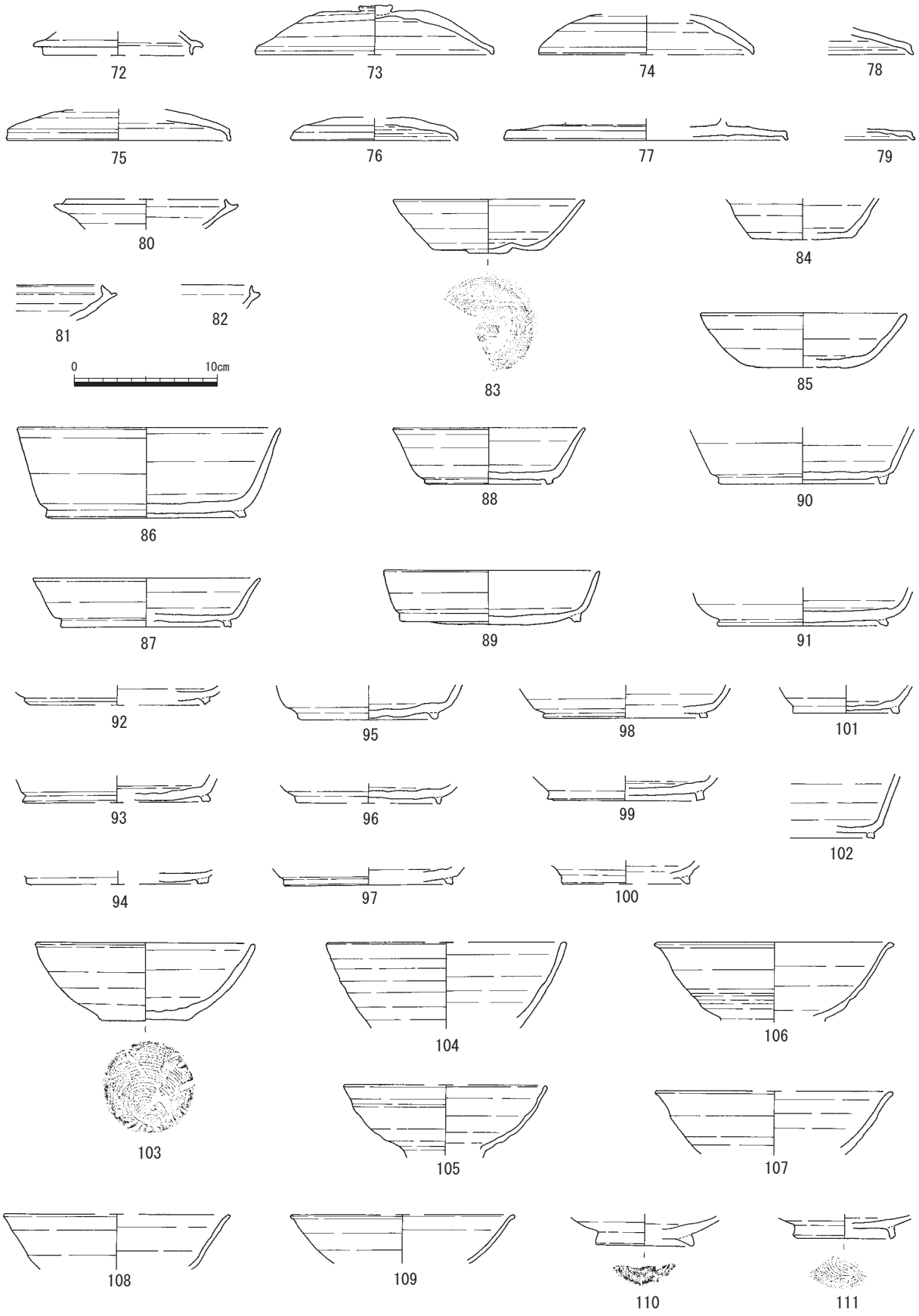
９　遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物を第 70・71 図に掲載した。これら遺物の出土場所は、主に調査区の南東側の標高 128 ｍより下方であり、特に桑山１号墳及び２号墳の周辺からが多い。また、観察表のとおり調査区各所で鉄滓が出土している（桑山遺跡　鉄滓一覧）。

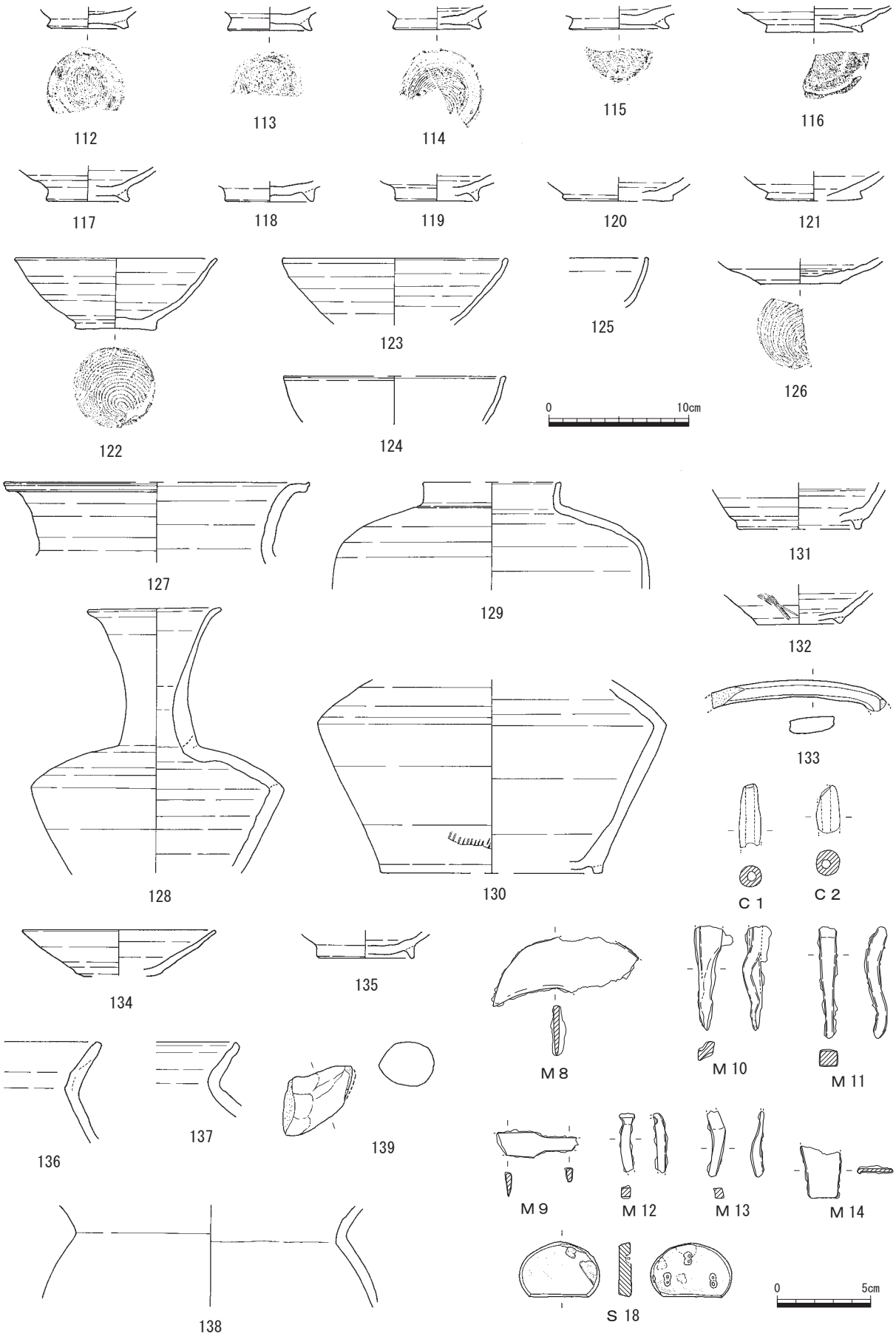
72 ～ 79 は須恵器の蓋で、縁部内面に返りをもち、さらにその返り端部が突出するもの（72）、頂部が丸く笠形を呈し縁部が屈曲しないもの（73 ～ 76）、平らな頂部に環状のつまみがつくもの（77）などが出土している。80 ～ 82 は口縁部に立ち上がりを有する須恵器杯身、83 ～ 85 は平らな底部と斜め上にまっすぐのびる口縁部をもつ須恵器杯である。86 ～ 100 は外傾する口縁部と底部外周に高台を付ける須恵器杯で、底部は平坦のものが多いが、高台より底部が突き出ているもの（89）も出土している。103 ～ 121 は須恵器の椀で、口縁部が内湾気味にたちあがるもの（103 ～ 105）や、緩やかに外反するもの（106 ～ 109）が認められる。また底部の形状は、平底のもの（103）、高台を付けるもの（110 ～ 119）、平高台状のもの（120・121）などがある。底部には回転糸切り痕が認められるものが多い。122 ～ 126 は勝間田焼の椀である。127 は口頸部がやや外反し、口縁端部が上方に屈曲している須恵器壺である。128 は、細長く大きく外反する口頸部と肩部が張り稜角を呈する体部をもつ須恵器長頸壺である。129 は内湾する肩部と直立する短い口縁部をもつ須恵器短頸壺である。肩部が張り稜角を呈している 130 は須恵器長頸壺としているが、近くで平瓶の提梁（133）が出土していることから、平瓶の体部かもしれない。134 は土師器杯、135 は高台が付く土師器椀である。136 ～ 138 は土師器甕で、口縁部が「く」字状を呈する。図化可能な鉄器はＭ８～Ｍ 14 がある。Ｍ９は桑山 1 号墳の、Ｍ 10 ～ Ｍ 13 は桑山２号墳の周溝埋土から出土した。Ｍ８は鎌の先端部、Ｍ９は両関の刀子である。薄い板状を呈しているＭ 14 は、桑山３号墳周辺から出土した。Ｃ１・Ｃ２は土錘で、いずれも一部欠損している。表面の一部が欠損している丸鞆（Ｓ 18）は、黒色を呈する泥岩（珪質）製で、桑山３号墳の周溝上面から出土した。裏面には潜り穴が３か所穿かれている。表面及び周縁の研磨は非常に丁寧であるが、裏面の研磨は粗く、素材の調整痕を残している。大きさは長さ 29㎜、幅 43.5㎜、厚さ 7.1㎜を測る。（小嶋）



第 69 図　溝１・２(1/30)・溝１出土遺物 (1/4)



第 70 図　遺構に伴わない遺物① (1/4)

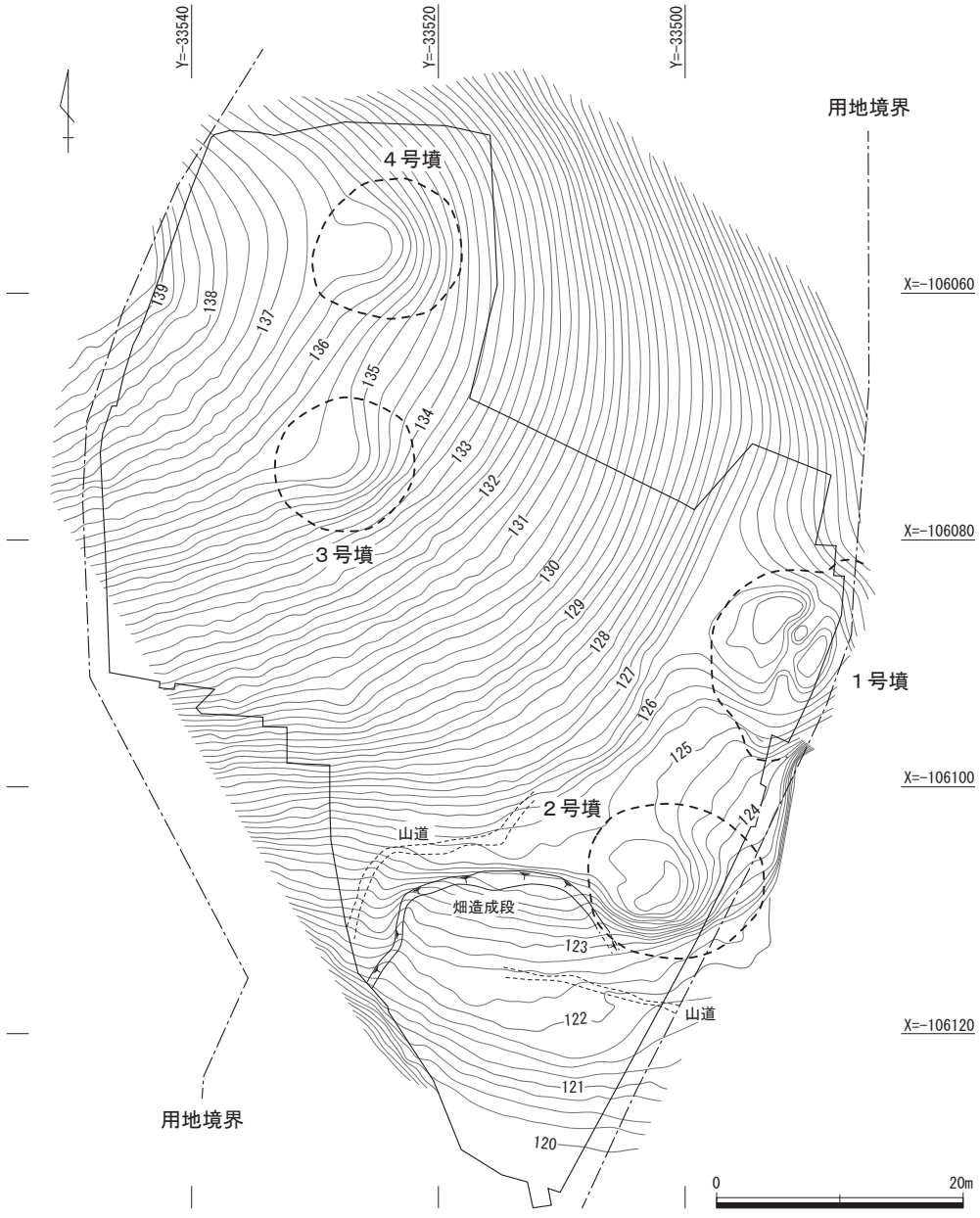


第 71 図　遺構に伴わない遺物② (1/4・1/3)

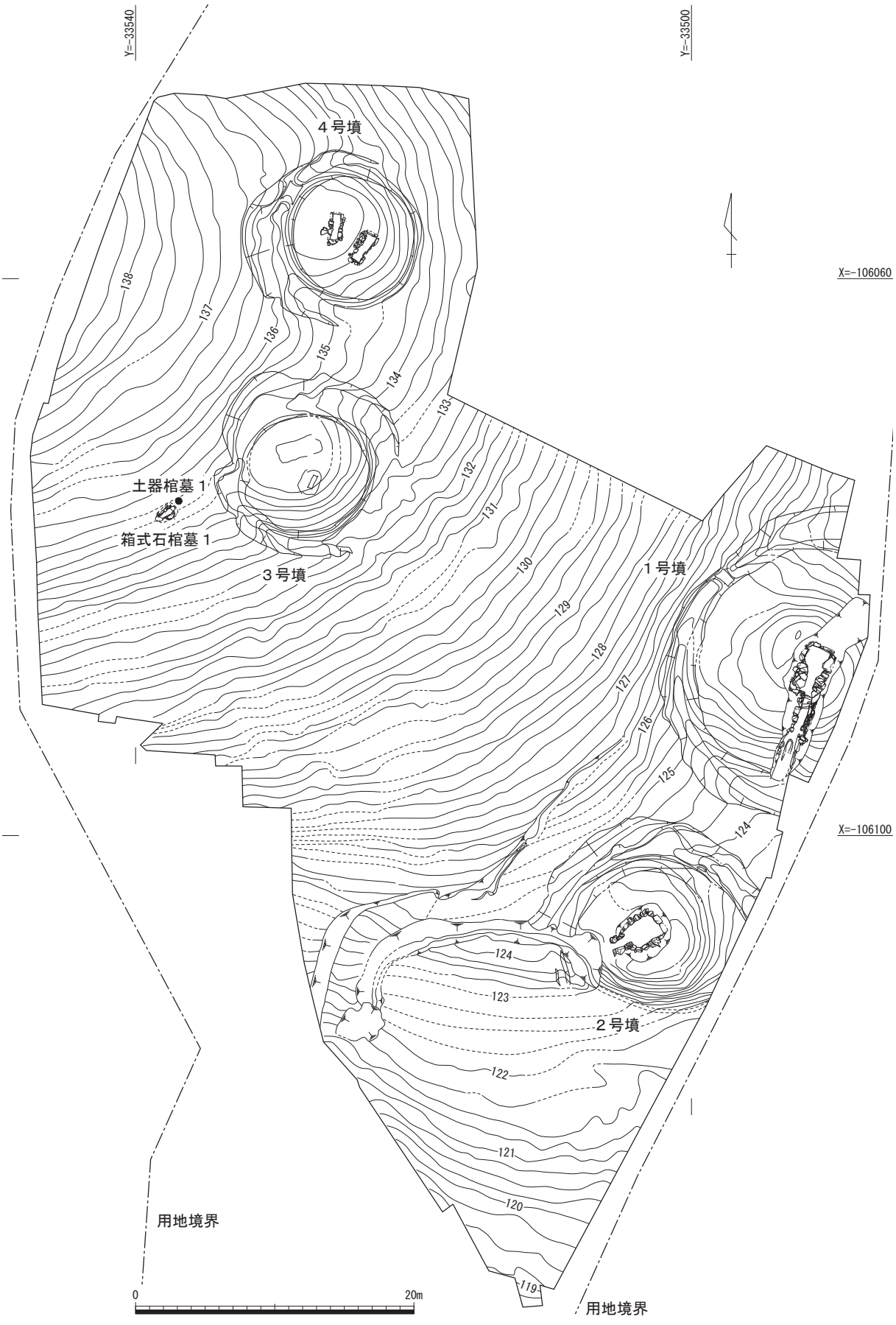
第５章　桑山古墳群

第１節　遺跡の概要

桑山古墳群は、標高約 290 ｍの嵯峨山から吉井川の支流である皿川が形成した平坦地に向かって樹枝状に延びる尾根の先端に位置する（第２図）。この古墳群は、浅い谷地形を挟んだ南北２つの尾根上に所在し、約 30 ｍの尾根筋幅をもつ南側の尾根上に１号墳から４号墳、北側の小さく張り出した



第 72 図　桑山１～４号墳周辺の調査前の地形（1/600）



第 73 図　桑山１～４号墳全体図（1/400）



写真 22　桑山１号墳調査前（南から）



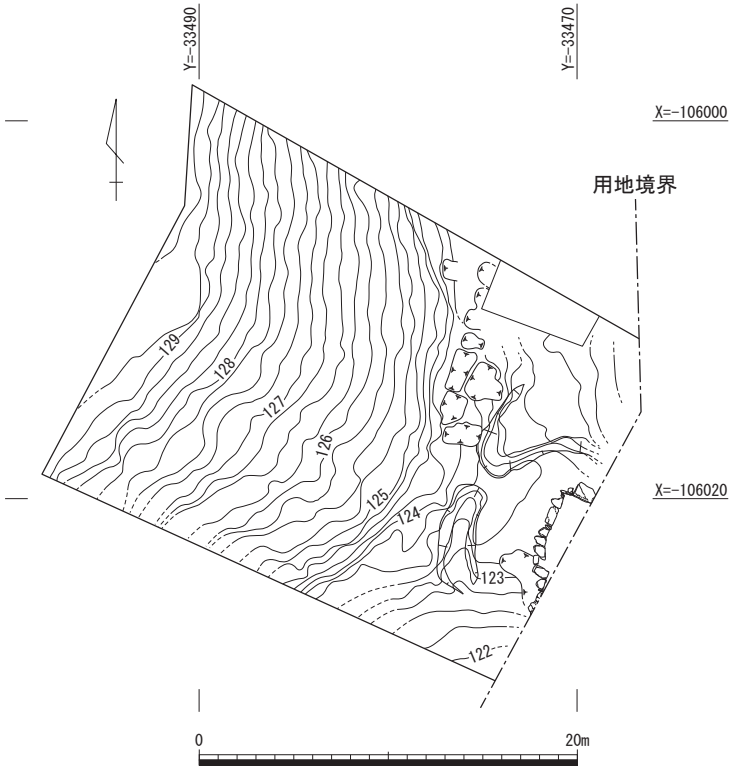
写真 23　桑山３・４号墳調査前（南東から）

尾根上に５号墳が単独で築かれている。その立地は、前者が標高 122 mから 137 m、後者が 121 mから 125 mであり、皿川西岸の水田面からの比高はそれぞれ約 20 ～ 37 mと 19 ～ 23 mを測る。調査前の状況は山林と畑地、さらには墓地でもあり、畑地や墓地造成等によって改変を受けていた（第 72 図）。

古墳群は、古墳時代後期に属する１～５号墳の５基の円墳と、３号墳の西側で検出された箱式石棺墓１基、土器棺墓１基で構成される（第 73・74 図）。南側の尾根上に所在する１～４号墳は、尾根先端部の標高 125 m付近に１号墳と２号墳、標高 135 m付近に３号墳と４号墳が立地し、現状ではそれぞれ１号墳と４号墳の方が墳頂の標高が若干高い。

調査の結果、各古墳の主体部は１・２・５号墳が横穴式石室、３号墳が箱式石棺と木棺、４号墳が竪穴式石室２基であり、それらの主軸はおおむね尾根筋に直交することを意識しているようである。これら古墳と箱式石棺墓・土器棺墓の時期は、出土遺物から６世紀中頃～後半に位置づけられる。よって、この古墳群は、短期間に形成されたようである。

なお、古墳群の掘り下げ中には、１～４号墳と同一尾根上に所在する桑山遺跡や５号墳の上方に所在する勝負峪遺跡に伴う弥生土器や古代・中世の土器が多数出土している。

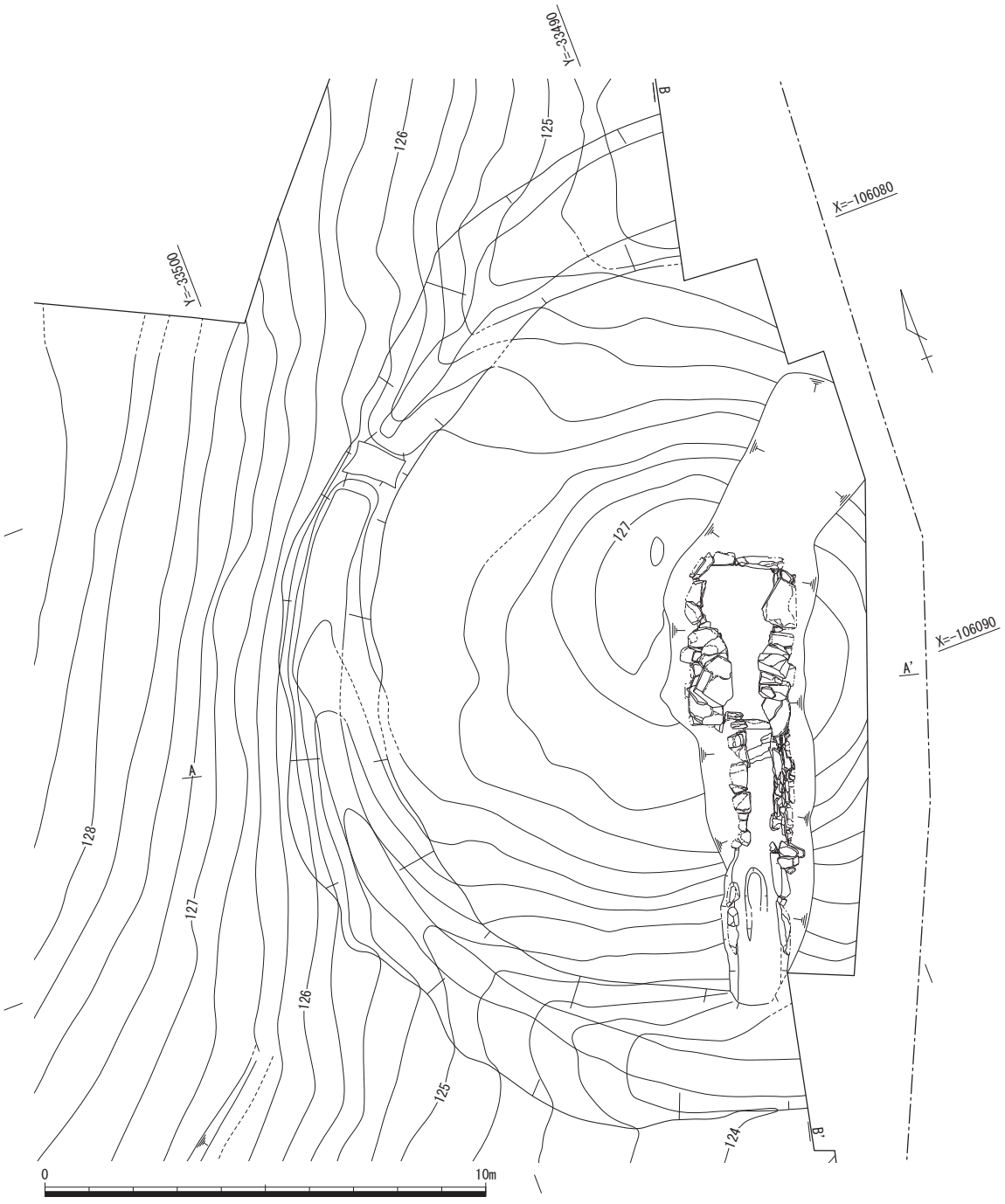


第 74 図　桑山５号墳全体図（1/400）

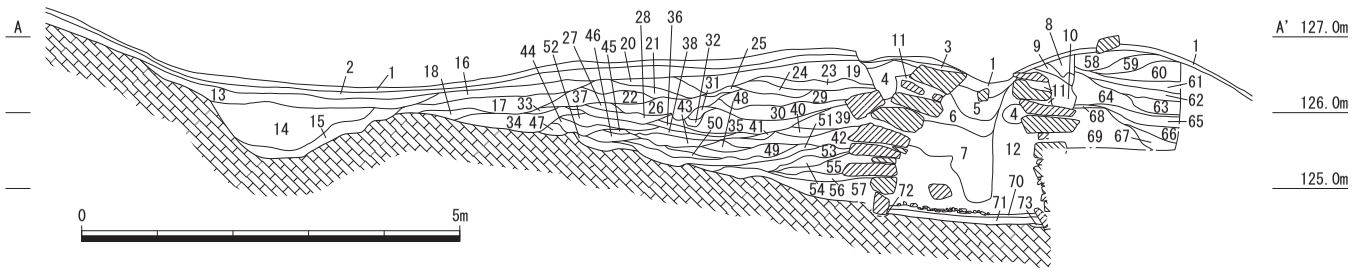
第２節　桑山１号墳

１　墳丘と周溝

１号墳は、桑山１～４号墳が立地する尾根の先端部に築かれ、南に所在する２号墳とは周溝の外側肩部で約 2.5 ｍしか離れていない（第 73 図）。

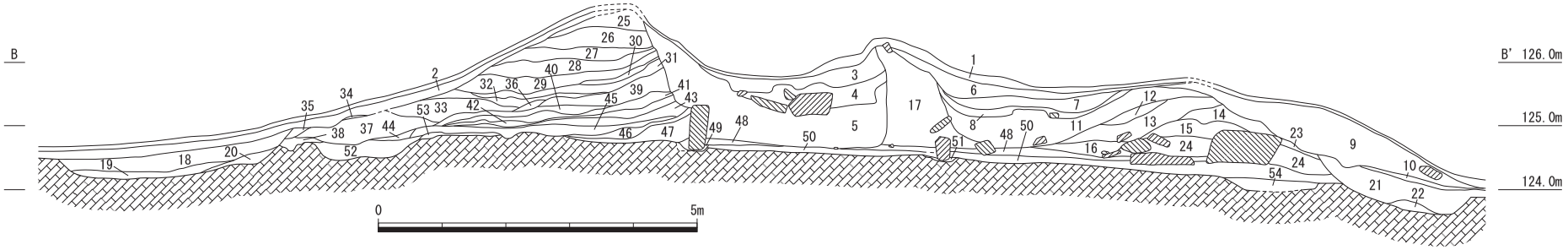


第 75 図　桑山１号墳墳丘（1/150）



1 表土・腐植土
2 褐色（7.5YR4/6）土
3 明黄褐色（10YR6/8）土
4 暗褐色（10YR3/3）土＜タヌキ穴埋土＞
5 褐色（7.5YR4/6）土＜縦断第３層＞
6 褐色（10YR4/4）土＜縦断第４層＞
7 褐色（10YR4/6）土＜縦断第５層＞
8 黄褐色（10YR5/8）土＜石室側壁が動いた後に入り込んだ土＞
9 明褐色（7.5YR5/8）土＜石室側壁が動いた後に入り込んだ土＞
10 褐色（10YR4/6）土＜石室側壁が動いた後に入り込んだ土＞
11 黄褐色（10YR5/8）土～明褐色（7.5YR5/6）土
12 黄褐色（10YR5/6）土＜縦断第17層＞
13 褐色（7.5YR4/4）土＜周溝埋土＞
14 明褐色（7.5YR5/6）土＜周溝埋土＞
15 明褐色（7.5YR5/8）土＜周溝埋土＞
16 褐色（7.5YR4/6）土＜以下、第69層まで墳丘盛土＞
17 褐色（7.5YR4/4）土
18 明褐色（7.5YR5/8）土
19 褐色（7.5YR4/6）土
20 褐色（10YR4/4）土
21 にぶい黄褐色（10YR5/4）土
22 褐色（10YR4/6）土
23 にぶい黄褐色（10YR5/3）土
24 にぶい褐色（7.5YR5/4）土
25 黄褐色（10YR5/6）土
26 明褐色（7.5YR5/8）土
27 褐色（10YR4/6）土
28 褐色（10YR4/6）土
29 褐色（7.5YR4/4）土
30 にぶい黄褐色（10YR5/4）土
31 黄褐色（10YR5/6）土
32 にぶい黄褐色（10YR5/3）土
33 明黄褐色（10YR6/6）土
34 暗褐色（7.5YR5/6）土
35 暗褐色（10YR3/4）土
36 明黄褐色（10YR6/6）土
37 明褐色（10YR5/6）土
38 黄褐色（10YR5/6）土
39 黄褐色（10YR5/6）土
40 黄褐色（10YR5/6）土
41 黄褐色（10YR5/8）土
42 褐色（10YR4/6）土
43 暗褐色（10YR3/3）土
44 褐色（10YR4/4）土
45 明黄褐色（2.5Y6/6）土
46 にぶい黄褐色（10YR5/4）土
47 黄褐色（10YR5/8）土
48 にぶい黄褐色（10YR5/4）土
49 褐色（10YR4/4）土
50 明黄褐色（10YR6/6）土
51 暗褐色（10YR3/4）土
52 褐色（10YR4/6）土
53 黄褐色（10YR5/6）土
54 暗褐色（10YR3/4）土
55 褐色（10YR4/4）土
56 暗褐色（10YR3/4）土
57 暗褐色（10YR3/3）土
58 黄褐色（10YR5/8）土
59 褐灰色（10YR5/1）土
60 明褐色（7.5YR5/8）土
61 褐色（10YR4/6）土
62 明褐色（7.5YR5/6）土
63 褐色（7.5YR4/6）土
64 黄褐色（10YR5/6）土
65 にぶい黄褐色（10YR5/4）土
66 黄褐色（10YR5/6）土
67 褐色（10YR4/6）土
68 褐色（7.5YR4/6）土
69 褐色（10YR4/4）土
70 黄褐色（10YR5/6）粘質土＜縦断第48層、石室床面整地土＞
71 暗褐色（10YR3/4）砂質土＜縦断第50層、石室整地土＞
72 にぶい赤褐色（10YR5/3）砂質土＜石室腰石掘り方埋土＞
73 にぶい黄橙色（10YR5/4）砂質土＜石室腰石掘り方埋土＞

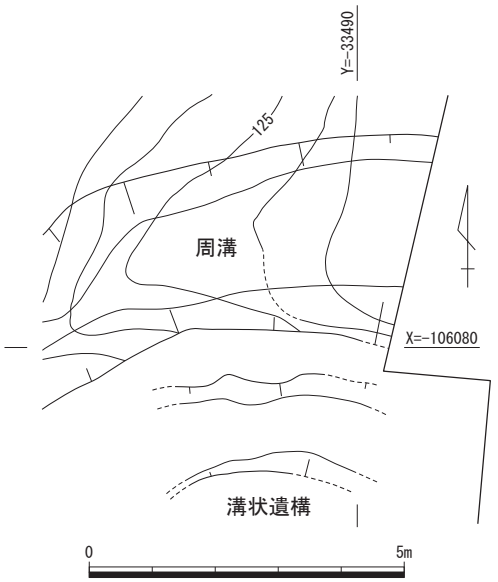
第76図　桑山１号墳墳丘・石室内土層断面①（1/100）



1　表土・腐植土
2　明褐色（7.5YR5/6）砂質土
3　褐色（7.5YR4/6）砂質土＜攪乱土＞
4　褐色（10YR4/4）砂質土＜攪乱土、ビー玉出土＞
5　褐色（10YR4/6）砂質土＜攪乱土＞
6　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜攪乱土、軍手出土＞
7　褐色（10YR4/6）砂質土＜攪乱土＞
8　黒褐色（10YR3/2）砂質土＜時期不明の旧表土層＞
9　明黄褐色（10YR6/6）砂質土
　＜石室内流土の掻き出し土か。下面付近に時期不明の旧表土あり＞
10　黄褐色（10YR5/6）砂質土
11　黄褐色（10YR5/8）砂質土＜攪乱土＞
12　褐色（10YR4/4）砂質土＜攪乱土＞
13　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜攪乱土＞
14　褐色（10YR4/6）砂質土＜攪乱土＞
15　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜攪乱土＞
16　黒褐色（10YR3/2）砂質土＜天井石架構時の流土か＞
17　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜天井石架構時の流土か＞
18　褐色（7.5YR4/6）土＜周溝埋土＞
19　褐色（10YR4/4）土＜周溝埋土＞
20　暗褐色（10YR3/4）土＜周溝埋土＞
21　褐色（10YR4/6）土＜周溝埋土＞
22　黄褐色（2.5Y5/6）土＜周溝埋土＞
23　褐色（10YR4/4）土＜墓道及び閉塞埋土＞
24　暗褐色（10YR3/3）土＜墓道及び閉塞埋土＞
25　黄褐色（10YR5/6）土＜以下、第47層まで墳丘盛土＞
26　褐色（10YR4/6）土
27　明褐色（7.5YR5/6）土
28　暗褐色（10YR3/4）土
29　褐色（10YR4/4）土
30　明褐色（7.5YR5/6）土
31　黄褐色（10YR5/6）土
32　褐色（10YR4/4）土
33　褐色（10YR4/6）土
34　褐色（7.5YR4/6）土
35　明褐色（7.5YR5/6）土
36　黄褐色（10YR5/6）土
37　明褐色（7.5YR5/6）土
38　黄褐色（10YR5/8）土
39　暗褐色（10YR3/4）土
40　暗褐色（10YR3/3）土
41　黄褐色（10YR5/8）土
42　暗褐色（10YR3/3）土
43　黄褐色（10YR5/8）土
44　褐色（10YR4/4）土
45　黒褐色（10YR3/2）土
46　黄褐色（10YR5/6）土
47　暗褐色（10YR3/4）土
48　黄褐色（10YR5/6）粘質土～褐色（10YR4/4）粘質土
　＜石室床面整地土、礫敷はこの層の上面＞
49　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土
　＜奥壁腰石掘り方埋土＞
50　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜石室整地土＞
51　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜梱石掘り方埋土＞
52　褐色（10YR4/6）土
　＜古墳構築に伴うと思われる溝状遺構埋土＞
53　暗褐色（10YR3/3）土＜旧表土もしくは漸移層＞
54　黒褐色（10YR3/2）土＜墳丘構築以前の遺構埋土か＞

第77図　桑山１号墳墳丘・石室内土層断面②（1/100）

墳丘は、その西半のみが調査対象地であり、路線外となる東半は現状のまま保存されている。墳丘西半は後世に改変（墳丘盛土の削平など）を受けており、尾根筋に当たる墳丘Ａ－Ａ’断面（第 76 図）付近は 10 × 8 m程の平坦地となっていた。また、石室奥壁背後側の墳丘は石材抜き取りもしくは盗掘によって、幅約１ｍで、深さが奥壁基底石上端（標高 125.5 m付近）まで溝状に掘削されている（第 75 図）。墳丘東半南側は墓地造成による改変が著しく墳端が消失していると推定され、北側は盛土流出や削平によるものか墳丘斜面がやや急斜となっている。周溝は、地表面観察の限り墳丘を取り囲んでいないようで、その平面形は東側が開放している半円形を呈していたものと推定される。周溝の規模は最も標高が高いＡ－Ａ’断面付近で幅約 1.5 m、深さ約 0.7 m、石室背後の北側で幅約 3.4 m、深さ約 0.3 m を測る。なお、北西側には幅約 50㎝で土橋状に掘り残した部分が認められる。以上の周溝検出状況等を手がかりに墳丘を復元すれば、径約 19 mの円墳となる。その残存高は、墓道前面の周溝底部から計測すると約 3.6 mとなり、築造時の墳丘の高さは、抜き取られた天井石等を加味すると４m以上であったと推測される。



第 78 図　桑山１号墳墳丘盛土下の溝状遺構（1/120）

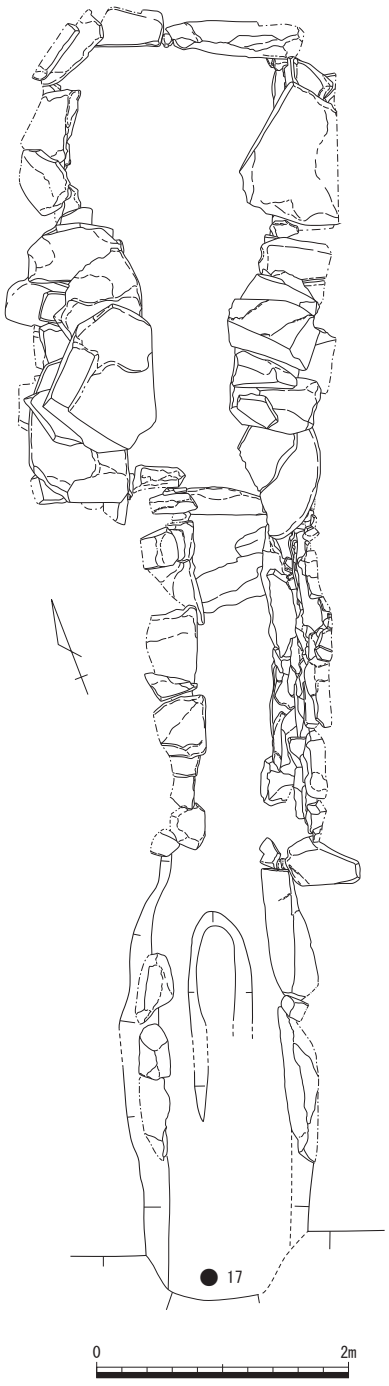
墳丘の構築は、土層断面（第 76・77 図）から、次のような工程が想定される。まず、石室構築場所の平坦地造成を意図したものか、石室主軸より西側を固く締まった地山まで掘削する一方で、東側では若干の盛土を行う。また、墳丘盛土をすべて撤去していないため詳細は不明なものの、墳丘北側では周溝の内側に幅約２mの溝状遺構を掘削する。その後石室の構築に併せて順次盛土を行い、墳丘を完成させている。盛土は、旧表土由来の暗褐色系の土と地山由来の黄褐色系の土を互層状に積み上げることを基本としているようである。

２　横穴式石室

１号墳の主体部は、墳丘のほぼ中央に築かれた横穴式石室である。調査前の状況は、天井石がすでになく、石室内には人頭大から１m四方もの崩落した石室石材とともに、土砂が厚く堆積していた。天井石は、細畝古墳群の天井石等の抜き取りと同じ理由[(1)]で持ち去られているものと思われる。石室内の埋土堆積状況から、一番新しい撹乱によって玄室の床面や石室整地土まで攪乱を受けていた。ちなみにこの攪乱は、地元住民への聞きとりによると戦後まもなく行われたようである。

桑山南古墳群や細畝古墳群と同様に、使用石材の大部分は周辺に産出する凝灰岩で、津山城の石垣にも使用された通称「津山石」である。以下に報告する他の古墳についても、竪穴式石室、横穴式石室、箱式石棺を問わず、同じ石材を利用している[(2)]。

石室は、石材が抜き取られていたり、崩落している場所が多い（第 79・80・82 図）。玄室の状況は、両側壁上部が石室内に落ち込むようにせり出し[(3)]、左側壁奥壁側基底石と右側壁玄門付近の基底石



第 79 図　桑山１号墳石室及び墓道①（1/60）
黒丸は遺物出土位置

が石室内部に向かって大きく内傾してしまったことにより、これら基底石上に置かれていた石材が落ち込んでいる（写真 24・25）。また、板状の石材を立てて用いているためか、上下に置かれていたこれら石材が「く」字状に傾いている場所もある（写真 25）。さらに積み上げた石材の重量によって下の石材が割れてしまったことにより、その上部の石材が若干石室内に突き出でしまっている所も認められる。羨道の状況は、玄門立柱石に接している基底石の上部が羨道内部に向かって大きく傾いたことにより、それより上方の石材が落ち込んでいる（第 82 図）。また、攪乱によるものか不明であるが、全体的な傾向として、左側壁は大きく内傾し羨道内に倒れ込んでいるようにみえる一方で、右側壁は羨道床面から 60㎝くらいの高さまではほぼ垂直な壁面となっているが、それより上のものは側壁の面が「ハ」字状に上方に開いていた。

以上のように築造時の姿を残していない場所も多いが、石室は主軸方向がＮ－21°－Ｅで、左側に袖をもつ片袖式である。その規模は、玄室長 3.45 ｍ、羨道長 2.85 ｍ、全長 6.30 ｍ、玄室奥壁幅 1.8 ｍ、玄室玄門側幅 1.95 ｍ、羨道最大幅 0.95 ｍ、玄室残存高 1.85 ｍ、羨道残存高 1.30 ｍを測る。奥壁基底石は、大きさ約１ｍ四方、厚さ約 0.3 ｍの２枚の板石で構成されている。この奥壁基底石と左側壁が接する場所には力石が置かれていた。袖部には、玄門立柱石として大きさ 1.3 ｍ× 0.4 ｍ× 0.3 ｍの石を立てて置いている。玄室左側壁は基底石に大きな石材を用いており、特に奥壁側から２石目までは奥壁基底石と同じ高さにするためか、約 0.8 ～１ｍ四方で、厚さ 0.15 ｍ程の板石を立てて置いている。玄室右側壁の玄門部には、高さ 0.8 ｍ以上、幅約 0.5 ｍの石を置き、玄室と羨道を区画している。羨道は、基底石に大きな石材を用い、それより上は左側壁が 0.2 ×１ｍ程度の面を持つ石材を平積みしている一方で、右側壁が比較的小型の石材で積み上げている。

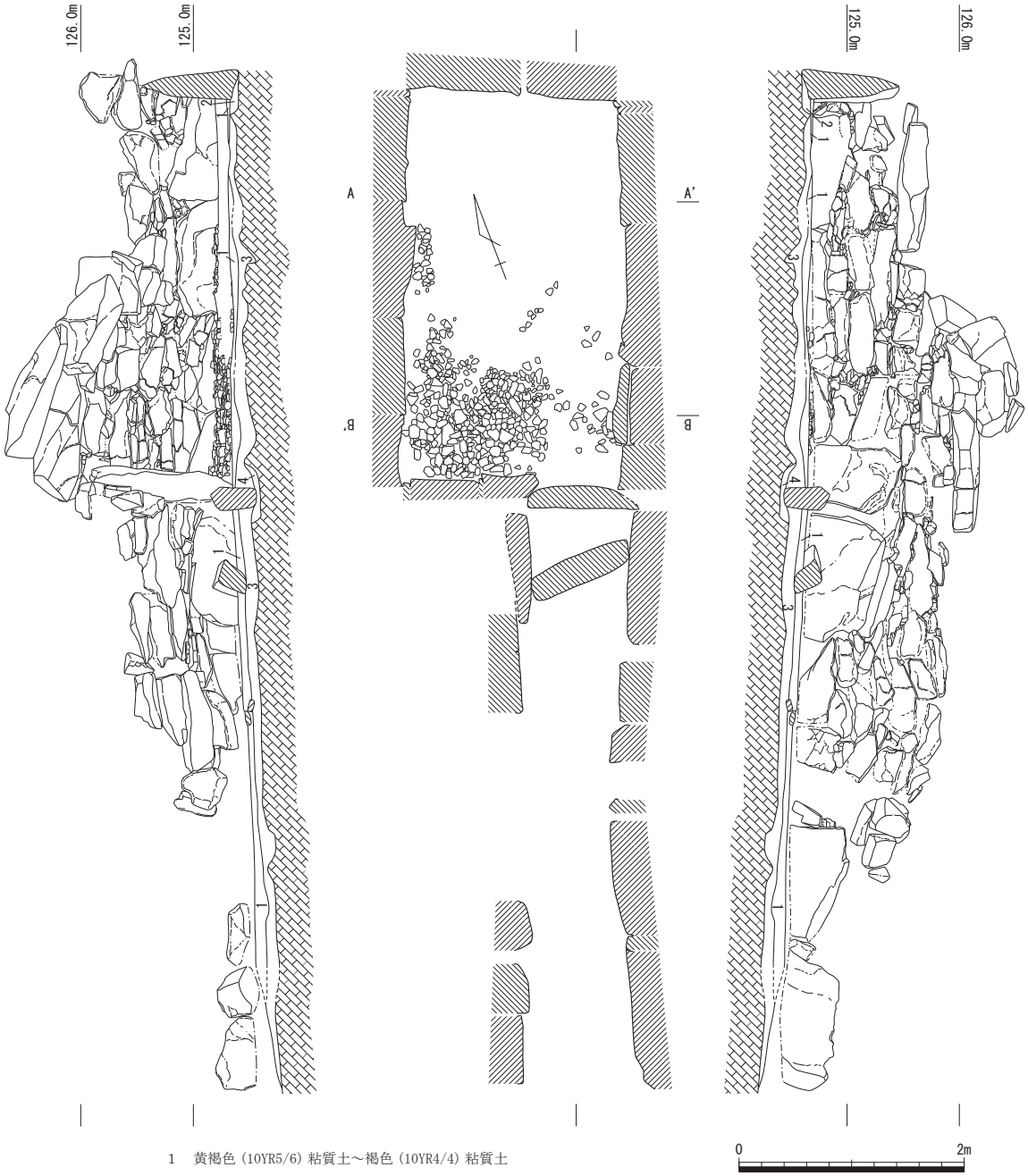
床面はおおむね水平であるが、旧地形を反映したためか左側壁側及び奥壁側が標高が高く、右側壁側及び開口部側が低い。攪乱を免れた袖部付近からは、５㎝大の川原石を薄く敷いた礫床が確認された（第 80 図）。玄門部には１ｍ× 0.15 ｍ× 0.4 ｍの直方体を呈する石を用いた梱石が置かれており、その上面と床面との比高差は約 0.2 ｍを測る。この梱石から約 0.4 ｍ開口部側にも、ほぼ同じ大きさで直方体を呈する石が石室主軸に対し斜行して置かれている。羨道を区画する目的で配された石の可能性もあるが、その性格は不明である。

閉塞は板石閉塞であったようだが、検出時には後世の攪乱によって板石が墓道側におおよそ斜め 45°の角度で倒れ込んでいた（第 83 図）。板石は大きさ 1.35 ｍ× 0.85 ｍ× 0.15 ｍの長方形を呈するが、右側壁側の下半が抉れている。そのため閉塞時には空隙部分をなくすようにその抉れた部分に小型の

石材を詰め込み、閉塞の密封度を上げていたようである。

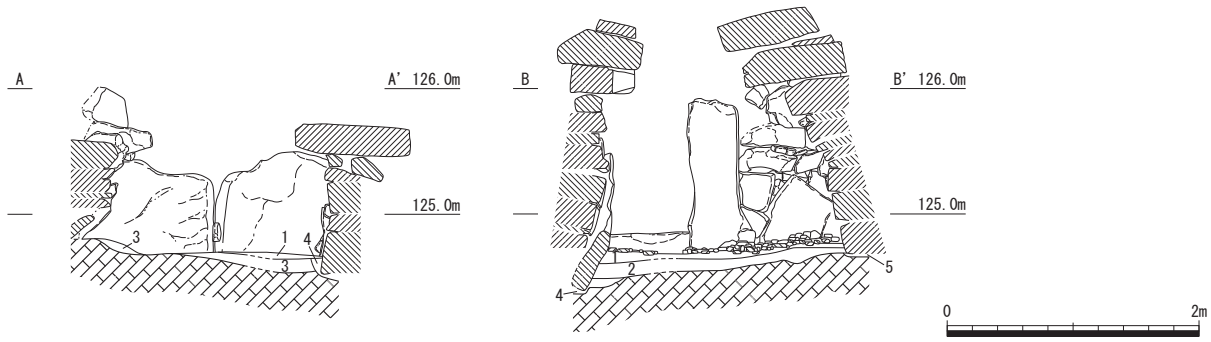
閉塞施設から外側が墓道で、その規模は長さ 3.58 m、幅 0.98 mである。側壁は閉塞施設から約 2.5 m外側まで大型の石を据え、それより前方が素掘りである。ただし、左側壁側では閉塞施設から南側約 0.5 mまで大型の石が認められなかった。構築時から石がなかったのか、攪乱時に撤去されたのか判然としない。

以上の石室検出状況から石室の構造を復元すると、石室は左片袖で、玄門立柱石や梱石によって玄室と羨道が明確に分かれている。玄室は持ち送りで、奥壁左側の角部分には力石が置かれている。石材の積み方は横目地が通るが、右側壁玄門部は縦目地が通りそうである。基底石の一部には、大型の



1　黄褐色（10YR5/6）粘質土～褐色（10YR4/4）粘質土
2　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土
3　暗褐色（10YR3/4）砂質土
4　暗褐色（10YR3/4）砂質土

第 80 図　桑山１号墳石室及び墓道②（1/60）



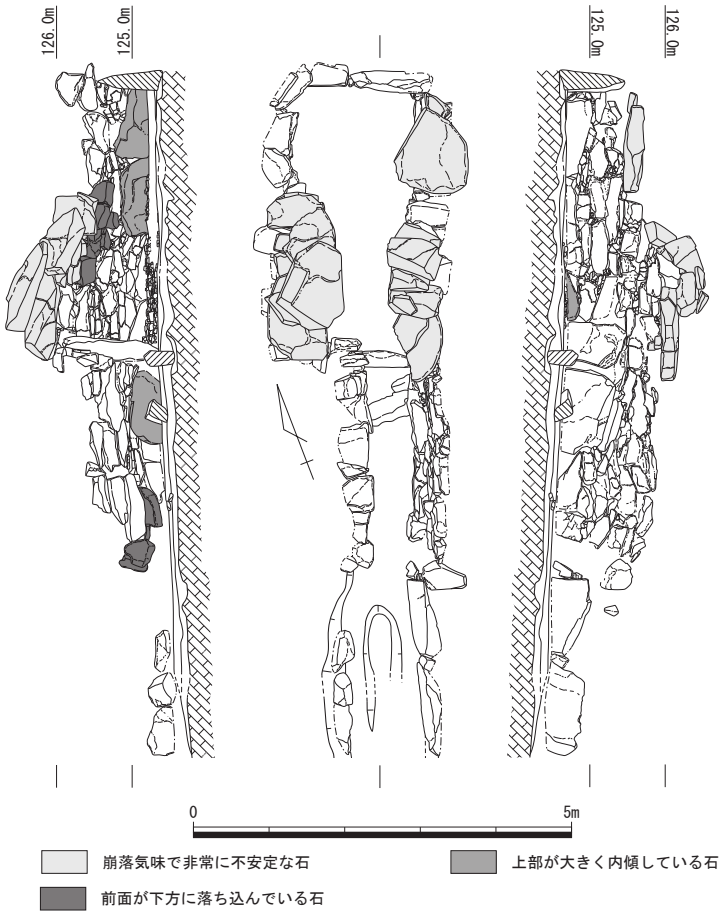
1　黄褐色（10YR5/6）粘質土～褐色（10YR4/4）粘質土　　3　暗褐色（10YR3/4）砂質土　　5　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
2　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土　　4　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土

第 81 図　桑山１号墳石室奥壁及び袖部見通し（1/60）

板状の石を立てて用いており、いわゆる腰石を意識していると想定される。羨道部の高さは、玄門立柱石の上端高、羨道右側壁上端高、閉塞に用いられた板石の大きさから、おおむね 1.3 ｍであったと推測される。

３　石室及び墓道内遺物出土状況

先に述べたとおり、玄室内は礫床及び石室整地土まで攪乱を受けており、原位置を留める遺物は袖部と左側壁際のみから出土している（第 84 図）。袖部の礫床上からは、須恵器杯蓋（１～５）、須恵



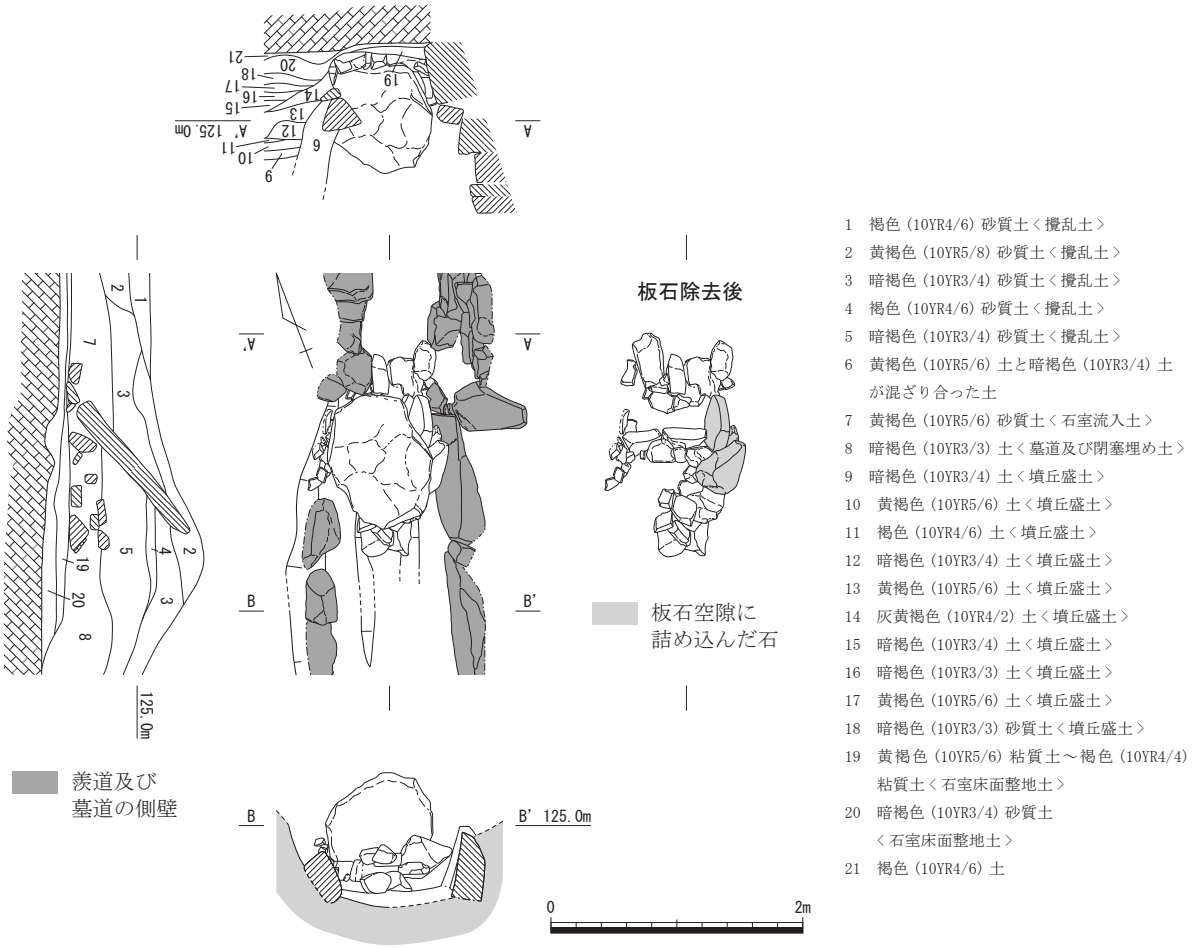
第 82 図　桑山１号墳石室石材崩落等模式図（1/100）



写真 24　桑山１号墳側壁崩落状況
〈左側壁奥壁側〉（南から）



写真 25　桑山１号墳側壁崩落状況
〈右側壁玄門付近〉（北から）



第 83 図　桑山１号墳閉塞施設・墓道（1/60）

器杯身（８～ 12）、須恵器壺（24）、須恵器提瓶（30）、石突（Ｍ３）が出土している。杯蓋はいずれもひっくり返った状態であり、さらにセット関係と推測される杯身と離れて出土しているものもある。壺は立てて置かれ、その口縁部にはセット関係となる杯蓋（５）と杯身（12）が置かれていた。鉄鏃は、その形態ごとに出土位置が異なり、細根系のもの（Ｍ４～Ｍ 13）が奥壁左側、平根系のもの（Ｍ 14～Ｍ 17）が左側壁中央部から検出されている。細根系の鉄鏃は、その鏃身が左側壁側に、平根系の石鏃は、Ｍ 14～Ｍ 16 が鏃身を奥壁側に、Ｍ 17 が左側壁側に向けた状態で検出された。琥珀製の棗玉（Ｓ２）が玄門部から約 0.7 ｍ奥壁側で出土しているが、この場所は礫床の状況を見る限り若干の攪乱を受けているようで、原位置を留めているのか判然としない。その他の遺物は、主に石室内の攪乱土中から出土しているが、須恵器杯蓋（６）、須恵器杯身（14）、須恵器高杯（16）、須恵器𤭯（19）、須恵器壺（23）、有蓋台付壺（28）は奥壁背後の溝状に掘削された攪乱跡の底面付近に堆積していた土から出土した。礫床に用いられている川原石に近似した礫が含まれていたこの土は、その由来が石室床面付近に堆積していた土と想定されることから、これらの遺物は石室内に副葬されていたものと考えられる。

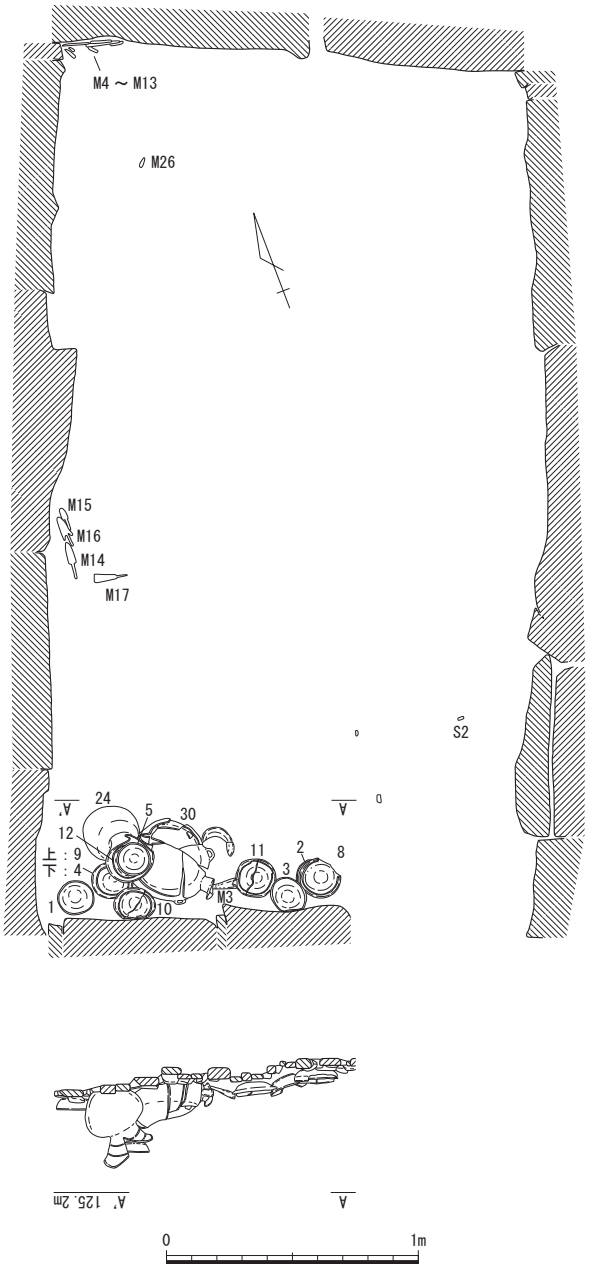
なお墓道底面から須恵器高杯（17）が出土している（第 79 図）。その出土位置からこの土器は、墓前祭祀に関係するものかもしれない。

４　石室及び墓道内出土遺物

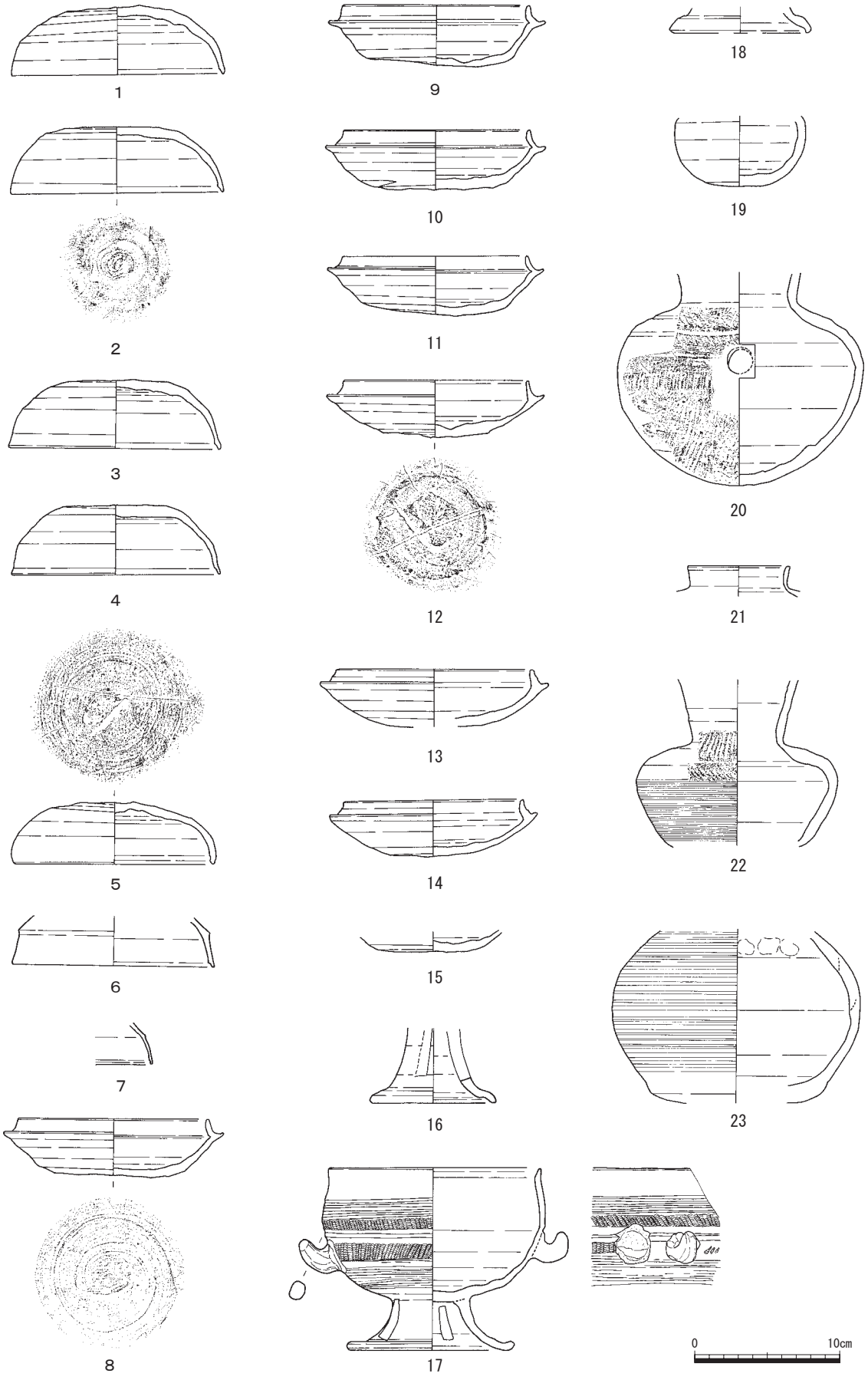
土器（第 85・86 図、図版 61・62 － 1 ・63）

土器は、図示し得たもので須恵器 30 個体、土師器 1 個体があるが、先述したように原位置を留めるものは袖部から出土した須恵器 12 個体である。

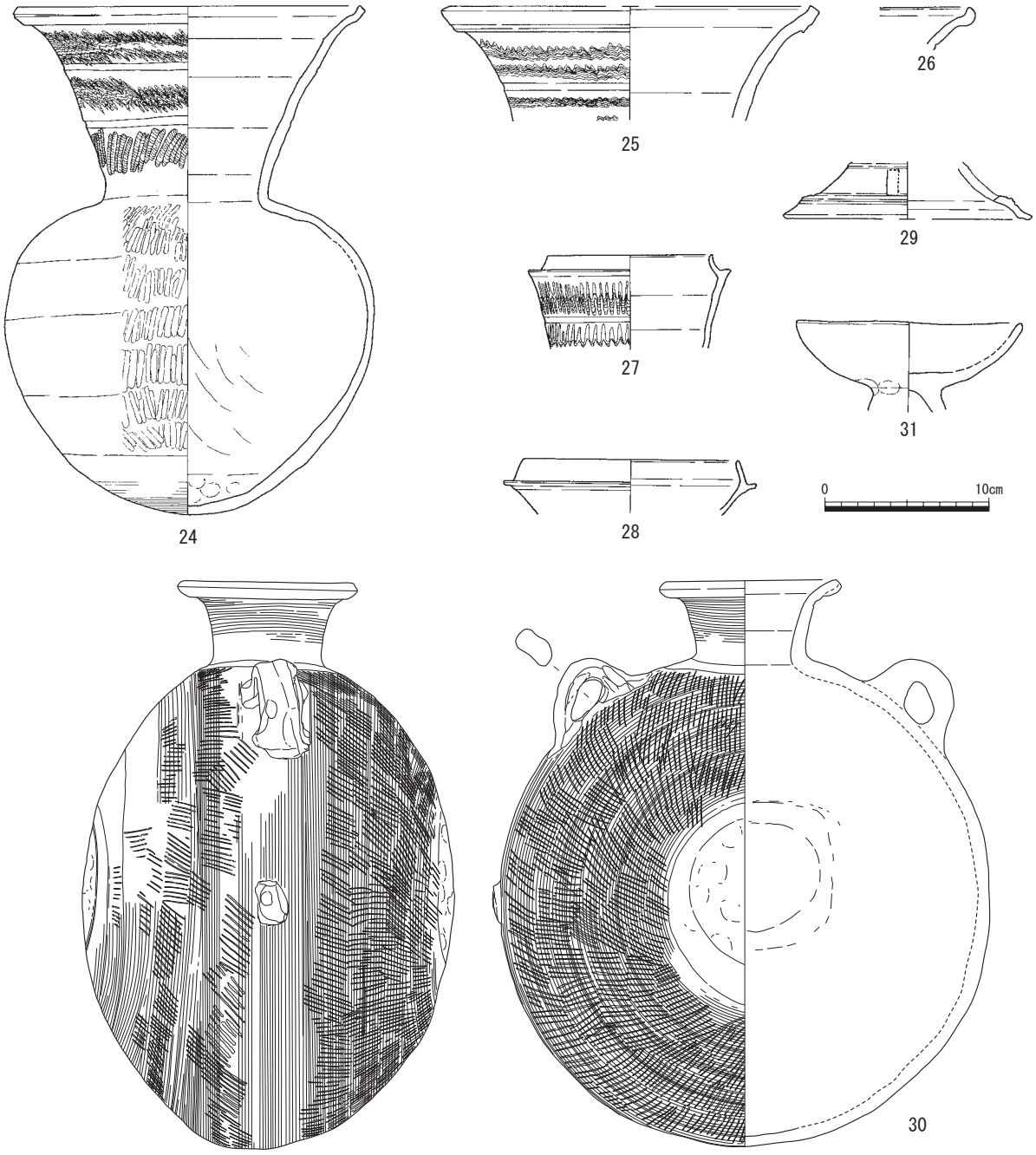
須恵器の蓋杯は、焼成がやや不良で、外面灰白色、内面浅黄橙色を呈する杯蓋（１～４）、杯身（８～ 11）と、良好な焼成で、灰色を呈する杯蓋（５～７）、杯身（12 ～ 15）に分けることができる。前者は、口径 14.3 ～ 14.6cm、器高 4.6 ～ 4.9cm で、口縁端部に内傾する面を有し、天井部と口縁部の境界に凹線などをもたない形態の杯蓋と、口径 12.7 ～ 12.9cm、器高 4.1 ～ 4.3cm で、立ち上がりがやや急角度で、受け部付近の器内面が鋭く屈曲している形態の杯身である。これら蓋杯はいずれも形態や大きさが近似しているため、セット関係を確定させることが困難であるが、１と９、２と８が組み合うものと思われる。焼成が良好な杯蓋は、口縁端部に内傾する面を有するもの（６・７）と口縁端部内側に凹線状の凹みが巡るもの（５）がある。５の杯蓋と組み合う杯身は底部外面に一文字のヘラ記号が認められる 12 であろう。17 は椀状の杯部に上方向に屈曲する把手が２個付いた高杯である。杯部外面には、櫛状工具による刺突文や 2 条の凹線、さらにカキメを施している。把手は、当初相対する位置に配されていなかったためか、土器がある程度乾燥していたにもかかわらず片方の把手を取り外し、付け直しが行われている。その際、把手を取り外した場所を補修することなく、そのままの状態で焼成している。体部最大径が中位にあり、底部がやや丸く突出する 20 の瓶は、体部外面が平行タタキ後カキメ調整で、その肩部に櫛描波状文を施している。22 は直口壺で、胴部にカキメ、肩部に櫛状工具による刺突文が認められる。24 ～ 26 は広口壺である。球形の体部に外反して広く開く口縁部を持つ 24 の壺は、頸部に櫛描波状文と櫛描刺突文を巡らし、体部に平行タタキの痕跡が認められる。口縁部に蓋受けの立ち上がりを持つ有蓋台付壺は、２点出土している。口縁部から頸部上部まで残存している 27 は、凹線で区画された上下の文様帯のいずれにも櫛描波状文が施される。29 は台付



第 84 図　桑山１号墳玄室遺物出土状況（1/30）



第 85 図　桑山１号墳石室及び墓道出土遺物（1/4）

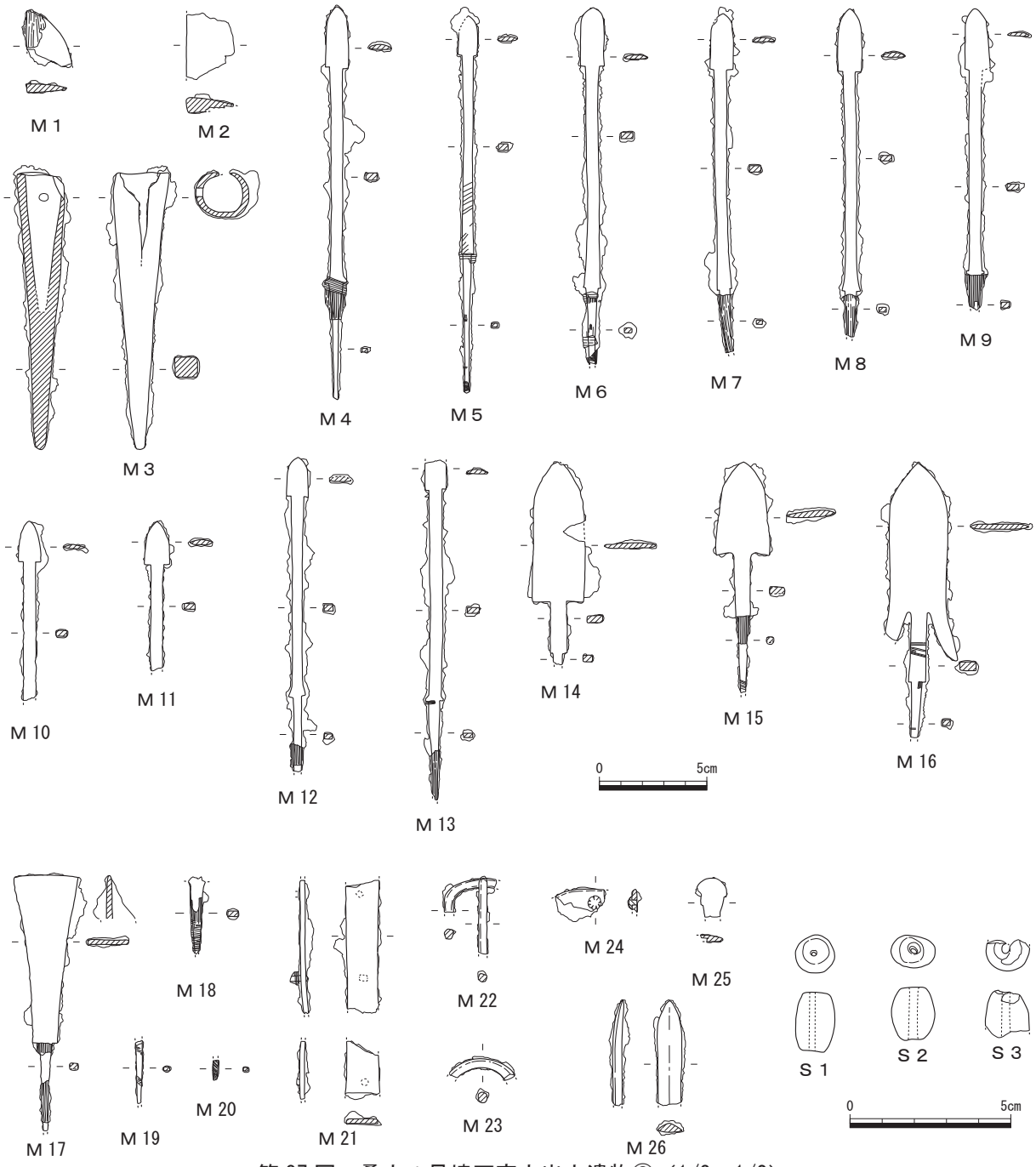


第 86 図　桑山１号墳石室内出土遺物①（1/4）

壺の台部と想定され、4 方向に透かしが施されている。体部外面が平行タタキの後カキメ調整を施した 30 の提瓶は、環状の把手を持つ。土師器の高杯（31）は、器表面が摩滅している。

武器（第 87 図、図版 62 － 2）

石室内から出土した武器には、大刀、石突、鉄鏃がある。**Ｍ１**は大刀の切先で、鞘と思われる木質が残存している。**Ｍ２**は大刀の背の部分で、**Ｍ１**と同一個体かどうか不明である。**Ｍ３**は、全長 12.9cm、最大幅 2.6cm の石突である。先端から 6.3cm 以降が袋部で、その合わせ目は中程までは開いているが、それより先端側はきっちり閉じられている。袋部の断面は円形で、その内径は 1.8cm、外径は 2.5cm を測る。先端部の断面は、長辺最大 1.5cm、短辺最大 1.2cm のやや長方形を呈している。径 0.4cm の目釘孔は、合わせ目と 90° ずらした位置に穿孔されている。鉄鏃は鏃身で計数すると 14



第 87 図　桑山１号墳石室内出土遺物②（1/3・1/2）

本出土した。細根・柳葉式のＭ４～Ｍ 13 は、鏃身断面が片丸造のものが７本で、残りは平造もしくは両丸造である。茎関には角関や台形関もあるが、棘状突起を有しているものも見られる。茎に矢柄口巻、矢柄木質、茎糸巻が観察されるものが多い。平根系の鉄鏃の型式は、三角形式（Ｍ 14・Ｍ 15）、腸抉柳葉式（Ｍ 16）、方頭式（Ｍ 17）がある。

馬具（第 87 図、図版 62 －２）

図示した馬具（Ｍ 21 ～Ｍ 24）は、すべて攪乱土中からである。Ｍ 21 は鐙の吊金具で、鐙を固定する釘に横方向の木質が残存しているものがある。Ｍ 22 は鋲具の輪金と刺金である。Ｍ 23 は鋲具の輪金と思われる。鉄地金銅貼と思われるＭ 24 は飾金具としたが、雲珠や辻金具の脚部の可能性もある。

径６㎜を測る鋲頭には、８本の刻み目を施している。

工具ほか（第 87 図、図版 62 －２）

Ｍ 25 は攪乱土から出土した不明鉄器である。**Ｍ 26** は残存長 4.9cm、幅 1.05cm、厚さ 0.6cm のヤリガンナの刃部で、平行してのびる刃部は中央に稜をもつ山形の断面となる。先端部の１cm 程が平面三角形となり、さらに側面図のように緩やかに湾曲する。

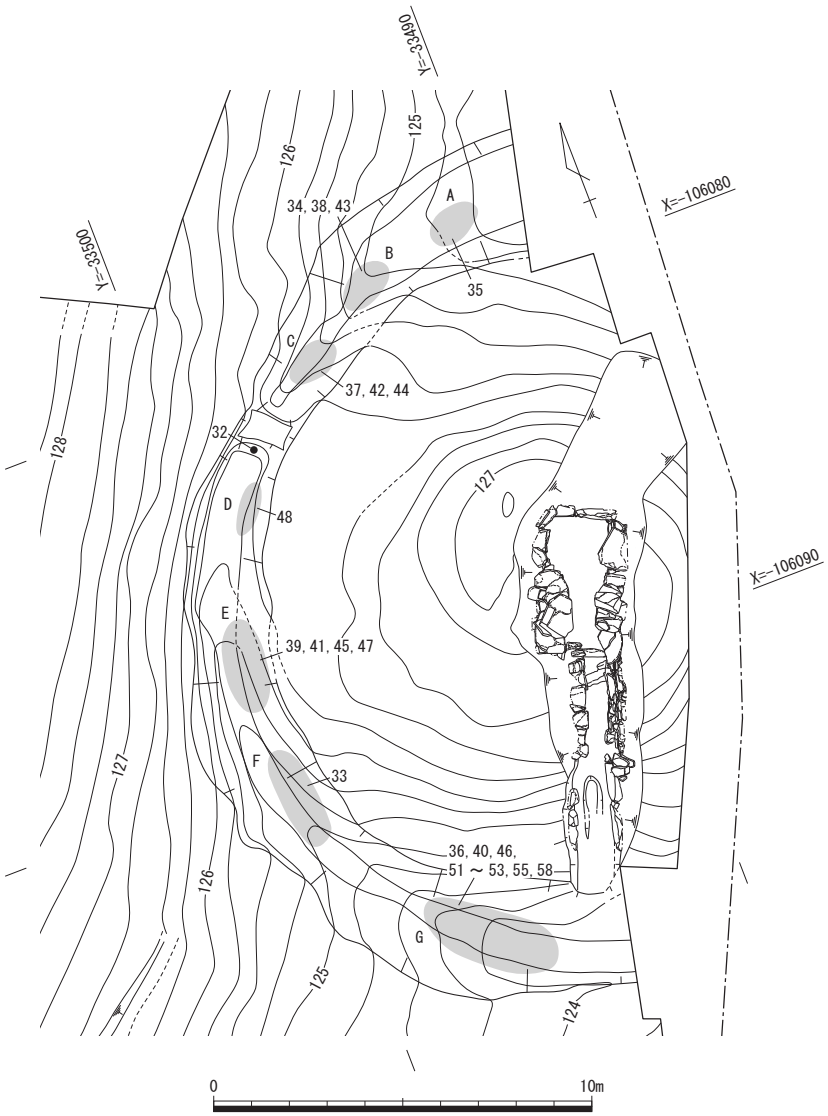
玉類（第 87 図、巻頭図版５－１）

Ｓ１～Ｓ３は、琥珀製の棗玉である。**Ｓ１**は、最大長 18.2㎜、最大幅 11.9㎜、孔径 1.9㎜を測る。**Ｓ２**は最大長 16.4㎜、最大幅 13.4㎜で、孔径が 2.8㎜と**Ｓ１**より大きい。

５　周溝及び墳丘出土遺物

墳丘表土や周溝内からは、埴輪をはじめとして弥生土器、須恵器、土師器などが多数出土した。このうち弥生時代及び飛鳥時代以降に帰属する遺物については、桑山遺跡で遺構に伴わない遺物として紹介している（本書第４章）。本項では、本墳に伴うと想定される遺物について記載する。

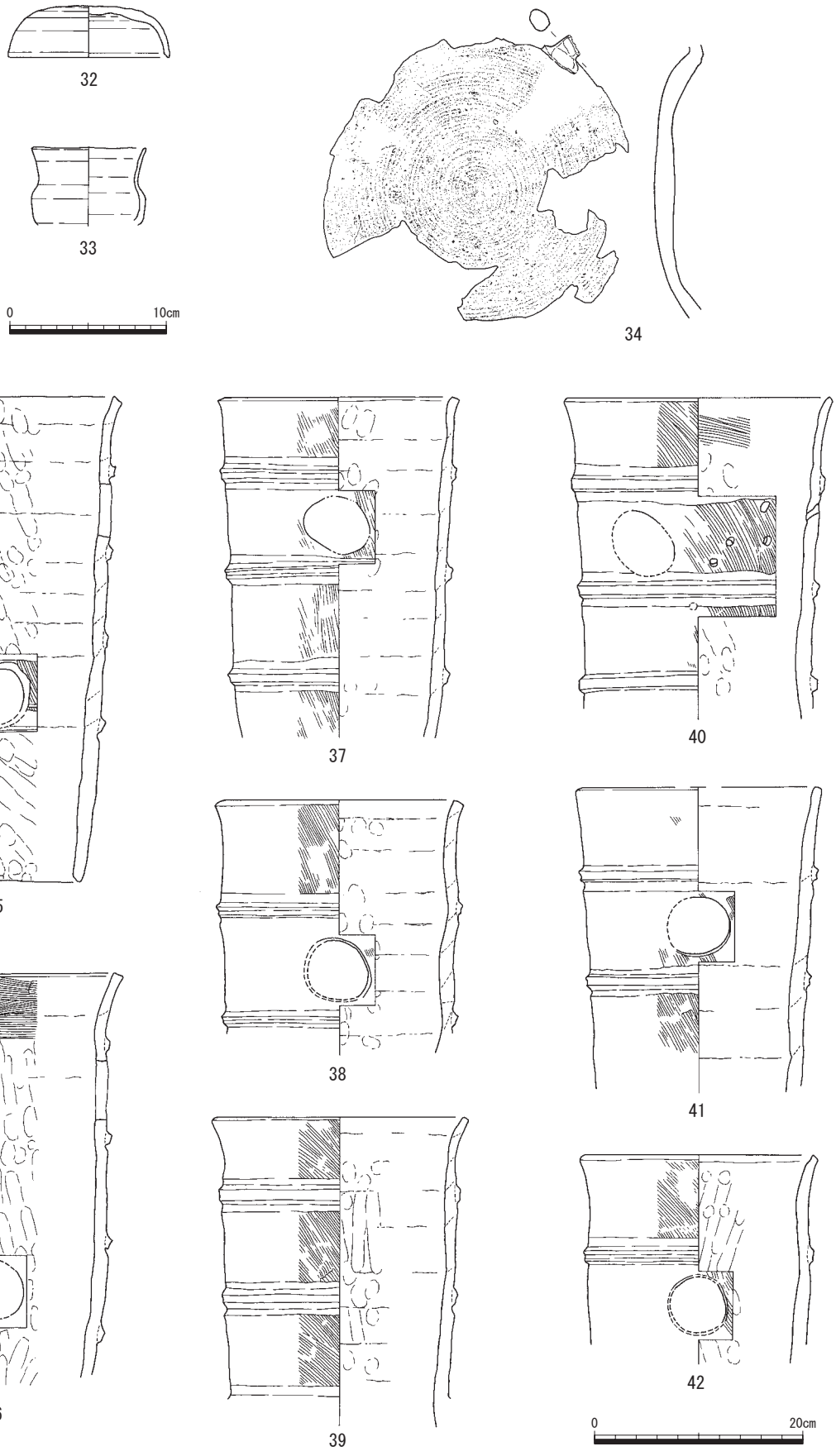
周溝内には、墳丘を取り巻くようにＡ～Ｇの７か所の土器出土集中部が認められる（第 88 図）。須恵器杯蓋（32）は、意図的に置かれたものか不明であるが、周溝を土橋状に掘り残した場所のすぐ南側で出土している。小型の壺（33）は、埴輪小片とともにＦ範囲から出土したものである。数多くの破片からの復元である提瓶（34）は、大きな破片がＢ範囲から、その他は周溝南西部や墳丘表土からの出土であり、墳丘頂部に置かれていたものかもしれない。



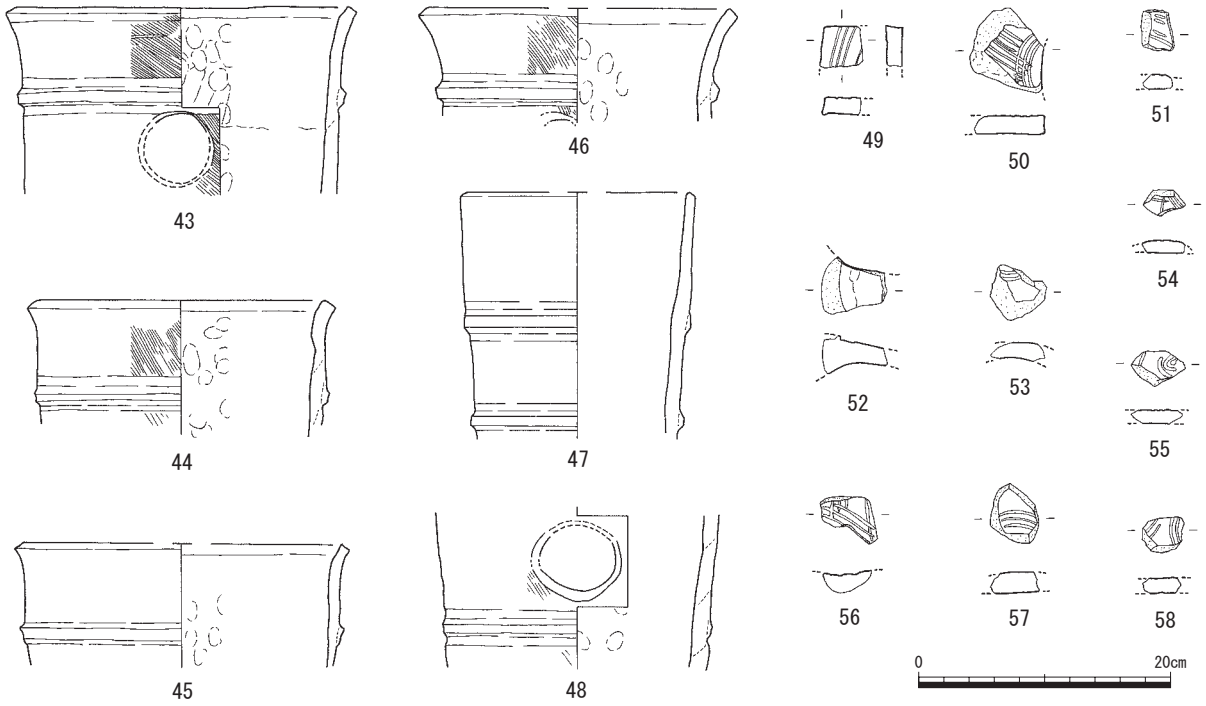
第 88 図　桑山１号墳周溝内遺物出土状況（1/200）

出土した埴輪には、円筒埴輪（35 ～ 48）のほかに盾形埴輪もしくは石見型埴輪（49 ～ 58）がある。

円筒埴輪の諸特徴は次のとおりである。口縁部は緩やかに外反し、その口径が 22 ～ 25cm のものが主体となる。焼成は良好で、酸化炎焼成による黄橙色系の色調をなすものが多く、還元炎焼成による



第 89 図　桑山１号墳周溝及び墳丘出土遺物①（1/6・1/4）



第 90 図　桑山１号墳周溝及び墳丘出土遺物②（1/6）

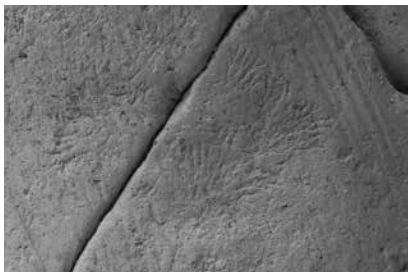


写真 26　埴輪 38 表面の傷状痕跡

灰色を呈するものは少ない。調整は、外面がナナメハケ、内面がナデ調整で、一部内面にヨコハケが施されているものが認められる。突帯の断面形状は、台形のもの、下側の突出度が低く三角形状に近いもの、端部を強くナデて「M」字形を呈するものなどがある。突帯間距離は、８～９cm が主体となる。穿孔はすべて円形で、相対する位置に１対ある。これらは 35 と 36 から下から２段目と４段目に施され、その穿孔の位置関係は２段目と４段目で 90 度方向を変えていたと思われる。そのほか小破片のため図化していないが、35 で確認された突帯の貼り付け場所を示す凹線の区画線、40 に見られる外面から斜め下方向に穿った径１cm 弱の小孔などを残すものが少量出土している。また、38 には、細かな無数のひっかき傷状の痕跡が認められた（写真 26）。ドロバチ類が泥を採取した痕跡とも想像されるが詳細は不明である。その痕跡であるならば、営巣活動を行う６月下旬から 10 月中旬頃に埴輪の乾燥作業を行っていたと推定される（4）。

器表面に弧状を呈する沈線を描いているものを盾形埴輪もしくは石見型埴輪とした。これらはいずれも小破片であり、接合するものもない。胎土は、円筒埴輪と比べると精緻であり、意図的に粘土の使い分けが行われたと想定される。（小嶋）

註

（1）尾上元規 2022「石室石材の再利用」『桑山南古墳群・細畝古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 255

（2）尾上元規 2022「桑山南１号墳」『桑山南古墳群・細畝古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 255

（3）安全上、崩落気味の石材を順次撤去しつつ調査を行った。そのため石室全景等の写真には、これら石材が写っていない。

（4）市野隆雄 1992『ドロバチ類の個体群動態に関する比較生態学的研究』

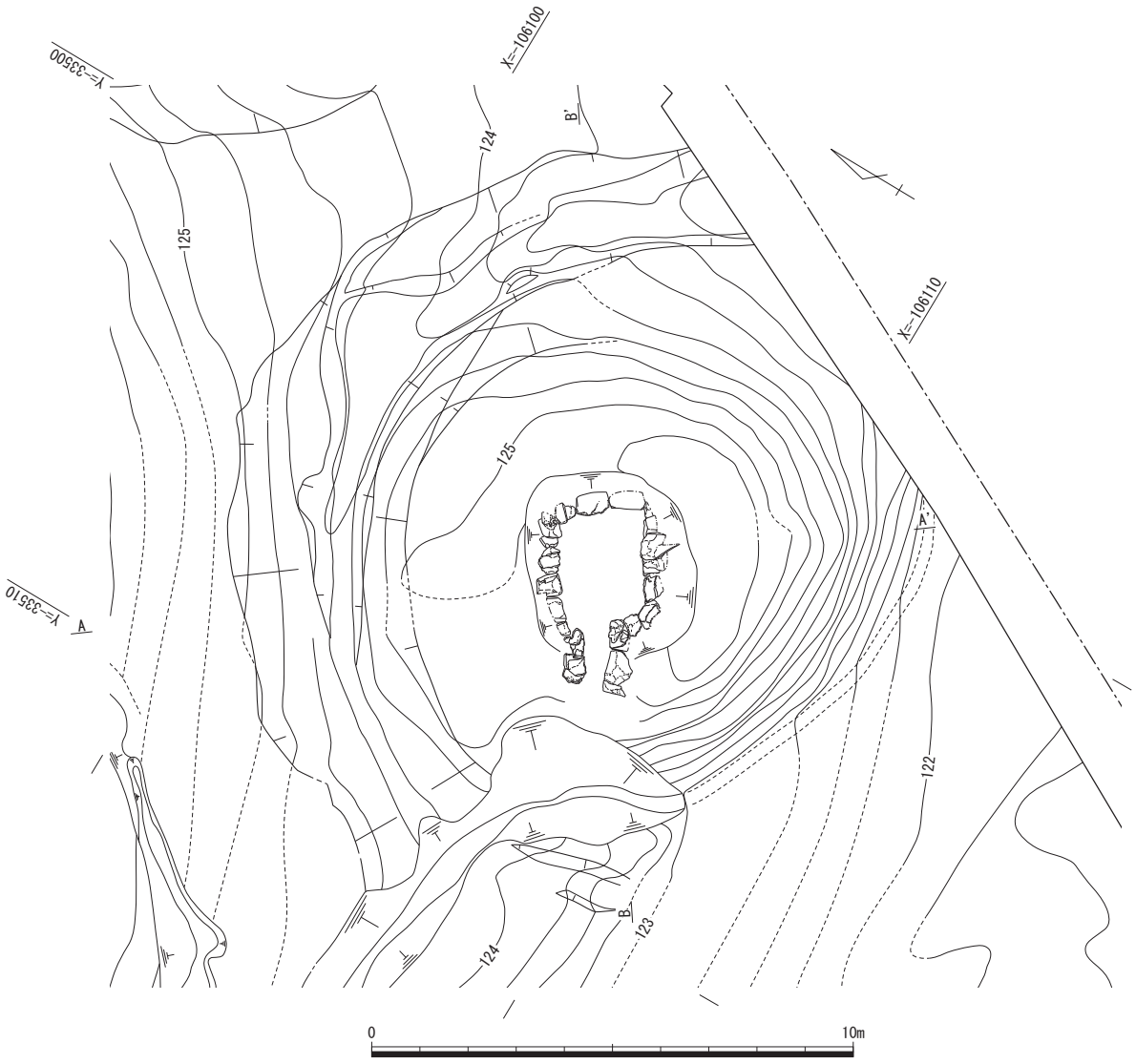
第３節　桑山２号墳

１　墳丘と周溝

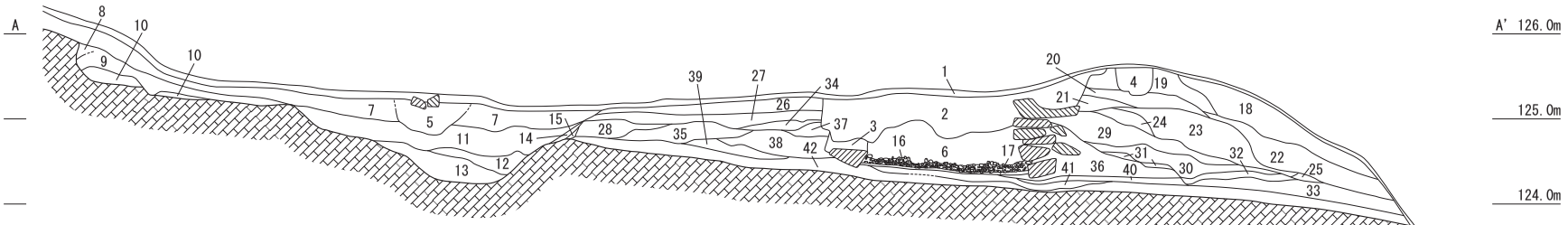
２号墳は、桑山１～４号墳が立地する尾根の先端部に占地し、北隣に所在する１号墳と比べると若干標高が低い場所に築かれている（第 73 図）。

墳丘は、後世に大規模に改変を受けている。墳丘北西側は、飛鳥時代以降に行われたと想定される盛土削平及び周溝の埋め立てにより地表面がほぼ水平となり（図版 33－１）、墳丘南西側は、古代末～中世頃の粘土採掘や時期不詳の畑地造成のため大規模に削平を受けていた。また石室開口部側は畑地の山側に設けられた排水溝によって周溝底面のみ残存し、墳丘の南～南西にかけては畑地を広げるために墳丘を削ったようで、その場所の傾斜は急である。

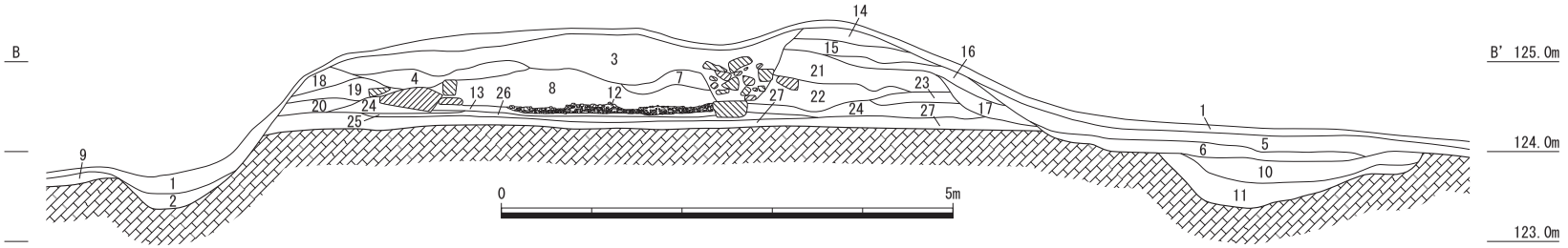
調査区外である南東側は地表面観察のみであるが、周溝の痕跡を示すような凹みが見られない。よっ



第 91 図　桑山２号墳墳丘（1/150）



1　表土・腐植土
2　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜攪乱土＞
3　褐色（10YR4/6）砂質土＜攪乱土＞
4　明黄褐色（2.5Y7/6）砂質土＜後世の穴埋土＞
5　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜埋葬遺構２埋土＞
6　褐色（10YR4/6）砂質土
7　黄褐色（10YR5/6）粘質土
（木炭、古代の土器を含む）
8　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜段状遺構７埋土＞
9　褐色（10YR4/6）砂質土＜段状遺構７埋土＞
10　黄褐色（10YR5/8）砂質土＜段状遺構７埋土＞
11　褐色（10YR4/6）粘質土（炭粒・焼土粒多含）＜周溝埋土＞
12　黄褐色（10YR5/8）粘質土＜周溝埋土＞
13　黄褐色（10YR5/6）粘質土＜周溝埋土＞
14　褐色（10YR4/6）砂質土＜周溝埋土＞
15　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜周溝埋土＞
16　礫（1～5cm大の川原石）及び川砂層＜礫床＞
17　明黄褐色（10YR6/8）粘質土＜石室床面整地土＞
18　黄褐色（10YR5/8）砂質土＜以下、第39層まで墳丘盛土＞
19　褐灰色（10YR5/1）砂質土
20　黄褐色（10YR5/6）砂質土
21　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
22　明黄褐色（10YR6/6）粘質土
23　暗褐色（10YR3/3）砂質土
24　黄褐色（10YR5/8）粘質土
25　黄褐色（10YR5/6）砂質土
26　黄褐色（10YR5/6）砂質土
27　褐色（10YR4/6）砂質土
28　黄褐色（10YR5/8）粘質土
29　黄褐色（10YR5/6）粘質土
30　黄褐色（10YR5/6）砂質土
31　明黄褐色（10YR6/6）粘質土
32　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
33　黄褐色（10YR5/6）粘質土
34　黄褐色（10YR5/8）粘質土
35　褐色（10YR4/6）粘質土
36　黒褐色（10YR3/2）砂質土
37　褐色（10YR4/4）砂質土
38　暗褐色（10YR3/4）砂質土
39　暗褐色（10YR3/3）砂質土
40　黄褐色（10YR5/6）粘質土＜墳丘整地土か＞
41　黒色（10YR2/1）砂質土＜墳丘整地土か＞
42　黒褐色（10YR3/1）砂質土＜旧表土＞

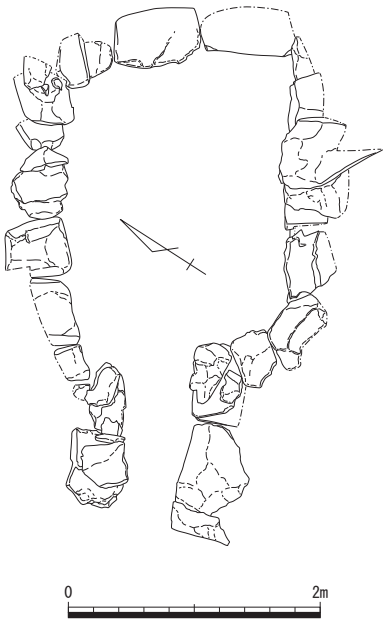


1　表土・腐植土
2　褐色（10YR4/4）粘質土＜畑の山側の排水溝埋土＞
3　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜攪乱土＞
4　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜攪乱土＞
5　褐色（10YR4/6）砂質土
6　褐色（10YR4/4）砂質土（木炭、古代の土器を含む）
7　暗褐色（10YR3/4）砂質土
8　褐色（10YR4/6）砂質土
9　黄褐色（10YR5/6）砂質土
10　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜周溝埋土＞
11　褐色（10YR4/6）砂質土（埴輪多含）＜周溝埋土＞
12　礫（1～5cm大の川原石）及び川砂層＜礫床＞
13　明黄褐色（10YR6/8）粘質土＜石室床面整地土＞
14　黄褐色（10YR5/6）砂質土
＜以下、第26層まで墳丘盛土＞
15　褐色（10YR4/6）砂質土
16　明黄褐色（10YR6/8）粘質土
17　褐色（10YR4/6）粘質土
18　褐色（10YR4/6）砂質土
19　暗褐色（10YR3/4）砂質土
20　暗褐色（10YR3/4）砂質土
21　黄褐色（10YR5/6）砂質土
22　褐色（10YR4/4）砂質土
23　黄褐色（10YR5/8）粘質土
24　暗褐色（10YR3/4）砂質土
25　黒褐色（10YR3/2）砂質土
26　黒色（10YR2/1）砂質土
27　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜旧表土＞

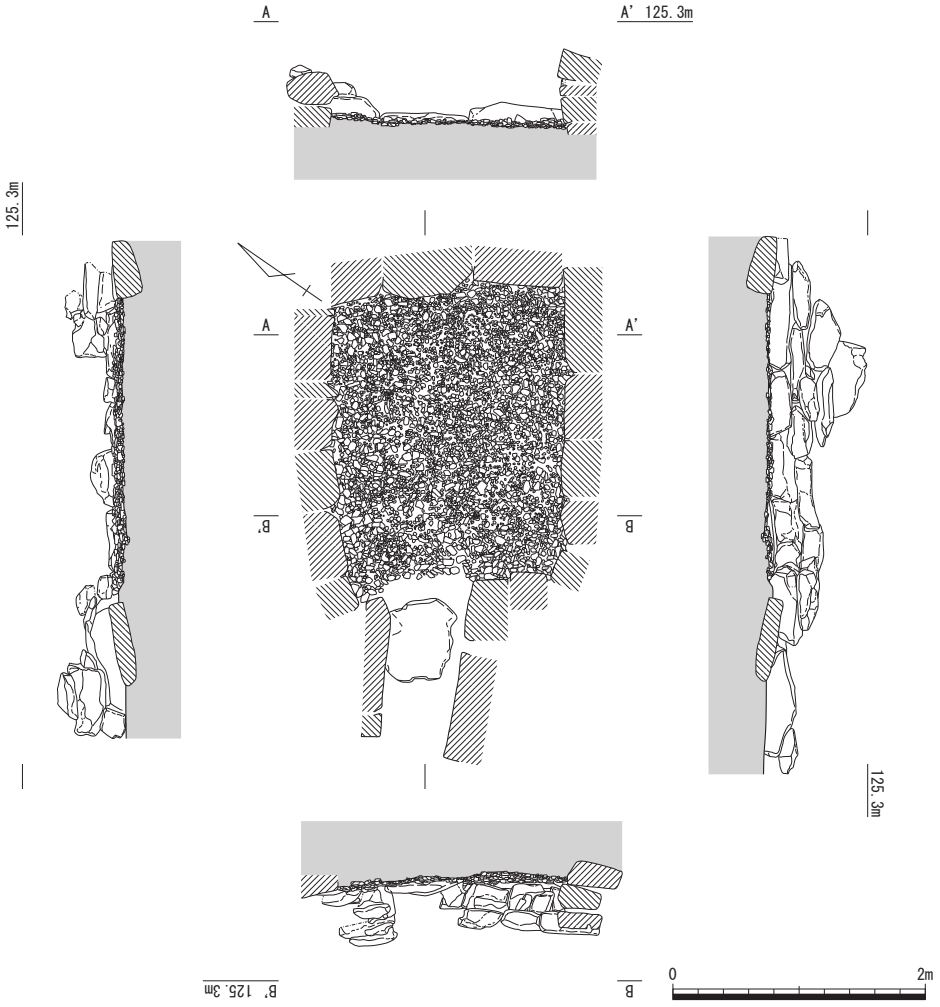
第92図　桑山２号墳墳丘・石室内土層断面（1/80）

て周溝は、墳丘を取り巻くことはなく、斜面下方側が開放している半円形を呈していたと思われる。周溝の断面形は逆台形で、その規模は山側で幅約 3.2 m、深さ約 0.7 m、北東側の調査区際で幅約 2.8 m、深さ約 0.6 mを測る。以上の手がかりを元に墳丘を復元すれば、径約 13 mの円墳となる。その残存高は、石室開口部側にわずかながら残された周溝の底面から測ると約 2.0 mとなる。

墳丘の構築は、土層断面（第 92 図）から、次のような工程が想定される。まず、石室構築場所の傾斜を解消（平坦地造成）するためと思われる盛土（Ａ－Ａ’断面第 40・41 層、Ｂ－Ｂ’断面第 25・26 層）を、主に石室主軸より南東側の旧表土上に行う。その後石室の構築に併せて盛土を行い、墳丘を完成させている。盛土は、旧表土由来の暗褐色系の土と地山由来の黄褐色系の土を互層状に積み上げることを基本としているようである。



第 93 図　桑山２号墳石室①（1/60）



第 94 図　桑山２号墳石室②（1/60）

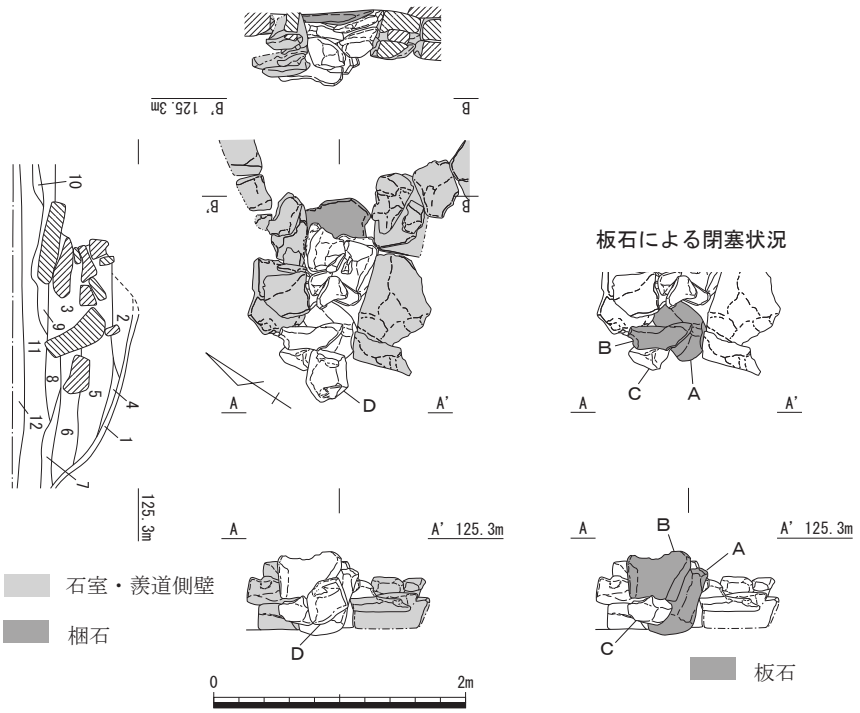
２　横穴式石室

２号墳の主体部は、墳丘のほぼ中央に築かれた両袖式の横穴式石室で、その主軸はＮ－59°－Ｅである（第 93 図）。細畝古墳群の石室と同様な理由 (1) で石室石材が持ち去られたと思われ、石室は大きく破壊されていた。そのため奥壁・玄室左側壁・羨道右側壁がほぼ基底石のみ、その他の場所が２～３段目までしか残存しておらず、唯一玄室右側壁の奥壁側のみが５段目まで認められる（第 94 図）。

石室の規模は玄室長 2.41 m、羨道長 1.27 m、全長 3.68 m、玄室奥壁幅 1.85 m、玄室玄門側幅 1.60 m、羨道最大幅 0.60 m、玄室残存高 0.95 m、羨道残存高 0.50 mを測る。玄室は、左側壁がやや胴張りとなっているがおおむね長方形を呈する。ただし、右側壁と右袖部が接する場所には、斜めに石が置かれている。袖部幅は非対称で、左袖部の幅が非常に狭い。羨道は玄室主軸に対し斜めに取り付き、その角度は玄室主軸に対して約 10° 西側に振っている。石室は、旧表土上もしくは旧表土上に置かれた整地土上に 0.4 ～ 0.8 m大で、厚さ 0.2 m前後の扁平な石を基底石として置き、２段目以上は厚さ 0.2 m程の石を平積みで積み上げつつ構築している。5 段目まで残存している右側壁の状況から、側壁は持ち送りであったと想定される。右袖部と右側壁が接する場所には、力石が認められる。

玄室床面（第 94 図）は、２～３cm 大の川原石と川砂を５～ 10cm 程度の厚さで敷き詰めた礫床となっているが、川原石の置き方に規則性はない。おそらく河床で採取したものを何ら選別等することなく整地土上に敷いたのであろう。羨道の床面には、梱石として 0.5 × 0.6 × 0.15 m程の扁平な石を据えていた。この梱石の上面と礫床上面の比高差は約 10cm で、礫床の方が羨道より低い。

閉塞（第 95 図）は、羨道全域に塊石が詰め込まれているものの、羨道前端ライン（開口部）に沿わせて置いた 0.5 × 0.5 × 0.2 mの石（Ａ）と、Ａの石で塞ぎきれなかった開口部に置いた 0.4 × 0.5 × 0.2 mの石（Ｂ）の２枚の板石からなる板石閉塞である。Ｂの石の下には、嵩上げのための石（Ｃ）が置かれていた。これら板石閉塞の外側には、人頭大の石（Ｄ）を１石置き、板石を固定している。



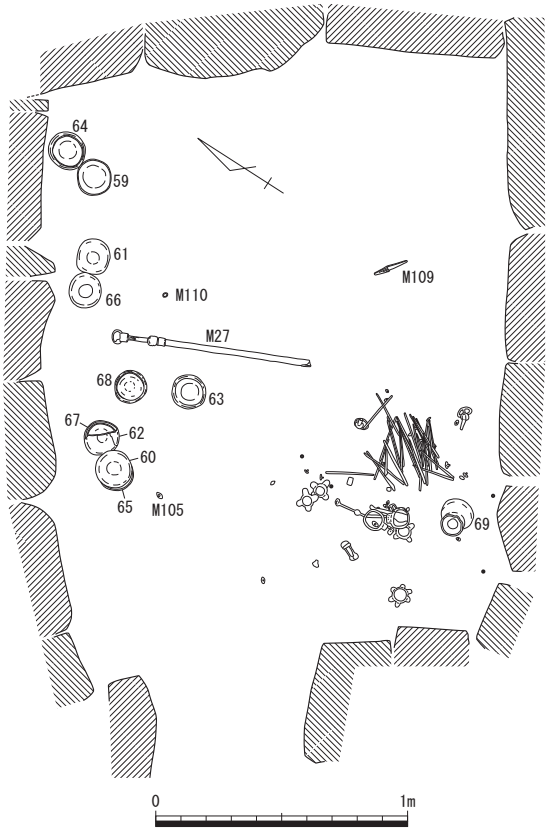
第 95 図　桑山２号墳閉塞施設（1/60）

１号墳とは異なりこの板石閉塞より前面には、墓道が認められない。

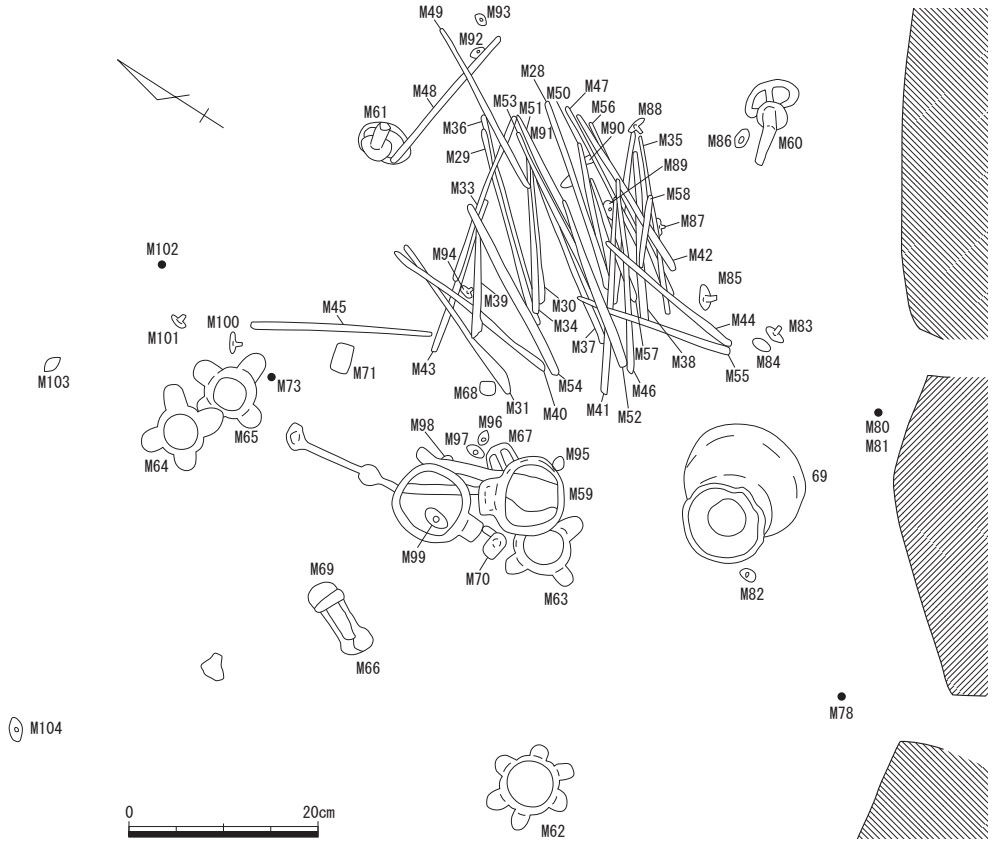
なお、閉塞付近の墳丘盛土に掘り返されている痕跡がないこと、閉塞が開けられた様子が見られないこと、羨道幅が狭くここを通っての追葬が難しいことから、羨道を利用した追葬は行われていないと判断した。

３　石室内遺物出土状況

石室石材が持ち去られていたものの、床面まで攪乱が及ばなかったため、遺物は埋葬時の位置をほぼ保った状態で出土した。出土した遺物は、須恵器蓋杯(59 ～ 68)、須恵器壺(69)、素環頭大刀(M 27)、鉄鏃（M 28 ～M 58)、轡（M 59)、鞍（M 60・M 61)、雲珠（M 62)、辻金具（M 63 ～M 65)、鋲具（M 66・M 67)、留金具と責金具の錆着状態（M 68 ～M 70)、留金具（M 71)、責金具（M 72 ～M 77)、鞍飾金具（M 78 ～M 108)、刀子（M 109)、耳環（M 110・M 111）である。



第 96 図　桑山２号墳石室内遺物出土状況（1/30）



第 97 図　桑山２号墳石室内遺物出土状況〈鉄器集中部拡大〉(1/8)



写真 27　桑山２号墳遺物検出状況（北から）



写真 28　桑山２号墳石室作業風景（北西から）

須恵器は、左側壁際から蓋杯が２個一対の単位で出土している。セット関係となる蓋杯には隣接もしくは重ね合わせて出土しているものがある一方、素環頭大刀の環頭部側に置かれた杯蓋（61）と杯身（66）に組み合うものは、重ね合わせで出土している杯蓋（62）と杯身（67）であり、セット関係を重視していないようにもみえる。石室中央部で奥壁と平行するように置かれていた素環頭大刀は、その刃部が玄門方向を向いている。61・66 の蓋杯は、天井部及び底部を上に向けて出土していることから枕として利用されたと思われる。よって遺体が仰向けで安置されていたと仮定した場合、右手側に素環頭大刀、足元に刀子が配置されていたと想定できる。鉄鏃や馬具は、右袖部付近で出土している。鉄鏃は、鏃身部をほぼすべて南西側に向けた状態で見つかった。馬具は、その器種別の出土状況から面繋、尻繋、鞍が副葬されていたと想定できる。轡周辺から出土した辻金具（M 64・M 65）、鋲具（M 66・M 67）、留金具及び責金具（M 68 ～M 71）は面繋に関係するものであろう。ただし轡と錆着していた辻金具（M 63）は、面繋に使われていたのか不明である。約 40cm 離れて検出された一対の鞍からこの位置に鞍が置かれていたと想定可能で、その周辺に纏まって出土している杏仁形の鋲は鞍に使用された鞍飾金具と推測される。

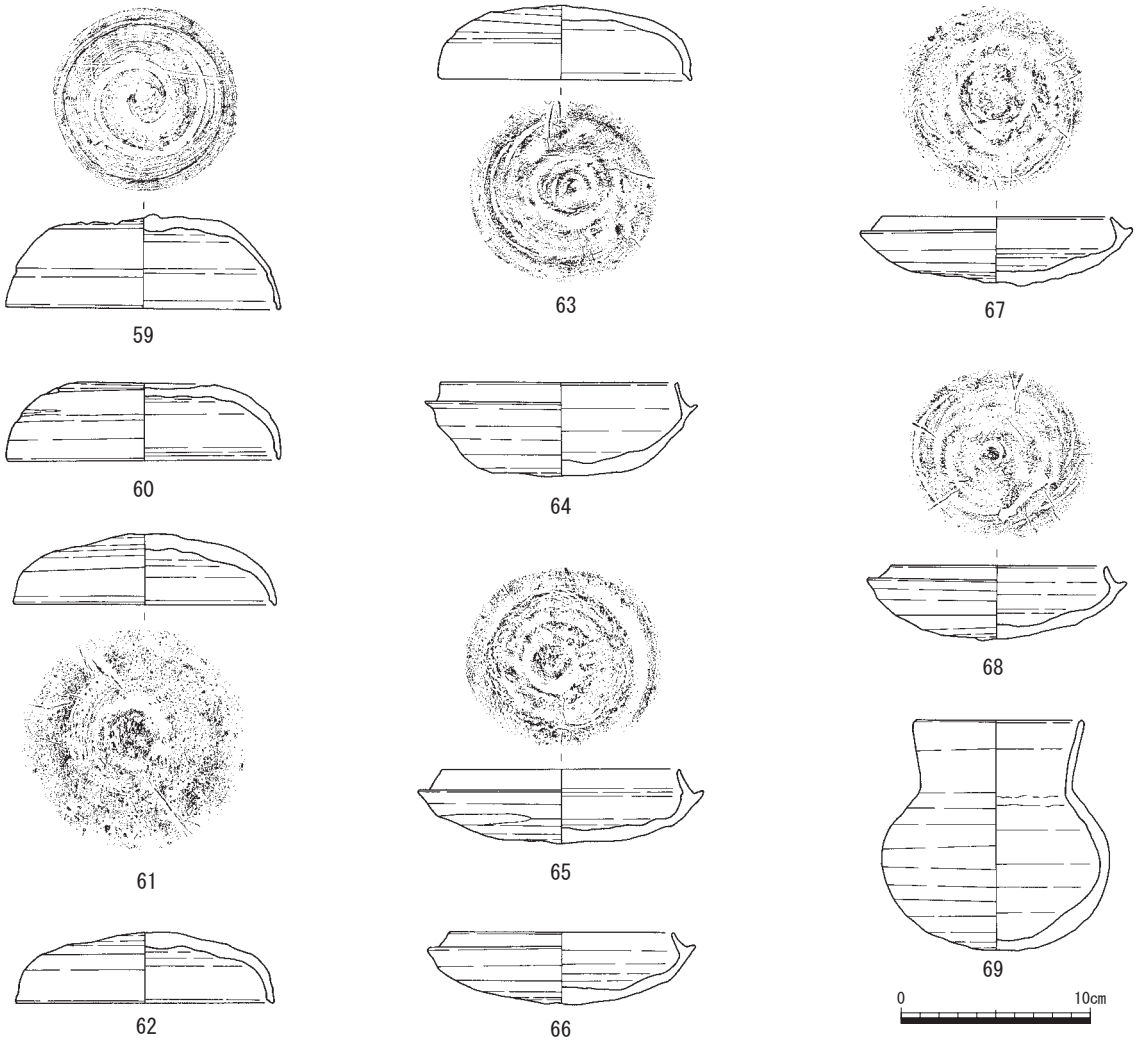
４　石室内出土遺物

土器（第 98 図、巻頭図版２－２、図版 64 －１）

須恵器杯蓋は、口径が 13.3 ～ 14.3cm に纏まる。器高は 59 のみ 5.5cm と高いものの、その他は 3.8 ～ 4.2cm である。形態は、口縁端部内側に凹線状の凹みが巡る 60 以外、すべて口縁端部に内傾する面を有する。また、天井部と口縁部の境界は、鈍い稜が認められるもの（59）、凹線状の凹みが巡るもの（60）、強く屈曲し口縁部に向かって垂直近く垂下するもの（61 ～ 63）に分かれる。須恵器杯身は、64 の器高が 5.0cm と高い以外は、口径 11.9 ～ 12.6、器高 3.7 ～ 4.0cm であり、なかには底部内面に同心円の当て具痕を残しているもの（65・67・68）がある。

武器（第 99・100 図、巻頭図版２－２、図版 65）

M 27 は、素環頭部及びそれと一体の茎部分（以後、環頭部と呼称する）と刀身を個別に作り、環頭部の茎と刀身の茎と重ねて固定している「別造り」(2) の素環頭大刀で、先端部の棟側が一部欠損している。刀身部は、刃部残存長 587mm、刃部幅 25mm、茎長 147.5mm を測る。柄元金具が関部分に錆着しているため関の形状を確認しづらいが、X線写真によると関は刃部側が段を有し、棟側が緩やかな弧状を呈している。茎は茎尻に向けて緩やかに狭まる形態で、その厚さは茎尻に向けて徐々に薄く

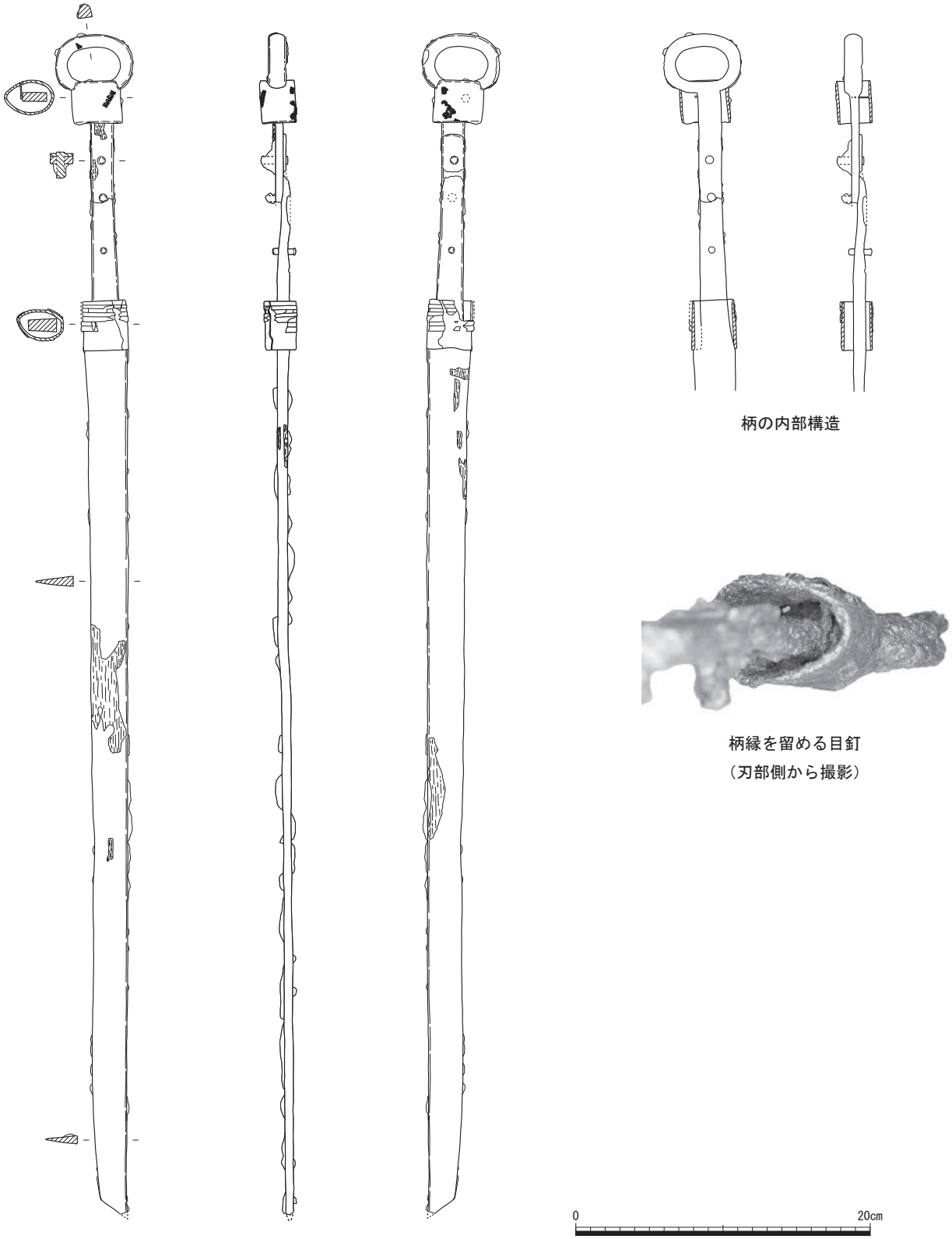


第 98 図　桑山２号墳石室出土遺物①（1/4）

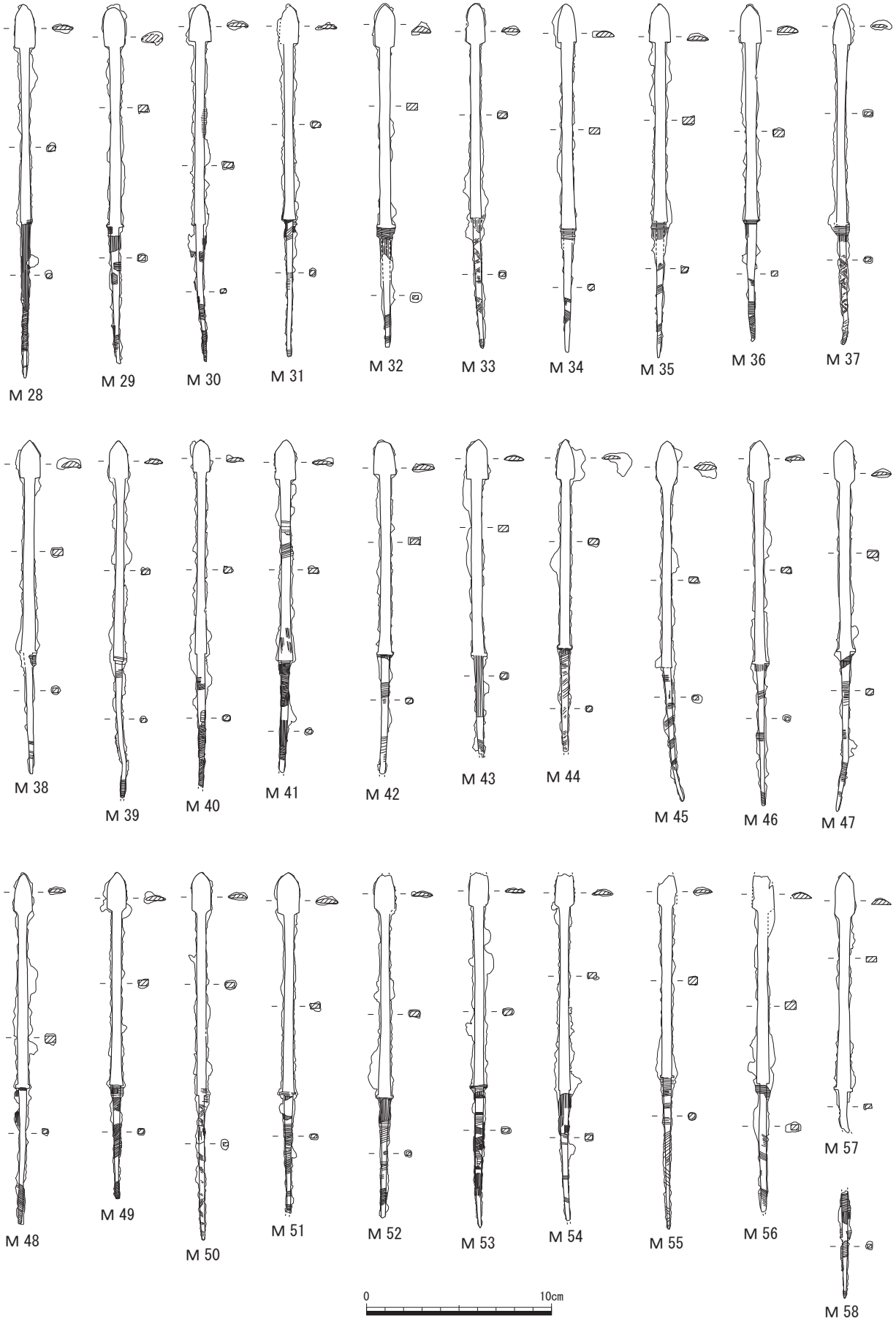
なる。目釘穴は３か所に認められ、そのうち茎尻側の２か所が環頭部の茎と重なる。柄元金具は倒卵形で、その表面には断面かまぼこ形の金属線が巻かれている。径９㎜の円柱を平面楕円形に曲げて作られている素環頭部は、外径長軸 52.5㎜を測る。それと一体化している茎は先端部分が欠損しているが、両側縁が平行した形態である。断面楕円形を呈する柄縁金具は、長さ約 70㎜、厚さ 1.5㎜の長方形の鉄板を筒状に曲げたもので、素環頭部と接する場所には「U」字形の切り込みを入れている。目釘穴が１か所認められる。鉄鏃は、鏃身で計数すると 30 本出土している。型式は細根・柳葉式のみである。鏃身の関は、角関のものが**M 28 ～M 44**、ナデ関のものが**M 45 ～M 57**、鏃身の断面形は片丸造が 28 本で、残りは両丸造である。茎関の棘状突起は、半数の 15 本に認められる。茎に矢柄口巻、矢柄木質、茎糸巻が観察されるものが多い。

馬具（第 101・102 図、巻頭図版４、図版 64 －２・66 －１）

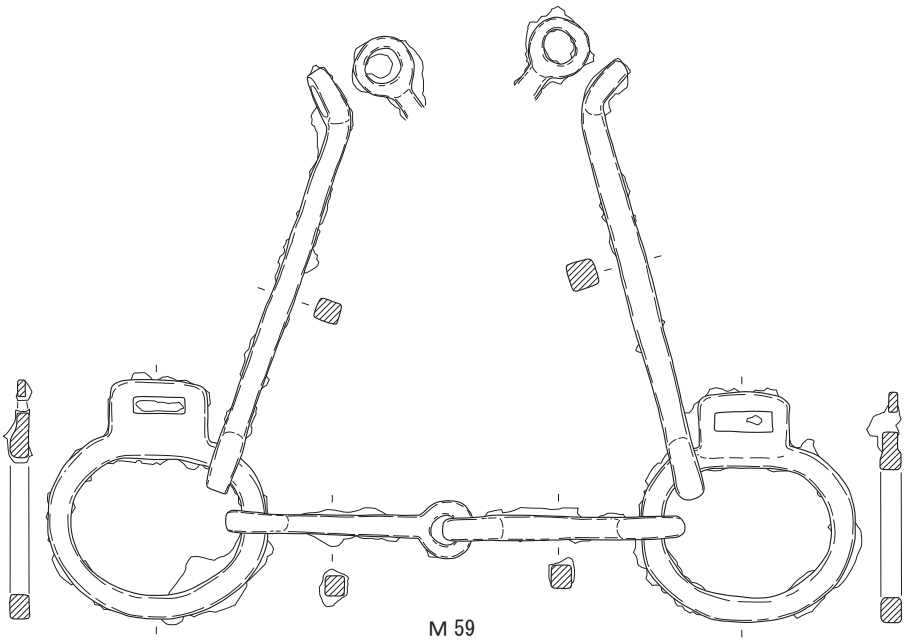
轡（**M 59**）は、鏡板の環体に引手と銜を別々に連結している形態である。鏡板は、楕円形の環体に上辺がやや弧状をなす長方形の立聞が付くもので、その立聞孔は環体からやや離れた立聞の中央にある。この立聞孔と立聞の上辺には、革状の有機質の痕跡が認められた。引手壺が「く」字状に折れ曲がる引手は、図右の方が若干長い。立聞とは異なり、引手壺に有機質の痕跡は認められなかった。金

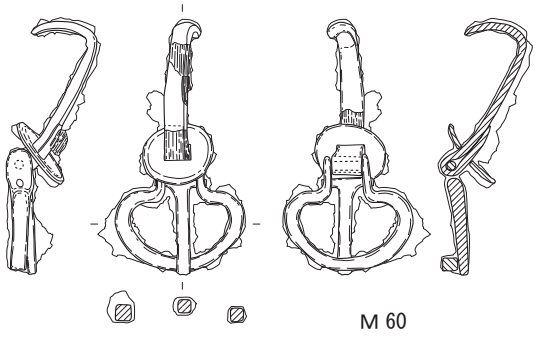


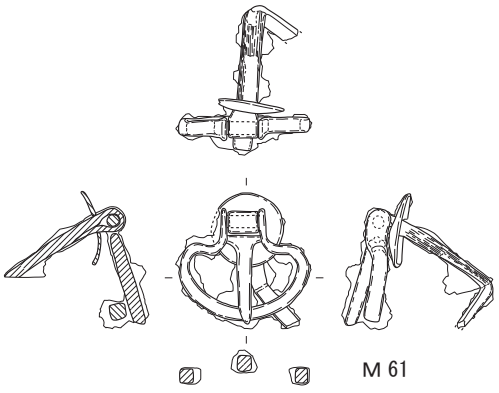
第 99 図　桑山２号墳石室出土遺物② (1/4)

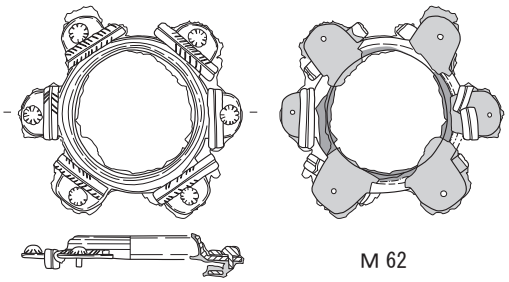


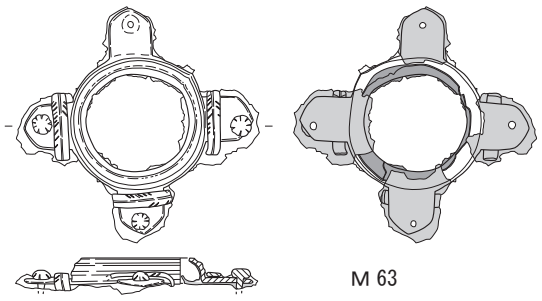
第 100 図　桑山２号墳石室出土遺物③ (1/3)

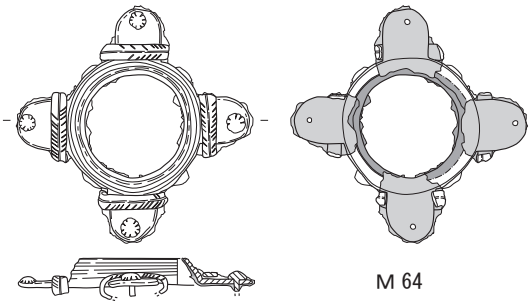


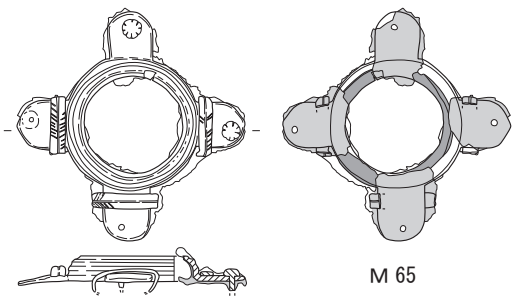








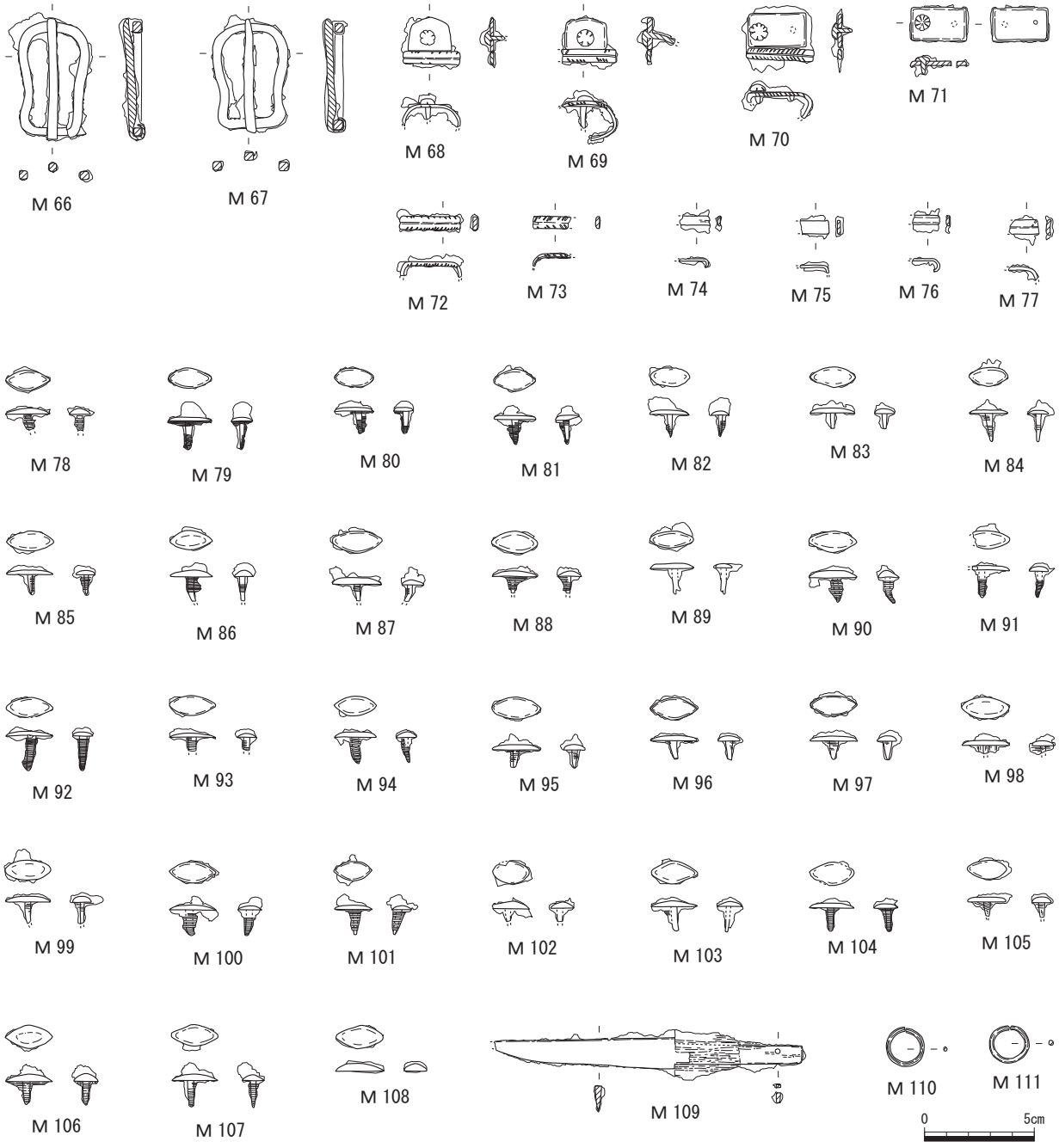




革状の有機質の痕跡　　線条痕が認められる薄い膜状のもの

0　10cm

第 101 図　桑山２号墳石室出土遺物④ (1/3)



第 102 図　桑山２号墳石室出土遺物⑤ (1/3)

具２本で構成される銜は、図左が両端環の向きが 90° 異なり、図右が同じ方向である。鞍は２点（**M 60・M 61**）出土し、両者とも脚と輪金は別造りである。輪金は一辺６㎜程の角柱を呈する棒を左右に張り出す帆立貝形に曲げている形態で、刺金の軸金と脚を巻き付ける横棒を取り付ける端部は平たく叩き延ばしている。刺金は「T」字形、座金具は平面円形で半球状を呈する。脚は、幅約８㎜、厚さ約６㎜の細長い板状で、端から３㎝程度の場所を輪金の横棒に巻き付けた後、その１端を叩き延ばして反対側の脚と一体化させることで１脚式としている。脚端部はおおむね 90° に折り曲げられており、この折り曲げられた部分から先端部にかけては木質が認められない。ちなみに座金具から折り曲げられた部分までの距離は約４～５㎝で、後輪の厚さを示しているのであろう。鉄地金銅貼の雲珠（**M 62**）は、環状部と脚部が一体造りのもので、環状部と脚の接続部に責金具が遺存している。環状

部は、外径 62㎜、高さ 9.5㎜ である。上部は幅約１～２㎜ にわたり水平に面取りされ、その下には２条の凹線が巡る。爪形を呈する脚が６脚付いており、各脚には鉄地金銅貼で頭部に 10 ～ 12 本の刻み目がある鋲が１個打たれている。中央部に沈線を１条入れ、その左右に傾きを逆にした刻み目を施している責金具は、錆に覆われているため銀の痕跡が認められなかったが、後述する辻金具に伴う責金具の様子を見る限り鉄地銀貼であったと想定される。３点出土した辻金具（M 63 ～M 65）は、環状部と４つの脚部が一体で造られたもので、脚部の根元に責金具が遺存している。環状部は、外径 54 ～ 55㎜、高さ 9.5 ～ 11.5㎜ を測り、その上部は幅約１～２㎜ にわたり水平に面取りされ、その下には３条の凹線が巡る。爪形を呈する脚は雲珠と比べると若干大きく、長さ 16 ～ 21㎜、幅 17 ～ 20㎜ である。各脚には、鉄地金銅貼で頭部に７～ 10 本の刻み目がある鋲が１個打たれていたようである。鉄地銀貼である責金具は、雲珠のものと同様に中央部に沈線を１条入れ、その左右に傾きを逆にした刻み目を施している。鋲具は２点（M 66・M 67）出土した。中央下半部がくびれ、先端部は緩やかな弧状を呈している輪金の基部は直線的で、その基部に刺金を巻き付けている。留金具は、爪形のものと長方形を呈するものがあり、いずれも鉄地金銅貼である。責金具と錆着して出土したM 68 ～M 70 から、M 71 も責金具を伴い使用されていたものであろう。爪形を呈するものは、頭部に刻み目が施された鋲を１本、長方形を呈するものは、頭部に刻み目が施された鋲を２本打ち込んでいる。伴う責金具は鉄地銀貼で、中央部に沈線を１条入れ、その左右に傾きを逆にした刻み目を施している。M 69 はM 66 の鋲具に、M 70 はM 59 の轡の鏡板の立聞に隣接して出土していることから、爪形のものが鋲具と、長方形のものが轡と繋を留める役割を持っていたのであろう。M 72 ～M 77 の責金具はいずれも破片であり、接合しなかったもののの雲珠・辻金具・留金具に伴う責金具の一部であろう。鋲頭が杏仁形の鞍飾金具（M 78 ～M 108）は 31 点出土し、その材質は錆に覆われ確認できなかったものもあるが、鉄地の鋲頭に銀を被せた鉄地銀貼と想定される。鋲頭の大きさは、長軸 20㎜ 前後、短軸 10㎜ 前後であり、ほぼ同形同大と言える。鋲脚には横方向の木質が残存しているものが多い。

さて、雲珠と辻金具の裏面には、革と思われる有機質の痕跡が認められた。これらは基本的に脚部及び責金具の内面のみに存在していることから、繋であったものの痕跡であろう。その繋の法量は円環状に残存した責金具の大きさから推測すると、幅 25㎜、厚さ３㎜ 程度と思われる。また環状部の内面には、縦方向の線条痕が認められる薄い膜状の錆が存在している。この錆は環状部と接する場所では緩やかな弧状を呈し、下部では内側に向かって鋭角に屈曲する。これは、環状部に嵌め込まれていた有機質が腐朽する前にその表面に付着した錆と想定され、錆の遺存状況や縦方向の線条痕は錆に写し取られた有機質の表面やその形状を現していると思われる。よって、この有機質の材質を明らかにすることを目的とした錆部分の顕微鏡観察及び蛍光Ｘ線による成分分析を委託した[(3)]。詳細は本書第６章第１節のとおりで、嵌め込まれた有機質は「貝ではない」と報告されている。

工具（第 102 図、図版 66 －１）

M 109 は両関の刀子で、茎には１個の目釘穴が認められる。柄の部分に鹿角が一部残存している。刃部長 82.5㎜、刃部幅 14.5㎜、茎長 58.5㎜ を測る。

装身具（第 102 図、巻頭図版５－２）

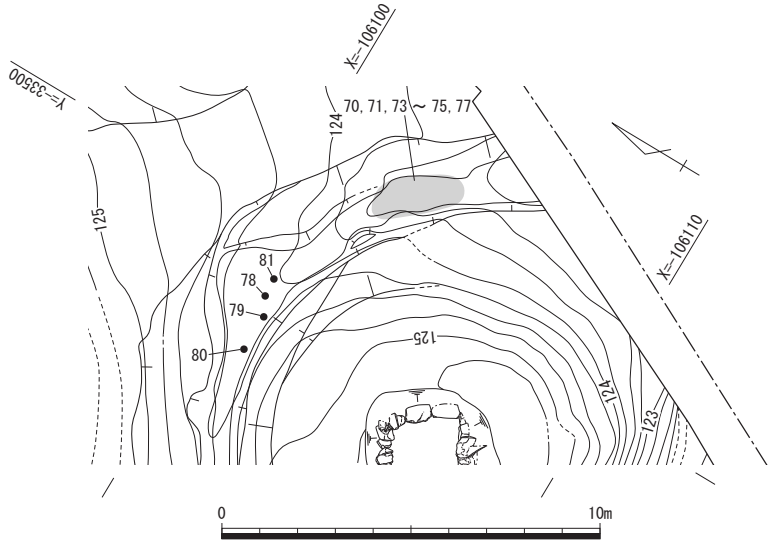
M 110、M 111 は銀製の耳環で、両者とも 18㎜ 程度の大きさを測る。その断面は径約２㎜ の円形を呈する。

５　周溝内出土遺物

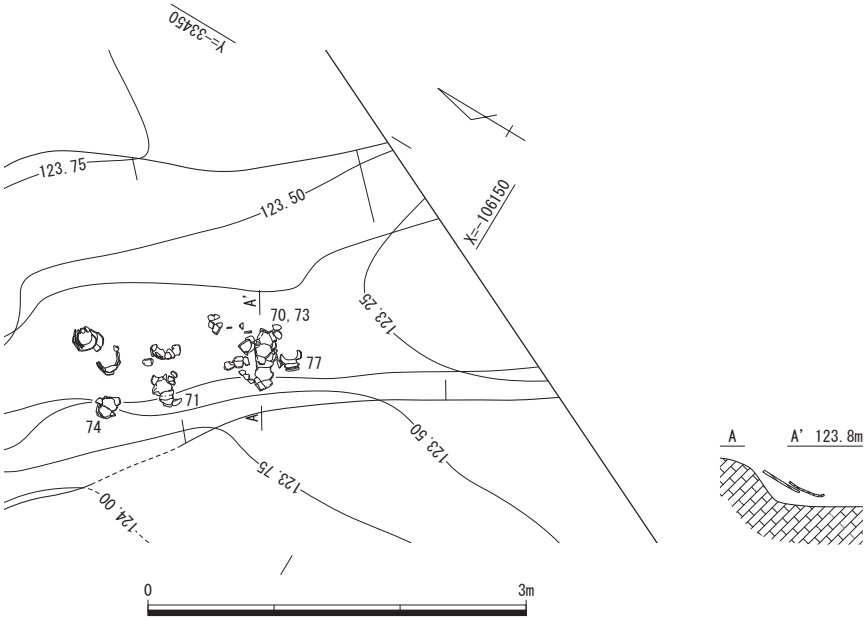
墳丘表土や周溝内からは、弥生土器、須恵器、土師器などが出土している。特に古代の須恵器が多く出土しており、古代に本墳周辺が集落として利用されたことを示していると思われる。出土した遺物のうち、弥生時代及び飛鳥時代以降に帰属する土器については、桑山遺跡で遺構に伴わない遺物として紹介し（本書第４章）、本項では本墳に伴うと想定される遺物について記載する。

周溝内からは、１号墳と比べると出土量は少ないが、埴輪が出土している。特に石室背後側では、墳丘から転落したものと思われる埴輪がまとまっていた。

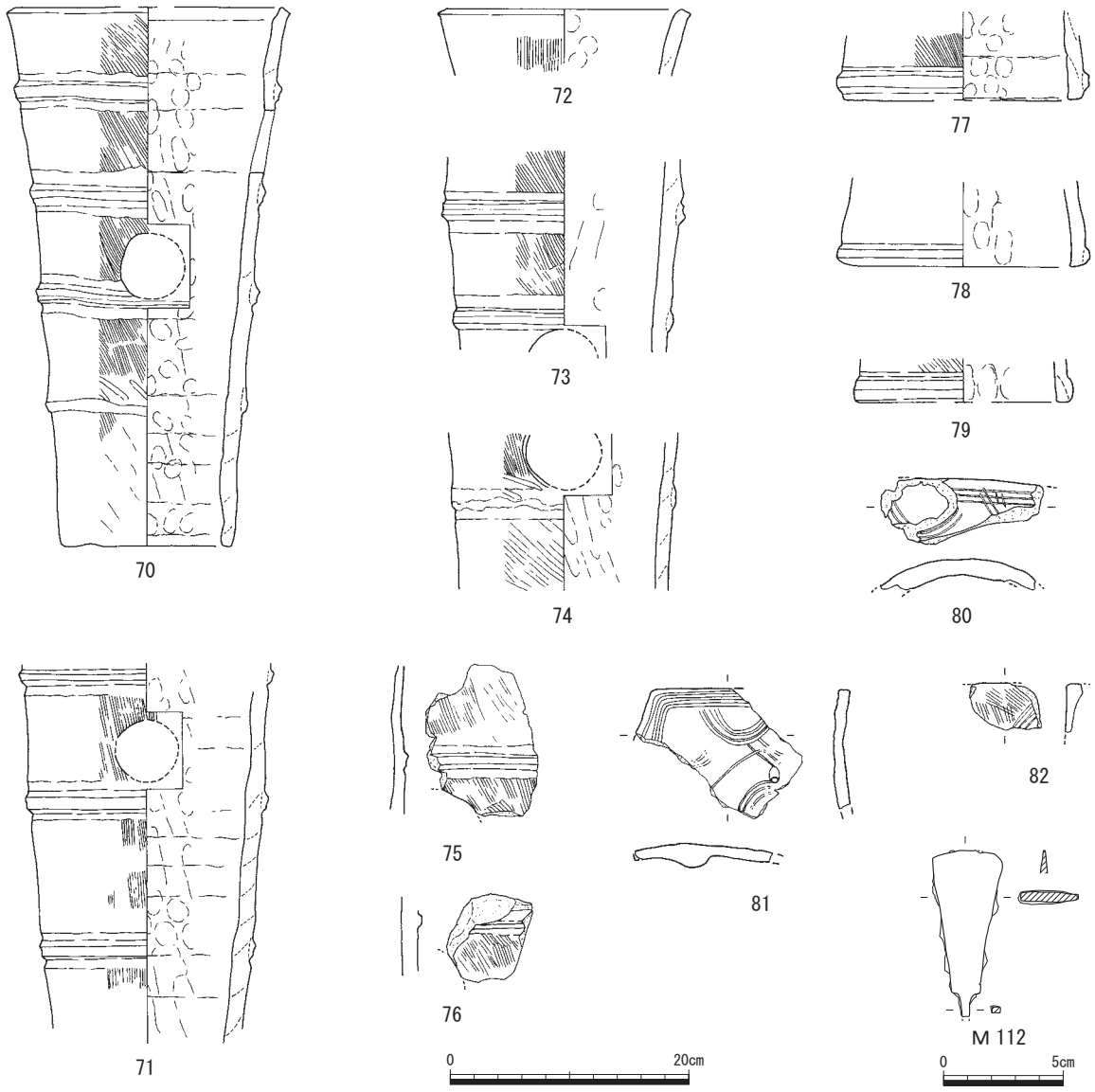
70 は、４条５段の円筒埴輪で、口径約 22cm、器高約 46cm を測る。円形を呈する穿孔は、下から３



第 103 図　桑山２号墳周構内遺物出土状況（1/200）



第 104 図　桑山２号墳周構内遺物出土状況＜東部拡大＞(1/60)



第 105 図　桑山２号墳周構内出土遺物（1/6・1/3）

段目と４段目に相対するような配置で１対穿たれる。また穿孔の位置関係は、３段目と４段目で 90 度方向を変えている。調整は外面がナナメハケ、内面がナデ調整である。77 ～ 79 は、底部接地面に接して突帯が巡るもので、石見型盾の基部かもしれない。80 ～ 82 は石見型盾の破片である。これらの胎土は、円筒埴輪と比べて精緻であるため区別しやすいが、近似した胎土をもつ破片の出土は少ない。

註

（1）岡山県教育委員会 2022「桑山南古墳群・細畝古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』255

（2）豊島直博 2006「三燕および日本出土鉄製刀剣の比較研究」『東アジア考古論叢』奈良文化財研究所

（3）顕微鏡観察により銹部分に有機質が残存していた場合に備えて蛍光 X 線による成分分析を依頼した。結果は第 6 章第 1 節のとおりで、有機質が残存していなかったことから、有意な分析結果が得られなかった。

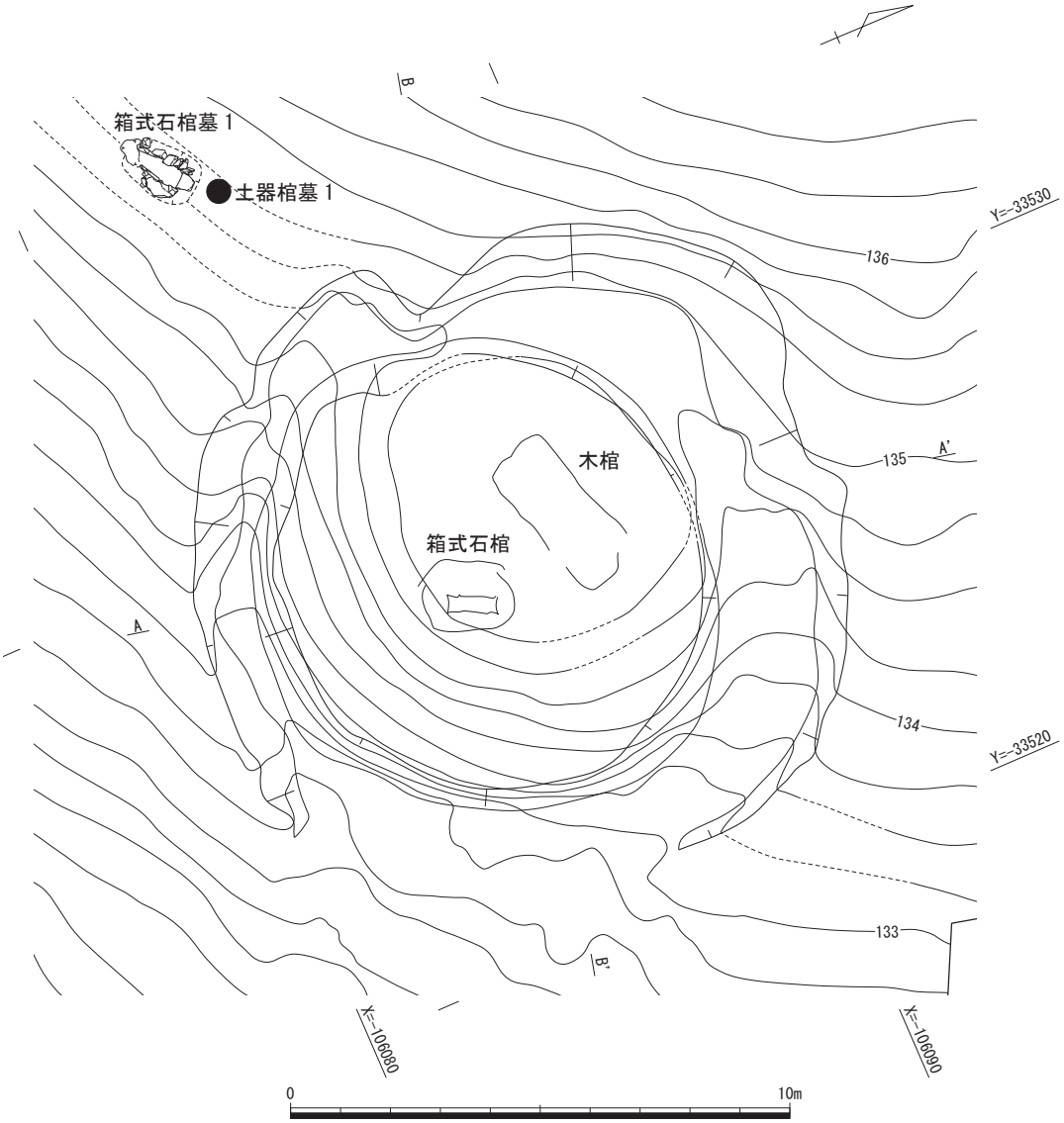
第４節　桑山３号墳

１　墳丘と周溝

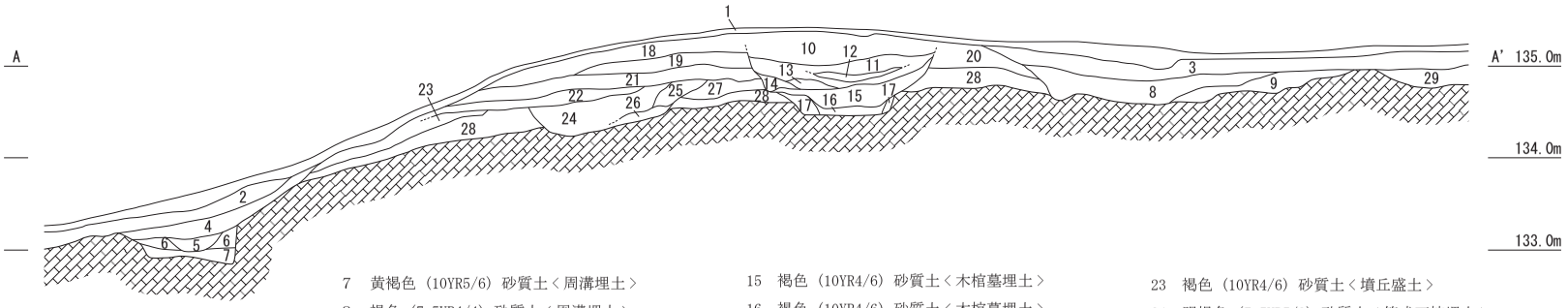
３号墳は、古墳群が立地する尾根の上方に４号墳と並んで位置する(第 73 図)。

古墳は南東方向に下る斜面に立地する。墳丘のほぼ全周にわたって周溝が巡っており、最も残存状況の良い墳丘南側から東側では幅約 1.2M、深さ約 40cMで断面形は逆台形を呈する。周溝の検出状況から３号墳の墳丘は径約 9.5m、墳丘高は約 1.9mである。

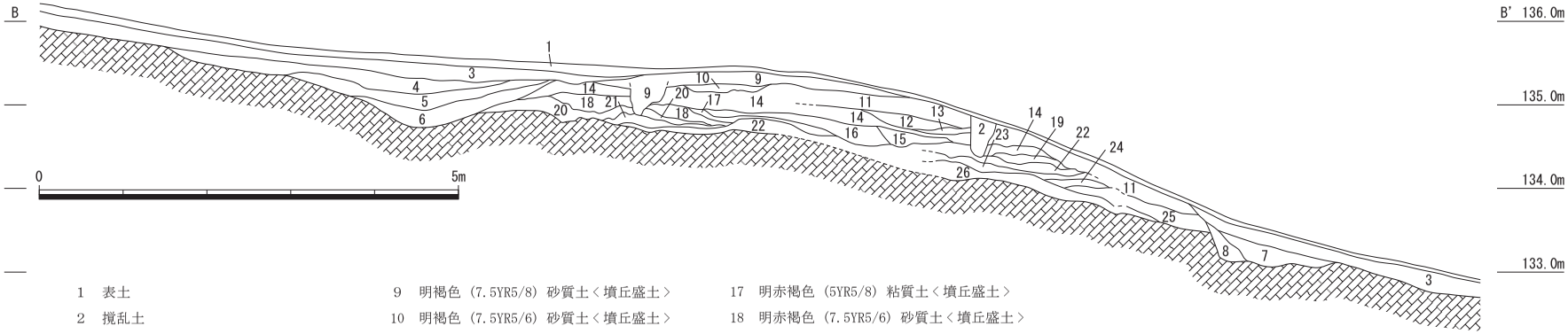
中心主体である箱式石棺の掘り方が墳頂まで続かないことから、旧地形を墳丘の形に整形した後箱式石棺を構築し、埋葬後に盛土を施し墳丘を完成させたと考えられる。墳丘の盛土は 10～ 20cmの厚さで土を水平に積み上げている状況が観察された。木棺墓は墳頂付近の盛土で掘り方が確認されたことから、墳丘完成後に墳頂から掘り込まれた追葬とみられる。



第 106 図　桑山３号墳墳丘 (1/150)



1　表土
2　褐色（10YR4/6）砂質土＜流土＞
3　褐色（10YR4/6）砂質土＜流土＞
4　褐色（10YR4/6）砂質土＜周溝埋土＞
5　褐色（10YR4/6）砂質土＜周溝埋土＞
6　褐色（10YR4/4）砂質土＜周溝埋土＞
7　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜周溝埋土＞
8　褐色（7.5YR4/4）砂質土＜周溝埋土＞
9　褐色（7.5YR4/6）砂質土＜周溝埋土＞
10　褐色（7.5YR4/6）砂質土＜墳丘盛土＞
11　褐色（7.5YR4/4）砂質土＜木棺墓埋土＞
12　暗褐色（7.5YR3/4）砂質土＜木棺墓埋土＞
13　褐色（10YR4/6）砂質土＜木棺墓埋土＞
14　褐色（7.5YR4/4）砂質土＜木棺墓埋土＞
15　褐色（10YR4/6）砂質土＜木棺墓埋土＞
16　褐色（10YR4/6）砂質土＜木棺墓埋土＞
17　暗褐色（7.5YR3/4）砂質土＜木棺墓埋土＞
18　褐色（7.5YR4/6）砂質土＜墳丘盛土＞
19　褐色（7.5YR4/4）砂質土＜墳丘盛土＞
20　褐色（7.5YR4/6）砂質土＜墳丘盛土＞
21　褐色（7.5YR4/4）砂質土＜墳丘盛土＞
22　褐色（7.5YR4/4）砂質土＜墳丘盛土＞
23　褐色（10YR4/6）砂質土＜墳丘盛土＞
24　明褐色（7.5YR5/8）砂質土＜箱式石棺埋土＞
25　赤褐色（5YR4/8）砂質土＜箱式石棺埋土＞
26　明赤褐色（5YR5/8）砂質土＜箱式石棺埋土＞
27　明赤褐色（5YR5/8）砂質土＜墳丘盛土＞
28　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜旧表土＞
29　明褐色（7.5YR5/6）砂質土
　＜桑山遺跡 竪穴住居２ 埋土＞



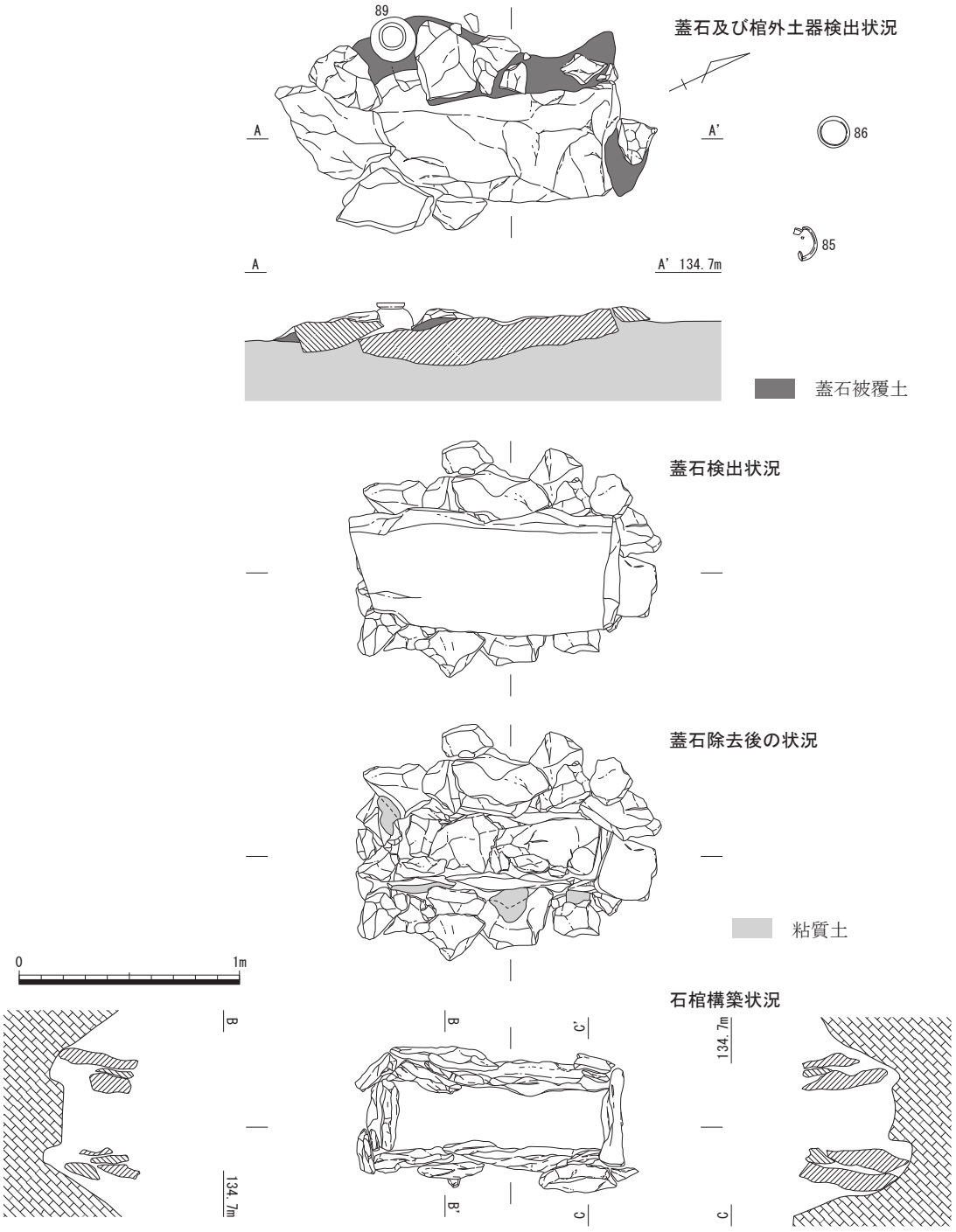
1　表土
2　撹乱土
3　褐色（10YR4/6）砂質土＜周溝埋土＞
4　褐色（10YR4/4）砂質土＜周溝埋土＞
5　褐色（7.5YR4/6）砂質土＜周溝埋土＞
6　褐色（7.5YR4/4）砂質土＜周溝埋土＞
7　褐色（10YR4/4）砂質土＜周溝埋土＞
8　褐色（10YR4/6）砂質土＜周溝埋土＞
9　明褐色（7.5YR5/8）砂質土＜墳丘盛土＞
10　明褐色（7.5YR5/6）砂質土＜墳丘盛土＞
11　褐色（7.5YR4/6）砂質土＜墳丘盛土＞
12　にぶい褐色（7.5YR5/4）砂質土＜墳丘盛土＞
13　明褐色（7.5YR5/6）砂質土＜墳丘盛土＞
14　褐色（7.5YR4/6）砂質土＜墳丘盛土＞
15　褐色（7.5YR4/4）砂質土＜墳丘盛土＞
16　赤褐色（5YR4/8）砂質土＜墳丘盛土＞
17　明赤褐色（5YR5/8）粘質土＜墳丘盛土＞
18　明赤褐色（7.5YR5/6）砂質土＜墳丘盛土＞
19　明黄褐色（10YR6/6）砂質土＜墳丘盛土＞
20　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜古墳築造前堆積土＞
21　褐色（10YR4/6）土＜古墳築造前堆積土＞
22　褐色（10YR4/6）砂質土＜古墳築造前堆積土＞
23　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜古墳築造前堆積土＞
24　褐色（10YR4/4）砂質土＜古墳築造前堆積土＞
25　褐色（10YR4/6）砂質土＜古墳築造前堆積土＞
26　暗褐色（10YR3/3）土＜古墳築造前堆積土＞

第 107 図　桑山３号墳墳丘・主体部内土層断面（1/80）

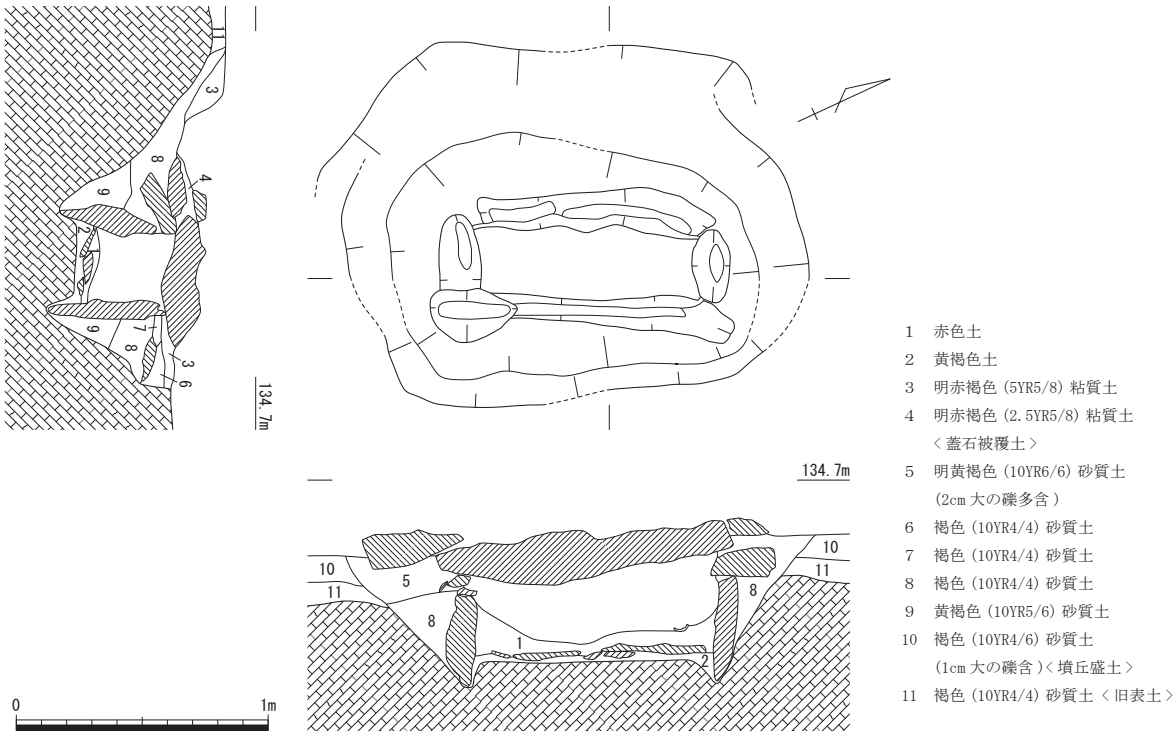
２　箱式石棺

箱式石棺（第 108～ 110図、巻頭図版 3-1、図版 40～ 44・67－１）

３号墳の箱式石棺は、墳丘のほぼ中心に構築された箱式石棺である。墳頂から 60～70㎝程盛土を掘り下げたところで土師器甕(89) が直立した状態で出土したため、その周辺の精査を行ったところ明褐色土に被覆された状態の蓋石および須恵器杯身(85・86) を検出した。蓋石は長さ 1.2m、幅 0.3mの大型の板石であり、蓋石設置後上面に 30～40㎝程度の板石を複数置き、被覆土で主体部全体を覆っていたようである。



第 108 図　桑山３号墳箱式石棺① (1/30)



第 109 図　桑山３号墳箱式石棺掘り方（1/30）

箱式石棺の掘り方は先述したように墳丘盛土に先行する。掘り方の規模は確認できた範囲で長軸 1.8m、短軸 1.4m、深さ 0.7mの隅丸方形で、断面形は逆台形を呈する。

石棺の主軸はＮ 24° Ｅ、規模は床面内法で長軸 0.9m、短軸 0.3m、高さ 0.4mである。石棺は基底石である板状の石を地山を掘りくぼめて据え、裏込め土を充填して固定した後２・３段目の板石を積む。基底石は両側壁とも頭位である北側に大型の石を置き、西側壁は重ね継ぎであるが東側壁は平継ぎである。また、基底石の継ぎ目を隠すように板石を置く行為（第 108 図石棺構築状況、図版 42 －１～５）が観察された。これは蓋石を被覆土で覆う行為と同様に、石室を物理的・観念的に密封しようとする意図がみられる。小口の基底石は両側壁の端に置かれ、「ロ」字形に近い形状を示す。

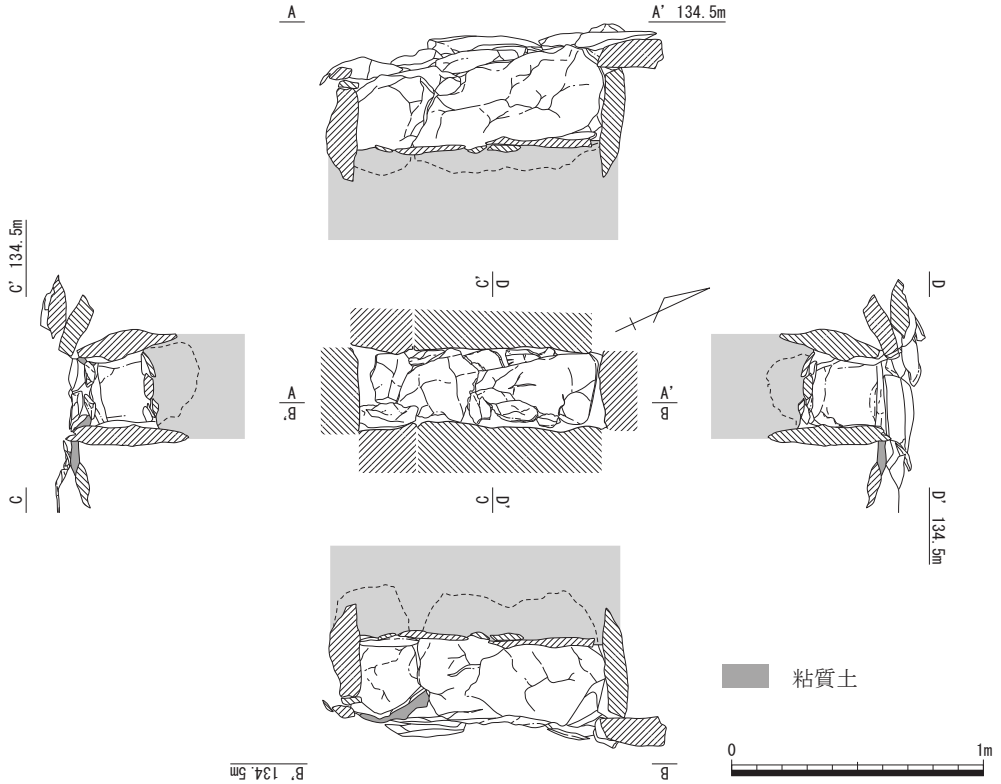
石室内部は蓋石の隙間より流入した土が両小口側では約 30cm堆積していたが、石棺中央では底部の敷石が確認できる状態であった。敷石は中心に幅 30～ 40cm程度の板石が２石置かれ、その周辺に幅 10cm程度の扁平な石を置く。石棺および底石の石材は、１・２号墳の石室と同様の周辺で採取することが可能な凝灰岩(「津山石」) である。

遺物出土状況（第 111・112 図、巻頭図版３－１・５－３、図版 67・68）

石棺内からは、人骨・須恵器・短刀・鉄鏃・玉類が出土した。人骨のうち、頭骨・下顎骨が枕である須恵器杯蓋 **83・84** からやや南側に崩れているが、全体的に埋葬時の状況を留めている。頭位は頭骨が頭頂部を北に向けることから北頭位である。

人骨（第 112 図下段）は、頭骨（**頭１～頭３**）、上顎骨（**頭４**）、左頭頂骨及び後頭骨（**後頭部痕跡**）、下顎骨（**顎**）、歯（**Ｈ１～Ｈ 14**）などがある。頭部は本来須恵器（**83･84**）上に置かれたと思われるが、遺体の腐朽によってやや南側へ移動している。

須恵器は、北小口側に枕として使用された須恵器杯蓋（**83・84**）、頭骨に接して出土した短頸壺と蓋（**87・88**）がある。短頸壺と蓋（**87・88**）は枕よりやや南にあるが、これは本来枕上の頭部に接し



第 110 図　桑山３号墳箱式石棺②（1/30）

て副葬されたものが、遺体の腐朽に伴って転落したものと思われる。

短刀は左腕側に鉄刀（M 113）、右腕側に短刀（M 114）が副葬されている。いずれも鹿角製刀装具を着装し、切先を足下へ向ける。M 113 は背を南に、M 114 は背を上に向ける。

鉄鏃（第 112 図左上）は東西２群に分かれており、西群は鉄鏃M 115 ～M 120・M 123・M 127・M 130・M 131・M 134・M 135 の 12 本、東群はM 121・M 122・M 124 ～M 126・M 128・M 129・M 132・M 133 の９本からなる。折り重なるように出土したことから、これらの鉄鏃は束として石棺内に副葬されたとみられる。加えて、西群のM 115 ～M 118・M 120・M 127・M 131 にのみ布目が付着していること、M 120・M 130 の下から敷石に接する面のみに布が付着した鉄錆片が出土していることから、鉄鏃西群は下に布が敷かれていたか、布で巻かれていたことが考えられる。

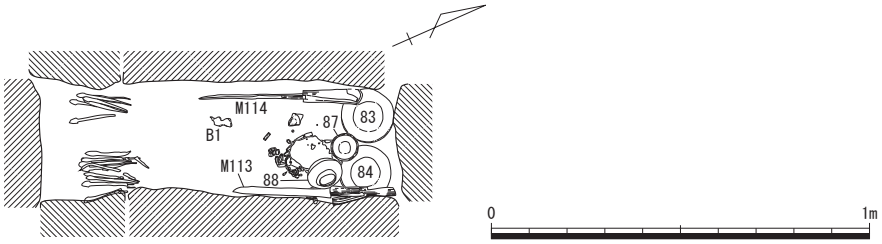
玉類（第 112 図中央上、右上）は下顎骨の周辺にＳ４～Ｓ 38、Ｃ１～Ｃ６、Ｇ１～Ｇ８が副葬されている。ある程度連なった状態で出土しており、被葬者が首飾りとして着装した状態で埋葬されたと考えられる。被葬者からみて、切子玉が中央に、管玉が外側にまとまること、管玉の間にガラス製小玉もしくは土玉が挟まる傾向にあることが指摘できる。

石棺上面では、石棺被覆土上に直立した状態で土師器甕（89）が据え置かれていた。また石棺北側の墓坑外墳丘盛土上に須恵器杯身（85・86）が置かれている状況が確認された。これらは石棺蓋石を架構し、石棺を粘質土で被覆した後に墳丘上で何らかの祭祀行為が行われたことを示している。特に杯身（86）は枕として使用される杯蓋（84）とセット関係にあり、埋葬と埋葬後の祭祀は同時性・一貫性をもっている。なお、杯蓋（83）と杯身（85）は胎土や焼成、形態が異なり、セット関係にはない。

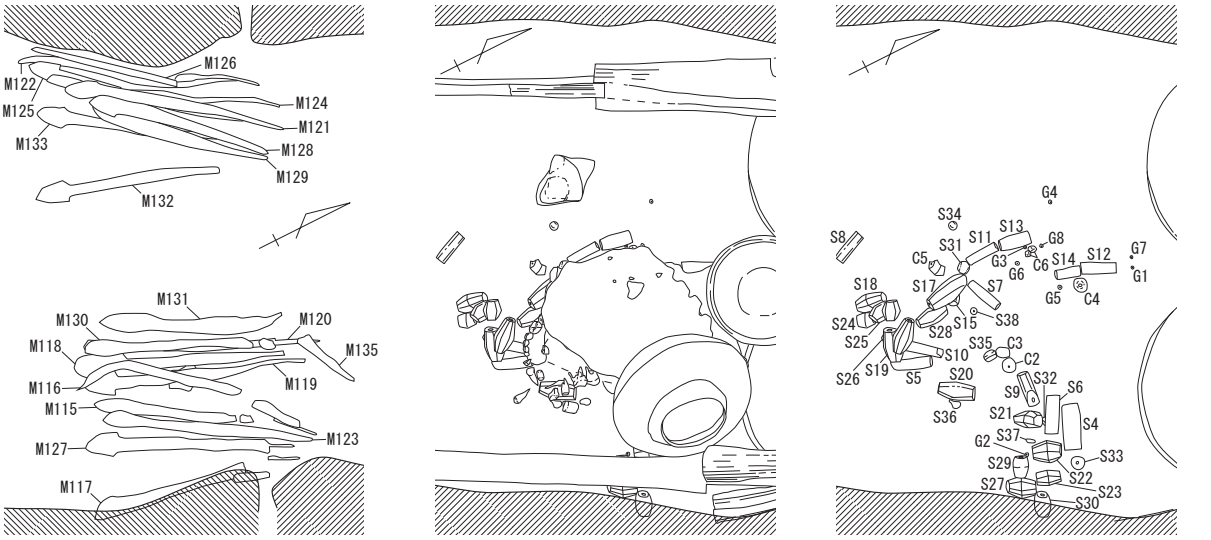
出土遺物

土器(第 113図、図版 67－１)

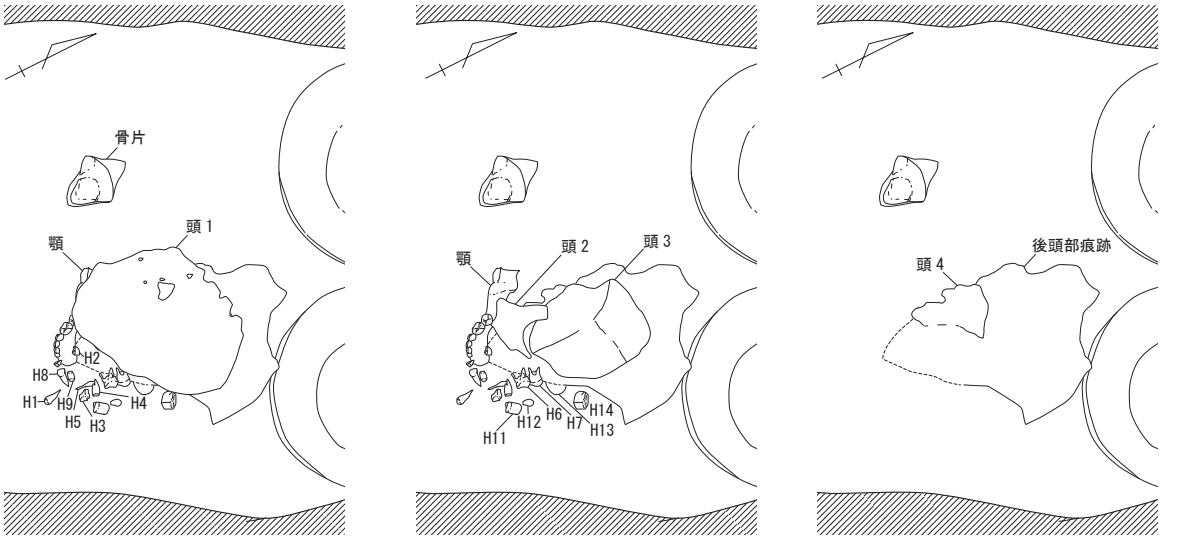
石室内から須恵器４点(**83**・**84**・**88**・**89**)、石棺上面で土師器(**89**)、石棺周辺から須恵器(**85**・**86**) が出土した。**83**・**84**は土器枕として使用された杯蓋で、口径は 13.7～14.2cm。口縁端部は段を作りだしている。**83**には、遺体頭部の痕跡が残る。**85**・**86**は杯身で、口径は 12.0～12.5cm。口縁端部は丸くおさめる。**88**は短頸壺で、口径 4.7cm、器高 5.6cmの小型品である。体部は回転ナデ、底部はヘラケズ



第 111 図　桑山３号墳箱式石棺遺物出土状況 (1/20)



鉄鏃集中部拡大　　玉類集中部拡大　　玉類集中部拡大〈人骨・土器取り上げ後〉



人骨出土状況　　人骨出土状況〈頭１除去後〉　　人骨出土状況〈最下部のみ〉

第 112 図　桑山３号墳箱式石棺遺物出土状況＜拡大＞(1/5)

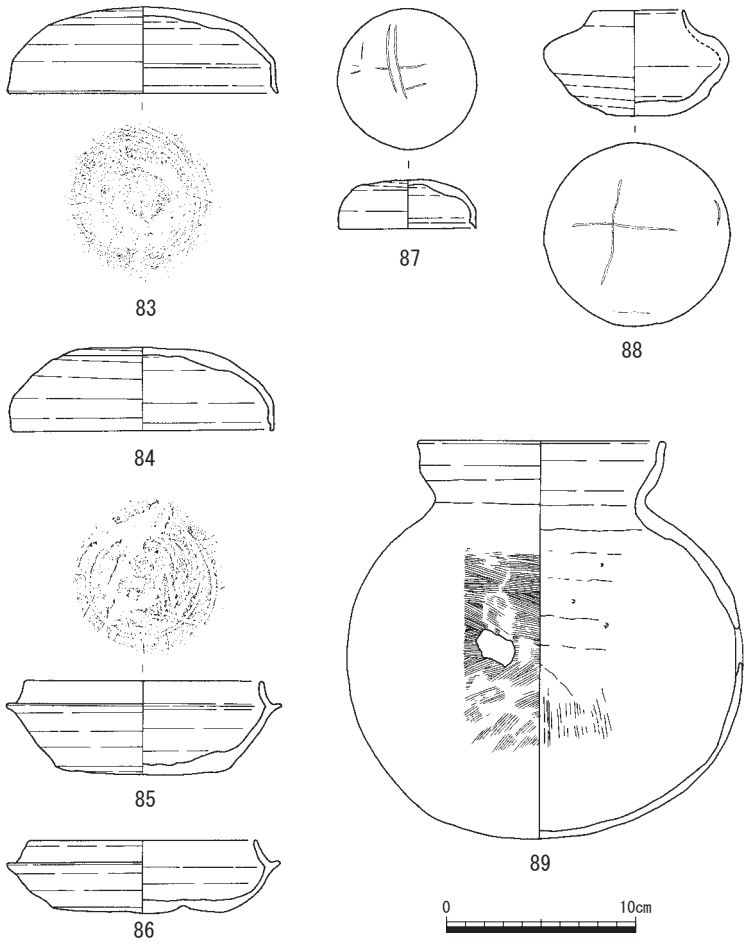
リで成形する。底部には十字形のヘラ記号が施される。87は88の蓋であり、口径 7.2cm、器高 2.7cm。天井部に「井」字形様のヘラ記号をもつ。89は甕で、口径 12.8cm、器高 21.1cm。外面はハケメ、内面はヘラケズリで成形する。胴部に焼成後穿孔が１か所みられる。

武器（第 114～ 116図、図版 67－２、68）

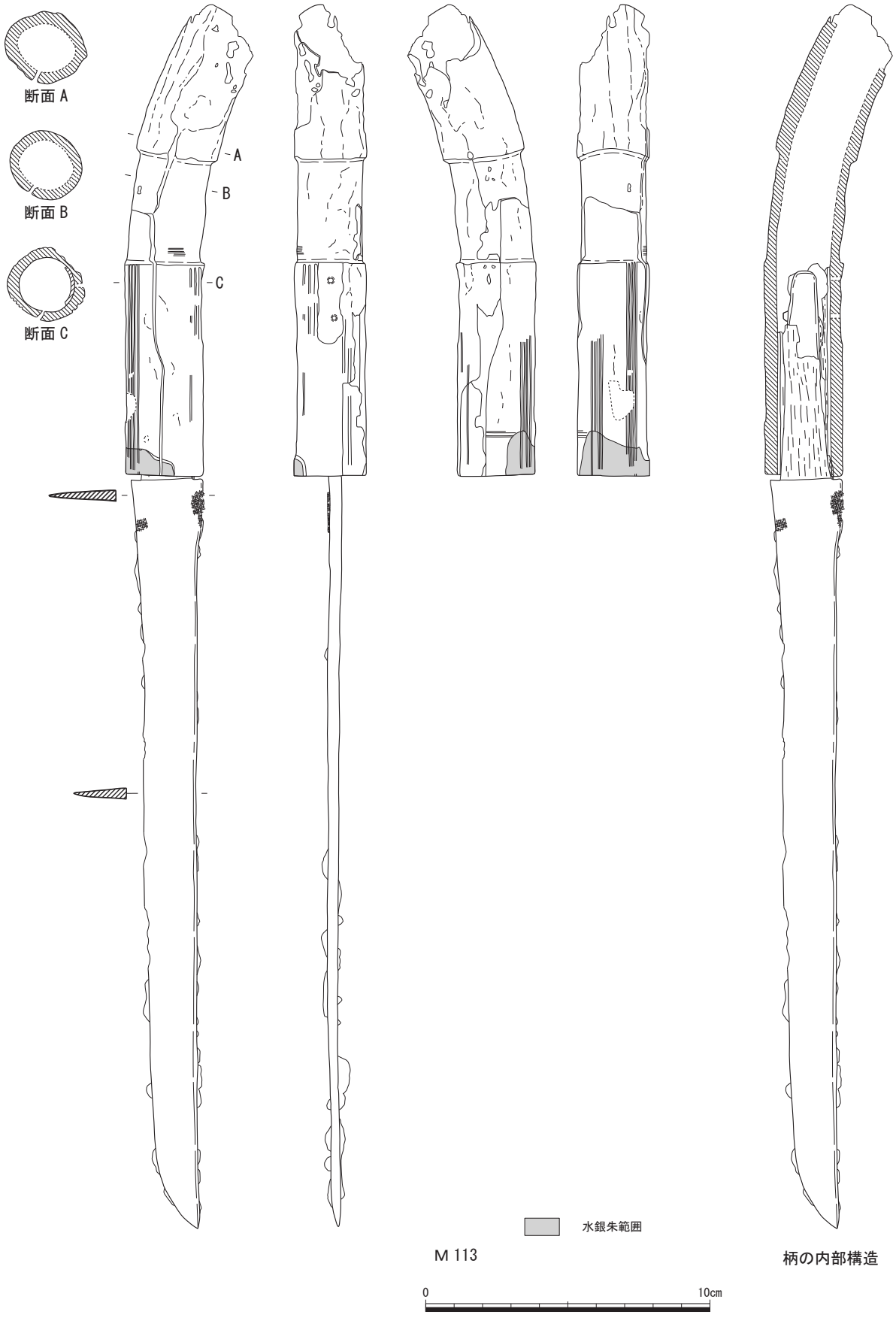
M113・M114は鹿角製の装具を有する短刀である。M113は被葬者左腕側、M114が右腕側より出土した。

M113は装具を含む全長が 43.0cmで、刀身長 33.7cm、刃部最大幅 2.4cm、茎部元幅 1.8cmを測る。茎部はやや膨らみをもちながら幅を減らし、茎尻は隅丸方形状をなす。茎には木質が残存している。関は両関式で、直に落ちる。刃部は断面二等辺三角形を呈し、平造りである。峰はふくら造り。刃部の関付近で布目の付着がみられるが、布目が佩表・佩裏ともに付着していることから、刃部に布を巻いた状態で副葬されたようである。鹿角製把は残存長 16.6cm、把縁端部の厚さ 2.7cm。中央部分を一段低く造り出しており、ここでは刃側からそれぞれ把縁（つかぶち）・把間（つかあい）・把頭（つかがしら）とする。把縁には直線による文様が彫り込まれる。文様は刀身に平行する４条を一単位とし、１条の幅は約 0.6mmを測る。一部欠損・摩滅で不明な部分もあるが、文様は概ね４単位が施されており、短刀を平置きした際に把縁を縁取るようになっている。把間には３本程度の糸巻きの痕跡がみられる。M113は茎部・把ともに目釘穴はみられないが、一方で茎部の把に挿入される部分に木質が付着していることから、茎部を薄い樹皮等で巻き付け把との間の空隙を埋めていたと思われる。また把縁の端部に水銀朱の付着が確認されたことから、少なくとも装具の把縁周辺は赤彩されていたと思われる。

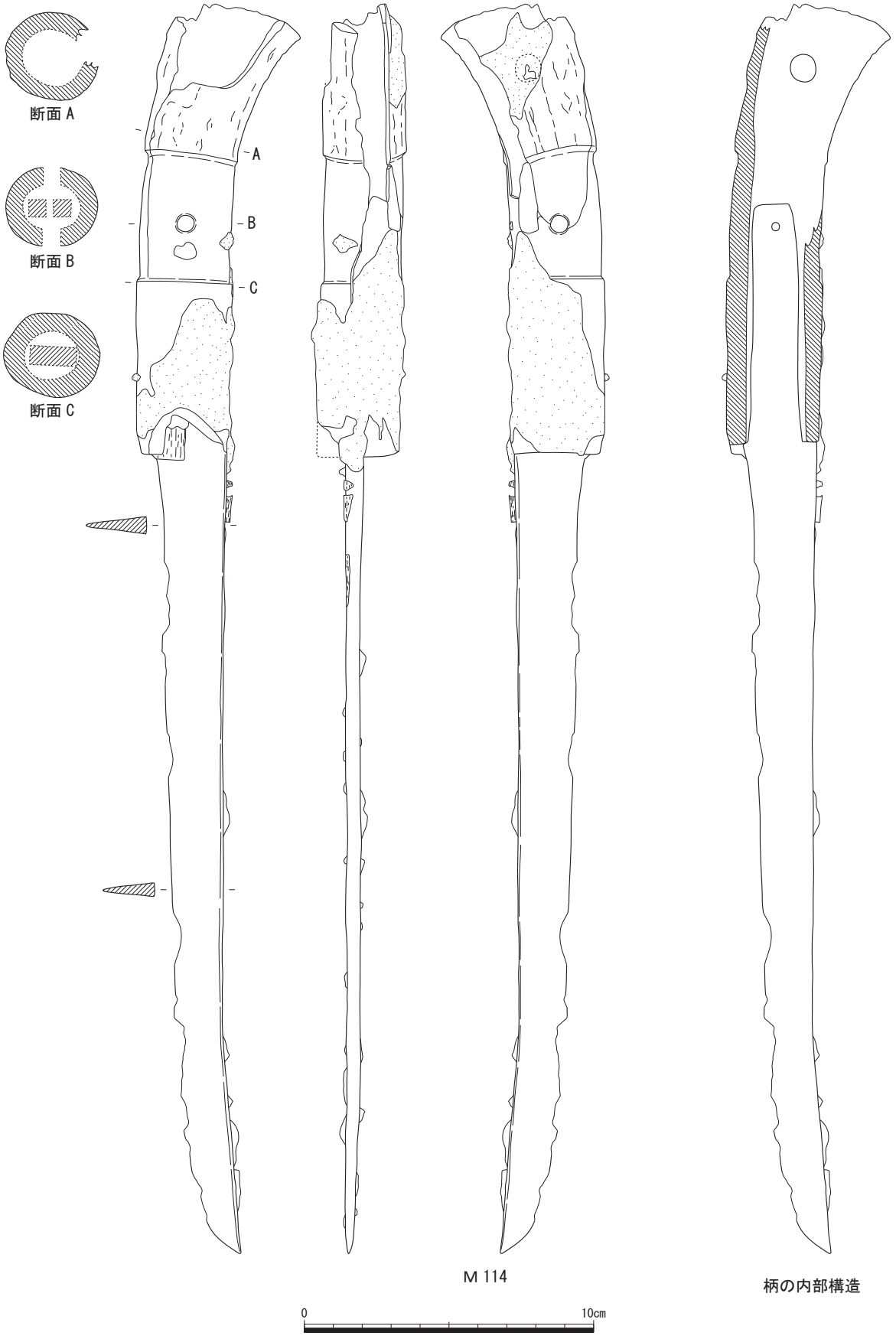
M114は装具を含む全長が43.2cmで、刀身長 36.4cm、刃部最大幅 2.5cm、茎部元幅 1.9cmを測る。茎部は直線的にやや幅を減らし、茎尻は直線状である。関は両関式で直に落ちる。関から茎部にかけて木質がみられるが、これはM113同様に刀身固定のために巻き付けたものとみられる。刃部は二等辺三角形を呈し、平造りである。刃部は関より 20cm程度からやや反り、峰はふくら造りである。刃部の関付近に木質が残っている。鹿角製把は残存長 15.5cm、把縁端部で幅 3.0cmを測る。M113同様に把間を一段低く造り出す。把間には目釘孔があり、刀身茎部の目釘孔と対応する。把頭にも直径 1.0cmほどの孔が確認できるが、構造上目釘



第 113 図　桑山３号墳箱式石棺出土遺物（1/4）



第 114 図　桑山３号墳箱式石棺内出土遺物① (1/2)



第 115 図　桑山３号墳箱式石棺内出土遺物② (1/2)

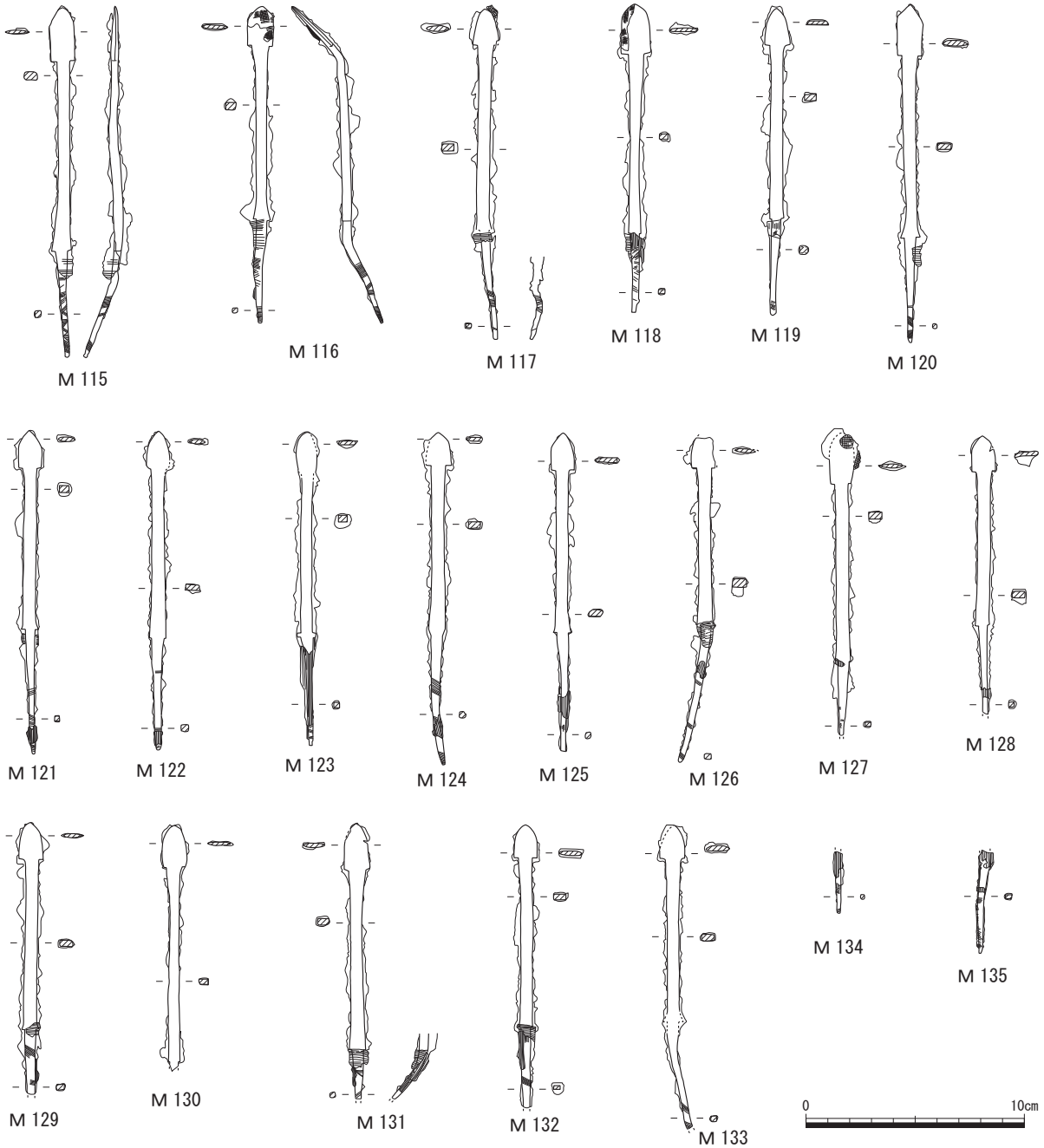
孔とは考えられない。装飾のための孔であろうか。把の表面は砂礫が多く付着しており判然としないが、現状把の表面を観察できる範囲では文様や赤彩などはみられない。

M115～M135は石棺内出土の鉄鏃である。形式はいずれも細根・柳葉式。木質が付着するものがほとんどで、重なった状態で出土したことから矢柄に着装した状態で束として副葬されたと思われる。矢柄への装着は、M118などで木質の柄に挟み込み樹皮を巻いて固定する状況が観察できる。

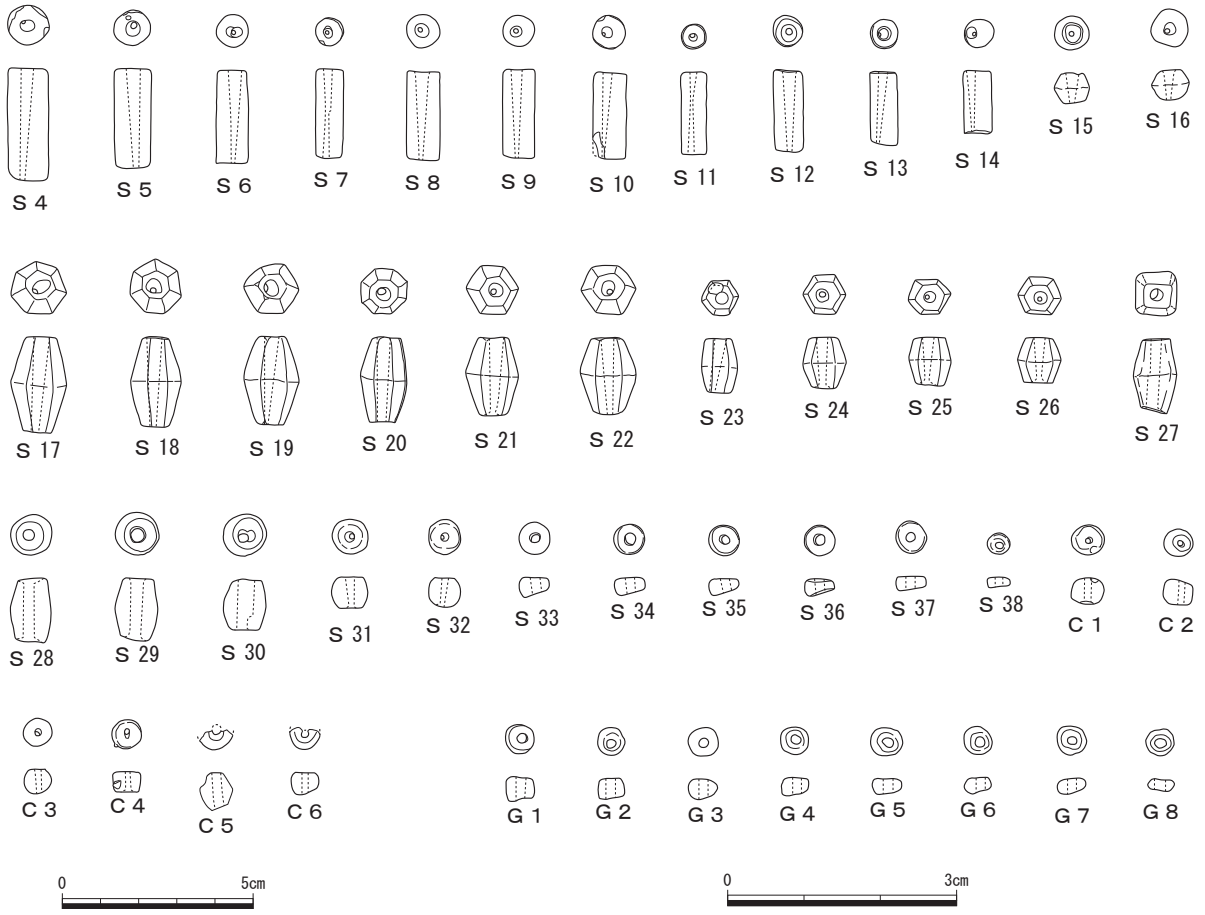
玉類（第117図、巻頭図版５－３）

50点が石棺内から出土した。一部石材の鑑定は鈴木茂之氏による。

碧玉製管玉 11点は、全長３cmほどで太身のもの（Ｓ４）と全長２cm前後でやや細身のもの（Ｓ５～Ｓ14）に分かれる。いずれも片面穿孔である。水晶製算盤玉２点（S15・Ｓ16）は、いずれも片面穿孔。黒色の泥岩・流紋岩製切子玉６点（S17～S22）はいずれも片面穿孔で、最大長が約14mmにま



第 116 図　桑山３号墳箱式石棺内出土遺物③ (1/3)

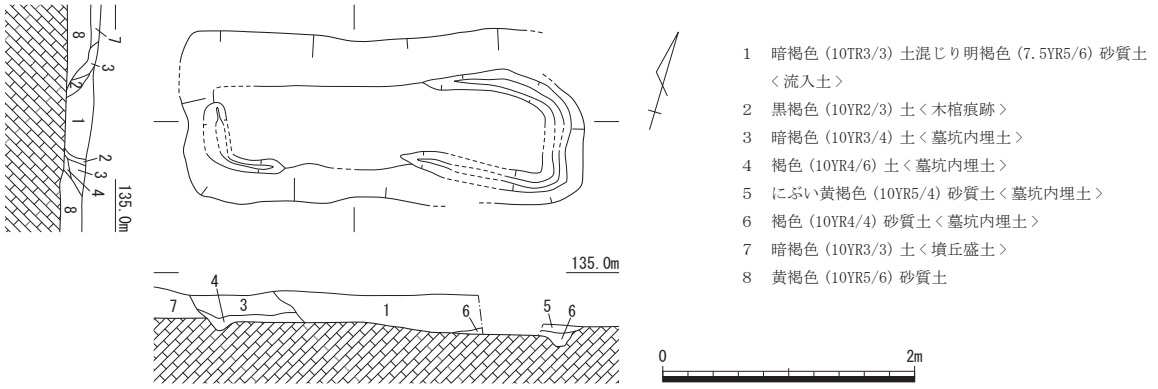


第 117 図　桑山３号墳箱式石棺内出土遺物④ (1/2・1/1)

とまる。石材は黒色粘板岩と考えられる。水晶製切子玉４点（S23～S26）は、いずれも片面穿孔で山陰系のものである。蛇紋岩製切子玉（S27）は断面が正方形で、両面穿孔である。大賀克彦氏のいう中国地山間部系の蛇紋岩製丸玉と同様の石材と考えられる[(1)]。蛇紋岩棗玉（S29）は両面穿孔である。埋木製棗玉２点（S28・S30）は両面穿孔で、丁寧に研磨されており光沢を帯びる。S30は片面のみ穿孔を位置を変えて２度行っている。水晶製丸玉２点（S31・S32）は片面穿孔である。蛇紋岩製小玉５点（S33～S37）、滑石製臼玉１点（S38）はいずれも両面穿孔である。またここで図示したものに加えて、蛇紋岩製小玉１点が被葬者下顎骨に付着して出土している。土製丸玉６点（Ｃ１～Ｃ６）で、いずれも色調は黒色である。ガラス製小玉８点（Ｇ１～Ｇ８）は玉類のうち北側に集中して出土した。色調はいずれも黄色である。

３　木棺墓

箱式石棺の北東約２ｍで検出された木棺直葬墓である。墓坑は墳頂より掘り込まれており、検出面の規模で長さ312cm、最大幅123cm、深さ77cm。墓坑の方位はN−72°−Eで、底面西側がやや高くなることから西頭位と思われる。短軸断面で木棺の長側板と思われる痕跡が確認されたこと、鉄釘等の出土がみられないことから組合式木棺が用いられたとみられる。墓坑底面の外縁にはV字形の溝が部分的に確認されたが、これは木棺の固定もしくは排水のために設けられたものと考える。墓坑・木棺ともに遺物は出土しなかった。



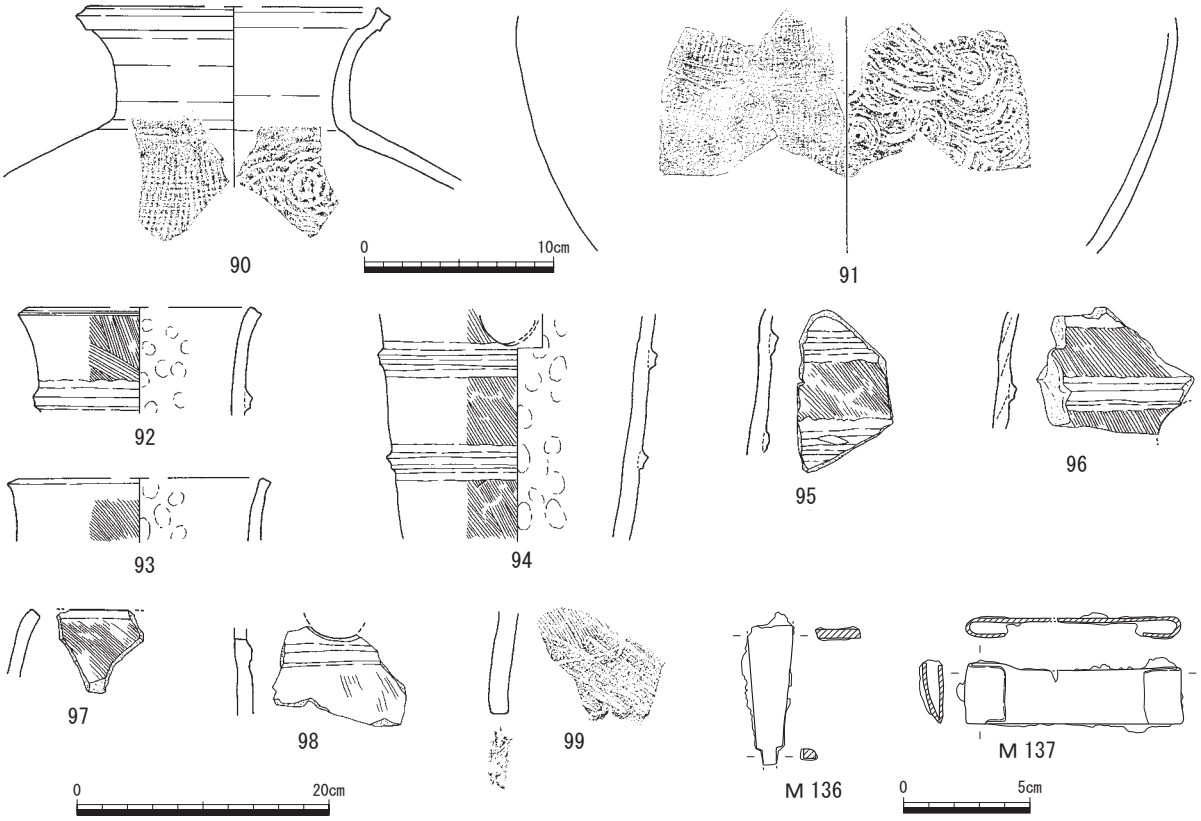
第 118 図　桑山３号墳木棺墓（1/60）

４　その他の遺物

周溝内や古墳周辺から須恵器や円筒埴輪、鉄器が出土した（第119図）。90は壺の口縁部から肩部にかけての破片で、外面肩部に平行タタキ、内面には同心円状の当て具痕が残る。91は甕の胴部片。外面に平行タタキ、内面に同心円状の当て具痕がみられる。92～99は土師質の円筒埴輪片。全体的に外面調整はナナメハケ、内面調整はユビオサエやナデで整形される。94・96・98には透かし孔が残る。突帯の断面はM字状を呈し、突帯間隔は７cm前後。M136は平根・方頭鏃で、周溝内から出土。M137は手鎌の刃先で、古墳周辺の流土中から出土した。（四田）

註

（１）大賀克彦 2008「古墳時代後期における玉作の拡散」『古代文化研究』16　島根県古代文化センター



第 119 図　桑山３号墳周溝及び墳丘出土遺物（1/6・1/4・1/3）

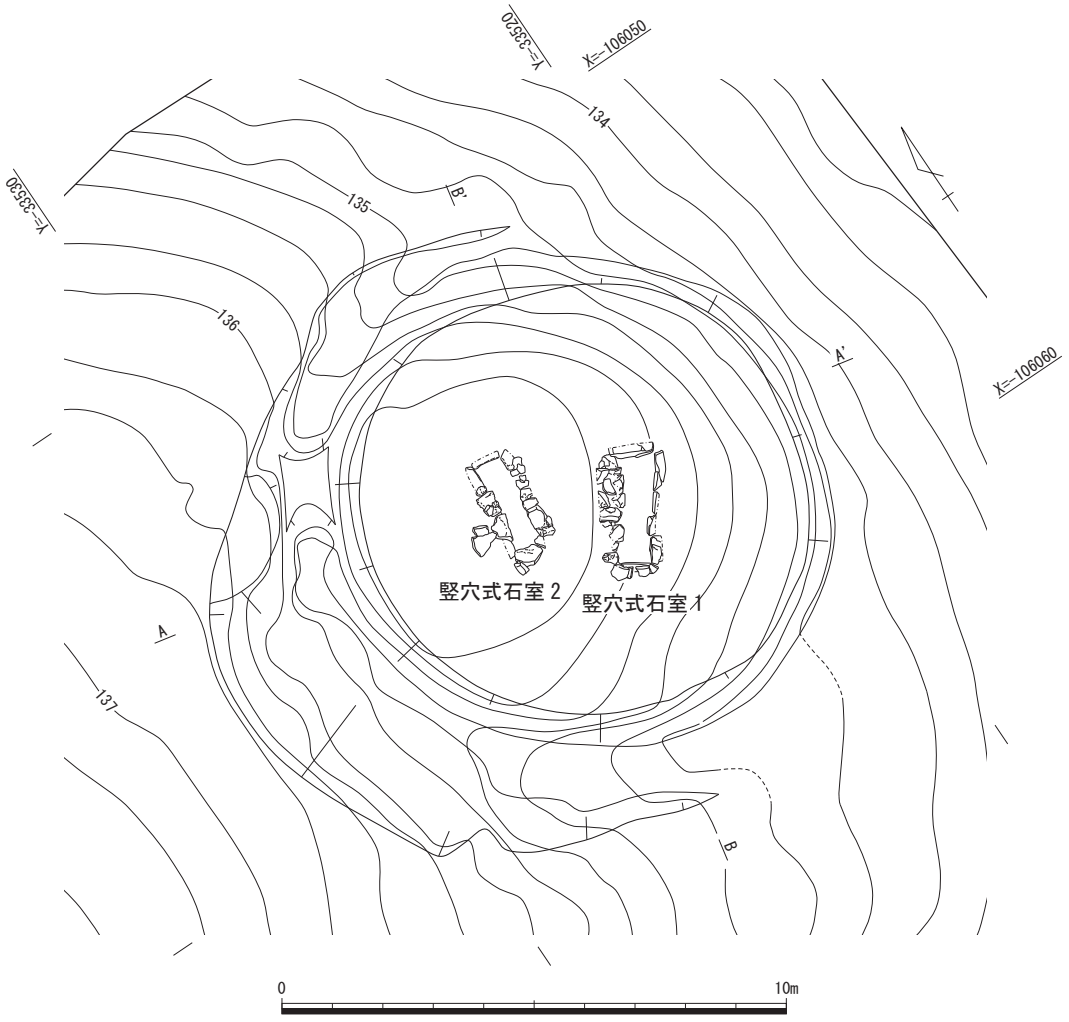
第５節　桑山４号墳

１　墳丘と周溝

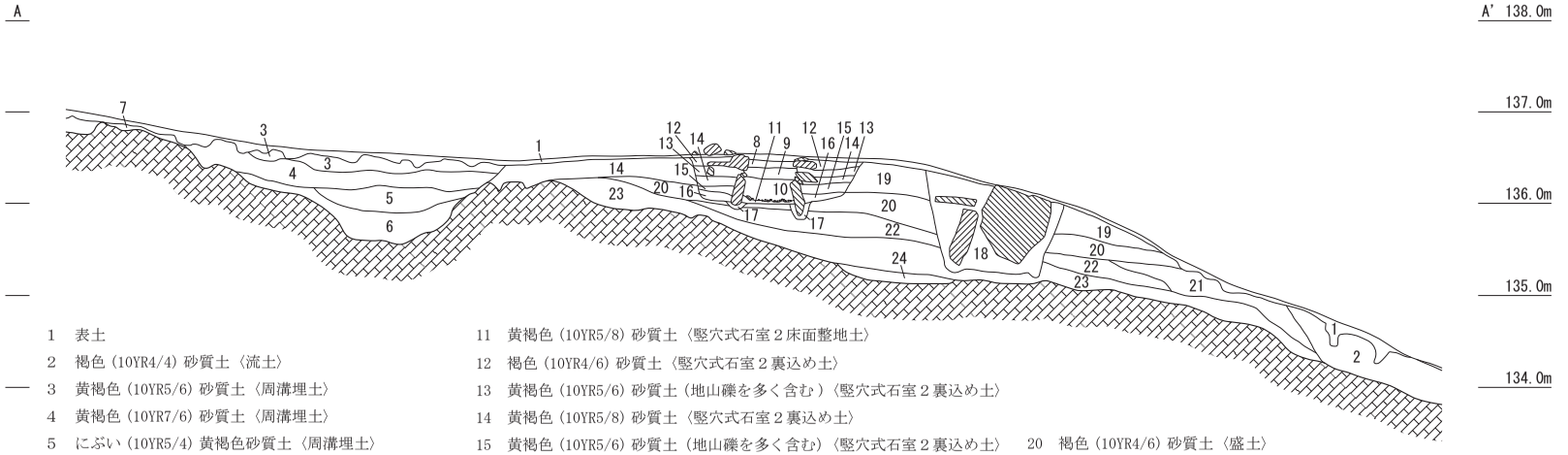
４号墳は、尾根上の標高 135 ～ 136m 付近に位置し、３号墳と隣接している。眼下に１・２号墳を見下ろし、北東方向を望むと吉井川と皿川の合流地点を見ることができる眺望の良い立地である。

墳丘は上面が削平されており、並列配置の２基の竪穴式石室は蓋石が失われていた。周溝は山側の西半分のみで確認した。築造時は全周していたのか、もしくは当時から西半分のみであったのかを明らかにすることはできなかった。周溝断面の規模は、Ａ－Ａ’断面付近で幅約 3.5 ｍ、深さ約 0.8 ｍを測る。墳丘西側には幅約１ｍにわたって土橋状に周溝を掘り残した部分が認められた。墳丘は径約 10 ｍの円墳に復元することができ、残存墳丘高は西側の周溝底面から測ると約１ｍである。

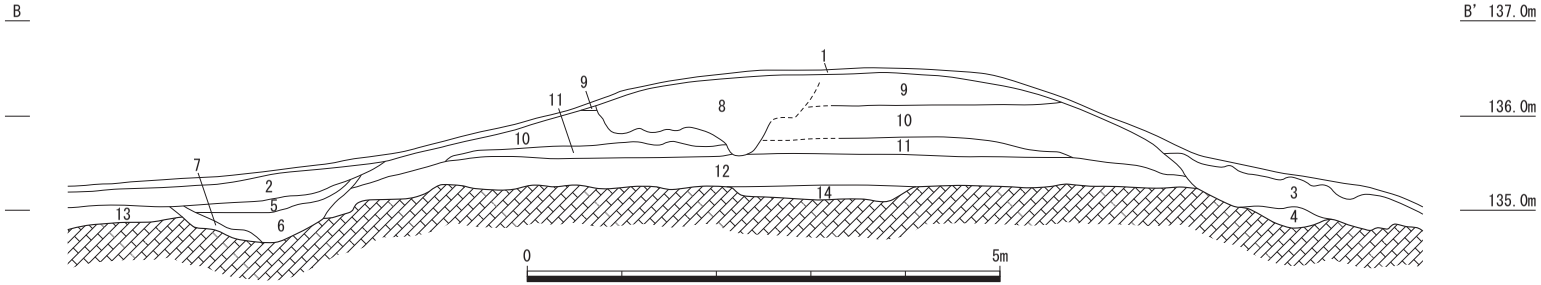
墳丘は、桑山遺跡の竪穴住居２の跡地の平坦面を利用して築造している。古墳築造前の旧表土の上に、褐色と明褐色の土を互層状に積んでいる様子が確認できた。竪穴式石室は双方とも墳丘構築後に掘り方を掘削して造られている。　（藤井雅）



第 120 図　桑山４号墳墳丘 (1/150)



1　表土
2　褐色（10YR4/4）砂質土〈流土〉
3　黄褐色（10YR5/6）砂質土〈周溝埋土〉
4　黄褐色（10YR7/6）砂質土〈周溝埋土〉
5　にぶい（10YR5/4）黄褐色砂質土〈周溝埋土〉
6　黄褐色（10YR5/6）砂質土（やや暗色）〈周溝埋土〉
7　黄褐色（10YR5/6）砂質土〈流土〉
8　褐色（10YR4/6）砂質土〈竪穴式石室２埋土〉
9　黄褐色（10YR5/6）砂質土〈竪穴式石室２埋土〉
10　褐色（10YR4/4）　砂質土〈竪穴式石室２埋土〉
11　黄褐色（10YR5/8）砂質土〈竪穴式石室２床面整地土〉
12　褐色（10YR4/6）砂質土〈竪穴式石室２裏込め土〉
13　黄褐色（10YR5/6）砂質土（地山礫を多く含む）〈竪穴式石室２裏込め土〉
14　黄褐色（10YR5/8）砂質土〈竪穴式石室２裏込め土〉
15　黄褐色（10YR5/6）砂質土（地山礫を多く含む）〈竪穴式石室２裏込め土〉
16　褐色（10YR4/6）砂質土〈竪穴式石室２裏込め土〉
17　黄褐色（10YR5/6）砂質土（地山の小礫を含む）
〈竪穴式石室２基底石掘り方埋土〉
18　褐色（7.5YR4/6）砂質土〈竪穴式石室１裏込め土〉
19　明褐色（7.5YR5/8）砂質土〈盛土〉
20　褐色（10YR4/6）砂質土〈盛土〉
21　褐色（10YR4/6）砂質土（５～10cmの礫を含む）〈盛土〉
22　褐色（7.5YR4/4）砂質土（赤褐色砂質土を含む）〈盛土〉
23　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土〈旧表土〉
24　黄褐色（10YR5/6）砂質土〈桑山遺跡 竪穴住居２ 周堤溝 埋土〉



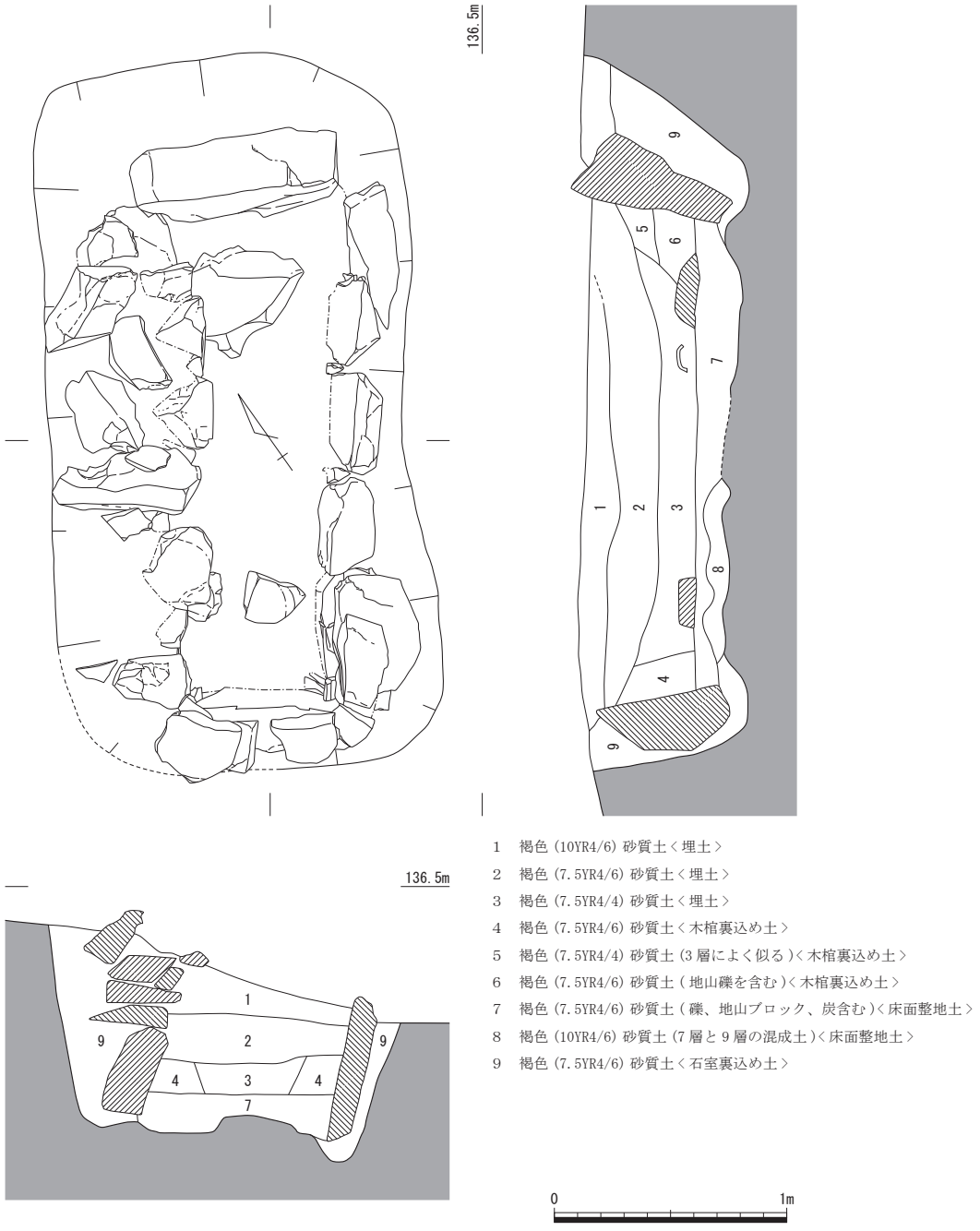
1　表土
2　褐色（10YR4/6）砂質土〈流土〉
3　褐色～黄褐色（10YR4/6～10YR5/6）砂質土〈流土〉
4　暗褐色（10YR3/3）砂質土〈周溝埋土〉
5　褐色（7.5YR4/6）砂質土〈周溝埋土〉
6　褐色（7.5YR4/4）砂質土〈周溝埋土〉
7　赤褐色（5YR4/8）砂質土〈周溝埋土〉
8　褐色（7.5YR4/6）砂質土〈竪穴式石室１裏込め土〉
9　明褐色（7.5YR5/8）砂質土〈盛土〉
10　褐色（10YR4/6）砂質土〈盛土〉
11　褐色（7.5YR4/4）砂質土〈盛土〉
12　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土〈旧表土〉
13　明褐色（7.5YR5/6）砂質土
〈桑山遺跡 竪穴住居２ 埋土〉
14　黄褐色（10YR5/6）砂質土
〈桑山遺跡 竪穴住居２ 周堤溝 埋土〉

第 121 図　桑山４号墳墳丘・主体部内土層断面（1/80）

２　竪穴式石室１

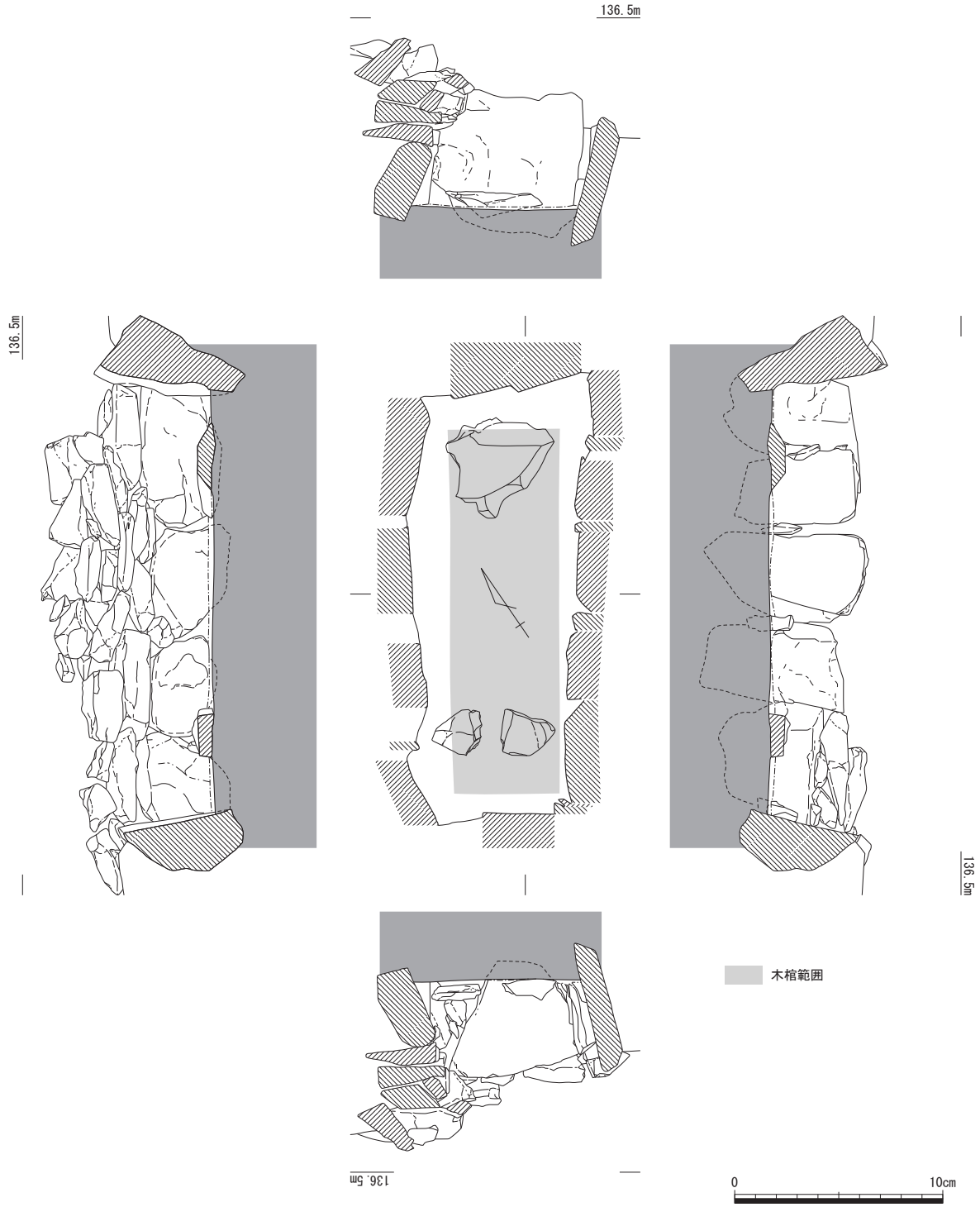
竪穴式石室（第 122・123 図、図版 48）

竪穴式石室１は４号墳の中央やや東よりに位置する。調査前には攪乱により天井石と側壁の一部が失われており、残った側壁が地表に露出している状態であった。石室の内部には土砂が流入していたものの、二次的な攪乱を受けた痕跡は少なく、攪乱は石材採取を主な目的として行われた可能性が高い。石室の掘り方は全長 3.13 m、幅 1.64 m、深さ１m以上を測り、盛り土の上面から掘り込まれている。竪穴式石室は、全長 2.05 m、幅 0.80 m、深さ１m以上、主軸方向はＮ－ 35°－Ｅを測る。一段目を大ぶりの板石で箱式石棺状に構築したのち、やや小さめの礫を３～４段積み重ねることで構築



第 122 図　桑山４号墳竪穴式石室１①（1/30）

している。一段目の石の据え方はやや特殊で、石を固定するための掘り方が明確でなく、裏込め土と、20 ㎝近い厚さの床面整地土によって石が固定されている。床面には大小３つの扁平な礫が平置きされており、これらを棺台として木棺が据えられていたと考えられる。石室の埋土掘り下げ中に検出した棺痕跡から、木棺は長さ 1.75 m、幅 0.52 mに復元することができる。石室内からは釘や鎹は出土しておらず、これらの緊結具を用いない木棺であった可能性が高い。埋葬人数は不明であるが、遺物の量や配置からみて複数人の埋葬は考え難い。



第 123 図　桑山４号墳竪穴式石室１② (1/30)

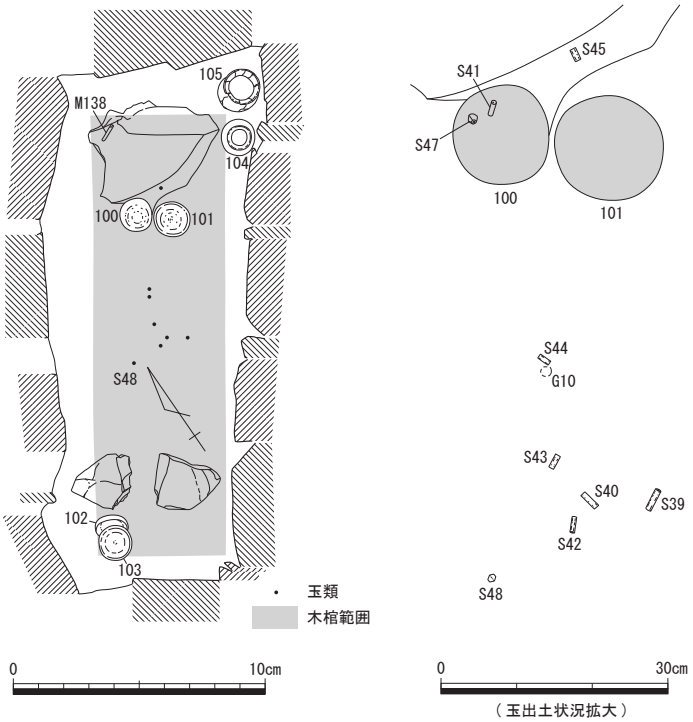
遺物出土状況（第 124 図、図版 49）

遺物は、すべて石室内から出土している。先述のように、石室は上半部に攪乱を受けていたが、すでに埋没していたと考えられる石室の下半部や遺物については埋葬時の状態を残している可能性が高い。石室内の遺物のうち、木棺内に副葬されたと考えられる遺物は、杯（100 ～ 103）、刀子（Ｍ 138）及び玉類Ｓ 39 ～Ｓ 49、Ｇ９・Ｇ 10 がある。杯蓋（100）と杯身（101）はセットと考えられ、棺内北寄りの位置で横並びに出土した。どちらも伏せた状態であることから枕としての利用が想定され、北頭位であったことがわかる。102・103 もセットの杯と考えられ、杯蓋（102）を下にした状態で、被葬者の足元と推定される位置から重なって出土した。刀子（Ｍ 138）は棺の北西隅から出土しており、枕元に置かれていた可能性が高い。玉類は、Ｓ 39・Ｓ 40・Ｓ 42 ～Ｓ 45・Ｓ 48、Ｇ 10 が被葬者の上半身に推定される位置から出土した一方、Ｓ 41 とＳ 47 は枕と推定される杯蓋（100）の下から出土した。枕の下に副葬品を入れる例は近隣の桑山南２号墳などにみられるが、本例の場合、当初から枕の下に置かれていたのか、木棺の腐朽に伴って偶然入り込んだのかは判断できなかった。棺外に置かれたと考えられる遺物には、須恵器壺（104）と土師器甕（105）がある。石室北東隅の床面整地土直上に並んで置かれており、須恵器壺（104）は口縁部が、土師器甕（105）は口縁部と底部が打ち欠かれたように欠損していた。

石室内出土遺物

土器（第 125 図、図版 69 － １）

100 ～ 103 は須恵器の杯である。100・102 は杯蓋で、口径 13.2 ～ 13.4 ㎝、器高 4.4 ㎝を測り、いずれも天井部にヘラケズリが施されているほか、内面には同心円状の当て具痕が残る。口縁部の内面には明瞭な段が認められる。101・103 は杯身で、口径 12.0 ㎝、器高 4.0 ～ 4.2 ㎝を測り、いずれも底部にはヘラケズリが認められるほか、「×」字のヘラ記号が施されている。104 は須恵器の壺で、口径 8.7 ㎝、器高 11.8 ㎝を測り、体部から底部にかけてカキメが施されている。105 は土師器の甕で、



第 124 図　桑山４号墳竪穴式石室１石室内遺物出土状況（1/30・1/10）

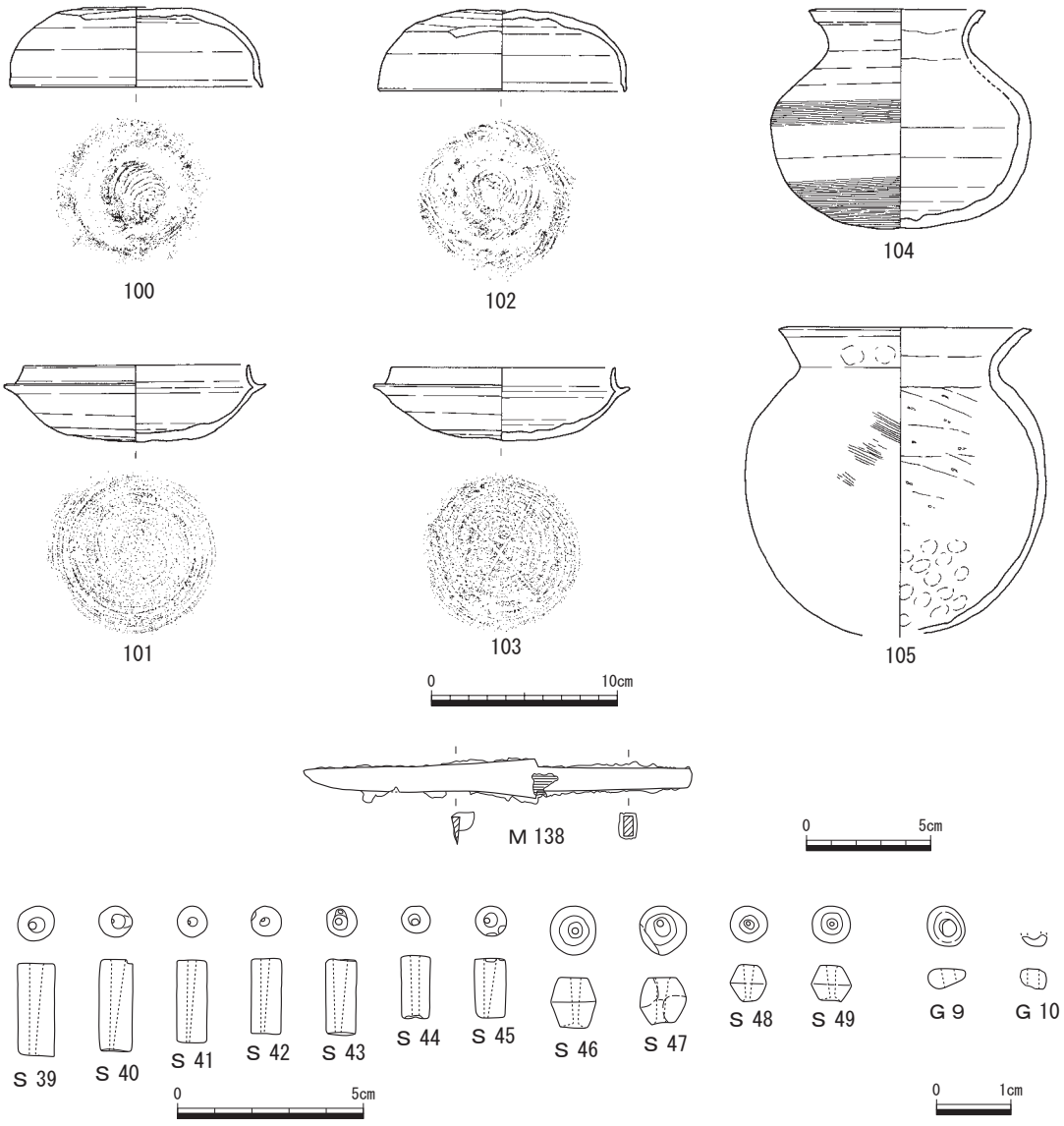
口径 12.5 ㎝、残存高 16.7 ㎝を測り、体部外面にはハケメ、内面にはヘラミガキのほか、底部付近には指頭圧痕が認められる。

鉄器（第 125 図、図版 69 － 1）

M 138 は刀子である。両関式で、長さ 15.7 ㎝、刀部長 9.4 ㎝、刃部幅 1.6 ㎝を測り、茎部に一部木質が遺存している。

装身具（第 125 図、巻頭図版５－４）

S 39 ～ S 45 は碧玉製の管玉である。長さ 15.9 ～ 25.1 ㎜、幅 7.7 ～ 9.7 ㎜を測り、色調はいずれもエバーグリーンを呈する。穿孔は、全て片面穿孔である。**S 46 ～ S 49** は水晶製の算盤玉である。大型と小型の二者があり、大型の**S 46・S 47** は長さ 12.5 ～ 13.5 ㎜、幅 13.0 ～ 13.2 ㎜、小型の**S 48・S 49** は長さ 9.3 ～ 10.3 ㎜、幅 9.7 ～ 10.3 ㎜を測る。穿孔は全て片面穿孔である。**G 9・G 10** はガラス製の小玉である。**G 9** は長さ 2.8 ㎜、幅 5.4 ㎜を測り、色調はグラスグリーンを呈する。**G 10** は残存長 2.7 ㎜、残存幅 3.2 ㎜を測り、色調は浅黄色を呈する。　（藤井翔）



第 125 図　桑山４号墳竪穴式石室１内出土遺物①（1/4・1/3・1/2・1/1）

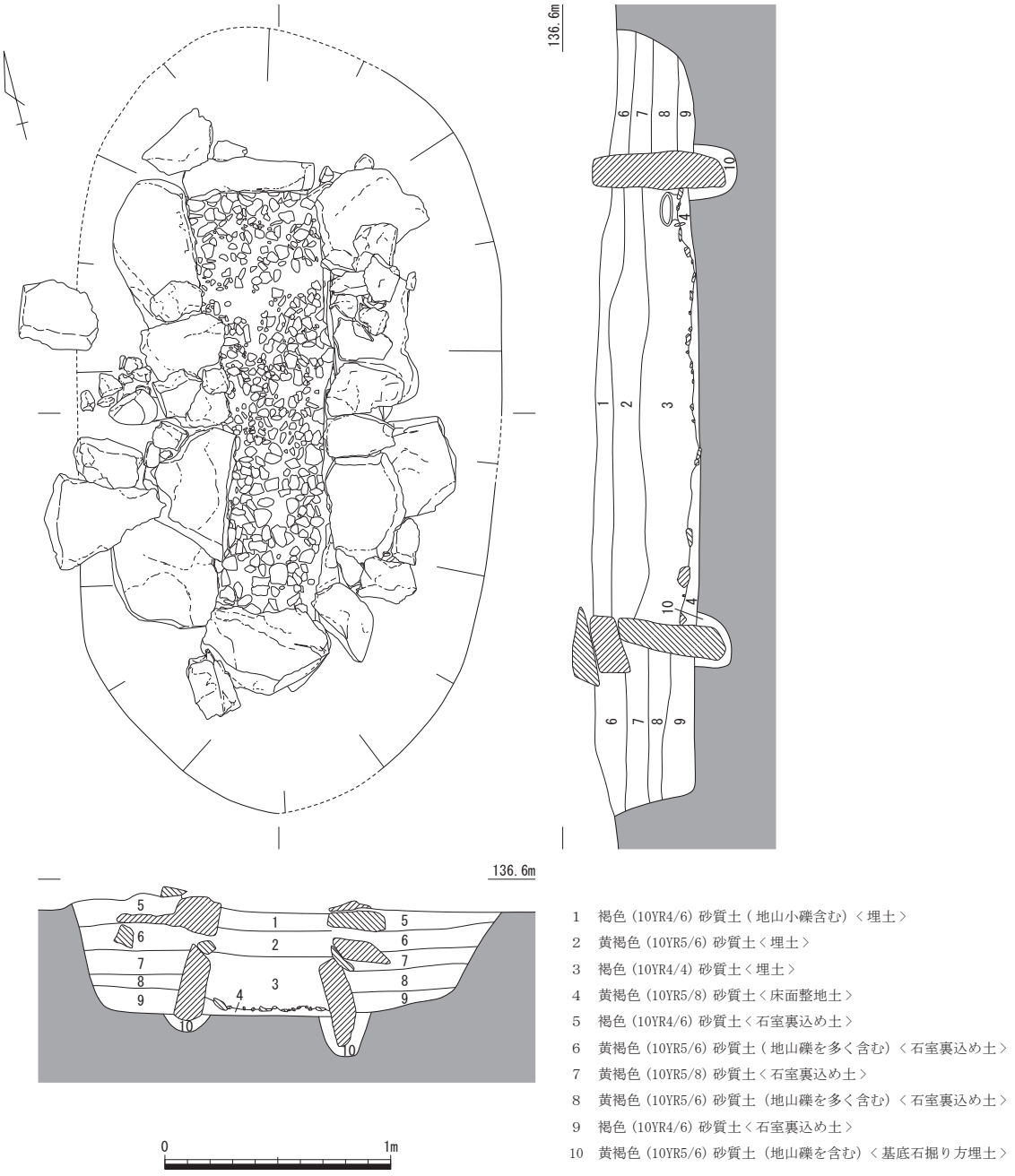
３　竪穴式石室２

竪穴式石室（第 126・127 図、写真 30、図版 50）

竪穴式石室２は４号墳の中心より西に位置し、竪穴式石室１と並列する。調査時には天井石と側壁の上部の一部が失われ、石室内部は土で埋まっている状態であった。

石室構築のための掘り方は、墳丘盛土上から穿たれている。楕円形を呈し、長さ 3.43 m、幅 1.82 m、残存する深さが 0.75 ㎝である。基底石の部分は深く掘り込み石を据えている。石室の裏込め土は褐色と黄褐色の土を互層状に充填している（第 126 図）。

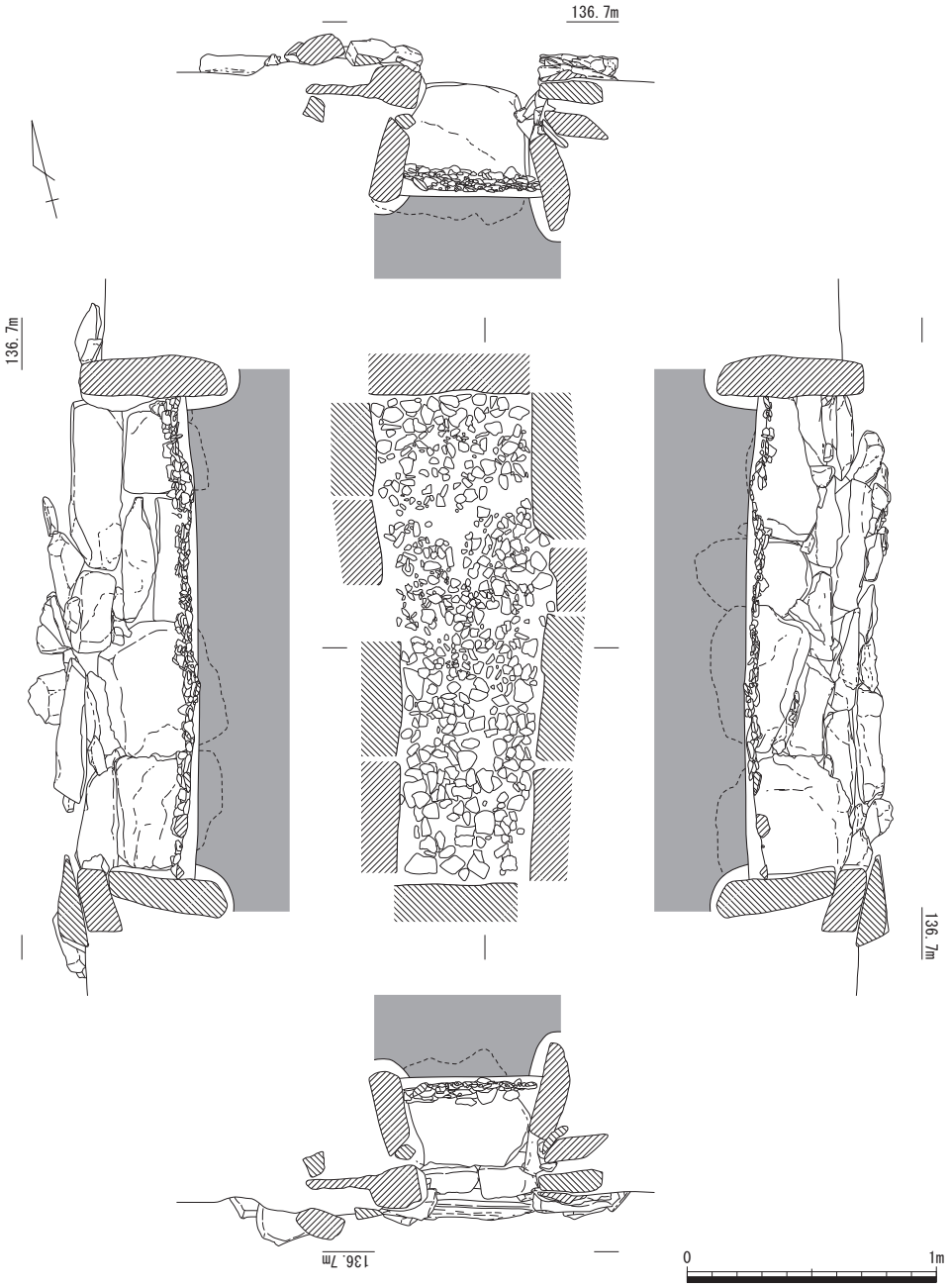
竪穴式石室（第127図）は、天井石と石室の上部が失われていたが、全長1.98㎝、幅0.67㎝、残存高0.6



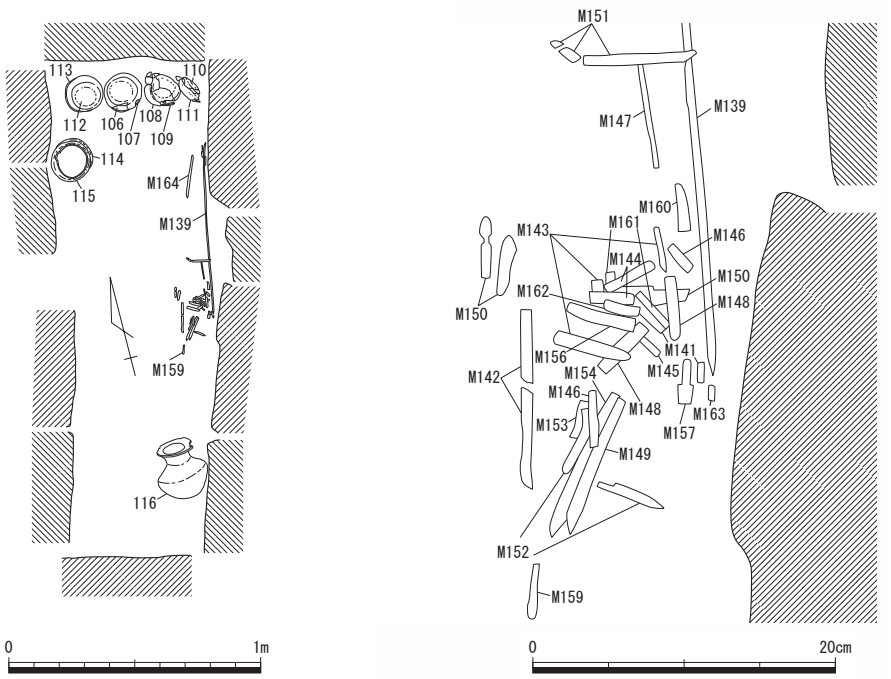
第 126 図　桑山４号墳竪穴式石室２①（1/30）

cmを測る。主軸方向はＮ－ 15°－Ｅである。基底石は上段の石材よりも大きい板石状の石材を立てて据える。２段目以上の石材は横に寝せて長手積みにしている。縦方向の目地は基本的に通らずに、千鳥に積むように意識されている。石室上部が失われているため明確ではないが、おおむね３～４段積みにしていたと考えられる。小口側は垂直に立ち上がるが、側壁はやや内側に持ち送っていた。

石室床面には薄く礫床が敷かれていた。礫は角がある山石を使用し、石の大きさは１～ 10 cmのものが使用されていた。小動物の影響もあるかもしれないが、礫床の厚薄や礫の大きさは場所によって変わる。竪穴式石室１と異なり、竪穴式石室２では木棺の痕跡は認められなかった。埋葬人数に関して明確に示すものはないが、遺物の出土状況などから考えると単葬であると推定される。



第 127 図　桑山４号墳竪穴式石室２② (1/30)



第 128 図　桑山４号墳竪穴式石室２石室内遺物出土状況（1/30・1/5）

遺物出土状況（第 128 図、図版 51）

石室内からは須恵器の蓋杯と壺、大刀、鏃、鉄鏃、刀子が出土した（第 128 図）。先述の通り、石室は上部が失われていたが、副葬品は原位置に近い状態で保たれているものが多かった。石室の北小口には杯身の上に杯蓋が被せられ、各々セットになった状態の蓋杯が４組（106 ～ 113）出土した。北東側の２組は木の根により傾いていたが、位置は変わっていないと考えられる。その手前には、ひっくり返した杯蓋（114）の上に杯身（115）が重ねられた状態で置かれていた。南側の小口付近では須恵器の壺（116）が出土した。東側壁に沿って大刀（Ｍ 139）が、切先を南に、刃を上に向けた状態で側壁に立てかけられていた（写真 29）。大刀の関付近の西側には、刀子（Ｍ 164）が大刀と平行に並んでいた。大刀の切先付近の西側には鉄鏃（Ｍ 141 ～Ｍ 154・Ｍ 156・Ｍ 157・Ｍ 159 ～Ｍ 163）が出土した。鉄鏃が出土した高さは様々で礫床直上から出土するものもあれば、礫床から 19 ㎝高い位置から出土したものまである。また礫床のものと思われる礫が、礫床から浮いた鉄鏃の間から多数出土しており、



写真 29　桑山４号墳竪穴式石室２
Ｍ 139 出土状況（南西から）



写真 30　桑山４号墳竪穴式石室２
作業風景（北西から）

鉄鏃は小動物等により動かされていると考えられる。鉄鏃の礫床直上での出土状況から考えると、鏃身を南側に向けて束にし、大刀と平行に置かれていたものと考えられる。またその鉄鏃の束は後述するように布で包んで副葬されたと考えられる。

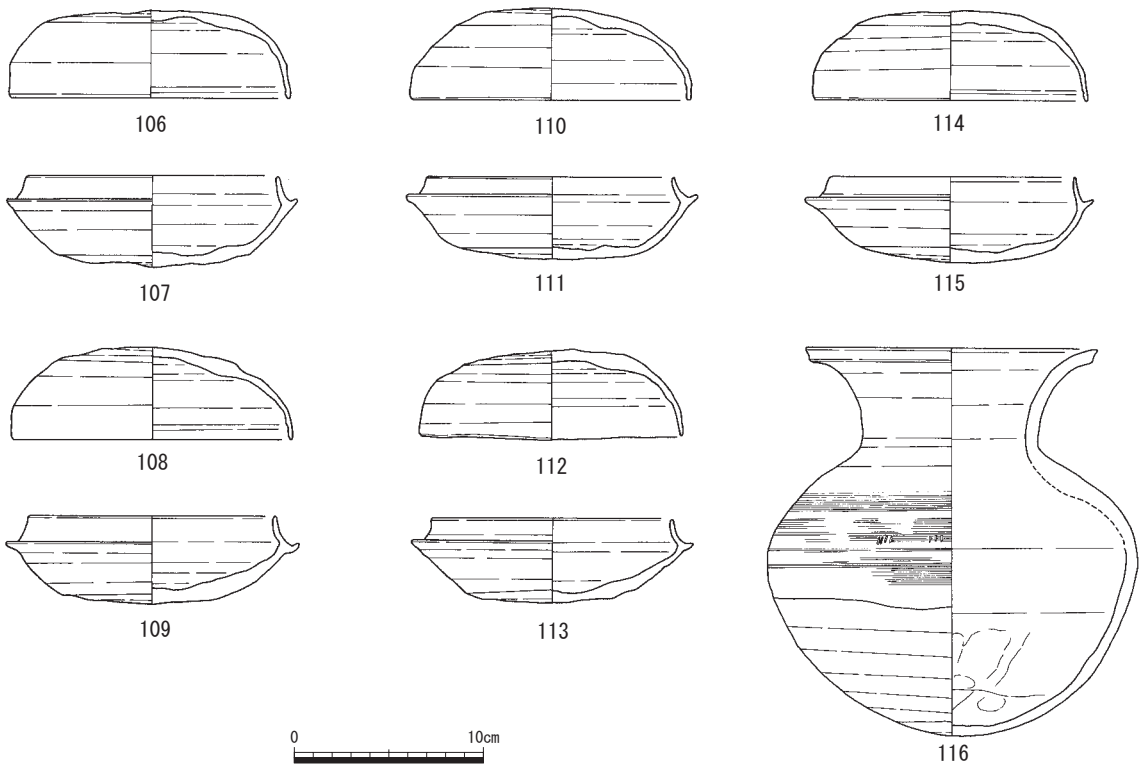
石室内出土遺物

土器（第 129 図、図版 69 － 2）

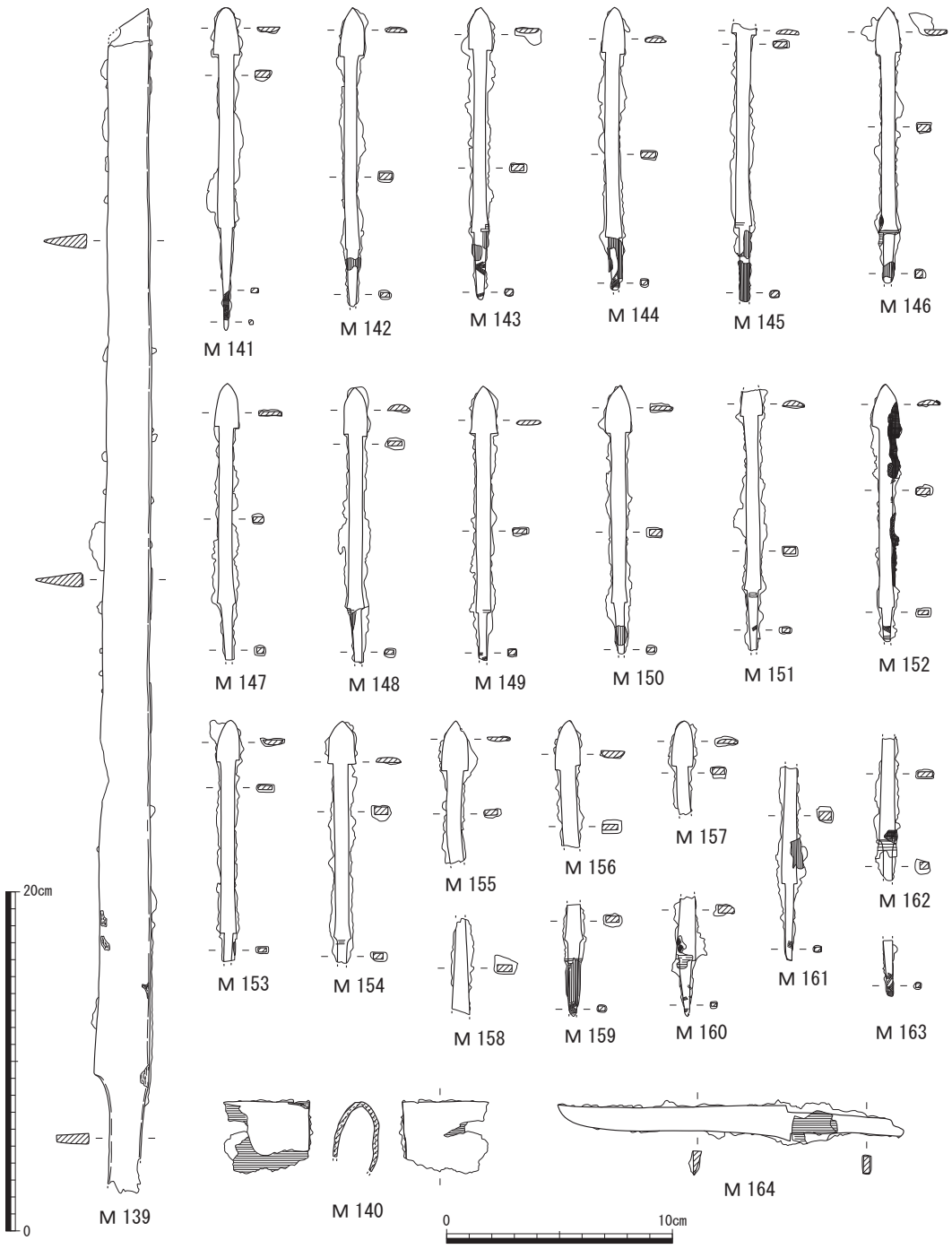
石室内から蓋杯が５組と壺１点の計 11 点の須恵器が出土した。須恵器の蓋杯は、焼成の違いにより、黄橙色を呈する杯蓋（106）と杯身（107）、灰白色を呈する杯蓋（108）と杯身（109）、灰白色を呈する杯蓋（110・112・114）と杯身（111・113・115）の三種がある。これら三種は法量や形態に違いは認められない。杯蓋は口径 13.8 ～ 14.7 ㎝、器高 4.7 ～ 4.9 ㎝である。口縁端部は丸くおさめる。106・108・114 では口縁端部内側に凹線状の凹みが巡っている。天井部と口縁部の境は、黄橙色を呈する杯蓋（106）ではゆるい稜が認められるが、基本的に稜をもたず丸く仕上げられている。杯身は口径 12.7 ～ 13.2 ㎝、器高 4.4 ～ 4.9 ㎝である。口縁端部は丸くおさめる。なお、すべての杯蓋・杯身の内面に当て具痕は認められない。116 は須恵器の壺で、口縁 15.3 ㎝、器高 20.6 ㎝である。口縁は外反して開き、頸部にはシボリの痕跡が認められる。体部の肩部にはカキメが巡り、下部はケズリが施されている。

武器（第 130 図、写真 29、図版 70）

石室内から出土した武器には、大刀、刀装具、鉄鏃がある。大刀（Ｍ 139）は残存全長が 699.5㎜で、刃部が 630㎜である。切先はカマス切先である。目釘穴はＸ線写真でも認められなかった。刃部には木質が残存しており、鞘に収めた状態で副葬されたと考えられる。Ｍ 140 はＭ 139 に装着されていたと考えられる鎺である。内面には木質が遺存している。Ｍ 141 ～Ｍ 162 は長頸鏃である。鉄鏃は茎関部で計測すると 18 本以上が副葬されていたと考えられる。型式が確認できるＭ 141 ～Ｍ 154 はすべ



第 129 図　桑山４号墳竪穴式石室２内出土遺物①（1/4）



第 130 図　桑山４号墳竪穴式石室２内出土遺物②（1/4・1/3）

て細根系長頸柳葉式であり、副葬された鉄鏃は単一型式であったことが推測される。茎には糸巻、矢柄、口巻が認められるものが多い。鏃身の片面に布が付着しているもの（M 152・M 160・M 162）も認められ、M 152 では鏃身の上に布が重なり合って遺存しており、鉄鏃は束になった状態で布で包まれて副葬されていたようである。

工具（第 130 図、図版 70）

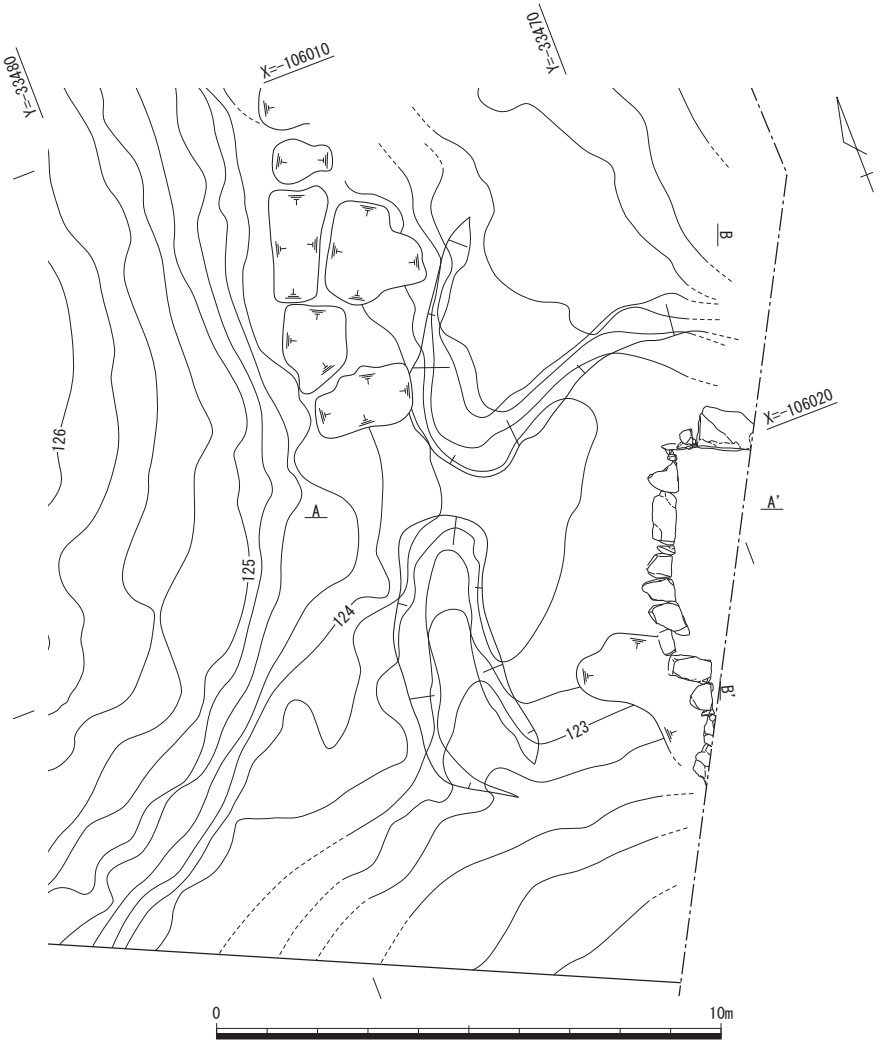
M 164 は、全長 153㎜、刃部長 103㎜ の刀子である。関の刃側と棟側の両方に段を有する。目釘穴はＸ線写真でも認められなかった。茎には木質が遺存している。　（藤井雅）

第６節　桑山５号墳

１　墳丘と周溝

５号墳は、１～４号墳が立地する尾根から北側に谷を挟んで存在する小尾根の先端に、単独で築かれている。周辺の遺跡の状況から、この尾根上においても弥生時代、古代など５号墳以外の遺構の存在も想定されたため、尾根筋にあたる５号墳北西の広い範囲を合わせて調査した。しかしながら遺構は皆無であり（第 74 図）、遺物もほとんど出土しなかった。また、５号墳の北西には近世以降の墓地が造営されており、墓坑多数を検出している。

５号墳は、西側のおよそ半分のみが調査対象となり（第 131 図）、予定路線外となる東半部は調査を行わず現状保存されている。墳丘上部は大きく削平を受けており、調査前において地形の隆起等は明確でなく、未周知の古墳であった。調査の結果、墳丘盛土はわずかに残存しているのみで、旧地表層の上に２～３層の盛土が認められた（第 132 図）。



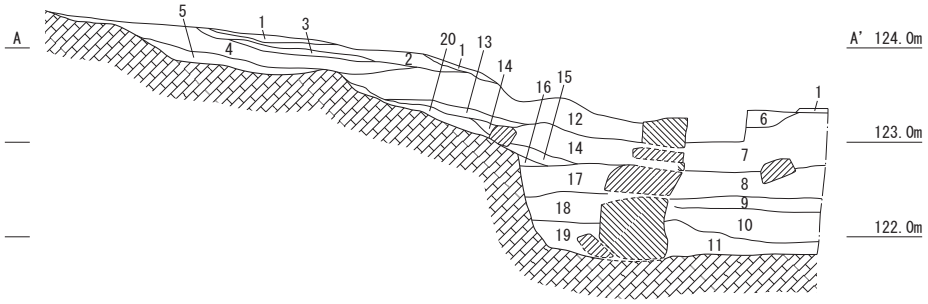
第 131 図　桑山５号墳墳丘（1/150）

周溝は、墳丘西側の一部において検出された。周溝断面の規模は、残りのよい部分で幅約２ｍ、深さ約 0.7 ｍを測るが、北西部から北部にかけては周溝幅が大きく開き、北に向かうにつれて不明瞭になる。また、尾根線にあたる部分では、幅約１ｍにわたって土橋状に周溝を掘り残した部分が認められた。同様の施設は、桑山１・４号墳、桑山南１・５号墳、細畝３号墳[(1)]など周辺の古墳群においても普遍的に認められ、いずれも尾根線ないし地形の高い側にこれを設けている。

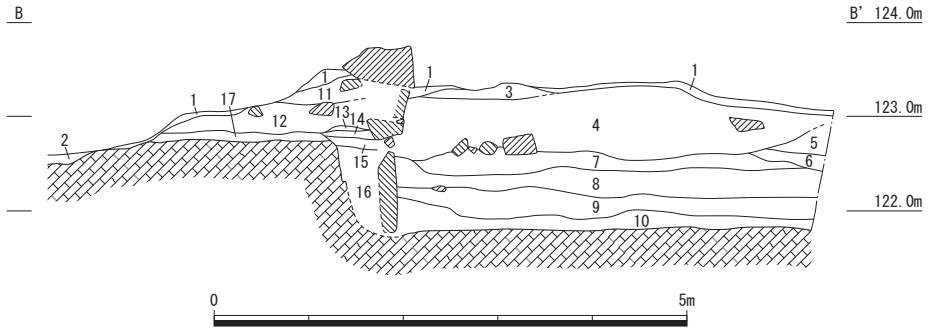
以上の周溝検出状況や未調査部分の現地形、横穴式石室の位置などを手がかりに墳丘を復元すれば、径約 10.5 ｍの円墳となる。

２　横穴式石室

５号墳の主体部は、墳丘のほぼ中央に築かれた横穴式石室である（第 133 図・第 134 図）。調査前の状況としては、天井石がすべて失われ、奥壁最上段の石材のみが地表に露出していた。この石材の露出が、５号墳発見の契機となった。石室内の調査はその西半のみを対象とし、路線外となる東半の調査は行っていない。石室の右側壁を検出していないものの、奥壁の状況などを考慮すれば、玄室内



1　表土
2　褐色（10YR4/6）砂質土〈造成土か〉
3　褐色（10YR4/4）砂質土〈周溝埋土〉
4　褐色（10YR4/6）砂質土〈周溝埋土〉
5　黄褐色（10YR5/6）砂質土〈周溝埋土〉
6　褐色（10YR4/4）砂質土
7　黄褐色（10YR5/8）砂質土
8　褐色（10YR4/4）砂質土
9　暗褐色（10YR3/3）砂質土
10　褐色（10YR4/4）砂質土
11　褐色（10YR4/4）砂質土
12　褐色（10YR4/6）砂質土〈盛土〉
13　褐色（10YR4/4）砂質土〈盛土〉
14　褐色（10YR4/4）砂質土〈盛土〉
15　褐色（7.5YR4/4）砂質土〈盛土〉
16　暗褐色（7.5YR3/4）砂質土〈盛土〉
17　褐色（10YR4/4）砂質土〈掘り方埋土〉
18　黒褐色（10YR2/3）砂質土〈掘り方埋土〉
19　褐色（10YR4/4）砂質土〈掘り方埋土〉
20　褐色（10YR4/4）砂質土〈旧表土〉



1　表土
2　黄褐色（10YR5/6）砂質土＜流土＞
3　褐色（10YR4/6）砂質土＜造成土か＞
4　褐色（10YR4/4）砂質土
5　褐色（10YR4/6）砂質土
6　褐色（10YR4/4）砂質土
7　褐色（10YR4/6）砂質土
8　黄褐色（10YR5/6）砂質土
9　褐色（10YR4/6）砂質土
10　褐色（10YR4/4）砂質土
11　褐色（10YR4/6）砂質土＜盛土＞
12　褐色（10YR4/4）砂質土＜盛土＞
13　暗褐色（10YR3/3）砂質土＜掘り方埋土＞
14　褐色（10YR4/6）砂質土＜掘り方埋土＞
15　暗褐色（10YR3/4）砂質土＜掘り方埋土＞
16　褐色（10YR4/4）砂質土＜掘り方埋土＞
17　褐色（10YR4/4）砂質土＜旧表土＞

第 132 図　桑山５号墳墳丘・石室内土層断面（1/80）

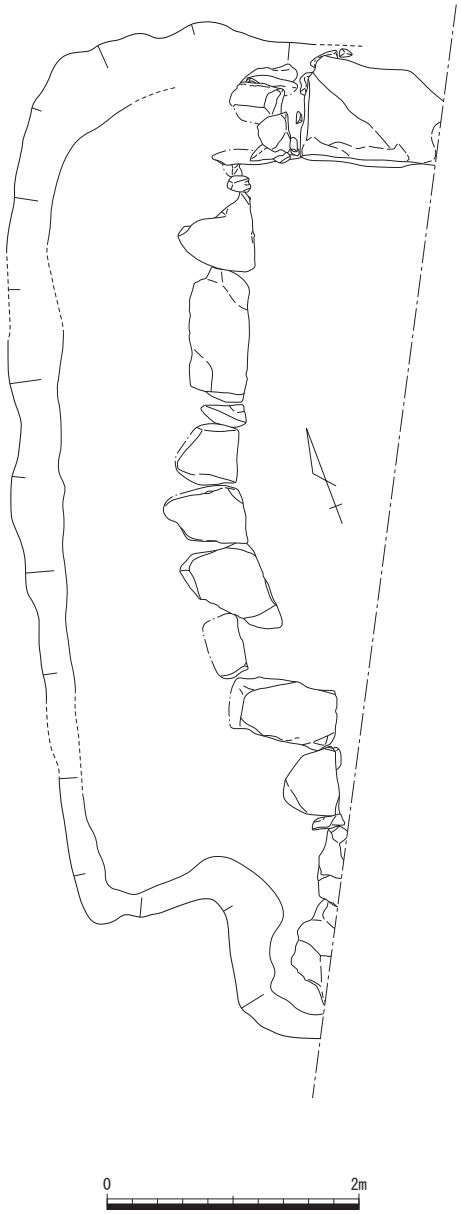
の大半を発掘しているものと考えられる。

石室の主軸方位はＮ－ 21°－Ｅで南に開口する。右側壁部分を調査していないが、左側のみに袖をもつ片袖式と推定される。その規模は、玄室長 4.25 ｍ、玄室残存高 1.9 ｍ、羨道残存高 0.8 ｍ、袖部の幅は 0.7 ｍを測る。本来の玄室高さは不明ながら、奥壁はほぼ上端近くまで残存しているとみられる。羨道は、大半が調査対象区域から外れるため不明確な部分があるが、石室の掘り方が南側に解放せず回り込む状況を示すことから、検出した南端の石材が羨道の前端にあたるものと考えられる（第 133 図）。したがって、羨道についても基底石は前端まで完存していると判断され、羨道長は約 2.75 ｍ、石室全長は約 7.0 ｍになる。残存する周溝の状況を考えると、墳端は羨道前端よりもさらに南に想定され、桑山１号墳や桑山南１号墳などと同様に、石室と墳端を接続する施設として墓道を備えていたと考えられる。

奥壁の基底石は、高さ約１ｍの薄い板状石材２枚を立てて腰石とし、上段は横長の石材を概ね３段に積んでいる。玄室の左側壁は、基底部に高さ約 0.6 ｍの石材を並べて腰石状とし、上段には横長の石材を重ねる。左側壁の平面形は強く湾曲しており、胴貼形状をなす。玄門の袖石は立柱石とせず、玄室側壁の基底石と高さをそろえている。羨道の側壁についてはわずかな部分しか検出していないが、小型の石材を２段に積んで袖石基底石と高さをそろえているようである。全体に横目地がよく通る石積みといえる。

床面はおおむね水平であるが、開口部に向かってわずかに低くなっている。玄室床面のほぼ全体に、概ね 15㎝大以下の円礫を敷いて礫床としているが、礫層は薄く、疎らな箇所も多い。羨道床面は調査した範囲がわずかであるが円礫は認められず、玄室のみを礫床としたものと考えられる。玄門の床に梱石などは認められない。

なお、閉塞施設は確認できていない。



第 133 図　桑山５号墳石室掘り方（1/60）



写真 31　桑山５号墳玄室奥壁・左側壁（南から）

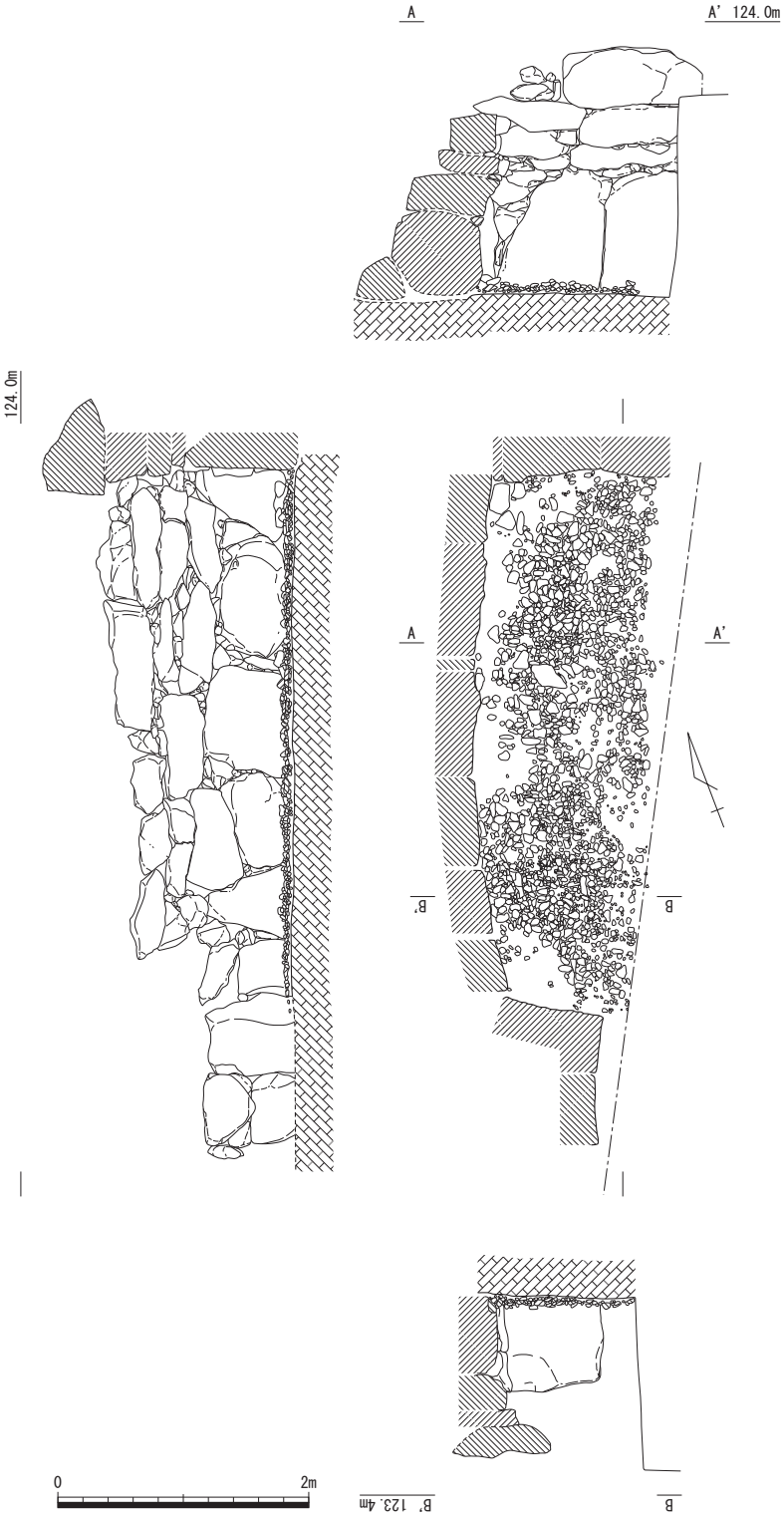
３　石室内遺物出土状況

天井石をすべて失った石室の内部には土砂が厚く堆積していたが、後世における石室内の撹乱痕跡はほとんど認められず、埋土も比較的整った水平堆積を示していた（第 132 図）。撹乱によって上層に浮き上がった遺物もほとんど認められず、石室内上層からは転落した埴輪の破片が出土した程度であった。床面は良好な状態で保存されており、本来の位置を留める、あるいはそれに近い状況を示す副葬品が多量に検出されている（第 135 ～ 137 図）。

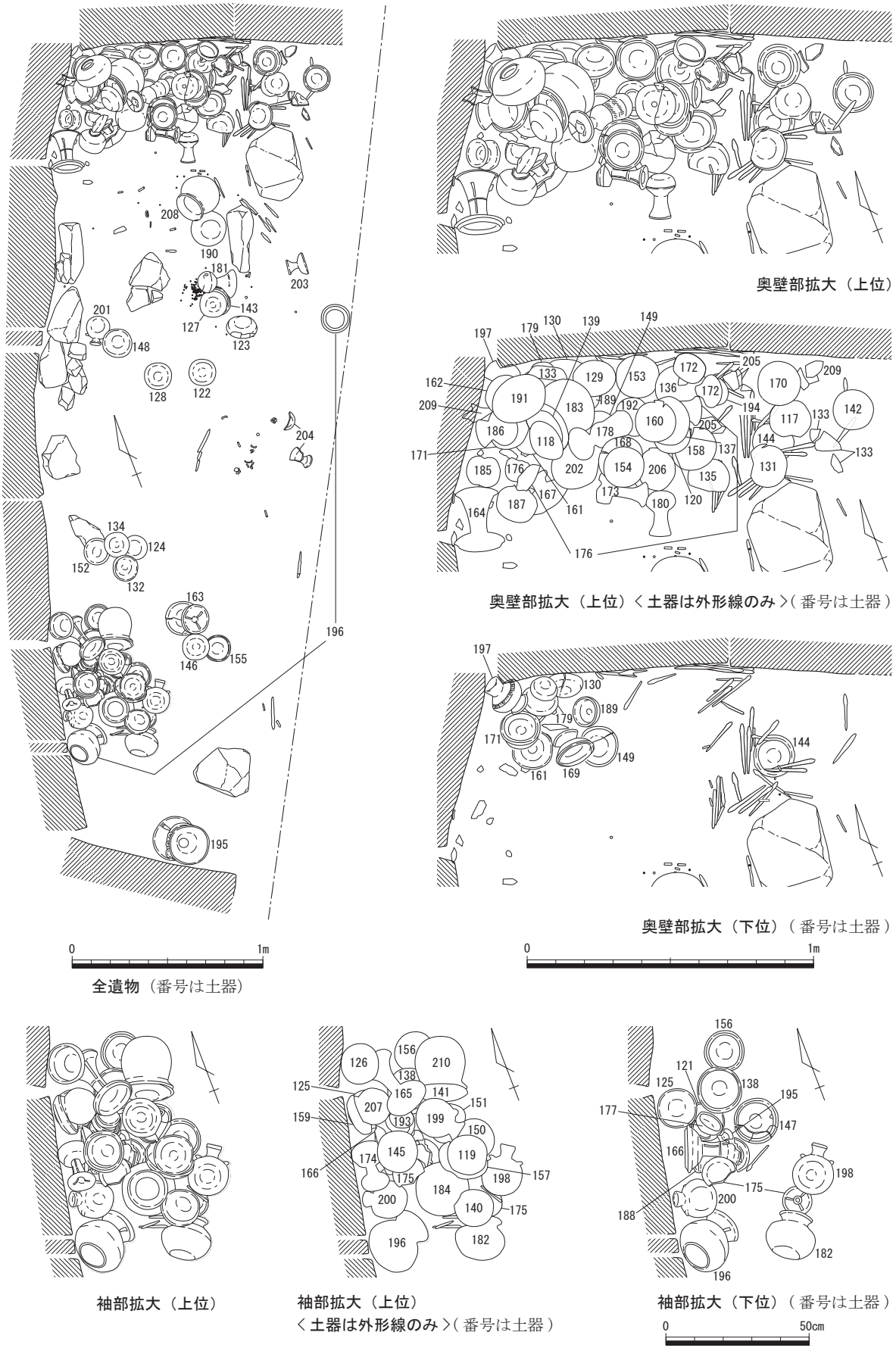
土器は 100 個体近くが出土した。最も集中するのは奥壁部で、特に左隅部では多くの土器が折り重なるように出土し、約 50 個体を数えた。次に集中するのは玄門から１ｍほど奥の左側壁際で約 35 個体があり、鈴付高杯（175）などを含む。両集中部の間は比較的散漫な出土状況であり木棺が安置された空間とみられるが、木棺痕跡は検出していない。この空間の左側壁に沿って、30cm 程度の大きさの礫が列状に配されており、木棺



写真 32　桑山５号墳装飾壺ほか出土状況（北から）



第 134 図　桑山５号墳石室（1/60）



第 135 図　桑山５号墳石室内遺物出土状況 (1/30・1/20)

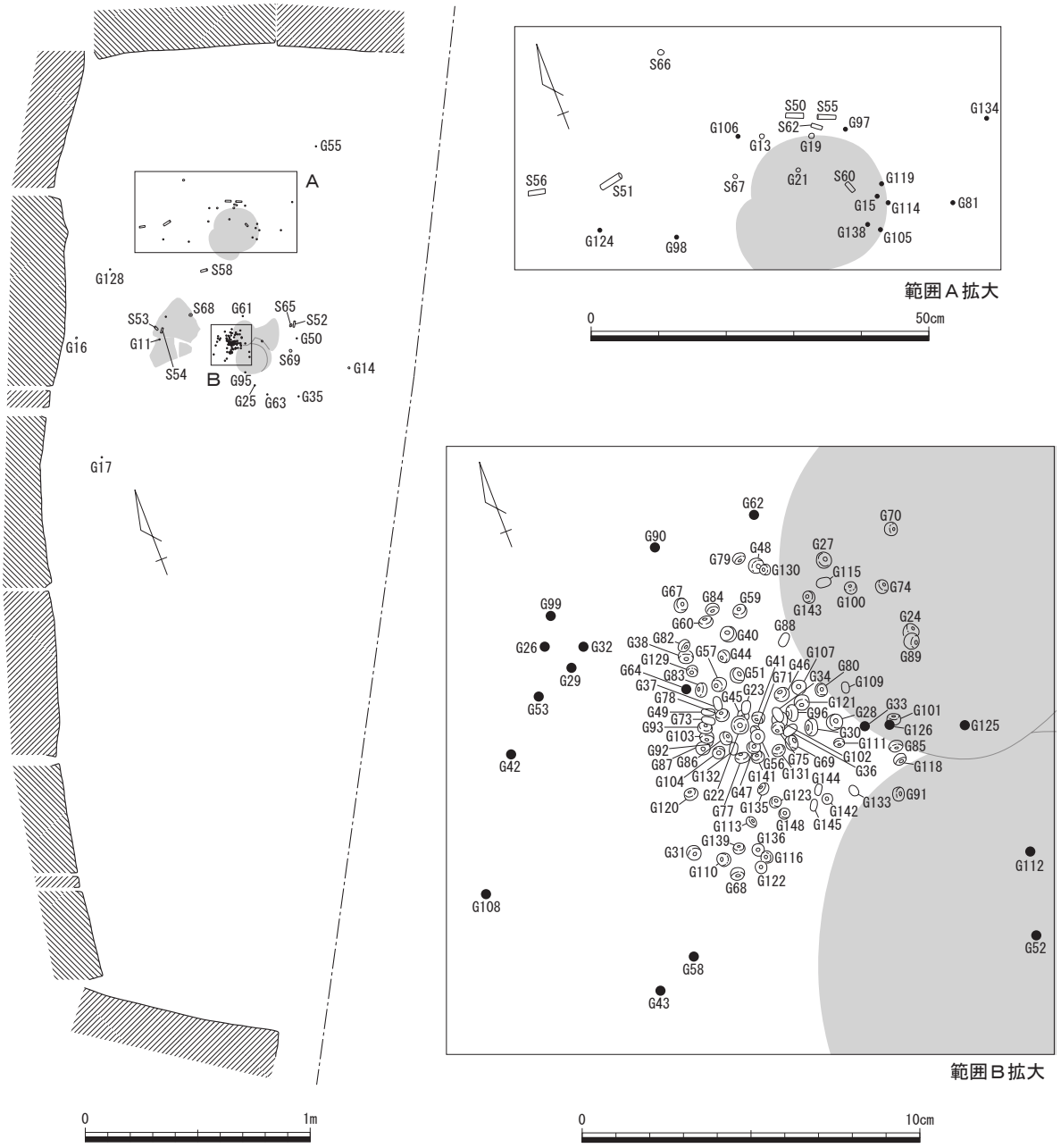


第 136 図　桑山５号墳石室内鉄器出土状況（1/30・1/10）

（番号は鉄器、アミは鉄器との上下関係が明らかな土器の輪郭を示す）

の側板を固定した石材の可能性もある。また、奥壁から南約１ｍの付近で玉類の集中が認められたことから、石室奥に頭を向け石室主軸に平行して埋葬がなされた可能性が考えられたが、石室内東部が未調査のため埋葬状況については不明な点が多い。玉類の分布を詳細にみれば、玉類集中部のうち、管玉などの石製玉類が比較的散漫な分布を示す一方で、奥壁から約 1.3 ｍ付近でガラス小玉が著しく集中する箇所があり（第 137 図の範囲Ｂ）、孔の向きを揃えながら連なるように出土している部分も認められた。石製・ガラス製の玉を交えた連とは別に、ガラス小玉のみからなる連が副葬されていたものとみられる。

玄室内袖部では、須恵器の装飾壺（**195**）が据え置かれた状態で出土した。脚付の子持壺で、子壺の多くが剥落し、胴部と脚部との接合部も分離して胴部以上がわずかに傾いていたものの、ほぼ副葬



第 137 図　桑山５号墳石室内玉類出土状況（1/30・1/10・1/2）
（番号は玉類、アミは玉類との上下関係が明らかな土器・礫の輪郭を示す）

当時の状況を保つものと判断された。付近からは古代の土器（211・212）が出土しており、その頃人が侵入したことによって装飾壺が若干破損した可能性が考えられる。剥落した子壺のいくつかは石室内床面上に散在しており、復元作業の結果、10 個の子壺のうち５個が残存、接合している。石室内を完掘していないため、未発見の子壺も石室内に残っている可能性がある。玄室内袖部にこうした大型の須恵器を置く行為は、この時期の袖を大きくつくる横穴式石室墳において散見される。中宮１号墳では大型の器台の上に壺を３つ重ねており [(2)]、二万大塚古墳では大型の器台２点を置きうち１点の上に横瓶を重ねている [(3)]。本墳の装飾壺も同様の意味をもつと考えられ、石室内における祭祀の一端を示すものといえる。

鉄製品では、玄室奥の左隅において、破砕した状態の刀身（M 165・M 166）、鍔（M 167）、鏃（M

168）が出土しており、同一の大刀を構成するものと考えられる。また、玄室奥の中央付近では鉄鏃がまとまって出土した。鉄鏃の向きは一定しないが、奥壁際のものは奥壁に平行し、その他は石室中軸に平行するものと斜行するものが多い。数本が束になって先端を揃え出土しているものもある。玄室中央では雲珠または辻金具、留金具などの馬具と、両頭金具（M 231）１点が出土している。そのほか、玄室南側の袖に近い付近で大型の鉄釘（M 266）１点が出土した。

４　石室内出土遺物

土器（第 138 図～第 143 図、巻頭図版３－２、図版 71 ～ 77）

石室内から出土した古墳時代の土器は、図示し得たもので須恵器 86 個体、土師器８個体である。また、古墳時代以外の土器として、上述した古代の土師器２点がある。

須恵器の杯蓋（117 ～ 135）は、口径 13.1 ～ 15.7cm、器高 3.1 ～ 4.7cm の幅があり、口縁端部に内傾する面を有するものと端部を丸くおさめるものとがある。天井部と口縁部の境には凹線などをもたず、丸く仕上げるものが多いが、肩でやや屈曲し口縁部が直立気味になるものがある。また、天井部内面には同心円当て具痕を残すものが一定程度認められる。杯身（136 ～ 156）は、口径 11.8 ～ 14.8cm、器高 3.4 ～ 5.3cm の幅があるが、いずれも口縁端部は丸くおさめ、杯蓋と同様、底部内面に同心円当て具痕を残すものがある。有蓋高杯の蓋（157 ～ 162）は、口径 13.4 ～ 16.8cm、器高 4.2 ～ 5.8cm で、つまみは扁平な碁石状のものである。口縁端部は丸くおさめるが、157 は端部内面に沈線をめぐらせている。天井部と口縁部の境は、外面に凹線をめぐらせて屈曲するものと、丸く仕上げるものとがある。また、天井部内面には同心円当て具痕を残すものが認められる。161 は天井部外面に「×」のヘラ記号があり、159 は天井部外面にカキメを施す。有蓋高杯の身は、長脚２段、３方向透かしのもの（163 ～ 166）と、短脚１段、３方向透かしのもの（167）、短脚で透かしをもたないもの（168 ～ 171）の３種類に分けられる。163 は脚部にカキメを施し、受け部には布目の圧痕を残す。法量・焼成・色調から判断して、157 と 163 が組になる可能性がある。164 は２段、３方向透かしであるが、上段の透かしは貫通しているものの幅がなく、鋭利な工具による切り込み状をなす。無蓋の高杯のうち、172 ～ 174 は長脚２段、３方向透かしのもので、173 は杯部下半に櫛状工具による連続刺突文、脚部にカキメを施し装飾的である。175 も長脚２段、３方向透かしであるが、脚の上端部を膨らませて土製の丸を入れ、鈴としている。鈴部には方形の透かし計６個を千鳥に配し、その外面は上下２段に分け、鈴部下半と杯部下半に櫛状工具による連続刺突文を施す。176・177 は脚に透かしをもたない高杯で、大小２種がある。178 は脚付椀で、深い椀形の体部に高杯形の脚を付す。体部中央には櫛状工具による連続刺突文を３段に施し、その上下に「＋」・「｜」のヘラ記号状線刻がある。脚には１段の透かしを３方向に空ける。瑞は３点を図示しており、無文のもの（179・181）と頸部に櫛描波状文を施すもの（180）がある。壺は 12 個体を数え、口縁が外反して開くもの（182 ～ 187）、小型で口縁が高く立ち上がるもの（188）、口縁が短く立ち上がる短頸壺（190 ～ 194）がある。蓋（189）は短頸壺に伴うものと考えられる。195 は脚付装飾壺（子持壺）である。口縁は大きく開き、櫛状工具による連続刺突文を２段に入れる。肩部には剥落したものを含め計 10 個の子壺を付しており、うち半数の５個が残存している。子壺はその器形から瑞を模したものと考えられるが、胴部の孔は表現されていない。また、子壺の底部付近を水平に繋ぐように断面三角形の突帯を貼り付けている。脚部には２段の長方形透かしを４方向に空け、櫛描波状文を施す。台付壺は２点が認められる（196・197）。196 は口

縁部外面に２段のヘラ描き斜線文、台部に３方向の透かしをもつ。提瓶は比較的小型のもの５点があり、肩の突起ないし把手が鍵状をなすもの（198・200 ～ 202）と環状のもの（199）がある。

土師器は古墳に伴う高杯・甕のほか、古代の杯がある。高杯（203・204）は、１条の沈線をめぐらせる浅い椀形の杯部に、中実の柱状部をもつ脚を付けるもので、近隣の桑山南・細畝古墳群出土のものとは脚の形態が異なる。脚内部を除く全面に赤色顔料が塗布されている。甕は６個体が認められ（205 ～ 210）、いずれも「く」の字に開く口縁をもち胴部は球形を呈する。207 は胴部側面に１か所の穿孔がなされている。211・212 は古代の杯で、上述のとおり袖付近から出土した。底部はヘラ切りである。

武器（第 144 ～ 146 図、図版 78・79）

石室内から出土した武器には、大刀と弓矢がある。上述のとおり、大刀の刀身は破砕した状態で玄室左奥部から出土している（M 165・M 166）。刀身幅は約 3.3cm で、鞘などの木質が付着しており、刃関穴と目釘穴が認められる。倒卵形の鉄製鍔（M 167）や鏃（M 168）も付近から出土しており、上記刀身の付属品とみられる。

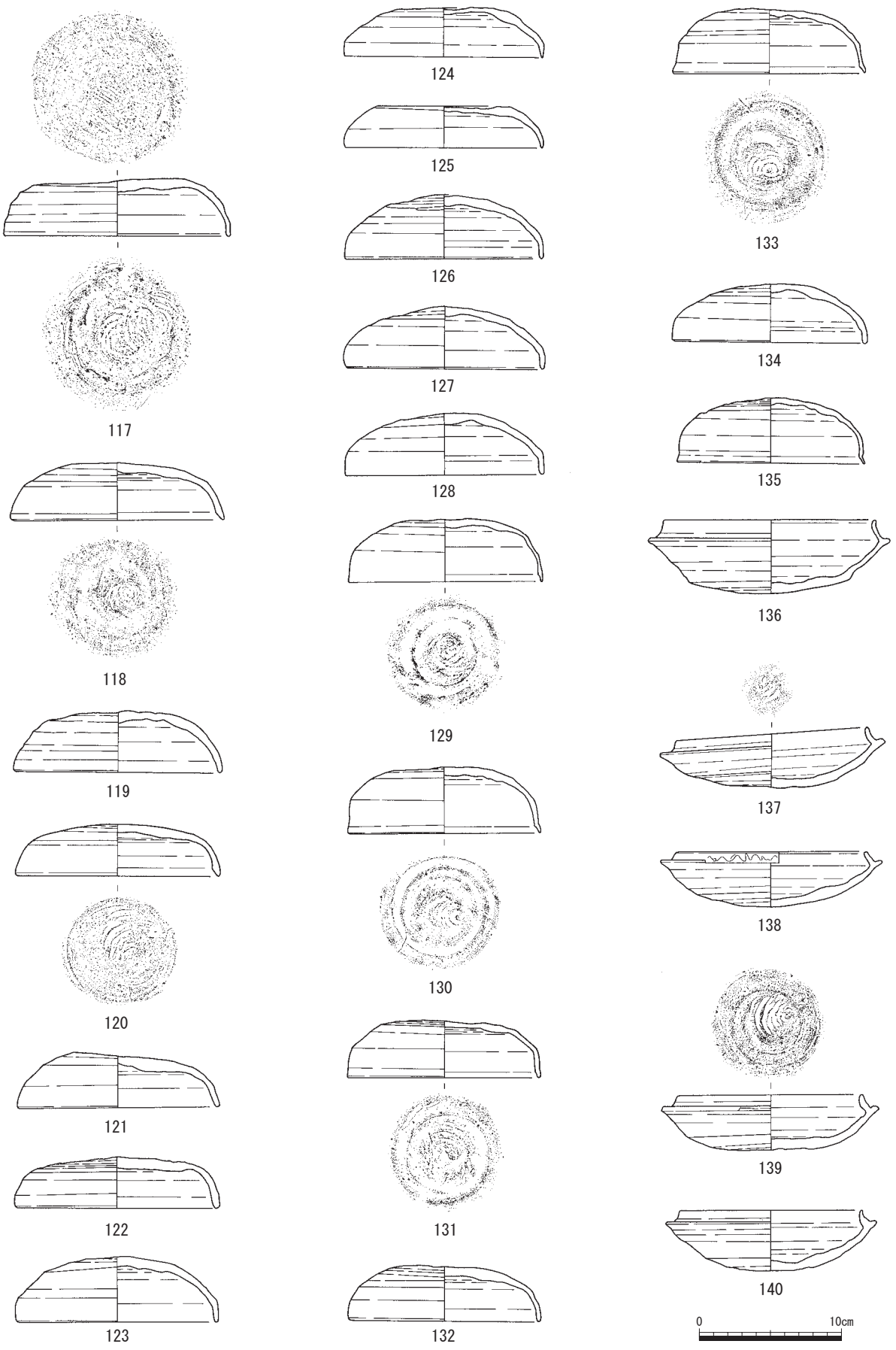
鉄鏃は少なくとも 53 本分が出土している。大きく４型式に分けられ、細根系では短頸腸抉柳葉式が９本（M 169 ～M 177）、短頸柳葉式が５本（M 178 ～M 182）、長頸柳葉式が 35 本（M 183 ～M 217）、平根系では腸抉柳葉式が１本（M 221）あり、そのほか長頸式で鏃身形態不明のものが３点ある（M 218 ～M 220）。長頸鏃の頸部長は長短があり、M 200 やM 217 は短頸鏃に分類すべきかもしれない。また、長頸柳葉式の中には、鏃身が細長い柳葉形をなすものから短い三角形をなすものまで変化がある。石室内の未調査部分を残すものの、鉄鏃の構成はほとんどが細根系で占められており、平根系はわずか１点である。また、短頸鏃の存在が特徴的であり（M 169 ～M 182）、山陰地域の影響を受けたものと考えられる。茎関には、鏃の型式を問わず棘状突起をもつものともたないものとが混在しているが、観察困難なものもある。なお、M 203・M 204・M 208 は束になって錆着しているが、分けて図示した。M 231 は弓の飾りと考えられる両頭金具で、１点のみ出土している。

馬具（第 146 図、図版 79）

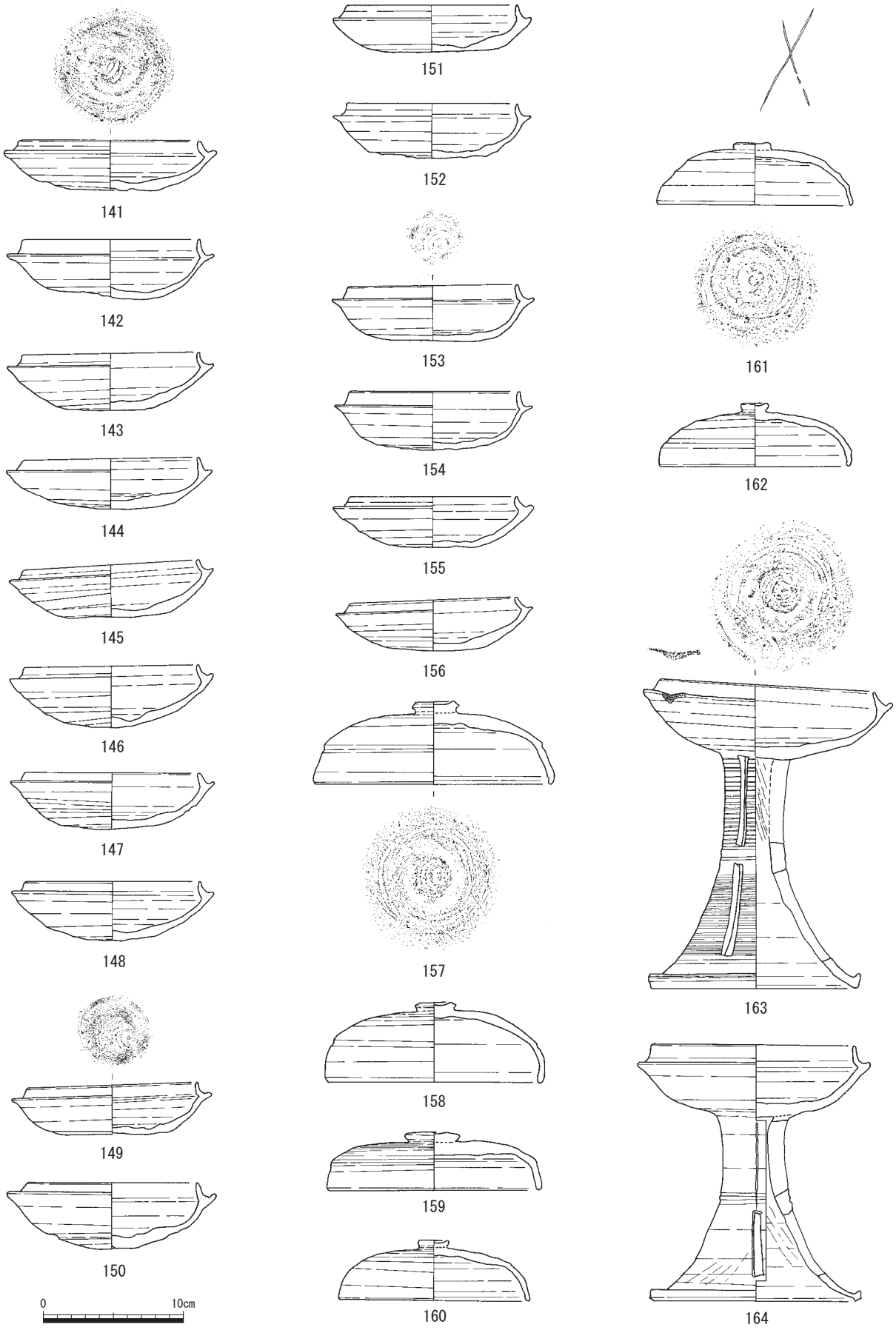
馬具は、雲珠または辻金具の脚部（M 232 ～M 236）とそれに付属する責金具（M 238 ～M 253）、長方形の留金具（M 237）がある。雲珠または辻金具は組合式の環状品とみられ、分離した状態で出土している。脚部は爪形を呈し鉄地金銅貼であるが、３つの鋲頭及び責金具は金銅貼の痕跡を留めるものがなく、鉄製と考えられる。留金具は２つの鋲をもつもので、両端が湾曲するようであり、現状では金銅貼の痕跡は認められない。M 264・M 265 は鋲脚の破片で、馬具の一部であるかもしれない。

工具等（第 146 図、図版 79）

工具等として、刀子と釘がある。刀子は関で数えて５個体あり（M 254・M 255・M 257・M 259・M 261）、細身の刀身をもつM 260 を加えて６個体分が確認できる。M 257・M 259 は鹿角製の柄を伴う。M 259 は鉄製茎の上に木質、さらにその上に鹿角質が付着している状況が観察でき、鹿角製柄の装着にあたって茎と柄の間に木片を挟み込み固定を図ったものと考えられる。一方、M 257 の茎には木質は認められない。M 262・M 263 は刀子に付属する鏃とみられる。釘（M 266）は全長 15.8cm で、断面は扁平な方形をなし、下半に縦方向の木目、上半側面に横方向の木目が認められる。２枚の板材を直交方向に接合させた釘と考えられるが、石室内からほかに釘は出土しておらず、木棺の一部を固定したものかどうか判然としない。



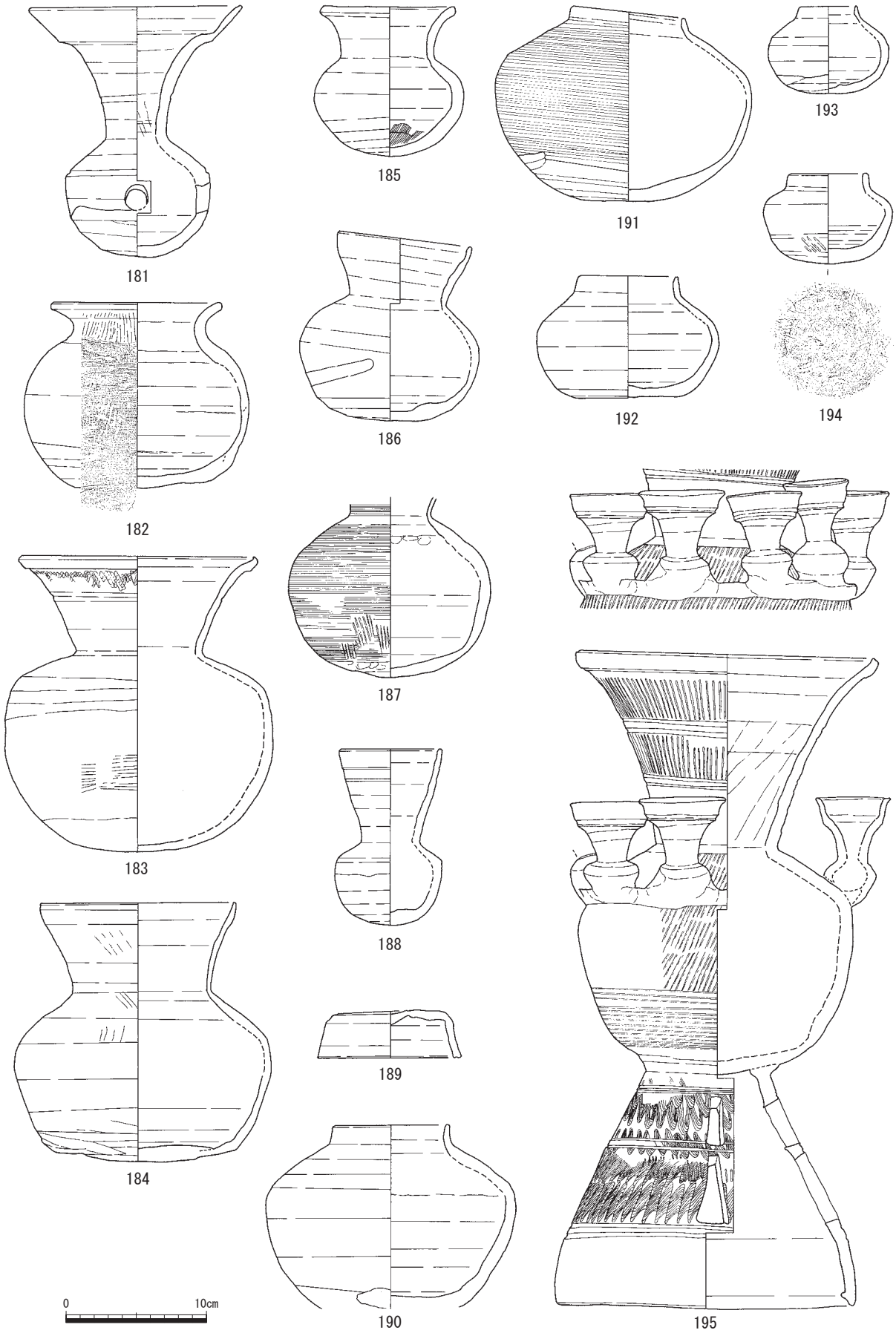
第 138 図　桑山５号墳石室内出土遺物①（1/4）



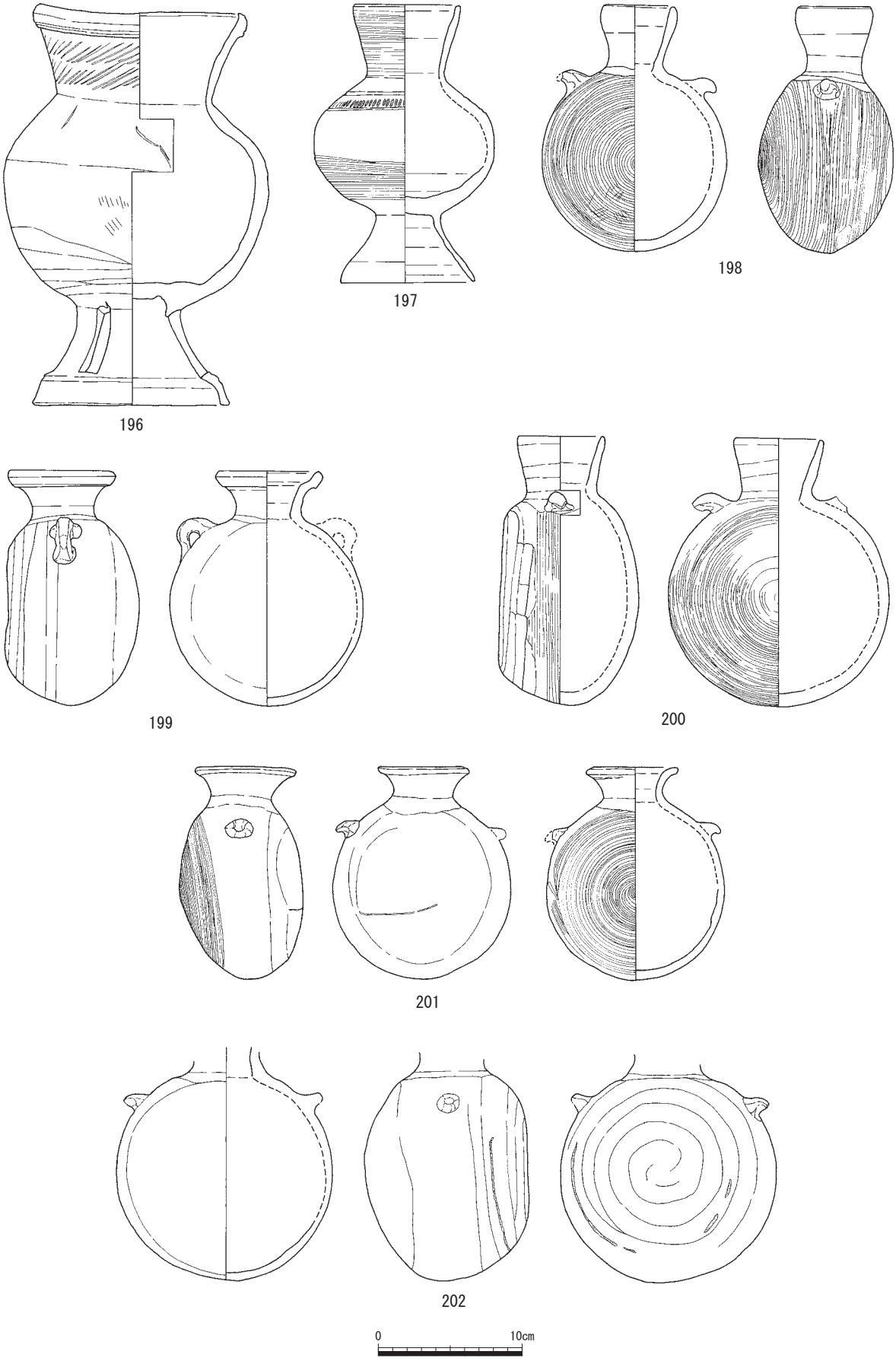
第 139 図　桑山５号墳石室内出土遺物② (1/4)



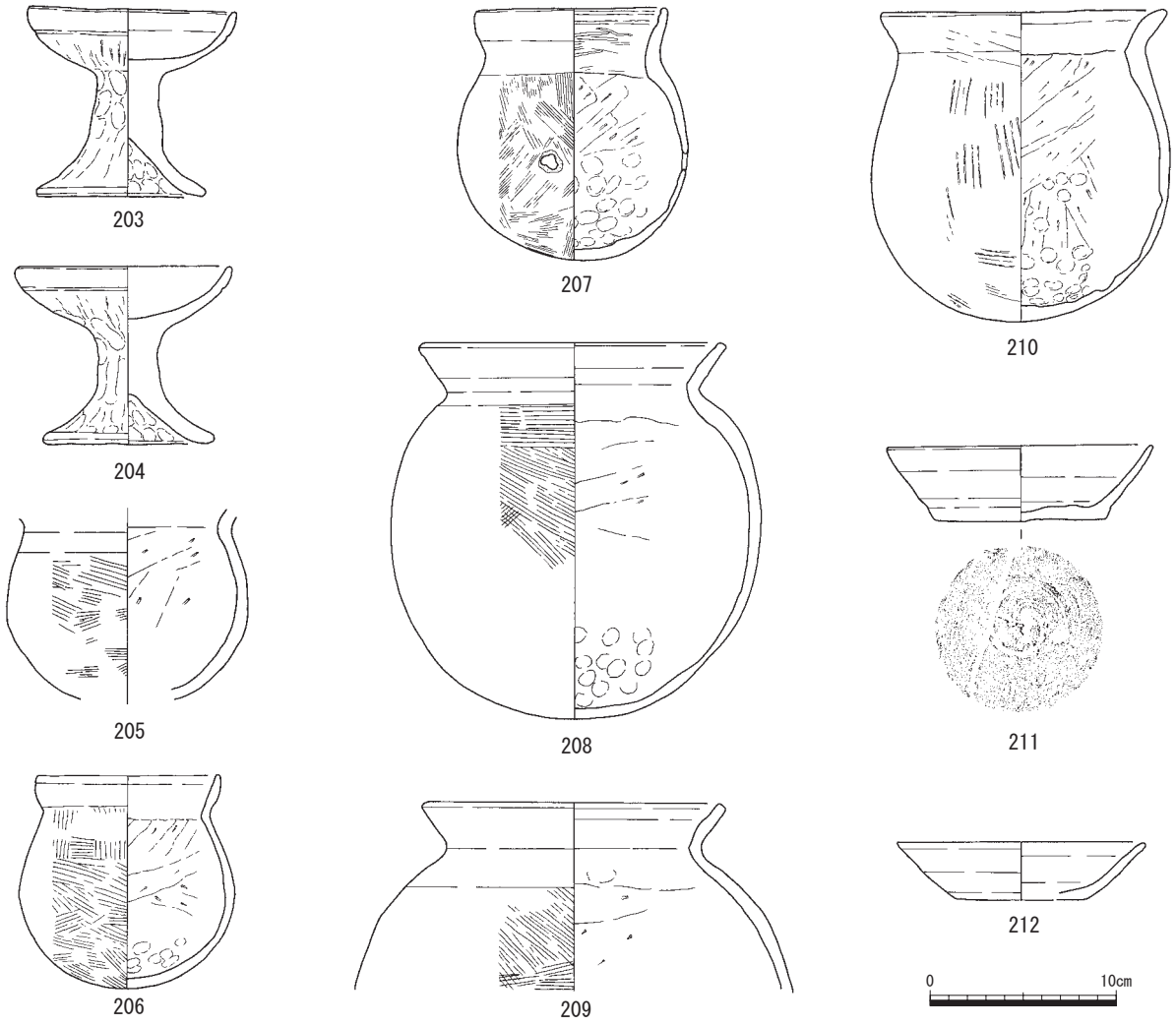
第 140 図　桑山５号墳石室内出土遺物③ (1/4)



第 141 図　桑山５号墳石室内出土遺物④ (1/4)



第 142 図　桑山５号墳石室内出土遺物⑤ (1/4)



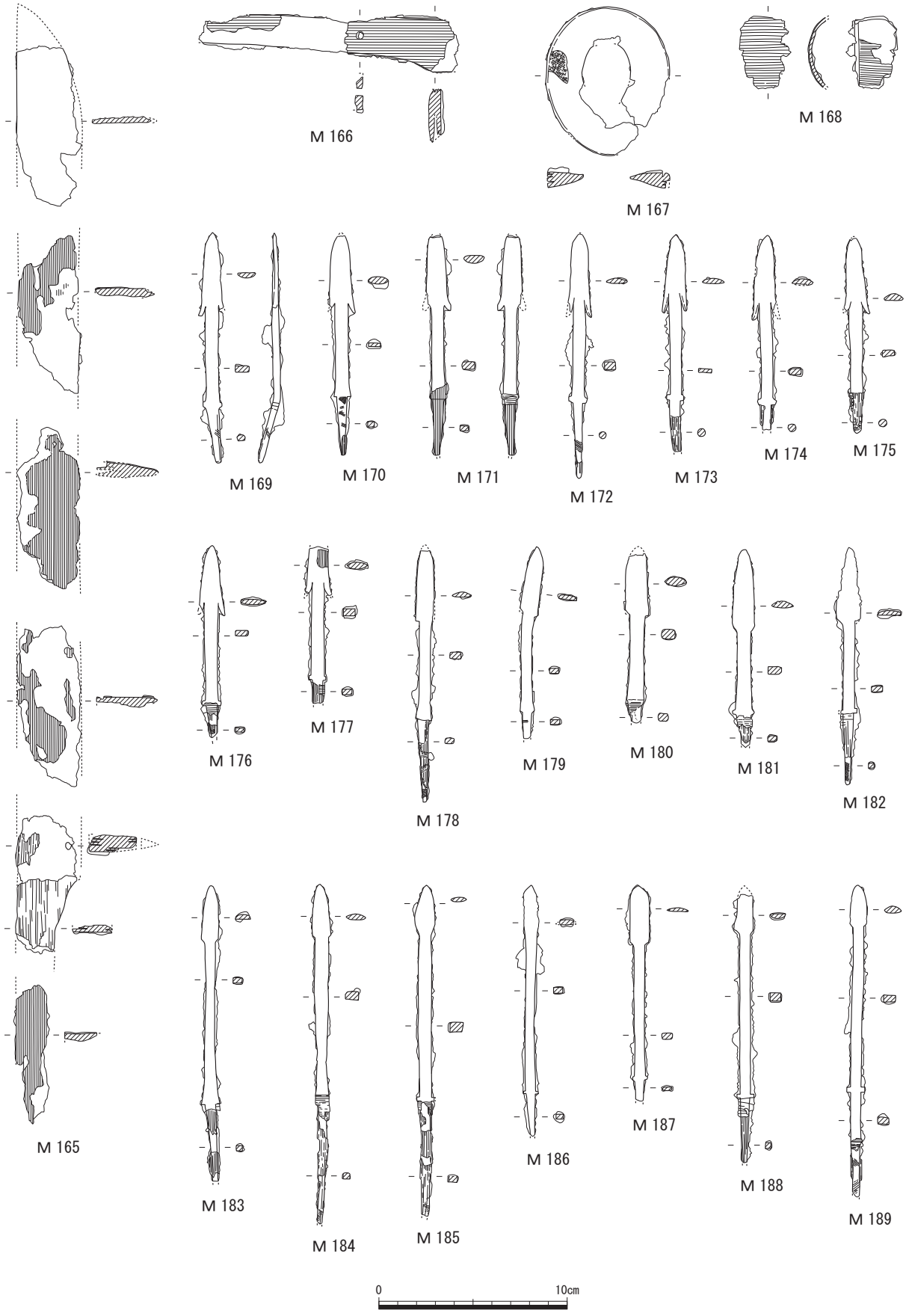
第 143 図　桑山５号墳石室内出土遺物⑥ (1/4)

玉類（第 146・147 図、巻頭図版６）

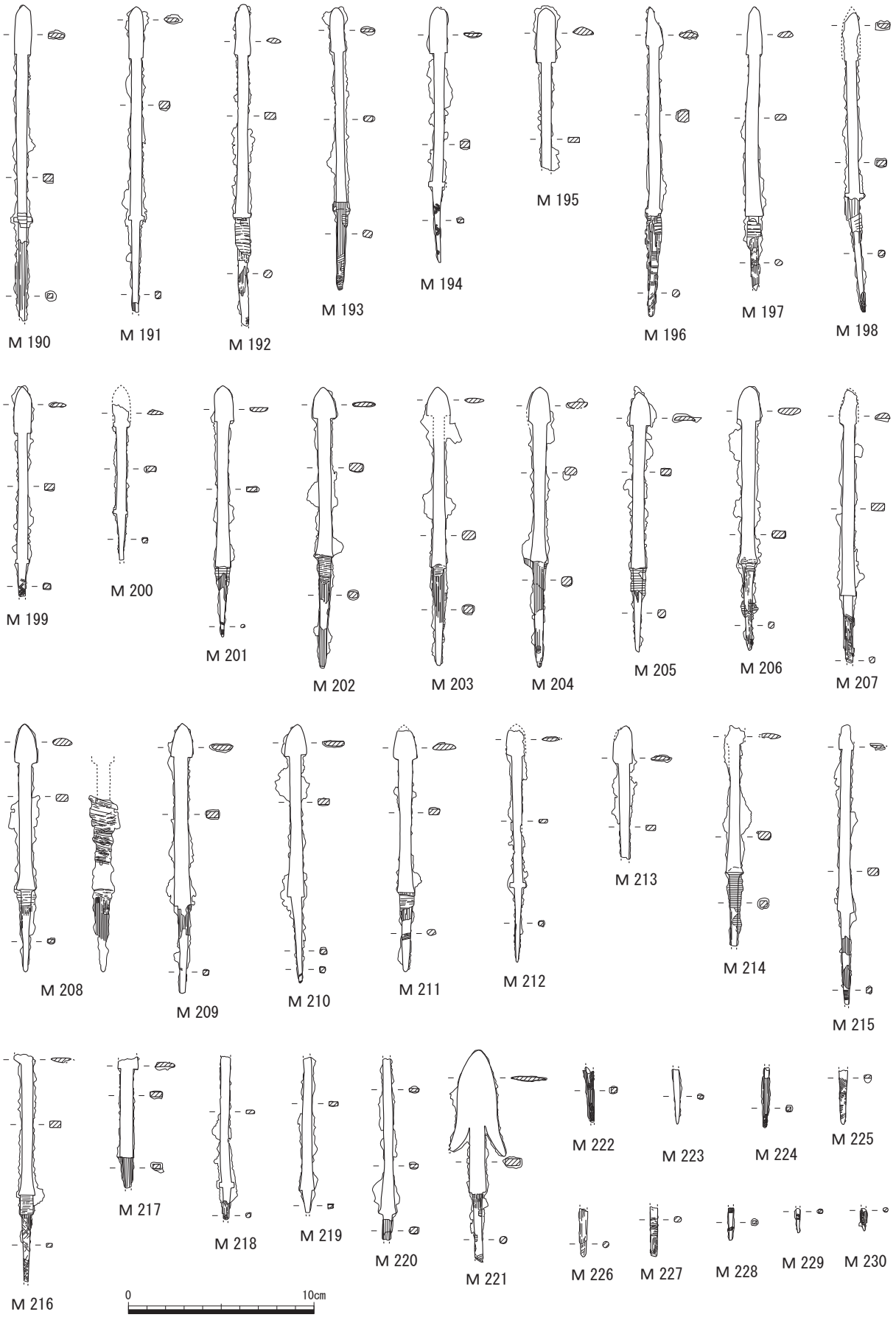
玉類は計 161 点が出土している。S 50 ～S 63 は管玉で、S 50 ～S 57 が碧玉製、S 58 ～S 63 が水晶製である。S 53 のみ両面穿孔で、その他は片面穿孔である。また、S 55 は孔の中にガラス小玉が嵌入しており、孔の位置と方向が一致していることから、同一の連を構成し隣り合っていたものと推定される。S 64 ～S 67 は水晶製切子玉、S 68・S 69 は水晶製算盤玉、S 70 は水晶製丸玉で、いずれも片面穿孔である。G 11 ～G 149 はガラス製の丸玉及び小玉で、青色系のものと黄色系のものがあり、青色系は濃淡の２種がある。

５　周溝内遺物出土状況

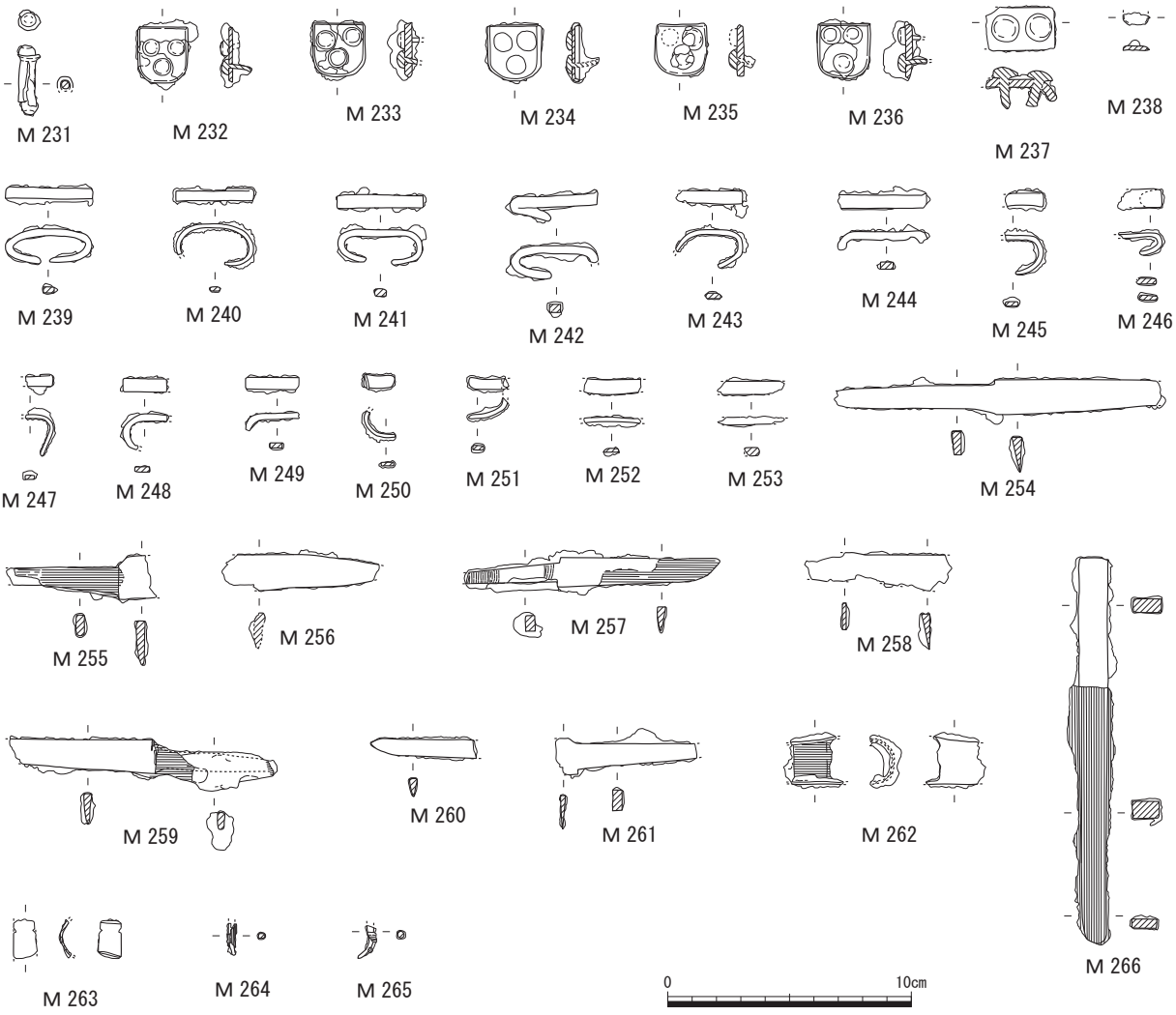
墳丘の西側に残存していた周溝の内部を中心に、埴輪多数と須恵器数点が出土した（第 148 図～第 150 図）。そのうち北側では、周溝底から 10 ～ 20cm 上位で破片が集中して出土したのに対し、南側の集中部では、周溝底から 30 ～ 40cm 浮き上がっている。南側の集中部については、後世の畑地利用などに際して投棄された可能性も否定できない。また、周溝の墳丘側斜面３か所において、比較的大型の破片が検出された（218・220・225）。ほぼ等間隔で墳端に沿って分布しているため、明確ではないものの、墳丘周縁に樹立された埴輪が周溝内に倒れ込んだ状況なども想定された。

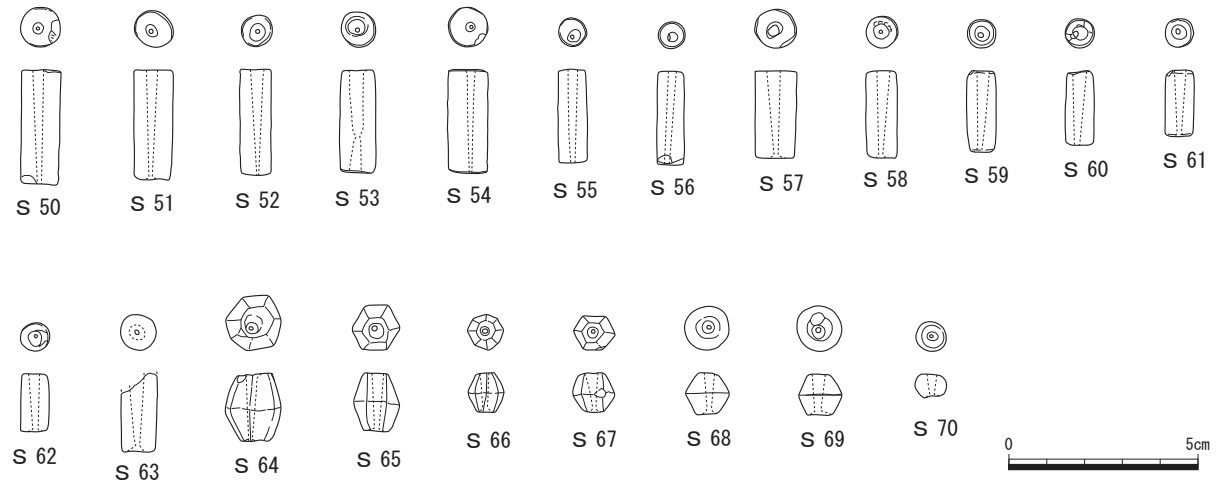


第 144 図　桑山５号墳石室内出土遺物⑦ (1/3)

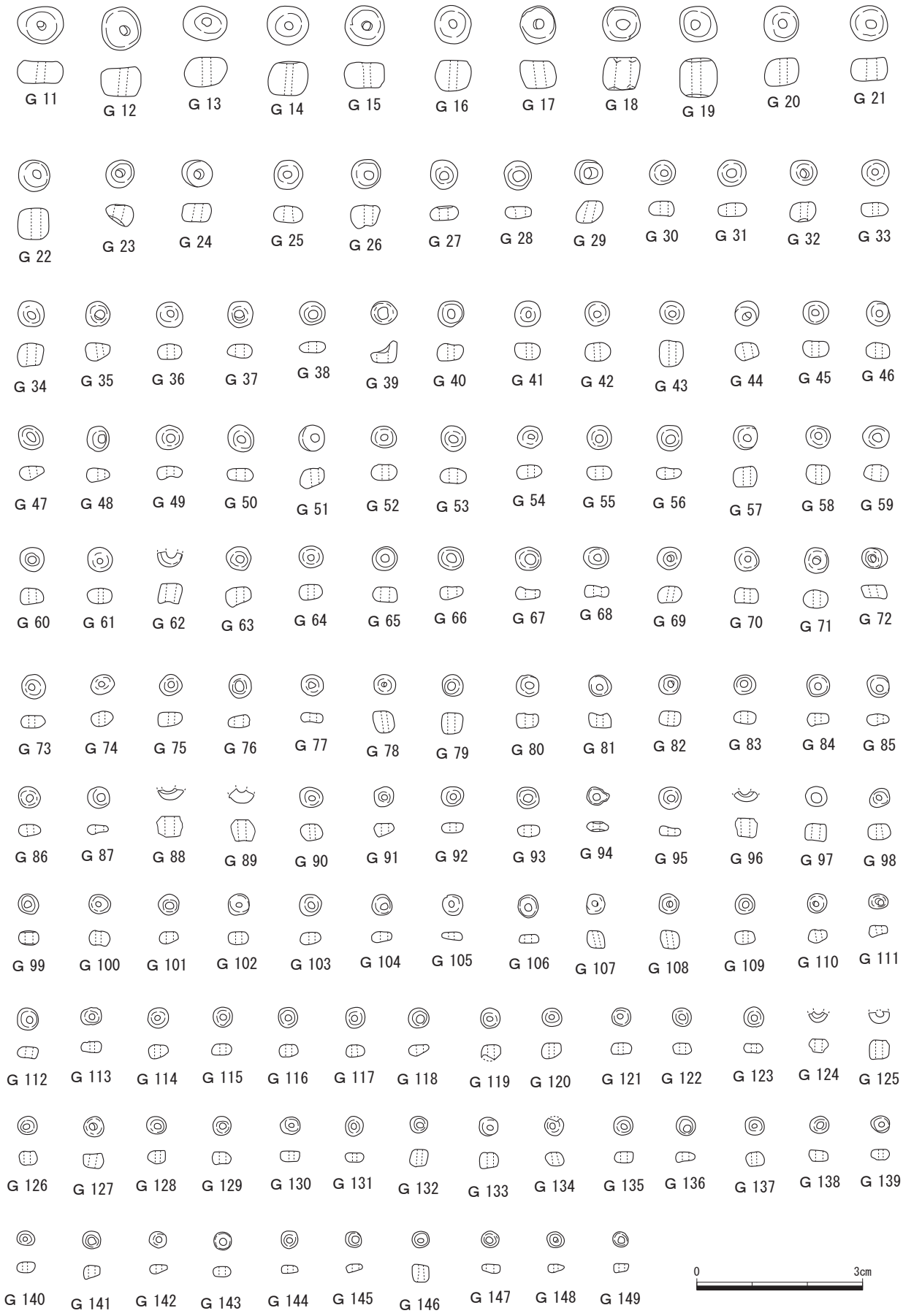


第 145 図　桑山５号墳石室内出土遺物⑧ (1/3)





第 146 図　桑山５号墳石室内出土遺物⑨ (1/3・1/2)

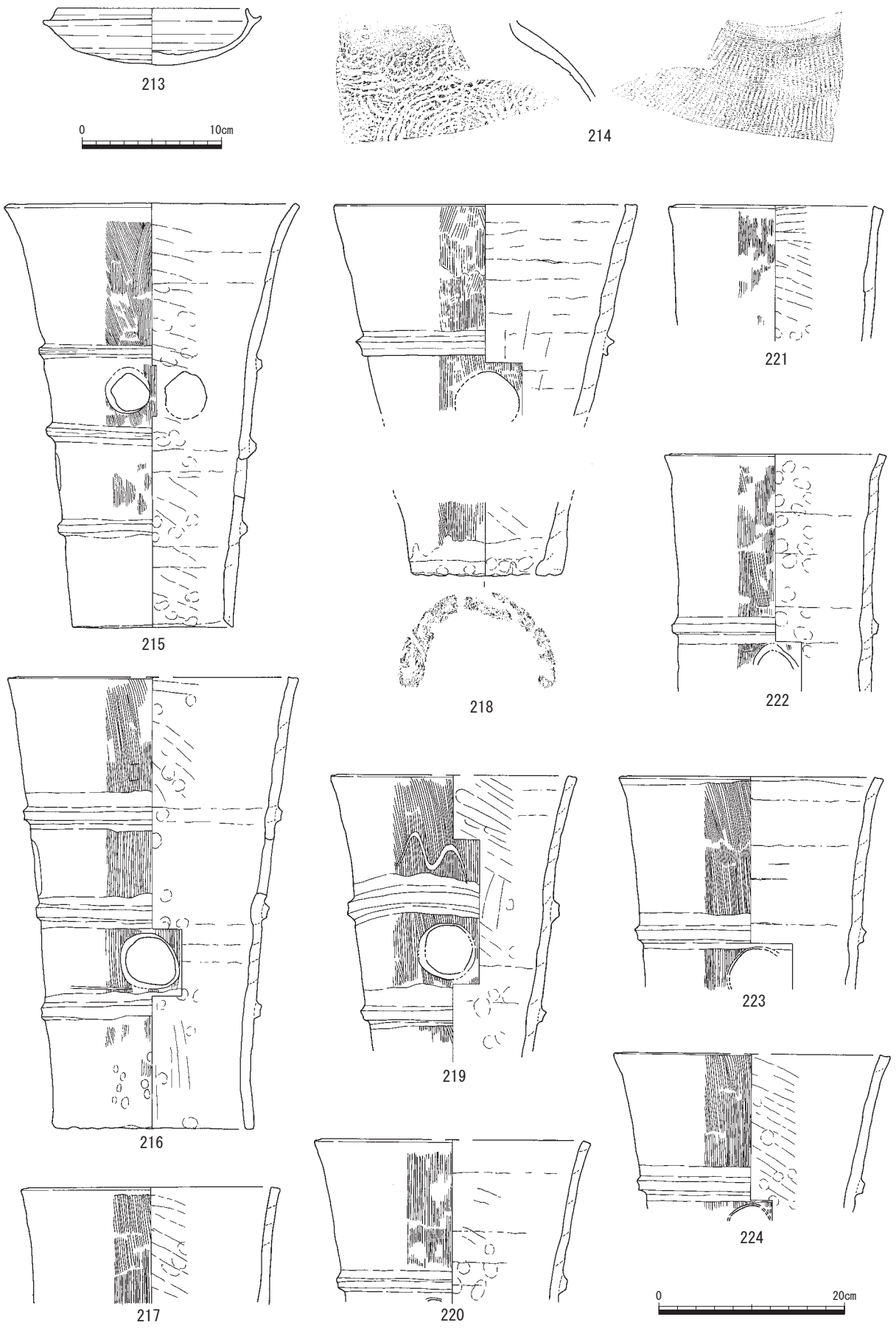


第 147 図　桑山５号墳石室内出土遺物⑩ (1/1)

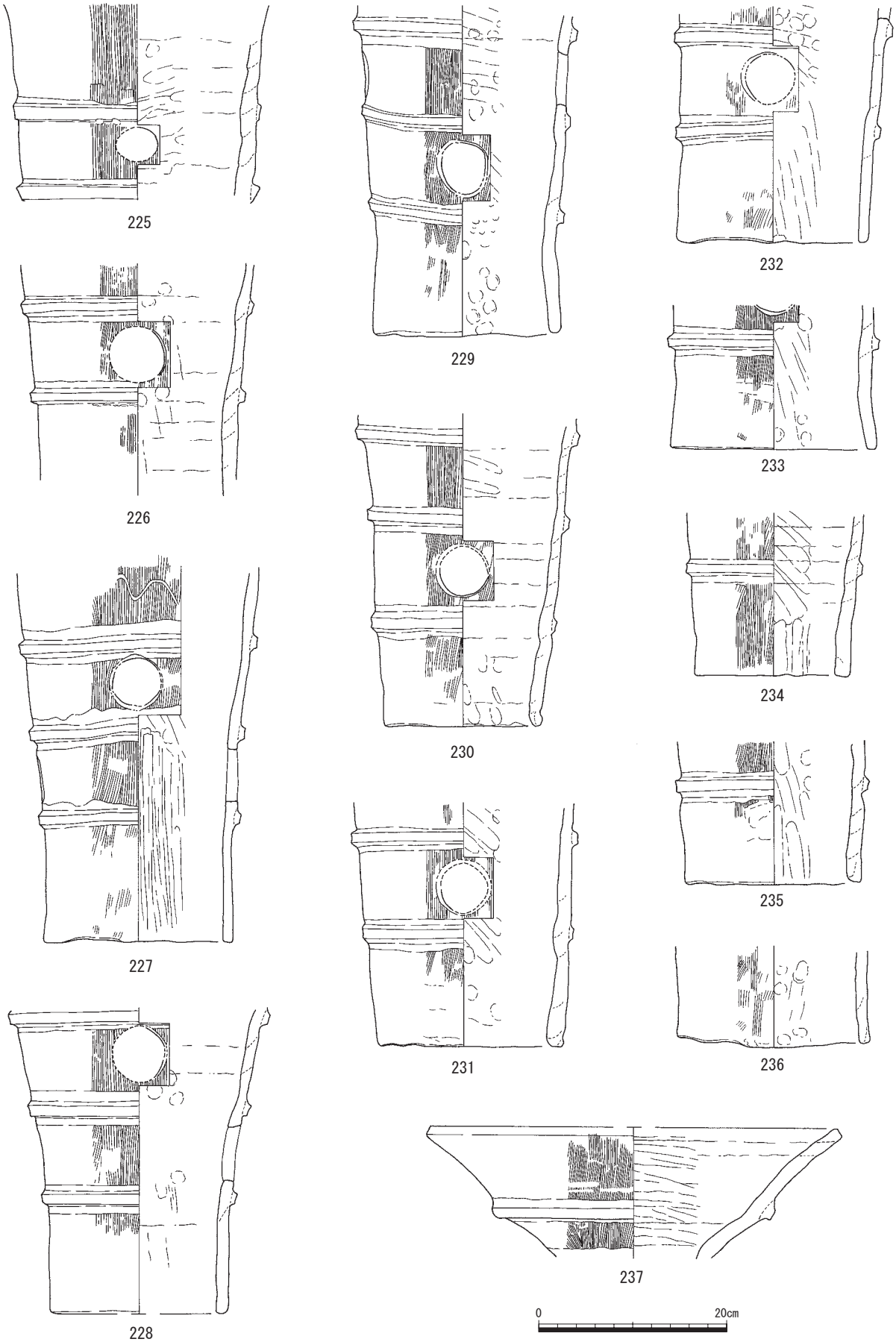
埴輪は、円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土している。焼成は良好で、黄橙色系の色調をなし、還元炎焼成による灰色を呈するものはない。円筒埴輪の段構成は、いずれも３条突帯・４段で、２段目と３段目に直交方向に透かし孔を入れる。全高の判明する資料は少ないが、215 で 45.7cm、216 で 48.5cm を測る。最上段の高さが他の段に比べて高く、外反する形態のものが多い。外面の調整は、2 次調整を省略したタテハケで、ハケメはほぼ垂直に施されており、目の粗いものが大半を占めるが、細かいものもある（215）。内面はナデや指押さえで仕上げている。突帯の断面形は台形をなすものが多いが、



第 148 図　桑山５号墳周溝内遺物出土状況（1/60）



第 149 図　桑山５号墳周溝内ほか出土遺物① (1/6・1/4)



第 150 図　桑山５号墳周溝内ほか出土遺物② (1/6)



写真 33　桑山５号墳周溝内埴輪出土状況（東から）

端面を窪ませて「M」字状になるものもある（218・223 など）。口縁部外面には、波形の記号をもつものがあり（219・227）、浅く弱い描き方で、鋭利な工具で施されたものではない。先端の丸い棒状の工具か、ヘラ状工具を寝かせて使用したようにみえ、同様の波形記号は、細畝３号墳の朝顔形埴輪や、美作地域出土の円筒埴輪において散見される。朝顔形埴輪は、口縁部のみの破片が出土している（237）。　　（尾上）

註

（１）岡山県教育委員会 2022「桑山南古墳群・細畝古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』255

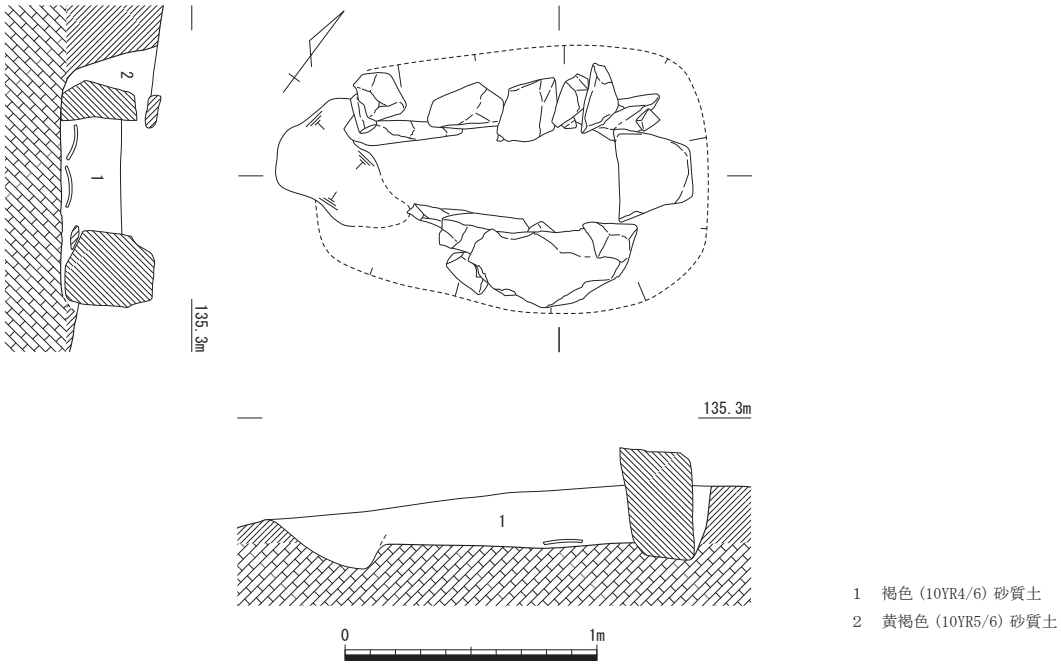
（２）近藤義郎・中島寿雄 1952『佐良山古墳群の研究』津山市

（３）新納泉・三浦孝章編 2018『二万大塚古墳』二万大塚古墳発掘調査団

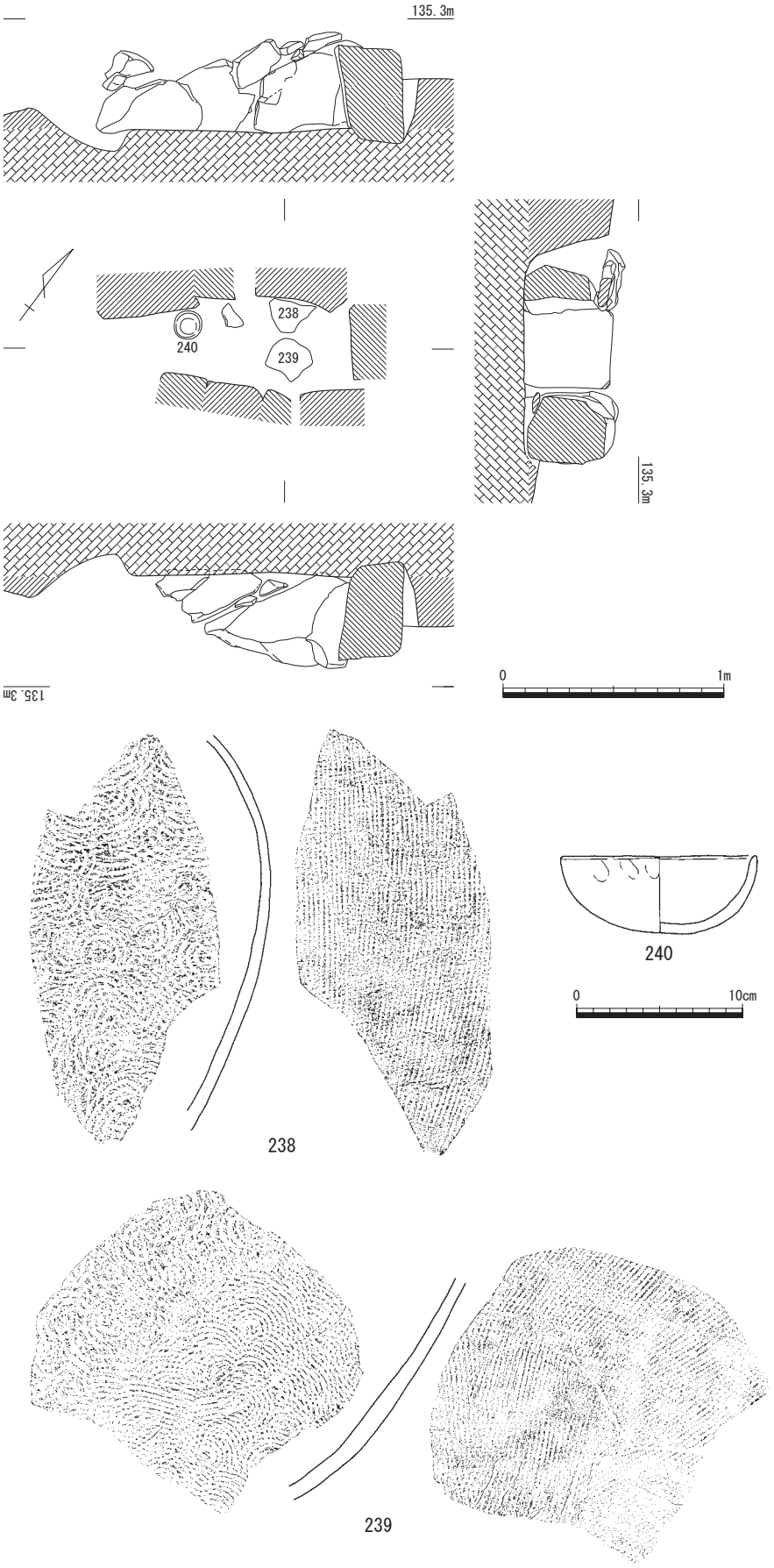
第７節　その他の遺構・遺物

１　概要

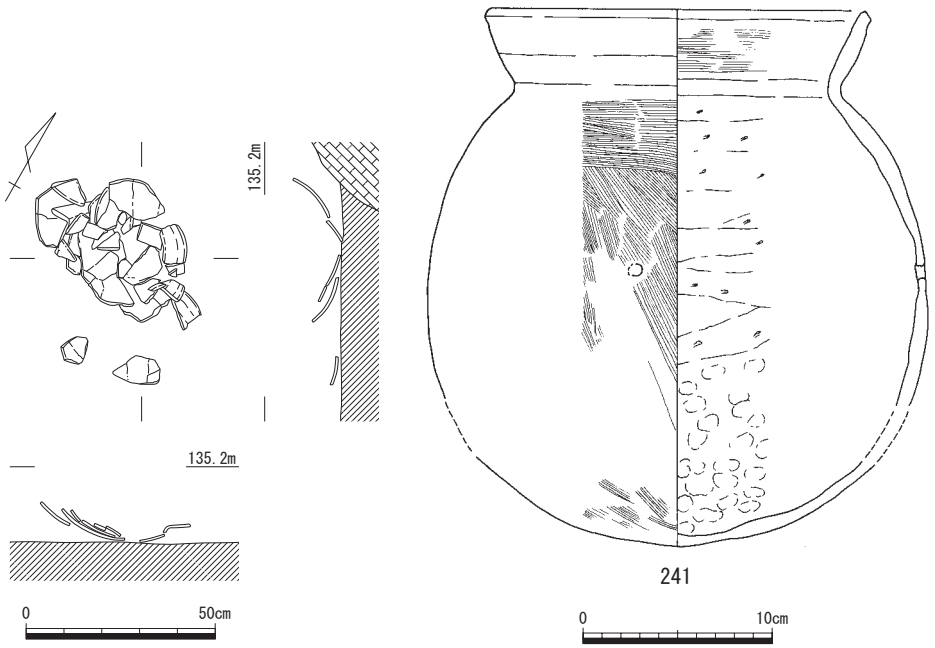
古墳群が営まれた古墳時代後期に属するその他の遺構として、３号墳の西側で、互いに近接して検出された箱式石棺墓及び土器棺墓各１基がある。標高 135 m付近にあり、いずれも詳細な時期は不明



第 151 図　箱式石棺墓１土層断面（1/30）



第 152 図　箱式石棺１・出土遺物 (1/30・1/4)



第 153 図　土器棺墓１・出土遺物 (1/20・1/4)



第 154 図
遺構に伴わない遺物
(1/2)

ながら、その位置（第 73 図）から判断して３号墳などと関連する墳丘外埋葬の可能性が考えられる。小型の箱式石棺墓と土器棺墓であり、いずれも子供の埋葬遺構である可能性が高い。　（尾上）

２　箱式石棺墓

箱式石棺墓１（第 151・152 図、図版 60 －１・60 －２・81 －２）

小型の箱式石棺墓で、等高線に沿う方向に主軸を向ける。南西小口部分を失っているが、石材の抜き取り穴が検出され、規模の大略が判明する。内法長約 1.1 m、幅約 0.4 m、残存する深さ約 0.4 mで、蓋石は残されていない。北東小口には方形の１石を用い、側壁も概ね１段とみられる。掘り方は、弥生時代の遺構と重複していたため必ずしも明瞭でなかった。床面には、須恵器甕の破片２点を転用した枕 (238・239) が置かれ、北東に頭を向けていたことが分かる。副葬品としては、土師器の椀１点 (240) が出土した。詳細な時期を示す遺物に乏しいが、６世紀代の遺構と判断される。　（尾上）

３　土器棺墓

土器棺墓１（第 153 図、図版 60 －３・81 －２）

箱式石棺墓１の北東で検出した。弥生時代の遺構埋土中から土師器の甕１点（241）が出土したものであり、掘り方は捉えることができなかった。甕は破損しているが、口縁を北東に向け横倒しの状態でおさめられている状況が確認できた。「く」の字形の口縁と球形の胴部をもち、胴部側面に１か所の穿孔がなされる特徴は、３号墳や５号墳の土師器甕（89・207）と類似する。　（尾上）

４　遺構に伴わない遺物

第 154 図に遺構に伴わない玉類を掲載した。新第三紀凝灰岩製の管玉（S 71）は、桑山４号墳の盛土下の旧表土から出土したもので、桑山４号墳に伴う物であろうか。S 72 は水晶製の算盤玉で、トレンチ３(第６図)掘削中に出土した。　（小嶋）

第６章　自然科学的分析

第１節　桑山遺跡・桑山３号墳採取土壌及び出土炭化物の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

桑山遺跡（津山市平福所在）は、弥生時代から中世にかけての集落跡で、弥生時代の住居跡や古代の鍛冶炉・製炭窯などが検出されている。また同遺跡地内には６世紀中頃の円墳が４基（桑山１～４号墳）築かれ、これらと谷を挟んだ北側の尾根上に所在する１基を含めて桑山古墳群を形成している。本分析調査では、弥生時代の住居跡（桑山遺跡竪穴住居２）床面直上の土壌の由来を知るために、花粉分析と植物珪酸体分析を実施する。また、同住居跡から出土した炭化材の樹種同定を実施し、用材に関する情報を得る。さらに、炉（桑山遺跡炉１）と古墳（桑山３号墳）から出土した炭化物を対象として、年代測定および樹種同定、種実同定を実施し、遺構の年代観および植物利用に関する情報を得る。

Ⅰ　土壌分析

１　試料

試料は、竪穴住居２の床面直上にみられた土饅頭状の堆積物より採取された土壌１点（５層サンプル）と、対照試料として住居上層埋土より採取された土壌１点（１層サンプル）の合計２点である。

２　分析方法

（１）花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

（２）植物珪酸体分析

植物湿重 5g 前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を計量し、乾土 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、各分類群の植物珪酸体含量や珪化組織片の産状の一覧表で示す。その際、100 個 /g 未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸める（100 単位にする）。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

３　結果

（１）花粉分析

結果を第３表に示す。１層サンプル、５層サンプルのいずれの試料も花粉化石がほとんど検出されず、それぞれマツ属が１個体検出されたにとどまる。保存状態も花粉外膜が破損・溶解しているなど悪い。

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

（２）植物珪酸体分析

結果を第 155 図と第４表に示す。いずれの試料も珪化組織片は認められない。単体の植物珪酸体は検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

１層サンプル、５層サンプルのいずれの試料も同様な産状であり、クマザサ属やメダケ属を含むタケ亜科の産出が目立つ。また、分類群の特定には至らない不明やイネ科起源（棒状珪酸体，長細胞起源，毛細胞起源）もみられる。

４　考察

分析した床面直上堆積物（５層サンプル）、および比較用の住居上層埋土（１層サンプル）のいずれからも、花粉化石がほとんど検出されなかった。一般的に、花粉やシダ類胞子の堆積した場所が常に酸化状

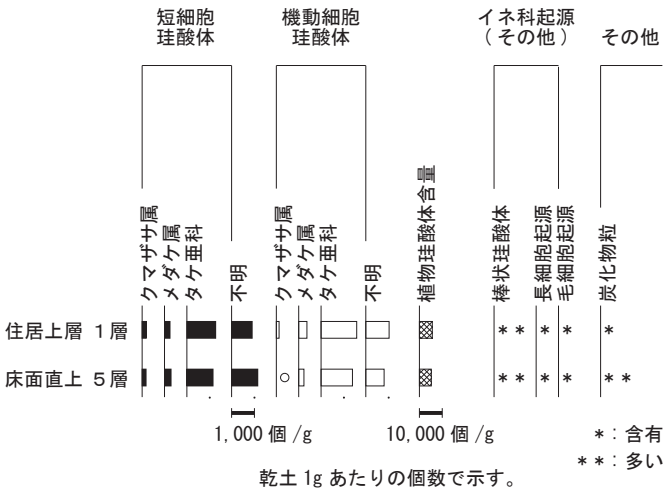
第３表　花粉分析結果

種　類	竪穴住居２ 土壌サンプル	
	１層	５層
木本花粉		
マツ属	1	1
シダ類胞子		
シダ類胞子	15	8
合計	16	9

第４表　植物珪酸体含量（個 /g）

分　類　群	竪穴住居２ 土壌サンプル	
	１層	５層
イネ科葉部短細胞珪酸体		
クマザサ属	200	200
メダケ属	200	300
タケ亜科	1,300	1,200
不明	900	1,200
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
クマザサ属	100	<100
メダケ属	400	200
タケ亜科	1,600	1,400
不明	1,000	800
合　計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	2,600	2,800
イネ科葉身機動細胞珪酸体	3,100	2,500
植物珪酸体含量	5,700	5,300
イネ科起源（その他）		
棒状珪酸体	**	**
長細胞起源	*	*
毛細胞起源	*	*
その他		
炭化物粒	*	**

含量は、10 の位で丸めている（100 単位にする）
<100：100 個 /g 未満
－：未検出，＊：含有，＊＊：多い



第 155 図　竪穴住居２試料の植物珪酸体含量

態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（中村,1967 など）。

植物珪酸体の産状も、2 試料ともに類似する。保存状態が悪く、生産量が多いタケ亜科がほとんどを占めることから、花粉化石と同様、風化によって多くの植物珪酸体が消失したと考えられる。

今回の微化石の産状を見る限り、土饅頭状の堆積との比較用の住居上層埋土との間に差異がみられないことから、ともに堆積物の母材となった周辺土壌の組成を反映しているとみられる。したがって、今回の結果から土饅頭状の堆積物の由来を知ることは難しい。

今後、類例が観察された場合には、土饅頭状の堆積を含む柱状試料（モノリス）を採取し、詳細な堆積構造の観察を行うなどして（X 線撮影や薄片作成なども含む）、情報を増やしていくことが必要と考えられる。

Ⅱ　炭化物の分析

１　試料

炭化材同定用試料は、炉１の木炭、竪穴住居２の炭化材サンプル①、②、③、④、⑤、⑥の７点である。種実同定用試料は、桑山３号墳の炭化種子１点である。放射性炭素年代測定は、上記の試料と重複する炉１の木炭と桑山３号墳の炭化種子を用いる。

２　分析方法

（１）炭化材同定

剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割片を作成する。双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察する。材組織の特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

（２）種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本と比較して同定する。

（３）放射性炭素年代測定

炭化材試料は、適量を割り取り、不純物を含む周囲を削り落として 50mg 程度になるよう調整する。炭化種実は、ひびが入り壊れそうな部分を分離して 20mg 程度の試料を採取し、分析に用いる。試料は、塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L である。しかし、種実試料は、化学的に脆弱で炭素の損耗が激しく、分析に必要な炭素量が得られない可能性があったので、アルカリの濃度を薄めて処理を行う（AaA と記載）。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を用いて、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-Ⅱ）、

国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6 等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。δ ^{13}C は試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、OxCal4.4(Bronk,2009)、較正曲線は IntCal20 (Reimer et al.,2020) である。

３　結果

（１）炭化材同定

結果を第５表に示す。炉１の木炭は単子葉類、竪穴住居２の炭化材サンプル①、②、③、④、⑤、⑥は、全てクリに同定された。以下、各分類群の木材解剖学的所見を記す。

・単子葉類（Monocotyledoneae）

道管と師部組織の周囲を繊維細胞が囲んで維管束鞘を作る。維管束鞘が基本組織中に散在する不斉中心柱である。木部の道管配列や繊維細胞の形状からみてタケ亜科ではない。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 ～ 15 細胞高。

（２）種実同定

桑山３号墳出土の炭化種実は、モモ（*Prunus persica* Batsch）の核に同定された。核はやや偏平な広楕円体で頂部を欠損した 2/3 程度、割れた部分にネズミ類による食痕が確認される。残存長 15.56mm、残存幅 16.19mm、残存厚 13.84mm、重量 0.67g を測る。基部は切形で、中央部に湾入した臍がある。背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状にみえる。小型で球形に近く、古い形質を持ったモモである（堀田,1980 など）。

（３）放射性炭素年代測定

結果ならびに前処理の状況を第６表、第 156 図に示す。２試料共に測定に必要なグラファイトが得られた。同位体補正を行った値は、炉１が 1075 ± 20BP、桑山３号墳が 2085 ± 25BP である。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データーセット

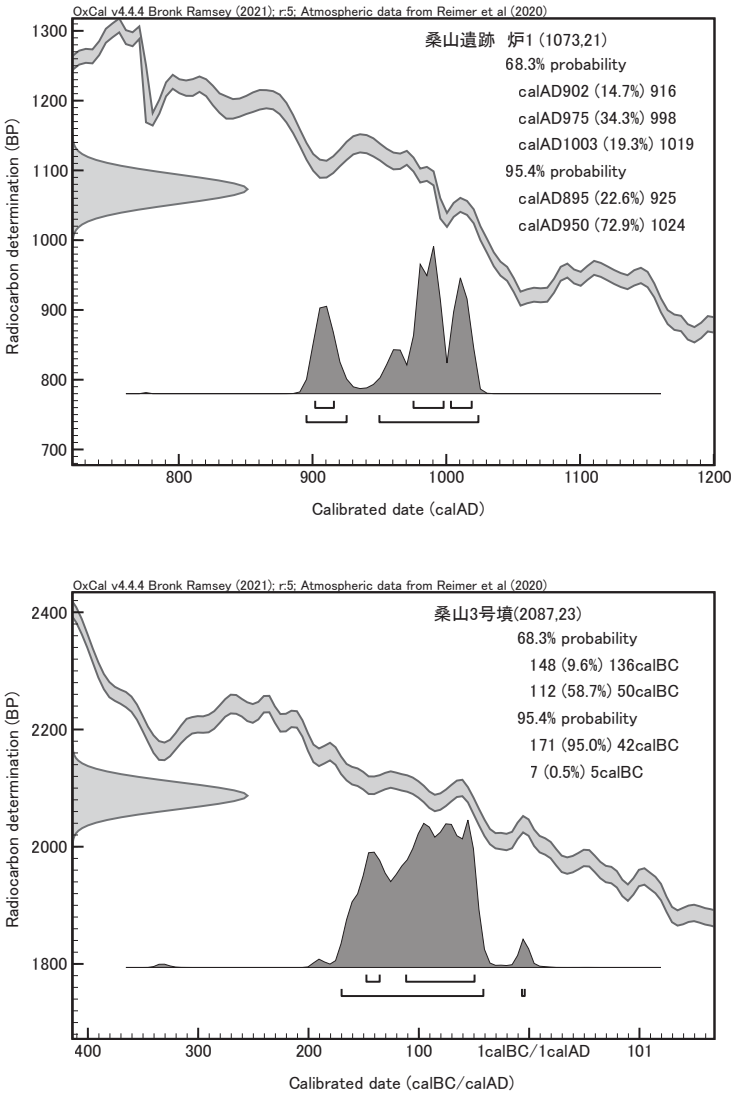
第５表　炭化材・種実同定結果

遺跡名	出土遺構名	分析資料名	種類	備考
桑山遺跡	炉１	木炭	単子葉類？	炉上層出土 ^{14}C 試料
	竪穴住居２	炭化材サンプル①	クリ	放射状材（垂木？）
		炭化材サンプル②	クリ	放射状材（垂木？）に直交
		炭化材サンプル③	クリ	放射状材（垂木？）
		炭化材サンプル④	クリ	放射状材（垂木？）に直交
		炭化材サンプル⑤	クリ	壁に密着して出土
		炭化材サンプル⑥	クリ	放射状材（垂木？）
桑山３号墳		炭化種子	モモ	掘り方埋土から出土　^{14}C 試料

第６表　放射性炭素年代測定結果

試料名	方法	補正年代（暦年較正用）BP	δ ^{13}C (‰)	暦年較正年代			Code No.	
					年代値	確率 %		
桑山遺跡 炉１	AAA (1M)	1075 ± 20 (1073 ± 21)	−30.3 ± 0.21	σ	cal AD 902 − cal AD 916	1049 − 1035 calBP 14.7	IAAA-210444	pal-13603
					cal AD 975 − cal AD 998	975 − 953 calBP 34.3		
					cal AD 1003 − cal AD 1019	947 − 932 calBP 19.3		
				2 σ	cal AD 895 − cal AD 925	1055 − 1025 calBP 22.6		
					cal AD 950 − cal AD 1024	1001 − 927 calBP 72.9		
桑山３号墳	AaA (0.0001M)	2085 ± 25 (2087 ± 23)	−29.4 ± 0.20	σ	cal BC 148 − cal BC 136	2097 − 2085 calBP 9.6	IAAA-210445	pal-13604
					cal BC 112 − cal BC 50	2061 − 1999 calBP 58.7		
				2 σ	cal BC 171 − cal BC 42	2120 − 1991 calBP 95.0		
					cal BC 7 − cal BC 5	1956 − 1954 calBP 0.5		

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2)BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68.2% が入る範囲）を年代値に換算した値。
4)AAA は、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaA は試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
5) 暦年の計算には、OxCal v4.4 を使用。
6) 暦年の計算には 1 桁目まで示した年代値を使用。
7) 較正データーセットは、IntCal20 を使用。
8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
9) 統計的に真の値が入る確率は、σが 68.2%、2 σが 95.4% である。



第 156 図　暦年較正結果

は、IntCal20（Reimer et al.,2020）を用いる。２σの値は、炉１がcalAD895～1024、桑山３号墳がcalBC171～５である。

４　考察

炉１より出土した木炭は、維管束の形状からタケ亜科以外の単子葉類に同定され、平安時代（10世紀頃）の年代観を示した。伊東・山田編（2012）の出土木製品用材データベースによれば、このような単子葉類は、県内の遺跡において若干の検出例がある。鍛冶遺構から検出された状況を考慮すると、燃料材の可能性がある。

一方、竪穴住居２出土炭化材は、全てクリに同定された。クリは明るい林地を好む落葉広葉樹で、成長が早く、萌芽による更新が容易であるため森林の再生が速い。そのため、河川沿いや人里近くに森林を作ることが多い（いわゆる里山林）。このため、遺跡周辺に普通に生育し、容易に入手できたと考えられる。材質は重堅で水質に強く、加工が容易であるため、柱材などの建築用材で使われることが多い。先述した出土木製品用材データベースによれば、クリの炭化材は、今回のような焼失住居から多く確認されている。

桑山３号墳より出土した炭化種実はモモに同定された。モモは古くより日本に渡来した栽培植物で、果実が食用、薬用、祭祀等に、花が観賞用に利用される。近辺で栽培されたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食料と示唆される。モモは古墳に伴って出土したとされるが、弥生時代の年代値を示した。本遺跡では弥生時代の遺構も検出されていることから、古い炭化物が再堆積した可能性がある。

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

林　昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

堀田　満　編,1980,植物の生活誌．平凡社,256p.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

伊東隆夫・山田昌久（編）,2012,木の考古学　出土木製品用材データベース．海青社,449p.

中村　純,1967,花粉分析．古今書院,232p.

近藤錬三,2010,プラント・オパール図譜．北海道大学出版会,387p.

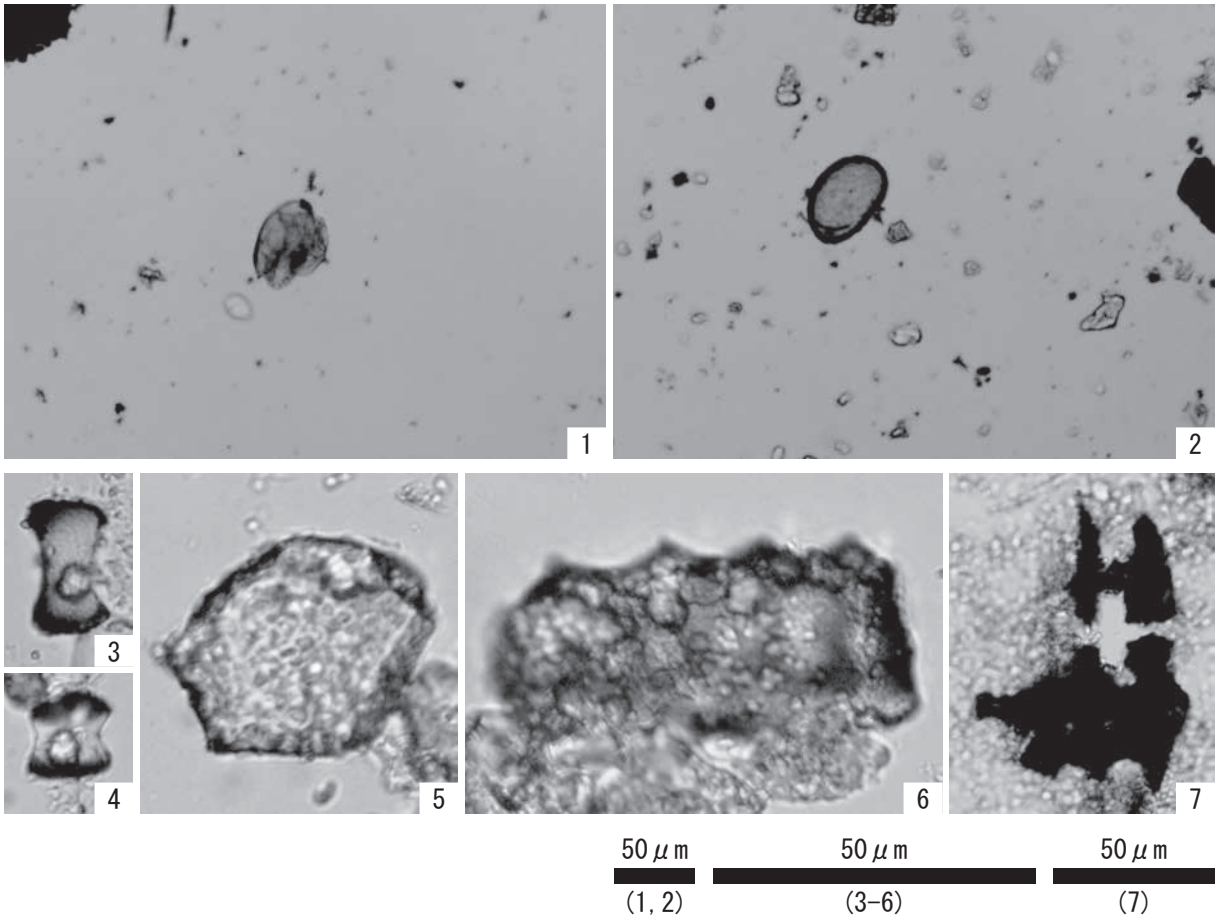
Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62,1-33.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006,針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修），海青社,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

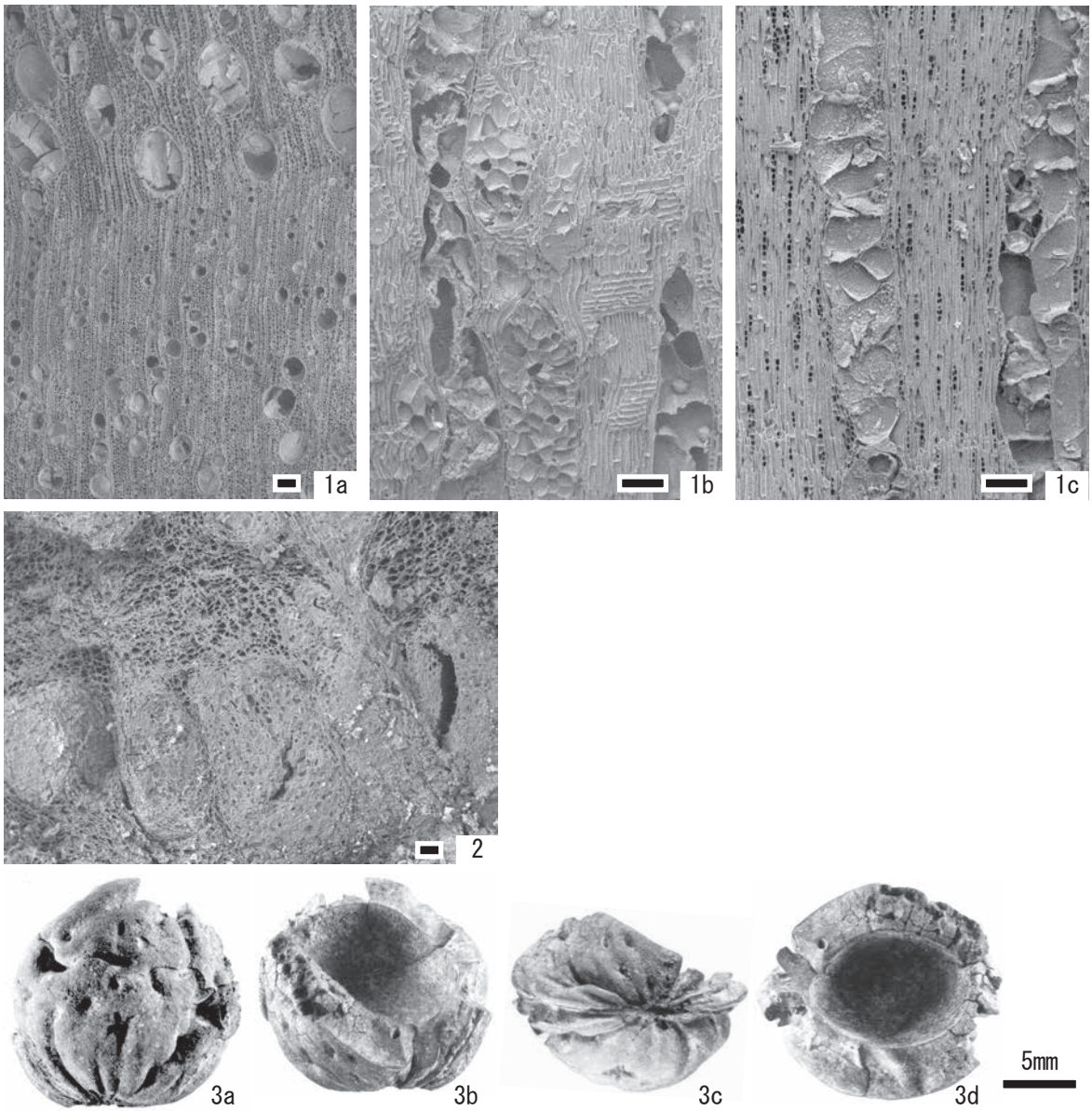
島地　謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織．地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫･藤井智之･佐伯　浩（日本語版監修），海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.



1.花粉分析プレパラート内の状況(竪穴住居２;１層サンプル)
2.花粉分析プレパラート内の状況(竪穴住居２;５層サンプル)
3.クマザサ属短細胞珪酸体(竪穴住居２;５層サンプル)
4.メダケ属短細胞珪酸体(竪穴住居２;５層サンプル)
5.クマザサ属機動細胞珪酸体(竪穴住居２;５層サンプル)
6.メダケ属機動細胞珪酸体(竪穴住居２;５層サンプル)
7.炭化物粒(竪穴住居２;５層サンプル)

写真 34　花粉分析・植物珪酸体



1. クリ（竪穴住居２　サンプル①）
2. 単子葉類？（炉１）
3. モモ（桑山３号墳）

〈炭化材〉
a:木口　b:柾目　c:板目
スケールは100μm

写真 35　炭化材・種実

第２節　桑山２号墳出土雲珠・辻金具の顕微鏡観察及び蛍光Ｘ線分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

桑山古墳群（津山市平福所在）は、6 世紀中頃～後半に築かれた５基の円墳で構成される古墳群である。桑山２号墳は、南西に開口する横穴式石室をもつ径約 13 ｍの円墳であり、6 世紀中頃の須恵器をはじめとして、鉄鏃、刀子、馬具（轡・雲珠・辻金具・鞍・金属鋲など）などの遺物が出土している。

雲珠・辻金具は、鉄地金銅貼りで半円形脚をもつ。環状部内面には、弧状を呈した錆が存在し、これには当時の付着物に由来するとみられる縦方向の筋目模様が認められた。本分析調査では、この模様から付着物に関する情報を得る目的で、顕微鏡観察及び蛍光Ｘ線分析を実施する。

１　試料

試料は、雲珠 No.1（桑山２号墳Ｍ 62、以後桑山２号墳省略）、辻金具 No.2（Ｍ 64）、辻金具 No.3（Ｍ 65）、辻金具 No.4（Ｍ 63）の４点である。写真 36 にデジタルマイクロスコープでの観察場所（MS と記入）、電子顕微鏡用の破片採取場所（SEM と記入）、蛍光Ｘ線分析の場所（内側１～３、外側１～２と記入）を示す。

２　顕微鏡観察

（１）分析方法

双眼実体顕微鏡で内側を観察し、筋目模様の状態を観察する。最も鮮明に見える部分についてデジタルマイクロスコープ（キーエンス　VHX-1000）を用いて写真撮影し記録するとともに、蛍光Ｘ線分析箇所選択の参考にする。全ての分析が終了したあと、精密ニッパーを用いて筋状模様のついた錆を１～2㎜程度切断する。電子顕微鏡（日本電子　JCM-5700）を用いて筋状部分を観察し、写真を撮影する。切断した錆部分は脆く、本体への接着復元が難しかったため、観察後は別途袋に保存する。

（２）結果・考察

デジタルマイクロスコープの写真を写真 37 に、電子顕微鏡の写真を写真 38 に示す。

雲珠 No.1（Ｍ 62）、辻金具 No.2（Ｍ 64）の筋目模様の形状は似ている。筋状模様は輪に対して縦方向と横方向にみられ、交差している部分もある。交差部分の幅は 1㎜程度で、横方向の筋が表面に見えている部分と、横方向の筋が表面に見えている部分がある。筋状部分を電子顕微鏡で拡大すると、一本の筋の太さは約 30 ～ 50 μｍで、太さが比較的均質である。以上のことから、筋目模様の由来は、何らかの繊維であると考えられる。しかし、繊維の印象のみから素材を推定することは難しい。さらに、直交している場所や筋が規則的に途切れている場所があることから、1㎜程度の編目を持った布？に由来する可能性がある。

辻金具 No.3（Ｍ 65）、辻金具 No.4（Ｍ 63）の筋目模様は直交している場所はなく、縄目のように湾曲していることから、縄の痕跡の可能性がある。電子顕微鏡で観測すると、一本の筋の太さは 50

μｍ程度で、雲珠No.1（Ｍ62）、辻金具No.2（Ｍ64）の繊維と比べてやや太く、太さにばらつきがある。これは、繊維の種類の違いに由来すると思われるが、素材を推定するには至らない。なお、当時存在したと思われる繊維は、苧麻、科布などの植物の靭皮由来の繊維や絹などが知られている（奥山2017）。

なお、当初は貝の成長線による筋の可能性が指摘されていたが、貝の成長線は太さのばらつきが非常に大きくなることや、痕跡の形状などから、貝の跡とは考えにくい。

３　蛍光Ｘ線分析

（１）分析方法

ハンドヘルド型エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（OLYMPUS DELTA DP-2000 Premium）を使用して測定を行う。測定モードは合金に適したAlloy Plusを使用する。分析によって、原子番号12番のMg（マグネシウム）以上の元素の検出が可能である。

（２）結果・考察

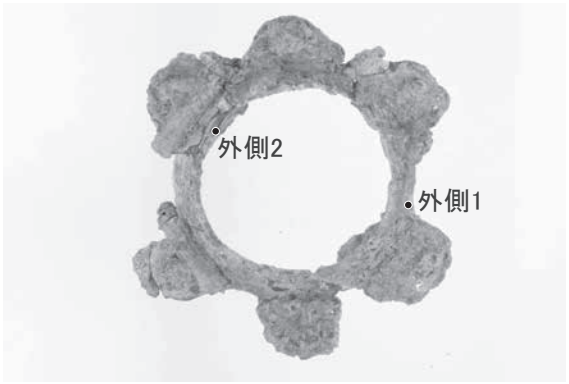
結果を第７表に示す。錆等の影響で値のばらつきが大きいため、何回か測定して最も安定したと思われる値を記した。鉄地金銅貼りのため、内側は鉄の割合が高く、外側も銅貼が残存している部分では銅の割合が高くなっているが、全体的に鉄錆の影響が大きい。また、ケイ素やアルミニウムは錆とともに付着している土壌由来と思われる。他の元素は、鉄や銅に混じっていた不純物の可能性もあるが、錆や後代の付着物（土など）の影響で値が不安定になっている可能性が高く、詳細は不明である。このため、筋状部分とそれ以外の部分で元素組成の違いに関して言及することは難しい。

引用文献

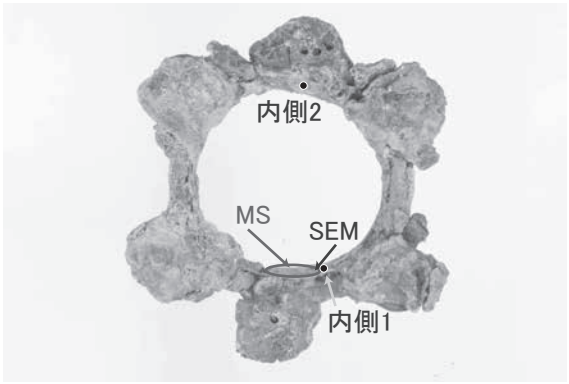
奥山誠義，2017，考古資料からみた植物性繊維の利用実態の解明．作物研究，62，57-63.

第７表　蛍光Ｘ線分析結果（％）

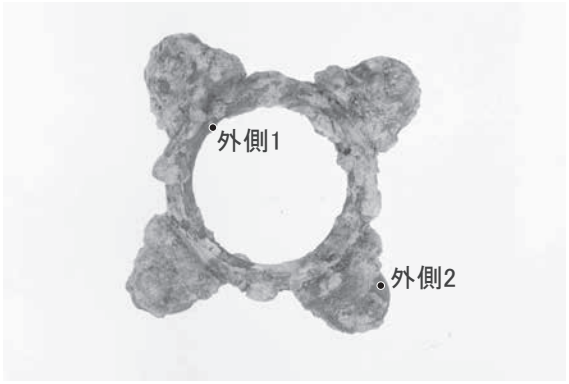
番号	測定箇所	Mode	Pb	Si	Al	Ti	Mn	Fe	Co	Cu	Zn	Zr	Mo	Ag	掲載番号	備考
No.1	内側１	Alloy Plus	ND	3.6	ND	ND	ND	95.0	ND	1.4	ND	ND	ND	ND	Ｍ62	
No.1	内側２	Alloy Plus	ND	6.8	ND	0.4	ND	89.9	ND	2.9	ND	Tr	ND	ND	Ｍ62	
No.1	外側１	Alloy Plus	0.3	7.6	ND	0.4	0.0	87.7	ND	4.0	ND	Tr	ND	ND	Ｍ62	金色
No.1	外側２	Alloy Plus	0.5	ND	5.2	ND	ND	84.0	0.5	3.5	ND	Tr	ND	ND	Ｍ62	黒色
No.2	内側１	Alloy Plus	0.1	5.3	ND	0.2	0.2	89.5	ND	4.4	0.2	Tr	ND	ND	Ｍ64	
No.2	内側２	Alloy Plus	ND	4.4	ND	0.1	0.1	91.4	0.5	3.4	ND	ND	ND	ND	Ｍ64	
No.2	外側１	Alloy Plus	0.2	ND	ND	ND	ND	72.5	0.4	24.5	ND	ND	ND	ND	Ｍ64	
No.2	外側２	Alloy Plus	0.3	ND	3.6	0.1	ND	26.4	ND	59.9	ND	ND	ND	0.6	Ｍ64	
No.3	内側１	Alloy Plus	0.3	0.8	ND	ND	ND	88.0	ND	10.4	ND	ND	ND	ND	Ｍ65	
No.3	内側２	Alloy Plus	ND	2.0	ND	ND	ND	84.3	ND	13.0	0.6	ND	ND	ND	Ｍ65	
No.3	内側３	Alloy Plus	0.1	4.4	ND	0.2	ND	88.0	0.4	6.7	ND	Tr	ND	ND	Ｍ65	
No.3	外側１	Alloy Plus	0.4	3.8	3.0	0.1	ND	65.8	0.7	8.9	ND	Tr	ND	0.8	Ｍ65	金色
No.3	外側２	Alloy Plus	0.3	ND	4.4	0.1	ND	82.6	0.4	3.7	ND	ND	ND	0.3	Ｍ65	
No.3	外側３	Alloy Plus	Tr	ND	ND	ND	ND	44.5	0.2	54.5	ND	ND	Tr	0.6	Ｍ65	割れている
No.4	内側１	Alloy Plus	ND	3.2	6.2	ND	0.2	85.6	ND	4.7	ND	ND	ND	ND	Ｍ63	
No.4	内側２	Alloy Plus	ND	3.7	ND	0.1	0.4	85.4	0.4	10.0	ND	0.0	ND	ND	Ｍ63	
No.4	外側１	Alloy Plus	0.1	0.4	4.0	ND	0.0	12.5	ND	77.0	0.2	ND	ND	ND	Ｍ63	青錆
No.4	外側２	Alloy Plus	0.2	7.4	3.8	0.2	0.1	22.9	ND	53.1	0.2	ND	ND	0.3	Ｍ63	金色



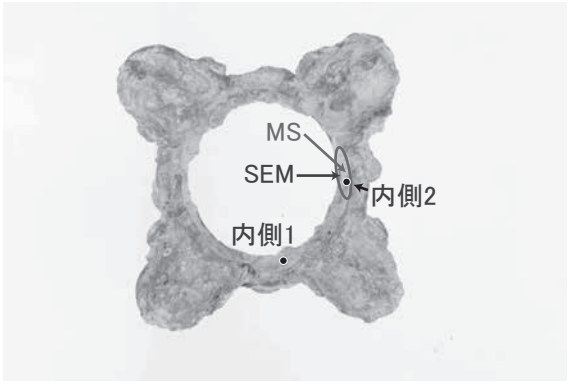
No. １　雲珠（Ｍ 62）　表面



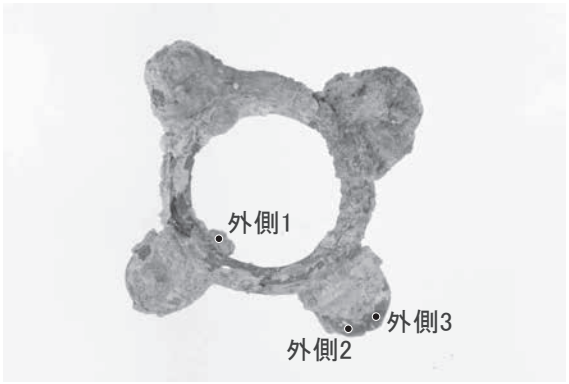
No. １　雲珠（Ｍ 62）　裏面



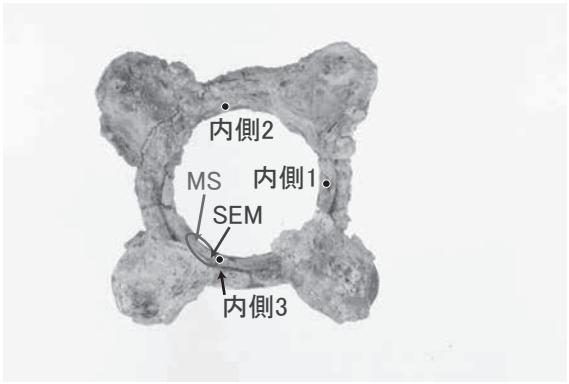
No. ２　辻金具（Ｍ 64）　表面



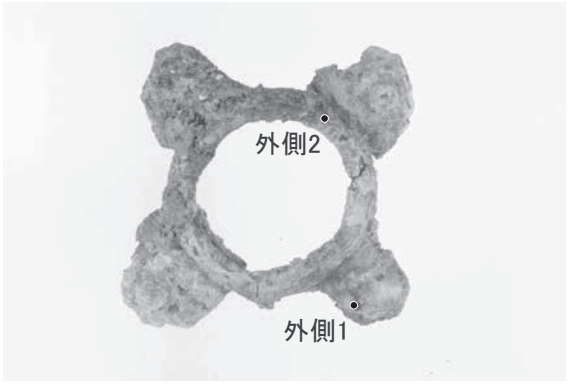
No. ２　辻金具（Ｍ 64）　裏面



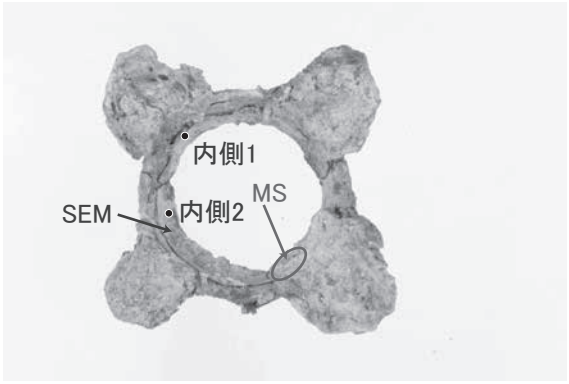
No. ３　辻金具（Ｍ 65）　表面



No. ３　辻金具（Ｍ 65）　裏面



No. ４　辻金具（Ｍ 63）　表面



No. ４　辻金具（Ｍ 63）　裏面

2cm

写真 36　分析試料



No. １　雲珠（Ｍ 62）　1mm



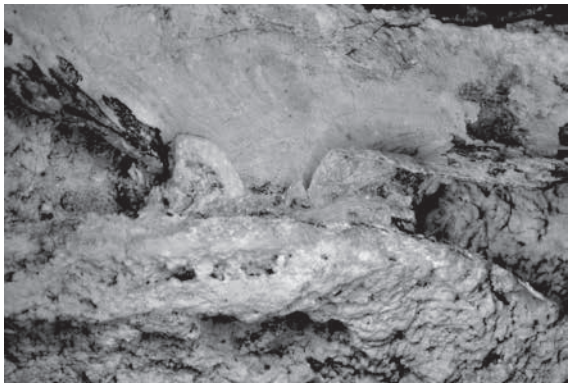
No. １　雲珠（Ｍ 62）　1mm



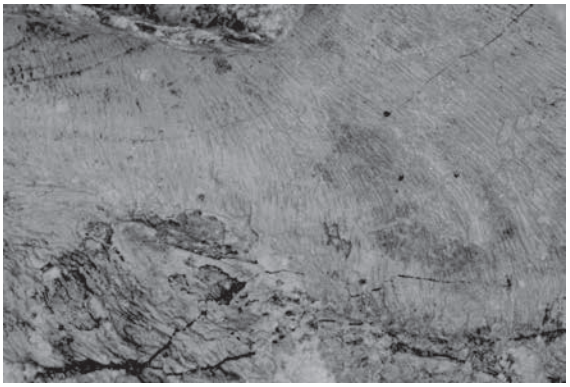
No. ２　辻金具（Ｍ 64）　1mm



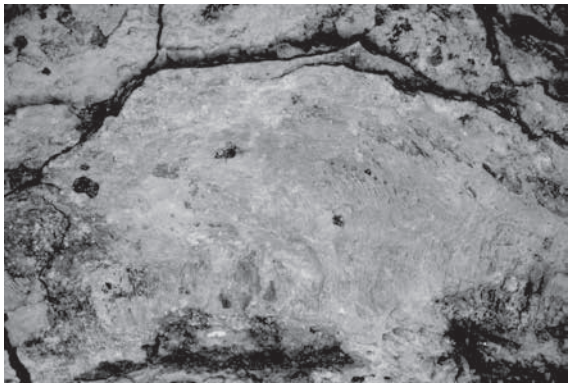
No. ２　辻金具（Ｍ 64）　1mm



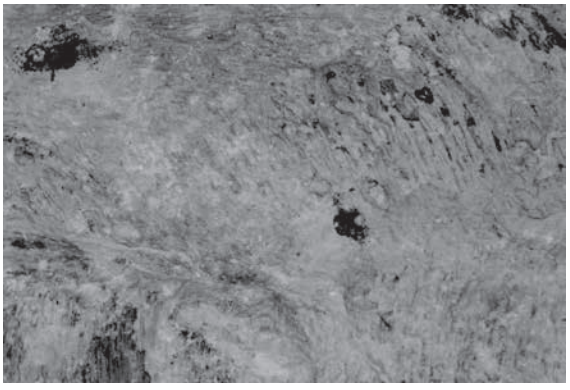
No. ３　辻金具（Ｍ 65）　1mm



No. ３　辻金具（Ｍ 65）　1mm



No. ４　辻金具（Ｍ 63）　1mm



No. ４　辻金具（Ｍ 63）　1mm

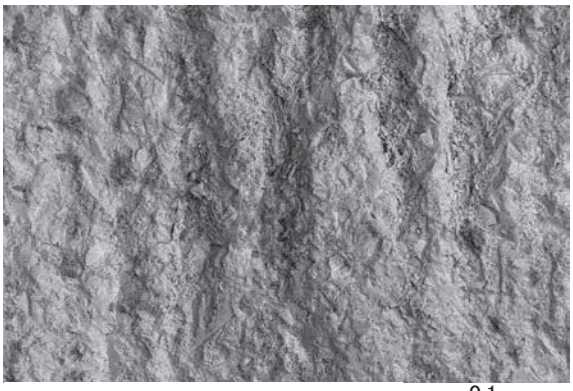
写真 37　マイクロスコープ観察



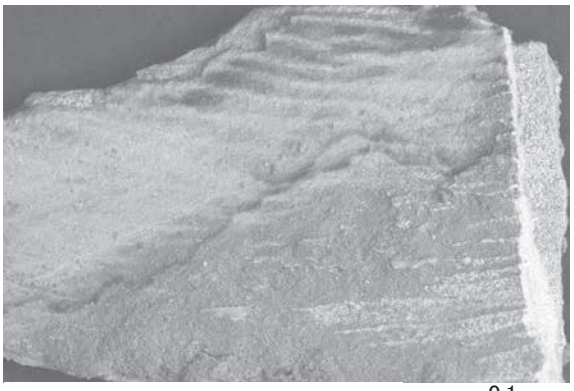
No. 1　雲珠（M 62）　0.2mm



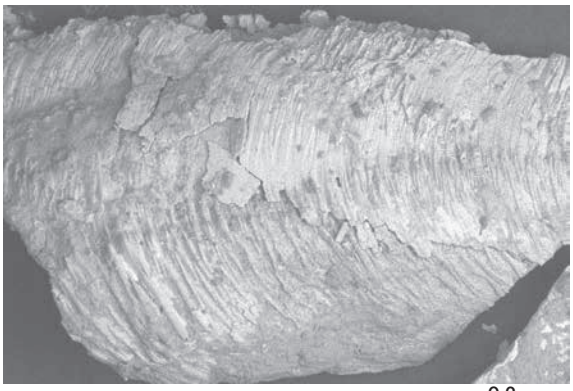
No. 1　雲珠（M 62）　0.1mm



No. 2　辻金具（M 64）　0.1mm



No. 2　辻金具（M 64）　0.1mm



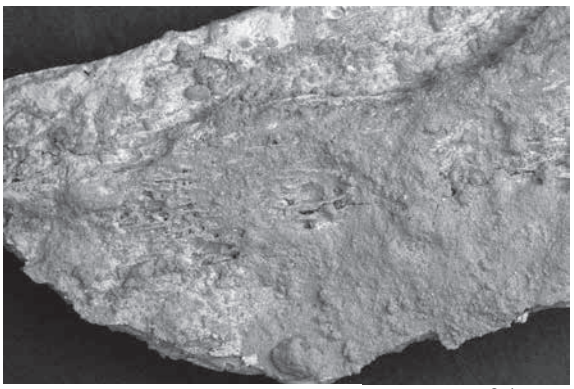
No. 3　辻金具（M 65）　0.2mm



No. 3　辻金具（M 65）　0.1mm



No. 4　辻金具（M 63）　0.2mm



No. 4　辻金具（M 63）　0.1mm

写真 38　電子顕微鏡観察

第３節　桑山古墳群出土遺物の胎土分析

岡山理科大学　白石　純

１　はじめに

桑山古墳群から出土した須恵器、埴輪の自然科学的な胎土分析を行い、須恵器・埴輪の生産地や胎土的特徴について検討した。胎土分析は蛍光Ｘ線分析法と肉眼観察（マイクロスコープで土器表面の砂粒を観察）で実施した。

２　分析方法・試料

分析は蛍光Ｘ線分析法で胎土の元素濃度を、またマイクロスコープでは土器表面の砂粒観察を行った。

蛍光Ｘ線分析法は、胎土の元素濃度を測定し、その元素濃度から分析した須恵器、埴輪の胎土的差異について検討する方法である。測定した元素は、SiO_2、TiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3、MnO、MgO、CaO、Na_2O、K_2O、P_2O_5、Rb_2O、SrO、ZrO_2 の 13 元素である。

なお測定装置・条件・試料は以下の通りである。

測定装置：エレメントアナライザー　JSX-3203EV（日本電子）を使用した。

測定条件：Ｘ線照射径３㎜、電流 1.00mA、電圧 30 k V、測定時間 300 秒、測定室は真空の条件で測定した。

定量値は、ファンダメンタル・パラメーター法により算出した。毎回の定量値の再現性があることを確認するため、地質調査所の標準試料 JA-1（安山岩）、JG-1a（花崗岩）、JB-1a（玄武岩）の３試料の定量値を求めて、装置の安定性を確認している。

測定試料：分析試料は、試料表面の汚れを除去後、乾燥した試料を乳鉢（タングステンカーバイト製）で粉末（100 ～ 200 メッシュ）にしたものを加圧成形機で約 10 ㌧の圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

分析結果の比較（差異）は、有意な差がみられる元素を横軸と縦軸にとり、散布図を作成し、胎土の違いについて検討した。また、マイクロスコープでは 10 ～ 30 倍で土器表面を観察し、砂粒構成について調べた。

分析試料は、第８表に示している桑山古墳群から出土した須恵器31点、埴輪26点の合計57点である。

３　分析結果

この分析では CaO（酸化カルシウム）、K_2O（酸化カリウム）、Rb_2O（ルビジウム）、SrO（ストロンチウム）、ZrO_2（ジルコニウム）の５元素で散布図を作成し検討した。

須恵器の分析結果について

分析した桑山古墳群出土須恵器は第８表に示している 31 点で、内訳は１号墳出土の杯、壺、提瓶の６点。２号墳出土の杯、壺の４点。３号墳出土の杯２点。４号墳出土の杯５点。５号墳出土の杯、瑞、

高杯、提瓶の 14 点である。

第 157 図（K_2O-CaO 散布図）、第 158 図（Rb_2O-SrO 散布図）、第 159 図（Rb_2O-ZrO_2 散布図）で須恵器の杯、高杯類の生産地について検討した。

その結果、第 157・158 図では杯、高杯は K_2O、CaO、Rb_2O、SrO の各元素が増減により、大きく３つのグループ（Ａ・Ｂ・Ｃ）にわかれた。つまり、各元素濃度の多い方からＡ、Ｂ、Ｃにわかれた。第 157 図ではＡグループに試料番号１、４、７、13、14、15、16、22、24、25、26、28、30、31。Ｂグループには３、５、８、９、11、12、17。Ｃグループには 18、19、20 の各須恵器が分布した。第 158 図では、Ａグループに１、４、14、15、17、22、24、25、26、28、30、31。Ｂグループには３、５、７、８、９、11、12、13、16。Ｃグループには 18、19、20 の各須恵器が分布した。また、第 159 図では、２つのグループに分類でき、ＡとＢ、Ｃのグループにわかれた。

以上のように、３つのグループわけができたが、第 159 図に示しているように、桑山古墳群出土の杯・高杯類は、津山市内の窯跡および大阪陶邑窯跡とは明らかに胎土が異なっていた。

次に壺、提瓶、瑯類の産地推定を行った。

第 160 図（K_2O-CaO 散布図）、第 161 図（Rb_2O-SrO 散布図）、第 162 図（Rb_2O-ZrO_2 散布図）の各散布図より資料番号 10（壺）以外はほぼ一つにまとまり、杯類と同様に生産地はわからなかった。ただ、10 の壺は、陶邑か津山市内の窯跡に近い領域に分布した。

埴輪の分析結果について

埴輪は、円筒形、石見型の合計 26 点を分析した。なお、この古墳群と比較検討した埴輪は、津山市内と赤磐市土井遺跡出土の埴輪である。

分析の結果、第 163 図（K_2O-CaO 散布図）、第 164 図（Rb_2O-SrO 散布図）、第 165 図（Rb_2O-ZrO_2 散布図）の各散布図より以下のことが推定された。

第 163・164 図では資料番号 33、36、48 が土井遺跡の領域に分布し、その他のものは、どの領域にも入らなかった。また、第 165 図では、１号墳（34･38）、５号墳（51 ～ 57）の埴輪が土井遺跡の領域には入らなかったが、その他は領域内に分布した。このように、33、36、48 の埴輪は、土井遺跡と胎土が類似している。しかし、その他の埴輪は、生産地がはっきりしなかった。

次に肉眼観察（マイクロスコープで土器表面の砂粒構成を観察）を行った。その結果、ほとんどの埴輪には、多量の石英（３㎜以下）、片岩（0.5㎜以下）と少量の角閃石（0.5㎜以下）が確認できた。また、桑山５号墳出土の資料番号 51 ～ 57 には多量の石英（３㎜以下）、火山ガラス（0.5㎜以下）と少量の雲母・角閃石（0.5㎜以下）が観察できた。また、34・38 は、多量の石英（３㎜以下）と少量の雲母（0.5㎜以下）が含まれていた。そして、33・36・48 は須恵質の埴輪であった。

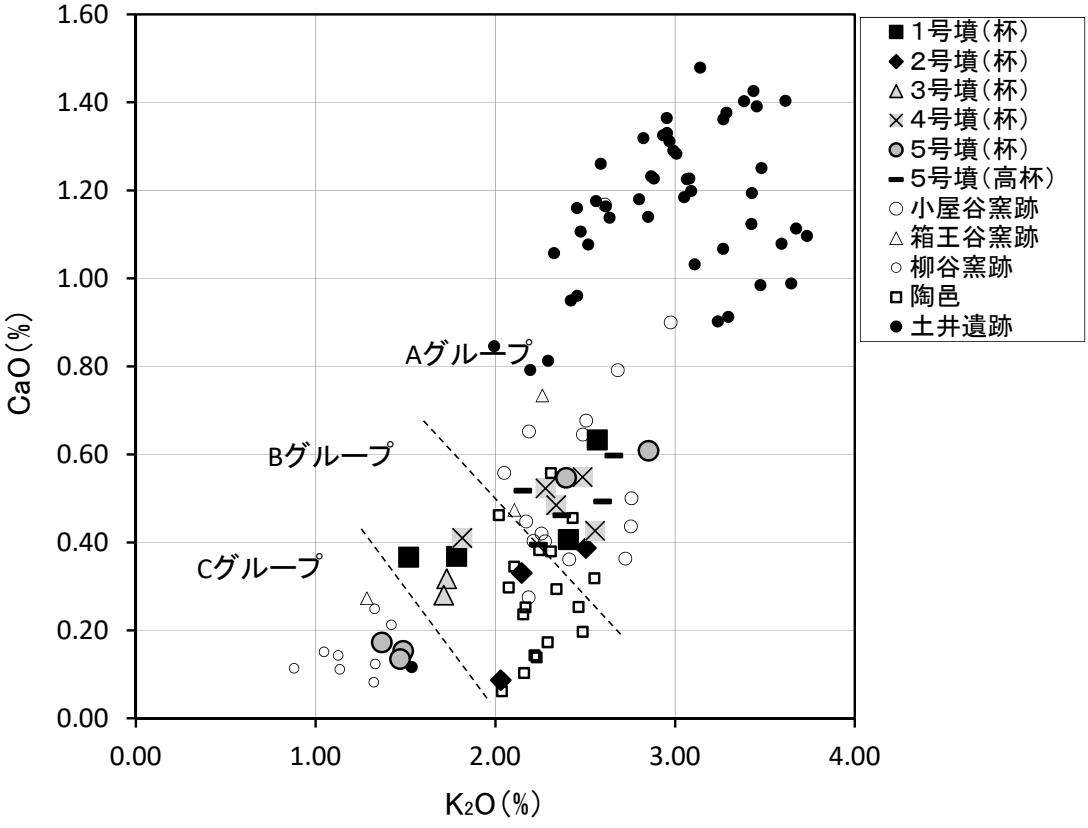
４　まとめ

桑山古墳群出土の須恵器、埴輪の胎土分析を行い、以下のことが推定された。

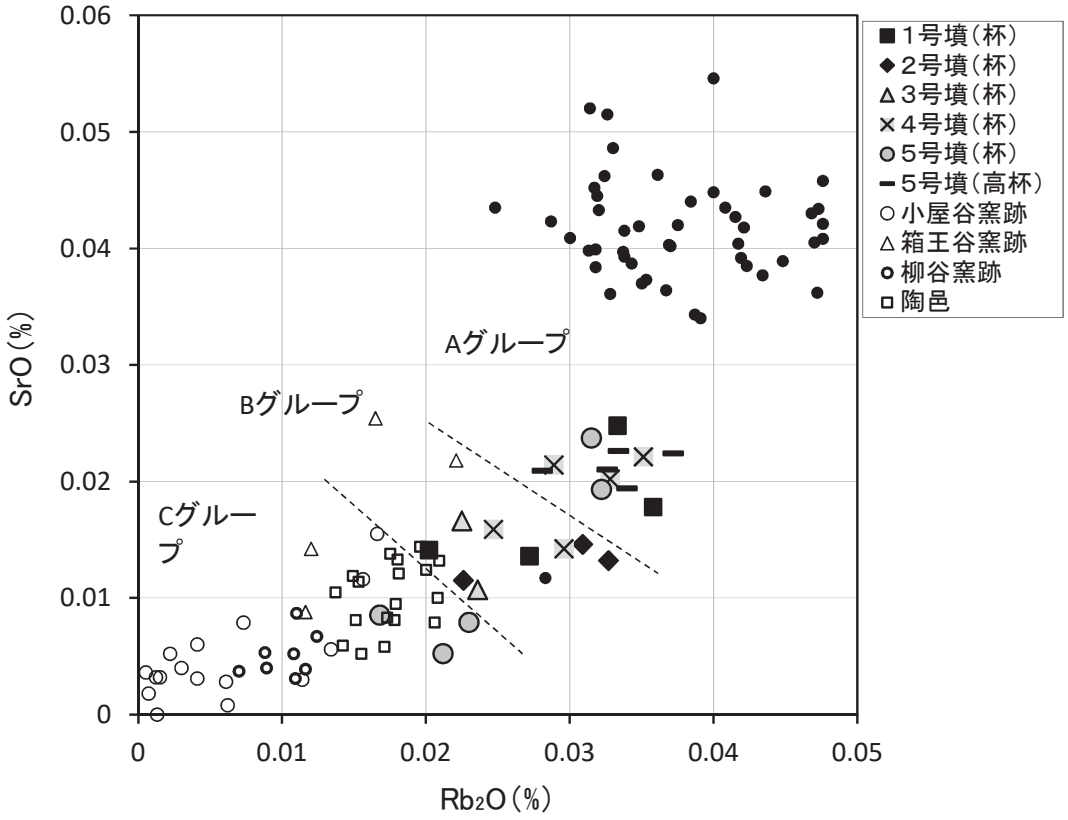
（１）須恵器の分析では、２から３のグループに分類できたが、今回比較した津山市内、赤磐市土井遺跡、大阪陶邑の須恵器とは、胎土が異なっていた。つまり、新たな生産地が想定される。

（２）埴輪の分析では、３つの胎土に分類できた。このうち、資料番号 33・36・48 が土井遺跡の胎土と類似していた。なお、これら３点の埴輪は焼成が須恵質である。その他の埴輪は、津山市内や土井遺跡とは胎土が異なっていた。埴輪に関しても新たな生産地が考えられる。また、

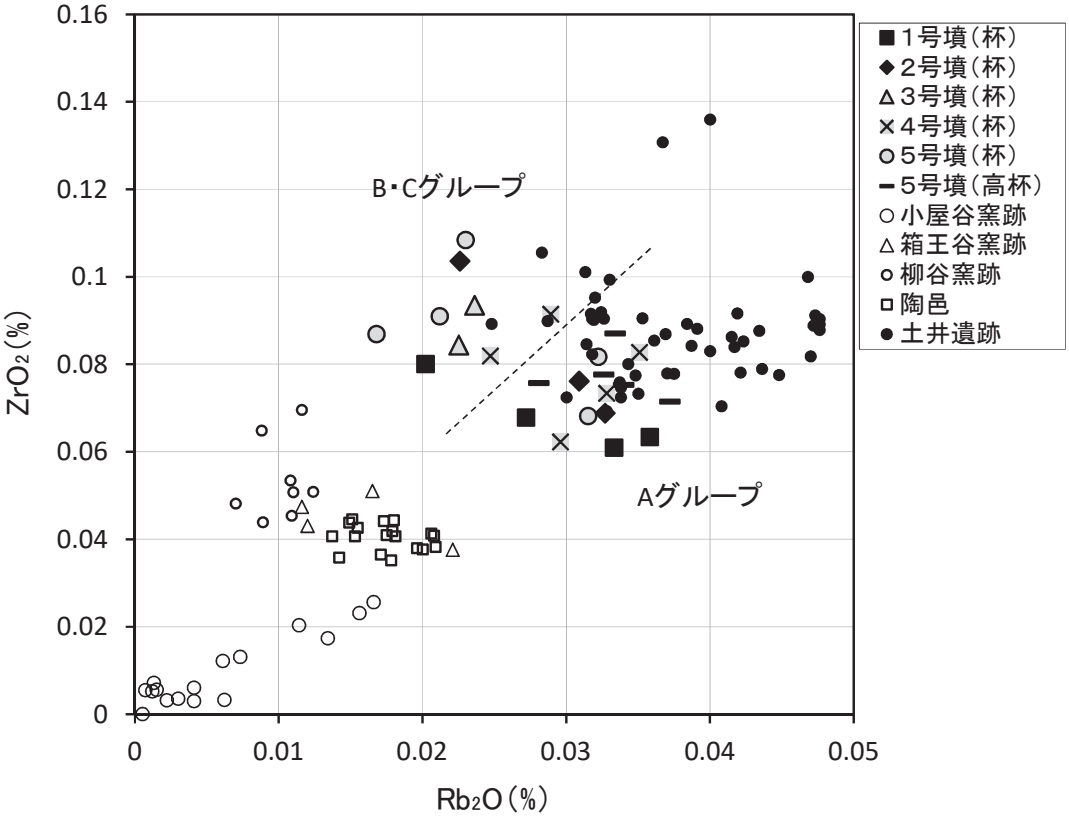
肉眼による表面の砂粒観察では２種類の胎土に分類が可能であった。１・２・３号墳出土の埴輪は、多量の石英（３㎜以下)、片岩（0.5㎜以下）と少量の角閃石（0.5㎜以下）で構成されており、５号墳出土の埴輪は多量の石英（３㎜以下)、火山ガラス（0.5㎜以下）と少量の雲母・角閃石（0.5㎜以下）が含まれていた。つまり、１・２・３号墳の埴輪には、片岩と微細な結晶片岩が含まれることが特徴で、片岩類が産出する地域で生産されたことが考えられる。また、火山ガラスと雲母、角閃石を含む５号墳の埴輪は、火成岩地域（花崗岩）で生産されていることが想定される。なお、資料番号 33・36・48 が土井遺跡の胎土が類似していた結果については、焼成が須恵質であることから、窯焼成であることが裏付けられるが、48 は時期が 6 世紀中頃で、土井遺跡の窯とは、時期が異なるし、もし、土井遺跡から供給されたと考えると直線距離で約 30㎞を運んできたのだろうか。今回の分析では、土井遺跡と推定されたが、今後分析データを増やして検討する必要がある。



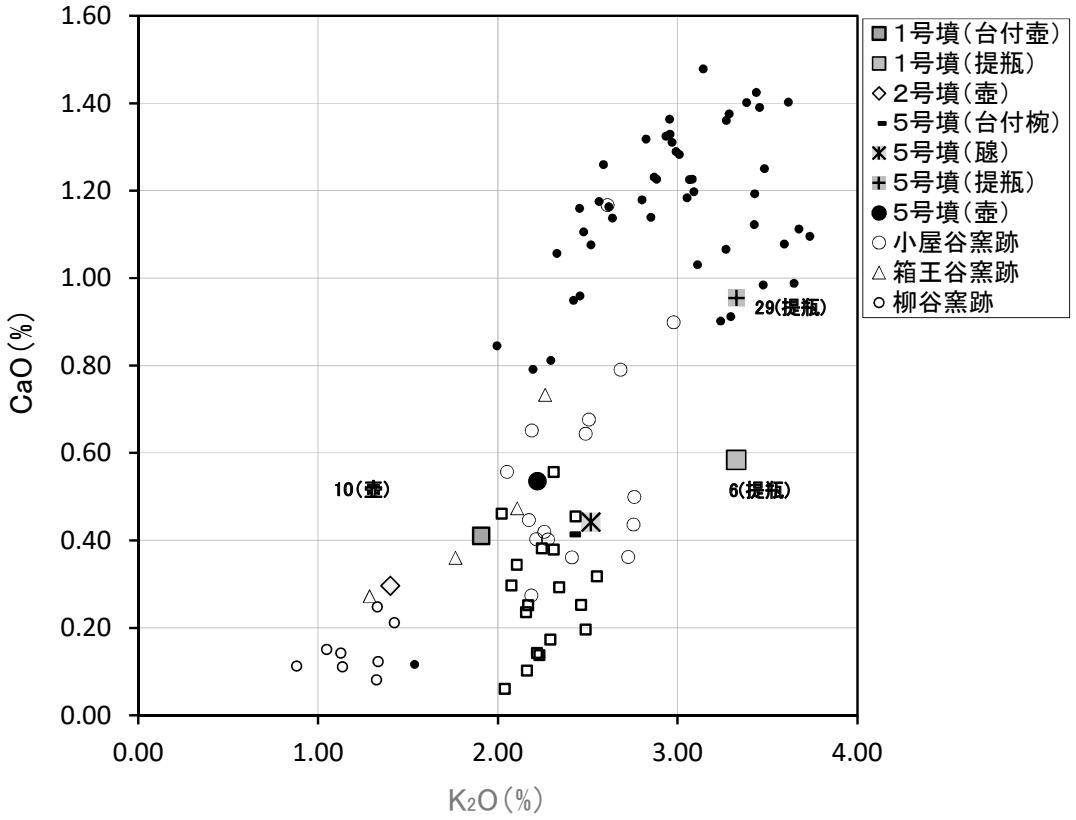
第 157 図　桑山古墳群出土須恵器（杯、高杯）の産地推定①



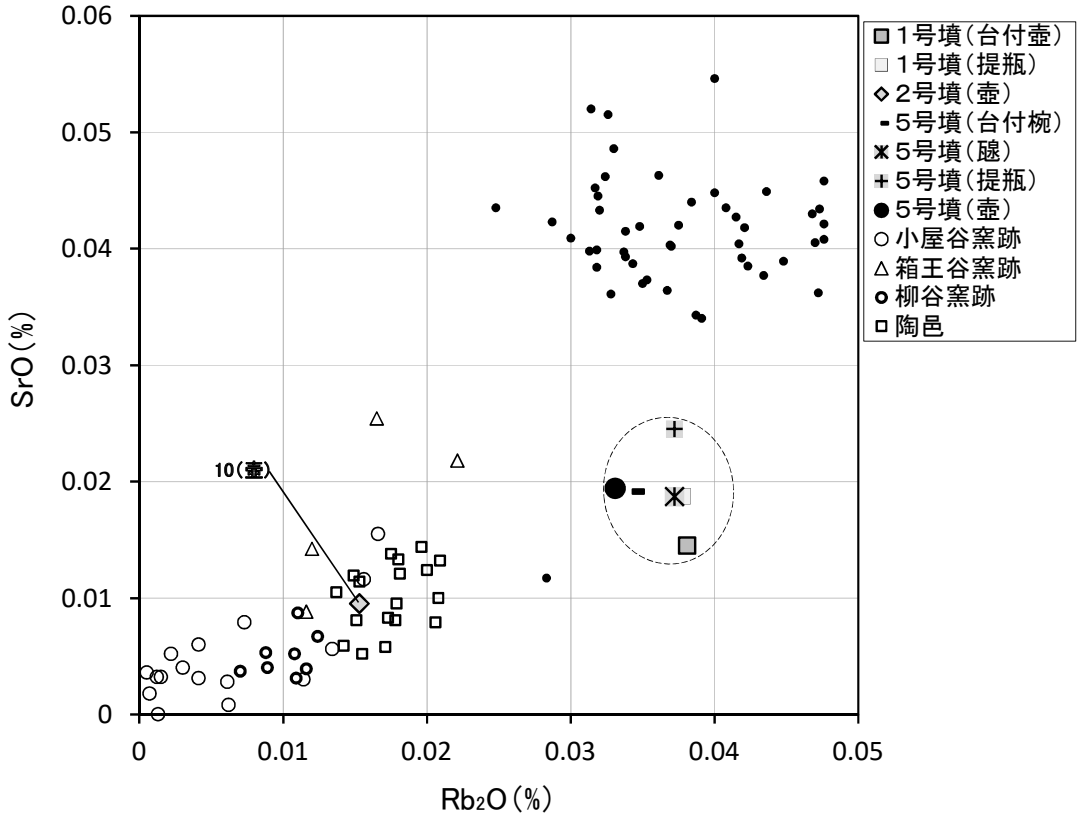
第 158 図　桑山古墳群出土須恵器（杯、高杯）の産地推定②



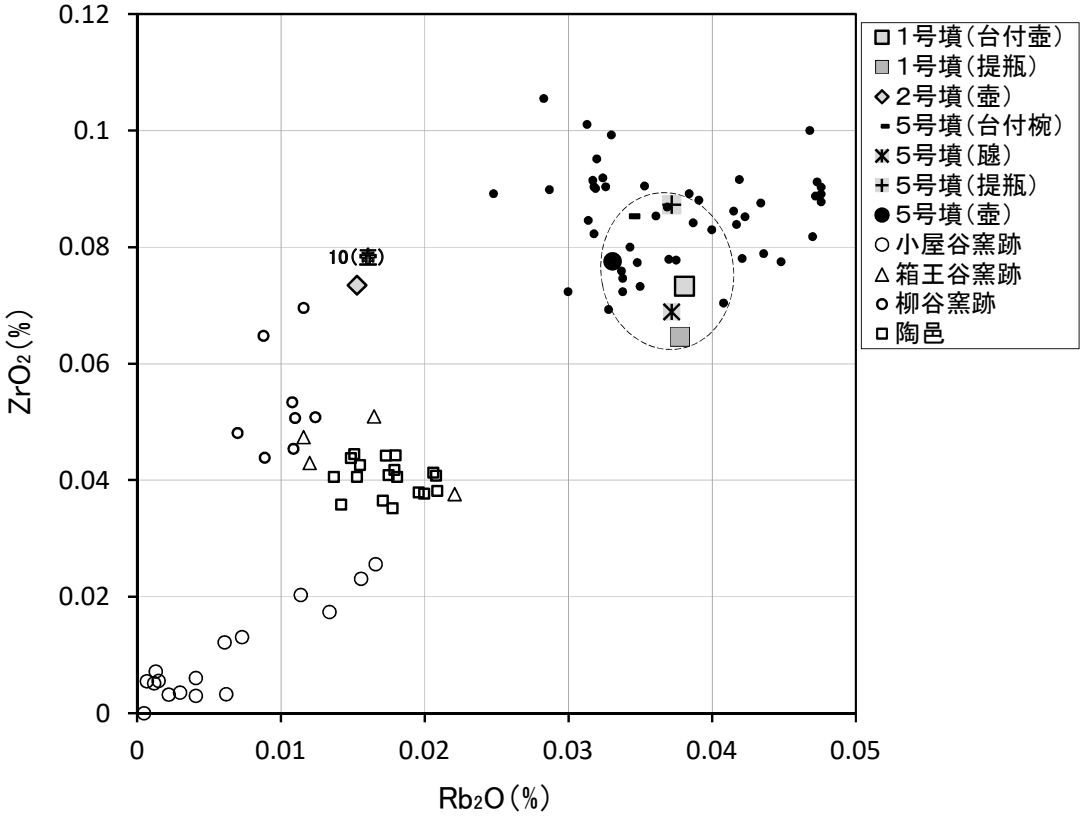
第 159 図　桑山古墳群出土須恵器（杯、高杯）の産地推定③



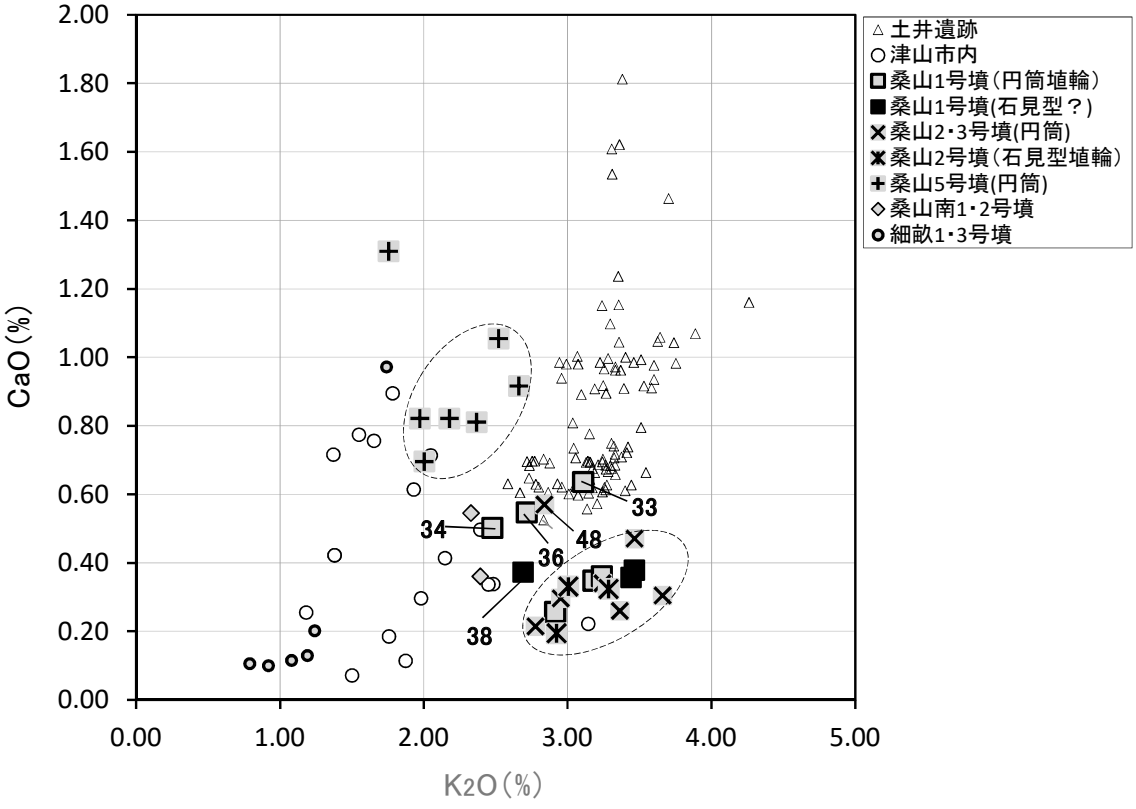
第 160 図　桑山古墳群出土須恵器（壺、提瓶、鼓）の産地推定①



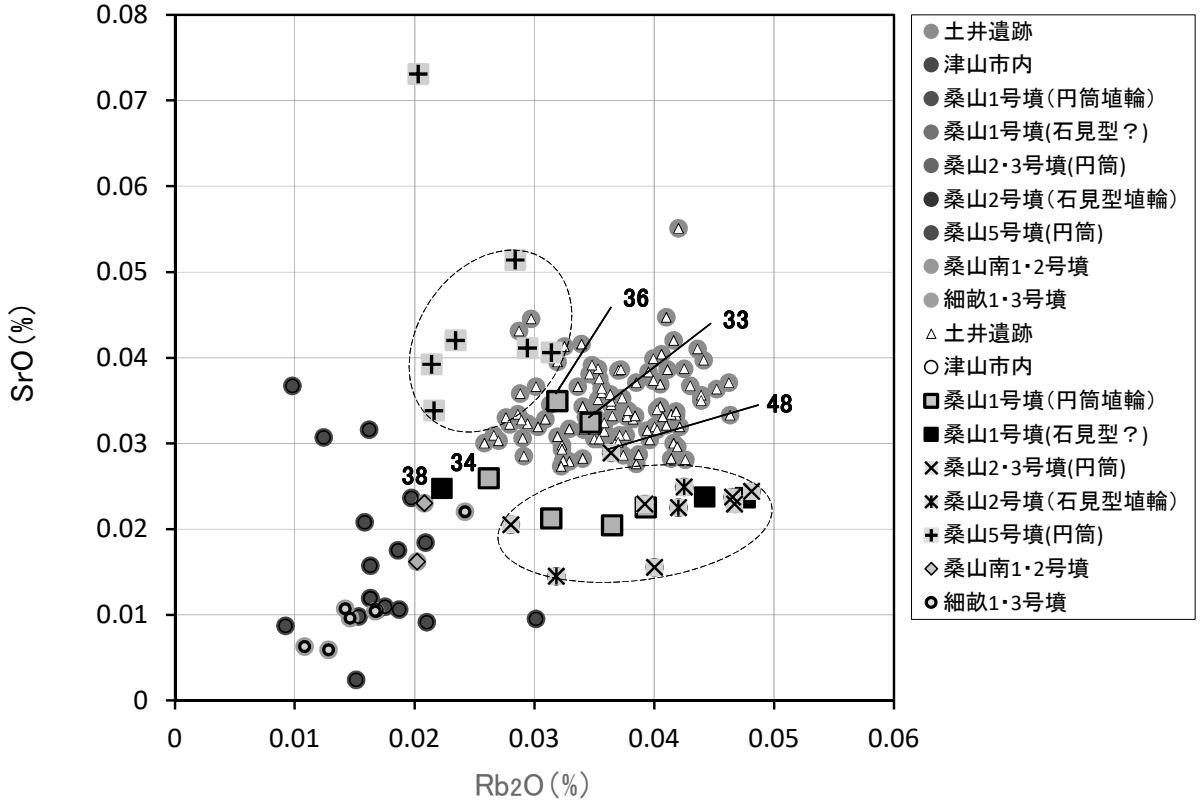
第 161 図　桑山古墳群出土須恵器（壺、提瓶、鼓）の産地推定②



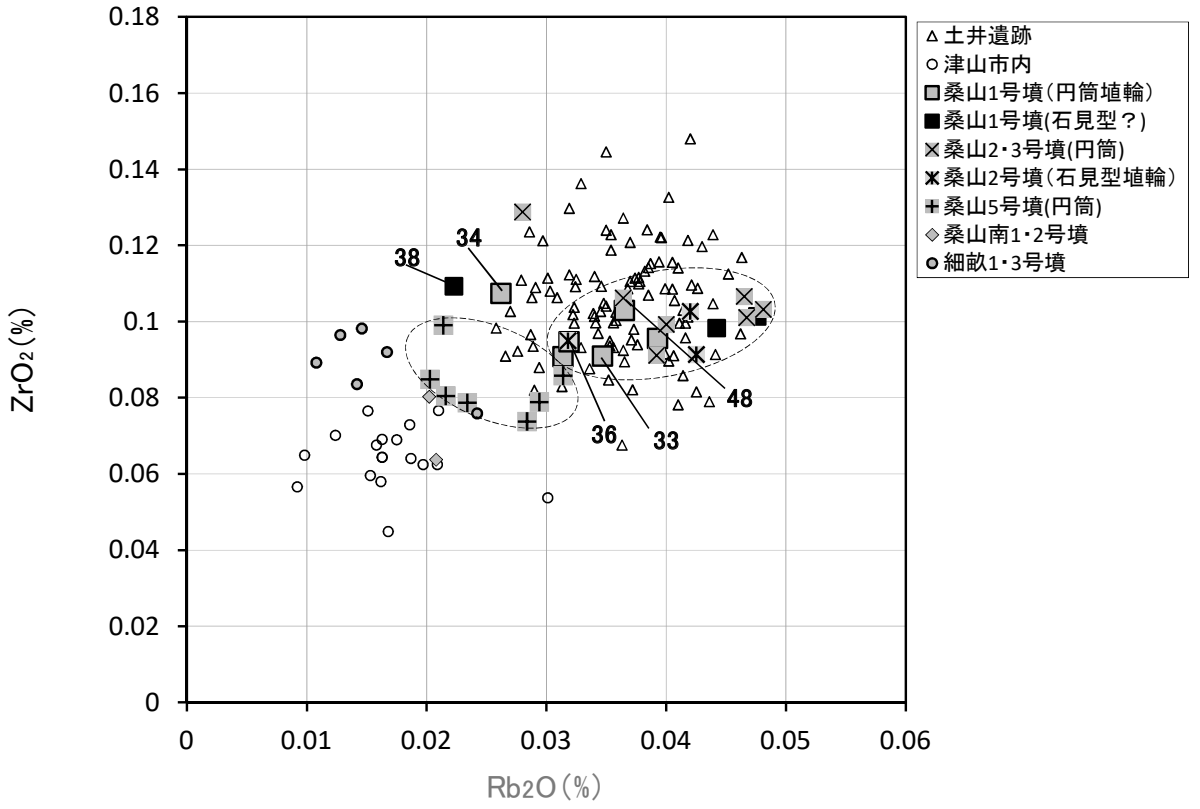
第 162 図　桑山古墳群出土須恵器（壺、提瓶、甕）の産地推定③



第 163 図　桑山古墳群出土埴輪と津山市内出土埴輪の比較①



第 164 図　桑山古墳群出土埴輪と津山市内出土埴輪の比較②



第 165 図　桑山古墳群出土埴輪と津山市内出土埴輪の比較③

第８表　桑山古墳群出土須恵器・埴輪の分析結果（%）

番号	遺跡名	種別	器種	時期	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	Rb_2O	SrO	Y_2O_3	ZrO_2	掲載番号
1	桑山１号墳	須恵器	杯蓋	６世紀中頃	59.70	1.59	27.85	6.77	0.04	0.00	0.63	0.49	2.57	0.23	0.033	0.025	0.012	0.061	6
2	桑山１号墳	須恵器	有蓋台付壺	６世紀中頃	61.13	1.33	24.27	10.08	0.03	0.00	0.41	0.49	1.91	0.23	0.038	0.015	0.010	0.073	28
3	桑山１号墳	須恵器	杯蓋	６世紀中頃	52.20	2.11	32.89	10.40	0.02	0.01	0.37	0.19	1.52	0.18	0.020	0.014	0.010	0.080	3
4	桑山１号墳	須恵器	杯身	６世紀中頃	58.27	1.64	27.98	8.83	0.04	0.07	0.41	0.06	2.41	0.18	0.036	0.018	0.005	0.063	12
5	桑山１号墳	須恵器	杯身	６世紀中頃	55.42	1.86	30.72	9.21	0.03	0.00	0.37	0.26	1.78	0.23	0.027	0.014	0.008	0.068	10
6	桑山１号墳	須恵器	提瓶	６世紀中頃	61.20	1.49	25.77	7.16	0.03	0.00	0.58	0.07	3.33	0.23	0.038	0.019	0.009	0.065	30
7	桑山２号墳	須恵器	杯蓋	６世紀中頃	59.67	1.53	26.11	9.19	0.04	0.00	0.39	0.23	2.50	0.23	0.033	0.013	0.007	0.069	59
8	桑山２号墳	須恵器	杯身	６世紀中頃	59.74	1.21	23.40	12.90	0.03	0.00	0.09	0.26	2.03	0.22	0.023	0.012	0.000	0.104	62
9	桑山２号墳	須恵器	杯蓋	６世紀中頃	63.89	1.54	22.76	8.71	0.03	0.00	0.33	0.17	2.15	0.29	0.031	0.015	0.003	0.076	65
10	桑山２号墳	須恵器	壺	６世紀中頃	65.17	1.79	21.32	9.28	0.03	0.21	0.30	0.08	1.40	0.30	0.015	0.010	0.005	0.074	69
11	桑山３号墳箱式石棺	須恵器	杯身	６世紀中頃	56.11	1.75	29.36	10.22	0.02	0.00	0.32	0.08	1.73	0.26	0.024	0.011	0.010	0.094	86
12	桑山３号墳箱式石棺	須恵器	杯身	６世紀中頃	54.17	1.84	31.08	10.41	0.02	0.04	0.28	0.04	1.71	0.27	0.023	0.017	0.011	0.084	85
13	桑山４号墳竪穴式石室１	須恵器	杯蓋	６世紀中頃	60.88	1.56	26.15	7.73	0.02	0.00	0.43	0.33	2.55	0.23	0.030	0.014	0.005	0.062	100
14	桑山４号墳竪穴式石室１	須恵器	杯身	６世紀中頃	56.36	1.57	25.99	12.29	0.04	0.00	0.52	0.51	2.28	0.30	0.033	0.020	0.009	0.073	109
15	桑山４号墳竪穴式石室１	須恵器	杯蓋	６世紀中頃	59.59	1.65	26.02	8.98	0.05	0.00	0.55	0.26	2.49	0.27	0.035	0.022	0.009	0.083	112
16	桑山４号墳竪穴式石室２	須恵器	杯蓋	６世紀中頃	53.82	1.94	30.73	9.92	0.03	0.00	0.48	0.41	2.34	0.21	0.025	0.016	0.009	0.082	106
17	桑山４号墳竪穴式石室２	須恵器	杯蓋	６世紀中頃	53.45	1.98	31.38	10.58	0.04	0.04	0.41	0.00	1.82	0.15	0.029	0.021	0.007	0.091	110
18	桑山５号墳	須恵器	杯蓋	６世紀後半	66.89	1.76	21.98	7.24	0.03	0.00	0.15	0.00	1.49	0.31	0.023	0.008	0.004	0.108	128
19	桑山５号墳	須恵器	杯身	６世紀後半	65.58	1.85	22.91	7.67	0.04	0.00	0.17	0.00	1.37	0.30	0.017	0.009	0.002	0.087	148
20	桑山５号墳	須恵器	杯蓋	６世紀後半	67.02	1.72	22.28	6.93	0.04	0.00	0.14	0.00	1.47	0.28	0.021	0.005	0.007	0.091	123
21	桑山５号墳	須恵器	瓶	６世紀後半	60.62	1.64	25.31	8.86	0.03	0.00	0.44	0.17	2.52	0.27	0.037	0.019	0.005	0.069	180
22	桑山５号墳	須恵器	杯蓋	６世紀後半	60.82	1.60	22.89	10.42	0.04	0.00	0.61	0.38	2.85	0.25	0.032	0.019	0.009	0.082	133
23	桑山５号墳	須恵器	壺	６世紀後半	57.55	1.55	23.77	13.67	0.05	0.00	0.54	0.36	2.22	0.17	0.033	0.019	0.007	0.078	190
24	桑山５号墳	須恵器	高杯	６世紀後半	57.63	1.83	29.74	7.51	0.02	0.00	0.52	0.11	2.15	0.36	0.028	0.021	0.010	0.076	176
25	桑山５号墳	須恵器	有蓋高杯蓋	６世紀後半	60.73	1.64	25.10	8.61	0.03	0.00	0.60	0.19	2.66	0.29	0.037	0.022	0.007	0.071	160
26	桑山５号墳	須恵器	有蓋高杯	６世紀後半	60.58	1.76	24.58	9.20	0.05	0.03	0.49	0.32	2.60	0.25	0.033	0.023	0.010	0.087	163
27	桑山５号墳	須恵器	台付椀	６世紀後半	59.70	1.57	22.37	12.82	0.04	0.04	0.41	0.22	2.40	0.28	0.034	0.019	0.007	0.085	178
28	桑山５号墳	須恵器	高杯	６世紀後半	56.63	1.48	22.46	15.76	0.04	0.00	0.46	0.48	2.37	0.18	0.034	0.019	0.008	0.075	168
29	桑山５号墳	須恵器	提瓶	６世紀後半	59.71	1.64	21.40	12.11	0.03	0.04	0.96	0.43	3.33	0.19	0.037	0.025	0.009	0.087	202
30	桑山５号墳	須恵器	杯身	６世紀後半	63.13	1.58	24.75	6.84	0.03	0.00	0.55	0.36	2.39	0.24	0.032	0.024	0.009	0.068	138
31	桑山５号墳	須恵器	有蓋高杯蓋	６世紀後半	57.86	1.50	22.23	15.12	0.04	0.00	0.40	0.23	2.24	0.22	0.033	0.021	0.011	0.078	161
32	桑山１号墳	埴輪	円筒	６世紀中頃	57.77	1.95	23.28	12.30	0.02	0.14	0.35	0.52	3.18	0.33	0.037	0.020	0.004	0.103	41
33	桑山１号墳	埴輪	円筒	６世紀中頃	59.89	1.64	22.49	10.89	0.09	0.55	0.64	0.28	3.11	0.25	0.035	0.032	0.008	0.091	43
34	桑山１号墳	埴輪	円筒	６世紀中頃	54.71	1.91	26.72	12.09	0.10	0.75	0.50	0.41	2.48	0.17	0.026	0.026	0.007	0.107	36
35	桑山１号墳	埴輪	円筒	６世紀中頃	60.07	1.74	22.54	11.56	0.02	0.02	0.26	0.45	2.91	0.30	0.031	0.021	0.009	0.091	39
36	桑山１号墳	埴輪	円筒	６世紀中頃	59.10	1.67	22.99	11.14	0.07	0.58	0.55	0.78	2.72	0.24	0.032	0.035	0.009	0.095	35
37	桑山１号墳	埴輪	円筒	６世紀中頃	56.62	1.83	25.32	11.23	0.03	0.09	0.36	0.82	3.24	0.30	0.039	0.023	0.004	0.096	37
38	桑山１号墳	埴輪	石見型か	６世紀中頃	52.18	1.79	27.81	13.84	0.06	0.32	0.37	0.44	2.69	0.33	0.022	0.025	0.009	0.109	
39	桑山１号墳	埴輪	石見型か	６世紀中頃	58.62	1.78	22.33	11.88	0.07	0.40	0.38	0.59	3.47	0.32	0.044	0.024	0.011	0.098	
40	桑山１号墳	埴輪	石見型か	６世紀中頃	58.60	1.78	22.58	11.76	0.07	0.50	0.36	0.49	3.44	0.25	0.048	0.024	0.007	0.101	
41	桑山２号墳	埴輪	円筒	６世紀中頃	58.82	1.84	23.34	11.23	0.05	0.38	0.34	0.33	3.24	0.25	0.047	0.023	0.006	0.101	71
42	桑山２号墳	埴輪	石見型	６世紀中頃	57.95	1.78	22.18	13.49	0.05	0.20	0.32	0.30	3.29	0.27	0.043	0.025	0.012	0.091	79
43	桑山２号墳	埴輪	円筒	６世紀中頃	58.00	1.71	23.02	11.90	0.06	0.52	0.31	0.40	3.66	0.24	0.047	0.024	0.010	0.107	78
44	桑山２号墳	埴輪	石見型	６世紀中頃	63.37	1.75	20.40	10.23	0.02	0.20	0.19	0.50	2.92	0.27	0.032	0.015	0.008	0.095	80
45	桑山２号墳	埴輪	円筒	６世紀中頃	61.31	1.70	21.47	11.42	0.01	0.19	0.21	0.50	2.78	0.24	0.040	0.016	0.009	0.099	74
46	桑山２号墳	埴輪	円筒	６世紀中頃	58.66	1.59	24.01	11.06	0.04	0.40	0.26	0.21	3.36	0.24	0.039	0.023	0.006	0.091	73
47	桑山２号墳	埴輪	石見型	６世紀中頃	57.27	1.78	23.31	13.17	0.05	0.31	0.33	0.36	3.01	0.24	0.042	0.023	0.008	0.103	77
48	桑山３号墳	埴輪	円筒	６世紀中頃	56.79	1.72	24.17	12.33	0.09	0.56	0.57	0.52	2.84	0.24	0.036	0.029	0.007	0.106	
49	桑山３号墳	埴輪	円筒	６世紀中頃	57.80	1.78	23.88	11.42	0.05	0.31	0.47	0.35	3.46	0.29	0.048	0.024	0.004	0.103	
50	桑山３号墳	埴輪	円筒	６世紀中頃	49.86	2.11	29.75	13.95	0.04	0.00	0.30	0.48	2.95	0.38	0.028	0.021	0.010	0.129	
51	桑山５号墳	埴輪	円筒	６世紀後半	54.46	1.78	27.28	12.26	0.06	0.14	1.31	0.51	1.76	0.26	0.020	0.073	0.009	0.085	218
52	桑山５号墳	埴輪	円筒	６世紀後半	58.26	1.84	25.59	9.94	0.04	0.00	1.05	0.27	2.52	0.33	0.028	0.051	0.005	0.074	220
53	桑山５号墳	埴輪	円筒	６世紀後半	61.19	1.81	22.70	10.21	0.03	0.00	0.81	0.48	2.37	0.24	0.031	0.041	0.007	0.086	228
54	桑山５号墳	埴輪	円筒	６世紀後半	59.29	1.81	24.37	10.86	0.05	0.20	0.70	0.33	2.00	0.26	0.022	0.034	0.009	0.081	224
55	桑山５号墳	埴輪	円筒	６世紀後半	61.36	1.80	23.59	9.16	0.07	0.24	0.82	0.41	2.18	0.22	0.023	0.042	0.004	0.079	216
56	桑山５号墳	埴輪	円筒	６世紀後半	60.33	1.75	24.22	9.40	0.05	0.00	0.92	0.17	2.66	0.35	0.029	0.041	0.010	0.079	231
57	桑山５号墳	埴輪	円筒	６世紀後半	57.97	1.87	25.46	10.51	0.05	0.17	0.82	0.76	1.97	0.26	0.021	0.039	0.005	0.099	225

第４節　桑山３号墳出土人骨の観察結果の報告

岡山大学文明動態学研究所　鈴木真太郎
岡山大学理学部　山下　勝行

本節は桑山３号墳出土（岡山県古代吉備文化財センター 2020）の古人骨を観察した骨学的所見の記述である。観察は発掘を担当した岡山県古代吉備文化財センターから人骨資料を借り受けた令和２年８月から令和４年３月にかけて、岡山大学文明動態学研究所鈴木真太郎研究室において、鈴木真太郎が行った。

なお本節には桑山３号墳出土人骨と鈴木ほか（2022）が報告した桑山南５号墳出土人骨の両方の歯冠エナメル質について、令和４年１月から３月にかけて岡山大学理学部において山下が実施したストロンチウム安定同位体分析の結果報告が含まれている。

１　人骨への技術的な介入

人骨資料を借り受けた際、資料はビニールの小袋、及び新聞紙で作られた小箱に分けられており、それぞれのビニール袋には数字、石棺内外における出土地点、暫定的な分類が記載されていた。今回の観察ではこの出土コンテクストによる分類を最優先し、通常骨学的に推奨される（Bass 2005）解剖学的部位ごとの再分類は行わなかった。現在も全ての資料は出土時の状況に応じた取り上げ当時の分類を維持している。

資料の多くはすでに十分な清掃がなされた状況にあった。土壌の付着によって適切な表面の観察ができない箇所も散見されたが、それらの土壌は炭酸カルシウムを含み乾燥して硬く張り付いており、資料の損傷なく、現状よりもさらに表面を清掃することは不可能であった。空気中の二酸化炭素、水分が石灰岩と接触することで炭酸カルシウムが生成され、これが古人骨表面に付着することが知られている（cf. Botella et al. 2000）。そのため本鑑定では骨資料に水などを用いた清掃は行っていない。一方、歯牙資料については70%アルコールと精製水を混ぜた溶液で湿らせた柔らかい歯ブラシでエナメル質表面のみ清掃を行った。骨資料と同じ硬質化した土壌の付着を取り除くことはできないが、軽微な砂埃等を取り除くことができ、より明瞭な観察表面を得ることができた。接着剤などを用いた修復や復元は行っていない。

２　被葬者数

遺存が確認されている骨資料、歯牙資料の中で重複は確認されず、単一の個体である可能性が高い。

３　基礎的ライフデータの取得

あらゆる考古人骨研究において最初のステップは基礎的ライフデータ（性別及び死亡時年齢）の取得である。人はその所属する社会において性別や年齢の影響を受けながらその社会的な役割を果たしていく（Díaz-Andreu et al.2005）。本鑑定ではまず骨片の大きさと乳歯の存在に基づいて、資料が小児に帰属する人骨であることを確認した（White et al. 2011）。

小児人骨である場合、死亡時年齢は主に歯牙の萌出状況（Ubelaker 1999）、長骨の骨端骨幹や椎骨における椎体椎弓などの癒合状況、あるいは長骨骨幹の長さの計測（Schaefer et al. 2009）などによってさらに細かに推定することが可能である。

性別の同定については、小児人骨の巨視骨学鑑定による性別の同定はできないというのが一般的な見解である。しかし、腸骨や下顎骨の形状による性別同定の方法論が提起されたこともある（Schutkowski 1993）。

死亡時年齢：２歳～４歳

歯牙の萌出状況から２歳から４歳程度である。これは椎骨の椎弓と椎体の癒合状況とも矛盾しない。

性別：不明

小児人骨における性別判定の基準となりうる腸骨や下顎骨の断片が遺存しているが、状態が悪く、性別の判定は行うことはできなかった。

４　骨資料の評価基準

骨資料は肉眼、ルーペ、実体顕微鏡を用いて観察、評価した。全ての評価は定性的である。正確な計測が可能な状態で完形を保っている資料は１点もなく、定量的な評価は行っていない。

５　骨資料の評価結果

資料は全体的に遺存状態が悪い。それぞれの資料の形態学的な特徴は辛うじて維持されており、概ね安定した状態にある。しかし、表面の遺存状態が特に優れない。全体的に前述のような炭酸カルシウムを含むと思われる硬く乾燥した土壌の付着や黒色の変色が認められている（写真 39）。黒色の変色は火葬等による（焼骨）場合もあるが（cf. Fairgrieve 2007）、温度の変化による段階的な色調差が認められておらず、今回の場合は副葬品である鉄剣の腐食及び錆と近い位置にあった土壌との接触に起因する自然現象による変色と考えられる（Dupras & Schultz 2013）。変色は骨格系全体にわたって認められているため、錆を含んだ土壌は埋葬の過程において石棺内の全体に広がっていた可能性が考えられる。

このような遺存状況下において、前頭骨の右眼窩（資料番号３）に比較的軽度のクリブラ・オルビタリア（写真 40）が認められたことは特筆に値する。クリブラ・オルビタリアは眼窩に篩のような小孔を産む、特に小児に多く認められる病変である。遺存状態に優れない表面状態ではあるが、眼窩面という限定した部位に他の部位には見られない小孔が密集して現れており、クリブラ・オルビタリアの判断は妥当だと考えられる。これは主に脳頭蓋外板に現れるポロティック・ハイパーオストシスの前兆としても考えられており（Mann and Hunt 2012）、原因論として重篤な貧血をもたらす鉄分、ビタミン、葉酸などの慢性的な栄養不良、断続的な下痢を伴うような感染症、寄生虫の寄生など、様々な要因があると考えられている（Ortner 2003; Walker et al. 2009）。左眼窩は遺存していない。

６　歯牙資料の評価基準

歯牙資料の評価基準については鈴木ほか（2022）が詳述した方法論に従った。

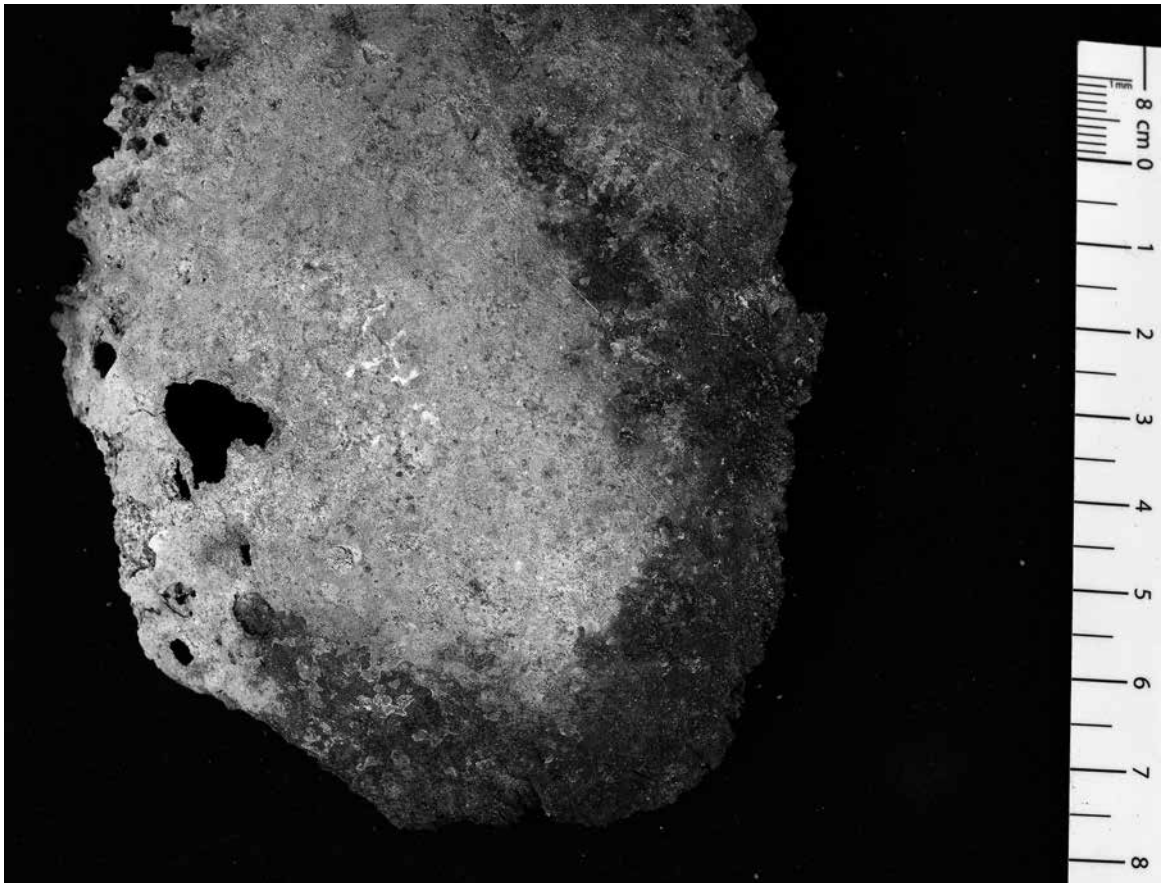


写真 39　右頭頂骨（資料番号１）に見られる黒色の変色

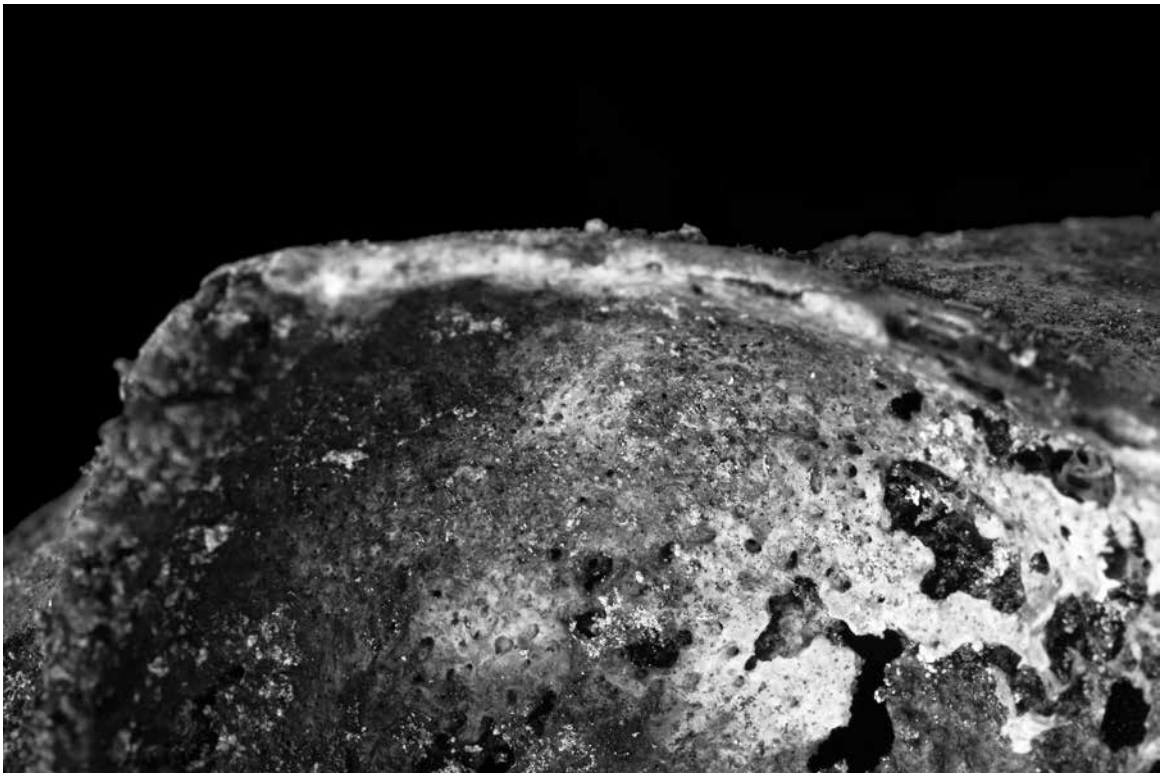


写真 40　右眼窩面に認められた軽度のクリブラ・オルビタリア

７　歯牙資料の評価結果

歯牙資料の評価結果を以下の第９表および第 10 表にまとめた。下顎骨（資料番号６）の歯槽内に遺存していたものを除き、全て遊離歯である。全体的に遺存状態が悪く、エナメル質減形成、特に形成途中の永久歯に関する評価は暫定的である。

下顎骨（資料番号６）左右中切歯の咬合縁に、犬歯、大臼歯と比べて不均衡なエナメル質の後退が認められた（第９表、写真 41)。犬歯、大臼歯では咬頭の損耗すら認められていないが、切歯ではセメント質が完全に露出しており、後退は極めて局地的である。骨格系全体に散見される炭酸カルシウムを含んだ硬い土壌の付着が後退したエナメル質の縁にも付着しているため、死後の自然現象として破損したものではなく、生前の咬耗、あるいは破折によるものと考えられる。

同様の不均衡なエナメル質の後退は、石棺内で取り上げられた上顎切歯４点（資料番号 30）にも認められた（第９表、写真 42、写真 43)。特に側切歯では咬合縁の一部だけ（内側）が不自然に後退し

第９表　桑山３号墳出土の小児人骨における歯牙資料（乳歯）

rm^2	rm^1	rc^1	ri^2	ri^1	li^1	li^2	lc^1	lm^1	lm^2	歯種
			有？	有？	有？	有？				生破
A	A	B	D	C-D	C	D		-	A	損耗
0	0	0	0	0	0	0		-	0	歯石
0	-	0	0	0	0	0		-	0	減形
0	0	0	0	0	0	0		-	0	う蝕
8	10	7	30	30	30	30		9	12	取上
6	6	6	6	6	6	6	11	14	13	取上
0	0	0	0	0	0	0	0	-	0	う蝕
0	0	0.5?	0	0	0	0	0	-	0	減形
0	0	0	0	0	0	0	0	-	0	歯石
A	A	B	A	E	D	A	A	B?	A	損耗
				有？	有？					生破
rm_2	rm_1	rc_1	ri_2	ri_1	li_1	li_2	lc_1	lm_1	lm_2	歯種

第 10 表　桑山３号墳出土の小児人骨における歯牙資料（形成途中の永久歯歯冠）

RM^3	RM^2	RM^1	RP^2	RP^1	RC^1	RI^2	RI^1	LI^1	LI^2	LC^1	LP^1	LP^2	LM^1	LM^2	LM^3	歯種
		0				0	0	0	0	0			0			減形
		16				26	25	17	18	26			19			取上
		6			6	6？	6？	15		26			20			取上
								0		0			0			減形
RM_3	RM_2	RM_1	RP_2	RP_1	RC_1	RI_2	RI_1	LI_1	LI_2	LC_1	LP_1	LP_2	LM_1	LM_2	LM_3	歯種

略語表記

取上＝発掘現場における取り上げ位置記録情報、以下の詳細な遺存状況に対応
減形＝エナメル質減形成
生破＝生前の出来事に由来すると思われるエナメル質の破損
Ｒ，r= 右側歯列、L, l= 左側歯列
Ｉ，i= 切歯、Ｃ，c= 犬歯、Ｐ＝小臼歯、Ｍ，m= 大臼歯
上付き数字＝上顎歯列、下付き数字＝下顎歯列
マイナス記号（-）は遺存状況により明確な評価が行えなかったことを示す。

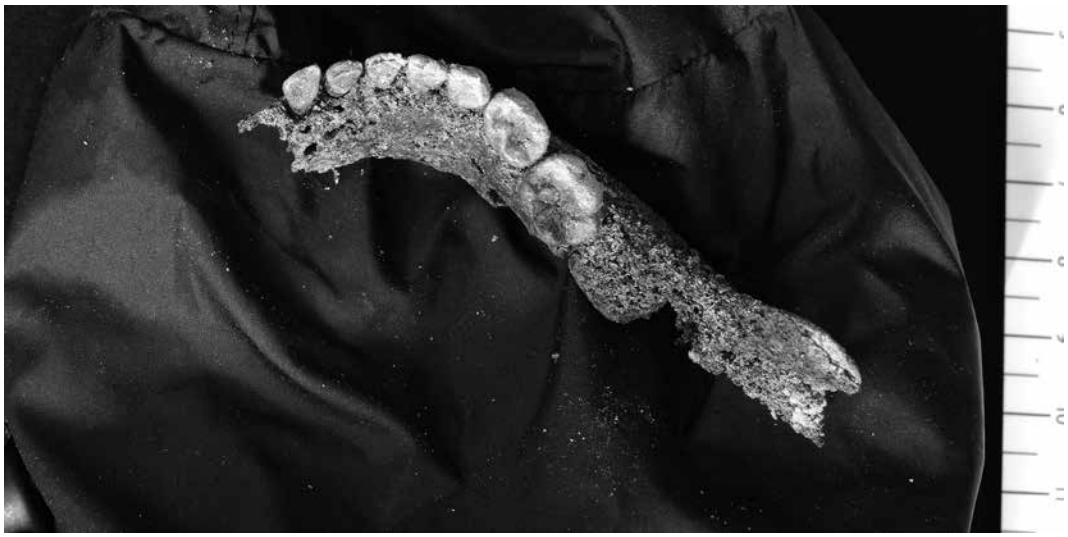


写真 41　下顎骨歯列



写真 42　上顎左右切歯（唇面）



写真 43　上顎左右切歯（舌面）

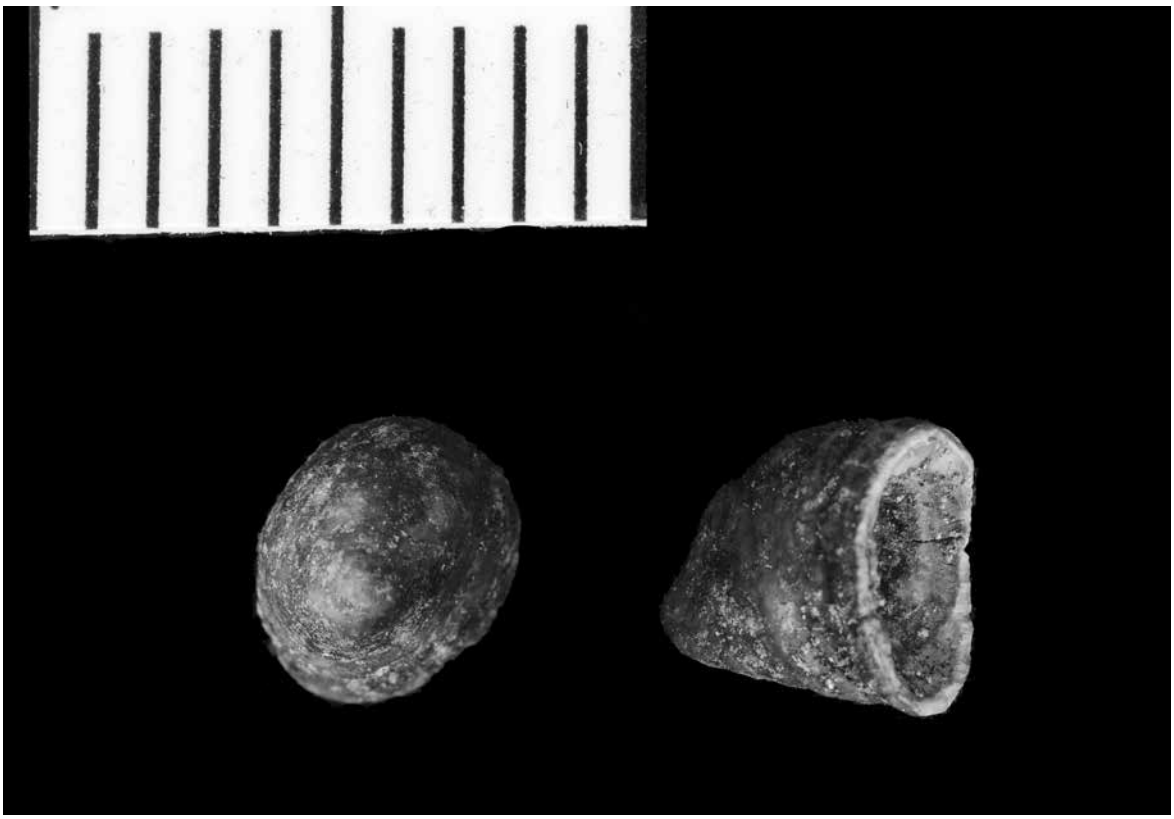


写真 44　過剰歯（右は咬合面、左は側面及び歯根側である。）

ている。後退箇所は縁が剥がれて白い色調を呈している部分もあるが、特に左側切歯では縁にも全体と同様の黒い変色が認められており、このエナメル質の後退が死後の自然現象によるものではなく、不均衡な咬耗や破折等、生前の出来事によるものであることが示唆される。

資料番号 30 では、上顎切歯４点とともに過剰歯が１点確認された（写真 44）。形成途中の永久歯歯冠であり、1.0 程度のエナメル質減形成が認められる。Duncan（2009）のまとめた世界規模のリファレンスによると人類集団における過剰歯の発生率は 0.1%から 3.6%程度と低く、一般的に乳歯列よりも永久歯列、女性よりも男性、奥歯よりも前歯、複数よりも単独、でそれぞれ発生しやすいと言われている。本個体で確認されたケースは過剰歯としては一般的なものと言える。

８　分類毎の詳細な遺存状況

以下は資料番号による分類ごとの詳細な遺存状況の記述である。

１　右頭頂骨である。ブレグマ周辺部を欠くが完形に近い。一方で表面の遺存状態は悪く、特に欠損箇所の縁に当たる部分を中心に黒い変色が認められる。

２　右頬骨と右上顎骨の一部である。頬骨は完形に近い。一方で表面の遺存状態は悪く、全体的に黒く変色している。

３　前頭骨の一部（右側）である。右側のみほぼ完形であるが、表面の遺存状態は悪く、冠状縫合に沿うように黒い変色が見られる。右眼窩にはクリブラ・オルビタリアが認められた。

４　顔面頭蓋の一部（上顎骨）と思われる。黒く変色しており、表面の遺存状態は悪い。

５　１cm 以下の骨片が多数、小石や現生の木片と混在しており、その中でも骨学的に同定が可能だっ

たものは以下の通りである。１）左頭頂骨の一部、特にラムダ周辺部。全体的に遺存状態が悪く、ラムダ状縫合に沿うように黒い変色が認められる。２）後頭骨の一部。

6　下顎骨の一部である。オトガイ隆起周辺から右筋突起にかけて遺存している。右歯列の乳歯５本と左の切歯２本が歯槽内に遺存しているが（第９表)、全体的に遺存状態は悪く、下顎体と歯槽内の歯牙エナメル質も全体的に黒色の変色を呈している。下顎体の破損部からは形成途中の永久歯（右第１大臼歯と犬歯）を確認することができる。右下顎角周辺に青緑色をしたビーズが共伴している（写真 45)。

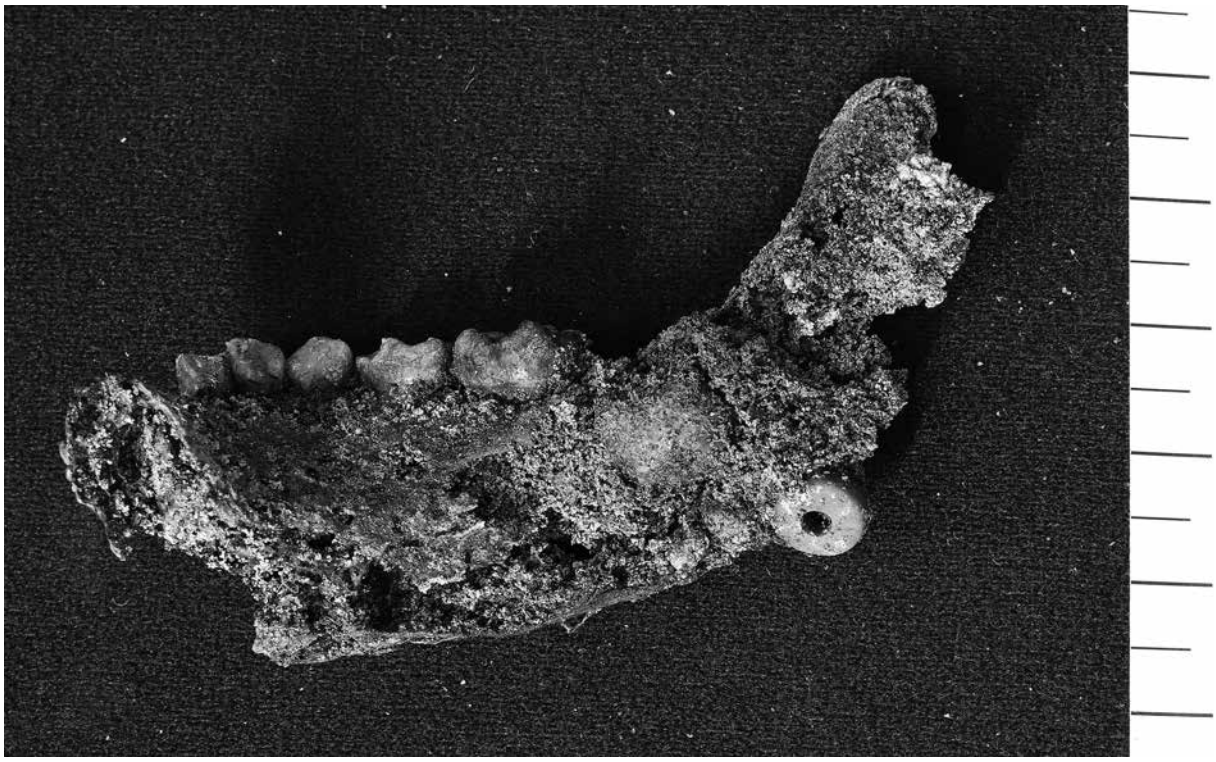


写真 45　ビーズの原位置（下顎骨を右内側面から撮影。写真撮影時は歯槽の状態が不安定なため左の切歯２本を外している）

7　右上顎犬歯（乳歯）である。

8　右上顎第２大臼歯（乳歯）である。

9　左上顎第１大臼歯（乳歯）の一部である。

10　右上顎第１大臼歯（乳歯）である。

11　左下顎犬歯（乳歯）である。

12　左上顎第２大臼歯（乳歯）である。

13　左下顎第２大臼歯（乳歯）である。

14　左下顎第１大臼歯（乳歯）の一部である。

15　左下顎中切歯（永久歯）の形成途中にある歯冠である。

16　右上顎第１大臼歯（永久歯）の形成途中にある歯冠である。

17　左上顎中切歯（永久歯）の形成途中にある歯冠である。

18　左上顎側切歯（永久歯）の形成途中にある歯冠である。

19　左上顎第１大臼歯（永久歯）の形成途中にある歯冠である。

20　左下顎第１大臼歯（永久歯）の形成途中にある歯冠である。ストロンチウム安定同位体の分析を行った。

21　遺存状態が極めて悪く、骨片であるかどうか確認することができない。２～４歳児の椎骨としては若干大きいようにも見える。

22　左腸骨の一部である。耳状面上部から弓状線､大座骨切痕の一部が遺存している。遺存状態が悪く、性別の判定に用いることはできない。全体的に黒い変色が認められる。

23　指骨の断片である。基節骨と中節骨が含まれるが左右の同定はできない。全体的に黒い変色が認められる。

24　顔面頭蓋の一部である。歯槽が認められるが、歯牙は遺存していない。全体的に黒い変色が認められる。

25　多様な骨片と歯牙である。肋骨片、肩甲棘を中心とした肩甲骨片、右上顎中切歯（永久歯）が含まれている。全体的に黒い変色が認められる。

26　以下の歯牙が含まれている。エナメル質を含み、全体的に黒い変色が認められる。

（ア）右上顎側切歯（永久歯）の形成途中にある歯冠

（イ）左上顎犬歯（永久歯）の形成途中にある歯冠

（ウ）左下顎犬歯（永久歯）の形成途中にある歯冠

27　椎骨、おそらく頸椎、の一部である。椎弓から棘突起の一部が遺存している。

28　多様な骨片である。四肢骨の断片４片、肋骨片１片、及び同定不能な骨片１片が含まれている。

29　頭蓋底の一部である。側頭骨岩様部の一部が遺存している。全体的に黒い変色が認められる。

30　以下の歯牙が含まれている。エナメル質を含み、全体的に黒い変色が認められる。

（ア）右上顎側切歯（乳歯）

（イ）右上顎中切歯（乳歯）

（ウ）左上顎中切歯（乳歯）

（エ）左上顎側切歯（乳歯）

（オ）過剰歯（永久歯）の形成途中にある歯冠

31　脳頭蓋の一部である。全体的に黒い変色が認められる。

32　腰椎の断片である。椎弓片４片、椎体片４片が遺存している。さらに椎弓と椎体が結合している状態のものが１片遺存しているが、状態が悪く、炭酸カルシウムを含んだ土壌の付着物で結合しているのか、あるいは成長の過程として既に癒合しているのか、明確に判別することができない。全体的に黒い変色が認められる。

33　腰椎椎弓の断片である。全体的に黒い変色が認められる。

34　岩石の一部である。

35　岩石の一部である。

36　岩石の一部である。

37　砂礫である。金属（錆？）片と思われるものが共伴している。

第 11 表　桑山３号墳分析資料一覧

資料番号	本書第 112 図掲載番号	調査時の注記内容等（※）	日付	調査時の備考等
1	頭１	頭骨１		頭骨
2	頭２	頭骨２	200117	頭骨
3	頭３	頭骨３	200117	頭骨
4	頭４	頭骨４	200117	頭骨
5	後頭部痕跡	後頭部痕跡		頭骨？
6	顎	顎骨	200117	顎骨
7	H1	石棺内　歯１	200109	歯
8	H2	石棺内　歯２	200109	歯
9	H3	石棺内　歯３	200109	歯
10	H4	石棺内　歯４	200109	歯
11	H5	石棺内　歯５	200109	歯
12	H6	石棺内　歯６	200117	歯
13	H7	石棺内　歯７	200117	歯
14	H8	石棺内　歯８	200120	歯
15	H9	石棺内　歯９	200120	歯
16	H10	石棺内　歯 10	200120	歯
17	H11	石棺内　歯 11	200120	歯
18	H12	石棺内　歯 12	200120	歯
19	H13	石棺内　歯 13	200121	歯
20	H14	石棺内　歯 14	200121	歯
21	骨片	石棺内　骨片（椎骨）	200121	
22	B1	石棺内　骨１	200109	右足～腰？
23		石棺内　骨片　X=0.049, Y=-0.905, Z=134.061	191216	骨片多数
24		石棺内　頭骨（アゴの一部か？）X=-0.02, Y=-0.86 付近	200108	
25		石棺内　骨片　X=-0.011, Y=-0.852, Z=134.077	200109	
26		石棺内　頭蓋骨付近　歯？	200109	３点
27		石棺内　骨片　X=-0.037, Y=-0.941, Z=134.057	200109	
28		石棺内　骨片　X=-0.017, Y=-0.927, Z=134.059	200109	
29		石棺内　骨片　頭部の南側　玉の付近	200120	
30		石棺内　歯　頭部痕跡中から出土	200121	５点
31		石棺　流入土中　頭部付近	191210	骨片多数
32		石棺　流入土中　中央付近	191210	骨片多数
33		石棺　骨片　X=-0.059, Y=-1.076,　Z=134.052	191211	骨片多数
34		X=0.062, Y=-0.749, Z=134.056	191213	骨片？
35		X=0.055, Y=-0.965, Z=134.059	191211	骨片？
36		X=-0.009, Y=-0.987, Z=134.036	191211	骨片？
37		X=-0.140, Y=-1.047, Z=134.41	191212	骨片？

※　座標値は第１主体部固有のものである。Ｘ軸は箱式石棺の縦断ラインであり、第 110 図のＡ－Ａ’ラインを０値として、西側が“＋”、東側が“－”値となる。Ｙ軸は同じく横断ラインであり、第 110 図Ｃ－Ｃ’ラインが Ｙ＝ -1.0 で、北に向かって -0.9、-0.8 となっていく。Ｚは標高である。

９　注目すべき論点

以下は今回の巨視骨学的観察に基づく桑山３号墳出土小児人骨のバイオグラフィーに関わるいくつかの解釈である。これらは現状得られている情報からの予察的かつ暫定的な解釈であり、今後の更なる検証を必要とするものである。

小児の死因について

一般的に古人骨の研究において明確な死因を同定することは困難である。しかし、今回のケースでは一定の解釈を試みる。まず本個体では萌出した乳歯にエナメル質減形成がほとんど認められていない。少なくとも遺存状態の悪い歯牙表面でも識別が可能なほどに歯牙形態に影響を及ぼすような病的な程度の減形成は存在しない。エナメル質減形成の原因論は複雑で、要因は多様を極めるので(Goodman & Armelagos 1985; Goodman et al. 1987)、この解釈を安易に進めることはできない。しかし、定住農耕を基本とする人間集団では 100％近い発生率ともいわれる（Méndez et al. 2009）エナメル質減形成が存在しないという事実は、やはりこの小児が環境ストレスから十分な文化的バッファで守られ

る存在であったことを意味していると考えられる。これは小児が３歳前後という年齢でありながら、鉄剣等の豪奢な副葬品を伴って築造された古墳に埋葬されているということとも矛盾しない解釈である。

このようないわば特権階級にある個体では、やはり右眼窩面に認められたクリブラ・オルビタリアが特筆に値する。小児が生前享受したであろう特権には栄養バランスの取れた良好な食生活が含まれていた可能性が高く、乳歯エナメル質減形成の不在もこれと同調して、授乳期に授乳をしていた女性の栄養状態も良好であった可能性が高い。これを考慮すると、小児にクリブラ・オルビタリアを発生させた重篤な鉄欠乏性あるいは巨赤芽球性の貧血は、一般的にクリブラ・オルビタリアと関連づけられることの多い慢性的な栄養不足によるものというよりは、下痢を伴うような感染症、あるいは寄生虫の寄生など、急性かつ深刻な外的ストレスによるものと言える。(cf. Walker et al. 2009)。感染症あるいは寄生虫の寄生が鉄分やビタミンの急激な喪失によって小児を苛んだと思われ、しかし、それまで健康だった幼い肉体は軽度のクリブラ・オルビタリアを発症するに至るまで、このストレスに耐えることができた可能性が高い。だが、やはりそれ以上の発現（より重度のクリブラ・オルビタリアや外板のポロティック・ハイパーオストシス）には及ばず（cf. Wood et al. 1992)、やがて小児は力尽きたと考えられる。

一方で、小児の死亡時期に現在進行形で形成途中にあった永久歯、特に形成時期が遅く概ね２歳頃に形成が始まる小臼歯には、この急激なストレスが深刻なエナメル質減形成として記録されているはずである（cf. Hillson 2019)。しかし、本個体には小臼歯歯冠が遺存しておらず、その他の永久歯も表面の状態が悪く、明瞭な評価ができていない。唯一、形成中の過剰歯だけが永久歯冠として比較的明瞭な表面状態を維持しており、ここにはエナメル質減形成が認められている（写真 44)。これを死亡直前まで小児を苦しめた感染症 / 寄生虫に関連したものと考えても、とりわけ不自然ではないだろう。

上下歯列の切歯に見られるエナメル質の後退について

上下切歯に認められた不均衡なエナメル質の後退も特筆に値する所見である。小児のバイオグラフィーに関わる可能性がある（cf.Belcastro et al. 2018; Grimoud and Gibbom 2017)。表面の状態から生前の出来事に由来する後退の可能性が高いが、これが咬耗に由来するものなのか、あるいは破折であるかの判別が明確でない。

咬耗と捉えた場合、１）上下切歯が生えそろう１歳（±４ヶ月程度）頃から集中して硬い食料を摂取し、犬歯から大臼歯が萌出し始める１歳半（±６ヶ月程度）から急に柔らかい食料に切り替わるという状況がまず考えられる。これは離乳初期に急に硬い食料を与える一方で、離乳が進んだ段階では柔らかい食材を与えていたということになる。食料供給が安定しない社会、状況ならばあり得ないことではないが、小児が特権階級にあり、栄養状態も良好であったことも考えると、不自然な説明と言える。次に考えられるのは、２）最長で６ヶ月から２歳程度までの切歯だけが萌出している時期に、なんらかの文化的な習慣が存在した可能性である。歯固めのような習慣があり、一定の期間継続して何か硬いもの（歯固めの石？）を口に入れていたという説明は、個体の社会的背景からもある程度蓋然性が高いように思われる。

また、こういったエナメル質の後退は外傷による破折と捉えることも可能である。Soares Ferreira (et al. 2009) がまとめた近年の歯科学分野の統計によると、世界中から 10%から 35%程度の乳歯

外傷発生率が報告されており、外傷自体はそれほど珍しい事象ではない。２歳から５歳程度までが破折を含んだ乳歯外傷発生のピークとされているため、本個体の２－４歳という推定死亡時年齢とも矛盾しない。この場合、現生資料ではこういった外傷歯を３）小児への虐待（暴力）と関連するものとしてあげられることもある(伊藤 2018)。しかし､古墳に埋葬される特権階級の小児という観点からは、むしろ４）生前の小児の転倒など事故的破折、と考える方が自然であろう。子供は転倒時に咄嗟に手をつくことができないため、指などを咥えて歯を突き出すような状態で転倒すると、乳切歯は特に外傷を受けやすいと言われている。

最後に、５）歯固め等の習慣があり、その過程で転倒等が起き、そこから不自然な咬耗につながった２）と４）を組み合わせた説明も考えられる。いずれにせよ、これら全ての解釈には、日本の吉備地方、古墳時代という地域、時代に即したリファレンスと照らし合わせた更なる検証が必要である。

10　ストロンチウム安定同位体分析

飲食物を通じて人体に蓄積されたストロンチウムの同位体比を計測し、出土地の基準値と比較することで、古人骨の移民歴を推定することが可能である (ex. Price et al. 2014; Suzuki et al. 2020)。今回は鈴木ほか（2022）が報告した桑山南５号墳出土の男性成人人骨と本節で記述した桑山３号墳出土の小児人骨について、岡山大学理学部の山下が同研究室において分析を行った。

分析試料

分析試料は主に各個体の遺存状況に応じて鈴木が選定した。骨資料では続成作用による土壌からの汚染が危惧されるため、今回は状態の安定したエナメル質のみを分析対象とした。



写真 46　桑山３号墳小児人骨左下顎第１大臼歯

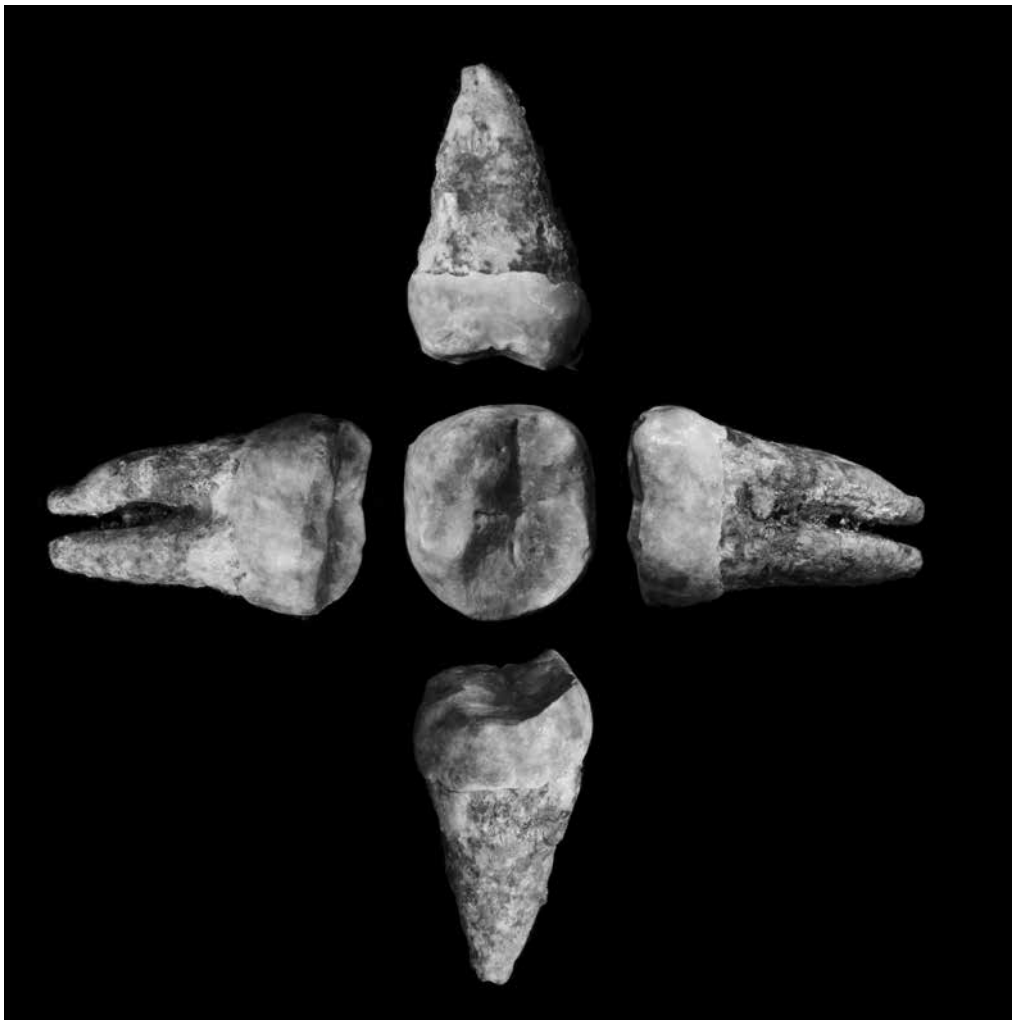


写真 47　桑山南５号墳男性成人人骨左下顎第２大臼歯

桑山３号墳小児人骨：左下顎第１大臼歯（形成途中にある永久歯歯冠）1.05g　（写真 46）

第１大臼歯のエナメル質は出生から３歳程度にかけて形成（Ubelaker 1999）。

桑山南５号墳男性成人人骨：左下顎第２大臼歯　1.71g（写真 47）

第２大臼歯のエナメル質は３歳から７歳程度にかけて形成（Ubelaker 1999）。

分析方法

分析試料は岡山大学理学部のクリーンルームで酸分解と Sr の分離を行った。7mL テフロンバイアルに秤量した試料に、超純水 2.4mL と濃硝酸 1.6mL を加え、ホットプレートで加熱して分解した。硝酸を蒸発乾固させたのちに、2N HCl に溶かし、陽イオン交換樹脂に２回通すことで Sr を分離・精製した。分離した Sr は岡山大学の表面電離型質量分析装置で Sr の同位体分析を行った。試料と並行して測定した NIST987 スタンダードの値は $^{87}Sr/^{86}Sr=0.710216 \pm 0.000020$ であった。

分析結果

桑山３号墳小児人骨：$^{87}Sr/^{86}Sr=0.708122 \pm 0.000013$

桑山南５号墳男性成人人骨：$^{87}Sr/^{86}Sr=0.708272 \pm 0.000010$

暫定的な解釈

古人骨の計測値と比較するための出土地基準値は、一般的に同地域で利用可能な生物学的試料（在

地の小動物や貝類等)から得られた値を参照することが推奨されている (Price et al. 2002)。しかし、桑山古墳群が所在する地域では小動物等から得られた基準値が存在しないため、今回は特に地下水から得られている地質学的な基準値 (0.7072-0.7080) を参照した (Nakano et al. 2020)。結果、今回の計測値と地質学的な基準値の間に大きな乖離は認められず、また両個体の計測値が近似していることからも、桑山南５号墳出土男性人骨、桑山３号墳出土小児人骨、ともに桑山古墳群周辺の生まれである可能性が高い。

引用文献

岡山県古代吉備文化財センター 2020「桑山古墳群の発掘調査」『考古学研究』67(3)：85-87.

伊藤憲春 2018「歯から虐待を考える―歯科医が取り組む虐待防止―」『小児保健研究』77 (2)：127-130.

鈴木真太郎・若山聡良 2022「桑山南５号墳出土人骨の観察結果の報告」『桑山南古墳群・細畝古墳群』：159-173

Bass, William M. 2005 *Human Osteology: A Laboratory and Field Manual. 5th. ed.* Special Publication No. 2 of the Missouri Archaeological Society, Columbia, Missouri.

Belcastro, Maria Giovanna, Valentina Mariotti, Alessandro Riga, Benedetta Bonfiglioli, and David W. Frayer 2018 Tooth Fractures in the Krapina Neandertals. *Journal of Human Evolution* 123: 96-108

Botella, Miguel, Inmaculada Alemán, and Sylvia A. Jiménez 2000 *Los huesos humanos. Manipulaciones y alteraciones.* Ediciones Bellaterra, Barcelona.

Díaz-Andreu, Margarita, Sam Lucy, Staša Babić, and David N. Edwards (edit) 2005 *The Archaeology of Identity. Approaches to Gender, Age, Status, Ethnicity and Religion.* Routledge, New York.

Dupras, Tosha L., and John J. Schultz 2013 Taphonomic Bone Staining and Color Changes in Forensic Contexts. In *Manual of Forensic Taphonomy 1st. Edit,* edited by James Pokines and Steven A. Symes, pp. 315-340. CRC Press, Boca Raton.

Duncan, William N.2009 Supernumerary Teeth from Two Mesoamerican Archaeological Contexts. *Dental Anthropology* 22(2):39-46.

Goodman, Alan H., and George J. Armelagos 1985 Factors Affecting the Distribution of Enamel Hypoplasia within the Human Permanent Dentition. *American Journal of Physical Anthropology* 68:479-493.

Goodman, Alan H., Lindsay H. Allen, Gabriela P. Hernández, Alicia Amador, Luis V. Arriola, Adolfo Chávez, and Gretel H. Pelto 1987 Prevalecence and Age at Development of Enamel Hypoplasias in Mexican Children. *American Journal of Physical Anthropology* 72:7-19.

Fairgrieve, Scott I. 2007 *Forensic Cremation Recovery and Analysis.* CRC Press, Boca Raton.

Grimoud, Anne-Marie, and Victoria E. Gibbon 2017 Dental Dear Quantity and Direction in Chalcolithic and Medieval Populations from Southwest France. *HOMO - Journal of Comparative Human Biology* 68: 1 - 9

Hillson, Simon 2019 Dental Pathology. In *Biological Anthropology of the Human Skeleton. 3rd. Edit.,* edited by M. Anne. Katzenberg and Anne. L. Grauer, pp. 189-224. John Wiley & Sons, Inc., Hoboken.

Mann, Robert W., and David R. Hunt 2012 *Photographic Regional Atlas of Bone Disease. A Guide to Pathologic and Normal Variation in the Human Skeleton, 3rd. Edit.* Charles C. Thomas Publisher, ltd., Springfield.

Méndez Collí, Christian Angélica, Thelma Sierra Sosa, Vera Tiesler, and Andrea Cucina 2009 Linear Enamel Hypoplasia at Xcambó, Yucatán, During the Maya Classic Period: An Evaluation of Coastal Marshland Impact on Ancient Human Populations. *HOMO* 60:343-358.

Nakano Takanori, Katsuyuki Yamashita, Atsushi, Soichiro Kusaka, and Yuh Saitoh 2020 Geographic

Variation of Sr and S Isotope Ratios in Bottled Waters in Japan and Sources of Sr and S. *Science of The Total Environment* 704:135449 (doi.org/10.1016/j.scitotenv.2019.135449).

Ortner, Donald J. 2003 *Identification of Pathological Conditions in Human Skeletal Remains, 2nd. Edit.* Smithsonian Institution Press, Washington, D.C.

Price, T. Douglas, James. H. Burton, and R. Alex Bentley 2002 The Characterization of Biologically Available Strontium Isotope Ratios for the Study of Prehistoric Migration. *Archaeometry* 44(1):117-135.

Price, T. Douglas, Seiichi Nakamura, Shintaro Suzuki, James H. Burton, and Vera Tiesler 2014 New Isotope Data on Mobility at Classic Maya Copan, Honduras. *Journal of Anthropological Archaeology* 36:32-47.

Schaefer, Maureen, Sue Black, and Louise Scheuer 2009 *Juvenile Osteology. A Laboratory and Field Manual.* Academic Press, Amsterdam.

Schutkowski, Holger 1993 Sex Determination of Infant and Juvenile Skeletons: I. Morphognostic Features. *American Journal of Physical Anthropology* 90(2):199-205.

Soares Ferreira, Jainara Maria, Ednara Mércia Fernandes de Andrade, Cíntia Regina Tornisiello Katz, and Aronita Rosenblatt 2009 Prevalence of dental trauma in deciduous teeth of Brazilian children. *Dental Traumatology* 25:219-223.

Suzuki, Shintaro, Seiichi Nakamura, and T. Douglas Price 2020 Isotopic Proveniencing at Classic Copan and in the Southern Periphery of the Maya Area: A New Perspective on the Multi-Ethnic Scenery. *Journal of Anthropological Archaeology* 60:101228. (DOI: 10.1016/j.jaa. 2020.101228).

Ubelaker, Douglas H. 1999 *Human Skeletal Remains: Excavation, Analysis, Interpretation, 3rd. Edit.* Taraxacum, Washington, DC.

Walker, Phillip L., Rhonda R. Bathurst, Rebecca Richman, Thor Gjerdrum, and Valerie A. Andrushko 2009 The Causes of Porotic Hyperostosis and Cribra Orbitalia: A Reappraisal of the Iron-Deficiency-Anemia Hypothesis. *American Journal of Physical Anthropology* 139:109-125,

White, Tim D., Michael T. Black, and Pieter A. Folkens 2011 *Human Osteology, 3rd. edit.* Academic Press, San Diego.

Wood, James W., George R. Milner, Henry C. Harpending, and Kenneth M. Weiss 1992 *The Osteological Paradox.* Current Anthropology 33(4):343-370.

第５節　考古人骨における歯石残存デンプン粒の分析

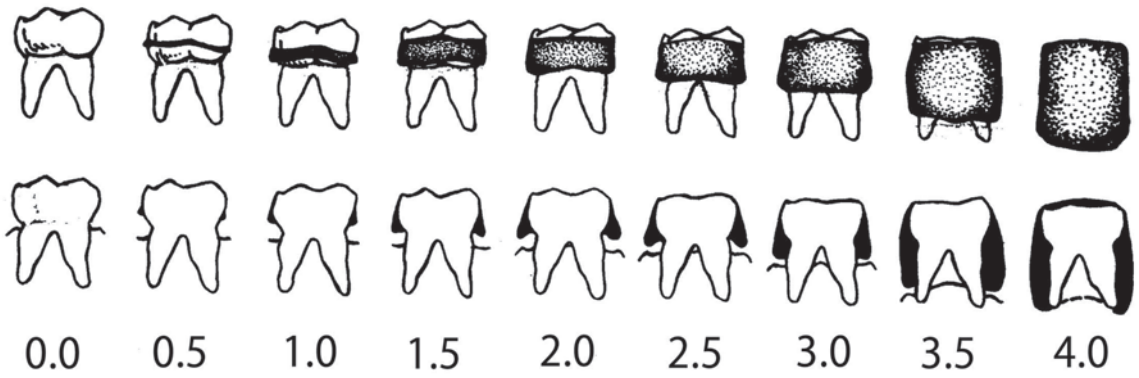
岡山大学社会文化科学研究科　岩本　紗采
岡山大学文明動態学研究所　鈴木真太郎

本節は鈴木ほか（2022）が報告した桑山南５号墳出土人骨から採取した歯石について、特に海外の先行研究で実績のある試薬を使った方法論に則ってスライドを作製し、偏光顕微鏡で観察を行った所見の記述である。古人骨の歯列から得られる歯石を偏光顕微鏡で観察し、歯石に封入されていたデンプン粒の像を分析すると、その個体が生前に摂取した植物性食料が推定できることが知られている（cf. Henry et al. 2009, 2011; Mariotti et al. 2017; 渋谷 2019a,b; 渋谷ほか 2018; Mariotti 2018; D’Agostino et al. 2021）。国内資料での研究例は少なく（下野ほか 2014 Shibutani et al. 2022）、分析のプロセスも確立されていない研究であったが、本研究では国内でほぼ例のなかった歯石残存デンプン粒を複数検出した。

また本節では桑山南５号墳出土人骨との比較検討のため、合わせて観察した飯盛山東１号墳出土人骨（岡山大学考古学研究室 2021）と富田村貝塚出土人骨（岡山理科大学所蔵）の分析結果もあわせて報告する。研究は令和３年８月から令和４年３月にかけて、岡山大学文明動態学研究所鈴木真太郎研究室において、岩本及び鈴木が行った。

１　分析資料

岩本が各個体の遺存している全ての歯牙について歯石付着状況を巨視的に評価した。Tiesler の定めた基準（第 166 図）に基づいて一定量以上の付着が見られた場合に、歯科用キュレットを用いてアルミホイルに歯石を採取した。なお複数の歯牙から歯石が採取できた場合も、ごく微量な分量であることを踏まえ、個体ごとに採取歯石をまとめた上で分析を行った。これは先行研究でも一般的な判断である（cf. Mariotti et al. 2017）。なお個体ごとにまとめられた歯石試料の重量は全ての個体において 0.01 グラム以下であった。



第 166 図　古人骨における歯石の評価基準（V. Tiesler 提供）

桑山南５号墳出土人骨（古墳時代後期）（津山市平福・高尾）（尾上 2018a, b; 尾上ほか 2020; 岡山県古代吉備文化財センター 2020）: 若年（35 歳以下）男性

性別、死亡時年齢、歯石以外の歯牙評価については、鈴木ほか（2022）の報告を参考にした。

第 12 表　桑山南５号墳出土人骨の歯牙資料遺存状況と歯石の付着状況（網掛けの歯牙から歯石を採取）

RM^3	RM^2	RM^1	RP^2	RP^1	RC^1	RI^2	RI^1	LI^1	LI^2	LC^1	LP^1	LP^2	LM^1	LM^2	LM^3	歯種
0.0		0.25	0.25	0.0	0.0		0.5									歯石
	0.25	0.25	0.0	0.0	0.0	0.25	0.0	1.25	0.25	0.25	0.25	0.25	0.75	0.75		歯石
RM_3	RM_2	RM_1	RP_2	RP_1	RC_1	RI_2	RI_1	LI_1	LI_2	LC_1	LP_1	LP_2	LM_1	LM_2	LM_3	歯種

比較検討資料

飯盛山東１号墳出土人骨（古墳時代前期）（岡山市北区松尾）（岡山大学考古学研究室 2022）: 老年（50 歳以上）女性

性別、死亡時年齢、歯石以外の歯牙評価については、清家ほか（2021）の報告を参考にした。

第 13 表　飯盛山東１号墳出土人骨の歯牙資料遺存状況と歯石の付着状況（網掛けの歯牙から歯石を採取）

RM^3	RM^2	RM^1	RP^2	RP^1	RC^1	RI^2	RI^1	LI^1	LI^2	LC^1	LP^1	LP^2	LM^1	LM^2	LM^3	歯種
				0.0	0.25	0.0	0.25		0.0							歯石
	0.0			0.0	0.0	0.25		0.0	0.0	0.0		0.25				歯石
RM_3	RM_2	RM_1	RP_2	RP_1	RC_1	RI_2	RI_1	LI_1	LI_2	LC_1	LP_1	LP_2	LM_1	LM_2	LM_3	歯種

富田村貝塚出土人骨（縄文時代晩期）（倉敷市富田村）: 成年、性別不明

基礎的な骨学観察は行われていない。歯牙資料の巨視評価及び歯石試料の採取は岡山理科大学にて行った。

第 14 表　富田村貝塚出土人骨の歯牙資料遺存状況と歯石の付着状況（網掛けの歯牙から歯石を採取）

RM^3	RM^2	RM^1	RP^2	RP^1	RC^1	RI^2	RI^1	LI^1	LI^2	LC^1	LP^1	LP^2	LM^1	LM^2	LM^3	歯種
		0.25(?)	0.0	0.25					0.25	0.25		0.0	0.25	0.25		歯石
		0.0	0.25	0.25	0.5	1.0	1.0		1.0	0.75	0.25	0.5	0.25	0.0		歯石
RM_3	RM_2	RM_1	RP_2	RP_1	RC_1	RI_2	RI_1	LI_1	LI_2	LC_1	LP_1	LP_2	LM_1	LM_2	LM_3	歯種

２　スライド作製手順

顕微鏡スライドの作製手順は Mariotti（et al. 2017）の方法論に従った。Mariotti（et al. 2017）では、土壌からの汚染に細心の注意を払いつつ、ヘキサメタリン酸ナトリウムによるデンプン粒の分散が行われている（写真 48・写真 49）。分散とは、凝集した試料を解砕し安定化した粒子の状態にする工程である。これにより歯石内に取り込まれた微小なデンプン粒の観察が可能となる。

１　歯科用キュレットを用いて、試料を歯からアルミホイルの上に採取する。

２　試料と蒸留水 2ml を遠沈管に入れ、80℃に設定した恒温水槽で１分間処理する。

３　2500rpm で 10 分間の遠心分離を行い、排水する。

４　10％のヘキサメタリン酸ナトリウム水溶液を加え、24 時間おく。

５　10 分間の遠心分離を行い、排水する。水を加えて 10 分間の遠心分離を行い、排水する。この

工程を２度繰り返す。

6　10％の希釈塩酸を加え、12 時間おく。

7　水を加えて５分間の遠心分離を行い、排水する。

8　水とグリセリン１：１におきかえる。(25 μℓずつ)

9　試料をスライドガラスに置き、カバーガラスをかける。



写真 48　試料作製の様子



写真 49　脱凝集剤ヘキサメタリン酸ナトリウム

3　観察結果

試料の観察は偏光顕微鏡 (OLYMPUS BX53) を用いて行った。観察倍率は 400 倍（接眼レンズ 10 倍、対物レンズ 40 倍）で、粒径の計測には顕微鏡に接続された顕微鏡用イメージングソフトウェア cellSens を使用した。

桑山南５号墳出土人骨

合計 12 個のデンプン粒が検出された（写真 50 ～写真 60)。全て正円形に近い外形を呈しており、その全てにおいて同程度の偏光十字の消失が見られた。粒径は 4.07 ～ 8.46 μmである (第 15 表)。

第 15 表　桑山南５号墳出土人骨歯石で検出されたデンプン粒の計測結果

識別番号	長径	短径
KW-1_1（写真 50）	6.18 μm	5.39 μm
KW-1_3（写真 51）	8.46 μm	7.45 μm
KW-1_5（写真 52）	7.85 μm	6.46 μm
KW-1_7（写真 53）	4.35 μm	4.04 μm
KW-1_9（写真 54）	7.94 μm	7.63 μm
KW-1_11（写真 55）	4.18 μm	3.91 μm
KW-1_13a	4.07 μm	3.45 μm
KW-1_13b（写真 56）	7.25 μm	6.84 μm
KW-1_15（写真 57）	7.60 μm	6.96 μm
KW-1_17（写真 58）	5.70 μm	5.63 μm
KW-1_19（写真 59）	7.57 μm	7.08 μm
KW-1_21（写真 60）	5.99 μm	5.39 μm

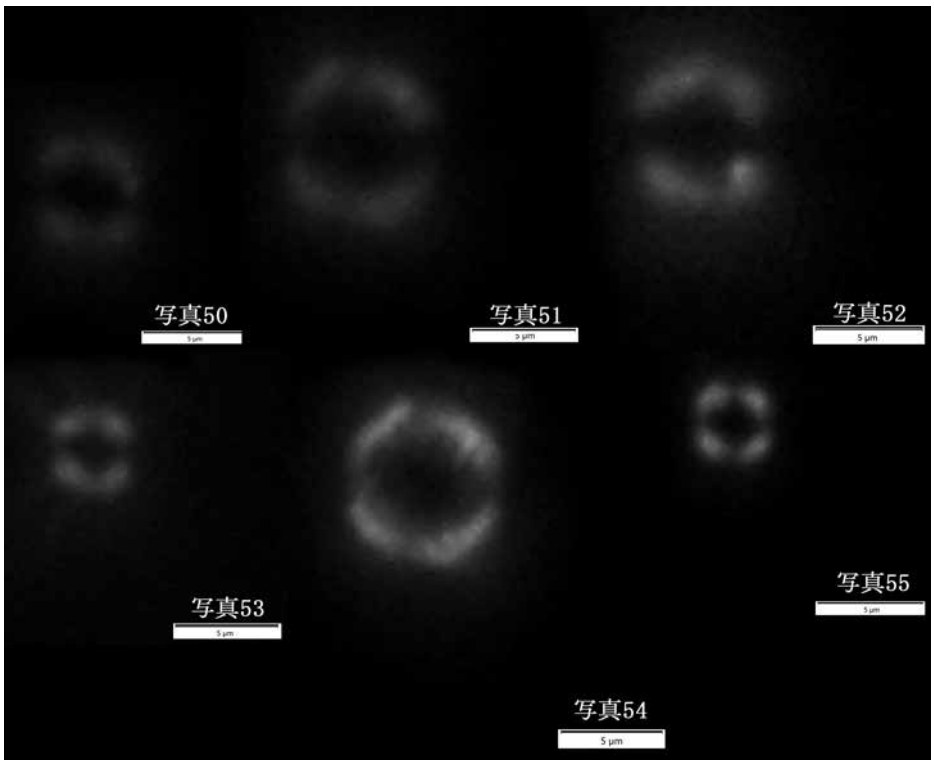


写真 50 ～写真 55　桑山南５号墳出土人骨歯石で検出されたデンプン粒
スケールは５㎛。偏光顕微鏡と cellSens に接続された Olympus DP27 にて岩本撮影

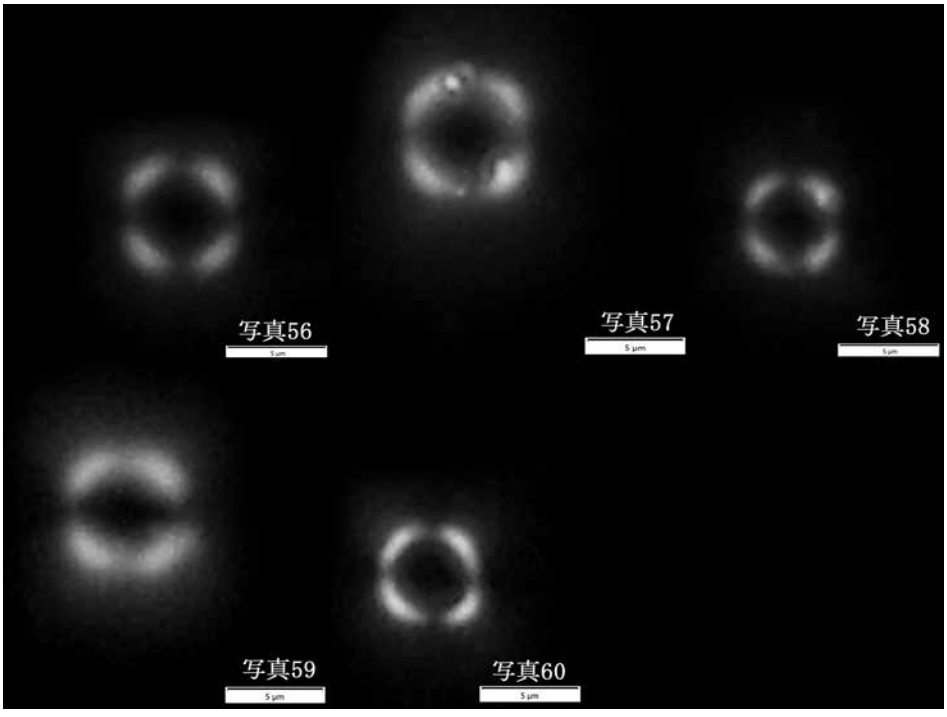


写真 56 ～写真 60　桑山南５号墳出土人骨歯石で検出されたデンプン粒
スケールは５㎛。偏光顕微鏡と cellSens に接続された Olympus DP27 にて岩本撮影

飯盛山東１号墳出土人骨

合計３個のデンプン粒が検出された（写真 61 ～写真 63)。形態は全て正円形で、同程度の偏光十字の消失が確認された。粒径は 5.01 ～ 8.55 μmである（第 16 表)。

第 16 表　飯盛山東１号墳出土人骨歯石で検出されたデンプン粒の計測結果

識別番号	長径	短径
IM-1_01(写真 61)	5.01 μm	5.00 μm
IM-1_03(写真 62)	7.85 μm	7.45 μm
IM-1_05(写真 63)	8.55 μm	8.05 μm

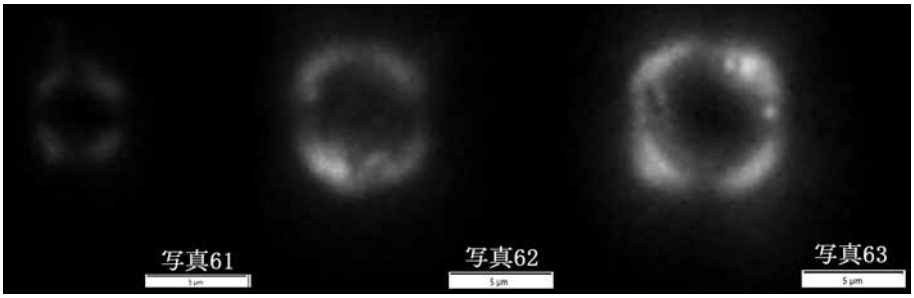


写真 61 ～写真 63　飯盛山東１号墳出土人骨歯石で検出されたデンプン粒
スケールは 5 μm。偏光顕微鏡と cellSens に接続された Olympus DP27 にて岩本撮影

富田村貝塚出土人骨

合計５個のデンプン粒を検出した（写真 64 ～写真 68)。形態は正円形のものが１個、楕円形のものが４個確認された（第 17 表)。正円形のものは直径が約 10 μm、楕円形のものでは長径が 8.33 μm～16.80 μmで、短径が 6.59 μm～ 15.56 μmである(第 17 表)。多くの個体で偏光十字はほとんど見られなかったが、楕円形と分類されたもののうち１個では損傷のない偏光十字をはっきりと観察することができた（写真 68)。

第 17 表　富田村貝塚出土人骨歯石で検出されたデンプン粒の計測結果

識別番号	長径	短径
TM-1(b20)_1(写真 64)	10.08 μm	10.01 μm
TM-1(g21)_1(写真 65)	15.56 μm	16.80 μm
TM-1(h13)_1(写真 66)	10.01 μm	8.93 μm
TM-1(c1)_1(写真 67)	8.33 μm	6.59 μm
TM-1(e18)_1(写真 68)	9.25 μm	6.59 μm

4　考察

桑山南５号墳出土人骨の食性について

桑山南５号墳出土人骨歯石から検出されたデンプン粒は、全て同程度の偏光十字の消失が認められる 8.55 μm以下の正円形であった（写真 50 ～写真 55、写真 56 ～写真 60)。偏光十字の変形または消失、及びデンプン粒外形の変化と食植物生食料の調理方法の関連性については Henry（et al. 2009）が代表的な先行研究を示している。Henry によれば、まず１）室温で水にさらされたデンプン粒は、ごく

わずかに膨張し、偏光十字がより暗くなる、広くなるといった変化を見せ、２）水分の無い状態で加熱されたデンプン粒は大きな損傷を受けて、極端な膨張や亀裂を見せるという。また３）水分のある状態での加熱（煮沸）では、デンプン粒の膨張と偏光十字の消失が確認され、長時間の煮沸では粒が膨張し、外縁が多角形の複合デンプン粒は縁が丸くなり、円形の単体デンプン粒にはしわが生じるとされている。

この実験結果と合わせて今回検出されたデンプン粒を検討すると、１）のような室温で水にさらされたデンプンのようなより暗い偏光十字という特徴は認められておらず、また２）の直接の被熱を示す極端な膨張や亀裂と呼べるような変化も認められていない。全てが写真 69 右下で見られるような

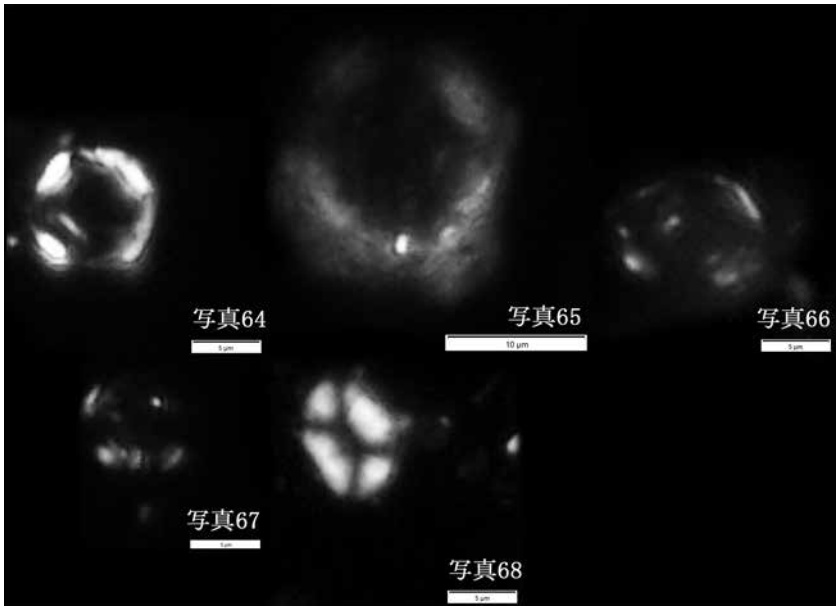


写真 64 ～写真 68　富田村貝塚出土人骨歯石で検出されたデンプン粒
スケールは 5 ㎛あるいは 10 ㎛。偏光顕微鏡と cellSens に接続された Olympus DP27 にて岩本撮影

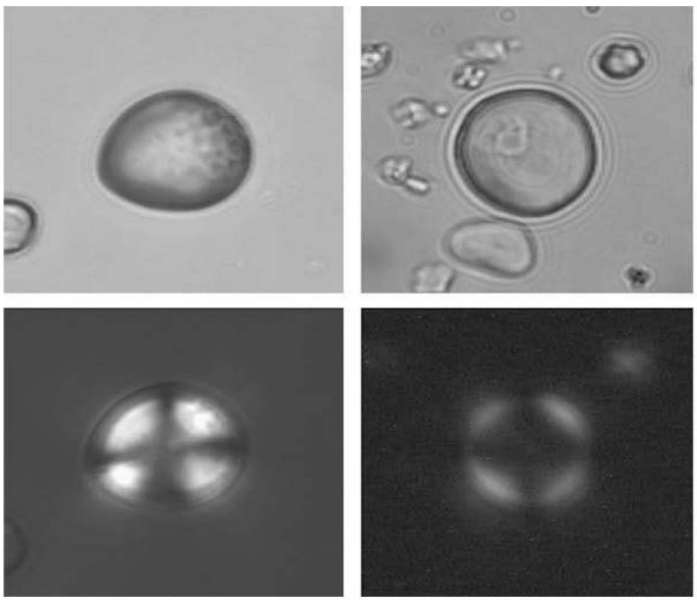
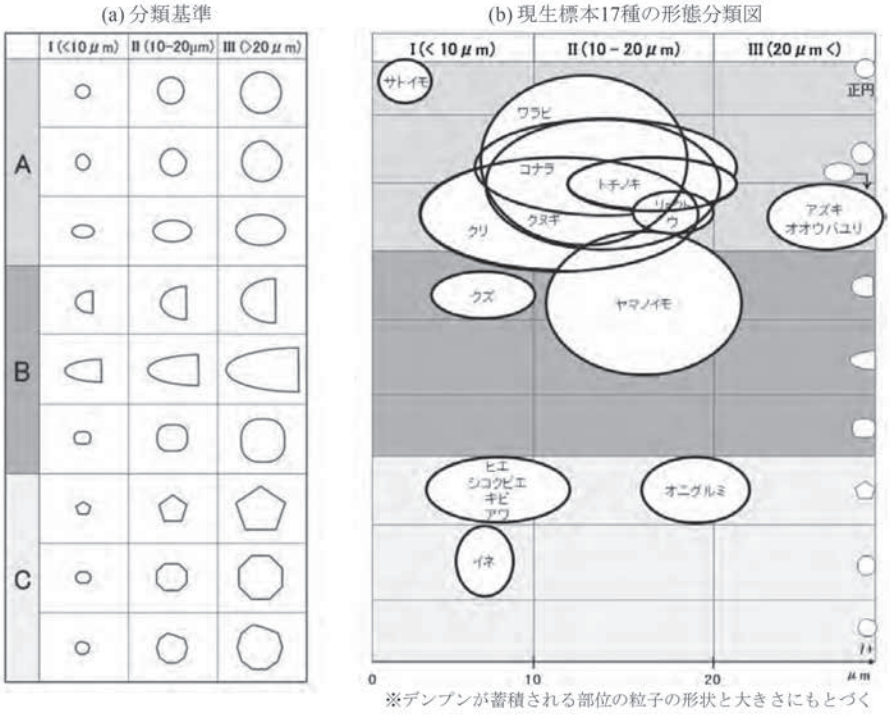


写真 69　コムギデンプン粒の形態変化（枠は 50 ㎛）
（左:生、右:10 分間の煮沸後）（Henry et el. 2009 より抜粋）

特徴を呈している。これは明らかに３）の特徴であり、今回デンプン粒の大部分、あるいは全てが水分のある状態で長時間加熱調理されたものであることが示唆されている。

次にデンプン粒の形態に関して、渋谷（2010）が日本国内における現生標本 17 種の形態分類を示している（第 167 図）。これをもとに植物種の特定を試みると、ワラビの範囲がわずかに当てはまる。しかし、渋谷の研究に用いられた標本は全て非加熱の状態で観察されたものであるため、ここでは今回検出されたデンプン粒が「水のある状態で加熱調理されたもの」であることを考慮する必要がある。Henry ら（2009）は、加熱によってもともと外形が多角形だったデンプン粒が変化し正円形を呈すことを指摘しており、今回検出されたデンプン粒は「生のワラビ」ではなく、「加熱によって円形を呈した雑穀類あるいはイネのデンプン粒」である蓋然性が高い。

その上で、今回は考古資料から合計 12 個のデンプン粒が検出できているため、さらに粒径平均値（正円形に近いため長径 + 短径 /2 で粒径を算出）6.14 μm、標準偏差 1.50 を用いて、渋谷（2010）が示したヒエ・シコクビエ・キビ・アワ・イネ（それぞれ n=20）の粒径平均（渋谷 2010 表 1 から算出）と T 検定を用いて比較を行い、植物種のより詳細な推定を試みた（エスミ社製 Mac 統計解析 Ver3.0 を使用）。この T 検定では母集団Ａ（桑山南５号墳に埋葬された男性が生前に摂取していた食物）と母集団Ｂ（現生の雑穀類やイネ）から、それぞれ無作為に抽出されたサンプル a（今回検出された 12 粒のデンプン粒）とサンプル b（現生植物ヒエ、キビ、アワ、シコクビエ、イネから渋谷がそれぞれ 20 粒ずつ計測したデンプン粒）を比較することで、母集団ＡとＢの関係を解釈する。今回の試みでは母集団の分散そのものは未知であるが、数が膨大となるため正規分布を仮定しており、念の為今回検出したデンプン粒分布の Shapiro-Wilk 検定でも正規性が確認されている（n=12, 統計量 =0.864, p=0.10）。



第 167 図　デンプン粒の形態分類基準 (a) と現生植物 17 種の形態分類図 (b)（渋谷 2010 より抜粋）

- サンプルｂヒエ：n=20，平均値 =10.2，標準偏差 =2.0 今回資料と比較した検定結果 等分散性が成立 t=5.88，自由度 =30，両側 p=0.00 1% 有意
- サンプルｂキビ：n=20，平均値 =8.8，標準偏差 =1.7 今回資料と比較した検定結果 等分散性が成立 t=4.33，自由度 =30，両側 p=0.00 1% 有意
- サンプルｂアワ：n=20，平均値 =9.3，標準偏差 =2.1 今回資料と比較した検定結果 等分散性が成立 t=4.41，自由度 =30，両側 p=0.00 1% 有意
- サンプルｂシコクビエ：n=20，平均値 =7.9，標準偏差 =2.4 今回資料と比較した検定結果 等分散性が成立 t=2.21，自由度 =30，両側 p=0.03 5% 有意
- サンプルｂイネ：n=20，平均値 =6.4，標準偏差 =0.8 今回資料と比較した検定結果 等分散性が非成立のためウェルチの方法で処理 t=0.53，自由度 =14.7，両側 p=0.60 非有意

以上の結果から、サンプルａと現生雑穀類をそれぞれ母集団とするサンプルｂヒエ、サンプルｂキビ、サンプルｂアワ、サンプルｂシコクビエの間には有意の差が見られ、サンプルａが上記のいずれかの母集団に帰する可能性は低い。一方、サンプルａとイネを母集団とするサンプルｂイネの間では有意の差異は確認されなかった。これはサンプルａが帰属する母集団Ａと現生イネの母集団Ｂが同一である可能性を示しており、すなわち本個体で検出されたデンプン粒がイネのデンプン粒である可能性が示唆される。

最後に上記の観察・分析結果を古墳時代の吉備地方という枠組みのなかで検討する。古墳時代の食に関する研究はそれ自体が少なく、吉備地域に焦点をあてた研究は現状なされていない。しかし、いくつかの研究で今回の分析結果の解釈に有意な成果が得られている。まず集落動態の研究である。用水路をもつ大規模な水田は吉備地域南部において弥生時代中期後半以降に集中して出現すると考えられており（松木 2014)、これは今回の分析で得られた「古墳人の米食」という解釈を補強する傍証と言える。次に、主に弥生時代の土器を対象とした理科学的な研究である。岡山県上東遺跡出土では出土した弥生土器に付着した炭化物について、残存デンプン粒分析および、炭素・窒素安定同位体比の測定が行われており、C3 植物を特徴づける値を示した炭化物の同位体比から、検出されたデンプン粒がイネ由来であるという見解が出されている（庄田ほか 2011)。こちらも本研究の成果を強く補強する見解である。同遺跡では、小林ほか（2002）が甕に付着したコゲ・煤・吹きこぼれの線などの観察から、弥生時代中期以降の米調理について特筆すべき考察を行っている。この研究では、弥生時代・古墳時代の遺跡から出土する炭化米が短粒種であることや、魏志倭人伝にみられる「(倭人は）高坏から米を手食する」という記述なども参考にしながら、弥生時代中期以降の米の調理方法として、炊き上げによる炊飯、を結論づけている。これは、今回検出したデンプン粒の形態的特徴からみた調理法の推定結果である「水のある状態での長時間の加熱（煮沸)」に、「炊飯」という具体的な調理方法の解釈を可能にする極めて重要な知見と言える。

上記の点を踏まえると、やはり桑山南５号墳の男性被葬者も生前は炊飯された米をよく食べていたのであろう。吉備地方の古墳時代においても米食はやはり主流であり、弥生時代中期の流れを汲んだ調理方法として炊飯という技術が行われていたのである。

比較検討資料について

今回比較検討資料として分析を行った飯盛山東１号墳出土人骨と富田村貝塚出土人骨でもそれぞれ興味深い論点が得られた。飯盛山東１号墳出土人骨ではデンプン粒の検出個体数が少ないため（n=3）統計的な検定を行うことはできなかったが、その特徴は桑山南５号墳で検出されたものと酷似していた。吉備地方の古墳時代において、少なくとも古墳に埋葬されるような高位の人物の間では、雑穀類よりも米、特に水のある状態で加熱調理（炊飯）された米の摂取が広く敷衍された習慣であった可能性を示している。今後、資料数を増やしながら議論を補強、拡大していきたい論点である。

一方、富田村貝塚出土人骨では古墳人骨とは明らかに異なるパターンが検出された（Shibutani et al. 2022)。時代に応じた食文化の差異が歯石に残存するデンプン粒からもみてとれたことはまずもって特筆に値する。その上で縄文人骨デンプン粒の外縁による分類を行うと、２種類のデンプン粒が存在することが見て取れる。

１つは正円形または多角形のもので、こちらは１粒のみ確認されている（写真 64)。偏光十字がほとんど失われていることから、長時間の加熱があった可能性が高い。今回確認されたものの粒径は 10 ㎛強であり、ワラビ・コナラ・クヌギ・クリ、その他上記の雑穀類など多くの植物に当てはまる。しかし、こちらの場合は前述の古墳人骨とは異なり、雑穀類やイネである可能性は低い。日本列島における確実なアワ・キビの証拠は縄文時代終末期から弥生時代移行期である（中沢 2017、設楽ほか 2019)。損傷が激しく、これ以上の植物種の特定はできなかった。

２つ目は楕円形をしたもので残りの４点が該当する。１点（写真 67）で損傷のない偏光十字がはっきりと確認できているため、これを渋谷（2010）が示した顕微鏡写真と比較すると、形成核の位置が類似するクリ・クヌギ・コナラのデンプン粒の可能性が考えられる。藤尾 (1993) は、分布の差異はあれど、西日本の照葉樹林帯を落葉性のクリ・クヌギ・コナラが利用できる環境と結論づけており、今回検出された楕円形のデンプン粒は上記３つの植物のうちのいずれかのデンプン粒であると考えて差し支えないと考えられる。那須 (2019) もドングリを縄文時代の重要な食料植物と位置付けている。また、暫定的な解釈ではあるが、楕円形状のデンプン粒では、損傷の度合いが均一でないため、複数の調理方法が取られていた可能性も考えられる。デンプン形態が近い複数の植物種が含まれており、植物種によって調理方法を変えていた可能性もある。

謝辞

本デンプン粒の研究において使用した試薬、研究機材は岡山大学文明動態学研究所により提供されたものである。飯盛山東１号墳出土人骨と富田村貝塚出土人骨の分析、比較検討は、それぞれ倉敷考古館、岡山理科大学富岡直人氏の協力によって実現した。顕微鏡スライドの作成に関してはフィレンツェ大学（Università degli Studi di Firenze）の Marta Mariotti Lippi 氏に適宜助言を受けた。上記の諸氏、諸機関に対し、記して感謝するものである。

参考文献

尾上元規 2018a「桑山南古墳群」『所報吉備』64:2

尾上元規 2018b「桑山南古墳群」『所報吉備』65:1-2

尾上元規・小嶋善邦・四田寛人 2020「桑山古墳群・桑山南古墳群」『所報吉備』68:3

岡山県古代吉備文化財センター 2020「桑山古墳群の発掘調査」『考古学研究』67(3):85-87

岡山大学考古学研究室（編）2022『飯盛山東１号墳－墳丘測量調査・石棺発掘調査報告－』岡山大学考古学研究室　岡山大学

小林正史・柳瀬昭彦 2002「コゲとススからみた弥生時代の米の調理方法」『日本考古学』13:19-47

設楽博己・守屋　亮・佐々木由香・百原　新・那須浩郎 2019「日本列島における穀物栽培の起源を求めて－レプリカ法による土器圧痕調査結果報告」『農耕文化複合形成の考古学（上）農耕のはじまり』雄山閣

渋谷綾子 2010「日本列島における現生デンプン粒標本と日本考古学研究への応用－残存デンプン粒の形態分類をめざして―」『植物史研究』18(1):13-27

渋谷綾子・孫国平・劉斌・王寧遠・陳傑・宋建・岡崎健治・板橋悠・中村慎一 2018「歯石の残存デンプン粒を用いた長江下流域新石器時代の植物食の復元」『*Anthropological Science*』126(3) 173

渋谷綾子 2019a「人骨の歯石に残るデンプン粒からみた長江下流域新石器時代の植物食」『第 73 回人類学会大会プログラム・抄録集』:58

渋谷綾子 2019b「歯石の残存デンプン粒にもとづく長江下流域新石器時代の植物食復元」『第 73 回人類学会大会プログラム・抄録集』:70

下野真理子、竹中正巳　2014　宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土人骨の歯石から検出されたデンプン粒『鹿児島女子短期大学紀要』 49：1-4

庄田慎矢・松谷暁子・國木田大・渋谷綾子 2011「岡山県上東遺跡出土の弥生土器に付着した炭化物の由来を探る」『植生史研究』20(1):41-52

鈴木真太郎・若山聡良 2022「桑山南５号墳出土人骨の観察結果の報告」『桑山南古墳群・細畝古墳群』: 159-173

清家　章・坂本　稔・瀧上　舞 2021「岡山県内古墳出土人骨の年代学的調査 ： 飯盛山東１号墳・勝負砂古墳・狩谷古墳群・久米三成４号墳・赤羽根古墳群・中島１号墳 （新学術領域研究（研究領域提案型）計画研究 B01 調査研究活動報告 2019 年度 (1) 考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明）」『国立歴史民俗博物館研究報告』228:345-359

中沢道彦 2017「日本列島における農耕の伝播と定着」『季刊考古学』138:26-29

那須浩郎 2019「植物利用の変遷」『一般社団法人日本考古学協会　2019 年度岡山大会　研究発表資料集』41-46 日本考古学協会 2019 年度岡山大会実行委員会

藤尾慎一郎 1993「生業からみた縄文から弥生」『国立歴史民俗博物館研究報告』48:1-66

松木武彦 2014「人口と集落動態からみた弥生・古墳移行期の社会変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』185:139-154

D’Agostino, Alessia, Gabriele Di Marco, Mauro Rubini, Silvia Marvelli, Elisabetta Rizzoli, Antonella Canini, and Angelo Gismondi 2021 Environmental Implications and Evidence of Natural Products from Dental Calculi of a Neolithic-Chalcolithic Community (Central Italy). *Scientific Reports* 11(1):10665.

Henry, Amanda G., Holly F. Hudson, and Dolores R. Piperno 2009 Changes in Starch Grain Morphologies from Cooking. *Journal of Archaeological Science* 36:915-922.

Henry, Amanda G., Alison S. Brooks, and Dolores R. Piperno 2011 Microfossils in Calculus Demonstrate Consumption of Plants and Cooked Foods in Neanderthal Diets (Shanidar III, Iraq; Spy I and II, Belgium). *PNAS* 108(2):486-491.

Mariotti Lippi, Marta, Lisa Pisaneschia, Lucia Sartib, Martina Laric, and Jacopo Moggi-Cecchic 2017

Insights into the Copper-Bronze Age Diet in Central Italy: Plant Microremains in Dental Calculus from Grotta dello Scolietto (Southern Tuscany, Italy). *Journal of Archaeological Science: Reports* 15:30-39.

Mariotti Lippi, Marta 2018 The Contribution of Starch Grain and Phytolith Analyses in Reconstructing Ancient Diets. *BOCCONEA* 28:287-294.

Shibutani, Ayako, Tomoya Aono, and Yukihito Nagaya 2022 Starch Granules from Human Teeth: New Clues on the Epi-Jomon Diet. Front. Ecol. Evol. 10:907666. (doi: 10.3389/fevo.2022.907666)

第７章　総　括

第１節　遺跡の変遷について

勝負峪遺跡・桑山遺跡・桑山古墳群は、津山盆地の南東部に位置し、吉井川の支流である皿川左岸の嵯峨山から東に張り出す支尾根上に営まれた遺跡である。これらの遺跡では弥生時代から中世までの遺構・遺物が見つかっている。本節では、これらの遺跡の変遷についてまとめる。

１　弥生時代（第３章第２節・第４章第２節）

弥生時代中期には勝負峪遺跡・桑山遺跡が立地する両尾根の斜面地に集落が営まれていた（第 168 図）。勝負峪遺跡では北東斜面と南斜面に竪穴住居と段状遺構が点在して立地する。また土坑墓が北東に伸びる尾根の平坦部の９ｍ四方の範囲に 20 基密集し、南斜面に１基造られていた。密集した土坑墓の周囲には石列があり、墓域を区画したものと考えられる。これらの土坑墓のほとんどは小口溝や側板溝を持つものであった。また、土坑墓の半数は小児用と考えられる小形のものが占めていた。

津山盆地周辺の土坑墓群・墳丘墓と比較すると、勝負峪遺跡の土坑墓は弥生時代中期中葉～後葉の土坑墓と同じ規模であり、同時期の竪穴住居・段状遺構の近くに造られるという立地も共通している。また石列の使用は、後期以降の墳墓で明瞭に墓域を区画するようになる石列の萌芽的要素として考えられる（第７章第２節）。

勝負峪遺跡の南に位置する桑山遺跡では、尾根頂部付近と南斜面に竪穴住居・段状遺構が認められ、勝負峪遺跡の遺構の立地と比較すると、遺構間の距離が近い傾向がある。竪穴住居２は焼失住居であり、クリの樹を部材に用いた土葺きの屋根の住居であったと考えられる。また炭化材や焼土が住居中心部で少ないことから、屋根頂部では茅が露出していたと推定できる。勝負峪遺跡と桑山遺跡の土器様相を比較すると、甕口縁部の上下への拡張が桑山遺跡の遺物で大きくなっているようであり、桑山遺跡の集落は勝負峪遺跡の集落の時期より、やや新しい時期に営まれたかもしれない。

２　桑山古墳群築造時（第５章）

古墳時代後期、６世紀中頃になると桑山古墳群が形成される（第 169 図）。各古墳から出土した須恵器蓋杯の特徴をみると、５基ともＴＫ 10 型式と考えられるものが確認できる（第７章第３節）。しかし、ほぼ同時期に埋葬されたと考えられるにもかかわらず、古墳により横穴系と竪穴系埋葬施設の選択が異なっており、両者が併存する（第７章第４節）。また５基のうち４基で埴輪が出土している。そのうち１～３号墳で出土した円筒埴輪は、美作地域においてやや異質な埴輪であり、この古墳群に供給するために開設された窯を示しているようである（第７章第７節）。

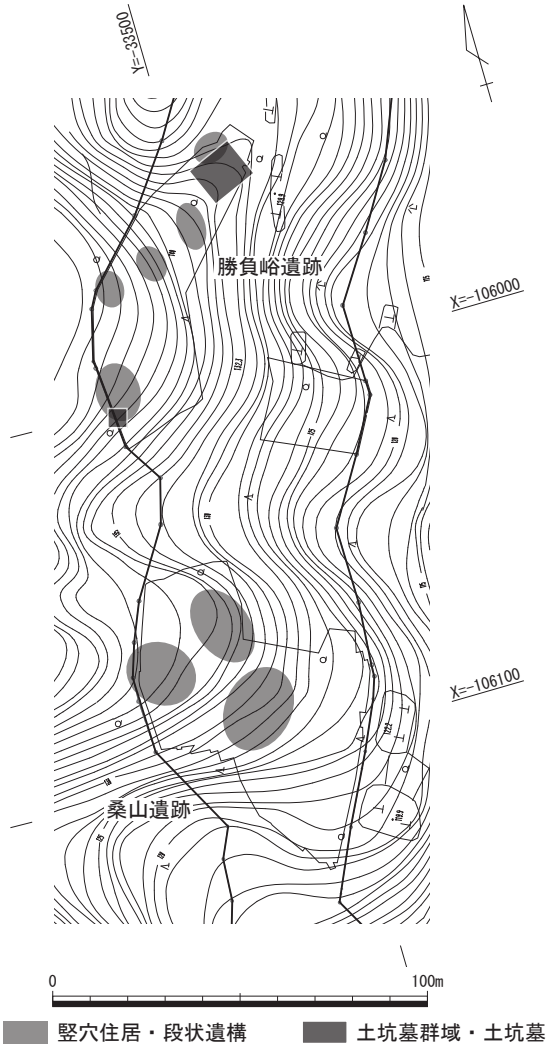
桑山１・２号墳の横穴式石室は岡山県域での導入期段階のものである。両者は隣接した場所にほぼ同時期に築造されたにもかかわらず、石室の系譜が異なるという特徴をもつ（第７章第４節）。２号墳は、福岡県糟屋郡宇美町正籠３号墳の平面形と相似形であり、かつ両者ともに当該時期には数が少

なくなる素環頭大刀を副葬するという共通点があり、両者の関係性をうかがわせる（第７章第５節）。

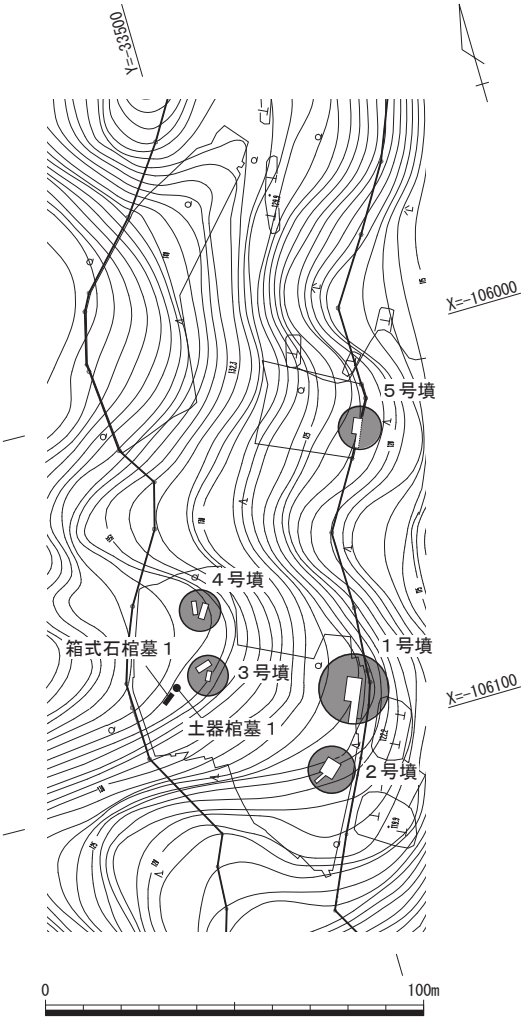
桑山３号墳は、２～４歳の被葬者が造墓契機者であるという極めて特異な事例であり、古墳時代後期における年少者の地位と父系化しつつある親族構造の一例を示す（第７章第６節）。

桑山４号墳は、竪穴式石室２基を内包していた。２基を比較すると、竪穴式石室１がやや規模が大きく、石材も大きなものを使用しており、竪穴式石室２よりやや優位であったと考えられる。また副葬品には差異が認められた。優位と推定できる竪穴式石室１では竪穴式石室２に副葬されている刀や鉄鏃などの武器が認められない。一方で竪穴式石室２には武器はあるが竪穴式石室１で副葬される玉類は持っていない。この差異は職位や性差などを反映しているかもしれない。また同時期に同一古墳群で横穴式石室を採用しているにもかかわらず、竪穴式石室を用いている本古墳は横穴式石室の導入状況について考える上で興味深い古墳である（第７章第４節）。

桑山５号墳は石室の西半部分のみの調査であったが、86 個体の須恵器、大刀、53 本の鉄鏃、馬具、161 点の玉類など豊富な遺物が出土した。特筆すべき遺物として、須恵器の脚付装飾壺と鈴付高杯がある。脚付装飾壺は 10 個の子壺を持っていたものであり、玄室袖部に据え置かれていた。鈴付高杯は脚部上部の膨らみに土製の丸を入れたもので、玄室袖部の須恵器集中部で出土した。この両者の遺物は横穴式石室での祭祀を考える上で貴重な資料である。



第 168 図　弥生時代（1/2,000）

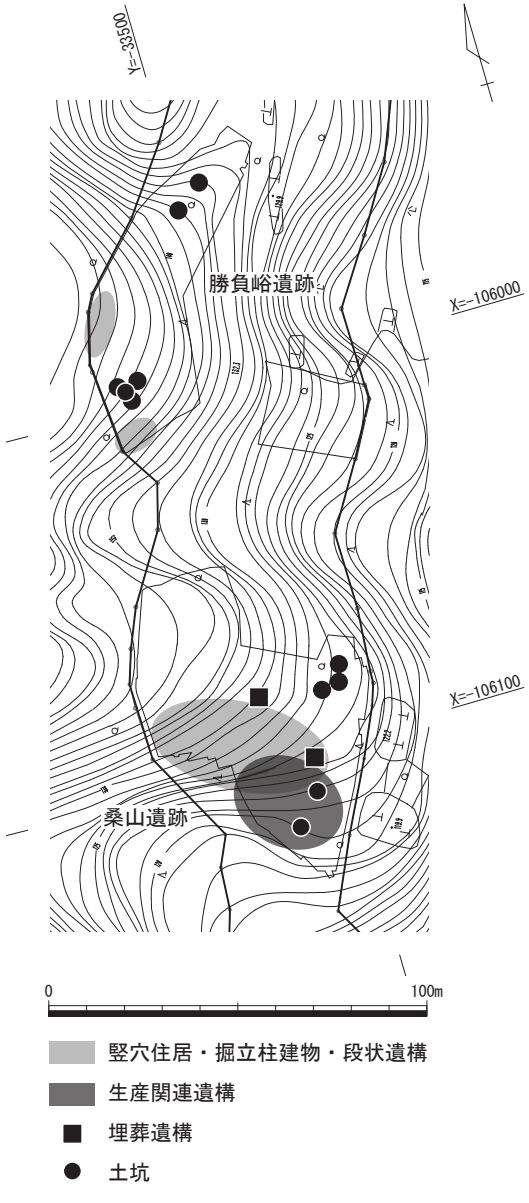


第 169 図　桑山古墳群造営時（1/2,000）

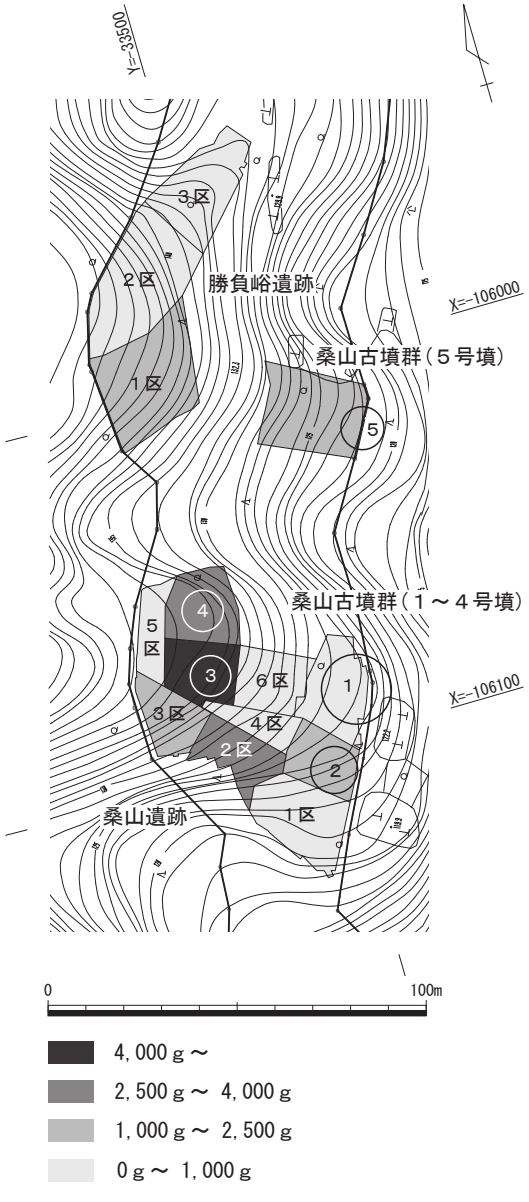
３　桑山古墳群造営後～中世（第３章第３節・第４章第３節）

桑山古墳群の造営が終わったのちに、再び集落が営まれる（第 170 図）。勝負峪遺跡では頂部と南斜面に遺構が集中する。桑山遺跡でも南斜面に遺構が集中する傾向が認められる。また、桑山遺跡南斜面の標高が低い部分には、粘土採掘坑が掘られ、製炭窯や鍛冶炉などの鉄生産に関わると考えられる遺構があるなど、生産に関連する遺構が見つかった。この時期の特徴的な遺物としては、桑山３号墳の周溝埋土から出土した銙帯（丸鞆）がある。

勝負峪遺跡・桑山遺跡では遺跡内で製錬滓が出土しており（第 171 図）、付近に製鉄遺跡があったと推測できる。製練滓は勝負峪遺跡では南斜面で相対的に多く出土している（遺物観察表　勝負峪遺跡　鉄滓一覧）。桑山遺跡では尾根頂部付近の桑山３号墳の周囲で多く出土し、南斜面側でも出土している（遺物観察表　桑山遺跡　鉄滓一覧）。分布の傾向から、勝負峪遺跡の調査区西側の尾根頂部付近の南斜面側と、桑山遺跡の調査区西側尾根頂部付近に製鉄炉があったと推測される。　（藤井雅）



第 170 図　桑山古墳群造営後～中世（1/2,000）



第 171 図　製錬滓の分布状況　（1/2,000）

第２節　勝負峪遺跡の土坑墓群と石列について

今回の調査で、勝負峪遺跡に 20 基からなる土坑墓群と石列２列が確認された。これらについて、まず調査状況を追加し、遺構で確認されたことについてまとめる。それを元に、津山盆地周辺や美作地域の土坑墓群との比較を行い、勝負峪遺跡の土坑墓群と石列の位置づけを考えてみたい。

１　調査状況について

土坑墓群と石列は、調査当初に伐開後に表土と包含層を重機で掘削した際には確認できなかった。人力掘削で包含層を除去したが、包含層は墓 13 付近で深さ 20 ㎝、墓１周辺では 60 ㎝を測り、遺物はごく少量であった。発見のきっかけになったのは、岩盤直上まで掘り下げた後の遺構検出で土坑墓 16 を認識したことで、以後続々と土坑墓が発見された。この状況を踏まえ、土坑墓群の広がりを確定するため調査区を北東側平坦部と北側斜面へ拡張した。北東側平坦部では地形の改変は見られず、礫が出土することはあっても列をなす様子はなく、土坑墓１より東では被熱痕跡１と石列２および古代の道１を検出した。北側斜面は表土から人力掘削を行い、石列１を検出した。表土中にも転石と思われる礫がいくつか認められたが、原位置を保っていないことから記録は省略した。石列１周辺の掘削中に弥生中期の土器が出土したことから、石列１の構造解明のため列に直交するトレンチを設定したところ、石列１下層に段状遺構１を検出し、これらの遺物は段状遺構１に伴うことが判明した。

２　勝負峪遺跡土坑墓群と石列の概略

土坑墓群について判明したのは以下の通りである。土坑墓個々の規模は墓坑長辺 182㎝～ 220㎝を測る大形９基と、長辺 173㎝程度の中形２基、同 88 ～ 119㎝の小形９基に分けられる。底面に小口溝を有するものが１基を除くすべてで、側溝を有するものは８基存在した。小口溝を有する 19 基においては組み合わせ式の木棺使用が明確である。土坑墓 13 と 16 より高杯脚部片が出土したので、土坑墓群全体も土器の示す弥生時代中期後葉に埋没したと思われる。土坑墓群の周囲であるが、西側の尾根筋、東側の平坦面に段・溝は確認できなかった。特に西側は自然地形の傾斜のまま土坑墓群につながっている様子が見て取れる。東側は丁寧に遺構検出に努めたが、土坑墓１より東側で遺構は確認できなかった。南端は現在の山道で削平されるため、土坑墓 18 よりさらに南へ延びる可能性もある。土坑墓群の群構成は、土坑墓１～８と土坑墓９～ 18 の２群に分かれて等高線に沿って配置されるように見える。土坑墓の主軸からは①土坑墓１～４・６・８・11・19、②土坑墓５・７・20、③土坑墓９～ 18 の３群に分割でき、切り合い関係から埋葬順序を③→①→②と想定できる。

石列１は土坑墓群北１～ 2.5 ｍに位置する。石材は 18 ～ 55㎝大の主に角礫で、形状は断面が三角形状を呈するものが多い。個々の配置は、長辺を東西に並べ、広い面で接地するものが多数を占める。石材が段状に重なる部分はほとんど認められなかった。列として平面で見ると、列西端は第 15 図Ｂの印の部分で南側に折れ曲がる（写真４参照）。そこから東へ向かって空間を２か所挟んで列が続くが、第 16 図の方位マークのある部分で折れがあるように見える。また、列に直交してトレンチを掘削し土層の断面観察を行ったが、明確な堀り方は確認できなかった。石列２は土坑墓群東約５ｍに位置し、22 ～ 60㎝大の角礫の長辺を東西方向に向けて並べている。

３　津山盆地周辺の土坑墓群・墳丘墓との比較対照

小口溝間距離について

最初は土坑墓個々の規模で、時期による差異の有無を見ていく。津山盆地周辺の中期から後期の遺跡から検出された土坑墓では小口溝を持つものが多く、小口溝間の距離を測ることにより木棺の内法の寸法を計測できる。木棺の内法寸法が同時期で近似すると考え、小口溝間距離の計測を行った。今回は小口溝間が 130cm 程度より大きいものを大形として主な比較の対象とした。時期区分は中期を古い方から中・Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの３分割とし、後期も後・Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの４分割する区分に従う(1)。

計測基準は、断面図があるものは小口溝の一番深いところとし、それが明瞭でないものについては小口溝下ばの中央に設定した。木棺痕跡が残っている京免遺跡(2)の SG95 などから、小口溝下ばの中央同士の間が本来の木棺の内法に最も近いものと判断したためである。また小口溝の長さ、つまり長軸方向距離が 20cm 以上を測るかなり長い事例も見受けられ、測定位置によっては内法寸法の変化が大きいので、これが均等になるよう意図した。そのため、報告書記載の計測表と計測位置が異なり、今回の計測値と報告書の計測値が異なる場合があることをお断りしておく。

まず、勝負峪遺跡土坑墓群で大形の７基の平均を算出したところ約 153 ㎝・標準偏差６㎝であった。

次に、津山盆地周辺の中・Ⅱ～Ⅲおよび後・Ⅰ～Ⅲの土坑墓を集め、計測を行った。中・Ⅱ～Ⅲでは京免遺跡 （中・Ⅲ～後・Ⅰか）、竹ノ下遺跡(2)（中・Ⅲ）、美作国府跡南側台地(3)（中・Ⅲ）、三毛ヶ池１号下層墓(4)（中・Ⅱ） 、西吉田遺跡(5)（中・Ⅱ～Ⅲ）の土坑墓小口溝間を計測し、合計 24 基の平均は約 153 ㎝・標準偏差 10 ㎝程度であった。

後・Ⅰ～Ⅱの下道山遺跡(6)（後・Ⅰ～Ⅱ）、才ノ峪長方形台状墓(7)（後・Ⅱ）合計 12 基では平均 179 ㎝・

第 18 表　津山盆地周辺の土坑墓小口溝間距離

勝負峪遺跡
大形

土坑墓番号	小口間距離
13	156
16	150
5	140
6	156
3	154
2	157
19	155
平均	152.57
標準偏差	6.00

京免遺跡
中・Ⅲ～後・Ⅰ

土坑墓番号	小口間距離
SG91	150
SG92	140
SG93	144
SG94	155
SG95	155
SG96	158
平均	150.33
標準偏差	7.06

竹ノ下遺跡
中・Ⅲ

土坑墓番号	小口間距離
SG10	165
SG3	160
SG14	157
SG11	140
平均	155.50
標準偏差	10.85

美作国府／西吉田
中・Ⅲ／中Ⅱ～Ⅲ

美作国府跡南側台地

土坑墓番号	小口間距離
土坑墓２	156
土坑墓３	157
土坑墓４	140

西吉田遺跡

土坑墓番号	小口間距離
土坑墓２	159
土坑墓３	130
平均	148.40
標準偏差	12.78

三毛ヶ池１号下層墓
中・Ⅱ

土坑墓番号	小口間距離
SG5	158
SG9	155
SG6	150
SG7	145
SG8	155
SG11	150
SG14	175
SG17	161
SG19	160
平均	156.56
標準偏差	8.65
5 遺跡平均	153.13
標準偏差	9.65

下道山遺跡
後・Ⅰ～Ⅱ

土坑墓番号	小口間距離
No86	165
台状 1-1	165
台状 1-2	164
台状 2-1	180
台状 2-2	190
台状 2-3	180
台状 2-5	188
平均	176.00
標準偏差	11.24

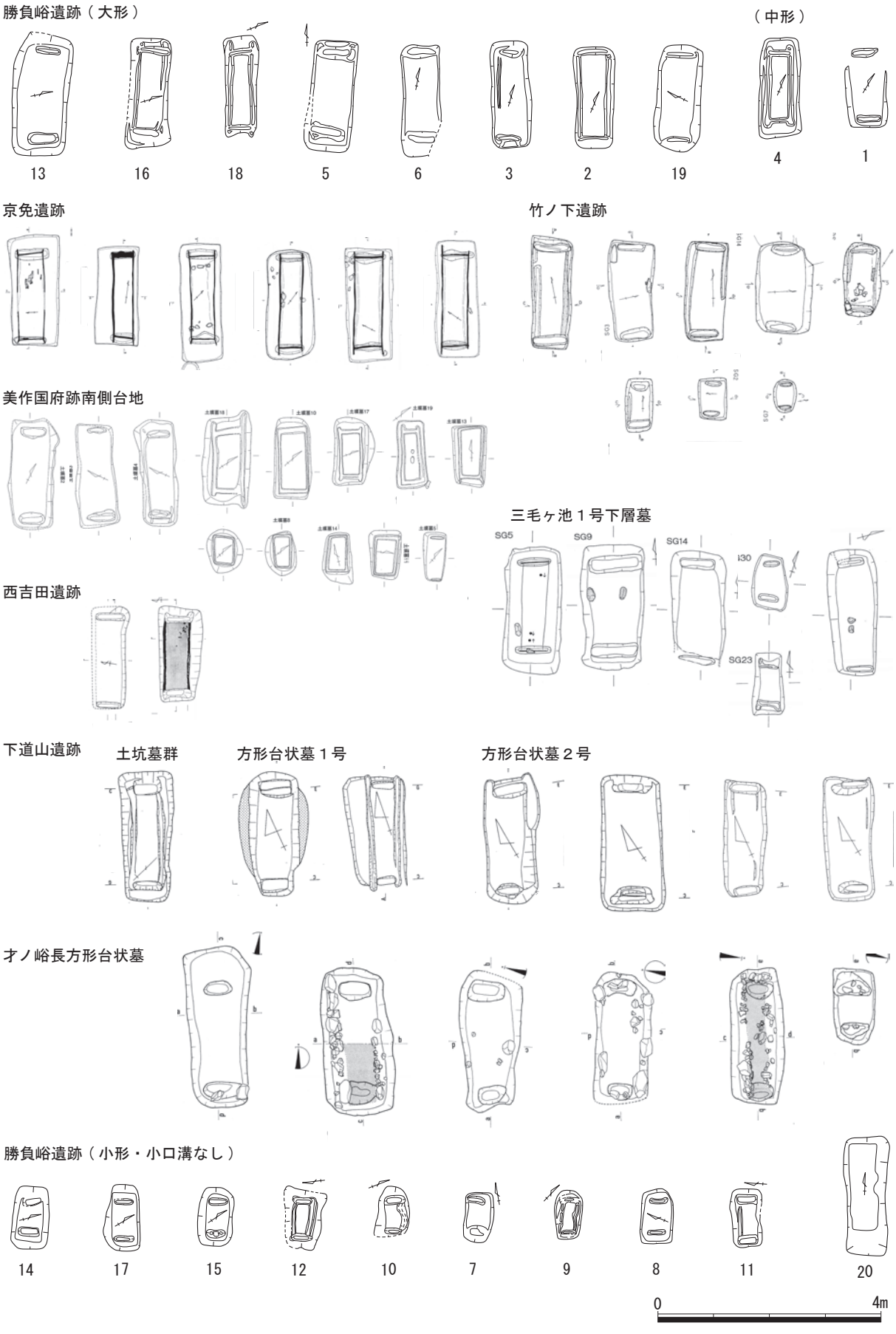
才ノ峪長方形台状墓
後・Ⅱ

土坑墓番号	小口間距離
7 号	175
1 号	187
2 号	187
3 号	180
5 号	186
平均	183.00
標準偏差	5.34
2 遺跡平均	178.92
標準偏差	9.61

黒岩遺跡方形台状墓１
後・Ⅲ

土坑墓番号	小口間距離
26	180
27	154
28	160
33	174
37	205
38	196
39	188
40	190
41	182

土坑墓番号	小口間距離
45	190
46	184
47	186
49	170
50	166
51	150
55	194
57	150
平均	177.59
標準偏差	16.78



第 172 図　勝負峪遺跡土坑墓と周辺遺跡土坑墓の比較（1/100）

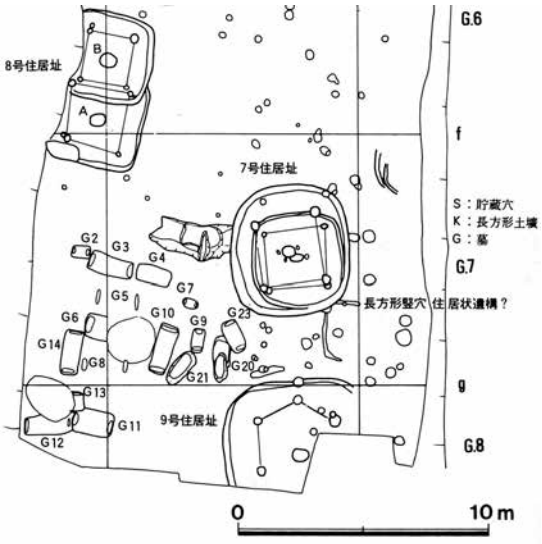
標準偏差約 10 ㎝で、中・Ⅲを中心とする時期より長さが 26 ㎝ほど長くばらつきは少ないと見る。後・Ⅲ以降の木棺墓では、黒岩遺跡方形台状墓１[8]（後・Ⅲ）の大形 17 基の平均は 178cm・標準偏差は 17cm で、後・Ⅰ～Ⅱと長さは変わらないが大小のばらつきが増える。

以上より勝負峪遺跡土坑墓群の規模は、弥生時代中期中葉～後葉（中・Ⅱ～Ⅲ）と数値が一致した。

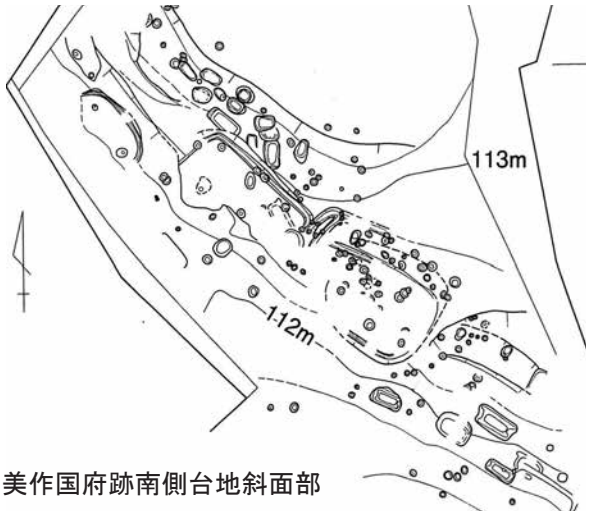
参考のため、他の地域でも計測を行った。岡山市北区のみそのお遺跡[9]で、みそのお１期（後・Ⅰ）の６～ 12 号墳墓の合計 22 基では、平均 185 ㎝・標準偏差 15cm で下道山遺跡・才ノ峪遺跡長方形台状墓より少し長めでばらつきがある。みそのお２・３期（後・Ⅰ～Ⅱ）の 17・18 号墳墓の 23 基では平均 193 ㎝・標準偏差 13cm とさらに長くなる。中期より後期のほうが木棺の内法が長くなる傾向がはっきりしたと言えよう。後・Ⅲ以降は土坑墓から小口溝が消失するので、比較は困難になる。

土坑墓群の特徴

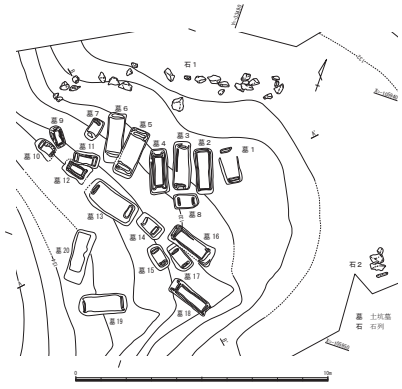
中・Ⅱ～Ⅲの時期に当たる津山盆地周辺の土坑墓群の特徴を発掘調査例から確認する。竹ノ下遺跡２区では中期後葉とされる７～９号住居址に隣接して 16 基の土坑墓群が認められた。土坑墓個々の規模は大形・中形・小形が存在、長軸方向は東西あるいは南北方向を指向している。配置はそれぞれ隣接し一部に切り合いがあるが、規模によって偏る様子はない。報告書では方形の墓地区画に規制さ



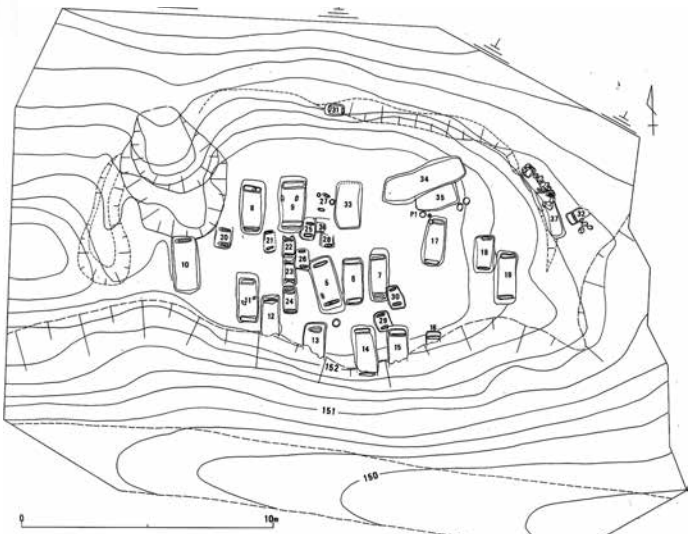
竹ノ下遺跡２区



美作国府跡南側台地斜面部



勝負峪遺跡土坑墓群



三毛ヶ池１号下層墓

第 173 図　勝負峪遺跡土坑墓群と周辺遺跡土坑墓群（1/300）

れ主軸方位が東西・南北になったとしている。また、木棺長辺規模の変異差が大きいことは被葬者の体格差を反映するため家族墓地の特徴を示し、住居群に隣接する小規模な墓地と結論づけている。

美作国府跡南側台地では、台地の頂部に３基、頂部から南へ下がる斜面部に 16 基の土坑墓が検出された。このうち斜面部では位置と主軸方向で５群に分かれる。調査区内では土坑墓４～６基が１つの群を構成し、それらが同時期の竪穴住居に近接して位置する。

三毛ヶ池１号墓は、東西に延びる尾根頂部に立地し、古墳８基が周囲に確認されている。上層が後・Ⅰ、下層が中・Ⅱの２時期に分かれる。上層墓は土坑墓４基と土器棺２基、石列と貼石が存在した。墳丘は盛土で 12 × 10 ｍの楕円形とその西側に貼石を伴う突出部を形成し、西端を溝で画している。石列は突出部構築時に埋設されたものと考えられている。下層墓は土坑墓 34 基で構成され、うち 28 基が小口溝を有する。北側は地山削り出し、東・西側も溝と削り出しで墓域を区画している。土坑墓個々の規模は大形・中形・小形に分類でき、長軸方向は尾根に直交する南北方向のものが大多数を占める。

ここまで述べてきた土坑墓群の特徴を抽出する。土坑墓個々は大形・中形・小形に分類できる規模で、長軸方向が共通するものが必ず数基は存在する。それぞれの位置は隣接し、たとえ切り合いが発生しても部分的である。立地は同時期の竪穴住居・段状遺構の近くに立地する場合が多い。ただ三毛ヶ池１号下層墓は、立地が丘陵上で周囲に同時代の遺構がない点で弥生時代後期以降の墳墓と類似する。

最後に勝負峪遺跡土坑墓群と石列を先に挙げた土坑墓群の特徴と照らし合わせてみたい。土坑墓個々の形状や配置はほぼ同様と理解できる。墓域については、当土坑墓群には三毛ヶ池１号下層墓のような地山削り出しによる造成はない。北側の石列１であるが、後・Ⅰ以降はみそのお遺跡 16 号墳墓など類例が増えるが、美作地域の弥生時代中期の墳墓で類例は未確認である。石列１の標高は土坑墓の底面付近を示しており（第 15 図参照）、その配置からも土坑墓群との強い関連性が指摘できる。また墓１の残存状況から包含層分の厚さに近い盛土あるいは地山土が存在していたと解釈でき、三毛ヶ池１号下層墓同様に墓域が意識されていたと思われる。これらから、墓域を明確にする施設として石列１が並んでいた可能性が高い。当土坑墓群の墓域の考え方は、竹ノ下遺跡２区や美作国府跡南側台地斜面部よりも三毛ヶ池１号下層墓の状況に近い。弥生時代後期以降の墳墓では墓域を明瞭に区画する溝・石列が明確になるが、その前段階に位置づけられるのではないだろうか。　　（氏平）

註

（１）岡山県教育委員会 1996『津寺遺跡３』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 104
　　岡山県教育委員会 2004『久田原遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 184
　　岡山県教育委員会 2005『久田堀ノ内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 192
（２）津山市教育委員会 1982『京免・竹ノ下遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 11 集
（３）岡山県教育委員会 2011『美作国府跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 228
（４）津山市教育委員会 1993『三毛ヶ池遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 48 集
　　１号墓下層の土坑墓は、今回の計測位置と合致するため計測表のみを掲載の土坑墓計測値も採用している。
（５）津山市教育委員会 1985『西吉田遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 17 集
（６）岡山県教育委員会 1977『下道山遺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 17
（７）津山市教育委員会 1985『才ノ峪遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 18 集
（８）津山市教育委員会 2015『黒岩遺跡ほか』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 84 集
（９）岡山県教育委員会 1993『みそのお遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 87

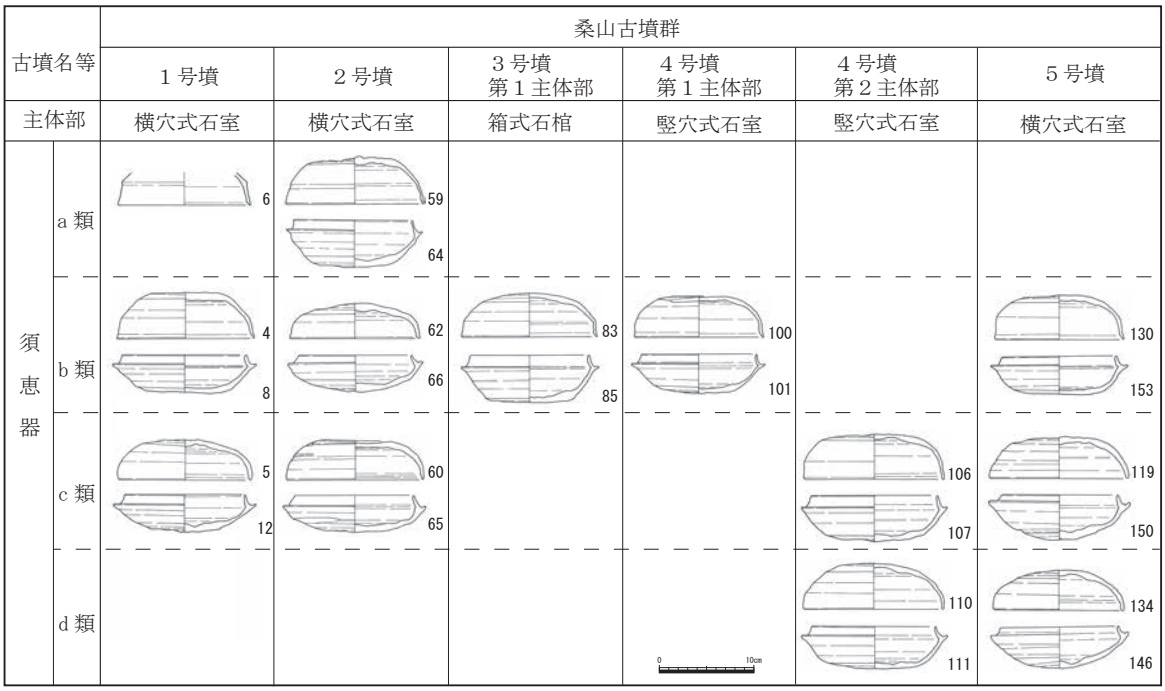
第３節　桑山古墳群の形成とその動向

今回の調査で確認された古墳は５基で、これらは同一尾根上に所在する１～４号墳と、この尾根と浅い谷地形を挟んで北側にある尾根上に立地する５号墳に分かれる。その主体部は横穴式石室、竪穴式石室、箱式石棺、木棺墓と多様で、さらに１号墳を除き床面まで攪乱を受けておらず豊富な副葬品が埋葬当時の姿を残している。ここでは調査成果について若干の整理を行い、古墳群の様相を概観したい。

１　須恵器の形態について

美作地域の須恵器は、村上幸雄氏[(1)]や小郷利幸氏[(2)]によってその変遷が論じられている。また、本事業に伴って調査が行われた桑山南古墳群・細畝古墳群[(3)]でも尾上元規氏によって両古墳群出土の蓋杯や高杯の型式が検討されている[(4)]。ここでは今回出土した蓋杯について各氏の論を参考にしつつ検討したい。

須恵器蓋杯は、法量や形態などから次のａ～ｄの４類に分類することができる（第 174 ～ 177 図）[(5)]。ａ類の杯蓋（６、59）は天井部と口縁部の境ににぶい稜もしくは浅い凹線を巡らし、口縁端部には内傾する面を持つ。杯身（64）は受け部の立ち上がりが 13㎜と高く、その角度も 65°とやや急である。ｂ類の杯蓋（１～４，61 ～ 63、83、84、100、101、118、120、129 ～ 133、135）は天井部と口縁部の境界に稜や凹線が認められないものの、その境界はやや明瞭で、内傾する面をもつ口縁端部に向かってやや垂直に垂下する。法量は、口径 13 ～ 14cm 大、器高４cm 大が多い。杯身（８～ 11、66 ～ 68、85、86、101、103、137、139、149、153、154）の法量は、その多くが口径 12cm 大、器高４cm 大を測る。受け部の高さは、10㎜以上が多く、その立ち上がりの角度は 50 ～ 70° に集中する。ｃ類の杯蓋



第 174 図　須恵器蓋杯の型式（1/8）

（５、60、106、108、114、117、119）は、口径 14cm 大、器高４cm 大にほぼまとまっている。天井部と口縁部の境界はやや不明瞭となり、口縁端部の内面は凹線状の凹みが巡る形態を呈する。杯身（12、65、107、109、115、150）の法量は口径が 12cm 大、器高が 4cm 大で、受け部の高さは 10 ～ 16mm、その角度は 55 ～ 72° を測る。ｄ類の杯蓋（110、112、121 ～ 128、132、134）は天井部と口縁部の境界が不明瞭で、口縁端部は丸く収める。その法量は口径 14cm 前後、器高３～４cm 大に纏まる。杯身（111、113、140、143、146、152、156）の法量はｂ・ｃ類とほぼ同じであるが、受け部の高さが低く、角度も緩い。

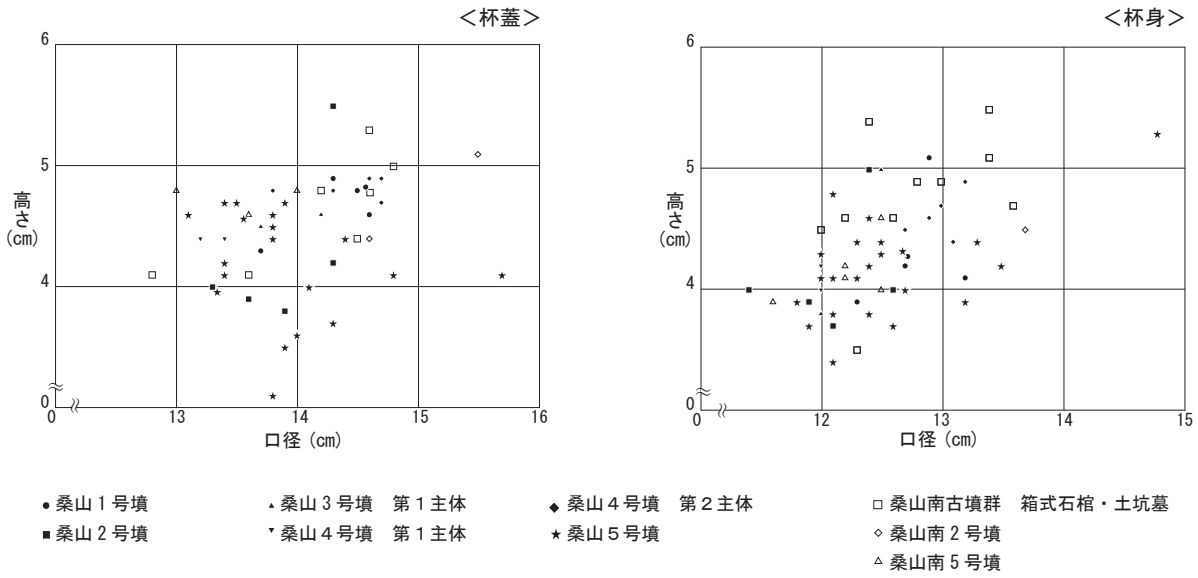
以上のように、蓋杯はおおむねａ類からｄ類へ徐々に小型化する。また、杯蓋は天井部と口縁部の境が不明瞭となり、さらに口縁端部を丸くおさめ、杯身は受け部の立ち上がりが低くなり内傾するという型式変化を捉えることができた。この型式変化を尾上編年にあてはめるとａ～ｃ類が１期、ｄ類が２期（以後、特にことわりがない限り尾上編年を用いる）であり、大阪府陶邑古窯跡の型式では前者が TK10、後者が TK43 に相当するであろう。また、ａ～ｃ類の型式差については、時期差を示している可能性もあるが断定できず、工人差・窯跡差を反映しているかもしれない。

さて、本古墳群出土の全ての須恵器蓋杯類を分析したわけではないが、蛍光Ｘ線による胎土分析を行ったところ、Ａ～Ｃの３つのグループに分類された（本書第６章第３節）。これらは既知の津山市内の窯跡や大阪府陶邑古窯跡とは胎土が異なっているとされ、新たな生産地が推定されている。Ａ～Ｃグループの胎土・色調・焼成の特徴をみてみると、Ａグループは胎土に砂粒を多く含み、かつその砂粒が大きいものが主体となっているが、砂粒が小さくかつ少ないものも認められる。この変化は漸移的であり、明確に線引きできるものではない。器表面の色調は黒～濃緑色を呈するものが目立つが、白～灰色も認められる。Ｂグループは砂粒が小さくかつ少ない胎土が主体であるが、中には砂粒が大きくかつ多いものもある。色調及びその硬度は焼成不良のためか白～橙色で軟質のものが多いが、なかには硬質で灰色を呈するものもある。Ｃグループは色調が灰色で、胎土中には小さい砂粒が多く含まれるものが主体となっている。これらＡ～Ｃグループと先述のａ～ｄ類の対応関係であるが、Ａ・Ｂグループはａ～ｃ類に認められるが、Ｃグループは型式的に新しいｄ類のみに認められた。

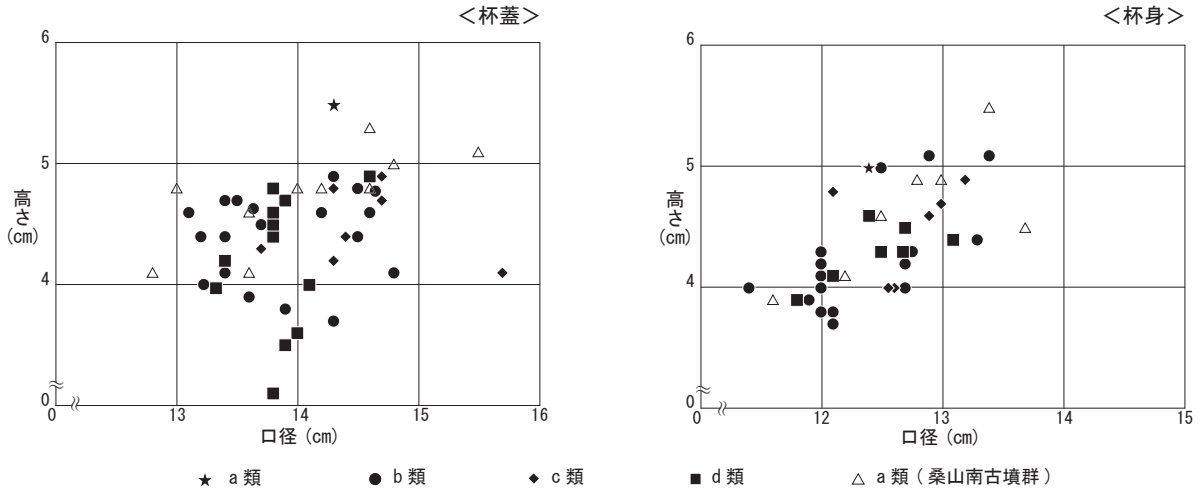
２　古墳群の形成過程

本古墳群の形成過程を推定する前に、横穴式石室を埋葬施設とする１・２・５号墳と竪穴系の埋葬施設を主体部とする３・４号墳の築造順序を検討する。

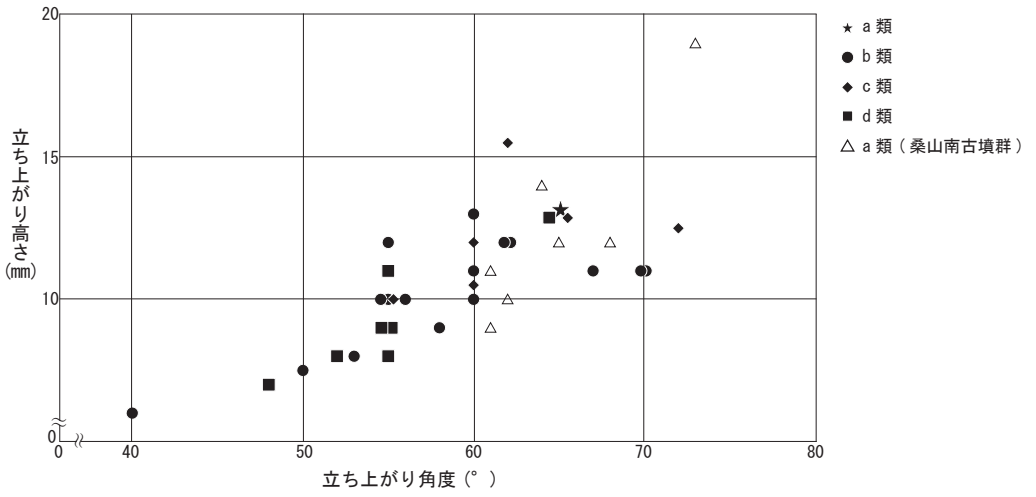
横穴式石室を埋葬施設とする古墳の築造時期は、出土した須恵器から１・２号墳が１期、５号墳が２期と判断できる。しかし５号墳については、古い形態を呈する蓋杯は他の器種の須恵器とともに奥壁際に重なり合って、新しい形態を呈する蓋杯は石室中央部に集中して出土している。このような出土状況を、奥壁際から出土した土器は追葬時の片付け行為によってまとめられたもの、新しい形態のものは追葬時の副葬品であったものと仮定した場合、５号墳の築造は１期まで遡らせることも可能である（ただし、石室の形態や石材の使用方法から１号墳に先行するとは考えにくい）。次に１号墳と２号墳の築造順序であるが、１号墳は２号墳に比べてやや高所に占地し、立地上の優位性が窺える。また墓道から出土した高杯（17）から墓前祭祀が行われていたと想定されるが、両古墳が近接して築かれていることや２号墳墳丘によって開口方向からの視界がやや遮られることなどから、これを執り行うに際して、やや困難を伴うことが想像できる。このようなことから１号墳が先行して築かれた可



第 175 図　出土須恵器蓋杯の法量散布図



第 176 図　出土須恵器蓋杯の形態別法量散布図



第 177 図　出土須恵器杯身の受け部角度と立ち上がり高さ散布図

能性が高いと思われる。ただし両古墳の石室は、地山の大規模な掘り下げを伴う５号墳とは異なり、旧表土上への盛土や旧表土と地山の若干の掘り下げなどの簡略な整地のみで構築している。石室築造の視点のみで考えると、２号墳が所在する尾根上の方が占地の優位性（石室を構築しやすい緩やかな斜面で、整地も簡単な地形）が高いと思われることから、２号墳が先行して築かれたかもしれない。以上をまとめると、１号墳と２号墳の先後関係は不明で、５号墳がこれらに後出すると考えられる。

両者とも１期の範疇におさまる３・４号墳は、周溝の切り合い関係もないため築造の先後関係を判断できない。ここでは、両古墳とも２基ある主体部の先後関係を検討したい。３号墳については第５章第４節でも述べているとおり、土層の切り合い関係から箱式石棺が最初に築かれたことが分かる。一方４号墳については、各主体部が墳丘の中央部を避けるようにして配置され、またこれら主体部の掘り方の切り合い関係が認められないことから、先後関係を明らかにすることは難しい。しかしながら、竪穴式石室１の方が大きくかつ深く作られていること、竪穴式石室２の蓋杯にはｄ類がみられること等から、竪穴式石室１のほうが先行して作られた可能性が高い。

以上、横穴式石室と竪穴系の埋葬施設ごとの先後関係をみてきたが、本古墳群の形成過程を推測可能な要素が見あたらなかった。このようなことから本古墳群は、６世紀中頃に相次いで１～４号墳が築かれ、その後大きな時間差をともなわずに３号墳の木棺墓と４号墳の竪穴式石室２の埋葬や５号墳の築造が行われたようで、継続期間が非常に短い古墳群であったのだろう。

３　古墳群の被葬者像について

古墳の副葬品を検討することによって、被葬者の性格やその階層などが推測可能な場合がある。本古墳群は１号墳を除き床面まで攪乱が及んでおらず、副葬された遺物はほぼ埋葬当時の姿を残している（ただし５号墳は東側の一部が路線外のため、すべての副葬品が検出できたわけではない)。本来ならば遺物や石室の形態などの総合的な検討を行い、被葬者像を述べるべきであるが、ここでは特徴的な遺物から若干の予察を行いたい。

主な副葬品は第 19 表に掲載しているが、まず注目されるのがすべての横穴式石室に埋葬されていた馬具であろう。いずれの古墳からも金もしくは銀貼の馬具が確認され、特に２号墳では鉄地金貼の雲珠・辻金具・留金具や鉄地銀貼の責金具・鞍飾金具などからなる非常に装飾性が高い面繋、尻繋、鞍が出土しており、被葬者の属する階層について大きな示唆を与えるものと考える(6)。また１号墳から出土した鉾に伴うと想定される石突も注目に値する。県内での鉾の出土例は少なく、さらに６世紀中頃と時期を限定すると、墳丘の形態・大きさや導入期の横穴式石室から出土した武器・馬具・農工具などの豊富な副葬品などから蒜山盆地の中心的な首長墳と想定されている真庭市四つ塚１号墳のみである(7)。一方１号墳は、佐良山古墳群の中では比較的大型(8)な径約 19 ｍの墳丘をもち、床面まで攪乱を受けていたものの大刀や鉄地金貼の馬具が出土していることから、その被葬者は佐良山古墳群のなかでも有力な人物であったことが想定されよう。竪穴系の埋葬施設に副葬されていた遺物も興味深い。３号墳は造墓の契機となった被葬者が２～４才の小児であったにもかかわらず（本書第６章第４節)、彫刻を施した鹿角製の柄をもつ短刀、鉄鏃 19 本、玉類と豪華な品々が供えられていた。また巨視骨学的観察により､被葬者は特権階級に属する個体と想定されてもいる（本書第６章第４節)。その一方で木棺墓には副葬品が認められない。同一墳丘上に葬られていることから両者は何らかの関係があったことを窺わせるが、現状ではどのような要素に起因して埋葬施設や副葬品の差異が生じた

第19表　桑山古墳群一覧

古墳名	標高	墳丘		埋葬主体						埋葬人数※2	埴輪	主な副葬品※3								特記事項
		墳形	規模	種別	主軸方向	規模※1						刀	鉾	鏃	弓	馬具	耳環	玉類	刀子	
桑山１号墳	124 ～ 127	円	19.1	横穴式 石室	N21° E	○石室 全長 6.30 m 幅 1.95 m 高さ 1.85 m	○玄室 全長 3.45 m 幅 1.95 m 高さ 1.85 m	○羨道 全長 2.85 m 幅 0.98 m 高さ 1.30 m	○墓道 全長 3.58 m 幅 0.98 m	1＋	円筒 石見型	1＋	石突	14＋	×	鏡 鉸具 ほか	×	○	×	左片袖 玄門立柱石、梱石、板石閉塞、腰石、力石 羨道に区画石配置か？ 玄室袖部礫床残存
桑山２号墳	123.5 ～ 125.5	円	13	横穴式 石室	N59° E	○石室 全長 3.68 m 幅 1.85 m 高さ 0.95 m	○玄室 全長 2.41 m 幅 1.85 m 高さ 0.95 m	○羨道 全長 1.27 m 幅 0.60 m 高さ 0.50 m		1	円筒 石見型	素環頭１	×	30	×	轡 雲珠 辻金具 ほか	2	×	鹿角装１	両袖 梱石、板石閉塞、力石 玄室床面礫床 馬装一式残存
桑山３号墳 第１主体	133.5 ～ 135	円	9.5	箱式 石棺	N24 ° E	○石棺 全長 0.96 m 幅 0.33 m 高さ 0.42 m	○掘り方 全長 1.73m 幅 1.44 m 深さ 0.70 m			1	円筒	鹿角装２	×	19	×	×	×	○	×	幼児埋葬 底面礫床 人骨出土
桑山３号墳 第２主体	133.5 ～ 135	円	9.5	木棺	N72° E	○木棺 全長 (2.66) m 幅 (0.70) m 高さ 0.30 m	○掘り方 全長 3.14m 幅 1.32 m 深さ 0.30 m			1	円筒	×	×	×	×	×	×	×	×	木棺直葬 出土遺物無
桑山４号墳 第１主体	134.5 ～ 136.5	円	10	竪穴式 石室	N35 ° E	○石室 全長 2.05 m 幅 0.80 m 高さ 1.14 m	○掘り方 全長 3.13m 幅 1.64 m 深さ 1.00 m			1	×	×	×	×	×	×	×	○	1	長さ1.75 m、幅0.52 mの木棺痕跡確認
桑山４号墳 第２主体	134.5 ～ 136.5	円	10	竪穴式 石室	N10° E	○石室 全長 1.98 m 幅 0.67 m 高さ 0.60 m	○掘り方 全長 3.43m 幅 1.82 m 深さ 0.75 m			1	×	1	×	17	×	×	×	×	1	床面礫床
桑山５号墳	122 ～ 124	円	(10.5)	横穴式 石室	N21° E	○石室 全長 (7.00) m 幅 1.50 m 高さ 1.90 m	○玄室 全長 4.25 m 幅 1.50 m 高さ 1.90 m	○羨道 全長 (2.75) m 幅 0.30 m 高さ 0.80 m		1＋	円筒 朝顔形	2＋	×	47＋	○	留金具 責金具 ほか	×	○	7＋ 鹿角装１	東半部未掘 左袖確認 玄室床面礫床 釘１点出土、装飾壺、鈴付高杯

※１　全長・幅・高さともに内法で現存最大値を示し、下線はほぼ完存とみられる数値。また、（　）は推定値を示す。

※２　遺物出土状況等から推定した最小人数を示す。

※３　鉄製品は破片も多く個体数を特定しがたい。刀、鏃、刀子の数量は推定の概数である。

のか不明であり、今後の課題であろう。４号墳の副葬品は、竪穴式石室１が玉類、刀子、土器であるのに対し、竪穴式石室２が大刀、鉄鏃、刀子、土器である。各主体部で副葬品が異なっている理由は不明であり、類例の増加が待たれる。

さてこれら被葬者の関係性であるが、同一の尾根上に隣接して古墳が築造されている場合、何らかの有機的な関係がある集団による継続的な築造と捉えられることも多い[(9)]。しかしながら本古墳群、特に１～４号墳はほぼ同時期（６世紀中頃）に築造されたのにもかかわらず、新たな葬制である横穴式石室と従来の葬制である竪穴系の埋葬施設に分かれている。当然、築造時期が異なっていることにより生じた差異であるかもしれないが、被葬者の出自や系譜、さらには政権とのかかわり方などによるものかもしれない。今後は、より詳細で総合的な分析を行う必要があるだろう。

最後にこれら被葬者集団の居住地について、これまで近隣で同時期の集落跡が確認されておらず不明であった。しかしながら、本事業に伴い令和元年から３年にかけて調査を行った高尾北ヤシキ遺跡で古墳時代後期の集落が確認された[(10)]。現在整理中であるため詳細は不明であるが、嵯峨山東麓で初めて発掘調査が行われた古墳時代後期の集落跡であり、本古墳群はもちろんのこと、桑山南古墳群や細畝古墳群などを築造した集団との関係の有無を含めて、整理成果に期待したい。　　（小嶋）

註

（１）村上幸雄 1980「遺物について」『糠山古墳群Ⅱ』久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告２　久米開発事業に伴う文化財調査委員会

（２）小郷利幸 1992「まとめ」『門の山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 46 集　津山市教育委員会・佐良山門の山古墳群発掘調査委員会

（３）岡山県教育委員会 2022「桑山南古墳群・細畝古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』255

（４）尾上元規 2022「古墳群の構成と形成過程」「桑山南古墳群・細畝古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』255　岡山県教育委員会

（５）杯身の変化は極めて小さいため、杯蓋とセット関係が想定される杯身のみプロットしている。また、参考資料として桑山南２・５号墳と桑山南古墳群の土坑墓及び箱式石棺墓出土須恵器蓋杯もプロットしている。

（６）新納泉 1983「装飾付大刀と古墳時代の兵制」『考古学研究』第 30 巻第 3 号

（７）近藤義郎 1992『蒜山原四つ塚古墳群（改訂版）』

（８）近藤義郎 1952「各古墳の素描」『佐良山古墳群の研究』第１冊　津山市

（９）和田清吾 1992「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』第５巻近畿Ⅰ

(10) 現在報告書刊行に向けて整理中である。
西村奏 2022「高尾北ヤシキ遺跡」『所報吉備』第 72 号　岡山県古代吉備文化財センター

第４節　導入期の横穴式石室について

ＭＴ 15 ～ＴＫ 10 型式は岡山県域において、横穴式石室が継続して築造されるようになる時期であり、岡山県における横穴式石室の導入期にあたる[1]。本調査ではこの時期に築造された横穴式石室を持つ桑山１・２・５号墳と竪穴系埋葬施設を持つ桑山３・４号墳を調査した。本節では、桑山古墳群の各古墳の特徴を概観し、導入期の横穴式石室が造られた本古墳群の特徴について考察する。その後、隣接する桑山南古墳の同時期の古墳との比較を行うことで、桑山古墳群の横穴式石室墳の立地の特徴を指摘する。最後に横穴式石室の受容・導入について考察する。

１　桑山古墳群の各古墳の特徴

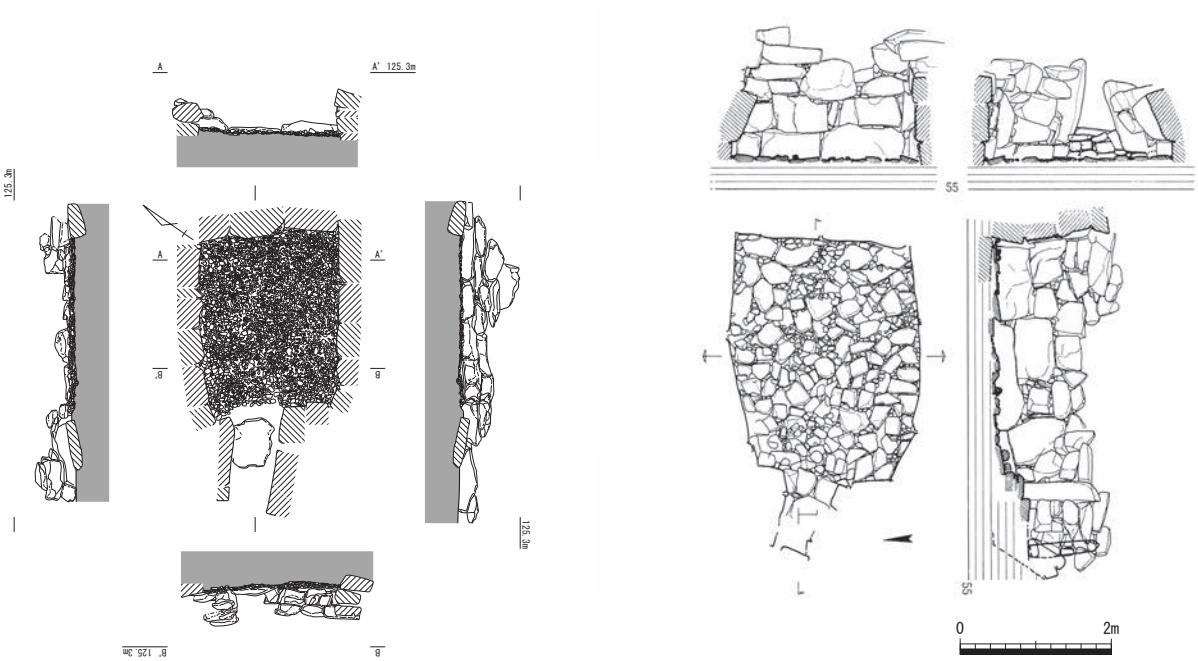
桑山１号墳は、平面形が左片袖式の横穴式石室である。玄門部には、立柱石と框石を用いて、玄室の内外を区別している。閉塞方法は特徴的で、片袖式という畿内の影響を指摘される平面形を用いているにもかかわらず、九州で多く見られる板石での閉塞を採用している。このような平面形片袖式で板石閉塞を用いる導入期の横穴式石室は、美作地域では津山市中宮１号墳[2]と真庭市四つ塚１号墳[3]があり、この地域の導入期の特徴として指摘できる。用石方法の特徴としては、奥壁の基底石と奥壁側の側壁基底石を立て、腰石としている点がある。この奥壁基底石に２枚の腰石を用いる特徴は、瀬戸内市乙佐塚古墳[4]、岡山市北区西山３号墳[5]、総社市立坂北１号墳[6]、赤磐市斎富２号墳第４主体部[7]でも確認できる。岡山県域の横穴式石室の特徴として、奥壁の大型化・一枚化が指摘されているが[8]、奥壁基底石に大きな石材を使うという地域色は、導入時にすでにその萌芽が認められる[9]。

桑山２号墳は、平面形が両側に袖部を持つ両袖式の横穴式石室である（第 178 図）。袖部幅は左袖は 0.2 ｍ、右袖は 0.61 ｍで不均等である。羨道は玄室主軸に対して約 10° 西側に振っている。幅は玄門部分で 0.60 ｍ、長さは１.27 ｍで、細く短い羨道である。用石方法を見てみると、１号墳と異なり、基底石は立てずに使用している。２号墳は１号墳に隣接するが、平面形・用石方法ともに相違点が認められ、異なる系譜の横穴式石室である。このような石室の類例としては、福岡県糟屋郡宇美町正籠３号墳[10]の石室がある（第 178 図・第 20 表）。この両者を比較すると、羨道の規模は近しく、玄室に対して左側に振れるという特徴も共有している。また、玄室長 / 奥壁幅の比は桑山２号墳が 1.30、正籠３号墳が 1.35 であり、相似形と言っても良い平面形の玄室である。このことから両石室は同じ規格に基づいて築かれたと考えられる。また、この２つの石室からは副葬されることが少なくなった素環頭大刀が出土するという共通点もある（第７章第５節）。これらの特徴から両古墳の被葬者間に何らかの繋がりがあったと考えられ、横穴式石室の伝播を考える上で興味深い事例である。

桑山５号墳は、石室の右側壁側が未調査ではあるが、左片袖式の横穴式石室と推定される。奥壁には２枚の腰石を用い、左側壁でも基底部では腰石が使用されるなど１号墳と同様の特徴が認められる。

桑山３・４号墳では、同時期に同一古墳群で横穴式石室が導入されているにもかかわらず、竪穴系の埋葬施設を採用している。この両古墳は横穴式石室を採用した１・２・５号墳が丘陵端部の標高が低い位置に立地しているのに対し、丘陵の端部でも高所の眺望が良い所に立地しており、その選地基準が異なっていることが大きな特徴である。

このように、桑山古墳群では各古墳がほぼ同時期に埋葬されたと考えられるにもかかわらず、古墳



第 178 図　桑山２号墳と正籠３号墳の横穴式石室（1/100）（本書と註 10 より引用）

第 20 表　桑山２号墳と正籠３号墳の比較　（本書・註 10 文献を元に作成）

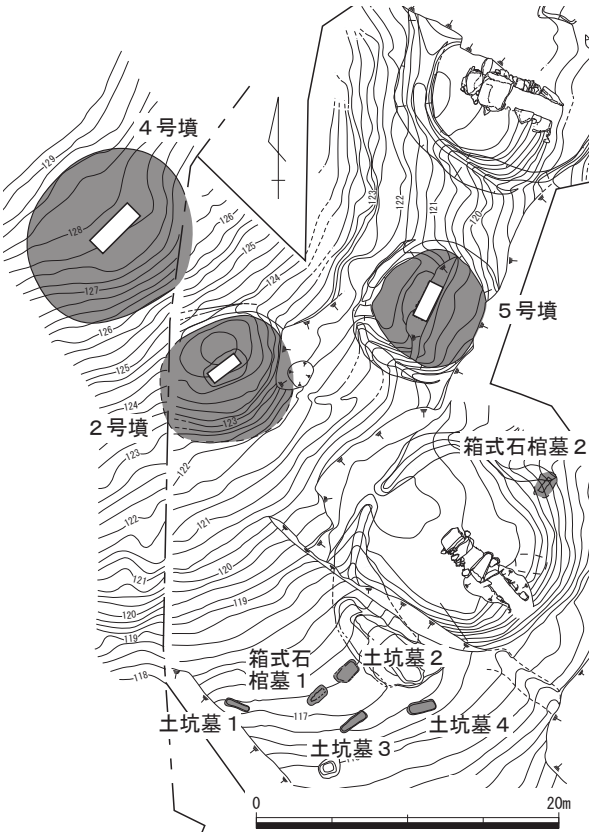
墳墓名	立地	墳形	墳丘規模（ｍ）	玄室（m）					玄室長 / 奥壁幅	羨道（m）	
				玄室長	奥壁幅	前壁部幅	左袖幅	右袖幅		玄門部幅	羨道長
桑山２号墳	尾根端部	円	13	2.41	1.85	1.6	0.2	0.61	1.30	0.6	1.27
正籠３号墳	丘陵頂部	前方後円墳	33	3.1	2.3	1.8	0.36	0.72	1.35	0.7	1.1

により横穴系と竪穴系埋葬施設の選択が異なっており、両者が併存している特徴がある。また同じ横穴式石室という埋葬施設を選択し、ほぼ同時期に隣接して造られた１・２号墳でも、石室の系譜が異なっている。このことから、桑山古墳群では、各古墳ごとに埋葬施設が選択され、その構築技術の入手経路も各古墳ごとに異なっていたといえる [(11)]。

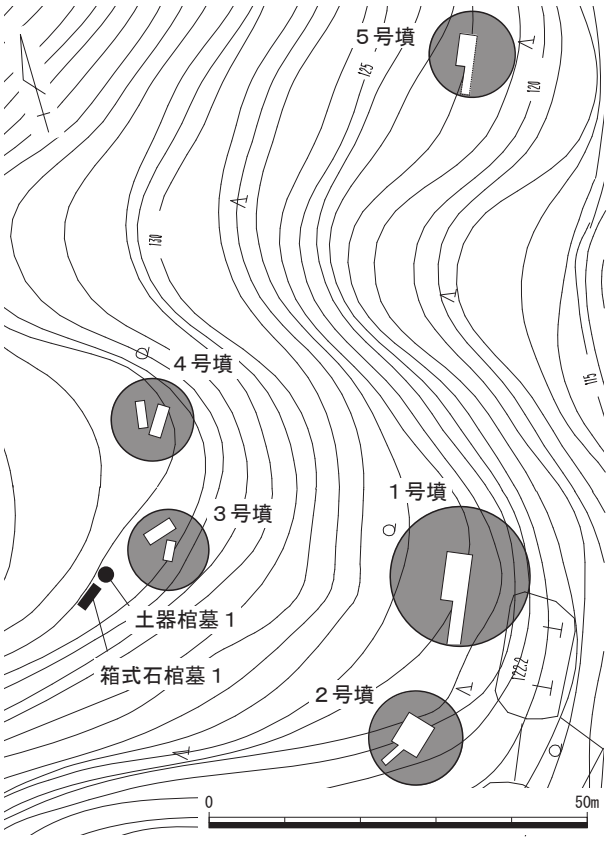
また、４号墳竪穴式石室２の被葬者は、１・２号墳よりも新しい蓋杯も副葬されており（第７章第３節）、１・２号墳の埋葬が終わった後に葬られたと考えられる。このことから、４号墳竪穴式石室２の被葬者は、１・２号墳で行われた葬送儀礼や死生観を知っていたと推測できる。この推測から考えると、この被葬者は横穴式石室という埋葬施設を採用しないだけでなく、後述する低所を選ぶという新たな価値観も受け入れなかったとも考えられるのではないだろうか。このことから、技術的に横穴式石室が築造できなかっただけでなく、新たな死生観の受け入れを拒んだ可能性も考えられ、横穴式石室の受容について考える上で貴重な事例といえよう。

２　桑山南古墳群との比較

桑山古墳群から南に約 140 m離れた支尾根上には、桑山南古墳群 [(14)] が立地する（第２図）。桑山南古墳群では、須恵器の蓋杯と高杯の型式が検討され、墳墓群の構成と形成過程、階層性の問題などについてまとめられている [(15)]。その中で１期（ＴＫ 10 型式）の墳墓について、墳丘・石室の規模や副葬品の内容の差異から階層性の存在が指摘され、Ⅰ～Ⅲ類に分類されている。墳丘や石室の規模が大



第 179 図　１期の桑山南古墳群（1/500）



第 180 図　桑山１～４号墳（1/1,000）

（註 14・15 文献を元に作図）

第 21 表　桑山南古墳群における１期の墳墓

墳墓名	墳丘規模（ｍ）	埋葬施設		副葬品						分類
		埋葬施設名	長さ（ｍ）	馬具	刀	鉄鏃	玉類	刀子	土器	
桑山南４号墳	10	竪穴式石室	3.3	○		○	○	○	○	Ⅰ類
桑山南２号墳	８～９	竪穴式石室	2.1			○	○	○	○	Ⅱ類
桑山南５号墳	８～９	竪穴式石室	2.2			○		○	○	
土坑墓３	—	土坑墓	2.03					○	○	Ⅲ類
土坑墓２	—	土坑墓	1.76					○	○	
土坑墓１	—	土坑墓	1.7						○	
土坑墓４	—	土坑墓	1.94							
箱式石棺墓１	—	箱式石棺	1.04						○	
箱式石棺墓２	—	箱式石棺	1.14						○	

第 22 表　桑山古墳群の墳墓

墳墓名	墳丘規模（m）	埋葬施設		副葬品						分類
		埋葬施設名	長さ（m）	馬具	刀	鉄鏃	玉類	刀子	土器	
桑山５号墳	(10.5)	横穴式石室	7.0	○	○	○	○	○	○	Ⅰ類
桑山１号墳	19.1	横穴式石室	6.3	○	○	○	○		○	
桑山２号墳	13	横穴式石室	3.68	○	○	○		○	○	
桑山３号墳	9.5	箱式石棺	0.96		○	○	○		○	Ⅱ類
		木棺	(2.66)							
桑山４号墳	10	竪穴式石室１	2.05				○	○	○	
		竪穴式石室２	1.98		○	○		○	○	
箱式石棺墓１	—	箱式石棺	1.1						○	Ⅲ類
土器棺墓１	—	土器棺	0.28						○	

きく副葬品に馬具が含まれるⅠ類は標高が高い位置にあり、墳丘や石室規模がⅠ類より小さく副葬品から馬具が欠落するⅡ類が一段下がって立地し、墳丘を伴わない箱式石棺墓及び土坑墓で副葬品に玉類や鉄鏃を欠くⅢ類がさらに降った所に造られていることが指摘されている（第179図・第21表）。

桑山古墳群についてもこの基準を用い、馬具を含むⅠ類、馬具が欠落するⅡ類、墳丘を持たないⅢ類に分類した（第22表）。副葬品について両古墳群を比較すると、桑山古墳群ではⅡ類の古墳まで刀を副葬するが、桑山南古墳群ではⅠ類の古墳でも刀を持っていないという特徴があり、両古墳群の集団差が現れている。立地についても相違点が認められる。桑山南古墳群では有力な古墳が高所に立地する傾向が認められたが、桑山古墳群ではⅠ類に分類される桑山１・２・５号墳は、Ⅱ・Ⅲ類に分類できる桑山３・４号墳と箱式石棺１・土器棺墓１より、標高が低い位置に立地しており、選地基準が異なっている（第180図）。竪穴系の埋葬施設を持つ桑山３・４号墳と箱式石棺１・土器棺墓１は桑山南古墳群で見られるように高所を志向しているが、新たに横穴式石室を採用した桑山１・２・５号墳は丘陵でも低所を選んでいる。この選地の志向の変化から、横穴式石室の採用は、竪穴系埋葬施設とは異なる新たな死生観の採用でもあると考えられる。同じ佐良山古墳群の導入期の石室である中宮１号墳[16]も平野部から比高20～30ｍの平野との比高差が少ない所に立地し、その次の段階に築造された津山市高野山根２号墳[17]でもこの立地は認められ、佐良山古墳群の導入期の横穴式石室墳は丘陵の低所を選ぶ特徴を共有しているといえそうである[18]。この立地の傾向から佐良山古墳群での横穴式石室の導入は、新たな死生観の受容であったともいえるかもしれない[19]。

３　横穴式石室の受容

ＭＴ15～ＴＫ10型式は他の中国・四国地域でも横穴式石室が導入された時期にあたり[21]、横穴式石室は中国・四国各地でほぼ同時期に導入されたと考えられる。それまでは岡山市北区千足古墳[22]の例のように一部の古墳に採用されることがあっても普及する傾向が認められなかった横穴式石室が、この時期になり中四国各地で同時期に採用される。前時代まで受容されなかった横穴式石室が、この時期から各地で導入されたこの傾向から考えると、王権での横穴式石室の採用が、各地で横穴式石室が導入される原因であると考えられる。一方、畿内と同じ用石方法を用いる石室がないことなどから、王権が積極的に各地に横穴式石室を導入させたとは言いがたい。また、桑山古墳群で見られるように同一古墳群や近接する地域で別系譜の石室が採用される[23]という傾向もあり、同一系譜の横穴式石室が面的に広がる傾向は認めがたい。これらの特徴から、横穴式石室は王権の強い主導により導入されたのではなく、各古墳の被葬者の意思により各々の持つ縁故を用いて個別に導入され、それが地域で普及していったと考えられる。　（藤井雅）

註

（１）藤井雅大2013「山陽－横穴式石室の導入と展開－」『中国四国前方後円墳研究会　第16回研究集会　横穴式石室の導入と展開』中国四国前方後円墳研究会

（２）近藤義郎1952「中宮第１号墳発掘調査報告」『佐良山古墳群の研究』津山市

（３）近藤義郎1992『蒜山原四つ塚古墳群（改訂版）』岡山県八束村

（４）乙佐塚古墳埋蔵文化財発掘調査委員会1986『乙佐塚古墳発掘調査報告書』

（５）岡山県教育委員会1996「田益新田遺跡・西山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』109　岡山県教育

委員会

（６）総社市教育委員会 1991「水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群」
『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』９

（７）岡山県教育委員会 1995「松尾古墳群・斎富古墳群・馬屋遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99

（８）新納　泉 1987「緑山古墳群の築造年代と形成の過程」『緑山古墳群』総社市文化振興財団
亀山行雄 1999「吉備の横穴式石室」『論争　吉備』考古学研究会
笹栗　拓 2010「横穴式石室の展開と地域社会の構造」『古代学研究』188　古代学研究会
尾上元規 2020「吉備における横穴式石室の展開と地域性」『横穴式石室の研究』同成社　など

（９）註１文献

(10) 宇美町教育委員会 1990『正籠古墳群』

(11) 近接する古墳間で別系譜の横穴式石室が採用される傾向は瀬戸内海沿岸でも認められる。出崎半島に立地する玉野市出崎灰出１・２号墳 (12) は畿内的な片袖式の平面プランを採用するのに対し、約３㎞西の香川県香川郡直島町に属する喜兵衛島の喜兵衛島２号墳 (13) は北部九州的な要素を多く持っている。出崎灰出古墳群と喜兵衛島古墳群は距離が近いだけでなく、どちらも製塩と関係する集団の古墳群と考えられ、両者は交流があったであろうと想定できるにもかかわらず、異なる系譜の横穴式石室を採用している。

(12) 出崎遺跡緊急発掘調査委員会 1999『出崎灰出１・２号墳』玉野市埋蔵文化財発掘調査報告（６）

(13) 弘田和司 1999「喜兵衛島古墳群の形成とその特質」『喜兵衛島―師楽式土器製塩遺跡群の研究―』『喜兵衛島』刊行会

(14) 岡山県教育委員会 2022「桑山南古墳群・細畝古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』255
津山市 2022「桑山南４号墳発掘調査」『津山市内遺跡調査報告書　平成 30 年度～令和２年度』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 94 集

(15) 尾上元規 2022「古墳群の構成と形成過程」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』255　岡山県教育委員会

(16) 註２文献

(17) 内山敏行・大谷晃二・田中弘志 1991「佐良山古墳群高野山根２号墳について」『古代吉備』第 13 集

(18) しかし、桑山１・２号墳の横穴式石室は等高線に並行し、谷側に開口するのに対し、中宮１号墳は等高線に直交して横穴式石室を構築し、平野に向かって開口しており、石室の向きについては共有しておらず、横穴式石室の死生観や葬送儀礼のすべてを共有していたとは言いがたい状況も認められる。

(19) 同じく導入期の横穴式石室を持つ総社市緑山６号墳 (20)、出崎灰出１・２号墳 (12) などは、丘陵の頂部に立地しており、この立地は岡山県域の導入期の石室すべてで当てはまるわけではない。

(20) 近藤義郎・北條芳隆ほか 1987『緑山古墳群』総社市文化振興財団

(21) 中国四国前方後円墳研究会 2013『中国四国前方後円墳研究会　第 16 回研究集会　横穴式石室の導入と展開』

(22) 岡山市教育委員会 2012「史跡千足古墳」『岡山市埋蔵文化財年報』11
岡山市教育委員会 2013「史跡千足古墳（造山第５号墳）」『岡山市埋蔵文化財年報』12
岡山市教育委員会 2015『千足古墳　－第１～第４次発掘調査報告書－』

(23) 註 11

第５節　素環頭大刀について

桑山２号墳では素環頭大刀が出土している。本項では岡山県域の素環頭大刀の分布の傾向を概観し、桑山２号墳の素環頭大刀の佩用者像について考察したい。

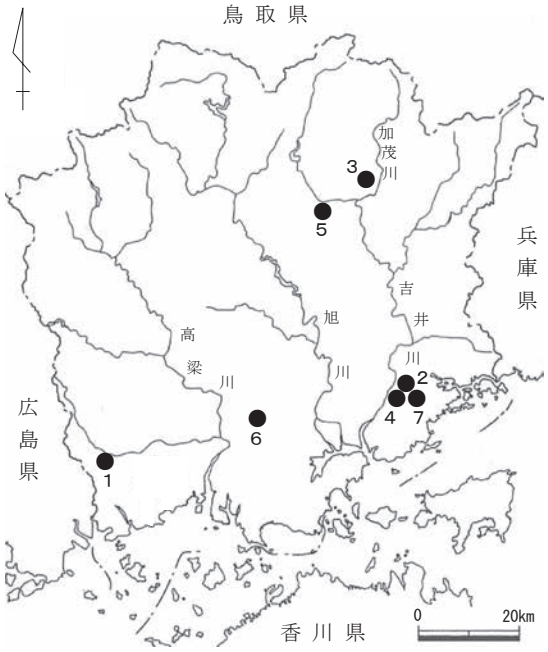
１　岡山県域の素環頭大刀

岡山県域では古墳時代前期から後期にかけて、７振[1]の素環頭大刀がある（第 182 図・第 23 表）。

前期には井原市山手３号墳[2]、瀬戸内市花光寺山古墳[3]の資料がある。山手３号墳は高梁川支流の小田川に隣接する丘陵に位置する直径約 20 ｍの円墳である。昭和２年に竪穴式石室内から人骨と副葬品が出土した。発掘者の書簡によれば「鉄の環頭式柄頭（鍍金なし）に接続せる直刀」があり、二神二獣鏡と銅鏃 29 点と共に出土したようである。花光寺山古墳は吉井川から東に約 1.5 ㎞離れた丘陵頂部に立地する墳長約 86 ｍの前方後円墳である。組み合わせ式長持形石棺の側室から素環頭大刀が出土した。他の遺物は鏡、刀、短剣、長茎剣、銅鏃 17、鉄鏃約 56、鉄斧、鉇、埴輪などがある。

中期には、津山市押入西１号墳[4]、瀬戸内市我城山６号墳[5]で出土している。押入西１号墳は、吉井川水系の加茂川西側の丘陵上にあった直径 12.5 ｍの円墳である。素環頭大刀は木棺上に置かれていたと考えられる。他には鉸具、鋲板、帯先金具、鹿角装刀子、鉄斧、鉄鎌、鑿、鉄釘、土師器、須恵器が出土した。我城山６号墳は、吉井川より約１．５㎞はなれた独立丘陵にある径 10 ｍの円墳である。鉄地銀貼の素環頭大刀が出土している。平面楕円形の鉄地銀装であり、基部に銀板を被せる構造や基部と外環との境に段差をもつ特徴から、百済からの搬入品と考えられている[6]。他の出土遺物に刀剣、鞘尻金具、鉄鏃、鉾、短甲、鉄斧、鉄鑿、鉄針、木心輪鐙、土師器、須恵器、埴輪がある。

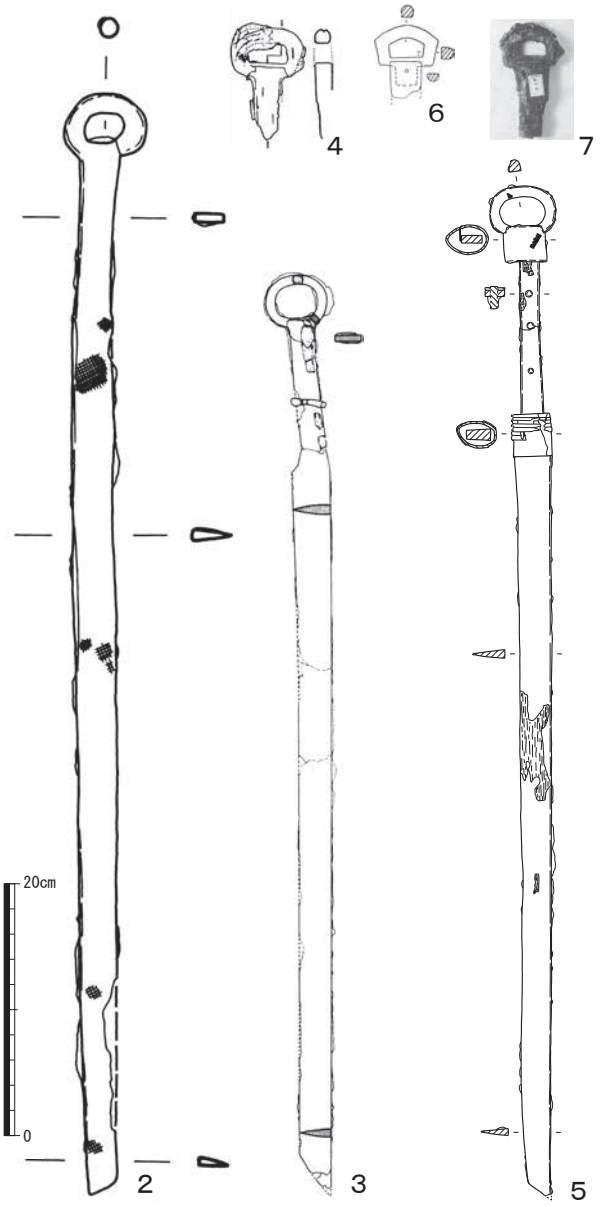
後期には、桑山２号墳の他に、倉敷市王墓山古墳[7]と瀬戸内市金鶏塚古墳[8]で出土する。王墓山古墳は、明治期に遺物が掘られ、墳丘も石室も滅失している。素環頭柄頭は金銅製である。他に鏡、刀、槍、鉾、鉄鏃、甲冑片、轡、鞍金具、雲珠、杏葉、鐙などが出土した。金鶏塚古墳は、吉井川から約４㎞離れて立地する。墳丘は明治時代の開墾で大破しているが、約 35 ｍの前方後円墳と推定される。埋葬施設については、遺物発見当時の新聞記事に「其製二階あり」という記述がある[9]ことから竪穴系横口式石室の可能性も示唆されている[10]。素環頭大刀は鉄地銀貼で環頭部のみの遺存である。平面形は上円下方形で、銀製筒状の無地の把頭金具が装着され、外環が金具に食い込む[11]。他の遺物としては、青銅製馬鐸３、鉄刀、鉄矛、兜片、鉄鏃などがある。



第 181 図　素環頭大刀の分布（1/1,500,000）

※ 番号は第 23 表に対応

岡山県域の素環頭大刀の分布は、前期は県南部で出土し、中期になると吉井川水系の河川付近の古墳で副葬され、後期では吉井川流域と県南部で見つか



第 182 図　岡山県域の素環頭大刀（1/6）
※番号は第 23 表に対応。7 は任意の縮尺。



第 183 図　正籠３号墳の素環頭大刀（1/6）
（註 13 より引用）

第 23 表　岡山県域出土の素環頭大刀

	遺跡名	時期	墳丘		埋葬施設	環頭		特色	出典
			墳形	規模（m）		環頭形状	断面系		
1	山手３号墳	前期	円	20	竪穴式石室	不明	不明		註２
2	花光寺山古墳	前期	前方後円墳	86	長持形石棺	円	円		註３
3	押入西１号墳	中期	円	12.5	木棺直葬	円	隅丸方形		註４
4	我城山６号墳	中期	円	10	木棺直葬か	楕円	D字形	銀張	註５
5	桑山２号墳	後期	円	13	横穴式石室	楕円	D字形		本書
6	王墓山古墳	後期	不明	25 以上	横穴式石室	上円下方形	D字形	金銅製	註７
7	金鶏塚古墳	後期	前方後円墳	35	竪穴系横口式石室？	上円下方形	不明	銀張	註８

第 24 表　桑山２号墳と正籠３号墳の素環頭大刀の比較

	全長（cm）	刃部幅（cm）	茎長（cm）	茎幅（cm）	環頭				関	出典
					形状	断面形	長径（cm）	短径（cm）		
桑山２号墳	(80.2)	(刃関部）2.9 (中央部）2.5	(環頭装着時）〔15.9〕 (刀身長）〔12.7〕	1.6	楕円	D字形	5.25	3.7	両関？	本書
正籠３号墳	(66.5)	(刃関部）2.5	12.6	1.5	楕円	D字形	4.8	3.5	両関	註 13

※１（数値）は残存値　　※２〔数値〕は推定値　　※３ 正籠３号墳の数値は実測図より計測

る特徴がある。また前期から後期にかけて古墳に副葬され続ける点が指摘できる。わずかな点数の差ではあるが、素環頭大刀の副葬が衰退した後期 (12) に最大数が出土することは注目できる点であろう。

２　素環頭大刀の佩用者像

桑山２号墳と同時期の資料としては、福岡県糟屋郡宇美町正籠３号墳 (13) の例がある（第 183 図）。環頭部分の製作技術を比較すると、桑山２号墳では別作り (14) で、正籠３号墳では共作りという差異がある。一方、計測値を比較すると、刃部幅 (15) と茎幅は近似する数値が見受けられる（第 24 表）。また桑山２号墳の関は明確な形状を確認できないが、刃関幅と茎幅の比較から、正籠３号墳と同じ不均等両関と推定できる。環頭部分を比較すると、桑山２号墳の長径がやや長いものの、楕円形を呈する形状やＤ字形の断面形、短径幅などが近似する。これらの特徴からこの２例は、製作方法は異なるものの、同じ寸法を意識して製作され、同様な装具が取り付けられていた可能性がある。

桑山２号墳と正籠３号墳の共通点は、副葬が減少していた素環頭大刀を持つことだけでなく、横穴式石室構造も類似点が指摘でき（第７章第４節）、桑山２号墳の被葬者が正籠３号墳の被葬者との何らかの関係を持っていたことを想起させる。また近い時期の素環頭大刀を持つ金鶏塚古墳の埋葬施設が北部九州の色合いが強い竪穴系横口式石室の可能性が指摘されていることも興味深い。また、素環頭大刀の副葬が減る後期に、同じ規格の素環頭大刀が製作されていることを考えると、後期の素環頭大刀は職位や氏族などを表していたとも考えられるのではないであろうか。　　（藤井雅）

註

（１）他に県南部の旭川水系流域に位置するみそのお５号墳の刀は、素環頭が切断された可能性が指摘されている。ライアン・ジョセフ 2019「古墳出現期における刀剣類の生産と流通の二相」『日本考古学』第 49 号

（２）間壁忠彦・高田知樹・間壁葭子 2005「考古編第一章第三節古墳の築かれたころ」『井原市史Ⅰ』自然風土・考古・古代・中世・近世通史編

（３）亀田修一 1998「花光寺山古墳」『長船町史』史料編（上）

（４）岡山県教育委員会 1974「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』３

（５）近藤義郎 1969「備前邑久町我城山６号墳」『古代吉備』第６集
馬場昌一 2006「我城山古墳群」『邑久町史』考古編

（６）金宇大 2017『金工品から読む古代朝鮮と倭』京都大学学術出版会

（７）山本雅靖・間壁忠彦・三木文雄 1974「王墓山古墳」『王墓山遺跡群』倉敷市教育委員会

（８）江見正己 1998「金鶏塚古墳」『長船町史』史料編（上）

（９）平井　勝・宇垣匡雅 1990「岡山県長船町亀ヶ原所在の前方後円墳」『古代吉備』第 12 集

(10) 葛原克人 1991「第五章第二節　巨墳の造営」『岡山県史』第二巻　原始・古代Ⅰ

(11) 註６文献

(12) 斎藤大輔 2019『古墳時代の武装と境界領域』福岡大学大学院人文科学研究科史学専攻考古学専修
令和元年度 博士学位申請論文［文学］

(13) 宇美町教育委員会 1990『正籠古墳群』

(14) 豊島直博 2006「三燕および日本出土鉄製刀剣の比較研究」『東アジア考古論叢』奈良文化財研究所

(15) 刃関幅は差異があるが、桑山２号墳の資料では刃関付近でやや幅が広がるため、平均的な刃部幅で比較した。

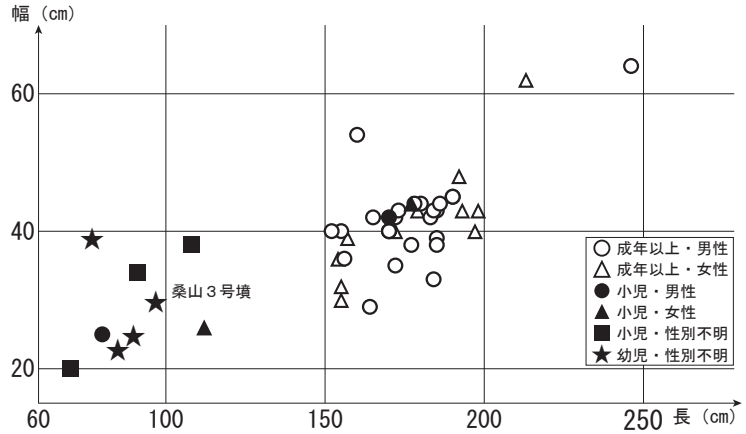
第６節　桑山３号墳箱式石棺の幼児埋葬について

桑山３号墳の中心埋葬である箱式石棺の被葬者は、人骨の形質学的分析（本書第６章第４節）により２～４歳の幼児であることが明らかとなった。箱式石棺内には鹿角装短刀が２点、鉄鏃 19 点、50 点の玉類が副葬されており、他の埋葬と比較しても遜色がない。本節では、岡山県内及び周辺地域の古墳時代の幼児・小児の埋葬について検討し、桑山３号墳箱式石棺のもつ性格について考察を行う。

本節では、箱式石棺の規模は床面の内法の最大長及び最大幅で計測した。被葬者の年齢区分については松下孝幸による区分[(1)]に従い、乳児（１歳未満）、幼児（１～５歳）、小児（６～ 15 歳）、成年（16 ～ 20 歳）、壮年（21 ～ 39 歳）、熟年（40 ～ 59 歳）、老年（60 歳以上）とし、性別・年齢の判定は基本的に各報告に基づいている。

１　人骨出土箱式石棺の規模と年齢

第 184 図に岡山県内（幼児・小児のみ鳥取県・島根県の資料を含む）における人骨が出土した箱式石棺（岡山県 40 例、鳥取県・島根県９例）の床面規模と初葬人骨の性別・年齢を示す。箱式石棺における人骨の出土状況は、再葬と同棺複数埋葬で移動されたものを除けば基本的に仰臥伸展葬であった。



第 184 図　箱式石棺の床面規模と出土人骨の年齢・性別

箱式石棺の床面規模は成年以上とそれ以下で明確に分かれており、葬られる人物の身体に合わせて石棺の規模が決定されることを示す。２例の小児（岡山・南坂 27 号墳、島根・菅沢谷 C-5 号墓）は床面長軸が 170cm を超え成年以上の埋葬と同様の規模を有するが、どちらの人骨も 10 代前半という鑑定を受けており、成年以上と体格に大きな差異がなかったものと思われる。参考程度ではあるが、昭和 23（1948）年度の「学校保健統計調査」[(2)]によると、７歳の平均身長は 107.3cm（女子）・108.2cm（男子）、11 歳は 125.7cm（女子）・126.1cm（男子）、15 歳は 149.5cm（女子）・151.9cm（男子）、18 歳が 152.0cm（女子）・160.4cm（男子）であり、小児の後半期では成年以上との明確な区別がやや困難となる。ここでは概ね箱式石棺の内法長軸が 120cm を超えないものを幼児～小児前半の埋葬と考えておく。

２　古墳時代の幼児・小児埋葬の位置

対象地域における幼児・小児埋葬の墓域における位置について整理を行う。ここでは清家章の用語[(3)]に従い、墳丘の中央部に設けられた最も中心的な埋葬施設を主要埋葬施設、墳丘の主要平坦面に位置するその他の埋葬施設を副次的埋葬施設、墳丘斜面や裾部、周溝の内外に設けられる埋葬施設を周辺埋葬施設とする。また、同一の棺に２体以上の埋葬を行う事例を同棺複数埋葬と呼ぶ。

第 25 表に、古墳時代における箱式石棺出土人骨によって確かめられた幼児・小児の埋葬について

整理した。対象地域は岡山県・鳥取県・島根県で、幼児・小児の埋葬は 14 遺跡で 23 体が知られる。

岡山県内における古墳時代前期の事例としては、鏡野町竹田５号墳中央北棺出土人骨がある。この箱式石棺は、一辺約 17 ｍの墳丘中央に掘られた中央墓坑に中央南棺とともに東西位で置かれ、中心埋葬施設といえる。石棺内には２号人骨（女性・壮年）と３号人骨（12 ～ 13 歳の小児）がともに仰臥伸展位で葬られていた。人骨の位置が乱れていないことから、ほぼ同時に葬られたとみられる。２号人骨と３号人骨に血縁がある場合は、母－子、もしくはキョウダイと考えられよう。

古墳時代中期の事例としては、津山市久米三成４号墳がある。全長 35 ｍの前方後方墳であり、前方部第２主体である箱式石棺で熟年女性と性別不明の小児の２体の人骨が出土した。この２体は年齢差から母－子、もしくは２親等程度（祖母－孫、オバーオイ or メイ）と思われる。後方部第１主体である箱式石棺からも２体の人骨（男性・壮年後半～熟年前半、女性・壮年）が出土しており、こちらはキョウダイと推定されている(4)。また､後方部西裾部（第３・５主体）と後方部墳丘内（第４主体）の３基の箱式石棺が周辺埋葬施設として築かれている。これらは内法 65 ～ 80㎝と小さく、本考察第１節の検討から幼児または小児埋葬とみてよい。同じく中期の事例としては、岡山市北区南坂 27 号墳で小児に位置づけられる人骨が中心埋葬施設より出土している。東西約９ｍ×南北約 6.4 ｍの方墳で墳頂部中央に箱式石棺が設けられており、他に埋葬施設は存在しない。被葬者は 10 代前半の男性と推定され、棺内には２本の鉄剣が副葬されていた。

山陰地域で最も多くの幼児･小児の埋葬が確認されているのは鳥取県湯梨浜町長瀬高浜遺跡である。特に径 24 ｍの円墳である長瀬高浜１号墳の墳丘周溝内外には多くの周辺埋葬施設があり、幼児・小児埋葬と推定される箱式石棺・埴輪棺が 15 基存在する。墳頂の埋葬施設は熟年女性の人骨が出土した箱式石棺が１基のみであり、これらの周辺埋葬施設の幼児・小児は中心埋葬施設の女性との関係性によって埋葬する位置が決定された可能性は十分に考えられる。また同棺複数埋葬の事例では、鳥取県鳥取市糸谷３号墳１号石棺の初葬者である壮年後半の女性（２号人骨）が注目される。この女性の寛骨には妊娠痕の可能性がある浅いピットが認められ、歯冠計測値による分析では同棺に埋葬された８歳前後と推定される小児（３号人骨）と血縁関係が指摘できるという(5)。この検討が正しいならば、この小児は初葬女性の子であることを理由として同棺に葬られたと考えるのが自然である。

このように考えてみると、小児を含む同棺複数埋葬の事例（12 例）の内、性別が不明な鳥取県石州府 103 号墳と男性と推定される長瀬高浜遺跡 SX49 を除く 10 例で壮年～熟年女性とともに葬られていることは重要である。また単独で埋葬施設に葬られる例でも、幼児・小児自身が中心埋葬である事例を除けばほぼ全てが女性を中心埋葬とする古墳の副次的埋葬施設・周辺埋葬施設となっている。こうした状況は、幼児・小児の墓域における位置が女性との母－子を中心とする血縁関係を基本として決定されたことを示す。

３　桑山３号墳箱式石棺被葬者の地位について

前節までに、古墳時代を通して幼児・小児は女性との血縁関係を基本として位置が決定されることを指摘した。こうした幼児・小児の埋葬のほとんどは同棺複数埋葬もしくは副次的・周辺埋葬施設として存在し、古墳築造の契機となることはない。古墳時代中期までの事例で、小児が墳丘の主要埋葬施設に単独で葬られ、他に埋葬施設が存在しないものは岡山・南坂 27 号墳と島根・奥才 17 号墳第１主体があるが、これらの被葬者はいずれも小児後半であり、箱式石棺の規模からも成年以上の埋葬と

第 25 表　古墳時代における箱式石棺出土幼児・小児人骨（岡山県・鳥取県・島根県）

県	遺跡名	時期	遺構	位置	人骨	性別	年齢	属性	中心となる埋葬	中心者の性別	年齢
岡山	竹田５号墳	前期	中央北棺	主要埋葬	3 号	不明	小児	同棺複数埋葬	同棺２号	女性	壮年
岡山	南坂 27 号墳	中期前半	－	主要埋葬	－	男	小児 (10 代前半)	単独埋葬施設	本埋葬	－	－
岡山	久米三成４号墳	中期前半	第２主体部	主要埋葬	2 号	不明	小児	同棺複数埋葬	同棺１号	女性	熟年
岡山	桑山３号墳	後期	箱式石棺	主要埋葬	－	不明	幼児	単独埋葬施設	本埋葬	－	－
鳥取	糸谷３号墳	前期	第１石棺	主要埋葬	3 号	不明	小児	同棺複数埋葬	同棺２号	女性	壮年後半
鳥取	長瀬高浜遺跡	中期	3 号墳 第３埋葬	副次的埋葬	－	不明	小児	単独埋葬施設	第２埋葬	女性	壮年
鳥取	長瀬高浜遺跡	中期	25 号墳 第２埋葬	副次的埋葬	3 号	不明	小児	同棺複数埋葬	同棺２号	女性	壮年前半
鳥取	長瀬高浜遺跡	中期	SX34	周辺埋葬	－	不明	小児	単独埋葬施設	不明	不明	不明
鳥取	長瀬高浜遺跡	中期	SX41（F 区） 1 号墳周溝内	周辺埋葬	－	不明	幼児	単独埋葬施設	1 号墳 第１埋葬	女性	熟年
鳥取	長瀬高浜遺跡	中期	SX42（F 区） 1 号墳周溝内	周辺埋葬	－	不明	幼児	単独埋葬施設	1 号墳 第１埋葬	女性	熟年
鳥取	長瀬高浜遺跡	中期	SX45（F 区） 1 号墳周辺	周辺埋葬	－	不明	幼児	単独埋葬施設	1 号墳 第１埋葬	女性	熟年
鳥取	長瀬高浜遺跡	中期	SX49（F 区） 1 号墳周溝内	周辺埋葬	2 号	不明	幼児	同棺複数埋葬	同棺１号	男性	（成人）
鳥取	長瀬高浜遺跡	中期	SX56（F 区） 1 号墳周辺	周辺埋葬	－	不明	（若年者）	単独埋葬施設	1 号墳 第１埋葬	女性	熟年
鳥取	長瀬高浜遺跡	中期	SX69(G 区) 5 号墳周辺	周辺埋葬	－	不明	小児	単独埋葬施設	5 号墳 第１埋葬	女性	（若年者）
鳥取	長瀬高浜遺跡	中期	SX79（G 区） 7 号墳周辺	周辺埋葬	－	女	小児	単独埋葬施設	不明	不明	不明
鳥取	長瀬高浜遺跡	中期	SX94	周辺埋葬	－	男	小児	単独埋葬施設	不明	不明	不明
鳥取	越敷山 51 号墳	中期	埋葬施設 1	主要埋葬	5 号	不明	小児	同棺複数埋葬	同棺４号	男性?	不明
鳥取	六部山 28 号墳	中期後半	第１主体部	副次的埋葬	－	不明	幼児	単独埋葬施設	第２主体部	不明	不明
鳥取	石州府 103 号墳	後期	（箱式石棺）	主要埋葬	－	不明	小児	同棺複数埋葬	同棺	不明	成年
鳥取	日下 12 号墳	後期	（箱式石棺）	主要埋葬	5 号	不明	幼児	同棺複数埋葬	同棺１号	男性	壮年
鳥取	日下 12 号墳	後期	（箱式石棺）	主要埋葬	6 号	不明	幼児	同棺複数埋葬	同棺１号	男性	壮年
鳥取	日下 12 号墳	後期	（箱式石棺）	主要埋葬	7 号	不明	幼児	同棺複数埋葬	同棺１号	男性	壮年
鳥取	寺山１号墳	不明	（箱式石棺）	主要埋葬	5 号	不明	小児	同棺複数埋葬	不明	不明	不明
島根	奥才 17 号墳	中期	第１主体部	主要埋葬	―	―	小児 (13 ～ 14 歳)	単独埋葬施設	本埋葬	－	－
島根	菅沢谷 C-5 号墓	後期	（箱式石棺）	横穴墓内	1 号	女	小児	単独埋葬施設	不明	不明	不明
島根	滝ノ谷尻横穴墓	後期	（箱式石棺）	横穴墓内	Ⅲ号	不明	小児	同棺複数埋葬	Ⅰ号	男性	壮年

遺跡文献　竹田５号墳：『竹田墳墓群』鏡野町教育委員会 1984　**南坂 27 号墳**：『南坂古墳群（15 号墳他 5 基）』岡山市教育委員会 2009　**久米三成４号墳**：「久米三成４号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』30 岡山県教育委員会 1979　**桑山３号墳**：本書　**糸谷３号墳**：「糸谷古墳群」『同志社大学文学部考古学調査報告』 9 同志社大学文学部文化学科内考古学研究室 1994　**長瀬高浜遺跡**：『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』５・６ 鳥取県教育文化財団 1983　**越敷山 51 号墳**：『金廻家ノ上ノ内遺跡・越敷山古墳群（金廻地区）』鳥取県教育文化財団 2013　**六部山 28 号墳**：『六部山古墳群２』鳥取市教育福祉振興会 1995　**石州府 103 号墳**：『石州府古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会 1989　**日下 12 号墳**：『日下古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会 1992　**寺山１号墳**：金高勘二「伯耆国東伯郡東郷村大字別所字寺山古墳人骨（頭蓋骨）の人類学的研究」『人類学雑誌』第 44 巻第２付録 1929　**奥才 17 号墳**：『奥才古墳群』鹿島町教育委員会 1985　**菅沢谷Ｃ−５号墓**：「菅沢谷横穴墓群」『財団法人松江市教育文化振興事業団文化財調査報告書』３ 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 1994　**滝ノ谷尻横穴**：『マタイ廻横穴墓・小池横穴群・小池奥横穴群・天狗松横穴群・滝ノ谷尻横穴：諸工事に関わる横穴墓調査』奥出雲町教育委員会 2010

同等の扱いがなされたものとみられる。

こうしたなかで、桑山３号墳箱式石棺の被葬者は極めて特異な状況を示す。被葬者は２～４歳の幼児であるにもかかわらず、古墳築造の契機となっている。石棺内には鹿角装短刀２点、長頸鏃 19 点、多量の玉類による首飾りが副葬される。玉類は出雲産（碧玉・水晶）のほか、畿内産（埋木製棗玉２点）、中国山間部産（泥岩･流紋岩･蛇紋岩）があり、複数地域から入手した玉をセットで用いている。また鹿角装短刀も、在地ではなく他地域からもたらされたものと思われる。副葬品の量と質では、成人の埋葬を上回っているとすら言えるのである。

こうした副葬品は、幼児である被葬者本人が入手したとは考えにくいため、有力世帯の長(家長)などから与えられたものと思われる。そして、多量の副葬品を伴うことはこの幼児が集団内でも特定の地位を継承するべき立場であったことを示唆している。また人骨の観察からも、乳歯にエナメル質減形成がほとんど認められないことから、非常に柔らかい食物を食べ栄養状態が良好であったと思われることが報告されており、被葬者が特定の高い地位にあったということと調和的である。

清家章によると、古墳時代中期後半から後期の非首長層における地位継承は、一部で豊富な武器を副葬し男性が被葬者として意識的に選択される事例が存在するものの、基本的には前期以来のキョウダイ原理の埋葬が主流であり、女性家長が依然として認められる「父系にやや傾いた双系的地位継承」が行われたと説く(6)。桑山３号墳箱式石棺内には、矢柄を着装し９～10点程度を一束とした長頸鏃が両足側に副葬されていた。管見の限りでは、本例を除けば未成人の埋葬に10点以上の鉄鏃が伴う例はなく、鉄鏃の大量副葬は成人の埋葬に限られる。このことは被葬者である幼児が、成人男性と同様の武装を伴ったことを示す(7)。すなわち、この幼児の地位の基盤は軍事編成の進展のなかで理解すべきであろう。

桑山３号墳箱式石棺の幼児が、所属した集団の家長からみてどのような関係にあったかは不明である。しかし、年齢の近いキョウダイなどの近親者ではなく、集団の正式な構成員としては認知され難い段階である幼児に対して地位を継承すべき者として認識していたということ自体が、古墳時代後期における父系化しつつある集団のあり方と親族構造を示しているのである。

本節では紙幅の都合上各資料の詳細なデータを提示することができなかった。また本来であれば箱式石棺の規模から推定できる、人骨の残らない埋葬を含めて古墳時代における年少者の地位を検討すべきであるが、桑山３号墳の特異性を述べるのみにとどまった。今後稿を改めて資料を提示したい。

（四田）

註

（１）松下孝幸 1996「土井ヶ浜遺跡第 14 次調査出土の中世･弥生人骨」『土井ヶ浜遺跡第 14 次発掘調査報告書』山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 12 集 豊北町教育委員会

（２）e-Stat　政府統計の総合窓口　学校保健統計調査　http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa05/hoken/1268826.htm　（2022 年 12 月 28 日閲覧）

（３）清家　章 2010『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会

（４）田中良之『古墳時代親族構造の研究－人骨が語る古代社会－』柏書房 1995

（５）註３文献

（６）註３文献

（７）註３文献

第７節　美作地域における後期埴輪の展開と終焉

桑山古墳群では、５基のうち４基の古墳で埴輪が出土しており、小円墳からなる群集墳ながら埴輪の保有率は非常に高いといえる。また、南に近接する桑山南古墳群で５基中１基[13]、細畝古墳群でも３基中１基で埴輪が出土している。本節では、これらの古墳を含め美作地域における後期埴輪の様相についてまとめ、加えて埴輪生産との関連が深いと考えられる陶棺の出現についても整理することとする。また、本書の編集上、第５章において触れることのできなかった桑山古墳群出土埴輪の製作技法など細部の特徴についても、ここで補足しておきたい。

１　美作地域における後期埴輪の変遷

桑山・桑山南・細畝古墳群における一連の発掘調査で出土した埴輪の様相を踏まえ、美作地域における埴輪の変遷について検討する。対象とする時期は、十六夜山古墳が築造され埴輪においても画期となる５世紀後葉から、埴輪が消滅する６世紀後半までとする。川西宏幸による円筒埴輪の編年[14]でⅤ期に相当し、さらにこれを美作地域の埴輪の様相からⅤａ～Ⅴｄの４期に細分する。紙幅の制約から検証過程は割愛するが、円筒埴輪の製作技法上の変化や形象埴輪の減少傾向などを手がかりとし、また出土須恵器の型式も参照している。共伴する須恵器の型式は、Ⅴａ期がＴＫ 23 ～ＴＫ 47 型式、Ⅴｂ期がＭＴ 15 ～ＴＫ 10 型式、Ⅴｃ期がＴＫ 10 型式、Ⅴｄ期がＴＫ 43 型式である。つづくＴＫ 209 型式期に確実に降る埴輪は当地域では確認できず、消滅しているとみられる。以下、各期の埴輪の様相を整理する（第 185 図、以下（数字）は同図における番号を示す）。

第 26 表　美作地域における主なⅤ期の埴輪

時期	古墳名	円筒埴輪											石見型埴輪	その他形象埴輪	出土須恵器型式	墳形（規模）ほか	文献（註）
		２次調整ヨコハケ		段数			最下段帯突		底部調整	ヘラ記号							
		有	無	６段	５段	４段	押圧	断続ナデB		波形文	⊗文						
Ⅴａ	十六夜山古墳	○	○	○			○		○			○	盾／蓋／家	－	前方後円（60ｍ）	1
	井口車塚古墳	○	○			○	○		○				盾／家／人	－	帆立貝形（36ｍ）	2
	才ノ峪１号墳	○					○		○					TK47	円（８ｍ）	3
	日上畝山３号墳	○				○			○					－	円（10ｍ）	4
	日上畝山 67・69 号墳	○	○						○	○				TK47	不明	4
Ⅴｂ	北山１号墳	△	○			○	△		○		○		人	MT15	円（19ｍ）	5
	六ツ塚５号墳		○		○		○		○					MT15 ～ TK10	円（15ｍ）、転用棺	6
	日上畝山 58 号墳	△	○									○	人	MT15 ～ TK10	前方後円（32ｍ）	4
	中宮１号墳		○			○	○							TK10	帆立貝形（24ｍ）	7
	日上畝山 60 号墳	△	○			○			○			○		TK10	円（12ｍ）	4
Ⅴｃ	小池谷１号墳		○			○			○	○	○			TK10	円（７ｍ）	8
	河辺上原１号墳		○						○		○		人	TK10	円（17ｍ）	9
	日上和田古墳		○			○			○	○				TK10	円（19ｍ）	10
	桑山１号墳		○		○				○			○		TK10	円（19ｍ）	本書
	桑山２号墳		○		○			○	○			○		TK10	円（13ｍ）	本書
Ⅴｄ	桑山５号墳		○			○			○	○				TK43	円（10ｍ）	本書
	細畝３号墳		○											TK43	円（13ｍ）	11
	西村１号墳		○						△					－	円（10ｍ）	12

※　○・△は当該古墳出土資料において各属性が確認できることを示すが、段数については推定を含む。
※　△は全体の個体数の中でわずかに認められ出現率の低い属性を示す。ただし、個体数が少なく出現率が不明な場合は○とした。
※　日上畝山 67・69 号墳は、同一古墳の可能性が指摘されているため一括した。

Ｖａ期

十六夜山古墳及び井口車塚古墳出土埴輪を標識とする。美作地域では古墳時代中期に前方後円墳の築造が途絶えたが、当期に墳長約 60 ｍの前方後円墳である十六夜山古墳が出現し、この頃から美作地域での埴輪資料が増加する。十六夜山古墳と井口車塚古墳はいずれも時期を特定できるような須恵器が出土していないが、類似する様相の埴輪をもつ才ノ峪１号墳でＴＫ 23 ～ＴＫ 47 型式の須恵器が伴っている。

円筒埴輪の外面調整は、下から１段ないし２段の２次調整を省略し、それより上位に２次調整のヨコハケを施すもの（１）が主体を占めるが、２次調整を全面的に省略した個体（２）も一定程度認められる。出土個体数の多い十六夜山古墳における両者の比率はおよそ７：３であり、井口車塚古墳でも資料数は少ないものの両者の共存が確認でき、ヨコハケが主体となるようである。ヨコハケには、静止痕をもつＢ種ヨコハケ[15]が多用されている。段構成は、十六夜山古墳（１）が６段であるのに対し、日上畝山３号墳（４）や井口車塚古墳（５）は４段であり、段数や高さによって社会的階層差を表現していると考えられる[16]。基底部には底部調整[17]が広く採用されるが、十六夜山古墳ではその施工範囲が狭く底面から１～２㎝の幅に留まるのに対し（１）、井口車塚古墳では基底部の大半に及ぶ（５）などの差異がある。最下段突帯の押圧技法[18]は、十六夜山古墳で多用されており大部分の個体に認められる（１・３、写真 70 －１）。井口車塚古墳や才ノ峪１号墳でも資料数は限られるがその存在が確認でき、広く採用された様子が窺える。口縁部外面のヘラ記号は、十六夜山古墳において二重の逆「Ｕ」字形（１）、「介」字形（２）、「Ｘ」字形など多種のものがあり、多くの工人が製作に参加した様子が窺える。そのなかで、「介」字形の記号をもつ個体がいずれも外面タテハケ調整であるなど、ヘラ記号と製作技法との対応関係も認められる。また、後述のＶｃ・Ｖｄ期に普遍的にみられるようになる波形文が日上畝山 67･69 号墳で出現しているが（６）、他地域でも散見されるモチーフであり、Ｖｃ・Ｖｄ期のものと同一系統といえるか不明である。

形象埴輪では、盾・蓋・家・人物などがあり、特に前方後円墳の十六夜山古墳と帆立貝形古墳の井口車塚古墳で多種のものが伴う。また、十六夜山古墳において石見型埴輪が出現しており、美作地域における初現例と考えられる。

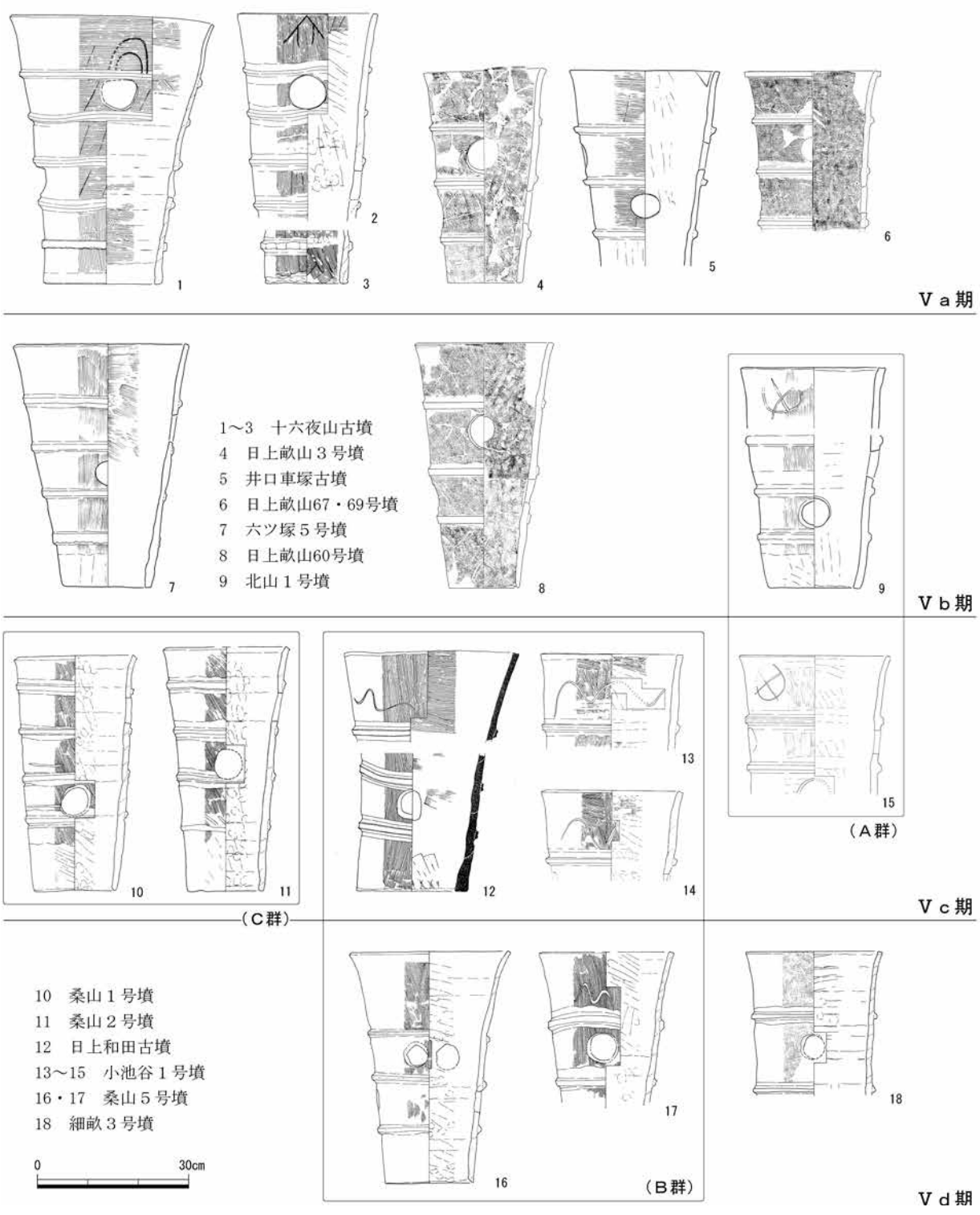
Ｖｂ期

北山１号墳などがまとまった資料で、標識となりうる。円筒埴輪の外面調整は、２次調整を省略したタテハケの埴輪が大部分を占めるが、２次調整のヨコハケを施す個体もわずかに含まれる。北山１号墳では、ほとんどの個体が外面タテハケで（９）、わずか数点の破片のみにＢ種ヨコハケが認められる。段構成は、６段のものは確認できず、六ツ塚５号墳が５段（７）、日上畝山 60 号墳が４段（８）である。北山１号墳も、全形の判明する資料がないものの、透かし孔の配置などから４段と判断される。底部調整は引き続き盛んに行われており、六ツ塚５号墳（７）や日上畝山 60 号墳（８）、北山１号墳（９、写真 71 －１）において確認できるが、北山１号墳では底部調整を行わない個体も少数ある。最下段突帯の押圧技法は、六ツ塚５号墳（７、写真 70 －２）や北山１号墳、中宮１号墳で認められるが、北山１号墳では多数の個体のうちわずか１点のみに限られる。ヘラ記号は、⊗文が北山１号墳（９）で出現しており、次のＶｃ期にかけて複数の出土例がある。

石見型埴輪は、日上畝山 58 号墳、同 60 号墳で出土している。その他の形象埴輪は、人物や動物を少数伴う例があるが、Ｖａ期にみられた盾・蓋・家はほぼ姿を消し、明らかに衰退傾向にある。

Ｖｃ期

桑山１・２号墳や小池谷１号墳などがまとまった良好な資料である。円筒埴輪の外面調整は、２次調整のヨコハケを施すものが完全に姿を消す。１次調整のハケメは、垂直方向のタテハケが主流であるが、桑山１～３号墳はやや左に傾くナナメハケである（10・11）。段構成は、桑山１・２号墳（10・11）が５段であり、日上和田古墳（12）、小池谷１号墳（13～15）は全形の分かる資料がないものの、透かし孔の配置などから４段と判断される[19]。底部調整は引き続き広く認められ、大部分の個体に



第 185 図　美作地域における円筒埴輪の編年


1　押圧技法（十六夜山古墳）


2　押圧技法（六ツ塚５号墳）


3　断続ナデ技法Ｂ（桑山２号墳）

写真 70　最下段突帯製作技法


1　板オサエ（北山１号墳）


2　板ナデ（桑山１号墳）


3　板オサエ（桑山５号墳）

写真 71　底部調整

施される。桑山１・２号墳では基底部の 2/3 以上の範囲に板ナデ（10、写真 71 － 2）や板オサエ（11）を加えており、小池谷１号墳では板オサエやヘラケズリを施すなど、バリエーションがある。また、日上和田古墳では底部調整を伴う個体と伴わない個体（12）が混在する。最下段突帯の押圧技法は当期には確認できなくなる一方､桑山２号墳では断続ナデ技法Ｂ [(20)] による無調整突帯が認められる（11、写真 70 － 3）。最下段突帯の上部に指等で斜めにナデ付けた痕跡が断続し、突帯下縁も波打つ形状で、ヨコナデ調整を欠く。ヘラ記号は、⊗文と波形文の２種がともに認められる。小池谷１号墳では両者が共伴しているが（13 ～ 15)、記号の違いと外面色調の違いに対応関係が認められ、生産単位の違いを示唆している。

石見型埴輪は、桑山１・２号墳でわずかな破片が出土している。その他の形象埴輪は、河辺上原１号墳において人物埴輪が出土している程度であり、前段階に続き衰退傾向を示す。

Ｖｄ期

桑山５号墳出土埴輪を標識とするが、美作地域における埴輪の衰退期であり、Ｖｃ期に比べ資料数が激減する。円筒埴輪の外面調整はタテハケである。段構成が判明するのは桑山５号墳のみで、４段である（16)。底部調整は、桑山５号墳ではすべての個体に施されており、板オサエに加え、ナデや指頭圧痕も認められる。板オサエは、板状工具の端が器面に当たって線状の凹みを生じるなど粗いものが多く（写真 71 － 3)、施工の粗雑化が進行しているとみられる。一方、西村１号墳では底部調整がほとんど確認できない。最下段突帯の押圧技法や断続ナデ技法Ｂはいずれの古墳においても認められず、すべてヨコナデによって仕上げられている。ヘラ記号は、⊗文が確認できなくなる一方、波形文は桑山５号墳（17）において認められる。細畝３号墳の朝顔形埴輪においても口縁部外面に波形文を描くものがあり、関連する可能性がある。

円筒埴輪以外では、桑山５号墳と細畝３号墳が朝顔形埴輪を伴っているが、石見型を含め形象埴輪はこの時期には確認できず、消滅しているとみられる。

小　結

以上の編年案をまとめると、円筒埴輪外面の２次調整と最下段突帯押圧技法及び形象埴輪が、いずれも徐々に減少していく方向で整理が可能である。ただし、円筒埴輪の技術的特徴では、新旧要素が同一古墳内で混在する場合も多く、比較的まとまった個体数のうちに占める各要素の割合として検討する必要もある。したがって、個体数の少ない場合や単体の埴輪では、詳細な時期の特定は困難といえる。また、Ｖｃ期とＶｄ期の区別は、円筒埴輪では底部調整の粗雑化などが目安となる可能性をもつものの、資料数が少なく明瞭でない。現状では形象埴輪の消滅もひとつの基準と考えている。

次に、畿内地域との並行関係についてであるが、廣瀬覚によるＶ期の細分編年[21]と比較し、外面２次調整の省略度合などによって対応させれば、Ｖａ期が「Ｖ期古相」（ＴＫ 23 型式期）、Ｖｂ期が「Ｖ期中相」（ＴＫ 47 ～ＭＴ 15 型式期）、Ｖｃ期が「Ｖ期新相」（ＭＴ 15 ～ＴＫ 10 型式期）にあたるとみられる。廣瀬編年に示された須恵器型式は概ね美作地域の編年と一致するが、詳細にみれば美作地域の方がやや新しい、すなわち埴輪の変化がやや遅れる可能性も窺える。ただし、現状では須恵器型式の並行関係が十分に議論されておらず、今後検討すべき課題といえる。

２　埴輪の生産体制と階層性

以上の編年観を踏まえ、主に円筒埴輪の諸特徴から、美作地域における埴輪の系統差[22]や工人集団のあり方、埴輪に表現される階層性などの問題について考えてみたい。

埴輪の系統と生産

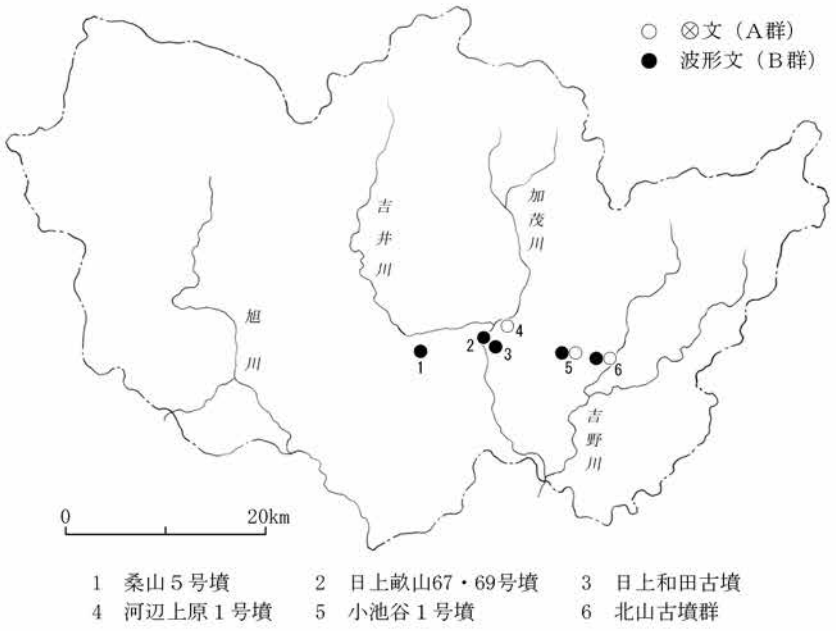
窯や工人集団などを反映すると考えられるヘラ記号については、上述のとおり、美作地域において⊗文と波形文の２種が普遍的に認められる。それぞれの分布状況をみれば、⊗文が吉井川・加茂川合流点付近より東に偏るのに対し、波形文は比較的広域に分布している（第 186 図）。ヘラ記号以外の特徴についてみれば、⊗文を伴う円筒埴輪は外面の赤っぽいものが多く顔料を塗布している可能性も考えられ（９･15）、一方、波形文を伴う円筒埴輪は４段構成で口縁部が特に高い（12 ～ 14･16･17）といった共通点がある。このような特徴から、⊗文と波形文を伴うこれら２群の円筒埴輪は、それぞれ異なる生産地や工人集団による製品とみることができよう。以下、前者をＡ群、後者をＢ群とする。

美作地域の円筒埴輪においては、Ａ・Ｂ両群が資料数も多く特に注意される存在だが、これらに属さない埴輪も少なくない。例えば、桑山１・２号墳の円筒埴輪（10・11）は５段構成で口縁部が低く、外面調整をナナメハケとし、さらに２号墳（11）では最下段突帯に断続ナデ技法Ｂを伴うなど、美作地域においてやや異質な埴輪群である。桑山３号墳も、全形が判明する資料がないものの１・２号墳と酷似する特徴をもっており、これらをＣ群とする。また、十六夜山古墳（１）と六ツ塚５号墳（７）は、ともに胎土が白色系で、内面を粗いヨコハケ調整とし、最下段突帯に押圧技法を伴うなど類似点が多く、同一系統として整理できるかもしれない[23]。それ以外にも、日上畝山 67・69 号墳の貼付口縁をもつ円筒埴輪（６）など、多系統の埴輪群が認められる。

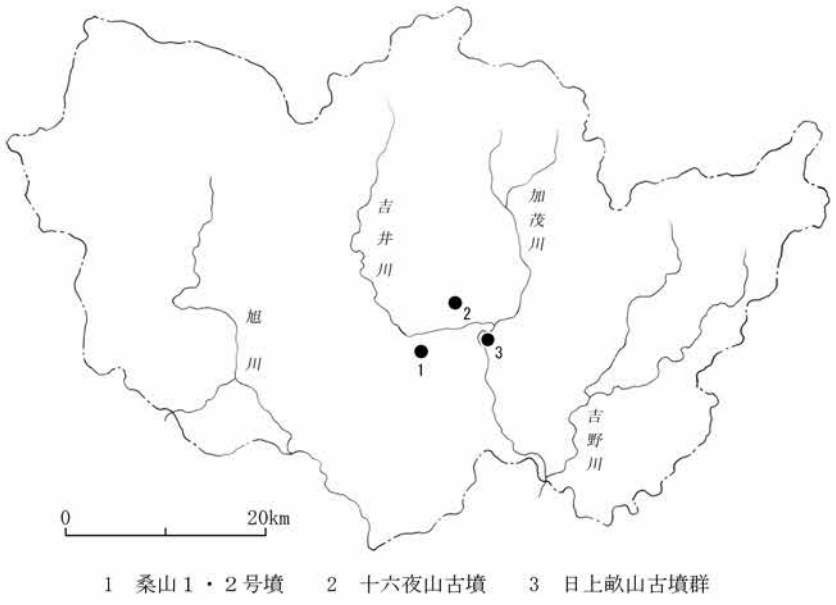
各群相互の関係についてみれば、小池谷１号墳でＡ・Ｂ両群が混在し（13 ～ 15）、北山古墳群では１号墳でＡ群（９）、２号墳でＢ群が出土、桑山古墳群でも１～３号墳でＣ群（10・11）、５号墳でＢ群（16･17）が出土するなど、各群は同一古墳･古墳群内においても共存し、排他的な分布を示さない。

したがって、各群は生産地や工人集団の違いを反映しながらも、造墓集団や地域の需要・要請、それに基づく製品の移動などによって、モザイク状に混在するあり方を示していると理解できる。

Ａ群は、現状でＶｂ・Ｖｃ期の３古墳において認められ、小規模ながら一定期間にわたる生産がなされたとみられる。その分布状況からは、美作東部を拠点とする生産単位の存在を窺うことができよう。一方、Ｂ群はより広範囲に分布し出土数も多いことから、美作地域で最も大規模に生産された系統とみられる（第186図）。またＣ群は、Ｖｃ期の桑山１～３号墳以外に出土例がなく、一古墳群（支群）に供給するために開設された窯の存在を示しているようであるが、それも一時的で、Ｖｄ期の桑山５号墳ではＢ群に置き換わっている。



第 186 図　美作地域における２種のヘラ記号の分布



第 187 図　美作地域における石見型埴輪の分布

このように、Ａ群及びＢ群については一定期間、一定規模の生産と供給を推測できるものの、その他の系統は単発的なものが多い。特定の生産地ないし工人集団による製品が、継続的に広域の需要を賄うといった状況ではなく、複数の生産単位による製品が混在し、それら各系統が断絶と新規参入を繰り返しながら推移しているようにみえる。そこには、器面調整や突帯製作などにおいて随時新たな技術や情報が伴っており、他地域からの工人の派遣・移動や「上番・帰還」、あるいは製品の移動等が、比較的頻繁に行われた状況を想定することも可能であろう。このように多元的で複雑な生産と供給のあり方は、近畿地方などで指摘されている状況[(24)]とも類似する。また、多元的ではあるが、個別的生産・供給[(25)]だけでなく、一定の地域をカバーし拠点的ともいえるＡ群やＢ群の存在が注意される。

なお、石見型埴輪はＶａ～Ｖｃ期の少なくとも５古墳で出土しているが[26]、いずれも吉井川・加茂川合流点付近より西側の吉井川流域に偏って分布している（第187図）。現在のところＡ群及びＢ群の円筒埴輪との共伴例はなく、桑山古墳群においてＣ群に伴っているが、当地域出土資料の線刻文様などは多様で、石見型埴輪についても多系統の存在を想定すべきかもしれない。

また、美作西部にあたる旭川流域では、Ｖ期の埴輪が知られていない。小型の前方後円墳も存在するが埴輪は発見されておらず、美作地域のなかでもいち早く埴輪祭祀を放棄した地域といえる。

段構成と階層性

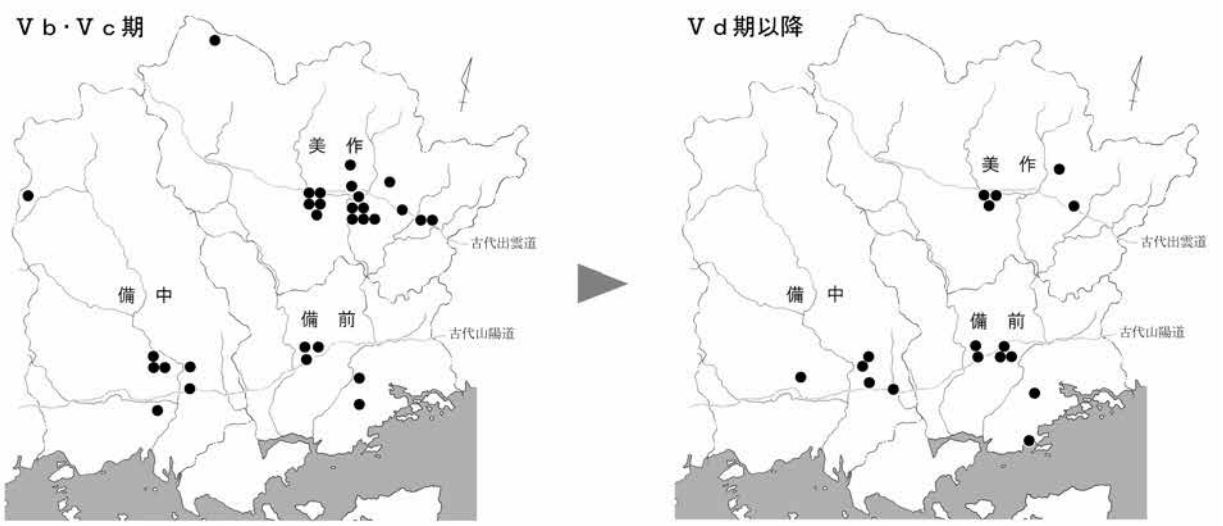
美作地域における円筒埴輪の段構成は、各期を通じて４段が一般的にみられるが、Ｖａ～Ｖｃ期には５段及び６段も併存している。Ｖａ期には、十六夜山古墳のみが６段で他の古墳は４段であり、十六夜山古墳を頂点とする階層性が、円筒埴輪の段数及び高さに表現されていると考えた。つづくＶｂ・Ｖｃ期になると、６段が姿を消し５段と４段が併存するようになるが、段数と社会的階層との関係は不明瞭になる。Ｖｂ・Ｖｃ期における５段の円筒埴輪出土古墳は、六ツ塚５号墳及び桑山１・２号墳に限られるが、いずれも小円墳で４段の円筒埴輪出土古墳との墳丘規模の差は認められない（第26表参照）。上述のとおり、六ツ塚５号墳の円筒埴輪は多段の十六夜山古墳の系譜を引く可能性があり、また桑山１・２号墳はＣ群であることから、段数を５段とする点も埴輪の系統差に由来する可能性が考えられよう[27]。

奈良盆地における後期の円筒埴輪の序列・階層を検討した廣瀬覚は、段構成が、古墳の墳形や規模に応じて一律の基準できめ細かく序列化され、それが畿内地域を中心に展開したと指摘する[28]。美作地域においては、上述のとおりＶａ期に同様の状況が看取されるものの、Ｖｂ期以降は序列が崩れている。県南部の備前・備中地域においても、前内池４号墳（方墳・約11ｍ）が５段であり[29]、小丸山古墳（前方後円墳・約33ｍ）が６段以上[30]、二万大塚古墳（前方後円墳・約38ｍ）も６段または７段に復元される[31]。これらはいずれも「王権中枢部の基準」[32]を超える段数であり、吉備の多くの地域において同「基準」は浸透していないか、あるいはより緩やかな適用がなされたようにみえる[33]。ただし、県内全域において６段以上の円筒埴輪が前方後円墳に限定されるなどの状況は窺え、畿内地域とはまた異なるローカルな基準による序列が展開していた可能性も考えられる。

３　埴輪の衰退と陶棺の出現

埴輪生産の盛衰

岡山県全域において、６世紀の埴輪出土遺跡数は約50遺跡にのぼる。およそ６世紀前半（Ｖｂ・Ｖｃ期）と６世紀後半（Ｖｄ期以降）に分けてその分布の変化をみれば、遺跡数が減少する傾向が明らかであり、特に美作地域で著しい（第188図）。美作地域では、Ｖｂ・Ｖｃ期には計18遺跡で埴輪が出土しており、備前・備中地域の数を大きく凌駕している。埴輪を焼成した窯跡は未発見ながら、この時期の美作地域は、県内で最も盛んに埴輪の生産と使用がなされた地域であったといえる。ところが、Ｖｄ期には５遺跡のみになり、前段階の1/3以下にまで激減する。備前・備中地域ではそれほど減少傾向は顕著でなく、土井遺跡[34]における６世紀後半（Ｖｄ期並行）の埴輪窯でも形象埴輪を含めた生産が続けられており、箭田大塚古墳[35]などＴＫ209型式期に降る埴輪の例もある。美作地域では、県南部に比べ埴輪祭祀の衰退が一足早く、かつ急速に進んだようである。



第 188 図　岡山県における６世紀の埴輪の分布

埴輪から陶棺へ

６世紀後半に、埴輪と入れ替わるように出現するのが陶棺である。桑山南・細畝古墳群では埴輪が消滅するＴＫ 209 型式期に陶棺が出現する（第 27 表）。埴輪祭祀が衰退しその需要が減少するなか、埴輪製作工人は、陶棺製作に移行していったものと推測される [(36)]。埴輪と陶棺は、穴窯で焼成される大型品という点で共通し、初現期の陶棺には埴輪と類似する特徴も認められ、両者の深い関係が指摘されている。さらに、土井遺跡では埴輪と陶棺をともに焼成した窯跡が発見され、両者の接点が明瞭に示された。美作地域においては、埴輪と陶棺が共伴する古墳がほとんどみられないことから [(37)]、埴輪から陶棺へ、生産対象の急速な転換が図られた様子が窺える。

吉備の陶棺は、畿内地域からまず備中南部地域の大首長墓であるこうもり塚古墳（前方後円墳・約 100 ｍ）に導入されたと考えられるが [(38)]、この地域での陶棺葬は定着しなかった。その後、吉備のなかでも特に美作地域で陶棺が積極的に受容され盛行する。全国で出土した陶棺の約７割を岡山県が占め、さらに岡山県内出土陶棺の約７割を美作地域が占めている [(39)]。美作地域において陶棺葬が流行した要因は明らかでないが、そのひとつとして、上で述べた前段階における埴輪生産の隆盛を挙げることができよう。埴輪を製作した工人集団やその技術は、陶棺生産の技術的基盤、受け皿になったと考えられる。また、美作地域に次いで陶棺の多い備前地域では、土井遺跡の埴輪・陶棺窯に加え、須恵器の窯跡が多数知られている。中国・四国地方最大規模の須恵器生産地である邑久窯跡群などが操

第 27 表　桑山・桑山南・細畝古墳群における埴輪・陶棺の出土状況

時期			桑山古墳群					桑山南古墳群					細畝古墳群		
			１号墳	２号墳	３号墳	４号墳	５号墳	１号墳	２号墳	３号墳	４号墳	５号墳	１号墳	２号墳	３号墳
1	Ｖｃ	TK10	●	●	●				●						
2	Ｖｄ	TK43					●								●
3		TK209						□					□		
4														□	
5		TK217								□					
6								□		□					

※　網がけは各古墳の築造・追葬時期、●は埴輪、□は陶棺の所属時期を示す。
※　時期の１～６は、桑山南・細畝古墳群の須恵器型式による時期区分（註 11）を示す。

業されており、周辺では須恵質に焼成された家形陶棺が多く出土する。吉備の陶棺は、埴輪や須恵器など地域における盛んな窯業生産を基盤として受容され、盛行したと考えられる。

本稿を作成するにあたり、津山弥生の里文化財センター・宮﨑絢子氏、美作市教育委員会・池田和雅氏、勝央町教育委員会・團正雄氏には資料実見の便宜を図っていただいた。末筆ながら記して謝意を表する。（尾上）

註

（１）岡山県教育委員会 1998「十六夜山古墳・十六夜山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』130

（２）津山市教育委員会 1994「井口車塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 52 集

（３）津山市教育委員会 1988「才ノ峪古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 23 集

（４）津山市教育委員会 2007「日上畝山古墳群Ⅱ」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 78 集

（５）岡山県教育委員会 1973「北山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』４

（６）註４、河本清 2020「川崎六ツ塚３号墳」『新修津山市史』資料編考古　津山市史編さん委員会

（７）近藤義郎・中島寿雄 1952『佐良山古墳群の研究』津山市

（８）勝央町教育委員会 2010「小池谷古墳群」『勝央町文化財調査報告』10

（９）津山市教育委員会 1994「河辺上原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 54 集

(10) 津山市教育委員会 1981「日上和田古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第６集

(11) 岡山県教育委員会 2022「桑山南古墳群・細畝古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』255

(12) 勝北町教育委員会 2000「西村古墳群」『勝北町埋蔵文化財発掘調査報告』１

(13) 津山市が調査した桑山南４号墳を含む。
津山市 2022「桑山南４号墳発掘調査」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 94 集

(14) (15) 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第２号　日本考古学会

(16) 木村理 2019「埴輪生産の変遷と諸段階」『待兼山論叢』第 53 号史学篇　大阪大学大学院文学研究科

(17) (18) 註 14・15

(19) 日上和田古墳（12）は報告書で５段に復元されているが、実見したところ必ずしも５段とはいい切れないと判断された。５段に復元すると全高がかなり大きくなり違和感があるうえ、他個体の破片で下から２段目及び３段目に透かし孔を空けるものがあるため、本稿では４段と推定する。

(20) 中島和彦 1992「『断続ナデ技法』の再評価」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1991』奈良市教育委員会

(21) 廣瀬覚 2021『６世紀の埴輪生産からみた「部民制」の実証的研究』平成 28 ～令和２年度科学研究費助成事業（基礎研究Ｃ）研究成果報告書　奈良文化財研究所

(22) 小郷利幸は、加茂川の東西両岸で埴輪の様相に違いがあり、系統差が認められることを指摘している。本稿と通じる部分もあるが、その後の資料の増加等により見直しの必要な部分がある。
小郷利幸 2007「考察」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 78 集　津山市教育委員会

(23) 小郷利幸も、多段であることや押圧技法採用などの共通点から、同様の考えを示している（註 22）。

(24) 和田一之輔 2005「摂津猪名川流域における古墳時代後期の埴輪供給関係」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』大阪大学考古学研究室
東影悠 2018「古墳時代後期における埴輪生産と埴輪様式の特質」『ヒストリア』第 271 号　大阪歴史学会

廣瀬覚 2019「埴輪の生産･流通からみた古墳時代の権力生成」『考古学研究』第 66 巻第３号　考古学研究会、註 21　ほか

(25) 註 24 和田論文　ほか

(26) 第 26 表に示した５古墳以外に、日上畝山古墳群の旧調査出土品があるが、所属古墳は不明とされる（註４）。

(27) ただし、六ツ塚５号墳は埴輪転用棺であり、墳丘に樹立された埴輪と単純に比較できないかもしれない。

(28) 註 24 廣瀬論文

(29) 岡山県教育委員会 2003「前内池古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』174

(30) 重根弘和 2005「埴輪について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』191　岡山県教育委員会
４段分が残存する破片であるが、透かし孔の配置から６段以上と推定できる。

(31) 新納泉・三浦孝章編 2018『二万大塚古墳』二万大塚古墳発掘調査団

(32) 註 24 廣瀬論文。奈良盆地では、６段以上の円筒埴輪は墳長 50 m以上の前方後円墳に限られるようである。

(33) 東影悠は、畿内地域においても、より緩やかで地域差をもつ階層秩序を想定している（註 24 東影論文)。

(34) 岡山県教育委員会 2005「土井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』191

(35) 真備町教育委員会 1984『箭田大塚古墳』

(36) 近藤義郎は、吉備における初現期の陶棺と考えられるこうもり塚古墳の陶棺について、「埴輪衰退期における埴輪製作集団の、吉備におけるひとつの転身を示すもの」と評価している。
近藤義郎 1987「こうもり塚古墳」『総社市史』考古資料編　総社市

(37) 唯一の共伴例である西村１号墳では横穴式石室内から陶棺片が出土しているが、石室内及び陶棺の残存状況が悪く、陶棺は追葬の可能性も否定できない。

(38) 杉山尚人 1987「陶棺の研究」『考古学研究』第 33 巻第４号　考古学研究会　ほか

(39) 津山市による 2013 年時点での集成データによる。
津山郷土博物館 2013『平成 25 年度特別展図録　土の棺に眠る～美作の陶棺～』

図出典

第 187 図に掲載した埴輪の実測図は各報告書（註１・２・４・５・８・10・11）から引用したが、一部筆者による実見結果をもとに改変のうえ、再トレースしたものがある。

なお、桑山古墳群出土埴輪について、本書第５章掲載番号との対応は次のとおりである。

10：第 89 図－ 35、11：第 105 図－ 70、16：第 149 図－ 215、17：第 149 図－ 219

遺構一覧表

凡　例

1　古墳及び製炭窯以外の遺構について示した。古墳については、第７章第３節の「第 19 表　桑山古墳群一覧」を参照されたい。

2　遺構の規模は、箱式石棺墓は石棺の内法、土坑墓・土坑は掘り方上端で計測し、深さは現存最大値を示す。勝負峪遺跡の土坑墓の「小口間距離」・「側板間距離」は、小口溝・側板溝の掘り方内側上端間の距離である。

3　削平・流失等により本来の規模が分からない項目には「－」を示した。存在が確認できない項目については「」を示した。

4　「新旧遺構対応表」の「旧遺構名」は調査時点でのものであり、出土遺物への注記、遺構図面（調査原図）などはこれにしたがっている。桑山遺跡は調査時点では「桑山古墳群」として調査を行っており、出土遺物への注記、旧遺構番号は桑山古墳群と一連の番号となっている。

勝負峪遺跡　竪穴住居一覧

遺構名	平面形	長軸（cm）	短軸（cm）	床面積（㎡）	床面標高（m）	柱穴	中央穴（cm）			壁体溝	時期	備考
							平面形	長短	深さ			
竪穴住居１	方	(304)	484	(9.78)	142.81	4	楕円 不整	3320 3626	7 26	○	弥生中期	弥生土器片・石鏃・サヌカイト片

勝負峪遺跡　掘立柱建物一覧

遺構名	規模（間）	柱間寸法（cm）		桁行（cm）	梁行（cm）	面積（㎡）	棟の方向	時期	備考
		桁	梁						
掘立柱建物１	22	138 ～ 142	120 ～ 132	276 ～ 280	248 ～ 256	7.01	N -85°- W	古墳以降	

勝負峪遺跡　柱穴列一覧

遺構名	規模	全長（cm）	柱間寸法（cm）	方向	掘り方	時期	備考
柱穴列１	2 間	143	78.65	N -11°- E	円	古墳以降	

勝負峪遺跡　段状遺構一覧

遺構名	長軸（cm）	短軸（cm）	床面標高（m）	柱穴	焼土面	壁体溝	時期	備考
段状遺構１	(436)	(202)	131.61	2		○	弥生中期	弥生土器片
段状遺構２	(1014)	(342)	136.12				弥生中期	弥生土器片
段状遺構３	534	(204)	140.96				弥生中期	弥生土器片
段状遺構４	328	(178)	144.28	2			弥生中期	弥生土器片
段状遺構５	(312)	(198)	141.22			○	弥生中期	弥生土器
段状遺構６	(352)	(204)	144.44				古墳以降	須恵器片
段状遺構７	(640)	(208)	138.40	4	3	○	古墳以降	須恵器・甑・鉄滓

勝負峪遺跡　土坑一覧

遺構名	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	時期	備考
土坑１	不整円形	皿形	132	118	37	133.42	古墳以降	
土坑２	円形	皿形	68	66	18	135.91	古墳以降	
土坑３	隅丸長方形	皿形	(216)	46	11	141.90	古墳以降	土坑４と同一遺構の可能性
土坑４	隅丸長方形	逆台形	(298)	49	16	141.11	古墳以降	土坑３と同一遺構の可能性
土坑５	隅丸長方形	逆台形	211	58	20	141.50	古墳以降	須恵器・土師器片
土坑６	隅丸長方形	箱形	(202)	46	32	140.55	古墳以降	須恵器片・炭化材

勝負峪遺跡　石列一覧

遺構名	長さ（cm）	方向	最低標高（m）	最高標高（m）	時期	備考
石列１	(925)	N -70°- E	131.92	133.06	弥生中期	土坑墓群に伴うものか
石列２	(110)	N -33°- W	132.11	132.18	弥生中期？	石列１と同一遺構の可能性あり

勝負峪遺跡　土坑墓一覧

遺構名	墓壙上面		深さ（cm）	墓坑底		小口溝						側板溝						小口間距離（cm）	側板間距離（cm）	備考
	長軸（cm）	短軸（cm）		長軸（cm）	短軸（cm）	位置	長軸（cm）	深さ（cm）	位置	長軸（cm）	深さ（cm）	位置	長軸（cm）	深さ（cm）	位置	長軸（cm）	深さ（cm）			
土坑墓１	(141)	74	16	(139)	65	北	46	17	南	42	12	－	－	－	－	－	－	104	－	
土坑墓２	182	66	26	167	60	北	(54)	18	南	(54)	25	西	(144)	5	東	(142)	8	146	38	弥生土器片
土坑墓３	192	72	40	180	58	北	40	16	南	46	7	西	(92)	3	－	－	－	143	－	
土坑墓４	176	70	38	166	64	北	(44)	15	南	(24)	6	西	146	4	東	145	5	110	28	
土坑墓５	198	78	50	184	68	北	(58)	24	南	(64)	22	－	－	－	－	－	－	119	36?	弥生土器片
土坑墓６	200	64	40	178	56	北	(60)	16	南	(55)	13	－	－	－	－	－	－	130	－	土坑墓５に切られる
土坑墓７	90	52	24	78	42	北	(32)	11	南	(37)	14	－	－	－	－	－	－	37	－	
土坑墓８	98	58	35	87	50	東	33	6	西	33	6	－	－	－	－	－	－	47	－	
土坑墓９	88	50	20	78	44	西	(36)	8	東	26	5	南	(58)	2	北	(50)	2	49	16	弥生土器片（脚部片）
土坑墓 10	(90)	54	50	(76)	54	西	38	17	東	30	20	－	－	－	北	(50)	7	42	－	側板溝が湾曲
土坑墓 11	104	50	32	89	34	東	36	20	西	36	12	北	(54)	3	－	－	－	56	－	
土坑墓 12	102	64	42	78	44	東	34	13	西	40	10	北	(57)	3	南	(68)	4	52	22	土坑墓 11 に切られる
土坑墓 13	220	100	49	186	82	西	44	8	東	54	9	－	－	－	－	－	－	142	－	弥生土器片
土坑墓 14	112	65	45	80	46	西	(33)	19	東	38	21	－	－	－	－	－	－	38	－	弥生土器片
土坑墓 15	105	61	44	84	40	西	34	9	東	34	10	－	－	－	－	－	－	45	28?	弥生土器片 木棺痕跡 側板間距離は土層から推定
土坑墓 16	194	65	56	168	50	西	58	19	東	(58)	17	南	(153)	5	北	(162)	5	132	38	弥生土器片
土坑墓 17	119	66	35	96	44	西	34	12	東	37	11	－	－	－	－	－	－	56	－	
土坑墓 18	173	56	42	(150)	50	西	(41)	9	東	(40)	8	南	(173)	3	北	(172)	3	125	25	
土坑墓 19	192	78	36	168	59	東	(54)	12	西	(50)	16	－	－	－	－	－	－	140	－	
土坑墓 20	210	65	56	154	42	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	弥生土器片
土坑墓 21	(162)	72	47	(140)	58	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	単独で立地

勝負峪遺跡　被熱痕跡一覧

遺構名	長軸（cm）	短軸（cm）	標高（m）	時期	備考
被熱痕跡１	54	36	132.02	弥生中期	付近で 30 ～ 70cm 程の石と弥生土器片出土

勝負峪遺跡　道一覧

遺構名	断面位置	断面形	上端幅（cm）	底面幅（cm）	深さ（cm）	時期	備考
道１	A断面	椀形	80	24	27	古墳以降	須恵器・鉄滓
	B断面	皿形	115	42	21		
	C断面	皿形	50	20	11		

桑山遺跡　竪穴住居一覧

遺構名	平面形	長軸（cm）	短軸（cm）	床面積（㎡）	床面標高（m）	柱穴	中央穴（cm）			焼土面	壁体溝	カマド	時期	備考
							平面形	長短	深さ					
竪穴住居１	方	(396)	404	(8.99)	135.88	4	楕円	9060	26		○		弥生	
竪穴住居２（古）	円	(516)	(338)	(14.32)	134.50	8？	楕円	(90)44	7		○		弥生	
竪穴住居２（新）	円	690	(374)	(16.69)	134.50	8？	楕円	8250	24	？	○		弥生	焼失住居
竪穴住居３	円	418	(292)	(6.66)	132.99	4	楕円	5040	30		○		弥生	
竪穴住居４（古）	円	484	(310)	(11.09)	128.30	8？	円	10093	32		○		弥生	
竪穴住居４（新）	円	585	(345)	(13.13)	128.38	8？	円	10093	32		○		弥生	
竪穴住居５	方	500	(285)	(8.38)	131.77	4						西辺中央	古代	
竪穴住居６	方	(410)	(240)	(2.34)	125.31	1					○		古代	製炭窯１を切る

桑山遺跡　段状遺構一覧

遺構名	長軸（cm）	短軸（cm）	床面標高（m）	柱穴	壁体溝	時期	備考
段状遺構１	(860)	(290)	134.74	7	○	弥生	
段状遺構２	457	(96)	137.21	2	○	弥生	
段状遺構３	864	(291)	130.68			弥生	
段状遺構４	(1418)	(205)	132.72	2	○	古代	
段状遺構５	(820)	(370)	129.60		○	古代	
段状遺構６	(1000)	(265)	124.88	9	○	古代	
段状遺構７	(1201)	(242)	125.28		○	古代	

桑山遺跡　土坑一覧

遺構名	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	時期	備考
土坑１	円形	皿	97	97	16	125.48	古代	
土坑２	隅丸方形	皿	115	112	11	125.95	古代	
土坑３	隅丸長方形	皿	154	96	22	125.78	古代	
土坑４	楕円	皿	168	135	15	126.11	古代	
土坑５	円形	逆台形	120	104	100	123.10	近世	座棺用墓坑か？
土坑６	不整楕円	皿	160	(120)	16	121.65	古代以降	底に木炭層
土坑７	不整形	皿	129	95	16	122.85	古代以降	

桑山遺跡　埋葬遺構一覧

遺構名	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	器種		棺身開口		棺内遺物	時期	備考
							棺身	棺蓋	方位	傾き			
埋葬遺構１	円	椀	48	46	12	130.44	甕	無	S -48°- E	不明	無	古代	
埋葬遺構２	楕円	椀	125	48	35	124.77	－	－	－	－	－	中世	集石

桑山遺跡　炉一覧

遺構名	平面形	長軸（cm）	短軸（cm）	標高（m）	時期	備考
炉１	不整円形	(23)	(19)	124.67	古代	周囲に炭散布

桑山遺跡　粘土採掘坑一覧

遺構名	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	時期	備考
粘土採掘坑１	不整形	凹凸	895	821	62	121.39	中世	多数の土坑の集合
粘土採掘坑２	不整形	凹凸	2194	496	50	122.16	中世	多数の土坑の集合

桑山遺跡　溝一覧

遺構名	断面形	上端幅（cm）	底面幅（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	時期	備考
溝１	逆台形	70	13	44	136.43	古代	
溝２	皿形	37	20	14	129.01	不明	

桑山古墳群　箱式石棺墓一覧

遺構名	蓋石残存	長軸長（cm）	短軸長（cm）	深さ（cm）	床面標高（m）	時期	備考
箱式石棺墓１	無	（115）	38	37	134.78	古墳	須恵器大甕破片（枕）

桑山古墳群　土器棺墓一覧

遺構名	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	器種		棺身開口		棺内遺物	時期	備考
						棺身	棺蓋	方位	傾き			
土器棺墓１	－	－	－	－	－	甕	無	Ｓ－84°－Ｅ	不明	無	古墳	

勝負峪遺跡新旧遺構対応表

掲載遺構名	旧遺構名
竪穴住居１	No. １
掘立柱建物１	No. 29
柱穴列１	No. 39
段状遺構１	No. 38
段状遺構２	No. ８
段状遺構３	No. 35
段状遺構４	No. 30
段状遺構５	No. ６
段状遺構６	No. 28

掲載遺構名	旧遺構名
段状遺構７	No. ２
石列１	No. 26
石列２	－
土坑墓１	No. 22
土坑墓２	No. 21
土坑墓３	No. 20
土坑墓４	No. 19
土坑墓５	No. 18
土坑墓６	No. 16

掲載遺構名	旧遺構名
土坑墓７	No. 37
土坑墓８	No. 23
土坑墓９	No. 36
土坑墓 10	No. 34
土坑墓 11	No. 32
土坑墓 12	No. 33
土坑墓 13	No. 15
土坑墓 14	No. 14
土坑墓 15	No. 31

掲載遺構名	旧遺構名
土坑墓 16	No. 12
土坑墓 17	No. 24
土坑墓 18	No. 25
土坑墓 19	No. 13
土坑墓 20	No. 17
土坑墓 21	No. 40
土坑１	No. 11
土坑２	No. ９
土坑３	No. ５

掲載遺構名	旧遺構名
土坑４	No. ７
土坑５	No. ３
土坑６	No. ４
被熱痕跡１	No. 27
道１	No. 10

桑山遺跡新旧遺構対応表

掲載遺構名	旧遺構名
竪穴住居１	No. 23
竪穴住居２	No. 35
竪穴住居３	No. 33
竪穴住居４	No. 11・17
竪穴住居５	No. 22
竪穴住居６	No. 19
段状遺構１	No. 29

掲載遺構名	旧遺構名
段状遺構２	No. 37
段状遺構３	No. 36
段状遺構４	No. 21
段状遺構５	No. 14
段状遺構６	No. 15
段状遺構７	－
土坑１	No. 32

掲載遺構名	旧遺構名
土坑２	No. 30
土坑３	No. 31
土坑４	No. 27
土坑５	No. 25
土坑６	No. ７
土坑７	No. 12
埋葬遺構１	No. 38

掲載遺構名	旧遺構名
埋葬遺構２	No. ２・３
鍛冶炉１	No. 13
製炭窯１	No. 16
粘土採掘坑１	No. ５
粘土採掘坑２	No. ４
溝１	No. 24
溝２	No. 18

桑山古墳群新旧遺構対応表

掲載遺構名	旧遺構名
桑山１号墳	桑山１号墳
桑山２号墳	桑山２号墳
桑山３号墳	桑山３号墳
桑山４号墳	桑山４号墳
桑山５号墳	桑山５号墳
箱式石棺１	No. 20
土器棺墓１	No. 28

遺物観察表

凡　例

土器・埴輪

1　「計測値」のうち、「口径」と「底径」は実測値または復元値を表し、「(数値)」はその残存率が約 1/6 以下のものの復元値であることを示す。また、「器高」の「(数値)」は残存最大値を表す。また、底径に記載している計測値は、高杯等の場合にはその脚径を、高台がつく杯や椀等の場合にはその高台径を示す。欠損等により計測ができない項目には「－」を示した。

2　「状態」の「完形」及び「ほぼ完形」は、接合・復元も含めた状態を示す。

3　「色調」は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）による。

金属製品・玉類・土製品・石器・石製品・鹿角製品

1　「計測値」のうち、「(数値)」は残存値を示す。

2　金属製品については、「鉄刀・刀子」、「鉄鏃」、「鞍飾金具」「その他金属製品」の４表を示した。

3　鉄刀・刀子については、刀身などを「鉄刀・刀子」表に、付属装具のうち金属製のものを「その他金属製品」表に、鹿角製のもので計測できるものを「鹿角製品一覧」表に分けて掲載した。

4　鉄刀・刀子・鉄鏃及び鹿角製品の計測部位と各部名称、鉄鏃の「分類」は次頁のとおりである。

5　金属製品の「重量」は、クリーニング後、含浸処理前の数値である。

6　玉類及び土製品の「色調」は、上記（土器・埴輪－３）のほか、『新版色の手帖』（永田泰弘監修 2002　小学館）による。

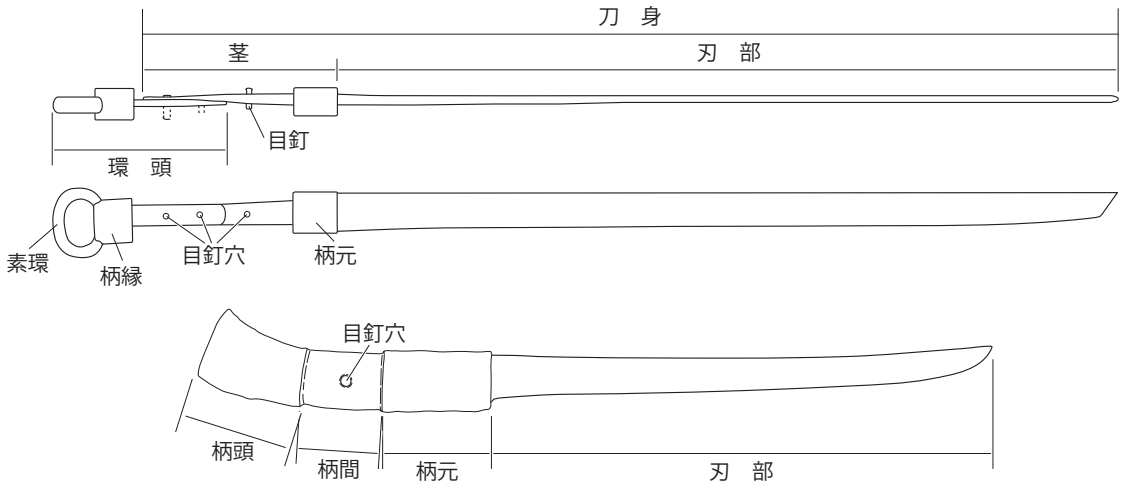
7　玉類及び石器・石製品に記載した「石材」で、「※」があるものは岡山大学鈴木茂之氏による石材同定である。

鉄滓

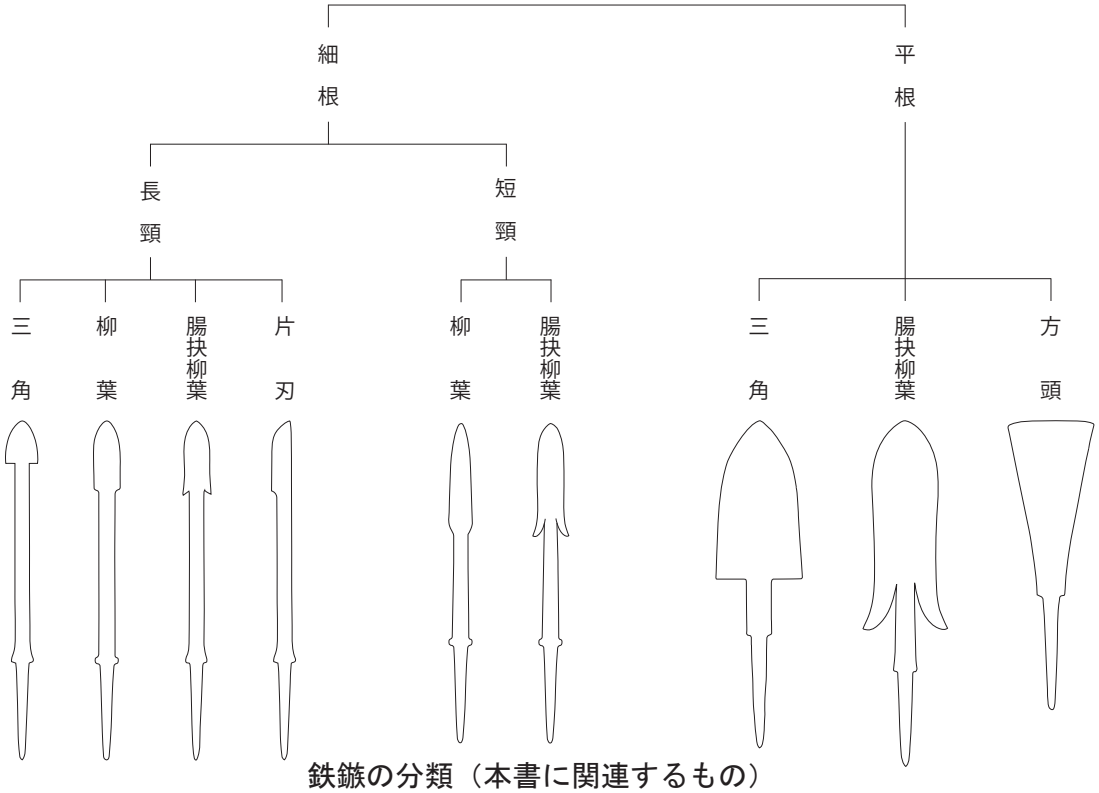
1　「調査区」は「第６図　調査区割とトレンチ配置」の調査区に準ずる。

2　各項目の数値は、各出土位置での総量を示す。

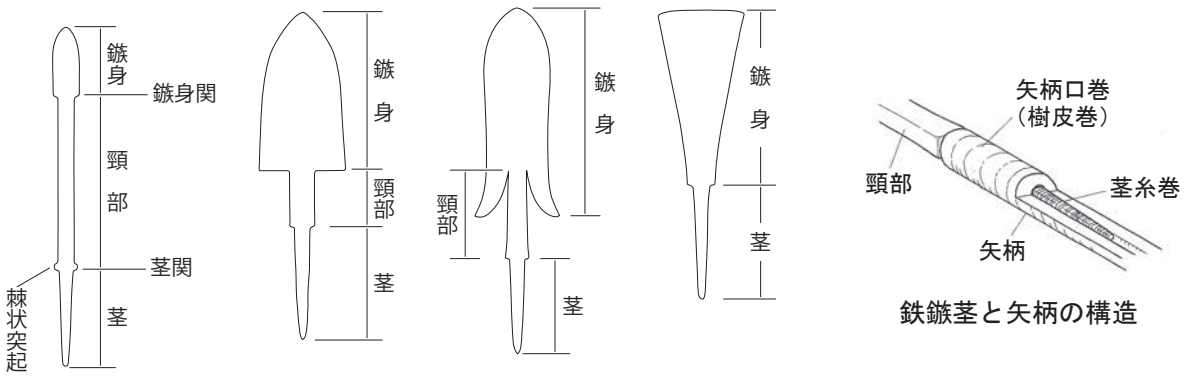
3　出土が確認できない項目には「－」を示した。



鉄刀・刀子・刀装具の計測部位と部分名称



鉄鏃の分類（本書に関連するもの）



鉄鏃茎と矢柄の構造

鉄鏃の計測部位と部分名称

勝負峪遺跡　土器一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
1	段状遺構1	弥生	甕	13.8	—	(4.6)	橙（7.5YR7/6）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		
2	段状遺構1	弥生	甕	(14.1)	—	(3.6)	橙（5YR6/6）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		
3	段状遺構1	弥生	甕	—	—	(6.1)	にぶい橙（7.5YR7/4）	3mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・雲母）	良好		
4	段状遺構1	弥生	甕	—	—	(2.7)	にぶい黄橙（10YR7/3）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		口縁端部に凹線2条
5	段状遺構1	弥生	甕	(16.1)	—	(4.3)	橙（5YR6/6）	3mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		口縁端部に凹線2条
6	段状遺構1	弥生	甕	(15.2)	—	(3.0)	橙（5YR6/6）	3mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		口縁端部に凹線2条
7	段状遺構1	弥生	鉢	—	—	(3.7)	橙（5YR6/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		口縁端部に凹線4条 外面に波状文が一部残存
8	段状遺構1	弥生	壺	17.4	—	(6.8)	にぶい橙（7.5YR6/4）	3mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		口縁端部に凹線1条 頸部に沈線5条
9	段状遺構1	弥生	壺	12.6	—	(6.0)	にぶい黄橙（10YR7/4）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		剥離して不明瞭 口縁端部に凹線2条
10	段状遺構1	弥生	壺	—	8.2	(8.6)	明黄褐（10YR7/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面ミガキと黒斑あり 内面ユビオサエ
11	段状遺構3	弥生	甕	(23.4)	—	(5.7)	橙（7.5YR6/6）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		全体的に剥落して調整不明瞭
12	段状遺構3	弥生	高杯	—	15.5	(14.1)	橙（5YR6/8）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面に透かし穴 透かし穴の間に斜格子文
13	段状遺構3	弥生	壺	—	—	(2.1)	にぶい黄橙（10YR7/3）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・金雲母・黒色砂粒・赤色酸化土粒）	良好		口縁内面に波状文 口縁端部に刻み目、上に円形浮文
14	段状遺構3	弥生	台付甕？	—	8.2	(3.1)	橙（2.5YR6/6）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		貼付高台 高台内面に黒斑あり
15	段状遺構5	弥生	長頸壺	18.4	—	(8.3)	橙（5YR7/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		口縁内面に波状文を施し、円形浮文 口縁端部に刻み目 頸部に凹線7条
16	土坑墓13	弥生	高杯	—	10.0	(2.1)	橙（5YR6/6）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		口縁端部に黒斑あり 外面に透かし穴の1部が残存
17	土坑墓16	弥生	高杯	—	12.0	(4.2)	橙（7.5YR6/6）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		口縁端部に凹線1条が残存 外面に波状文と黒斑あり
18	被熱痕跡1付近	弥生	甕	16.2	8.0	—	橙（7.5YR7/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		口縁端部に凹線1条
19	包含層	弥生	甕	20.8	—	(5.5)	橙（2.5YR6/6）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		口縁端部に沈線3条、その上に刻み目を施し、円形浮文 外面に斜格子文、凹線4条
20	包含層	弥生	台付鉢	—	—	(5.3)	にぶい褐（7.5YR5/4）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面に凹線4条
21	包含層	弥生	台付鉢	—	—	(11.3)	にぶい黄橙（10YR7/4）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面に沈線14条、刻み目
22	包含層	弥生	甕	(18.0)	—	(4.5)	にぶい橙（7.5YR6/4）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		口縁端部に凹線4条を施し、上に2個1組の棒状浮文 頸部に凹線5条
23	包含層	弥生	甕	—	4.8	(4.1)	にぶい黄橙（10YR7/4）	1mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		剥離により調整不明瞭
24	包含層	弥生	鉢	—	—	(3.7)	にぶい黄橙（10YR7/4）	3mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		口縁端部に波状文、口縁端部の外縁に刻み目 外面に波状文、凹線4条
25	段状遺構7	須恵器	杯身	—	—	(3.95)	にぶい黄橙（10YR7/2）	1.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面に自然釉 ロクロの回転方向：右？
26	段状遺構7	須恵器	杯身	10.6	—	(3.2)	灰（N6/）	1.5mm以下の砂粒（長石・石英・黒色砂粒）	良好		
27	段状遺構7	須恵器	杯身	—	—	(1.7)	褐灰（7.5YR4/1）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		
28	段状遺構7	須恵器	高杯	12.4	—	(4.3)	灰（5Y6/1）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英・黒色砂粒）	良好		
29	段状遺構7	土師器	甕	(25.6)	—	(6.75)	橙（7.5YR7/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面ナデ 内面ヘラケズリ、ナデ、ハケメ
30	段状遺構7	土師器	甕	(10.0)	—	(2.2)	灰白（2.5Y8/2）	1.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面ナデ 内面ナデ

勝負峪遺跡　土器一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
31	段状遺構７	土師器	甕	－	－	(4.3)	明赤褐 (5YR5/6)	3mm 以下の砂粒（長石･石英･雲母）	良好		外面ナデ 内面ヘラケズリ、ナデ
32	段状遺構７	土師器	甑	－	(19.2)	(14.0)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	3mm 以下の砂粒 （長石･石英･雲母･赤色酸化土粒）	良好		外面ハケメ、ナデ 内面ユビオサエ、ナデ、ハケメ
33	段状遺構７	土師器	甑	19.5	－	(11.0)	橙 (7.5YR7/6)	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面ナデ 内面ユビオサエ、ナデ
34	段状遺構７	土師器	甑	－	－	－	橙 (2.5YR6/8)	4mm の砂粒 （長石･石英･雲母･赤色酸化土粒）	良好		外面ユビオサエ、ナデ
35	段状遺構７	土師器	甑	－	－	－	橙 (2.5YR6/8)	4mm 以下の砂粒 （長石･石英･雲母･赤色酸化土粒）	良好		外面ユビオサエ、ナデ
36	土坑５	須恵器	杯蓋	9.4	－	(3.3)	灰白 (5Y7/1)	1.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		天井部にヘラオコシ
37	道１	須恵器	高台付杯	－	(8.0)	(2.2)	灰 (5Y6/1)	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
38	道１	須恵器	高台付杯	－	(8.7)	(1.5)	灰 (5Y6/1)	1.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
39	包含層	須恵器	杯蓋	－	－	(1.8)	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
40	包含層	須恵器	杯	－	7.8	(2.4)	灰 (N6/)	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
41	包含層	須恵器	杯	－	7.2	(1.7)	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
42	包含層	須恵器	甕	19.8	－	(5.1)	灰白 (5Y7/1)	1mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		口縁端部に沈線
43	包含層	須恵器	甕	－	－	(5.9)	灰 (N5/)	1mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面に平行タタキ 内面に当て具痕
44	包含層	土師器	甑	－	－	－	橙 (5YR7/6)	3.5mm 以下の砂粒 （長石･石英･雲母･赤色酸化土粒）	良好		外面ユビオサエ、ナデ

勝負峪遺跡　石器・石製品一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）			重量（g）	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
S１	竪穴住居１	石鏃	(16.0)	(16.5)	1.5	0.22	サヌカイト	裏面に素材剥片の剥離面残存
S２	竪穴住居１	不明磨製石器	(20.0)	(12.5)	2.2	0.80	※泥質片岩	表裏面が何らかの理由によって剥離面となる
S３	段状遺構１	不明磨製石器	(28.5)	47.5	15.8	33.00	※流紋岩	全面研磨面
S４	段状遺構４	石鏃	23.5	13.5	4.6	1.49	サヌカイト	裏面に素材剥片の剥離面残存
S５	包含層	石鏃	(20.0)	(15.5)	2.8	0.56	サヌカイト	
S６	包含層	石鏃	25.5	17.0	3.2	1.14	サヌカイト	
S７	包含層	石鏃	28.5	18.5	2.9	1.79	サヌカイト	裏面に素材剥片の剥離面残存
S８	包含層	石鏃	(22.5)	(19.0)	2.7	1.22	サヌカイト	裏面に素材剥片の剥離面残存
S９	包含層	石鏃	(16.0)	16.0	3.8	1.04	サヌカイト	裏面に素材剥片の剥離面残存
S 10	包含層	磨製石包丁	32.5	91.5	9.8	49.76	※粘板岩	未研磨、深く窪んでいる整形の際の剥離痕
S 11	包含層	磨製石斧	73.5	58.0	17.8	124.23	※緑色片岩	基部側に、整形の際の剥離痕が残存

勝負峪遺跡　鉄刀・刀子一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）				重量（g）	材質	備考
			全長	刃部長	刃部幅	茎長			
M１	段状遺構７	刀子？	(42.0)	(42.0)	(12.0)	－	2.81	鉄	

勝負峪遺跡　その他金属製品一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）			重量（g）	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M２	道１付近	銭	23.50	23.50	1.27	2.40	銅	寛永通宝
M３	道１付近	銭	23.73	23.73	1.04	1.58	銅	寛永通宝
M４	道１付近	銭	23.97	23.97	1.00	2.05	銅	寛永通宝

勝負峪遺跡　土製品一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（cm）			色調		形態・手法の特徴など
			高さ	幅	厚さ	外面	内面	
C１	被熱痕跡１付近	紡錘車	36.0	42.5	5.5	黒（10YR2/1）	褐（7.5YR4/6）	

勝負峪遺跡　鉄滓一覧

調査区	出土位置	炉壁（g）			製錬滓（g）			流動滓（g）	椀形鍛冶滓（g）		鉄鉱石（g）	鉄塊系（g）	流出孔滓（g）	その他
		滓付	滓なし	滓付炭付	含鉄	磁着弱	磁着弱炭付		含鉄	磁着弱				
１区	段状遺構７　壁体溝埋土	－	18.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
１区	段状遺構７　埋土	964.0	38.3	－	5.5	1631.8	131.5	－	－	－	－	4.8	－	－
１区	土坑５　埋土	－	－	－	－	20.1	－	－	－	－	－	－	－	－
１区	南斜面　包含層	68.1	64.7	－	－	126.4	－	－	－	－	－	8.7	－	－
２区	南斜面　包含層	165.3	－	－	－	155.9	－	－	－	－	－	－	－	－
２区	頂部　包含層	－	－	－	－	45.6	156.2	－	－	－	－	－	－	－
２区	東斜面　包含層	－	27.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
２区	北東斜面　包含層	－	－	－	－	266.7	－	－	－	－	－	－	－	－
２区	北斜面　包含層	－	13.4	－	－	152.7	－	－	－	－	－	－	－	－
３区	道１　埋土	14.8	－	－	－	9.5	－	－	－	－	－	－	－	－
３区	北東斜面　包含層	－	142.0	－	－	300.5	－	－	－	－	－	－	－	－
総　計		1212.2	303.8	－	5.5	2709.2	287.7	－	－	－	－	13.5	－	－
（調査区別合計）１区		1032.1	121.1	－	5.5	1778.3	131.5	－	－	－	－	13.5	－	－
２区		165.3	40.7	－	－	620.9	156.2	－	－	－	－	－	－	－
３区		14.8	142.0	－	－	310.0	－	－	－	－	－	－	－	－

桑山遺跡　土器一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
1	竪穴住居１	弥生	壺	12.8	－	(4.4)	にぶい黄橙（10YR7/4）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		5 条の凹線、2 個 1 組の穿孔
2	竪穴住居１	弥生	壺	(16.8)	－	(16.8)	浅黄橙（10YR8/4）	4 ～ 5mm 程の石粒 3.5mm 以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土）	やや不良		頸部に 2 段の爪形文、内面に黒斑あり
3	竪穴住居１	弥生	甕	12.0	－	(4.4)	にぶい橙（7.5YR7/4）	3mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		口縁部に凹線 3 条 頸部内面にしぼり痕跡
4	竪穴住居１	弥生	甕	(14.8)	－	(4.8)	橙（5YR6/6）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		口縁部に凹線 2 条
5	竪穴住居１	弥生	甕	13.0	－	(9.5)	にぶい黄橙（10YR7/3）	3mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		口縁部に凹線 2 条、外面に黒斑あり
6	竪穴住居１	弥生	甕	9.7	－	(11.5)	橙（5YR6/6）	4mm 程の砂粒が 2 ～ 3 個 2mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		肩部に刺突文と竹管文
7	竪穴住居１	弥生	甕	(9.4)	－	(7.3)	橙（7.5YR6/6）	4mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		器表面剥落により調整不明
8	竪穴住居２	弥生	壺	(14.0)	－	(2.4)	にぶい褐（7.5YR6/3）	2mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		口縁内面に櫛描楕円文、口縁部に刻み目
9	竪穴住居２	弥生	壺	－	8.6	(27.7)	橙（2.5YR6/6）・にぶい黄橙（10YR7/4）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・角閃石）	良好		肩部に櫛描波状文・櫛描沈線
10	竪穴住居２（周堤溝）	弥生	甕	(18.0)	－	(2.5)	にぶい黄橙（10YR7/3）	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
11	竪穴住居２（周堤溝）	弥生	甕	(16.6)	－	(3.6)	浅黄橙（7.5YR8/4）	3mm 以下の砂粒（長石・石英・金雲母）	良好		口縁端部に凹線 2 条
12	竪穴住居２	弥生	甕	(17.7)	－	(4.0)	にぶい橙（7.5YR6/4）	2mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母・金雲母）	良好		口縁部に 2 個 1 組の円形浮文 頸部に櫛描波状文
13	竪穴住居２（周堤溝）	弥生	甕	18.2	－	(7.6)	橙（5YR6/5）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		口縁端部に凹線 4 条、円形浮文の痕跡 外面に波状文、斜格子文、凹線 6 条
14	竪穴住居２（周堤溝）	弥生	甕	－	5.8	(8.4)	橙（7.5YR7/6）	4mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		内面ユビオサエ・ハケメ

桑山遺跡　土器一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
15	竪穴住居４	弥生	壺	25.0	—	(2.8)	橙（7.5YR6/6）	3mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母・角閃石）	良好		垂下する口縁外面に斜格子文、その上に円形浮文貼付
16	竪穴住居４	弥生	長頸壺	16.8	—	(12.9)	橙（5Y6/6）	4.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		垂下する口縁外面に凹線３条、その上に円形浮文貼付 口縁内面に凹線２条
17	竪穴住居４	弥生	壺	(19.5)	—	(2.2)	橙（5YR6/6）	1mm 以下の微砂粒（長石・石英・雲母・金雲母・角閃石）	良好		口縁内面に波状文、凹線３条、円形浮文貼付
18	竪穴住居４	弥生	壺	—	—	(3.9)	にぶい橙（7.5YR7/4）	4mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		口縁内面に凹線５条
19	竪穴住居４	弥生	甕	—	—	(2.1)	にぶい赤褐（5YR5/4）	1mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母・角閃石）	良好		
20	竪穴住居４	弥生	甕	—	—	(4.8)	橙（7.5YR7/6）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		口縁外面に凹線２条 肩部外面に斜格子文
21	竪穴住居４	弥生	甕	10.9	—	(4.9)	にぶい黄橙（10YR7/4）	2mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母・黒色砂粒）	良好		
22	竪穴住居４	弥生	甕	(15.8)	—	(2.3)	にぶい橙（7.5YR7/4）	3mm 以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・雲母・金雲母）	良好		口縁外面に凹線３条、その上に円形浮文貼付
23	竪穴住居４	弥生	甕	18.5	—	(12.7)	橙（7.5YR7/6）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・雲母）	良好		口縁部に凹線４条
24	竪穴住居４	弥生	甕	—	—	(11.3)	にぶい黄橙（10YR7/4）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面ハケ、ミガキ
25	竪穴住居４	弥生	高杯	15.8	—	(5.7)	にぶい橙（7.5YR7/3）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母・角閃石）	良好		
26	竪穴住居４	弥生	高杯	—	—	(4.0)	橙（2.5YR6/8）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母・黒色砂粒）	良好		内外面赤色顔料塗布
27	竪穴住居４	弥生	高杯	—	—	(4.7)	にぶい黄橙（10YR6/4）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		
28	竪穴住居４（周堤溝）	弥生	高杯	—	17.0	(7.9)	にぶい橙（7.5YR7/4）	3mm 以下の砂粒（長石･石英･雲母）	良好		8 個残存する三角形の透かしのうち、1 個が貫通、他は未貫通
29	段状遺構１	弥生	甕	—	—	(3.4)	にぶい橙（7.5YR7/4）	2mm 以下の砂粒（長石・石英・角閃石・雲母）	良好		肩部に櫛描波状文
30	段状遺構３	弥生	壺	10.0	—	(4.5)	にぶい橙（7.5YR7/4）	2mm 以下の砂粒（長石･石英･雲母）	良好		外面ハケメ
31	段状遺構３	弥生	甕	—	—	(2.4)	橙（7.5YR7/6）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面とも剥落により不明瞭
32	段状遺構３	弥生	甕	—	—	(3.7)	明赤褐（5YR5/6）	2mm 以下の砂粒（長石･石英･雲母）	良好		口縁端部に凹線２条
33	段状遺構３	弥生	高杯	—	(12.3)	(3.5)	にぶい橙（7.5YR6/4）	3.5mm 程の砂粒１個 2mm 以下の砂粒（長石･石英･雲母）	良好		外面に凹線５条と直線文４条
34	段状遺構３	弥生	鉢	—	—	(12.3)	黒（10YR2/1）	1.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		剥離で不明瞭だが内外面にミガキ
35	段状遺構３	弥生	脚付鉢	(16.9)	—	(2.6)	にぶい橙（7.5YR7/4）	1.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		注口の一部残存 外面の注口と口縁の間に沈線３条
36	包含層	弥生	壺	(18.5)	—	(2.0)	浅黄橙（7.5YR8/4）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		口縁部に凹線４条
37	包含層	弥生	甕	12.9	—	(3.8)	橙（5YR6/6）	3mm 以下の砂粒（長石･石英･雲母）	良好		口縁部に凹線２条
38	包含層	弥生	甕	(13.7)	—	(5.0)	にぶい黄橙（10YR7/3）	4mm 以下の砂粒（長石･石英･雲母）	良好		口縁部に凹線２条
39	包含層	弥生	甕	—	6.9	(1.6)	にぶい橙（7.5YR7/4）	2mm 以下の砂粒（赤色酸化土粒･長石･石英･雲母）	良好		内外面器面剥落
40	竪穴住居５	須恵器	杯	—	4.8	(2.0)	灰白（5Y7/1）	1.5mm 以下の砂粒（長石・石英・黒色砂粒）	やや不良		底部ヘラ切り後ナデ
41	竪穴住居５	須恵器	瓶類	10.0	—	(6.3)	灰（N5/）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		瓶類の口縁部か
42	段状遺構４	須恵器	杯身	10.9	—	(4.8)	灰白（N7/）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
43	段状遺構４	須恵器	高杯	—	10.8	(5.5)	灰（N4/）	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		脚柱部に凹線２条
44	段状遺構４	須恵器	高杯	11.9	10.8	(10.0)	灰（7.5Y6/1）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		脚柱部が欠損，杯部と脚端部は同一個体と想定
45	段状遺構４	須恵器	甕	—	—	(7.7)	淡黄（2.5Y8/3）	5mm 以下の赤色酸化土粒 2.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	やや不良		内外面器面剥落
46	段状遺構４	土師器	甕	(31.4)	—	(7.0)	橙（5YR6/8）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面ハケメ

桑山遺跡　土器一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
47	段状遺構５	須恵器	杯身	11.7	—	(2.2)	灰白（10Y7/1）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
48	段状遺構５	須恵器	高杯	—	7.9	(4.4)	灰（N5/）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	やや不良		
49	段状遺構６	須恵器	壺	—	12.7	(3.7)	灰白（5Y7/1）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
50	土坑２	須恵器	杯	13.6	9.2	4.3	灰白（2.5Y8/2）	4mm 以下の砂粒（長石･石英･雲母）	良好		貼付高台
51	土坑２	須恵器	杯	15.8	12.0	5.7	灰（N5/）	3.5 ～ 5mm 程度の砂粒（長石・石英） 3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
52	土坑２	須恵器	壺	(15.8)	—	(2.9)	黄灰（2.5Y4/1）	1.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
53	土坑２	須恵器	長頸壺	—	11.2	11.5	灰白（N7/）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
54	土坑３	須恵器	蓋	13.7	—	(1.1)	灰白（5Y7/1）	1.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		
55	埋葬遺構１	土師器	甕	26.7	—	(28.6)	橙（7.5YR7/6）	3mm 以下の砂粒（長石・石英・金雲母・雲母）	良好		胴部外面下半に黒斑あり
56	埋葬遺構２	土師器	椀	—	—	(3.9)	にぶい黄橙（10YR7/3）	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面器面剥落
57	製炭窯１	須恵器	蓋	—	—	(1.0)	浅黄（2.5Y7/3）	2mm 以下の砂粒（石英･黒色砂粒）	良好		
58	製炭窯１	須恵器	高杯	—	—	(2.4)	灰白（2.5Y8/2）	2mm 以下の砂粒（長石･石英･雲母）	やや不良		
59	粘土採掘坑１	須恵器	椀	12.9	—	(2.1)	灰白（5Y7/1）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
60	粘土採掘坑１	須恵器	椀	—	5.8	(1.8)	淡黄（2.5Y8/3）	5.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	不良		底部糸切りか？
61	粘土採掘坑１	黒色土器	椀	—	—	—	黒褐（2.5Y3/1）	2mm 以下の砂粒（長石･石英･雲母）	良好		貼付高台
62	粘土採掘坑１	土師器	椀	—	—	(4.4)	橙（7.5YR7/6）	3.5mm 以下の砂粒（赤色酸化土粒･長石･石英･雲母）	良好		内外面器面剥落
63	粘土採掘坑１	土師器	椀	—	6.0	(1.3)	橙（5YR7/6）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		貼付高台 底部回転糸切り
64	粘土採掘坑１	土師器	椀	—	6.0	(1.1)	にぶい黄橙（10YR7/4）	1cm 程の礫１個含む 3.5mm 以下の砂粒（雲母・赤色酸化土粒・長石・石英・黒色砂粒）	良好		内外面器面剥落
65	粘土採掘坑１	土師器	小皿	—	5.4	(1.0)	橙（7.5YR6/8）	微砂粒（雲母）	良好		内外面器面剥落
66	粘土採掘坑１	土師器	小皿	—	7.0	(1.0)	橙（5YR6/6）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		黒斑あり
67	粘土採掘坑２	勝間田焼	椀	—	—	(2.0)	灰（7.5Y6/1）	0.5mm 以下の微砂粒僅	良好		重ね焼き痕跡あり
68	粘土採掘坑２	土師器	杯	11.0	5.0	3.7	橙（7.5YR7/6）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		内外面器面剥落
69	粘土採掘坑２	土師器	椀	(16.1)	7.6	4.5	橙（7.7YR7/6）	5.5mm 以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	やや不良		貼付高台
70	粘土採掘坑２	土師器	椀	—	(5.4)	(1.5)	明黄褐（10YR7/6）	2.5mm 以下の砂粒（長石･石英･雲母･赤色酸化土粒）	良好		内外面器面剥落
71	溝１	須恵器	杯	—	8.1	(1.4)	黄灰（2.5Y6/1）	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台 底部回転糸切り
72	包含層	須恵器	杯蓋	(10.4)	—	(1.7)	灰（10Y5/1）	1mm 以下の微砂粒（長石・石英）	良好		
73	包含層	須恵器	蓋	(16.6)	—	3.5	灰黄（2.5Y6/2）	5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
74	包含層	須恵器	蓋	(15.0)	—	(3.8)	灰（10Y5/1）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		ロクロの回転方向：右
75	包含層	須恵器	蓋	15.0	—	(2.2)	灰（10Y6/1）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
76	包含層	須恵器	蓋	10.7	—	(1.7)	不明（自然釉付着のため）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
77	包含層	須恵器	蓋	19.7	—	(1.6)	灰（N5/0）	5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		

桑山遺跡　土器一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
78	包含層	須恵器	蓋	—	—	(1.9)	灰（10Y6/1）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
79	包含層	須恵器	蓋	—	—	(0.7)	灰（7.5Y5/1）	1mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
80	包含層	須恵器	杯身	(11.2)	—	(2.2)	灰白（5Y7/1）	2.5mm 以下の砂粒 （長石・石英・黒色砂粒）	良好		
81	包含層	須恵器	杯身	—	—	(2.5)	灰（10Y5/1）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
82	包含層	須恵器	杯身	—	—	(1.6)	灰（7.5Y5/1）	0.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
83	包含層	須恵器	杯	13.4	7.7	3.8	灰白（5Y7/1）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		底部ヘラ切り
84	包含層	須恵器	杯	—	7.0	(2.9)	灰白（5Y7/1）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
85	包含層	須恵器	杯	14.4	7.0	3.8	灰黄 （2.5Y7/2）	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		底部ヘラ切り後ナデ
86	包含層	須恵器	杯	(18.4)	14.0	6.5	灰（5Y6/1）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
87	包含層	須恵器	杯	15.9	11.9	3.5	灰（10Y6/1）	6mm 程の礫 1 個含む 2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
88	包含層	須恵器	杯	(13.4)	9.0	4.0	灰（N6） 少し青が入る	6 ～ 8mm 程の礫を 2 ～ 3 個含む 3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
89	包含層	須恵器	杯	15.1	12.7	3.8	灰（N6/）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
90	包含層	須恵器	杯	—	11.8	(4.0)	灰白 （2.5Y7/1）	6 ～ 6.5mm 程の礫を少し含む 4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
91	包含層	須恵器	杯	—	11.8	(2.7)	灰白 （2.5Y8/1）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
92	包含層	須恵器	杯	—	12.2	(1.4)	灰（7.5Y6/1）	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
93	包含層	須恵器	杯	—	(13.0)	(2.0)	浅黄 （2.5Y7/3）	3mm 以下の黒色砂粒 2mm 以下の砂粒（長石･石英･雲母）	やや不良		貼付高台
94	包含層	須恵器	杯	—	(12.7)	(1.0)	黄灰 （2.5Y6/1）	6mm 程の砂粒 1 個 1.5mm 以下の砂粒 （黒色砂粒・長石・石英）	良好		貼付高台
95	包含層	須恵器	杯	—	9.8	(2.5)	灰白 （2.5Y8/2）	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	不良		貼付高台
96	包含層	須恵器	杯	—	10.0	(1.9)	淡黄 （2.5Y8/3）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	不良		貼付高台
97	包含層	須恵器	杯	—	11.9	(1.3)	灰（5Y6/1）	1mm 以下の砂粒 （黒色砂粒・長石・石英）	良好		貼付高台
98	包含層	須恵器	杯	—	11.5	(2.4)	灰白（5Y7/1）	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
99	包含層	須恵器	杯	—	10.0	(1.8)	灰（7.5Y6/1）	6mm 程の礫を 2 ～ 3 個含む 3.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
100	包含層	須恵器	杯	—	(8.9)	(1.7)	灰（7.5Y6/1）	1mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
101	包含層	須恵器	杯	—	7.4	(2.0)	灰（N6/）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
102	包含層	須恵器	杯	—	—	(4.6)	灰（5Y6/1）	5.5mm 程の礫を 1 個含む 3.5mm 以下の砂粒 （長石・石英・黒色砂粒）	良好		貼付高台
103	包含層	須恵器	椀	15.2	6.0	5.4 ～ 5.6	灰オリーブ （5Y6/2）	6 ～ 8mm 程の礫を 3 ～ 4 個含む 5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転糸切り
104	包含層	須恵器	椀	(16.6)	—	(6.0)	灰白（5Y7/1） 灰白（N7/）	1.5mm 以下の砂粒 （長石・石英・黒色砂粒）	やや不良		
105	包含層	須恵器	椀	(14.2)	—	(5.1)	灰（N4/）	0.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		高台付
106	包含層	須恵器	椀	16.5	—	(5.6)	灰（5Y6/1）	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
107	包含層	須恵器	椀	(16.6)	—	(4.5)	灰白（5Y7/1）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
108	包含層	須恵器	椀	(15.8)	—	(3.9)	灰（N5/）	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		

桑山遺跡　土器一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
109	包含層	須恵器	椀	(15.6)	—	(3.4)	灰白 (7.5Y7/1)	1mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
110	包含層	須恵器	椀	—	(6.7)	(2.2)	灰黄 (2.5Y7/2)	6mm 程の礫を 1 個含む 3.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台 底部回転糸切り
111	包含層	須恵器	椀	—	6.6	(1.7)	灰白 (5Y7/1)	1mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台 底部回転糸切り
112	包含層	須恵器	椀	—	5.2	(1.6)	浅黄 (2.5Y7/3)	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台 底部回転糸切り
113	包含層	須恵器	椀	—	5.8	(1.7)	灰白 (5Y7/1)	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台 底部回転糸切り
114	包含層	須恵器	椀	—	6.4	(1.7)	灰黄 (2.5Y7/2)	5.5mm 程の砂粒 1 個 3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台 底部回転糸切り
115	包含層	須恵器	椀	—	7.2	(1.7)	灰黄 (2.5Y7/2)	4.5mm 以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	良好		貼付高台 底部糸切り
116	包含層	須恵器	椀	—	7.0	(1.9)	灰白 (2.5Y7/1)	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台 底部回転糸切り
117	包含層	須恵器	椀	—	5.5	(2.5)	灰白 (2.5Y7/1)	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
118	包含層	須恵器	椀	—	6.2	(1.5)	浅黄 (2.5Y7/3)	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
119	包含層	須恵器	椀	—	5.8	(1.9)	灰白 (5Y5/1)	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
120	包含層	須恵器	椀	—	—	—	灰黄 (2.5Y7/2)	2.5mm 以下の砂粒 （長石・石英・雲母・黒色砂粒）	良好		底部ヘラおこし
121	包含層	須恵器	椀	—	7.0	(2.1)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	やや不良		底部ヘラおこし
122	包含層	勝間田焼	椀	(14.4)	5.7	5.3	黄灰 (2.5Y5/1)	3.5mm 以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	良好		底部糸切り
123	包含層	勝間田焼	椀	16.0	—	(4.8)	灰 (N6/)	1mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
124	包含層	勝間田焼	椀	(15.9)	—	(3.4)	灰 (N6/)	2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
125	包含層	勝間田焼	椀	—	—	(3.6)	灰 (N6/0)	0.5mm 以下の微砂 （長石・石英・雲母）	良好		
126	包含層	勝間田焼	椀	—	5.8	(2.0)	灰 (5Y6/1)	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		底部回転糸切り
127	包含層	須恵器	壺	(21.8)	—	(5.8)	暗灰 (N3/)	4mm 程の黒色砂粒 1 個 2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
128	包含層	須恵器	長頸壺	(9.3)	—	(19.0)	灰白 (N7/)	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面ヨコナデ
129	包含層	須恵器	短頸壺	(9.9)	—	(7.7)	灰 (5Y4/1)	6mm 程の礫を 2 個含む 2mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
130	包含層	須恵器	長頸壺	—	15.9	(13.9)	灰 (5Y5/1)	6 ～ 4mm 程の砂粒（長石・石英） 3.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		近くで 133 提梁が出土していることから、平瓶の可能性も考えられる
131	包含層	須恵器	壺	—	(8.7)	(3.4)	灰 (N6/)	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		
132	包含層	須恵器	壺	—	6.0	(2.4)	灰 (N6/)	2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		貼付高台
133	包含層	須恵器	平瓶	—	—	—	灰 (5Y5/1)	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好		提梁のみ
134	包含層	土師器	杯	13.8	6.2	(3.4)	橙 (5YR7/6)	4mm 以下の砂粒 （長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		
135	包含層	土師器	椀	—	6.9	(1.9)	浅黄 (2.5Y7/3)	4mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		貼付高台
136	包含層	土師器	甕	—	—	(7.3)	明赤褐 (2.5YR5/6)	4mm 以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	良好		
137	包含層	土師器	甕	—	—	(5.4)	橙 (2.5YR6/8)	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面ナデ 内面ケズリ
138	包含層	土師器	甕	—	—	(7.2)	橙 (5YR6/6)	6.5mm 程の礫を 1 個含む 3.5mm 以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		器表面剥落
139	包含層	須恵器	甑	—	—	—	橙 (5YR6/6)	4mm 以下の砂粒 （長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		把手のみ

桑山遺跡　石器・石製品一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）			重量（ｇ）	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
Ｓ１	竪穴住居２	石鏃	21.5	16.5	2.5	0.81	サヌカイト	素材剥片の打面残
Ｓ２	竪穴住居２	石槍	(28.5)	(36.0)	6.7	9.78	サヌカイト	上下両側欠損
Ｓ３	竪穴住居２	砥石	77.5	32.0	22.5	64.95	※流紋岩	被熱による黒化
Ｓ４	竪穴住居３	磨石	72.0	65.0	28.1	222.26	※閃緑岩	
Ｓ５	竪穴住居４	不明	(56.5)	(28.5)	(6.2)	11.83	※粘板岩	磨製石剣の分割再加工品
Ｓ６	竪穴住居４	砥石	56.0	38.0	35.0	138.46	※流紋岩	6 面全て砥石面、溝状の砥石面あり
Ｓ７	段状遺構１	石鏃	19.0	10.0	2.2	0.48	サヌカイト	裏面に素材剥片の剥離面残存
Ｓ８	包含層	石鏃	26.5	14.5	4.5	1.53	サヌカイト	裏面に素材剥片の剥離面残存
Ｓ９	包含層	石鏃	31.5	19.0	3.5	1.70	サヌカイト	裏面に素材剥片の剥離面残存
Ｓ 10	包含層	石鏃	40.0	18.0	4.1	2.73	サヌカイト	裏面に素材剥片の剥離面残存
Ｓ 11	包含層	石鏃	15.5	10.0	2.7	0.40	サヌカイト	裏面に素材剥片の剥離面残存
Ｓ 12	包含層	石鏃	18.0	13.0	2.2	0.67	サヌカイト	裏面に素材剥片の剥離面残存
Ｓ 13	包含層	尖頭器	(98.5)	35.0	8.9	34.56	サヌカイト	先端部欠損、表面右側縁下部に原礫面残存
Ｓ 14	包含層	磨製石包丁	(41.0)	(52.0)	8.9	27.14	※粘板岩	
Ｓ 15	包含層	石錘	69.0	55.5	(64.5)	252.92	※泥岩（中新世）	有溝石錘
Ｓ 16	包含層	磨製石斧	(29.0)	(33.5)	5.2	6.40	※緑色片岩	刃部のみ
Ｓ 17	包含層	磨石	(154.0)	(138.0)	(60.0)	1640.55	※安山岩	1/4 残存、表面は使用により平滑
Ｓ 18	包含層	銙帯（丸鞆）	29.0	43.5	7.1	16.83	※泥岩（珪質）	表面一部剥落、裏面に「潜り穴」3 か所

桑山遺跡　鉄刀・刀子一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）				重量（ｇ）	材質	備考
			全長	刃部長	刃部幅	茎長			
Ｍ３	埋葬遺構２	短刀	(199.5)	(141.0)	26.0	58.5	83.25	鉄	
Ｍ９	包含層	刀子	(44.0)	(20.0)	13.5	(24.0)	4.50	鉄	

桑山遺跡　その他金属器一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）			重量（ｇ）	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
Ｍ１	竪穴住居５	不明	(44.3)	(11.4)	(5.0)	3.29	鉄	先端が蕨手状に曲がる
Ｍ２	土坑５	釘	54.0	9.0	6.5	2.92	鉄	
Ｍ４	粘土採掘坑１	不明	32.0	13.0	2.0	3.98	鉄	
Ｍ５	粘土採掘坑１	不明	(47.0)	(11.2)	(11.7)	11.91	鉄	先端がやや平たくなるソケット状の鉄器
Ｍ６	粘土採掘坑１	火箸	(45.0)	6.5	6.5	3.03	鉄	断面方形の棒状の鉄をねじる
Ｍ７	粘土採掘坑１	不明	(69.5)	5.0	6.0	6.93	鉄	先端部分が薄くなる
Ｍ８	包含層	鎌	(78.5)	(37.2)	3.0	18.97	鉄	
Ｍ 10	包含層	棒状鉄器	(56.0)	(15.5)	(6.2)	8.54	鉄	
Ｍ 11	包含層	釘	59.5	9.5	7.5	7.58	鉄	
Ｍ 12	包含層	釘	(31.8)	5.5	5.8	2.66	鉄	
Ｍ 13	包含層	棒状製品	(35.0)	8.6	6.6	2.33	鉄	
Ｍ 14	包含層	不明	(28.0)	(21.5)	(3.0)	3.52	鉄	薄い板状

桑山遺跡　土製品一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（cm）			色調 外面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
			高さ	幅	厚さ					
Ｃ１	包含層	土錘	(3.4)	1.2	1.15	黒褐 (2.5Y3/2)	1㎜以下の砂粒（石英・長石）	良好	一部欠損	
Ｃ２	包含層	土錘	(2.55)	1.3	1.35	暗灰黄 (2.5Y5/2)	1㎜以下の砂粒（石英・長石）	良好	一部欠損	

桑山遺跡　鉄滓一覧

調査区	出土位置	炉壁（g）			製錬滓（g）			流動滓	椀形鍛冶滓（g）		鉄鉱石	鉄塊系	流出孔滓	その他
		滓付	滓なし	滓付炭付	含鉄	磁着弱	磁着弱炭付	（g）	含鉄	磁着弱	（g）	（g）	（g）	
1区	段状遺構6	－	367.5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
1区	粘土採掘坑2	49.3	－	83.3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
1区	包含層	250.7	40.1	－	－	66.7	－	－	－	－	－	－	－	－
2区	段状遺構5	133.3	－	－	－	278.9	－	－	－	－	－	－	－	－
2区	包含層	162.8	192.7	－	52.9	2176.4	475.9	－	－	－	－	－	－	－
3区	竪穴住居5　カマド	58.9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
3区	段状遺構4	85.0	35.1	－	－	347.1	－	－	－	－	－	－	－	－
3区	溝1	－	－	－	39.1	1.7	－	－	－	－	－	－	－	－
3区	包含層	18.2	18.4	－	－	551.7	427.4	－	－	－	－	－	－	－
4区	包含層	－	25.1	－	－	29.2	100.9	－	－	－	－	－	－	－
6区	包含層	－	－	－	－	28.2	181.9	－	－	－	－	－	－	－
1号墳	包含層	268.3	－	－	161.9	790.7	－	－	－	－	－	－	－	－
2号墳	炉1	3.8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
2号墳	包含層	2503.7	－	－	59.9	2219.1 ＿	－	－	－	－	－	77.0	－	－
3号墳	3号墳盛土中	－	－	－	－	－	123.6	－	－	－	－	－	－	－
3号墳	箱式石棺蓋石面	4.8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
3号墳	包含層	2908.0	－	755.7	64.5	11603.6	573.2	－	－	－	104.3	－	266.1	－
4号墳	包含層	1227.7	112.6	－	83.9	2772.0	228.9	－	151.3	249.5	－	14.0	－	－
5号墳	包含層	685.8	－	－	－	1327.6	255.5	－	－	－	－	－	－	－
総　計		8360.3	791.5	839.0	462.2	22192.9	2367.3	－	151.3	249.5	104.3	91.0	266.1	－
（調査区別合計）1区		600.0	447.7	166.6	－	133.4	－	－	－	－	－	－	－	－
2区		296.1	192.7	－	52.9	2455.3	475.9	－	－	－	－	－	－	－
3区		162.1	53.5	－	39.1	900.5	427.4	－	－	－	－	－	－	－
4区		－	25.1	－	－	29.2	100.9	－	－	－	－	－	－	－
5区		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
6区		－	－	－	－	28.2	181.9	－	－	－	－	－	－	－
1号墳		268.3	－	－	161.9	790.7	－	－	－	－	－	－	－	－
2号墳		2507.5	－	－	59.9	2219.1	－	－	－	－	－	77.0	－	－
3号墳		2912.8	－	755.7	64.5	11603.6	696.8	－	－	－	104.3	－	266.1	－
4号墳		1227.7	112.6	－	83.9	2772.0	228.9	－	151.3	249.5	－	14.0	－	－
5号墳		685.8	－	－	－	1327.6	255.5	－	－	－	－	－	－	－

桑山古墳群　土器・埴輪一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
1	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.6	－	4.8	灰白（5Y8/1）	3mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	不良	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
2	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.6	－	4.6	灰白（5Y8/1）	4.5mm以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	不良	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左 天井部内面に当て具痕
3	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.5	－	4.8	灰白（5Y8/1）	11mm程の礫を1個含む 3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	不良	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左
4	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.3	－	4.9	灰白（5Y8/1）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	不良	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左
5	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.7	－	4.3	灰（10Y6/1）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右 天井部にヘラ記号

桑山古墳群　土器・埴輪一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
6	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.8	—	(3.4)	灰（7.5Y4/1）	4.5㎜程の礫を1個含む 2㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		
7	1号墳石室内	須恵器	杯蓋	—	—	(2.8)	灰（7.5Y4/1）	3㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		
8	1号墳石室内	須恵器	杯身	12.9	—	5.1	灰白（5Y8/1）	3.5㎜以下の砂粒 （長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	不良	ほぼ完形	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右 底部外面に板目痕
9	1号墳石室内	須恵器	杯身	12.7	—	4.3	灰白（5Y8/1）	3㎜以下の砂粒 （長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	不良	完形	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左
10	1号墳石室内	須恵器	杯身	12.7	—	4.2	灰白（5Y8/1）	3㎜以下の砂粒 （長石・石英・赤色酸化土粒）	不良	完形	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左
11	1号墳石室内	須恵器	杯身	12.7	—	4.2	灰白（5Y8/1）	4㎜以下の砂粒（長石・石英・ 雲母・赤色酸化土粒）	不良	完形	底部回転ヘラケズリ
12	1号墳石室内	須恵器	杯身	12.6	—	4.0	灰白（M7/）	4.5㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部ヘラ切り後ナデ 底部にヘラ記号
13	1号墳石室内	須恵器	杯身	13.2	—	4.1	灰白（5Y7/1）	6.5㎜程の礫を1個含む 4㎜以下の砂粒 （長石・石英・黒色砂粒）	良好	ほぼ完形	底部回転ヘラケズリ
14	1号墳石室内	須恵器	杯身	12.3	—	3.9	灰白（5Y7/1）	6㎜程の礫を1個含む 3㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左
15	1号墳石室内	須恵器	杯身	—	—	(1.5)	灰白 （7.5Y7/1）	2.5㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		底面回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左
16	1号墳石室内	須恵器	高杯	—	8.4	(5.2)	灰（N4/）	1.5㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		3方向の透かし
17	1号墳墓道	須恵器	高杯	14.6	11.1	12.7	灰白（5Y8/1）	3㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	3方向の透かし 杯部に2個の取手
18	1号墳石室内	須恵器	高杯	—	(9.0)	(1.8)	灰（N6/）	2.5㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		
19	1号墳石室内	須恵器	甕	—	—	(5.0)	灰（N5/）	2.5㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		
20	1号墳石室内	須恵器	甕	—	—	(14.7)	灰白（N7/）	8㎜程の礫を1個含む 3㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面平行タタキ後カキメ 肩部櫛描波状文
21	1号墳石室内	須恵器	短頸壺	7.0	—	(2.2)	灰（N7/）	2㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		
22	1号墳石室内	須恵器	直口壺	—	14.0	(11.6)	灰白 （2.5Y7/1）	2.5㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		肩部に櫛状工具による刺突 体部下半にカキメ
23	1号墳石室内	須恵器	壺	—	—	(11.9)	灰（N6/）	3.5㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		体部カキメ
24	1号墳石室内	須恵器	壺	20.9	—	31.0	灰白（N7/）	4㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	頸部櫛描波状文 体部平行タタキ
25	1号墳石室内	須恵器	壺	(22.0)	—	(7.0)	灰白2.5Y8/2）	5㎜以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	やや不良		頸部に櫛描波状文
26	1号墳石室内	須恵器	壺	—	—	(2.6)	灰（N6/）	2㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		

桑山古墳群　土器・埴輪一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
27	1号墳石室内	須恵器	有蓋台付壺	10.0	—	5.9	灰（N6/）	2.5㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		頸部に櫛描波状文
28	1号墳石室内	須恵器	有蓋台付壺	13.0	—	(3.4)	灰（N6/）	2㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		
29	1号墳石室内	須恵器	台付壺	—	(14.8)	(3.0)	灰（N5/）	4㎜以下の砂粒（長石）	良好		4方向の透かし
30	1号墳石室内	須恵器	提瓶	10.3	—	34.6	灰（6/0）	5㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	表面平行タタキ後カキメ 耳は環状 重ね焼き痕あり
31	1号墳石室内	土師器	高杯	13.7	—	(5.6)	橙（5YR7/8）	2.5㎜以下の砂粒 （長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		調整不明 杯部内面に赤色顔料
32	1号墳周溝内	須恵器	杯蓋	10.3	—	3.4	灰白（7.5Y7/1）	6㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
33	1号墳周溝内	須恵器	壺	7.6	—	(5.0)	灰白（2.5Y7/1）	1.5㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		
34	1号墳周溝内	須恵器	堤瓶	—	—	(18.2)	にぶい黄（2.5Y6/3）	4㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面カキメ 耳は環状 自然釉付着
35	1号墳周溝内	埴輪	円筒	22.7	(15.9)	46.8	橙（7.5YR7/6）	6～12㎜程の礫を少し含む 5.5㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面タテハケと斜めハケ、内面ナデとユビオサエ 円形透かしを一段2孔穿ち、一段分空けた段間で穿孔方向が直交する 径8㎜程度の穿孔あり ヘラによると思われる横線が表面を一周
36	1号墳周溝内	埴輪	円筒	23.0	—	(39.9)	明黄褐（10YR7/6）	7㎜以下の礫を含む 6.5㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面斜めハケ、内面ナデとユビオサエ 円形透かしを一段2孔穿ち、一段分空けた段間で穿孔方向が直交する
37	1号墳	埴輪	円筒	22.0	—	(32.8)	橙（2.5YR7/6）	8.5㎜程の礫を2～3個含む 4㎜以下の砂粒 （長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面斜めハケ 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
38	1号墳周溝内	埴輪	円筒	22.0	—	(25.4)	橙（5YR7/6）	4㎜以下の砂粒 （長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面斜めハケ 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
39	1号墳周溝内	埴輪	円筒	(23.8)	—	(29.7)	橙（7.5YR7/6）	7～9㎜程の礫を2～3個含む 3㎜以下の砂粒（雲母・長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面斜めハケ 内面ナデ、ユビオサエ
40	1号墳周溝内	埴輪	円筒	(25.2)	—	(30.9)	橙（5YR7/6）	5.5㎜以下の砂粒 （長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面に斜めハケ、内面にナデとユビオサエ 円形透かし 径8㎜程度の穿孔が認められる
41	1号墳周溝内	埴輪	円筒	(22.5)	—	(29.4)	橙（5YR7/6）	5㎜以下の砂粒 （長石・石英・赤色酸化土粒・雲母）	良好		外面斜めハケ 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
42	1号墳周溝内	埴輪	円筒	22.0	—	(20.1)	橙（5YR7/6）	5.5㎜以下の砂粒 （長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面斜めハケ 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
43	1号墳周溝内	埴輪	円筒	26.5	—	(14.9)	灰（5Y6/1）～橙（5Y7/6）	7～11㎜程の礫を少し含む 5㎜以下の砂粒	やや不良		外面斜めハケ 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
44	1号墳周溝内	埴輪	円筒	22.5	—	(10.9)	橙（7.5YR7/6）	6～7㎜程の礫を2～3個含む 5㎜以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		内外面調整不明瞭 外面に斜めハケ、内面にナデとユビオサエ 円形透かし
45	1号墳周溝内	埴輪	円筒	(25.3)	—	(9.9)	橙（5YR7/8）	5.5㎜以下の砂粒 （長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		内外面調整不明瞭
46	1号墳周溝内	埴輪	円筒	(24.0)	—	(9.0)	橙（5Y7/6）	8～13㎜程の礫が9個ある 4.5㎜以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒・角閃石）	良好		内外面調整不明瞭 外面タテハケ、内面ユビオサエ 円形透かし

桑山古墳群　土器・埴輪一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
47	1号墳周溝内	埴輪	円筒	(17.7)	—	(19.6)	明黄褐（10YR7/6）	6mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面調整不明瞭
48	1号墳周溝内	埴輪	円筒	—	—	(12.4)	橙（7.5YR7/6）	5.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		内外面調整不明瞭 外面斜めハケ、内面ユビオサエ 円形透かし
49	1号墳周溝内	埴輪	石見型	—	—	—	にぶい橙（7.5YR7/4）	4mm以下の砂粒（長石・石英赤色酸化土粒）	良好		
50	1号墳周溝内	埴輪	石見型	—	—	—	にぶい橙（7.5YR7/4）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英・角閃石・赤色酸化土粒）	良好		
51	1号墳周溝内	埴輪	石見型	—	—	—	橙（7.5YR6/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		
52	1号墳周溝内	埴輪	石見型	—	—	—	橙（7.5YR7/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		
53	1号墳周溝内	埴輪	石見型	—	—	—	橙（7.5YR6/6）	12mm程の礫を1個含む 3mm以下の砂粒（雲母・角閃石・長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		
54	1号墳周溝内	埴輪	石見型	—	—	—	橙（7.5YR6/6）	1.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		
55	1号墳周溝内	埴輪	石見型	—	—	—	橙（7.5YR6/6）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・雲母・角閃石）	良好		
56	1号墳周溝内	埴輪	石見型	—	—	—	橙（7.5YR6/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・雲母）	良好		
57	1号墳周溝内	埴輪	石見型	—	—	—	橙（7.5YR7/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		
58	1号墳周溝内	埴輪	石見型	—	—	—	橙（7.5YR6/6）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		
59	2号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.3	—	5.5	灰（N5/）	6mm程の礫が1個 3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：右 天井部にヘラ記号
60	2号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.3	—	4.2	灰白（N7/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：右
61	2号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.9	—	3.8	灰（N5/） 少し青色が入る	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：左 天井部内面に当て具痕 67とセット
62	2号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.6	—	3.9	灰（N6/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：左 66とセット
63	2号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.3	—	4.0	灰（N5/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：右 天井部内面に当て具痕 68とセット
64	2号墳石室内	須恵器	杯身	12.4	—	5.0	灰（N6/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底面回転ヘラケズリ
65	2号墳石室内	須恵器	杯身	12.6	—	4.0	灰（N4/）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：左 底部内面に当て具痕
66	2号墳石室内	須恵器	杯身	11.9	—	3.9	灰（N5/）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底面回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：左 62とセット
67	2号墳石室内	須恵器	杯身	12.1	—	3.7	灰（N5/）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：左 底部内面に当て具痕 61とセット

桑山古墳群　土器・埴輪一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
68	2号墳石室内	須恵器	杯身	11.4	—	4.0	灰（N5/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：左 底部内面に当て具痕 63とセット
69	2号墳石室内	須恵器	壺	8.8	—	12.2	灰白（N7/）	6mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	底部回転ヘラケズリ
70	2号墳周溝内	埴輪	円筒	(22.0)	13.6	45.2	浅黄橙（7.5YR8/4）	6mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面に斜めハケ、内面にナデとビオサエ 円形透かしを一段2孔穿ち、3・4段目では透かしの穿孔方向が直交
71	2号墳周溝内	埴輪	円筒	—	—	(31.8)	橙（5YR7/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面にタテハケ、内面にナデとユビオサエ 3段目？に円形透かし
72	2号墳周溝内	埴輪	円筒	(19.6)	—	(5.5)	橙（7.5YR7/6）	8mm程の礫を1個含む 3.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面にタテハケ、内面にユビオサエ
73	2号墳周溝内	埴輪	円筒	—	—	(16.7)	にぶい橙（7.5YR7/4）	6～8mm程の礫を5～6個含む 5mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・雲母）	良好		外面斜めハケ 円形透かし
74	2号墳周溝内	埴輪	円筒	—	—	(13.3)	橙（5Y7/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面斜めハケ 円形透かし
75	2号墳周溝内	埴輪	円筒	—	—	(12.8)	にぶい橙（7.5YR7/4）	6.5～7mm程の礫を2個程含む 4.0mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・雲母）	良好		外面斜めハケ 円形透かし
76	2号墳周溝内	埴輪	円筒	—	—	(7.4)	にぶい橙（7.5YR7/4）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面斜めハケ 円形透かし
77	2号墳周溝内	埴輪	石見型	—	19.6	(7.5)	橙（7.5YR7/6）	6～10mm程の礫を2個程含む 4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面斜めハケ 内面ユビオサエ、ナデ
78	2号墳周溝内	埴輪	石見型	—	(18.1)	(7.2)	にぶい橙（7.5YR7/4）	11mm程の礫を1個含む 5mm以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	良好		
79	2号墳周溝内	埴輪	石見型	—	(15.4)	—	橙（5YR7/6）	6～8.5mm以下の礫 5mm以下の砂粒（赤色酸化土粒・長石・石英・雲母）	良好		
80	2号墳周溝内	埴輪	石見型	—	—	(5.6)	橙（5YR7/6）	3mm以下の砂粒（赤色酸化土粒・長石・石英・雲母）	良好		器表面剥落により調整不明
81	2号墳周溝内	埴輪	石見型	—	—	—	橙（7.5YR7/6）	6～12mm程の礫を少量含む 3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		器表面剥落により調整不明
82	2号墳周溝内	埴輪	石見型	—	—	(4.0)	にぶい橙（7.5YR6/4）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面斜めハケ
83	3号墳箱式石棺内	須恵器	杯蓋	14.2	—	4.6	にぶい橙（7.5YR7/4）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：右 天井部内面に当て具痕
84	3号墳箱式石棺内	須恵器	杯蓋	13.7	—	4.5	にぶい橙（7.5YR7/4）	3.5mm以下の砂粒 （長石・石英・赤色酸化土粒）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：右
85	3号墳箱式石棺外	須恵器	杯身	12.5	—	5.0	浅黄橙（7.5YR8/6）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・黒色砂粒・赤色酸化土粒）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：右 底部内面に当て具痕
86	3号墳箱式石棺外	須恵器	杯身	12.0	—	3.8	浅黄橙（7.5YR8/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・雲母）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：右
87	3号墳箱式石棺内	須恵器	短頸壺蓋	7.2	—	2.7	灰（N5/0）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部ヘラケズリ 天井部にヘラ記号
88	3号墳箱式石棺内	須恵器	短頸壺	4.7	—	5.6	灰（N5/0）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部にヘラ記号

桑山古墳群　土器・埴輪一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
89	3号墳箱式石棺上	土師器	甕	12.8	—	21.1	橙（7.5YR7/6）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	外面ハケメ 内面ヘラケズリ 胴部に穿孔1か所
90	3号墳周溝内	須恵器	壺	（15.3）	—	（9.6）	灰（N6/0）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面平行タタキ 内面同心円当て具痕
91	3号墳周溝内	須恵器	甕	—	—	（12.4）	灰（N4/0）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面平行タタキ 内面同心円当て具痕
92	3号墳周溝内	埴輪	円筒	（17.7）	—	（8.5）	橙（5YR6/6）	5.0～6.5mm礫を少し含む 3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面斜めハケ 内面ユビオサエ、ナデ
93	3号墳周溝内	埴輪	円筒	（19.4）	—	（5.2）	橙（7.5YR7/6）	6mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面斜めハケ 内面ユビオサエ、ナデ
94	3号墳周溝内	埴輪	円筒	—	—	（18.0）	橙（5YR6/6）	6～9mm程の礫を少し含む 4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面斜めハケ 内面ユビオサエ、ナデ 円形透かし
95	3号墳周溝内	埴輪	円筒	—	—	（12.9）	橙（7.5YR7/6）	9～8mm程の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面斜めハケ 内面ユビオサエ、ナデ
96	3号墳周溝内	埴輪	円筒	—	—	（10.2）	橙（7.5YR7/6）	10mm程の礫を1個含む 5mm以下の砂粒（雲母・長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面斜めハケ 内面ユビオサエ、ナデ 円形透かし
97	3号墳周溝内	埴輪	円筒	—	—	（6.7）	橙（7.5YR7/6）	3mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面斜めハケ 内面ユビオサエ、ナデ
98	3号墳周溝内	埴輪	円筒	—	—	（8.0）	橙（7.5YR7/6）	6mm程の礫を1個含む 3mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面斜めハケ 内面ユビオサエ、ナデ 円形透かし
99	3号墳周溝内	埴輪	円筒	—	—	（9.0）	暗灰黄（2.5Y5/2）	6.5mm程の礫を1個含む 5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面斜めハケ 内面ユビオサエ、ナデ 底部にハケメ
100	4号墳竪穴式石室1内	須恵器	杯蓋	13.4	—	4.4	灰白（5Y7/1）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左 天井部内面に当て具痕
101	4号墳竪穴式石室1内	須恵器	杯身	12.0	—	4.2	灰白（5Y7/1）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左 底部にヘラ記号
102	4号墳竪穴式石室1内	須恵器	杯蓋	13.2	—	4.4	灰（N6/0）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左 天井部内面に当て具痕
103	4号墳竪穴式石室1内	須恵器	杯身	12.0	—	4.0	灰白（N7/0）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左 底部にヘラ記号
104	4号墳竪穴式石室1内	須恵器	壺	8.7	—	11.8	にぶい黄橙（10YR7/2）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	体部カキメ、ナデ
105	4号墳竪穴式石室1内	土師器	甕	12.5	—	（16.7）	浅黄橙（10YR8/4）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	埋葬時には、底部が欠損していたか？ 外面ハケメ
106	4号墳竪穴式石室2内	須恵器	杯蓋	14.7	—	4.7	浅黄橙（10YR8/3）	3mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	不良	ほぼ完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：剥落により不明
107	4号墳竪穴式石室2内	須恵器	杯身	13.2	—	4.9	にぶい黄橙（10YR7/3）	5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	不良	完形	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：剥落により不明
108	4号墳竪穴式石室2内	須恵器	杯蓋	14.7	—	4.9	灰（N4/0）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
109	4号墳竪穴式石室2内	須恵器	杯身	13.0	—	4.7	灰（N4/0）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右

桑山古墳群　土器・埴輪一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
110	４号墳竪穴式石室２内	須恵器	杯蓋	14.6	－	4.9	灰白（2.5Y8/2）	5mm 以下の砂粒（長石・石英）	不良	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
111	４号墳竪穴式石室２内	須恵器	杯身	13.1	－	4.4	灰白（2.5Y8/2）	5mm 以下の砂粒（長石・石英）	不良	完形	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
112	４号墳竪穴式石室２内	須恵器	杯蓋	13.8	－	4.8	灰（N6/0）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
113	４号墳竪穴式石室２内	須恵器	杯身	12.7	－	4.5	灰（N6/0）	6.5mm 程の礫を１個含む 5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
114	４号墳竪穴式石室２内	須恵器	杯蓋	14.3	－	4.8	灰（N6/0）	7mm 程の石を１個含む、5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
115	４号墳竪穴式石室２内	須恵器	杯身	12.9	－	4.6	灰（N6/0）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
116	４号墳竪穴式石室２内	須恵器	壺	15.3	－	20.6	灰（N6/0）	5mm 以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	肩部にカキメ 頸部にシボリ痕跡あり
117	５号墳石室内	須恵器	杯蓋	15.7	－	4.1	暗灰（N3/）	5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：左 天井部外面にヘラ記号、内面に当て具痕
118	５号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.8	－	4.1	灰（10Y5/）	8mm 程の礫を含む 2.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：右 天井部内面に当て具痕
119	５号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.4	－	4.4	赤灰（5R5/1）	5.5 ～ 6.5mm の礫を少し含む 3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部ヘラ切り後ナデ
120	５号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.3	－	3.7	灰（N5/）	5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：左 天井部内面に当て具痕
121	５号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.1	－	4.0	灰（N5/）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：右
122	５号墳石室内	須恵器	杯蓋	14.0	－	3.6	灰（N5/）	3mm 以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：右
123	５号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.9	－	4.7	灰白（5Y7/1）	3mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：左
124	５号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.9	－	3.5	にぶい黄褐（10YR5/4）	5mm 以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：右
125	５号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.8	－	3.1	灰（N4/）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	凹んでいる天井部中央部には回転ヘラケズリが及ばず、中央部はヘラ切りのまま ロクロの回転方向：右
126	５号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.8	－	4.6	灰白（5Y7/1）	3mm 前後の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：左
127	５号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.8	－	4.5	灰（N6/）	4mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：左
128	５号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.8	－	4.4	灰白（N7/）	5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：左
129	５号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.6	－	4.6	灰（N5/）・自然釉　黄灰（2.5Y5/1）	4.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：左 天井部内面に当て具痕
130	５号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.5	－	4.7	灰（N6/）	3.5mm 以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：右 天井部内面に当て具痕

桑山古墳群　土器・埴輪一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
131	5号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.4	—	4.1	灰（N5/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	天井部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：右 天井部内面に当て具痕
132	5号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.3	—	4.0	灰（N5/）	2mm以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	天井部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：右
133	5号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.4	—	4.7	灰（N6/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：左 天井部内面に当て具痕
134	5号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.4	—	4.2	灰（N6/）	3mm以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	天井部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：左
135	5号墳石室内	須恵器	杯蓋	13.1	—	4.6	灰（N4/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	天井部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：左
136	5号墳石室内	須恵器	杯身	14.8	11.4	5.3	灰（N5/）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：左
137	5号墳石室内	須恵器	杯身	13.3	—	4.4	オリーブ灰 （2.5 G Y6/1）	4mm以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：右 底部内面に当て具痕
138	5号墳石室内	須恵器	杯身	13.2	—	3.9	灰（N6/）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：右 受け部に波状の線刻
139	5号墳石室内	須恵器	杯身	12.7	—	4.0	灰（N5）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：右 底部内面に当て具痕
140	5号墳石室内	須恵器	杯身	12.7	—	4.3	灰（N6/）	5～6mm程の礫を2個程含む 3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：左
141	5号墳石室内	須恵器	杯身	12.6	—	3.7	灰（N5/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：右 底部内面に当て具痕
142	5号墳石室内	須恵器	杯身	12.5	—	4.4	灰（N4/）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底面回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：左
143	5号墳石室内	須恵器	杯身	12.5	—	4.3	灰（N6/）	3mm以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：左
144	5号墳石室内	須恵器	杯身	12.4	—	3.8	灰（N5/）	6mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底面回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：左
145	5号墳石室内	須恵器	杯身	12.4	—	4.2	灰（N6/）	2mm以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：右
146	5号墳石室内	須恵器	杯身	12.4	—	4.6	灰（N6/）	3mm以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：左
147	5号墳石室内	須恵器	杯身	12.3	—	4.1	灰（N6/）	4.5mm程の砂粒1個含む 3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：右
148	5号墳石室内	須恵器	杯身	12.3	—	4.4	灰（N6/）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：左
149	5号墳石室内	須恵器	杯身	12.1	—	3.8	灰（N5/）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底面回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：左 底部内面に当て具痕
150	5号墳石室内	須恵器	杯身	12.1	—	4.8	赤灰（5R5/1）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：左 受け部外面に重ね焼き痕あり
151	5号墳石室内	須恵器	杯身	12.1	—	3.4	灰（N5）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：右

桑山古墳群　土器・埴輪一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
152	5号墳石室内	須恵器	杯身	12.1	—	4.1	灰（5Y5/1）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
153	5号墳石室内	須恵器	杯身	12.0	—	4.1	灰（N5/）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：右 底部内面に当て具痕
154	5号墳石室内	須恵器	杯身	12.0	—	4.3	灰白（N7/）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：左
155	5号墳石室内	須恵器	杯身	11.9	—	3.7	灰（N6/）	5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：右
156	5号墳石室内	須恵器	杯身	11.8	—	3.9	灰（N6/）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：右
157	5号墳石室内	須恵器	有蓋高杯蓋	16.8	—	5.5	灰白（7.5Y7/1）	5.5～6.0mm程の礫を少し含む 5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ 天井部内面に当て具痕
158	5号墳石室内	須恵器	有蓋高杯蓋	15.0	—	5.8	灰（N6/）	3mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	天井部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：右
159	5号墳石室内	須恵器	有蓋高杯蓋	14.9	—	4.2	灰（N5/）	2mm前後の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部カキメ
160	5号墳石室内	須恵器	有蓋高杯蓋	13.4	—	4.4	灰（N4/）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：左
161	5号墳石室内	須恵器	有蓋高杯蓋	13.7	—	4.5	灰（N4/）	6mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ 天井部外面にヘラ記号、内面に当て具痕
162	5号墳石室内	須恵器	有蓋高杯蓋	13.4	—	4.6	灰（N5/）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：左
163	5号墳石室内	須恵器	有蓋高杯	15.2	14.5	20.3～22.3	灰白（N7/）	6.5mm前後の礫と10mm程の石粒を少し含む 5.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	杯底部回転ヘラケズリ、脚柱部カキメ 2段3方向の透かし 杯受け部に布目痕
164	5号墳石室内	須恵器	有蓋高杯	14.4	14.3	18.5	灰（N5/）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	杯底部回転ヘラケズリ　ロクロの回転方向：左 等間隔でない2段3方向の透かし 上段の透かしは線状であり非常に幅が狭い
165	5号墳石室内	須恵器	有蓋高杯	13.5	14.2	21.5	灰（N5/）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	2段3方向の透かし
166	5号墳石室内	須恵器	有蓋高杯	13.3	13.0	18.6	灰（N4/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	杯底面ヘラケズリ 2段3方向の透かし
167	5号墳石室内	須恵器	有蓋高杯	13.1	9.9	10.1	灰（N5/）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	杯底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右 3方向の透かし
168	5号墳石室内	須恵器	有蓋高杯	12.6	9.4	7.8～8.7	暗青灰（5B G 4/1）	5～6mm程の礫をく含む 4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	杯底面回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右 杯底部内面に当て具痕
169	5号墳石室内	須恵器	有蓋高杯	11.9	10.0	6.9～7.1	灰（N4/）	6.5mm程の礫を1個含む 3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	
170	5号墳石室内	須恵器	有蓋高杯	12.7	11.2	7.6	灰（N4/）	7mm程の礫を1個含む 4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	杯底部内面に当て具痕
171	5号墳石室内	須恵器	有蓋高杯	11.8	9.2	8.3	灰（N5/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	杯底面ヘラケズリ
172	5号墳石室内	須恵器	高杯	11.4	10.1	16.1	灰（N4/）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	杯底部回転ヘラケズリ 2段3方向の透かし 脚端部に凹線1条

桑山古墳群　土器・埴輪一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
173	5号墳石室内	須恵器	高杯	(11.4)	9.4	15.0	灰（N4/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	杯下半カキメ、櫛状工具による刺突 2段3方向の透かし
174	5号墳石室内	須恵器	高杯	10.4	9.2	14.4	暗灰（N3/）	7mm程の礫を2個含む 3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	2段3方向の透かし 透かし上段は斜め方向に切れ込みが入る
175	5号墳石室内	須恵器	鈴付高杯	12.8	11.9	17.8	灰（N5/）	3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	脚上部は2段3方向の方形の透かしを入れた円球状を呈し、そこに土製丸玉1個を入れ、鈴とする
176	5号墳石室内	須恵器	高杯	13.6	10.7	12.3	灰白（2.5Y8/1）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	不良	完形	杯部底面に当て具痕
177	5号墳石室内	須恵器	高杯	9.7	7.7	6.3	灰白（5Y7/1）	3mm以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	不良	ほぼ完形	杯底面回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：右
178	5号墳石室内	須恵器	脚付椀	8.4	10.6	20.5	灰（N4/）	4mm以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	外面に櫛状工具による刺突 台部に3方向の透かし
179	5号墳石室内	須恵器	甕	12.6	－	14.7	灰（N4/）	4mm以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：右
180	5号墳石室内	須恵器	甕	－	－	(14.9)	赤灰（10YR5/1）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	口縁部欠	底部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：右 頸部波状文
181	5号墳石室内	須恵器	甕	14.9	－	18.1	灰（N5/）	14mm程の石粒1個含む 3.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：左
182	5号墳石室内	須恵器	壺	11.8	9.5	13.3	灰白（10Y7/1）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	やや不良	完形	底部回転ヘラケズリとナデ 頸部外面タタキ後ナデ、胴部外面タタキ後カキメ
183	5号墳石室内	須恵器	壺	16.6	－	21.2	灰（N4/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	頸部に櫛描波状文
184	5号墳石室内	須恵器	壺	13.8	12.9	18.5	灰（N4/）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：右 肩部にヘラ記号
185	5号墳石室内	須恵器	壺	9.1	－	10.9	灰（N5/）	10mm前後の礫を1個含む 3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：右 底部内面にハケメ
186	5号墳石室内	須恵器	壺	9.4	6.0	12.6～13.7	灰白（N7/）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：右
187	5号墳石室内	須恵器	壺	－	9.2	(13.0)	灰（N5/）	6mm程の礫を1個含む 4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	口縁部欠	外面タタキ後カキメ
188	5号墳石室内	須恵器	壺	7.1	－	12.6	にぶい黄橙（10YR7/4）	4mm以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	不良	完形	
189	5号墳石室内	須恵器	蓋（短頸壺）	10.1	－	3.4	灰（N4/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	天井部ヘラケズリ
190	5号墳石室内	須恵器	短頸壺	8.1	－	(13.3)	灰（N5/）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	底部ヘラケズリ 頸部に重ね焼き痕
191	5号墳石室内	須恵器	短頸壺	7.9	－	13.9	灰（N5/）	2mm以下の砂粒 （長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	底部回転ヘラケズリ 胴部外面にカキメ 肩部に重ね焼き痕
192	5号墳石室内	須恵器	短頸壺	6.8	7.5	8.8	灰（N4/）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部回転ヘラケズリ
193	5号墳石室内	須恵器	短頸壺	3.9	－	6.3	灰（N5/）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	底部ヘラケズリ

桑山古墳群　土器・埴輪一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
194	5号墳石室内	須恵器	短頸壺	5.3	—	6.5	灰（N6/）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	底部タタキ後ナデ
195	5号墳石室内	須恵器	脚付装飾壺	20.8	21.0	47.0	灰（N5/）、暗灰（N3/）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	頸部外面に櫛状工具による刺突、体部に平行タタキ、台部に櫛描波状文と2段4方向の透かし 壺肩部に穴10個を配する
196	5号墳石室内	須恵器	台付壺	13.8	13.5	28.1	明黄褐（10YR7/6）	2mm以下の砂粒（長石・石英）	やや不良	ほぼ完形	頸部に斜め方向の刺突文 肩部付近に線刻か 外面にタタキ痕
197	5号墳石室内	須恵器	台付壺	7.2	9.3～10.2	19.4	灰黄褐（10YR5/2）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	台部楕円形 胴部上半櫛状工具による刺突、下半カキメ
198	5号墳石室内	須恵器	堤瓶	4.8	—	17.2	灰白（2.5Y8/1）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英）	やや不良	ほぼ完形	体部にカキメ 耳は鉤形
199	5号墳石室内	須恵器	堤瓶	6.9	—	16.4	灰（N5/）	4mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	胴部回転ヘラケズリ
200	5号墳石室内	須恵器	堤瓶	5.9	—	18.7	灰（N5/）	2mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	表面はカキメ、裏面はケズリ 耳は鉤形
201	5号墳石室内	須恵器	堤瓶	5.6	—	14.8	褐灰（10YR6/1）	3mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	完形	表面カキメ 耳は鉤形
202	5号墳石室内	須恵器	堤瓶	—	—	(15.9)	灰（N5/）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	口縁部欠損	重ね焼き痕 耳は鉤形
203	5号墳石室内	土師器	高杯	11.0	8.9	10.3	にぶい橙（7.5YR7/4）・赤色顔料 明赤褐（2.5YR5/8）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	外面、口縁部内面に赤色顔料 外面ナデ、ユビオサエ 内面ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ
204	5号墳石室内	土師器	高杯	11.3	8.7	9.6	にぶい黄橙（10YR7/4）・赤色顔料　明赤褐（2.5YR5/8）	5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	杯部内外面に赤色顔料 外面ナデ、ユビオサエ 内面ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ
205	5号墳石室内	土師器	甕	—	—	(9.8)	橙（7.5YR7/6）	5.5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面ハケメ 内面ケズリ、ナデ
206	5号墳石室内	土師器	甕	9.6	—	11.6	明赤褐（2.5YR5/8）	3mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	外面に赤色顔料 外面ハケメ、ナデ 内面ケズリ、ユビオサエ
207	5号墳石室内	土師器	甕	10.0	—	13.8	橙（5YR7/8）・赤色顔料　橙（2.5YR6/8）	3mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	外面、口縁部内面に赤色顔料 胴部に穿孔1か所 外面にハケメ、内面にケズリ、ナデ、ユビオサエ
208	5号墳石室内	土師器	甕	15.9	19.9	20.3	黄橙（7.5YR7/8）	4.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	外面ハケメ、ナデ 内面ケズリ、ナデ、ユビオサエ
209	5号墳石室内	土師器	甕	15.7	—	(10.2)	にぶい黄橙（10YR7/4）・橙（5YR6/6）	6～7.5mm程の礫を少量含む 2.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面ハケメ 内面ケズリ、ユビオサエ
210	5号墳石室内	土師器	甕	15.3	—	16.8	にぶい黄橙（10YR7/4）	7～8mm前後の礫を少量含む 6mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	完形	外面平行タタキ後ナデ
211	5号墳石室内	土師器	杯	(14.2)	9.2	4.2	にぶい黄橙（10YR7/4）	2.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		底部ヘラ切り
212	5号墳石室内	土師器	杯	13.3	7.0	3.15	にぶい橙（7.5YR7/4）	5.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		内外面調整不明
213	5号墳周溝内	須恵器	杯身	13.5	—	4.2	灰（10Y6/1）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好	ほぼ完形	底部回転ヘラケズリ　　ロクロの回転方向：左

桑山古墳群　土器・埴輪一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
214	5号墳周溝内	須恵器	甕	—	—	(6.9)	灰（10Y5/1）	5mm以下の砂粒 （長石・石英・黒色砂粒・雲母）	良好		外面は平行タタキ後カキメ 内面に当て具痕
215	5号墳周溝内	埴輪	円筒	30.9	17.1	45.7	橙（7.5YR7/6）	5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面にタテハケ　内面にナデとユビオサエ 円形透かしを一段2孔穿ち、隣接する段間で穿孔方向が直交する
216	5号墳周溝内	埴輪	円筒	(29.2)	21.0	48.5	浅黄橙（10YR8/4）	17mm程のシャモット1個含む 6.5～10mm程の礫を含む 5mm以下の砂粒 （長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面にタテハケ　内面にナデとユビオサエ 円形透かしを一段2孔穿ち、隣接する段間で穿孔方向が直交する
217	5号墳周溝内	埴輪	円筒	26.4	—	(12.7)	橙（7.5YR7/6）	5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面にタテハケ 内面にナデとユビオサエ
218	5号墳周溝内	埴輪	円筒	30.5	15.7	口縁部(22.7) 基底部(8.0)	黄橙（7.5YR8/8）	5.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面にタテハケ　内面にナデとユビオサエ 円形透かし 底部に粗朶？の痕跡
219	5号墳周溝内	埴輪	円筒	(25.2)	—	(31.0)	にぶい橙（7.5YR7/4）	5mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面タテハケ 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし 波状の文様
220	5号墳周溝内	埴輪	円筒	(28.1)	—	(17.7)	浅黄橙（7.5YR8/6）	5.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒・赤色酸化土粒）	良好		外面タテハケ 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
221	5号墳周溝内	埴輪	円筒	21.1	—	(14.9)	浅黄橙（7.5YR8/4）	7mm前後の礫を少し含む 5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面タテハケ 内面ナデ、ユビオサエ
222	5号墳周溝内	埴輪	円筒	22.4	—	(25.7)	浅黄橙（7.5YR8/4）	10mm程の石粒1個含む 5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面タテハケ 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
223	5号墳周溝内	埴輪	円筒	26.6	—	(22.9)	橙（7.5YR7/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒・角閃石・雲母・金雲母）	良好		外面タテハケ 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
224	5号墳周溝内	埴輪	円筒	(27.6)	—	(17.5)	黄橙（10YR8/6）	5.5mm以下の砂粒 （長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面タテハケ 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
225	5号墳周溝内	埴輪	円筒	—	—	(21.0)	にぶい黄橙（10YR7/4）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面タテハケ 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
226	5号墳周溝内	埴輪	円筒	—	—	(24.6)	橙（7.5YR7/6）	5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・角閃石・赤色酸化土粒）	良好		外面タテハケ 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし
227	5号墳周溝内	埴輪	円筒	—	20.1	(41.9)	浅黄橙（7.5YR8/4）	5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面にタテハケ、内面にナデとユビオサエ 円形透かしを一段2孔穿ち、隣接する段間で穿孔方向が直交する 波状の文様
228	5号墳周溝内	埴輪	円筒	—	(18.9)	(32.7)	橙（7.5YR7/6）	7～9mm前後の礫を少し含む 5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面にタテハケ、内面にナデとユビオサエ 円形透かしを一段2孔穿ち、隣接する段間で穿孔方向が直交する
229	5号墳周溝内	埴輪	円筒	—	19.3	34.2	橙（7.5YR7/6）	5.5mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面にタテハケ、内面にナデとユビオサエ 円形透かしを1段2孔穿ち、隣接する段間で穿孔方向が直交する
230	5号墳周溝内	埴輪	円筒	—	15.8	33.0	橙（5YR7/6）	5mm以下の砂粒 （長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面にタテハケ、内面にナデとユビオサエ 円形透かしを1段2孔穿ち、隣接する段間で穿孔方向が直交する
231	5号墳周溝内	埴輪	円筒	—	18.9～19.7	(26.1)	橙（5YR7/6）	9mm程の礫を1個含む 5mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面にタテハケ、内面にナデとユビオサエ 円形透かし 基底部楕円形
232	5号墳周溝内	埴輪	円筒	—	19.8	(25.2)	浅黄橙（10YR8/4）	9mm程の礫も1～2個ある 6mm以下の砂粒（長石・石英）	良好		外面にタテハケ、内面にナデとユビオサエ 円形透かしを1段2孔穿ち、隣接する段間で穿孔方向が直交する
233	5号墳周溝内	埴輪	円筒	—	21.7	(15.4)	浅黄橙（7.5YR8/6）	4mm以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好		外面タテハケ 内面ナデ、ユビオサエ 円形透かし

桑山古墳群　土器・埴輪一覧

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
234	５号墳周溝内	埴輪	円筒	－	16.1	(17.4)	浅黄橙（10YR8/4）	3.5㎜以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面タテハケ 内面ナデ、ユビオサエ
235	５号墳周溝内	埴輪	円筒	－	18.6	(15.6)	橙（5YR7/6）	5㎜以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面タテハケ 内面ナデ、ユビオサエ 底部楕円形を呈する
236	５号墳周溝内	埴輪	円筒	－	18.7～20.5	(10.7)	にぶい黄橙（10YR7/4）	5.5㎜以下の砂粒（長石・石英・赤色酸化土粒）	良好		外面タテハケ 内面ナデ、ユビオサエ 底部楕円形を呈する
237	５号墳周溝内	埴輪	朝顔形	(43.0)	－	(13.8)	にぶい黄橙（10YR6/3）	5㎜以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好		外面タテハケ 内面ヨコナデ
238	箱式石棺1	須恵器	甕	－	－	(24.0)	灰（N6/）	5.5㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		石棺内と石棺周辺の破片が接合する
239	箱式石棺1	須恵器	甕	－	－	(13.5)	灰白（2.5Y8/2）	5.5㎜程の砂（礫）を４～５個含む 2.5㎜以下の砂粒（長石・石英）	良好		石棺内と石棺周辺の破片が接合する
240	箱式石棺1	土師器	椀	11.7	－	4.7	橙（5YR6/6）	4㎜以下の砂粒（長石・石英・雲母・赤色酸化土粒）	良好	完形	
241	土器棺墓1	土師器	甕	19.8	－	28.4	橙（5YR6/6）	9㎜程の礫黒色１個含む 5㎜以下の砂粒（長石・石英・雲母）	良好	ほぼ完形	外面にハケメ、内面にヘラケズリとユビオサエ 胴部に穿孔１か所

桑山古墳群　玉類一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）				重量（ｇ）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
Ｓ１	１号墳石室内	棗玉	18.2	11.9	1.9	1.8	1.63	琥珀	チョコレート（10R2.5/2.5）	完形
Ｓ２	１号墳石室内	棗玉	16.4	13.4	2.8	2.7	1.49	琥珀	チェストナットブラウン（7.5YR3/3.5）	完形
Ｓ３	１号墳石室内	棗玉	(14.5)	(13.5)	(2.9)	－	0.93	琥珀	チョコレート（10YR2.5/2.5）	
Ｓ４	３号墳箱式石棺内	管玉	29.4	10.8	3.5	1.3	5.44	※碧玉	千草色（10Ｇ7/2.5）	完形　片面穿孔
Ｓ５	３号墳箱式石棺内	管玉	26.1	9.6	3.7	1.4	3.82	碧玉	革色（5Ｇ3.5/2）	完形　片面穿孔
Ｓ６	３号墳箱式石棺内	管玉	24.6	8.7	3.7	0.9	3.38	碧玉	革色（5Ｇ3.5/2）	完形　片面穿孔 穿孔痕跡（1.2㎜程度）
Ｓ７	３号墳箱式石棺内	管玉	23.4	7.2	2.2	1.9	1.92	※碧玉	千草（10Ｇ7/2.5）	完形　両面穿孔
Ｓ８	３号墳箱式石棺内	管玉	23.3	8.9	3.4	1.2	3.25	碧玉	エバーグリーン（1.5Ｇ3/2.5）	完形　片面穿孔
Ｓ９	３号墳箱式石棺内	管玉	23.2	8.4	2.7	0.9	2.70	碧玉	エバーグリーン（1.5Ｇ3/2.5）	片面穿孔
Ｓ10	３号墳箱式石棺内	管玉	22.6	8.9	2.3	0.5	3.18	碧玉	エバーグリーン（1.5Ｇ3/2.5）	一部欠損　片面穿孔
Ｓ11	３号墳箱式石棺内	管玉	21.6	6.7	2.0	1.9	6.78	碧玉	エバーグリーン（1.5Ｇ3/2.5）	完形　両面穿孔
Ｓ12	３号墳箱式石棺内	管玉	21.1	7.8	3.6	1.6	2.09	碧玉	エバーグリーン（1.5Ｇ3/2.5）	完形　片面穿孔
Ｓ13	３号墳箱式石棺内	管玉	19.4	7.8	2.5	1.0	2.14	碧玉	エバーグリーン（1.5Ｇ3/2.5）	完形　片面穿孔
Ｓ14	３号墳箱式石棺内	管玉	16.4	7.5	2.6	0.9	1.64	碧玉	エバーグリーン（1.5Ｇ3/2.5）	完形　片面穿孔
Ｓ15	３号墳箱式石棺内	算盤玉	7.9	9.1	3.3	1.4	0.84	水晶	透明（白濁）	完形　片面穿孔
Ｓ16	３号墳箱式石棺内	算盤玉	7.7	9.9	2.7	1.1	0.96	水晶	透明（白濁）	完形
Ｓ17	３号墳箱式石棺内	切子玉	25.5	14.4	4.5	1.7	6.44	※流紋岩？	スレートグレー（2.5PB3.5/0.5）	完形　片面穿孔 7面の切り子面

桑山古墳群　玉類一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
S 18	3号墳 箱式石棺内	切子玉	23.6	13.8	3.9	1.4	5.58	※泥岩にシルト岩の葉理が入る	スレートグレー (2.5PB3.5/0.5)	完形　片面穿孔 7面の切り子面
S 19	3号墳 箱式石棺内	切子玉	23.5	14.6	4.0	2.1	5.05	※泥岩に極細粒砂岩の葉理が入る	アイボリーブラック (N1.5)	完形　片面穿孔 6面の切り子面
S 20	3号墳 箱式石棺内	切子玉	22.4	13.0	3.7	2.2	4.33	※泥岩	チャコールグレー (5P3/1)	完形　片面穿孔 7面の切り子面
S 21	3号墳 箱式石棺内	切子玉	20.7	13.6	3.4	1.6	4.63	※流紋岩？	グレー (N5)	完形　片面穿孔 6面の切り子面　割れ円錐あり
S 22	3号墳 箱式石棺内	切子玉	20.2	14.4	3.9	1.7	4.60	※泥岩に極細粒砂岩の葉理が入る	チャコールグレー (5P3/1)	完形　片面穿孔 6面の切り子面
S 23	3号墳 箱式石棺内	切子玉	14.3	9.4	3.1	1.9	1.69	水晶	透明（白濁）	一部欠損　片面穿孔 6面の切り子面
S 24	3号墳 箱式石棺内	切子玉	13.1	11.1	3.3	1.3	1.97	水晶	透明（若干白濁）	完形　片面穿孔 6面の切り子面　割れ円錐あり
S 25	3号墳 箱式石棺内	切子玉	12.5	10.5	2.8	1.0	1.84	水晶	透明（白濁）	完形　片面穿孔 6面の切り子面　割れ円錐あり
S 26	3号墳 箱式石棺内	切子玉	11.9	11.3	3.0	1.1	1.74	水晶	透明（若干白濁）	完形　片面穿孔 6面の切り子面　割れ円錐あり
S 27	3号墳 箱式石棺内	切子玉	19.8	13.6	3.0	2.9	3.79	蛇紋岩	海松（みる）色 (9.5Y4.5/2.5)	完形　両面穿孔 4面の切り子面
S 28	3号墳 箱式石棺内	棗玉	17.2	10.9	3.2	2.8	2.73	埋木	トープ (7.5RP3.5/1.5)	完形　両面穿孔 両小口面は凹む
S 29	3号墳 箱式石棺内	棗玉	16.3	11.2	3.2	3.0	2.88	蛇紋岩	海松（みる）色 (9.5Y4.5/2.5)	完形　両面穿孔 下面は凹む
S 30	3号墳 箱式石棺内	棗玉	13.3	11.2	4.1	2.4	1.34	埋木	チャコールグレー (5P3/1)	完形　両面穿孔
S 31	3号墳 箱式石棺内	丸玉	8.4	9.5	2.5	1.4	1.11	水晶	白濁不透明	完形　片面穿孔 割れ円錐あり
S 32	3号墳 箱式石棺内	丸玉	7.4	9.1	2.3	1.4	0.81	水晶	透明 （外面研磨のため外見は白濁）	片面穿孔 割れ円錐あり
S 33	3号墳 箱式石棺内	小玉	4.8	8.2	2.5	2.3	0.47	蛇紋岩	ミントグリーン (2.5 G 7.5/8)	完形
S 34	3号墳 箱式石棺内	小玉	4.8	8.0	2.3	2.3	0.47	蛇紋岩	ボトルグリーン (5 G 2.5/3)	完形
S 35	3号墳 箱式石棺内	小玉	4.5	8.1	2.5	2.3	0.44	蛇紋岩	エバーグリーン (1.5 G 3/2.5)	完形
S 36	3号墳 箱式石棺内	小玉	4.5	8.0	2.6	2.3	0.39	蛇紋岩	ボトルグリーン (5 G 2.5/3)	完形
S 37	3号墳 箱式石棺内	小玉	3.8	7.9	2.4	2.3	0.37	蛇紋岩	ジェードグリーン (10 G 5.5/5)	完形
S 38	3号墳 箱式石棺内	臼玉	2.9	5.7	2.0	1.9	0.13	※滑石？	モスグリーン (6.5 G Y4/4)	完形
S 39	4号墳 竪穴式 石室1内	管玉	25.1	9.7	3.9	1.8	3.99	碧玉	エバーグリーン (1.5 G 3/2.5)	完形　片面穿孔 1/3周の割れ円錐
S 40	4号墳 竪穴式 石室1内	管玉	24.6	9.0	3.9	1.2	3.14	※碧玉	セージグリーン (8 G Y6/3)	完形　片面穿孔
S 41	4号墳 竪穴式 石室1内	管玉	22.1	8.3	2.1	1.0	2.85	碧玉	エバーグリーン (1.5 G 3/2.5)	完形　片面穿孔
S 42	4号墳 竪穴式 石室1内	管玉	20.2	8.1	2.5	1.0	2.43	碧玉	エバーグリーン (1.5 G 3/2.5)	完形　片面穿孔
S 43	4号墳 竪穴式 石室1内	管玉	20.4	8.5	3.7	1.7	2.45	碧玉	エバーグリーン (1.5 G 3/2.5)	完形　片面穿孔 最初の穿孔痕跡が認められる
S 44	4号墳 竪穴式 石室1内	管玉	16.9	7.7	3.1	1.9	1.60	碧玉	エバーグリーン (1.5 G 3/2.5)	完形　片面穿孔
S 45	4号墳 竪穴式 石室1内	管玉	15.9	8.4	3.3	1.3	1.82	碧玉	エバーグリーン (1.5 G 3/2.5)	完形　片面穿孔

桑山古墳群　玉類一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
S 46	4号墳 竪穴式 石室1内	算盤玉	13.5	13.2	3.4	1.5	2.84	水晶	白濁した透明	完形　片面穿孔 割れ円錘あり
S 47	4号墳 竪穴式 石室1内	算盤玉	12.5	13.0	3.6	1.7	2.51	水晶	白濁透明	完形　片面穿孔 面取り状の研磨　割れ円錐あり
S 48	4号墳 竪穴式 石室1内	算盤玉	10.3	9.7	2.6	1.1	1.13	水晶	透明（白濁）	完形　片面穿孔 割れ円錘あり
S 49	4号墳 竪穴式 石室1内	算盤玉	9.3	10.3	2.7	1.1	1.21	水晶	白濁した透明	完形　片面穿孔 割れ円錘あり
S 50	5号墳 石室内	管玉	30.4	10.7	2.6	0.9	6.32	碧玉	エバーグリーン（1.5 G 3/2.5）	完形　片面穿孔 両小口部斜めの研磨面残存
S 51	5号墳 石室内	管玉	29.5	10.2	2.9	1.1	5.40	碧玉	エバーグリーン（1.5 G 3/2.5） に薄黄色の細かい斑が入る	完形 両面穿孔（下部のものは浅い）
S 52	5号墳 石室内	管玉	27.7	8.4	3.7	1.3	3.38	碧玉	エバーグリーン（1.5 G 3/2.5）	完形　片面穿孔
S 53	5号墳 石室内	管玉	27.3	9.3	3.7	0.8	4.28	碧玉	エバーグリーン（1.5 G 3/2.5）	完形　両面穿孔
S 54	5号墳 石室内	管玉	27.2	10.6	2.4	0.7	5.79	碧玉	エバーグリーン（1.5 G 3/2.5）	完形　片面穿孔
S 55	5号墳 石室内	管玉	24.7	7.3	3.6	1.2	2.49	碧玉	エバーグリーン（1.5 G 3/2.5）	完形　片面穿孔 孔にガラス小玉が嵌入 重量は、孔のガラス小玉を含む
S 56	5号墳 石室内	管玉	24.6	7.2	2.3	1.4	2.38	碧玉	スプルース（3 G 2.5/2.5）	完形　片面穿孔
S 57	5号墳 石室内	管玉	23.6	10.7	3.1	1.3	5.14	碧玉	ボトルグリーン（5 G 2.5/3）	完形　片面穿孔 割れ円錐あり
S 58	5号墳 石室内	管玉	23.1	8.3	3.6	1.6	2.67	水晶	白濁した透明	完形　片面穿孔　割れ円錐あり 両小口面は研磨不十分で凹凸あり
S 59	5号墳 石室内	管玉	21.2	7.6	3.1	1.1	2.09	水晶	透明（若干白濁）	完形　片面穿孔 割れ円錐あり
S 60	5号墳 石室内	管玉	19.4	7.6	3.5	1.6	1.83	水晶	白濁した透明色	完形　片面穿孔
S 61	5号墳 石室内	管玉	17.5	7.5	3.0	1.1	1.67	水晶	透明（若干白濁）	完形　片面穿孔 割れ円錐あり
S 62	5号墳 石室内	管玉	15.4	7.7	3.4	1.3	1.46	水晶	白濁	完形　片面穿孔　割れ円錐あり 両小口面は研磨不十分で凹凸あり
S 63	5号墳 石室内	管玉	(21.2)	9.4	－	0.8	2.95	水晶	透明（僅かに白濁）	片面穿孔 割れ円錐あり
S 64	5号墳 石室内	切子玉	17.6	14.8	3.0	1.5	5.01	水晶	透明（若干白濁）	完形　片面穿孔 7面の切り子面　割れ円錐あり 内部に割れが見える
S 65	5号墳 石室内	切子玉	11.6	12.3	3.5	1.2	2.72	水晶	透明（若干白濁）	完形　片面穿孔 6面の切り子面　割れ円錐あり
S 66	5号墳 石室内	切子玉	10.6	9.6	1.9	1.1	1.18	水晶	透明（若干白濁）	完形　片面穿孔 8面の切り子面　割れ円錐あり
S 67	5号墳 石室内	切子玉	10.3	10.7	3.0	0.8	1.28	水晶	透明（若干白濁）	完形　片面穿孔 6面の切り子面　割れ円錐あり
S 68	5号墳 石室内	算盤玉	10.8	11.9	2.9	1.3	1.79	水晶	透明（若干白濁）	完形　片面穿孔 割れ円錐あり
S 69	5号墳 石室内	算盤玉	10.6	11.9	3.6	1.5	1.82	水晶	透明（若干白濁）	完形　片面穿孔 割れ円錐あり
S 70	5号墳 石室内	丸玉	6.4	8.1	2.5	0.8	0.57	水晶	白濁半透明	完形　片面穿孔 割れ円錐の半分は研磨で消失
S 71	包含層	管玉	28.5	8.8	2.8	2.8	2.32	※新第三紀凝灰岩	セラドン（10 G Y7.5/5.5）	完形　片面穿孔 4号墳下の旧表土下で出土
S 72	包含層	算盤玉	10.6	11.8	3.1	1.7	1.79	水晶	白濁した透明	完形　片面穿孔 下面に深さ4mm程の穿孔あり
G 1	3号墳 箱式石棺内	小玉	3.1	3.6	1.3	1.3	0.06	ガラス	サルファーイエロー （8.5Y8.5/8.5）	完形 表面に小さい砂粒が見られる
G 2	3号墳 箱式石棺内	小玉	2.7	3.5	1.3	1.3	0.06	ガラス	カナリーイエロー（7Y8.5/10）	完形

桑山古墳群　玉類一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
G 3	3号墳 箱式石棺内	小玉	2.6	4.0	1.3	1.3	0.06	ガラス	サルファーイエロー (8.5Y8.5/8.5)	完形 表面に微小な剥離痕
G 4	3号墳 箱式石棺内	小玉	2.4	3.7	1.3	1.3	0.04	ガラス	サルファーイエロー (8.5Y8.5/8.5)	完形
G 5	3号墳 箱式石棺内	小玉	2.3	3.9	1.3	1.1	0.05	ガラス	サルファーイエロー (8.5Y8.5/8.5)	完形 上面の孔は少し変形
G 6	3号墳 箱式石棺内	小玉	2.0	3.6	1.3	1.3	0.04	ガラス	カナリーイエロー (7Y8.5/10)	完形
G 7	3号墳 箱式石棺内	小玉	1.9	3.8	1.2	1.2	0.03	ガラス	カナリーイエロー (7Y8.5/10)	完形
G 8	3号墳 箱式石棺内	小玉	1.5	3.7	1.3	1.3	0.02	ガラス	サルファーイエロー (8.5Y8.5/8.5)	完形
G 9	4号墳 竪穴式 石室1内	小玉	2.8	5.4	2.0	2.0	0.09	ガラス	グラスグリーン (5 G Y5/5)	完形
G 10	4号墳 竪穴式 石室1内	小玉	2.7	3.2	1.1	1.1	－	ガラス	浅黄 (2.5B5/8)	約1/2残存
G 11	5号墳 石室内	小玉	4.1	8.0	1.5	1.5	0.35	ガラス	プルシャンブルー (5PB3/4)	完形
G 12	5号墳 石室内	小玉	5.3	7.9	1.6	1.6	0.50	ガラス	ネービーブルー (6PB2.5/4)	完形
G 13	5号墳 石室内	小玉	5.3	7.6	1.4	1.4	0.38	ガラス	インジゴ (2.5PB2.5/5)	完形
G 14	5号墳 石室内	小玉	6.2	7.3	1.3	1.3	0.46	ガラス	プルシャンブルー (5PB3/4)	完形
G 15	5号墳 石室内	小玉	4.3	7.3	1.7	1.3	0.35	ガラス	インジゴ (2.5PB2.5/5)	完形
G 16	5号墳 石室内	小玉	5.6	7.1	1.3	1.3	0.39	ガラス	インジゴ (2.5PB2.5/5)	完形
G 17	5号墳 石室内	小玉	5.1	7.0	1.6	1.6	0.37	ガラス	インジゴ (2.5PB2.5/5)	完形
G 18	5号墳 石室内	小玉	5.7	6.9	2.0	2.0	0.38	ガラス	プルシャンブルー (5PB3/4)	完形
G 19	5号墳 石室内	小玉	6.8	6.8	1.6	1.6	0.43	ガラス	コバルトブルー (3PB4/10)	完形
G 20	5号墳 石室内	小玉	5.2	6.7	1.2	1.2	0.35	ガラス	インジゴ (2.5PB2.5/5)	完形
G 21	5号墳 石室内	小玉	4.3	6.6	1.4	1.4	0.31	ガラス	インジゴ (2.5PB2.5/5)	完形
G 22	5号墳 石室内	小玉	5.8	5.9	1.5	1.3	0.27	ガラス	ネービーブルー (6PB2.5/4)	完形 大小の白斑が入る
G 23	5号墳 石室内	小玉	3.7	5.3	1.7	1.7	0.12	ガラス	新橋 (2.5B6.5/5.5)	完形
G 24	5号墳 石室内	小玉	3.2	5.3	1.5	1.5	0.10	ガラス	納戸茶 (10B G 4/3)	完形
G 25	5号墳 石室内	小玉	2.9	5.3	1.2	1.2	0.10	ガラス	ピーコックブルー (10B G 4/8.5)	完形
G 26	5号墳 石室内	小玉	4.5	5.2	1.6	1.6	0.13	ガラス	ナイルブルー (10B G 5.5/5)	完形
G 27	5号墳 石室内	小玉	2.7	5.2	1.5	1.5	0.09	ガラス	浅黄 (2.5B5/8)	完形 気泡による弾け痕
G 28	5号墳 石室内	小玉	2.6	5.2	1.7	1.7	0.09	ガラス	浅黄 (2.5B5/8)	完形
G 29	5号墳 石室内	小玉	4.0	5.1	2.1	2.1	0.12	ガラス	ナイルブルー (10B G 5.5/5)	完形
G 30	5号墳 石室内	小玉	2.9	5.0	1.2	1.2	0.09	ガラス	浅黄 (2.5B5/8)	完形
G 31	5号墳 石室内	小玉	2.7	5.0	1.8	1.8	0.09	ガラス	浅黄 (2.5B5/8)	完形
G 32	5号墳 石室内	小玉	3.3	4.9	1.3	1.3	0.10	ガラス	セルリアンブルー (9B4.5/9)	完形

桑山古墳群　玉類一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
G 33	5号墳石室内	小玉	2.8	4.9	1.1	1.1	0.10	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 34	5号墳石室内	小玉	4.0	4.8	1.3	1.3	0.12	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 35	5号墳石室内	小玉	3.3	4.8	1.4	1.4	0.08	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 36	5号墳石室内	小玉	2.7	4.8	1.1	1.1	0.08	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 37	5号墳石室内	小玉	2.4	4.8	1.5	1.5	0.07	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 38	5号墳石室内	小玉	2.2	4.8	1.6	1.6	0.06	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 39	5号墳石室内	小玉	4.0	4.7	1.8	1.8	0.07	ガラス	ターコイズブルー（5B6/8）	完形
G 40	5号墳石室内	小玉	3.1	4.7	1.5	1.5	0.08	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	完形
G 41	5号墳石室内	小玉	3.1	4.7	0.9	0.9	0.08	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 42	5号墳石室内	小玉	3.1	4.7	1.0	1.0	0.09	ガラス	セルリアンブルー（9B4.5/9）	完形
G 43	5号墳石室内	小玉	4.7	4.6	1.2	1.2	0.12	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 44	5号墳石室内	小玉	3.4	4.6	1.2	1.2	0.08	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 45	5号墳石室内	小玉	2.9	4.6	1.1	1.1	0.09	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	完形
G 46	5号墳石室内	小玉	2.7	4.6	1.2	1.2	0.07	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 47	5号墳石室内	小玉	2.7	4.6	1.6	1.1	0.06	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 48	5号墳石室内	小玉	2.5	4.6	1.6	1.6	0.06	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 49	5号墳石室内	小玉	2.3	4.6	1.3	1.3	0.05	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 50	5号墳石室内	小玉	2.0	4.6	1.8	1.8	0.06	ガラス	新橘（2.5B6.5/5.5）	完形
G 51	5号墳石室内	小玉	3.6	4.5	1.5	1.5	0.07	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 52	5号墳石室内	小玉	2.8	4.5	1.3	1.3	0.07	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 53	5号墳石室内	小玉	2.7	4.5	1.2	1.2	0.08	ガラス	ターコイズブルー（5B6/8）	完形
G 54	5号墳石室内	小玉	2.4	4.5	1.3	1.3	0.06	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 55	5号墳石室内	小玉	2.4	4.5	1.3	1.3	0.06	ガラス	ピーコックブルー（10B G 4/8.5）	完形
G 56	5号墳石室内	小玉	2.0	4.5	1.5	1.5	0.05	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 57	5号墳石室内	小玉	3.7	4.4	1.2	1.2	0.10	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 58	5号墳石室内	小玉	3.6	4.4	1.2	1.2	0.10	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 59	5号墳石室内	小玉	3.2	4.4	1.2	1.2	0.09	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 60	5号墳石室内	小玉	3.1	4.4	1.3	1.3	0.08	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 61	5号墳石室内	小玉	2.6	4.4	1.0	1.0	0.07	ガラス	ターコイズブルー（5B6/8）	完形
G 62	5号墳石室内	小玉	3.8	(4.4)	(2.0)	(2.0)	(0.06)	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	一部欠損
G 63	5号墳石室内	小玉	3.3	4.3	1.2	1.2	0.08	ガラス	ピーコックブルー（10B G 4/8.5）	完形

桑山古墳群　玉類一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
G 64	5号墳石室内	小玉	2.8	4.3	1.2	1.2	0.07	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 65	5号墳石室内	小玉	2.6	4.3	1.4	1.4	0.08	ガラス	インジゴ（2.5PB2.5/5）	完形
G 66	5号墳石室内	小玉	2.3	4.3	1.4	1.4	0.06	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 67	5号墳石室内	小玉	2.2	4.3	1.6	1.6	0.05	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 68	5号墳石室内	小玉	2.0	4.3	1.3	1.3	0.04	ガラス	スマルト（5PB3.5/6）	完形
G 69	5号墳石室内	小玉	3.0	4.2	1.0	1.0	0.07	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 70	5号墳石室内	小玉	2.9	4.2	1.0	1.0	0.08	ガラス	紺（6PB2.5/4）	完形
G 71	5号墳石室内	小玉	2.9	4.2	1.3	1.3	0.07	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 72	5号墳石室内	小玉	2.4	4.2	1.4	1.4	0.05	ガラス	緑青（4 G 5/4）	完形
G 73	5号墳石室内	小玉	2.1	4.2	0.9	0.9	0.05	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 74	5号墳石室内	小玉	2.6	4.1	1.0	1.0	0.06	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 75	5号墳石室内	小玉	2.4	4.1	1.1	1.1	0.05	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 76	5号墳石室内	小玉	2.3	4.1	1.9	1.9	0.05	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	完形
G 77	5号墳石室内	小玉	1.8	4.1	1.2	1.2	0.03	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 78	5号墳石室内	小玉	4.0	4.0	0.7	0.7	0.09	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 79	5号墳石室内	小玉	3.6	4.0	1.4	1.4	0.08	ガラス	サックスブルー（1PB5/4.5）	完形
G 80	5号墳石室内	小玉	2.8	4.0	1.2	1.2	0.07	ガラス	スマルト（5PB3.5/6）	完形
G 81	5号墳石室内	小玉	2.7	4.0	1.3	1.3	0.05	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	完形
G 82	5号墳石室内	小玉	2.6	4.0	1.2	1.2	0.06	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 83	5号墳石室内	小玉	2.4	4.0	1.4	1.4	0.05	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 84	5号墳石室内	小玉	2.3	4.0	1.3	1.3	0.05	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 85	5号墳石室内	小玉	2.2	4.0	1.2	1.2	0.05	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 86	5号墳石室内	小玉	2.1	4.0	1.1	1.1	0.04	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 87	5号墳石室内	小玉	1.8	4.0	1.4	1.4	0.03	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 88	5号墳石室内	小玉	3.7	(4.0)	(1.3)	(1.3)	(0.05)	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	一部欠損
G 89	5号墳石室内	小玉	3.9	－	－	－	－	ガラス	新橘（2.5B6.5/5.5）	5片以上に分割
G 90	5号墳石室内	小玉	2.8	3.9	0.8	0.8	0.06	ガラス	ジュードグリーン（10 G 5.5/5）	完形
G 91	5号墳石室内	小玉	2.3	3.9	1.0	1.0	0.04	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 92	5号墳石室内	小玉	2.2	3.9	1.0	1.0	0.04	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	完形
G 93	5号墳石室内	小玉	1.9	3.9	1.1	1.1	0.03	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 94	5号墳石室内	小玉	1.9	3.9	1.2	1.2	0.03	ガラス	インジゴ（2.5PB2.5/5）	完形

桑山古墳群　玉類一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
G 95	5号墳石室内	小玉	1.8	3.9	1.3	1.3	0.04	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 96	5号墳石室内	小玉	3.3	(3.9)	(1.5)	(1.5)	(0.03)	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	一部欠損
G 97	5号墳石室内	小玉	2.8	3.8	1.6	1.6	0.05	ガラス	リーフグリーン（5 G Y6/7）	完形
G 98	5号墳石室内	小玉	2.8	3.8	0.8	0.8	0.07	ガラス	青緑（7.5B G 5/12）	完形
G 99	5号墳石室内	小玉	2.7	3.8	1.6	1.6	0.05	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	完形
G 100	5号墳石室内	小玉	2.6	3.8	0.9	0.9	0.05	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 101	5号墳石室内	小玉	2.5	3.8	1.2	1.2	0.05	ガラス	ジェードグリーン（10 G 5.5/5）	完形
G 102	5号墳石室内	小玉	2.2	3.8	0.9	0.9	0.04	ガラス	サファイアブルー（7PB2.5/12）	完形
G 103	5号墳石室内	小玉	2.0	3.8	1.1	1.1	0.03	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 104	5号墳石室内	小玉	1.7	3.8	1.1	1.1	0.02	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 105	5号墳石室内	小玉	1.7	3.8	1.1	1.1	0.03	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	完形
G 106	5号墳石室内	小玉	1.2	3.8	1.8	1.8	0.04	ガラス	ターコイズブルー（5B6/8）	完形
G 107	5号墳石室内	小玉	3.2	3.7	1.1	1.1	0.06	ガラス	青磁（7.5 G 6.5/4）	完形
G 108	5号墳石室内	小玉	3.1	3.7	1.0	1.0	0.06	ガラス	ターコイズブルー（5B6/8）	完形
G 109	5号墳石室内	小玉	2.4	3.7	1.0	1.0	0.05	ガラス	スマルト（5PB3.5/6）	完形
G 110	5号墳石室内	小玉	2.3	3.7	1.1	1.1	0.04	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 111	5号墳石室内	小玉	2.3	3.7	1.0	1.0	0.04	ガラス	ピーコックブルー（10B G 4/8.5）	完形
G 112	5号墳石室内	小玉	2.3	3.7	0.9	0.9	0.05	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 113	5号墳石室内	小玉	2.2	3.7	0.9	0.9	0.04	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	完形
G 114	5号墳石室内	小玉	2.2	3.7	1.0	1.0	0.04	ガラス	ターコイズブルー（5B6/8）	完形
G 115	5号墳石室内	小玉	2.4	3.6	1.0	1.0	0.04	ガラス	プルシャンブルー（5PB3/4）	完形
G 116	5号墳石室内	小玉	2.3	3.6	1.2	1.2	0.03	ガラス	スマルト（5PB3.5/6）	完形
G 117	5号墳石室内	小玉	2.1	3.6	1.1	1.1	0.04	ガラス	サルファーイエロー（8.5Y8.5/8.5）	完形
G 118	5号墳石室内	小玉	1.9	3.6	1.2	1.2	0.03	ガラス	ターコイズブルー（5B6/8）	完形
G 119	5号墳石室内	小玉	2.5	3.5	0.8	0.8	0.04	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	完形
G 120	5号墳石室内	小玉	2.2	3.5	1.0	1.0	0.05	ガラス	納戸茶（10B G 4/3）	完形
G 121	5号墳石室内	小玉	2.2	3.5	0.9	0.9	0.04	ガラス	スマルト（5PB3.5/6）	完形
G 122	5号墳石室内	小玉	1.9	3.5	1.1	1.1	0.04	ガラス	アクアマリン（7B4.5/6）	完形
G 123	5号墳石室内	小玉	1.8	3.5	1.0	1.0	0.02	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 124	5号墳石室内	小玉	2.3	(3.5)	(1.0)	(1.0)	(0.01)	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	一部欠損
G 125	5号墳石室内	小玉	3.5	3.4	0.9	0.9	－	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	6片に分割

桑山古墳群　玉類一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（mm）				重量（g）	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）				
G 126	5号墳石室内	小玉	2.6	3.4	1.1	1.1	0.04	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	完形
G 127	5号墳石室内	小玉	2.6	3.4	0.9	0.9	0.03	ガラス	スマルト（5PB3.5/6）	完形
G 128	5号墳石室内	小玉	2.6	3.4	1.3	1.3	0.04	ガラス	カドミウムイエロー（6Y8.5/12）	完形
G 129	5号墳石室内	小玉	2.4	3.4	1.2	1.2	0.04	ガラス	青磁（7.5 G 6.5/4）	完形
G 130	5号墳石室内	小玉	2.3	3.4	0.9	0.9	0.03	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	完形
G 131	5号墳石室内	小玉	1.8	3.4	1.1	1.1	0.04	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 132	5号墳石室内	小玉	3.0	3.3	1.0	1.0	0.05	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	完形
G 133	5号墳石室内	小玉	2.8	3.3	1.1	1.1	0.04	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	完形
G 134	5号墳石室内	小玉	2.4	3.3	1.4	1.4	(0.03)	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	一部欠損
G 135	5号墳石室内	小玉	2.2	3.3	1.0	1.0	0.04	ガラス	青磁（7.5 G 6.5/4）	完形
G 136	5号墳石室内	小玉	1.8	3.3	1.2	1.2	0.02	ガラス	ジェードグリーン（10 G 5.5/5）	完形
G 137	5号墳石室内	小玉	2.3	3.2	0.7	0.7	0.03	ガラス	サルファーイエロー（8.5Y8.5/8.5）	完形
G 138	5号墳石室内	小玉	2.1	3.2	1.3	1.3	0.02	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	完形
G 139	5号墳石室内	小玉	1.9	3.2	1.0	1.0	0.03	ガラス	ラピスラズリ（6.5PB3.5/10）	完形
G 140	5号墳石室内	小玉	1.8	3.2	1.1	1.1	0.02	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	完形
G 141	5号墳石室内	小玉	2.3	3.1	1.2	1.2	0.03	ガラス	青竹（2.5B G 6.5/4）	完形
G 142	5号墳石室内	小玉	1.8	3.1	1.0	1.0	0.02	ガラス	スマルト（5PB3.5/6）	完形
G 143	5号墳石室内	小玉	1.8	3.1	1.1	1.1	0.03	ガラス	スマルト（5PB3.5/6）	完形
G 144	5号墳石室内	小玉	1.7	3.0	0.9	0.9	0.02	ガラス	アクアマリン（7B4.5/6）	完形
G 145	5号墳石室内	小玉	1.4	3.0	1.1	1.1	0.01	ガラス	ナイルブルー（10B G 5.5/5）	完形
G 146	5号墳石室内	小玉	3.0	2.9	0.9	0.8	0.03	ガラス	サルファーイエロー（8.5Y8.5/8.5）	完形
G 147	5号墳石室内	小玉	1.6	2.9	1.2	1.2	0.02	ガラス	スマルト（5PB3.5/6）	完形
G 148	5号墳石室内	小玉	1.4	2.8	1.0	1.0	0.02	ガラス	浅黄（2.5B5/8）	完形
G 149	5号墳石室内	小玉	1.8	2.7	1.0	1.0	0.02	ガラス	スマルト（5PB3.5/6）	完形
C 1	3号墳第1主体内	丸玉	6.7	8.6	1.6	1.6	0.49	土	チャコールグレー（5P3/1）	完形
C 2	3号墳第1主体内	丸玉	6.5	7.7	1.9	1.9	0.40	土	チャコールグレー（5P3/1）	完形
C 3	3号墳第1主体内	丸玉	6.3	7.5	1.6	1.6	0.35	土	チャコールグレー（5P3/1）	完形
C 4	3号墳第1主体内	丸玉	5.4	7.5	1.8	1.2	0.37	土	エボニー（6Y1.5/1.5）	完形
C 5	3号墳第1主体内	丸玉	(10.0)	(8.6)	(2.5)	(2.5)	0.26	土	エボニー（6Y1.5/1.5）	接合しないものの同一個体と思われる破片2点あり
C 6	3号墳第1主体内	丸玉	(5.8)	(7.1)	(1.8)	(1.8)	0.14	土	エボニー（6Y1.5/1.5）	接合しないものの同一個体と思われる破片1点あり

桑山古墳群　鉄刀・刀子一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）				重量（ｇ）	材質	備考
			全長	刃部長	刃部幅	茎長			
M 1	１号墳 石室内	刀	(26.0)	(26.0)	(19.5)	－	3.57	鉄	玄室攪乱土層出土 木質残存
M 2	１号墳 石室内	刀	(31.0)	－	－	－	4.82	鉄	玄室攪乱土層出土 木質残存
M 27	２号墳 石室内	素環頭大刀	(802.0) （刀身長） (735.0)	(587.0)	25.0	147.5	632.70	鉄	刀身・茎に木質残存 ※環頭・刀装具は「桑山古墳群　その他金属器」を参照
M 109	２号墳 石室内	刀子	(141.0)	(82.5)	14.5	58.5	20.50	鉄	柄は鹿角製
M 113	３号墳 箱式石棺内	刀	（柄装着時） (430.0) （刀身長） 337.0	264.0	23.5	73.0	－	鉄	刀身に布目 茎に木質残存 ※刀装具は「桑山古墳群　鹿角製品」を参照
M 114	３号墳 箱式石棺内	刀	（柄装着時） 432.5 （刀身長） 364.0	282.0	25.0	82.0	207.60	鉄	刀身に目釘穴（直径 2.5㎜程度）あり ※刀装具は「桑山古墳群　鹿角製品」を参照
M 138	４号墳 竪穴式 石室１内	刀子	157.0	94.0	16.0	63	25.84	鉄	関付近に木質残存
M 139	４号墳 竪穴式 石室２内	大刀	(699.5)	630.0	28.0	(69.5)	765.52	鉄	M 158 と癒着 刀身部に木質
M 164	４号墳 竪穴式 石室２内	刀子	153.0	103.0	16.0	50.0	22.55	鉄	茎に木質残存
M 165	５号墳 石室内	刀片 （茎？）	(73.5)	－	(17.0)	(73.5)	10.98	鉄	木質残存
M 165	５号墳 石室内	刀片	(86.0)	(86.0)	33.0	－	25.03	鉄	木質残存 反対面は剥離している
M 165	５号墳 石室内	刀片	(85.0)	(85.0)	34.0	－	14.62	鉄	反対面は剥離している
M 165	５号墳 石室内	刀片	(84.0)	(84.0)	32.0	－	15.44	鉄	木質残存 反対面は剥離している
M 165	５号墳 石室内	刀片	(86.0)	(86.0)	33.0	－	58.87	鉄	木質残存
M 165	５号墳 石室内	刀片	(73.4)	(34.4)	(32.6)	(39.0)	31.06	鉄	鑢本孔あり（最大径 4㎜、最小径 2.5㎜）
M 166	５号墳 石室内	刀	(137.5)	(14.5)	29.0	(123.0)	37.45	鉄	木質残存
M 254	５号墳 石室内	刀子	(134.0)	(68.0)	14.5	(66.0)	22.80	鉄	
M 255	５号墳 石室内	刀子	(61.5)	(15.5)	17.0	(46.0)	8.28	鉄	木質残存
M 256	５号墳 石室内	刀子	(64.0)	(64.0)	15.0	－	7.08	鉄	刃部のみ残存
M 257	５号墳 石室内	刀子	(104.0)	67.0	12.0	(37.0)	12.74	鉄 鹿角	刃部：木質残存 柄：鹿角・糸巻き
M 258	５号墳 石室内	刀子	(60.5)	(10.0)	15.0	50.5	6.56	鉄	
M 259	５号墳 石室内	刀子	(110.0)	(59.0)	13.0	(51.0)	14.34	鉄 鹿角	鹿角・木質残存
M 260	５号墳 石室内	刀子	(43.5)	(43.5)	7.5	－	2.66	鉄	
M 261	５号墳 石室内	刀子	(58.0)	(9.0)	15.0	(49.0)	7.07	鉄	

桑山古墳群　鉄鏃一覧

掲載番号	出土遺構等	計測値（mm）					重量（g）	材質	分類	矢柄口巻	矢柄木質	茎糸巻	備考
		全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	茎長							
M 4	1号墳石室内	183.0	29.0	10.5	100.0	54.0	15.70	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○		奥壁西側一括出土 鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり、頸部に有機質痕跡残存
M 5	1号墳石室内	175.5	18.5	9.0	92.5	64.5	13.17	鉄	細根・長頸・柳葉	○		○	奥壁西側一括出土 鏃身断面：平造 頸部に有機質痕跡残存
M 6	1号墳石室内	(166.0)	27.0	11.0	103.5	(35.5)	18.27	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	奥壁西側一括出土 鏃身断面：片丸造
M 7	1号墳石室内	(158.0)	26.0	10.5	103.0	(29.0)	14.66	鉄	細根・長頸・柳葉		○		奥壁西側一括出土 鏃身断面：片丸造
M 8	1号墳石室内	(152.5)	29.0	11.0	102.5	(21.0)	15.46	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○		奥壁西側一括出土 鏃身断面：片丸造
M 9	1号墳石室内	(140.5)	28.5	12.0	95.0	(17.0)	16.46	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○		奥壁西側一括出土 鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり
M 10	1号墳石室内	(83.5)	19.0	11.0	(64.5)	－	6.53	鉄	細根・長頸・柳葉				奥壁西側一括出土 鏃身断面：平造
M 11	1号墳石室内	(69.5)	20.0	12.0	(49.5)	－	5.51	鉄	細根・長頸・柳葉				奥壁西側一括出土 鏃身断面：平造
M 12	1号墳石室内	(146.5)	18.5	10.0	93.0	(35.0)	14.27	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○		奥壁西側一括出土 鏃身断面：片丸造
M 13	1号墳石室内	(158.0)	(14.0)	10.0	98.0	(46.0)	14.73	鉄	細根・長頸・柳葉	○			奥壁西側一括出土 鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり
M 14	1号墳石室内	(94.0)	65.0	25.0	24.0	(5.0)	15.46	鉄	平根・三角形				
M 15	1号墳石室内	(107.5)	44.0	25.5	29.5	(34.5)	13.22	鉄	平根・三角形		○	○	
M 16	1号墳石室内	(128.0)	92.0	(34.0)	32.5	(26.0)	34.33	鉄	平根・腸抉柳葉		○	○	頸部に横方向の木質残存
M 17	1号墳石室内	120.0	79.0	30.0	－	41.0	19.24	鉄	平根・方頭		○		
M 18	1号墳石室内	(36.0)	－	－	－	(36.0)	1.88	鉄	－		○	○	玄室攪乱土層出土 茎破片
M 19	1号墳石室内	(29.0)	－	－	－	(29.0)	0.56	鉄	－			○	奥壁西側一括出土
M 20	1号墳石室内	(9.0)	－	－	－	(9.0)	0.09	鉄	－			○	
M 28	2号墳石室内	201.5	23.5	11.0	94.0	84.0	13.04	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 29	2号墳石室内	194.0	21.5	11.5	97.0	173.5	14.30	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり
M 30	2号墳石室内	192.5	20.0	12.0	98.5	74.0	14.22	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 31	2号墳石室内	189.0	20.5	(10.0)	95.0	73.5	12.68	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 32	2号墳石室内	185.0	23.0	11.0	97.5	64.5	16.36	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり 重量は銹着したM 89 を含む数値

桑山古墳群　鉄鏃一覧

掲載番号	出土遺構等	計測値（mm）					重量（g）	材質	分類	矢柄口巻	矢柄木質	茎糸巻	備考
		全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	茎長							
M 33	2号墳石室内	186.0	20.0	10.0	95.5	70.5	13.17	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 34	2号墳石室内	187.0	20.0	10.0	100.0	67.0	25.20	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 重量は錆着したM 36 を含む数値
M 35	2号墳石室内	190.5	20.5	11.5	97.0	73.0	14.75	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 36	2号墳石室内	181.5	21.0	11.0	95.5	65.0	25.20	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 重量は錆着したM 34 を含む数値
M 37	2号墳石室内	181.0	19.5	10.0	97.0	64.5	11.50	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり
M 38	2号墳石室内	180.5	20.5	11.0	94.5	65.5	13.23	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり
M 39	2号墳石室内	(192.5)	20.0	10.5	99.0	(73.5)	12.78	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 40	2号墳石室内	(187.5)	17.5	9.0	98.0	(72.0)	11.80	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 41	2号墳石室内	(179.5)	21.0	11.0	98.0	(60.5)	12.19	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：両丸造
M 42	2号墳石室内	(180.0)	18.5	13.0	97.0	(64.5)	?	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり
M 43	2号墳石室内	(171.5)	21.5	11.5	95.0	(55.0)	12.55	鉄	細根・長頸・柳葉		○	○	鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり
M 44	2号墳石室内	168.0	21.5	10.0	91.0	55.5	14.10	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり
M 45	2号墳石室内	194.0	24.0	12.0	98.0	72.0	13.64	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：両丸造
M 46	2号墳石室内	196.5	21.0	11.0	99.0	76.5	14.21	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり
M 47	2号墳石室内	200.0	24.0	11.0	90.0	86.0	30.02	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり 重量は錆着したM 56 を含む数値
M 48	2号墳石室内	189.0	20.0	10.0	96.0	73.0	14.78	鉄	細根・長頸・柳葉		○	○	鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり
M 49	2号墳石室内	176.0	19.5	10.0	95.5	61.0	13.62	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 50	2号墳石室内	198.0	20.0	10.0	100.0	78.0	12.69	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 51	2号墳石室内	(183.5)	21.5	12.0	98.0	(64.0)	13.32	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり
M 52	2号墳石室内	(185.0)	(18.0)	11.0	102.0	65.0	28.51	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり 重量は錆着したM 53 を含む数値
M 53	2号墳石室内	(191.5)	(18.0)	10.5	98.0	75.5	28.51	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり 重量は錆着したM 52 を含む数値
M 54	2号墳石室内	(187.0)	(16.0)	10.0	100.5	(70.5)	13.31	鉄	細根・長頸・柳葉		○	○	鏃身断面：片丸造

桑山古墳群　鉄鏃一覧

掲載番号	出土遺構等	計測値（mm）					重量（g）	材質	分類	矢柄口巻	矢柄木質	茎糸巻	備考
		全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	茎長							
M 55	2号墳石室内	(190.0)	(14.5)	10.5	92.5	73.0	13.76	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり
M 56	2号墳石室内	(181.0)	(19.0)	(12.0)	93.0	(69.0)	30.02	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 重量は銹着したM 47 を含む数値
M 57	2号墳石室内	(140.0)	25.0	10.5	92.0	(23.0)	12.56	鉄	細根・長頸・柳葉		○		鏃身断面：片丸造 茎関に棘状突起あり
M 58	2号墳石室内	(58.0)	—	—	—	(58.0)	2.12	鉄	—	○	○		
M 112	2号墳周溝内	(69.5)	60.0	29.0	—	(9.5)	20.34	鉄	平根・方頭				
M 115	3号墳箱式石棺内	160.0	24.5	11.5	87.0	49.5	13.14	鉄	細根・長頸・柳葉	○		○	鏃身に布目付着
M 116	3号墳箱式石棺内	157.0	26.0	11.5	81.0	50.0	12.71	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身に布目付着
M 117	3号墳箱式石棺内	152.0	16.0	12.0	85.0	51.0	13.41	鉄	細根・長頸・柳葉	○		○	鏃身に布目付着
M 118	3号墳箱式石棺内	141.0	23.0	13.0	83.0	36.0	12.45	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身に布目付着
M 119	3号墳箱式石棺内	140.0	16.5	11.0	80.0	44.5	12.46	鉄	細根・長頸・柳葉		○	○	
M 120	3号墳箱式石棺内	155.5	23.5	12.0	83.0	48.5	11.80	鉄	細根・長頸・柳葉	○		○	鏃身に布目付着
M 121	3号墳箱式石棺内	147.5	17.5	10.5	73.0	57.0	11.83	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	
M 122	3号墳箱式石棺内	145.5	16.0	10.0	78.5	51.0	11.08	鉄	細根・長頸・柳葉		○	○	
M 123	3号墳箱式石棺内	143.0	19.0	9.5	74.0	50.0	11.15	鉄	細根・長頸・柳葉		○	○	
M 124	3号墳箱式石棺内	152.0	15.0	11.5	77.0	62.0	12.49	鉄	細根・長頸・柳葉		○	○	
M 125	3号墳箱式石棺内	145.5	17.0	10.5	74.7	54.5	10.23	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○		
M 126	3号墳箱式石棺内	(148.5)	(14.0)	10.5	73.0	62.0	10.37	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	
M 127	3号墳箱式石棺内	(138.0)	23.5	11.0	81.0	(34.0)	12.77	鉄	細根・長頸・柳葉		○	○	鏃身に布目付着
M 128	3号墳箱式石棺内	(127.0)	16.5	11.0	70.5	(41.5)	10.07	鉄	細根・長頸・柳葉		○		
M 129	3号墳箱式石棺内	(124.0)	17.0	11.0	77.5	(29.5)	11.42	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	
M 130	3号墳箱式石棺内	(111.5)	19.0	11.5	88.5	(4.0)	9.32	鉄	細根・長頸・柳葉				
M 131	3号墳箱式石棺内	(125.5)	22.0	12.0	81.5	(22.0)	11.17	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身に布目付着
M 132	3号墳箱式石棺内	(130.0)	15.0	10.05	77.0	(37.0)	11.03	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	

桑山古墳群　鉄鏃一覧

掲載番号	出土遺構等	計測値（mm）					重量（g）	材質	分類	矢柄口巻	矢柄木質	茎糸巻	備考
		全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	茎長							
M 133	3号墳 箱式石棺内	(139.0)	15.0	11.0	75.0	(49.0)	10.47	鉄	細根・長頸・柳葉			○	
M 134	3号墳 箱式石棺内	(28.5)	—	—	—	(28.5)	0.36	鉄	—		○	○	
M 135	3号墳 箱式石棺内	(47)	—	—	—	(47)	1.17	鉄	—		○	○	
M 136	3号墳 周溝内	(61.0)	(54.5)	(18.0)	—	(6.5)	14.83	鉄	平根・方頭				
M 141	4号墳 竪穴式 石室2内	143.0	21.0	11.5	76.0	46.0	25.66 （M 145 を含む）	鉄	細根・長頸・柳葉	○		○	鏃身断面：片丸造 M 145 と接着
M 142	4号墳 竪穴式 石室2内	(132.5)	21.5	10.5	85.5	(25.5)	10.57	鉄	細根・長頸・柳葉		○		鏃身断面：片丸造
M 143	4号墳 竪穴式 石室2内	129.0	19.0	10.0	81.0	29.0	10.94	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 144	4号墳 竪穴式 石室2内	(125.0)	21.0	10.0	81.0	(23.0)	12.00	鉄	細根・長頸・柳葉		○	○	鏃身断面：片丸造
M 145	4号墳 竪穴式 石室2内	(123.0)	(4.0)	11.0	86.0	(33.0)	25.66 （M 141 を含む）	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○		鏃身断面：片丸造か？ M 141 と接着
M 146	4号墳 竪穴式 石室2内	(122.0)	21.0	10.5	79.0	(22.0)	9.64	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 茎関付近に布が僅かに付着
M 147	4号墳 竪穴式 石室2内	(122.0)	20.0	10.5	77.0	(25.0)	10.19	鉄	細根・長頸・柳葉				鏃身断面：片切刃造
M 148	4号墳 竪穴式 石室2内	(121.0)	22.0	10.0	75.0	(24.0)	12.26	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○		鏃身断面：片丸造
M 149	4号墳 竪穴式 石室2内	(121.0)	20.5	11.0	79.0	(21.5)	10.69	鉄	細根・長頸・柳葉	○		○	鏃身断面：両丸造 鏃身は鏃身関付近で外反して開く
M 150	4号墳 竪穴式 石室2内	(119.0)	21.0	10.5	75.0	23.0	12.41	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○		鏃身断面：片丸造か？
M 151	4号墳 竪穴式 石室2内	(115.5)	(11.5)	10.0	77.0	(27.0)	9.90	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 152	4号墳 竪穴式 石室2内	(114.0)	18.5	10.0	80.5	(15.0)	10.08	鉄	細根・長頸・柳葉			○	鏃身断面：片丸造 鏃身・頸部に布付着
M 153	4号墳 竪穴式 石室2内	(107.0)	19.0	10.0	75.5	(12.5)	9.50	鉄	細根・長頸・柳葉		○		鏃身断面：片丸造
M 154	4号墳 竪穴式 石室2内	(107.0)	19.0	12.0	76.0	(12.0)	11.05	鉄	細根・長頸・柳葉	○			鏃身断面：片切刃造 鏃身は鏃身関付近で僅かに外反して開く
M 155	4号墳 竪穴式 石室2内	(63.0)	22.0	11.5	(41.0)	—	5.45	鉄	細根・長頸・柳葉				鏃身断面：片丸造 M 158 と同一個体の可能性
M 156	4号墳 竪穴式 石室2内	(56.0)	22.0	11.0	(34.0)	—	5.11	鉄	細根・長頸・柳葉				鏃身断面：片丸造
M 157	4号墳 竪穴式 石室2内	(41.5)	20.0	9.0	21.5	—	3.41	鉄	細根・長頸・柳葉				鏃身断面：片丸造
M 158	4号墳 竪穴式 石室2内	(43.0)	—	—	(43.0)	—	3.65	鉄	細根				M 139 の切先に付着 M 155 と同一個体の可能性

桑山古墳群　鉄鏃一覧

掲載番号	出土遺構等	計測値（mm）					重量（g）	材質	分類	矢柄口巻	矢柄木質	茎糸巻	備考
		全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	茎長							
M 159	4号墳 竪穴式 石室2内	(50.0)	—	—	(15.5)	(34.5)	3.12	鉄	—	○	○	○	
M 160	4号墳 竪穴式 石室2内	(53.0)	—	—	(28.5)	(24.5)	5.02	鉄	—	○	○	○	頸部の関付近で布付着
M 161	4号墳 竪穴式 石室2内	(86.0)	—	—	(51.5)	34.5	7.22	鉄	細根			○	頸部に他の鉄族の矢柄（木質）が付着
M 162	4号墳 竪穴式 石室2内	(63.0)	—	—	(45.0)	(18.0)	5.39	鉄	細根	○			茎関付近に布が付着
M 163	4号墳 竪穴式 石室2内	(24.5)	—	—	—	(24.5)	0.78	鉄	—			○	
M 169	5号墳 石室内	122.0	44.0	(13.0)	53.0	31.0	9.59	鉄	細根・短頸・ 腸抉柳葉			○	鏃身断面：片丸造 棘状突起あり
M 170	5号墳 石室内	(116.5)	(41.0)	(14.0)	49.0	31.0	10.30	鉄	細根・短頸・ 腸抉柳葉		○	○	鏃身断面：両丸造
M 171	5号墳 石室内	(116.0)	(40.0)	(13.0)	49.0	(30.0)	11.13	鉄	細根・短頸・ 柳葉	○	○		鏃身断面：両丸造 棘状突起あり
M 172	5号墳 石室内	(130.0)	(44.0)	(12.5)	55.0	40.0	10.13	鉄	細根・短頸・ 腸抉柳葉		○	○	鏃身断面：片丸造 棘状突起あり
M 173	5号墳 石室内	(115.0)	41.5	13.5	57.0	(27.0)	9.27	鉄	細根・短頸・ 腸抉柳葉		○	○	鏃身断面：片丸造 棘状突起あり
M 174	5号墳 石室内	(103.0)	45.0	(13.0)	53.0	(13.0)	10.61	鉄	細根・短頸・ 腸抉柳葉		○		鏃身断面：両丸造 棘状突起あり
M 175	5号墳 石室内	(104.0)	(40.0)	(13.5)	47.0	(22.0)	8.57	鉄	細根・短頸・ 腸抉柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 176	5号墳 石室内	(102.0)	37.0	(13.5)	55.0	(17.0)	9.08	鉄	細根・短頸・ 腸抉柳葉	○	○	○	鏃身断面：両丸造 棘状突起あり
M 177	5号墳 石室内	(83.0)	(26.0)	(13.5)	52.0	(13.0)	8.69	鉄	細根・短頸・ 腸抉柳葉	○	○		鏃身断面：両丸造 棘状突起あり
M 178	5号墳 石室内	(133.0)	(37.0)	9.0	52.0	44.0	10.73	鉄	細根・短頸・柳葉		○	○	鏃身断面：片丸造
M 179	5号墳 石室内	(102.0)	37.0	9.5	50.0	(15.0)	7.56	鉄	細根・短頸・柳葉			○	鏃身断面：片丸造
M 180	5号墳 石室内	(90.0)	(33.0)	12.5	46.0	(11.0)	11.58	鉄	細根・短頸・柳葉	○			鏃身断面：両丸造
M 181	5号墳 石室内	(105.0)	41.0	12.0	47.0	(17.0)	10.57	鉄	細根・短頸・柳葉	○	○		鏃身断面：片丸造 棘状突起あり
M 182	5号墳 石室内	(126.0)	(38.0)	12.5	50.0	(38.0)	9.19	鉄	細根・短頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 棘状突起あり
M 183	5号墳 石室内	(157.0)	29.0	9.0	87.0	(41.0)	13.84	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○		鏃身断面：片丸造
M 184	5号墳 石室内	(180.5)	28.0	10.0	84.0	(68.5)	15.78	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：両丸造
M 185	5号墳 石室内	(176.0)	21.0	11.0	94.0	(61.0)	17.87	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：両丸造 棘状突起あり

桑山古墳群　鉄鏃一覧

掲載番号	出土遺構等	計測値（mm）					重量（g）	材質	分類	矢柄口巻	矢柄木質	茎糸巻	備考
		全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	茎長							
M 186	5号墳石室内	133.0	22.0	(7.0)	88.5	(22.5)	11.87	鉄	細根・長頸・柳葉				鏃身断面：片丸造 棟状突起あり
M 187	5号墳石室内	(114.0)	31.0	10.0	72.0	(11.0)	8.54	鉄	細根・長頸・柳葉				鏃身断面：片丸造 棟状突起あり
M 188	5号墳石室内	(142.0)	(21.0)	9.0	87.0	(34.0)	16.04	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○		鏃身断面：片丸造 棟状突起あり
M 189	5号墳石室内	(166.0)	22.0	9.5	88.0	(56.0)	15.33	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 190	5号墳石室内	170.0	27.0	9.0	90.0	(53.0)	17.61	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○		鏃身断面：両丸造
M 191	5号墳石室内	(164.5)	28.0	8.0	87.0	(49.5)	16.69	鉄	細根・長頸・柳葉		○		鏃身断面：平造
M 192	5号墳石室内	(173.0)	27.0	9.0	88.0	(58.0)	17.35	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 棟状突起あり
M 193	5号墳石室内	152.0	24.0	8.0	86.0	(42.0)	12.78	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○		鏃身断面：片丸造か？ 棟状突起あり
M 194	5号墳石室内	137.5	25.0	9.5	72.0	40.5	9.85	鉄	細根・長頸・柳葉			○	鏃身断面：片丸造 棟状突起あり
M 195	5号墳石室内	(87.0)	29.0	10	(58.0)	—	7.22	鉄	細根・長頸・柳葉				鏃身断面：片丸造
M 196	5号墳石室内	(167.0)	(21.0)	9.5	90.0	56.0	16.91	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造 棟状突起あり
M 197	5号墳石室内	(153.0)	26.0	9.0	87.0	(40.0)	15.15	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 198	5号墳石室内	(160.5)	(26.0)	7.0	73.0	61.5	14.46	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 199	5号墳石室内	(113.0)	25.0	95.0	70.0	(18.0)	7.28	鉄	細根・長頸・柳葉			○	鏃身断面：片丸造 棟状突起あり
M 200	5号墳石室内	(84.0)	(12.0)	(9.3)	47.0	(25.0)	3.99	鉄	細根・短頸？・柳葉				鏃身断面：片丸造 棟状突起あり
M 201	5号墳石室内	135.5	19.5	10.0	78.0	88.0	9.18	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 202	5号墳石室内	151.0	17.0	12.0	74.0	60.0	14.63	鉄	細根・長頸	○	○		鏃身断面：片丸造か？
M 203	5号墳石室内	(150.0)	(15.0)	(12.0)	83.0	52.0	40.10	鉄	細根・長頸・三角	○	○		鏃身断面：片丸造か？ 重量にはM 204・208 を含む
M 204	5号墳石室内	151.0	20.0	12.0	74.0	57.0	40.10	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造か？ 重量にはM 203・208 を含む
M 205	5号墳石室内	140.0	18.0	11.0	77.0	45.0	12.07	鉄	細根・長頸・三角	○	○		鏃身断面：片丸造
M 206	5号墳石室内	142.0	18.0	12.0	78.0	46.0	15.72	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○		鏃身断面：片丸造
M 207	5号墳石室内	(147.0)	(19.0)	9.0	92.0	(36.0)	14.42	鉄	細根・長頸・柳葉		○	○	鏃身断面：片丸造

桑山古墳群　鉄鏃一覧

掲載番号	出土遺構等	計測値（mm）					重量（g）	材質	分類	矢柄口巻	矢柄木質	茎糸巻	備考
		全長	鏃身長	鏃身幅	頸部長	茎長							
M 208	5号墳石室内	133.0	21.0	12.0	69.0	(43.0)	40.10	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○		鏃身断面：片丸造か？ 裏面に別遺物の木質が癒着 重量にはM 203・204 を含む
M 209	5号墳石室内	145.5	18.0	11.5	80.0	47.5	14.51	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 210	5号墳石室内	140.0	17.5	11.5	76.0	46.5	14.14	鉄	細根・長頸・三角			○	鏃身断面：片丸造
M 211	5号墳石室内	(130.0)	(15.0)	(12.7)	72.5	42.5	11.07	鉄	細根・長頸・三角	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 212	5号墳石室内	(125.0)	(13.0)	(10.0)	72.0	40.0	6.40	鉄	細根・長頸・柳葉		○		鏃身断面：平造
M 213	5号墳石室内	(72.0)	(20.5)	(11.0)	(51.5)	—	4.86	鉄	細根・長頸・片刃				鏃身断面：平造？
M 214	5号墳石室内	(118.0)	(10.0)	(11.0)	69.0	(39.0)	10.73	鉄	細根・長頸・柳葉？	○	○		鏃身断面：両丸造
M 215	5号墳石室内	(151.0)	(13.5)	8.0	87.5	(50.0)	13.75	鉄	細根・長頸・柳葉？		○	○	鏃身断面：片丸造
M 216	5号墳石室内	(123.0)	(3.0)	(11.0)	73.0	(47.0)	10.97	鉄	細根・長頸・柳葉	○	○	○	鏃身断面：片丸造
M 217	5号墳石室内	(71.0)	(6.5)	10.5	47.5	(17.0)	6.39	鉄	細根・長頸・柳葉？		○		鏃身断面：片丸造
M 218	5号墳石室内	(88.0)	—	—	(71.0)	(17.0)	5.68	鉄	細根・長頸		○	○	
M 219	5号墳石室内	(83.5)	—	—	(71.5)	(12.0)	6.35	鉄	細根				
M 220	5号墳石室内	(98.0)	—	—	(83.5)	(14.5)	6.41	鉄	細根・長頸		○		
M 221	5号墳石室内	(114.0)	57.0	(31.0)	37.0	(38.0)	16.24	鉄	平根・腸抉柳葉	○	○	○	鏃身断面：平造
M 222	5号墳石室内	(30.0)	—	—	—	(30.0)	0.87	鉄	—		○	○	
M 223	5号墳石室内	(29.7)	—	—	—	(29.7)	0.58	鉄	—				
M 224	5号墳石室内	(32.5)	—	—	—	(32.5)	0.86	鉄	—		○	○	
M 225	5号墳石室内	(29.0)	—	—	—	(29.0)	0.73	鉄	—			○	
M 226	5号墳石室内	(26.0)	—	—	—	(26.0)	0.55	鉄	—		○	○	
M 227	5号墳石室内	(27.0)	—	—	—	(27.0)	0.80	鉄	—		○	○	
M 228	5号墳石室内	(17.5)	—	—	—	(17.5)	0.35	鉄	—		○	○	
M 229	5号墳石室内	(13.0)	—	—	—	(13.0)	0.14	鉄	—			○	
M 230	5号墳石室内	(12.0)	—	—	—	(12.0)	0.19	鉄	—		○	○	木質残存

桑山古墳群　鞍飾金具一覧

掲載番号	出土遺構等	計測値（mm）				重量（g）	材質	備考
		鋲頭長軸	鋲頭短軸	鋲脚長	鋲脚幅			
M 78	2号墳石室内	20.0	9.0	(7.0)	(2.5)	1.20	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 79	2号墳石室内	19.5	9.5	13.0	3.0	1.91	鉄地銀貼	木質残存
M 80	2号墳石室内	18.0	8.5	(10.5)	3.0	1.15	鉄地銀貼	木質残存
M 81	2号墳石室内	19.0	10.5	11.0	3.0	1.42	鉄地銀貼	木質残存
M 82	2号墳石室内	18.0	8.5	10.5	2.0	1.34	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 83	2号墳石室内	21.0	9.0	7.0	2.0	1.20	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 84	2号墳石室内	18.0	9.0	12.5	4.0	1.13	鉄地銀貼	木質残存
M 85	2号墳石室内	21.5	9.0	9.0	2.0	1.43	鉄地銀貼	木質残存
M 86	2号墳石室内	19.5	9.0	(11.0)	3.0	1.39	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 87	2号墳石室内	22.5	9.0	(7.5)	2.0	1.59	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 88	2号墳石室内	21.0	10.5	(7.5)	(2.5)	1.54	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 89	2号墳石室内	20.0	8.0	(11.5)	(3.5)	16.36	鉄	鉄地銀貼か 重量は銹着しているM 32 を含む数値
M 90	2号墳石室内	22.0	10.0	11.0	(2.5)	1.66	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 91	2号墳石室内	(17.0)	8.5	12.5	2.5	1.00	鉄地銀貼	木質残存
M 92	2号墳石室内	21.0	9.0	16.0	4.0	1.24	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 93	2号墳石室内	21.0	9.0	(6.0)	4.0	1.34	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 94	2号墳石室内	19.5	9.0	11.5	3.0	1.23	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 95	2号墳石室内	22.0	10.0	8.0	2.0	1.46	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 96	2号墳石室内	21.0	10.0	8.0	3.5	1.38	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 97	2号墳石室内	22.0	9.0	8.0	4.0	1.71	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 98	2号墳石室内	22.0	10.0	(3.0)	2.0	1.55	鉄地銀貼	木質残存
M 99	2号墳石室内	11.5	9.0	10.0	2.0	1.63	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 100	2号墳石室内	21.5	9.5	11.5	(3.0)	1.72	鉄地銀貼	木質残存
M 101	2号墳石室内	17.5	8.5	11.5	(2.5)	1.29	鉄地銀貼	木質残存
M 102	2号墳石室内	16.5	10.5	(6.0)	(2.5)	1.09	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 103	2号墳石室内	21.0	11.0	11.5	(3.0)	1.42	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 104	2号墳石室内	20.5	10.5	10.5	3.0	1.52	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 105	2号墳石室内	(18.0)	(9.0)	(7.0)	3.5	1.27	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 106	2号墳石室内	21.0	11.0	10.5	3.0	1.62	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 107	2号墳石室内	21.0	10.0	12.0	2.5	1.60	鉄	鉄地銀貼か 木質残存
M 108	2号墳石室内	22.0	11.0	－	－	1.46	鉄	鉄地銀貼か 木質残存

桑山古墳群　その他金属器一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）			重量（ｇ）	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M 3	1号墳 石室内	石突	129.0	26.0	22.0	97.73	鉄	目釘孔
M 21	1号墳 石室内	鐙	(62.0) (27.0)	16.0	2.5	8.75 2.91	鉄	玄室攪乱土層出土 釘3本残存
M 22	1号墳 石室内	鉸具	(35.5)	(23.5)	4.5	3.59	鉄	玄室攪乱土層出土
M 23	1号墳 石室内	輪状金具	(30.5)	(10.0)	5.0	2.22	鉄	玄室攪乱土層出土 鉸具の輪金か
M 24	1号墳 石室内	飾金具	(15.0)	(24.0)	2.5	2.44	鉄	玄室攪乱土層出土 鋲頭に8本の刻み目 緑青が認められることから、金銅貼かもしれない
M 25	1号墳 石室内	不明	(18.0)	(14.5)	3.0	1.39	鉄	玄室攪乱土層出土
M 26	1号墳 石室内	ヤリガンナ	(49.0)	10.5	6.0	5.93	鉄	
M 27	2号墳 石室内	素環頭大刀 （環頭部分）	（素環最大径） 52.5 （素環～茎部分） (114.0)	（素環部分） 9.0 （茎部分） 15.5	（素環部分） 9.0 （茎部分） 5.0	－	鉄	環頭部分に布目痕跡 ※刀身部分は「桑山古墳群　大刀・刀子」を参照
M 27	2号墳 石室内	素環頭大刀 （柄縁部分）	29.0	34.0	1.5	－	鉄	環頭部分に布目痕跡 ※刀身部分は「桑山古墳群　大刀・刀子」を参照
M 27	2号墳 石室内	素環頭大刀 （柄元部分）	34.0	31.5	1.5	－	鉄	断面かまぼこ形の金属線が巻かれる ※刀身部分は「桑山古墳群　大刀・刀子」を参照
M 59	2号墳 石室内	轡	（鏡板・左） 95.5 （鏡板・右） 91.5 （引手・左） 173.0 （引手・右） 175.0 （銜・左） 98.0 （銜・右） 96.5	（鏡板・左） 87.5 （鏡板・右） 85.0 （引手・左） 23.0 （引手・右） 24.0 （銜・左） 23.0 （銜・右） 23.0	（鏡板・左） 8.0 （鏡板・右） 8.0 （引手・左） 10.0 （引手・右） 11.5 （銜・左） 8.0 （銜・右） 9.0	378.03	鉄	長方形立聞素環鏡板付轡 銜・引手は、直接鏡板と連結する 引手先端は、「く」字状に曲げる 立聞部には、革痕跡残存 M 70と立聞部で連結
M 60	2号墳 石室内	鞍	（輪金） 45.0 （刺金） 38.0 （座金具） 29.0 （脚） 64.0	（輪金） 51.0 （刺金） 21.0 （座金具） 28.0 （脚） 11.5	（輪金） 7.0 （刺金） 5.5 （座金具） 2.0 （脚） 3.0	41.46	鉄	輪金に横棒を取り付ける 刺金はT字形 座金具は平面円形 脚は横棒に巻き付く ＊脚の長さは折れ曲がった状態での数値
M 61	2号墳 石室内	鞍	（輪金） 44.5 （刺金） 35.0 （座金具） 30.0 （脚） 57.0	（輪金） 51.0 （刺金） 18.0 （座金具） 29.0 （脚） 8.0	（輪金） 6.0 （刺金） 6.0 （座金具） 1.2 （脚） 5.0	35.88	鉄	輪金に横棒を取り付ける 刺金はT字形 座金具は平面円形 脚は横棒に巻き付く ＊脚の長さは折れ曲がった状態での数値
M 62	2号墳 石室内	雲珠	（環状部径） 62.0 （脚部長） 13.0～15.0 （鋲長） 8.5	（環状部高） 9.5 （脚部幅） 17.0～18.0 （鋲頭径） 7.0 （責金具幅） 6.0	（環状部厚） 2.0 （脚部厚） 2.0 （鋲脚幅） 2.0 （責金具厚） 2.0	33.77	（環状部部） 鉄地金銅貼 （脚部） 鉄地金銅貼 （鋲） 鉄地金銅貼 （責金具） 鉄	脚は6脚 環状部内面に付着している銹に縦方向の線状痕あり 脚部裏面には革痕跡残存 鋲は1鋲、鋲頭に10～12本の刻み目 責金具中央部に1条の沈線、両側に綾杉文状の刻み目 銀貼の可能性大

桑山古墳群　その他金属器一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）			重量（ｇ）	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M 63	２号墳 石室内	辻金具	（環状部径） 55.0 （脚部長） 16.0 ～ 19.0 （鋲長） (8.0)	（環状部高） 10.0 （脚部幅） 17.0 ～ 18.0 （鋲頭径） 8.0 （責金具幅） 5.0 ～ 6.0	（環状部厚） 2.0 （脚部厚） 2.0 （鋲脚幅） 2.0 （責金具厚） 2.0	32.15	（環状部部） 鉄地金銅貼 （脚部） 鉄地金銅貼 （鋲） 鉄地金銅貼 （責金具） 鉄地銀貼	脚は４脚 環状部内面に付着している銹に縦方向の線状痕あり 脚部裏面には革痕跡残存 鋲は１鋲、鋲頭に７～８本の刻み目 責金具中央部に１条の沈線、両側に綾杉文状の刻み目 検出時はM 59 と銹着状態
M 64	２号墳 石室内	辻金具	（環状部径） 55.0 （脚部長） 20.0 ～ 21.0 （鋲長） (9.5)	（環状部高） 10.0 ～ 11.5 （脚部幅） 18.5 ～ 20.0 （鋲頭径） 7.0 ～ 8.0 （責金具幅） 5.5 ～ 6.0	（環状部厚） 2.0 （脚部厚） 2.0 （鋲脚幅） 2.0 （責金具厚） 2.0	28.61	（環状部部） 鉄地金銅貼 （脚部） 鉄地金銅貼 （鋲） 鉄地金銅貼 （責金具） 鉄地銀貼	脚は４脚 環状部内面に付着している銹に縦方向の線状痕あり 脚部裏面には革痕跡残存 鋲は１鋲、鋲頭に 10 本の刻み目 責金具中央部に１条の沈線、両側に綾杉文状の刻み目
M 65	２号墳 石室内	辻金具	（環状部径） 54.0 （脚部長） 18.0 ～ 20.0 （鋲長） (8.5)	（環状部高） 10.0 （脚部幅） 18.0 ～ 20.0 （鋲頭径） 8.0 （責金具幅） 5.0 ～ 6.0	（環状部厚） 2.5 （脚部厚） 2.0 （鋲脚幅） 2.0 （責金具厚） 1.5	28.77	（環状部部） 鉄地金銅貼 （脚部） 鉄地金銅貼 （鋲） 鉄地金銅貼 （責金具） 鉄地銀貼	脚は４脚 環状部内面に付着している銹に縦方向の線状痕あり 脚部裏面には革痕跡残存 鋲は１鋲、鋲頭に８本の刻み目 責金具中央部に１条の沈線、両側に綾杉文状の刻み目
M 66	２号墳 石室内	鉸具	50.0	32.5	10.0	13.95	鉄	輪金は隅丸長方形で中心部がややくびれる形態 刺金は基部を輪金に巻き付ける 検出時はM 69 と銹着
M 67	２号墳 石室内	鉸具	53.5	36.0	11.0	10.44	鉄	輪金は隅丸長方形で下半部がややくびれる形態 刺金は基部を輪金に巻き付ける 検出時はM 59 と銹着状態
M 68	２号墳 石室内	留金具 責金具	（留金具長） 15.5 （鋲長） (9.5)	（留金具幅） 20.0 （鋲頭径） 7.0 （責金具幅） 6.0	（留金具厚） 2.0 （鋲脚幅） 2.0 （責金具厚） 2.0	（留金具） 3.20 （責金具） 1.35	（留金具） 鉄 （責金具） 鉄地銀貼	検出時は留金具と責金具が銹着 留金具は、責金具と接する辺の対辺が弧状を呈する また金銅貼の可能性大 鋲は１鋲、鋲頭に少なくとも６本の刻み目 責金具中央部に１条の沈線、両側に綾杉文状の刻み目 留金具裏面と責金具内側には革痕跡残存
M 69	２号墳 石室内	留金具 責金具	（留金具） 14.5 （鋲長） (14.5)	（留金具） 19.5 （鋲頭径） 8.0 （責金具幅） 6.0	（留金具） 2.0 （鋲脚幅） 2.5 （責金具厚） 1.5	4.54	鉄	留金具と責金具が銹着状態 留金具は責金具と接する辺の対辺がやや弧状を呈する また金銅貼の可能性大 鋲は１鋲、鋲頭に少なくとも６本の刻み目 責金具中央部に１条の沈線、両側に綾杉文状の刻み目、銀貼の可能性大 留金具裏面と責金具内側には革痕跡残存 重量は銹着している留金具と責金具を合わせた数値
M 70	２号墳 石室内	留金具 責金具	（留金具長） 16.0 （鋲長） 9.0	（留金具幅） 26.5 （鋲頭径） 8.0 （責金具幅） 5.5	（留金具厚） 2.0 （鋲脚幅） 3.0 （責金具厚） 2.0	5.14 1.86	（留金具） 鉄地金銅貼 （鋲） 鉄地金銅貼 鉄地銀貼	検出時は留金具と責金具が銹着 平面長方形 ２鋲、鋲頭に８本の刻み目 裏面に革痕跡残存 中央部に１条の沈線、両側に綾杉文状の刻み目 内面側に革痕跡残存
M 71	２号墳 石室内	留金具	（留金具長） 15.0 （鋲長） 8.0	（留金具幅） 25.5 （鋲頭径） 7.0	（留金具厚） 2.0 （鋲脚幅） 3.5	3.86	鉄	鉄地金銅貼か 平面長方形 ２鋲、鋲頭に９本の刻み目 裏面に革痕跡残存
M 72	２号墳 石室内	責金具	－	6.0	2.0	1.56	鉄地銀貼	中央部に１条の沈線、両側に綾杉文状の刻み目 検出時はM 59 と銹着状態
M 73	２号墳 石室内	責金具	－	6.0	2.0	0.46	鉄地銀貼	中央部に１条の沈線、両側に綾杉文状の刻み目
M 74	２号墳 石室内	責金具	－	4.0	1.0	0.35	鉄	鉄地銀貼か 中央部に１条の沈線 検出時はM 59 と銹着状態
M 75	２号墳 石室内	責金具	(23.0)	(5.0)	1.2	0.42	鉄	鉄地銀貼か

桑山古墳群　その他金属器一覧

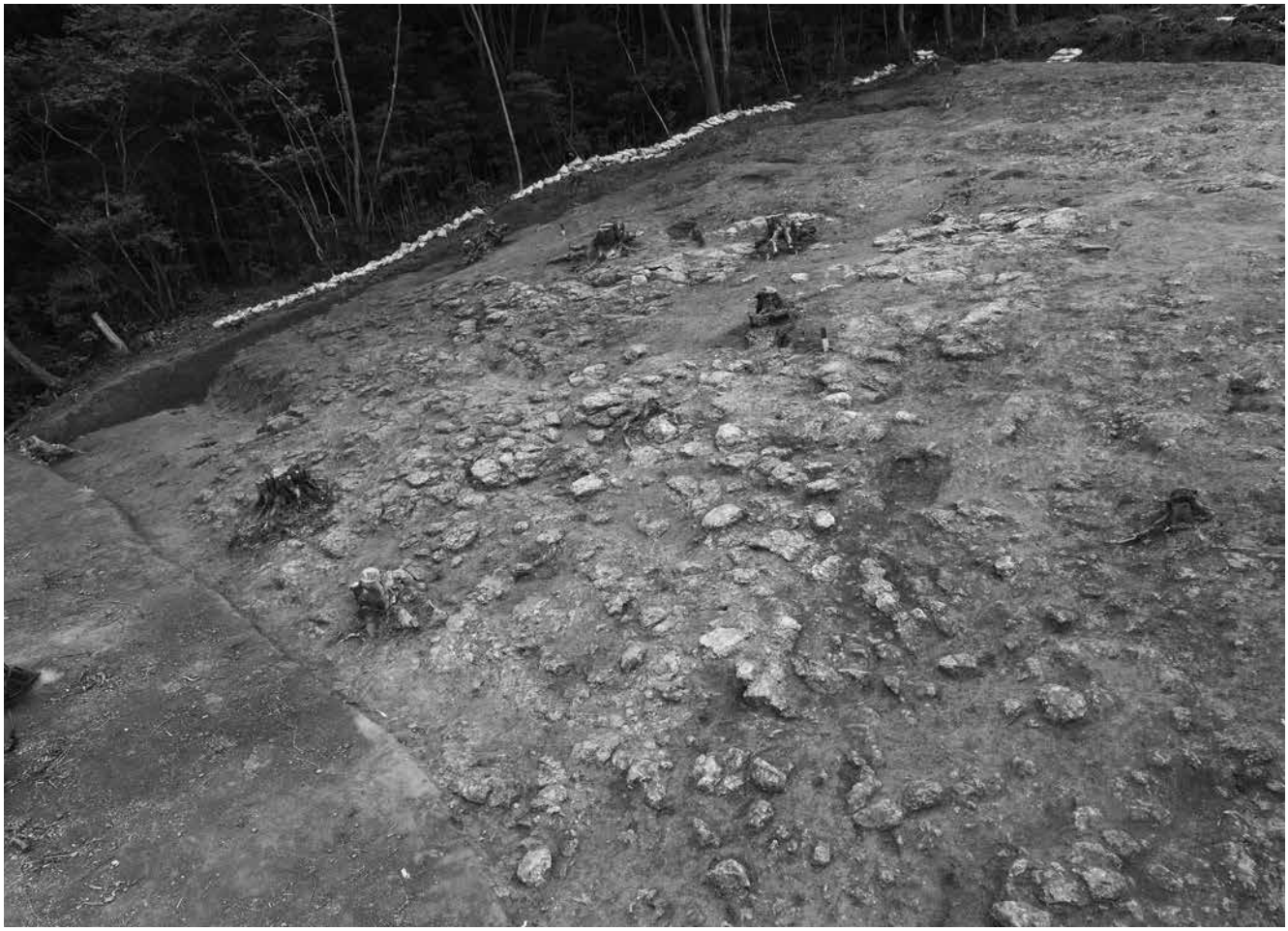
掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）			重量（ｇ）	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M 76	２号墳 石室内	責金具	－	4.0	1.5	0.37	鉄	鉄地銀貼か 検出時はM 59 と銹着状態
M 77	２号墳 石室内	責金具	－	7.0	2.0	0.63	鉄地銀貼	中央部に１条の沈線、その両側に綾杉文状の刻み目 検出時はM 59 と銹着状態
M 110	２号墳 石室内	耳環	17.8	17.8	2.1	1.57	銀	
M 111	２号墳 石室内	耳環	17.0	18.4	2.1	1.55	銀	
M 137	３号墳 周溝内	手鎌	24.0	85.5	15.0	23.89	鉄	
M 140	４号墳 ２主体内	刀装具 （筒金具）	(32.0)	(38.0)	(2.0)	8.14	鉄	M 139 に伴うものか
M 167	５号墳 石室内	鍔	79.0	66.0	(1.5 以上)	49.08	鉄	銹膨れにより厚みが不明だが、外縁が内縁より厚くなる
M 168	５号墳 石室内	鏃	(38.5)	(22.5)	1.5	4.97	鉄	内・外面に木質残存
M 231	５号墳 石室内	両頭金具	29.0	9.0	8.0	2.72	鉄	頂部の幅：6.5㎜
M 232	５号墳 石室内	雲珠または 辻金具の脚	（留金具長） 23.0 （鋲長） 12.5	（留金具幅） 20.5 （鋲頭径） 7.0	（留金具厚） 1.5 （鋲脚幅） 1.6	7.35	鉄	
M 233	５号墳 石室内	雲珠または 辻金具の脚	（留金具長） 22.2 （鋲長） (5.5)	（留金具幅） 22.5 （鋲頭径） 8.0	（留金具厚） 3.0 （鋲脚幅） 1.8	8.77	鉄	
M 234	５号墳 石室内	雲珠または 辻金具の脚	（留金具長） 23.0 （鋲長） (14.3)	（留金具幅） 22.0 （鋲頭径） 7.5	（留金具厚） 2.0 （鋲脚幅） (2.0 以下)	7.82	鉄地金銅貼	
M 235	５号墳 石室内	雲珠または 辻金具の脚	（留金具長） 21.5 （鋲長） (1.1)	（留金具幅） 21.0 （鋲頭径） 8.5	（留金具厚） 3.0 （鋲脚幅） 不明 (4.0 以下)	6.55	鉄地金銅貼	
M 236	５号墳 石室内	雲珠または 辻金具の脚	（留金具長） 22.7 （鋲長） (9.0)	（留金具幅） 22.0 （鋲頭径） 8.0	（留金具厚） 3.0 （鋲脚幅） 1.5	7.92	鉄地金銅貼か	緑青あり
M 237	５号墳 石室内	留金具	（留金具長） (29.0) （鋲長） 17.0	（留金具幅） 17.5 （鋲頭径） 11.0	（留金具厚） 3.0 （鋲脚幅） 4.0	6.97	鉄	
M 238	５号墳 石室内	責金具	(4.0)	(10.5)	(1.5)	0.26	鉄	
M 239	５号墳 石室内	責金具	4.0	36.0	13.0	3.20	鉄	
M 240	５号墳 石室内	責金具	4.0	32.0	(17.0)	2.25	鉄	
M 241	５号墳 石室内	責金具	5.0	35.0	14.0	2.87	鉄	

桑山古墳群　その他金属器一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）			重量（ｇ）	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M 242	５号墳 石室内	責金具	4.0	36.0	14.0	3.32	鉄	
M 243	５号墳 石室内	責金具	5.0	(27.5)	(15.7)	1.83	鉄	
M 244	５号墳 石室内	責金具	5.0	(37.0)	7.5	2.15	鉄	
M 245	５号墳 石室内	責金具	5.0	(15.7)	(16.0)	1.85	鉄	
M 246	５号墳 石室内	責金具	8.0	(18.0)	9.0	1.25	鉄	
M 247	５号墳 石室内	責金具	4.0	(11.5)	(17.2)	1.05	鉄	
M 248	５号墳 石室内	責金具	5.5	(18.0)	14.5	1.29	鉄	
M 249	５号墳 石室内	責金具	5.0	(22.0)	(7.0)	0.95	鉄	
M 250	５号墳 石室内	責金具	5.0	(12.3)	(10.8)	0.93	鉄	
M 251	５号墳 石室内	責金具	4.0	(16.5)	(8.8)	0.84	鉄	
M 252	５号墳 石室内	責金具	6.0	(23.5)	(2.5)	1.02	鉄	
M 253	５号墳 石室内	責金具	5.5	(27.5)	(3.5)	0.91	鉄	
M 262	５号墳 石室内	鏃	21.0	(20.0)	1.0	2.29	鉄	内面に木質残存
M 263	５号墳 石室内	鏃	(16.0)	9.5	1.0	0.47	鉄	
M 264	５号墳 石室内	鋲の足	(13.0)	2.5	2.5	0.18	鉄	木質残存
M 265	５号墳 石室内	鋲の足	(15.0)	(2.7)	(2.7)	0.25	鉄	木質残存
M 266	５号墳 石室内	釘	(158.0)	12.0	7.0	79.07	鉄	上端が僅かに開く 下半には木質が残る

桑山古墳群　鹿角製品一覧

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値（㎜）										備考
			長さ					断面径				断面厚	
			柄全長	柄頭長	柄間長	柄元長	内部木質長	柄頭	柄間	柄元	柄内径		
M 113	３号墳 箱式石棺内	鹿角製 刀装具	166.0	56.0	34.0 ～ 39.0	75.0	(73.5)	25.0 ～ 27.0	24.0 ～ 26.0	26.0 ～ 27.0	19.0	4.0 ～ 5.0	柄縁部の両面の上下に沈線 柄縁端部には水銀朱が一部残存 ※刀身部分は「桑山古墳群　大刀・刀子」
M 114	３号墳 箱式石棺内	鹿角製 刀装具	(156.0)	52.0	40.0 ～ 42.0	60.0	－	30.0 ～ 33.0	27.0 ～ 32.0	29.0 ～ 33.0	(19.0)	4.0 ～ 7.0	柄に目釘穴（直径 5.5㎜）あり 柄頭に穿孔（直径 9㎜ 程度）あり ※刀身部分は「桑山古墳群　大刀・刀子」



１　勝負峪遺跡１区　西半（南東から）



２　勝負峪遺跡２・３区（南東から）



１　竪穴住居１
（北東から）



２　段状遺構１
（西から）



３　段状遺構２
（北西から）



１　段状遺構３
（東から）



２　段状遺構４
（南から）



３　段状遺構５
（北東から）



１　土坑墓群（北東から）



２　土坑墓群と石列１・２（上が南西）



１　石列１（北から）



２　土坑墓１（北東から）



３　土坑墓２（北東から）



４　土坑墓３（北東から）



５　土坑墓４（南西から）



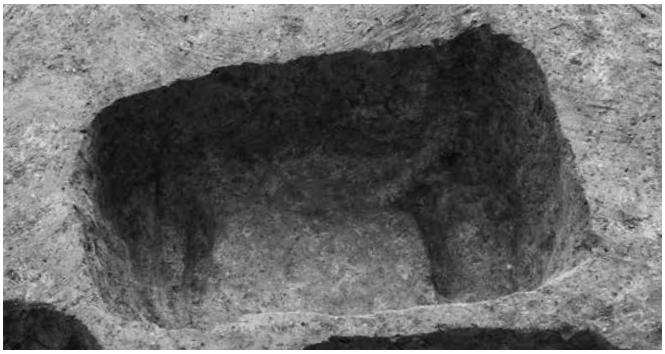
６　土坑墓５（東から）



７　土坑墓６（北東から）



１　土坑墓７（南東から）



２　土坑墓８（北から）



３　土坑墓９（北東から）



４　土坑墓 10（北東から）



５　土坑墓 11（北から）



６　土坑墓 12（北東から）



７　土坑墓 13（南西から）



８　土坑墓 14（北東から）



９　土坑墓 15（南西から）



10　土坑墓 15 木棺痕跡（南東から）



1　土坑墓 16（北から）



2　土坑墓 17（北東から）



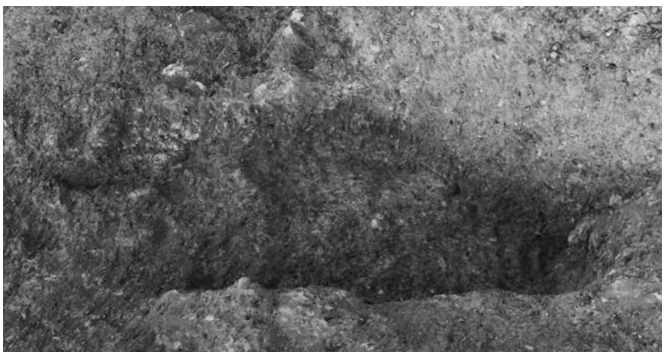
3　土坑墓 18（北から）



4　土坑墓 19（北西から）



5　土坑墓 20（東から）



6　土坑墓 21（北東から）



7　被熱痕跡 1 と周辺での土器・石材の出土状況（北西から）



１　掘立柱建物１
（東から）



２　段状遺構７
（東から）



３　柱穴列１（北西から）



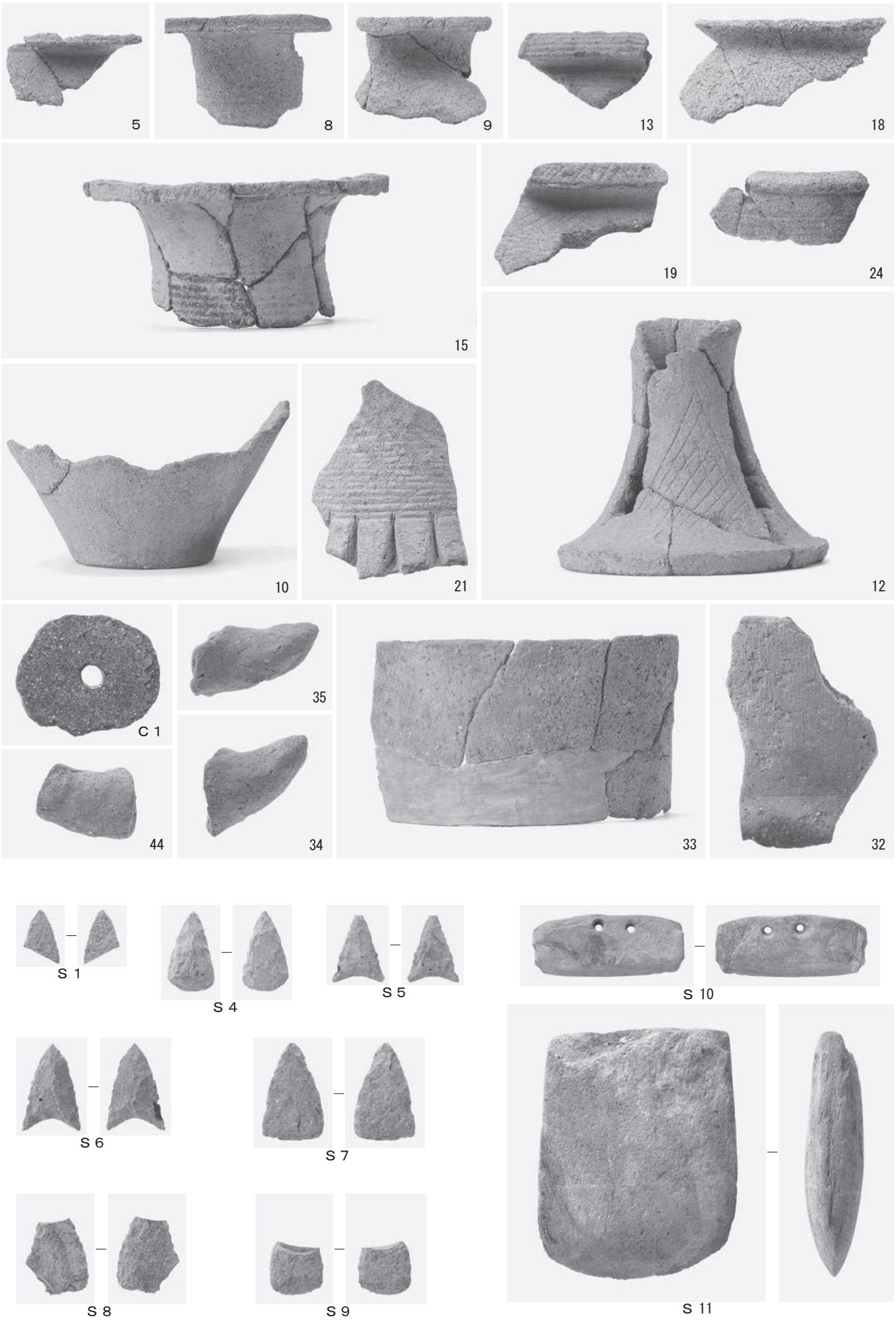
４　土坑３（南から）



５　土坑５（南から）



６　土坑６（南西から）


5
8
9
13
18
15
19
24
10
21
12
C１
35
44
34
33
32
S１
S４
S５
S 10
S６
S７
S 11
S８
S９

勝負峪遺跡出土遺物



1　竪穴住居１
（南東から）



2　竪穴住居１
土器出土状況
（南西から）



3　竪穴住居３
（北東から）



1　竪穴住居２炭化材検出状況（南東から）



2　竪穴住居２炭化材検出状況（北西から）



3　竪穴住居２北西部炭化材検出状況（北東から）



4　竪穴住居２北西部床面炭化材検出状況（北から）



5　竪穴住居２中央部炭化材検出状況（南から）



1　竪穴住居２
（南東から）



2　竪穴住居４
（東から）



3　竪穴住居４断面
（西から）



1　段状遺構１
（北東から）



2　段状遺構２
（北東から）



3　段状遺構３
（南から）



1　竪穴住居５
（南から）



2　竪穴住居５カマド
（南東から）



3　竪穴住居６
（南西から）



1　段状遺構４
（東から）



2　段状遺構６
（東から）



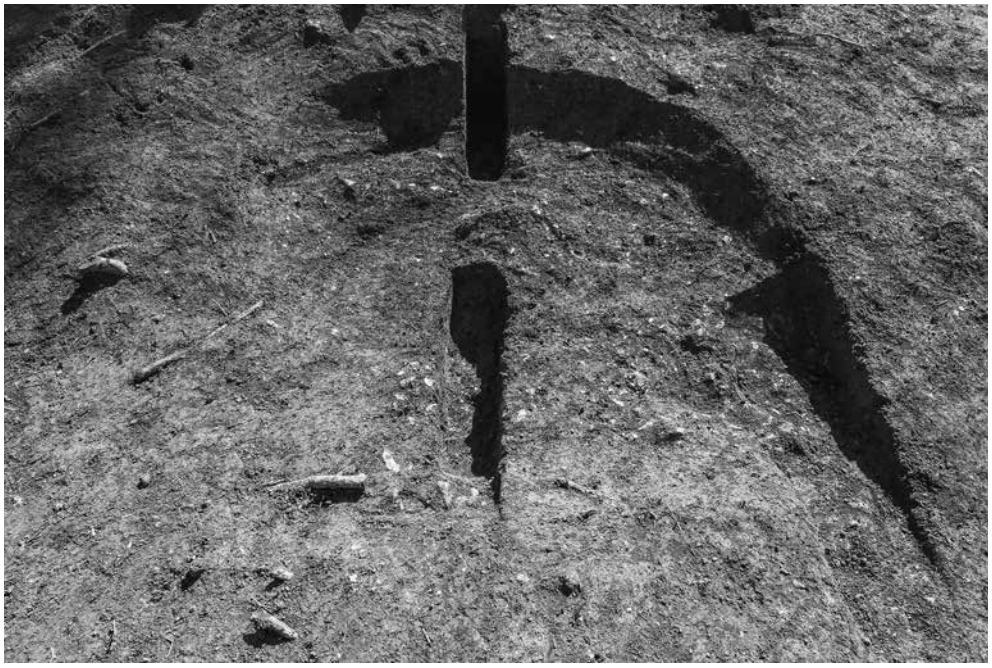
3　段状遺構６
柱穴遺物出土状況
（南西から）



1　土坑１
（北から）



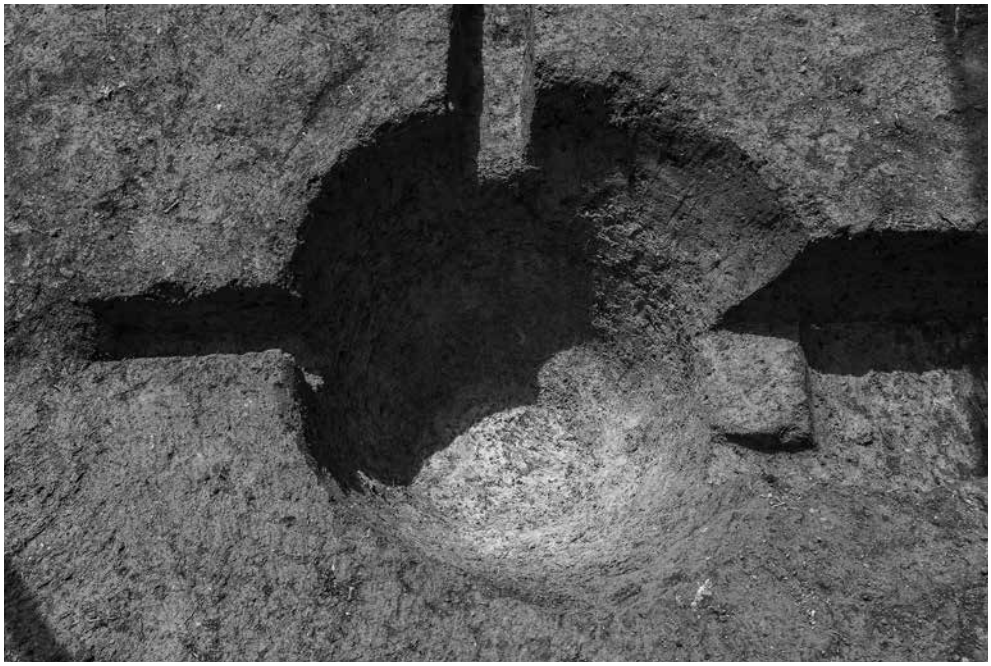
2　土坑２・３
（北から）



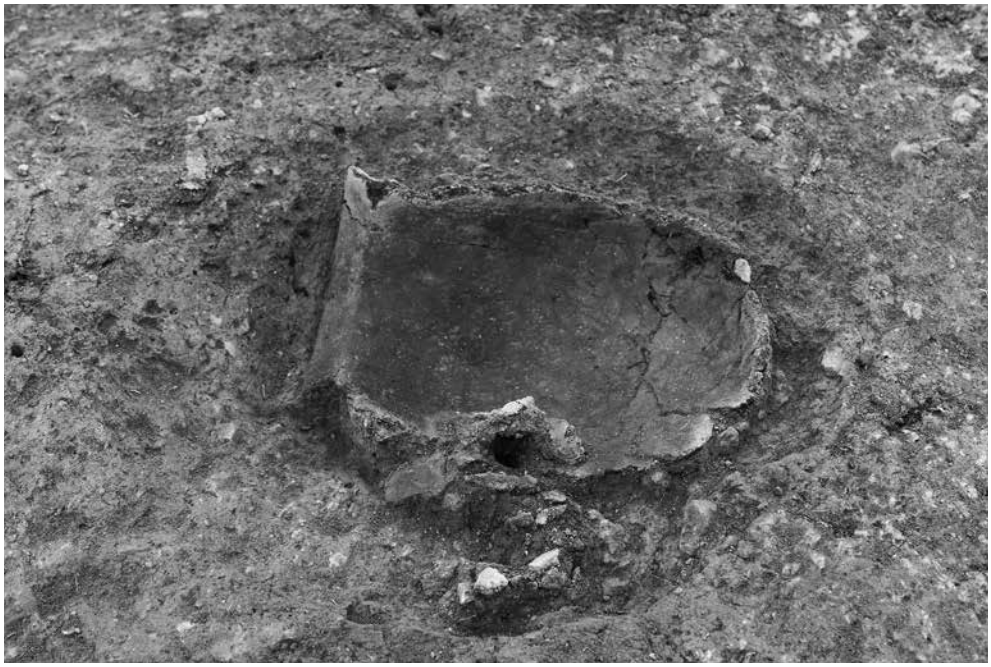
3　土坑４
（南西から）



1　土坑５礫検出状況
（東から）



2　土坑５
（東から）



3　埋葬遺構１
（南東から）



1　埋葬遺構２
礫検出状況
（南西から）



2　埋葬遺構２
（南西から）



3　炉１
（南から）



1　製炭窯１（南西から）



2　製炭窯１〈窯体片あり〉（南西から）



3　製炭窯１（南東から）



4　製炭窯１〈煙道付近〉（南西から）



5　製炭窯１〈煙道〉（南東から）



1　粘土採掘坑１
（南西から）



2　粘土採掘坑１断面
（南西から）



3　粘土採掘坑１
底面の小穴
（南から）



1　粘土採掘坑２西半
（南から）



2　粘土採掘坑２断面
（北東から）

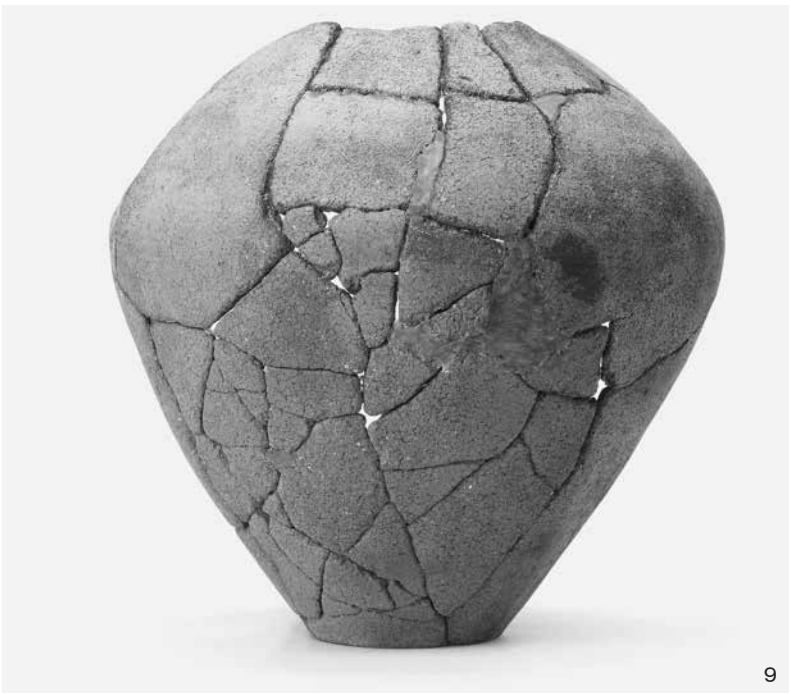


3　溝１
（東から）


2


16

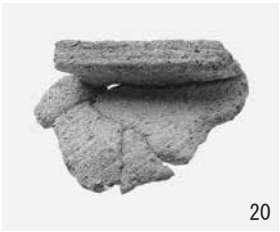

5

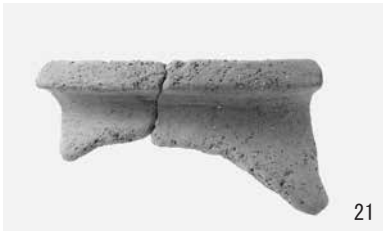

9


6


4


12


20


21


23


13


35


28

桑山遺跡出土土器①


73


42


85


51


50


89


88


87


103

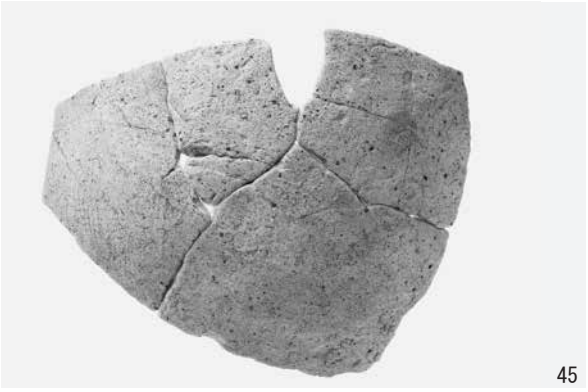

122


69


68

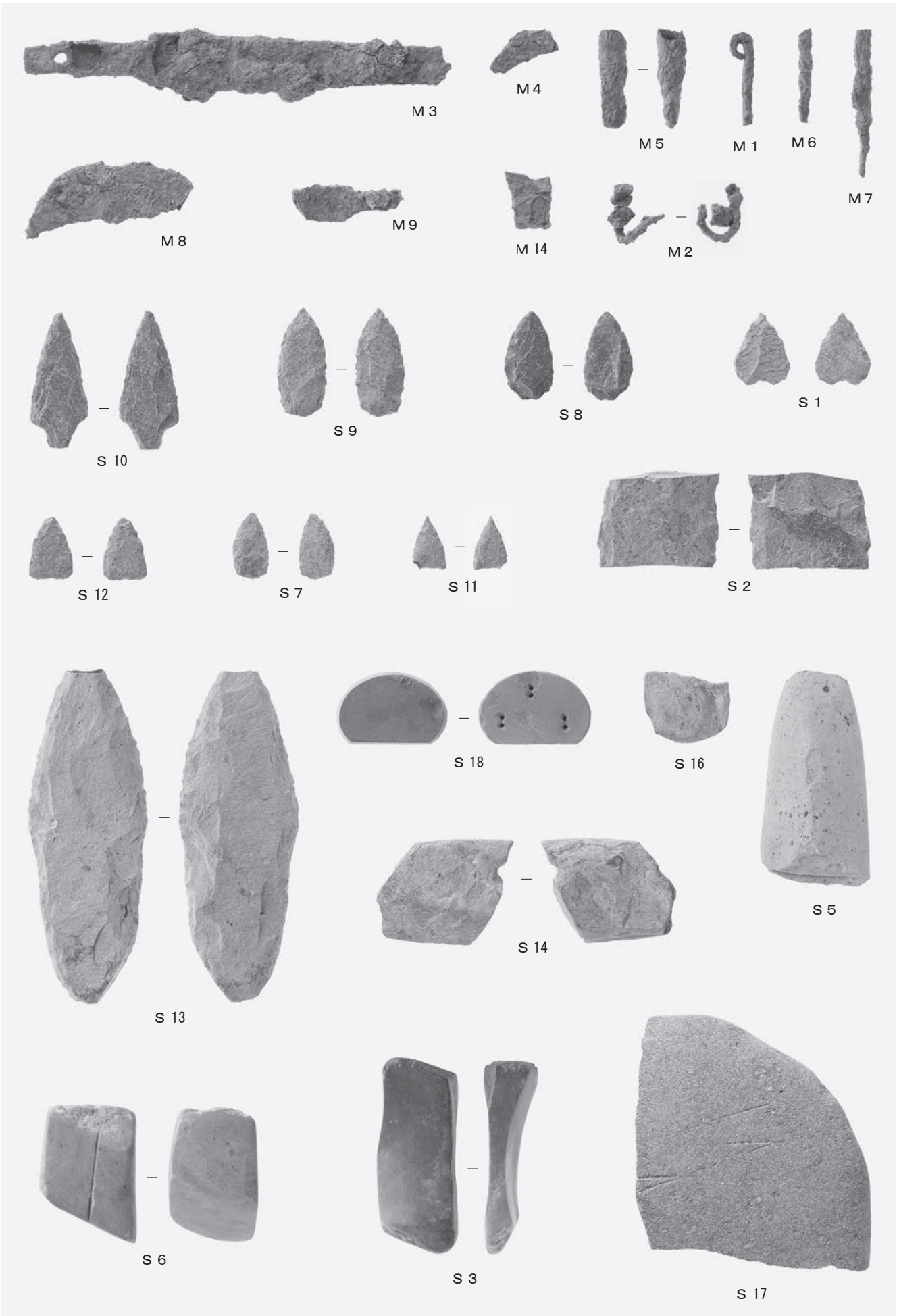

128


53


45


55

桑山遺跡出土土器②


M 3
M 4
M 5
M 1
M 6
M 7
M 8
M 9
M 14
M 2
S 10
S 9
S 8
S 1
S 12
S 7
S 11
S 2
S 18
S 16
S 5
S 13
S 14
S 6
S 3
S 17

桑山遺跡出土鉄器・石器



1　桑山１～４号墳遠景（南から）



2　桑山１～４号墳（北から）



1　桑山１号墳調査前（北西から）



2　桑山１号墳全景（南西から）



1　桑山１号墳全景（上が北東）



2　桑山１号墳石室（北東から）



3　桑山１号墳石室奥壁（南西から）



4　桑山１号墳石室袖部（北東から）



1　桑山１号墳石室（南西から）



2　桑山１号墳石室（北西から）



3　桑山１号墳玄室右側壁（北から）



4　桑山１号墳石室（南東から）



5　桑山１号墳玄室左側壁（北東から）



1　桑山１号墳羨道右側壁（北西から）



4　桑山１号墳羨道左側壁（南東から）



2　桑山１号墳羨道右側壁（南西から）



5　桑山１号墳羨道左側壁（南から）



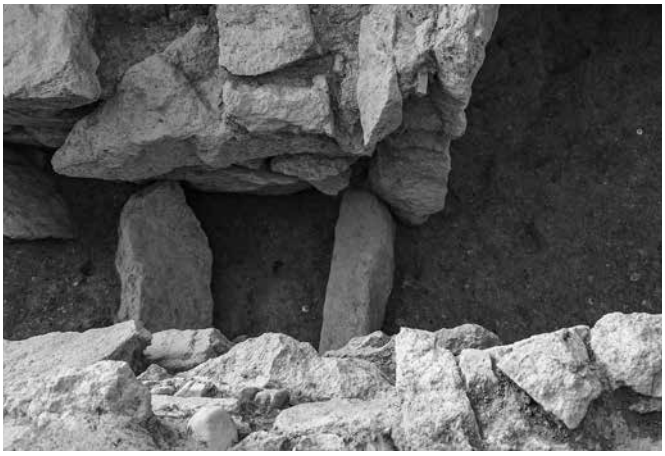
3　桑山１号墳玄門部右側壁（北から）



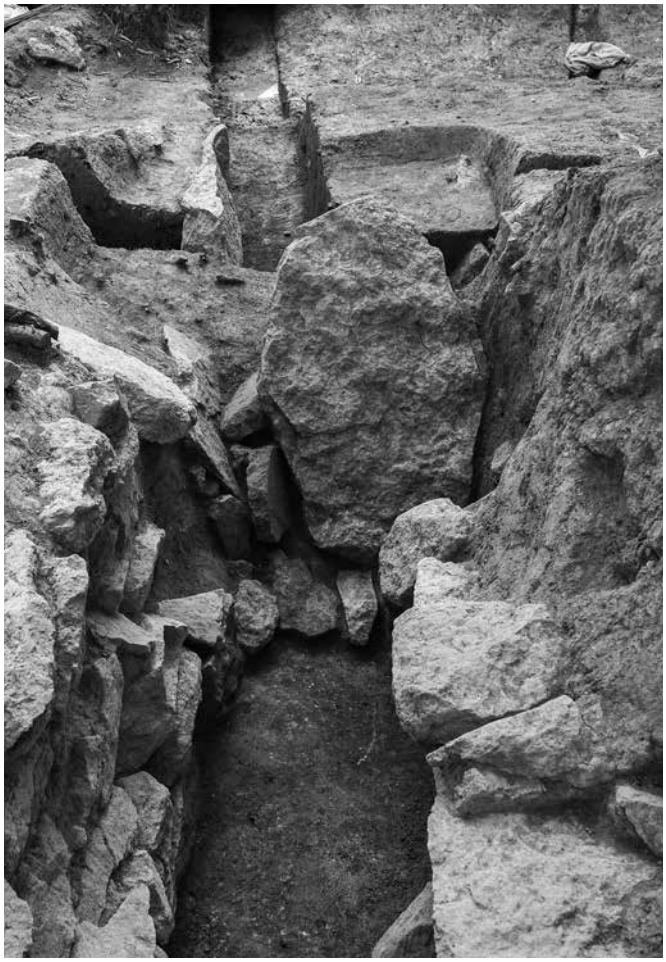
6　桑山１号墳羨道左側壁（北東から）



7　桑山１号墳梱石（北東から）



8　桑山１号墳梱石（南東から）



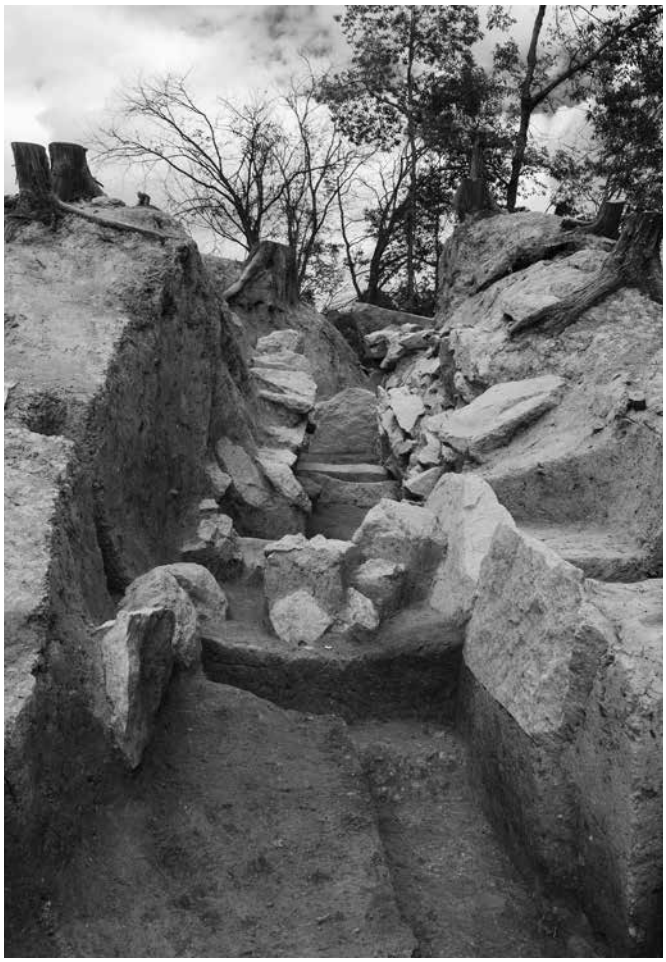
1　桑山１号墳閉塞石（北東から）



2　桑山１号墳閉塞石（南東から）



3　桑山１号墳閉塞石除去後（南東から）



4　桑山１号墳墓道（南西から）



5　桑山１号墳墓道右側壁（西から）



6　桑山１号墳墓道左側壁（南東から）



1　桑山１号墳
石室内遺物出土状況
（南東から）



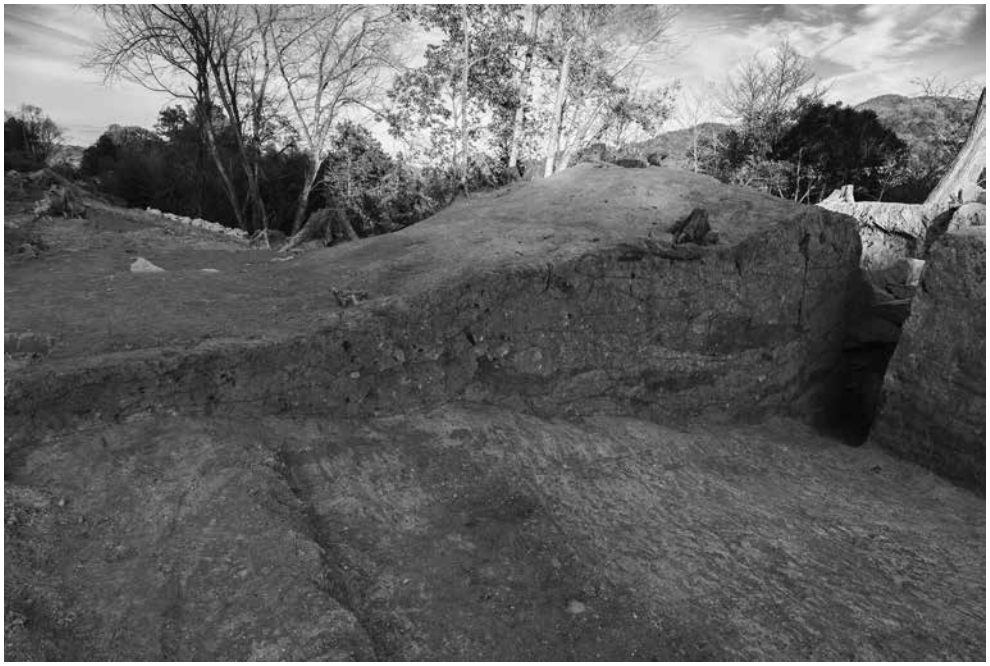
2　桑山１号墳
石室袖部遺物出土
状況
（北東から）



3　桑山１号墳
石室左側壁際遺物出
土状況
（南東から）



1　桑山１号墳
周溝内遺物出土状況
（西から）



2　桑山１号墳
墳丘横断西側
土層断面
（南西から）



3　桑山１号墳
墳丘縦断北側土層断
面〈溝状遺構付近〉
（西から）



1　桑山２号墳調査前（北東から）



2　桑山２号墳全景（南西から）



1　桑山２号墳石室（北から）



2　桑山２号墳石室（上が北東）



3　桑山２号墳石室（北東から）



4　桑山２号墳左側壁（南東から）



5　桑山２号墳右側壁（北西から）



1　桑山２号墳羨道及び閉塞（北西から）



2　桑山２号墳羨道及び閉塞（北東から）



3　桑山２号墳板石閉塞状況（南西から）



4　桑山２号墳玄門梱石付近（北西から）



5　桑山２号墳遺物出土状況（北西から）



1　桑山２号墳須恵器等出土状況（北東から）



2　桑山２号墳須恵器等出土状況（北から）



3　桑山２号墳素環頭大刀（Ｍ 27）出土状況（北東から）



4　桑山２号墳右袖部遺物出土状況（南西から）



1　桑山２号墳鉄鏃等出土状況（北西から）



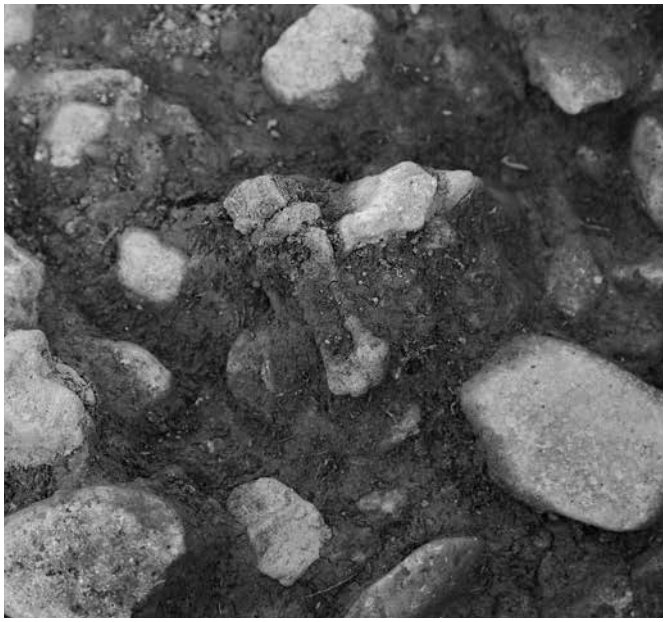
2　桑山２号墳轡（Ｍ 59）等出土状況（南西から）



3　桑山２号墳雲珠（Ｍ 62）出土状況（南西から）



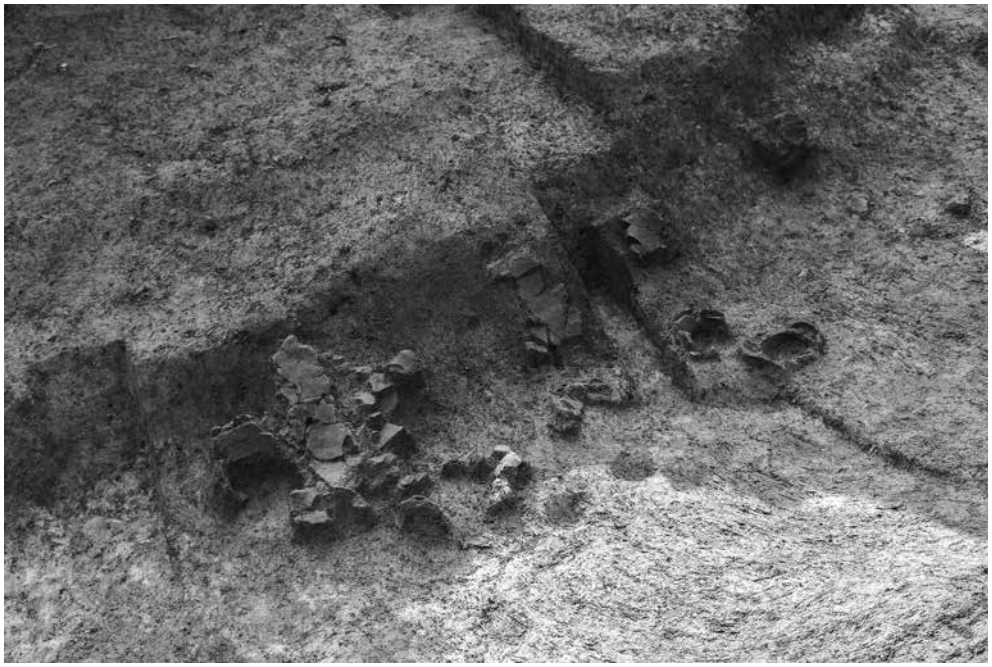
4　桑山２号墳辻金具（Ｍ 64･65）出土状況（南西から）



5　桑山２号墳鉸具（Ｍ 66）等出土状況（南西から）



6　桑山２号墳鞍（Ｍ 61）出土状況（北西から）



1　桑山２号墳
周溝内埴輪出土状況
（東から）



2　桑山２号墳
墳丘縦断北側
土層断面
（東から）



3　桑山２号墳墳丘横断東側土層断面（南西から）



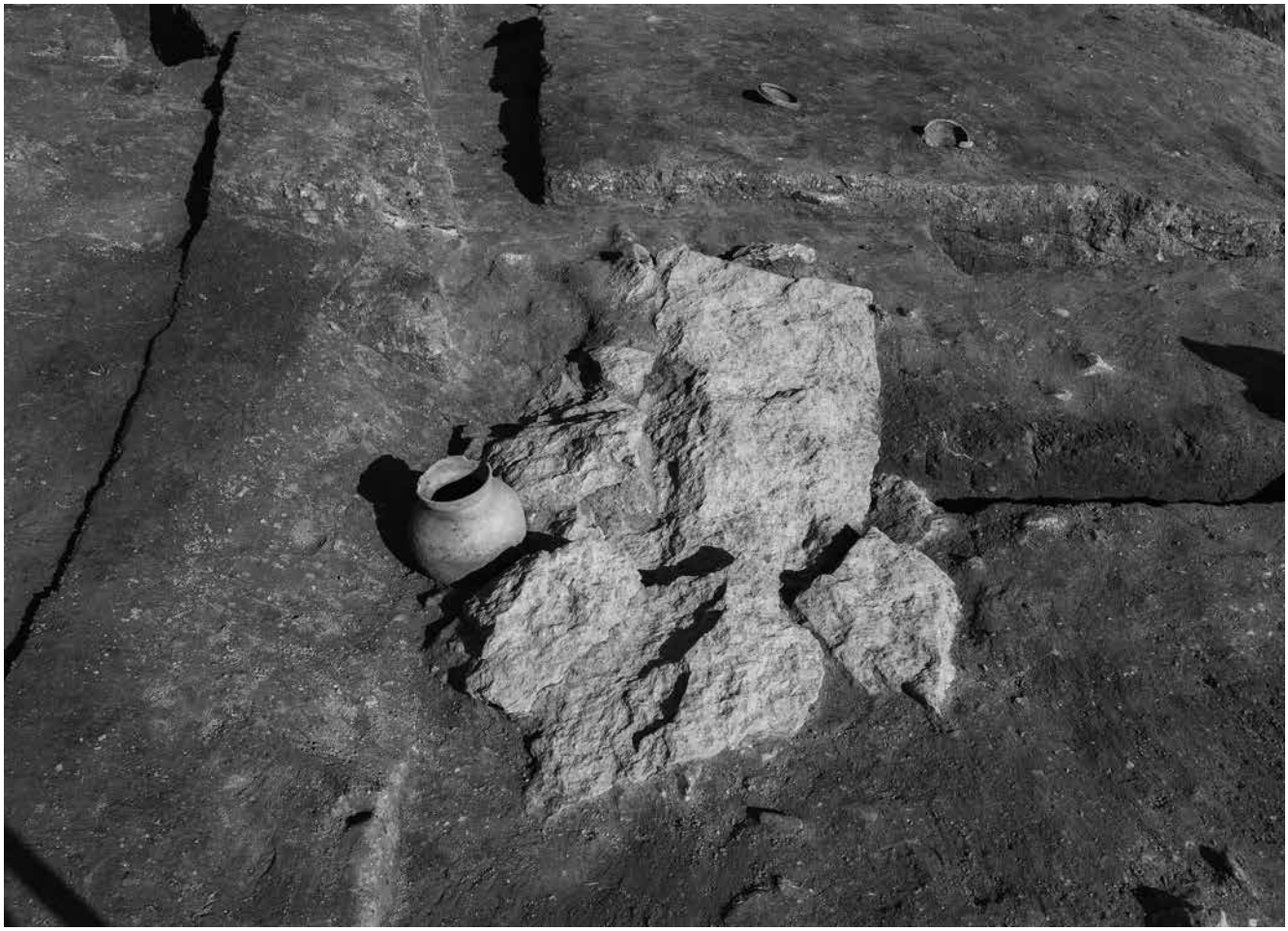
1　桑山３号墳
調査前
（南西から）



2　桑山３号墳
全景
（南東から）



3　桑山３号墳
全景
（北西から）



1　桑山３号墳箱式石棺蓋石及び土器検出状況（南西から）



2　桑山３号墳箱式石棺蓋石検出状況（南東から）



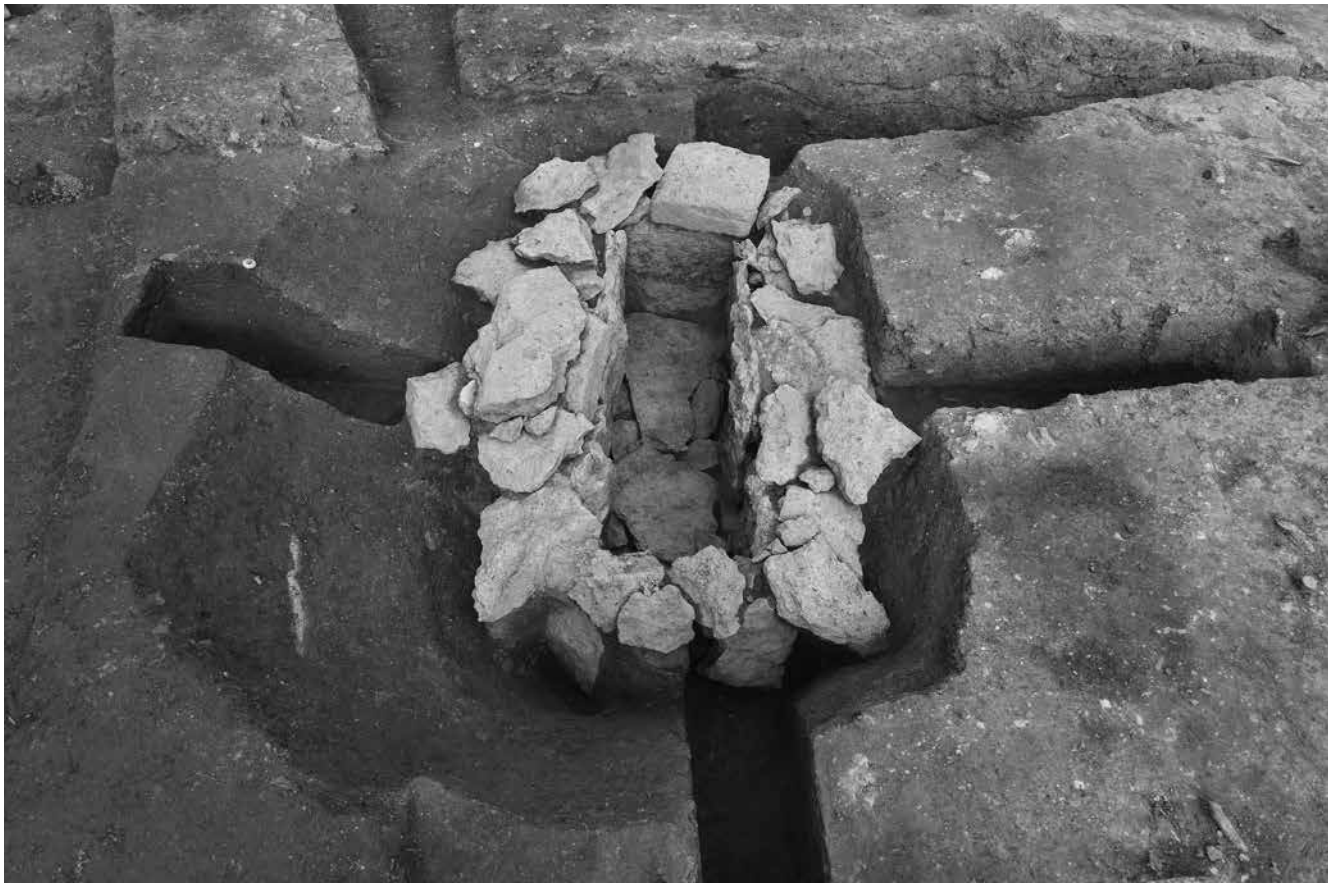
3　桑山３号墳箱式石棺蓋石及び土器検出状況（南東から）



4　桑山３号墳箱式石棺蓋石検出状況（南西から）



5　桑山３号墳箱式石棺蓋石検出状況（東から）



1　桑山３号墳箱式石棺（南西から）



2　桑山３号墳
箱式石棺西側壁
（南東から）



3　桑山３号墳
箱式石棺東側壁
（北西から）



1　桑山３号墳箱式石棺控え積み除去後（南西から）



2　桑山３号墳箱式石棺側石検出状況（南西から）



3　桑山３号墳箱式石棺控え積み除去後（南東から）



4　桑山３号墳箱式石棺側石補強状況（南東から）



5　桑山３号墳箱式石棺側石補強状況（南西から）



6　桑山３号墳箱式石棺掘り方（東から）



1　桑山３号墳箱式石棺遺物出土状況（南東から）



2　桑山３号墳箱式石棺遺物出土状況〈北半〉（南東から）



1　桑山３号墳箱式石棺頭骨１除去後の遺物出土状況（南西から）



2　桑山３号墳箱式石棺頭骨除去後の遺物出土状況（南西から）



1　桑山３号墳
木棺墓完掘
（南東から）



2　桑山３号墳
木棺墓完掘
（北西から）



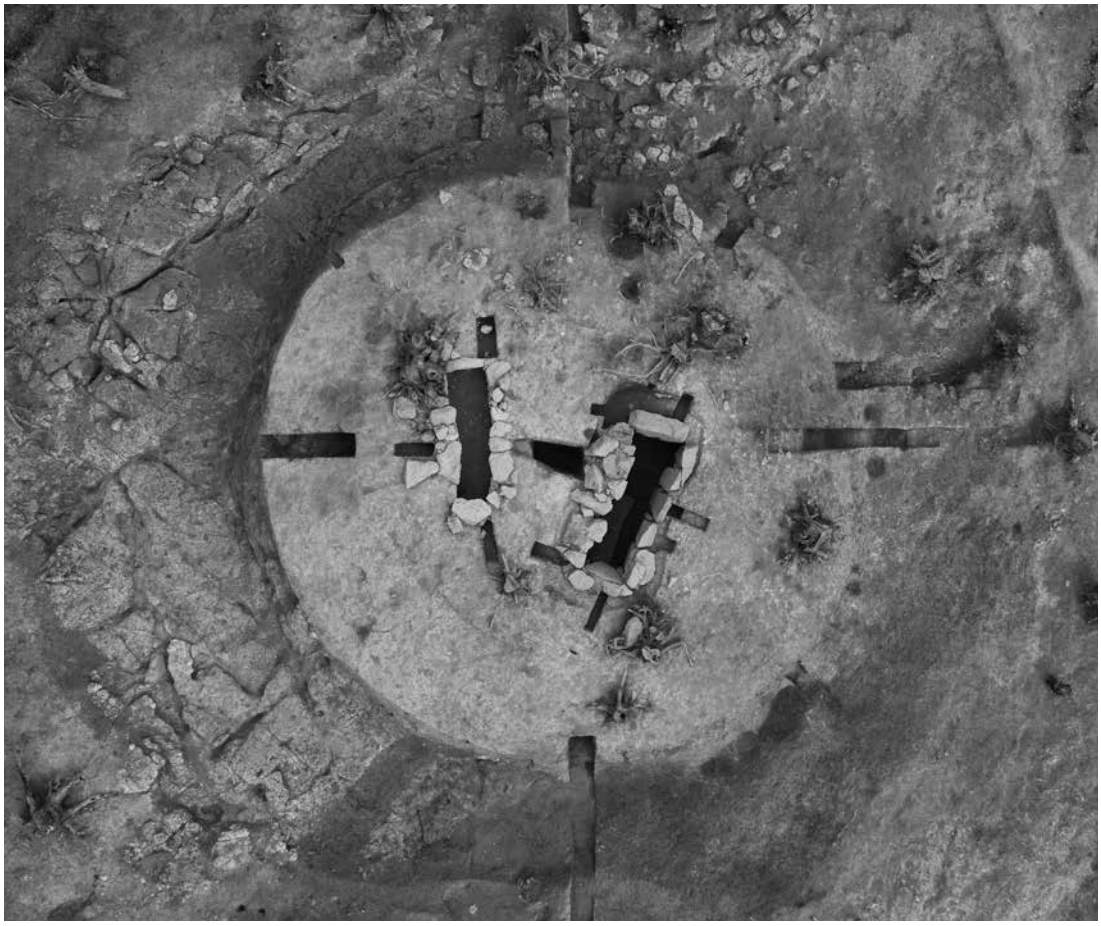
3　桑山３号墳
木棺墓
短軸断面南半
（南西から）



1　桑山４号墳調査前（南から）



2　桑山４号墳全景（南西から）



1　桑山４号墳
全景
（上が北）



2　桑山４号墳
墳丘縦断南側
土層断面
（東から）



3　桑山４号墳
墳丘縦断北側
土層断面
（東から）



1　桑山４号墳竪穴式石室１（東から）



2　桑山４号墳竪穴式石室１西壁（東から）



3　桑山４号墳竪穴式石室１北壁（南から）



4　桑山４号墳竪穴式石室１南壁（北から）



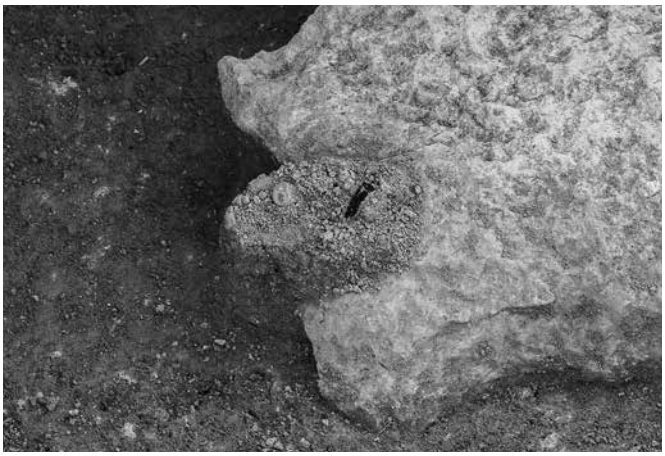
5　桑山４号墳竪穴式石室１東壁（西から）



1　桑山４号墳竪穴式石室１遺物出土状況（東から）



2　桑山４号墳竪穴式石室１遺物出土状況（南から）



3　桑山４号墳　S 41・S 47 出土状況（南東から）



4　桑山４号墳竪穴式石室１木棺痕跡（東から）



1　桑山４号墳竪穴式石室２（東から）



2　桑山４号墳竪穴式石室２西壁（東から）



3　桑山４号墳竪穴式石室２北壁（南から）



4　桑山４号墳竪穴式石室２南壁（北から）



5　桑山４号墳竪穴式石室２東壁（西から）



1　桑山４号墳竪穴式石室２遺物出土状況（西から）



2　桑山４号墳竪穴式石室２北小口遺物出土状況（南東から）



1　桑山５号墳調査前（北西から）



2　桑山５号墳全景（北西から）



1　桑山５号墳全景（南西から）



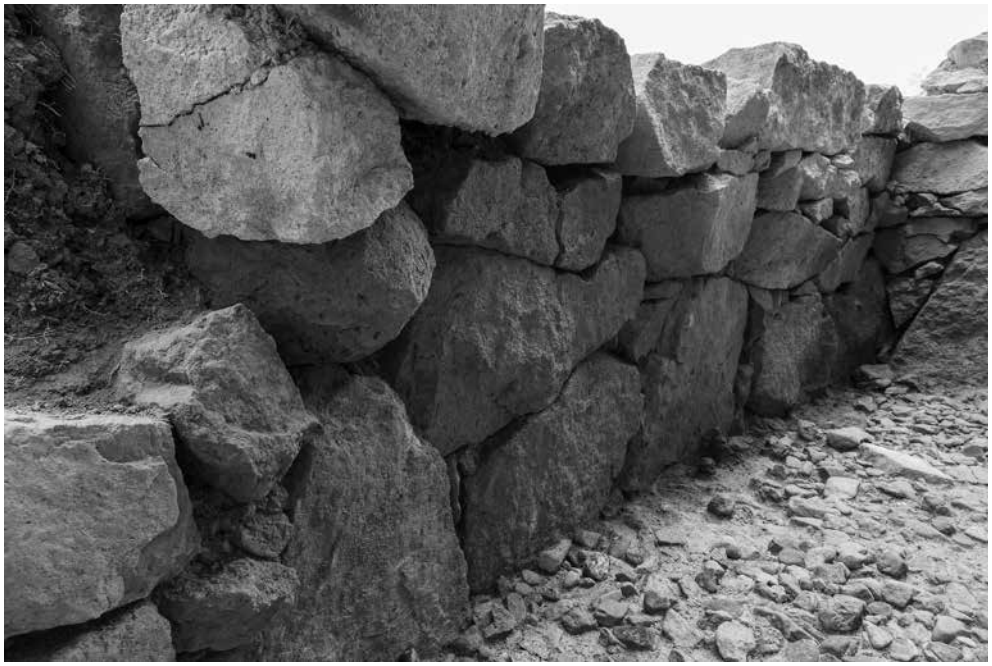
2　桑山５号墳石室（北東から）



3　桑山５号墳石室（南西から）



1　桑山５号墳
石室奥壁
（南西から）



2　桑山５号墳
石室左側壁
（南東から）



3　桑山５号墳
石室左側壁
（北東から）



1　桑山５号墳石室遺物出土状況（北東から）



2　桑山５号墳石室袖部遺物出土状況（北東から）



1　桑山５号墳
石室遺物出土状況
（南西から）



2　桑山５号墳
石室奥壁際
遺物出土状況
（南から）



3　桑山５号墳
石室奥壁際
遺物出土状況
（南から）



1　桑山５号墳
石室袖部
遺物出土状況
（東から）



2　桑山５号墳
石室袖部
遺物出土状況
（南東から）



3　桑山５号墳石室奥壁際鉄器出土状況（南西から）



4　桑山５号墳石室玉類出土状況〈範囲 A〉（南から）



1　桑山５号墳
周溝南半
遺物出土状況
（東から）



2　桑山５号墳
周溝北半
遺物出土状況
（南から）



3　桑山５号墳埴輪（215）出土状況（北から）



4　桑山５号墳埴輪（218）出土状況（南西から）



1　桑山５号墳
墳丘横断土層断面
（南西から）



2　桑山５号墳
墳丘縦断土層断面
（北西から）



3　桑山５号墳
石室縦断土層断面
（北から）



1　桑山古墳群
箱式石棺墓１
（南東から）



2　桑山古墳群
箱式石棺墓１
遺物出土状況
（南西から）



3　桑山古墳群
土器棺墓１
（南東から）


1


2


3


4


5


8


9


10


11


12


13


14


31


24


17

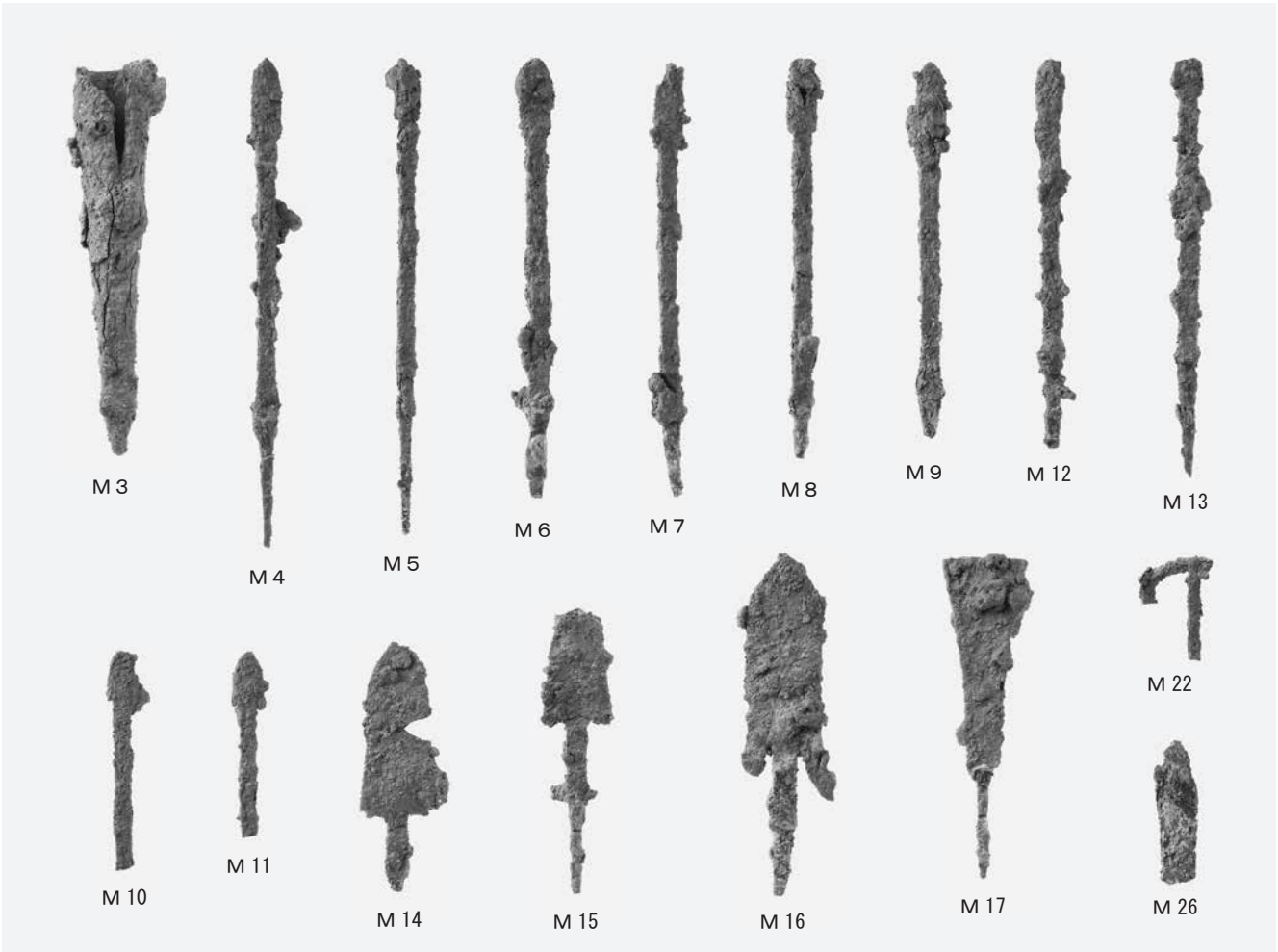

20


22

桑山１号墳石室内出土土器①



1　桑山１号墳石室内出土土器②



2　桑山１号墳石室内出土鉄器


35


36


40


37


43


38


42


39


44


46


50


49


51


53


57


55

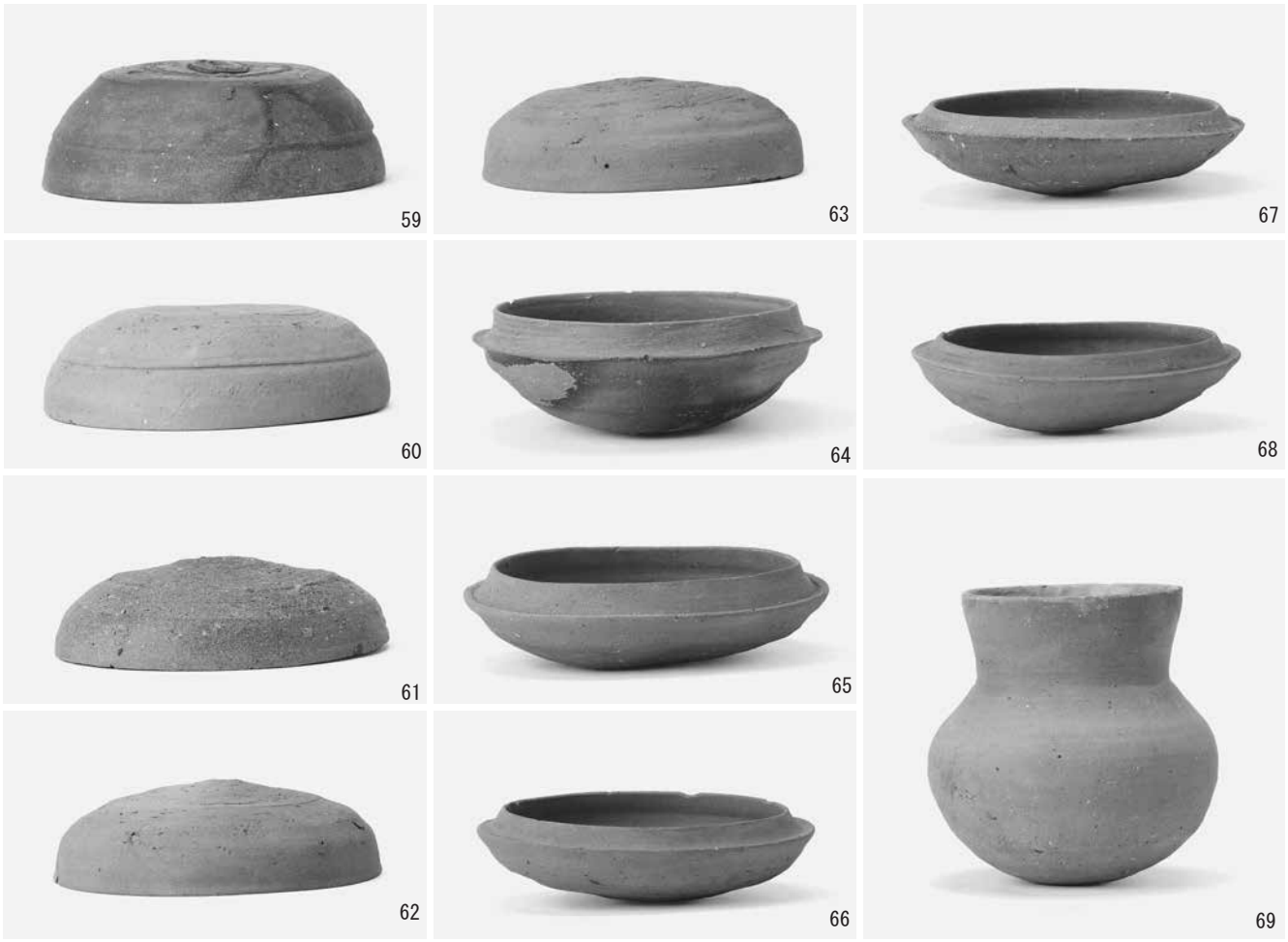

56


54

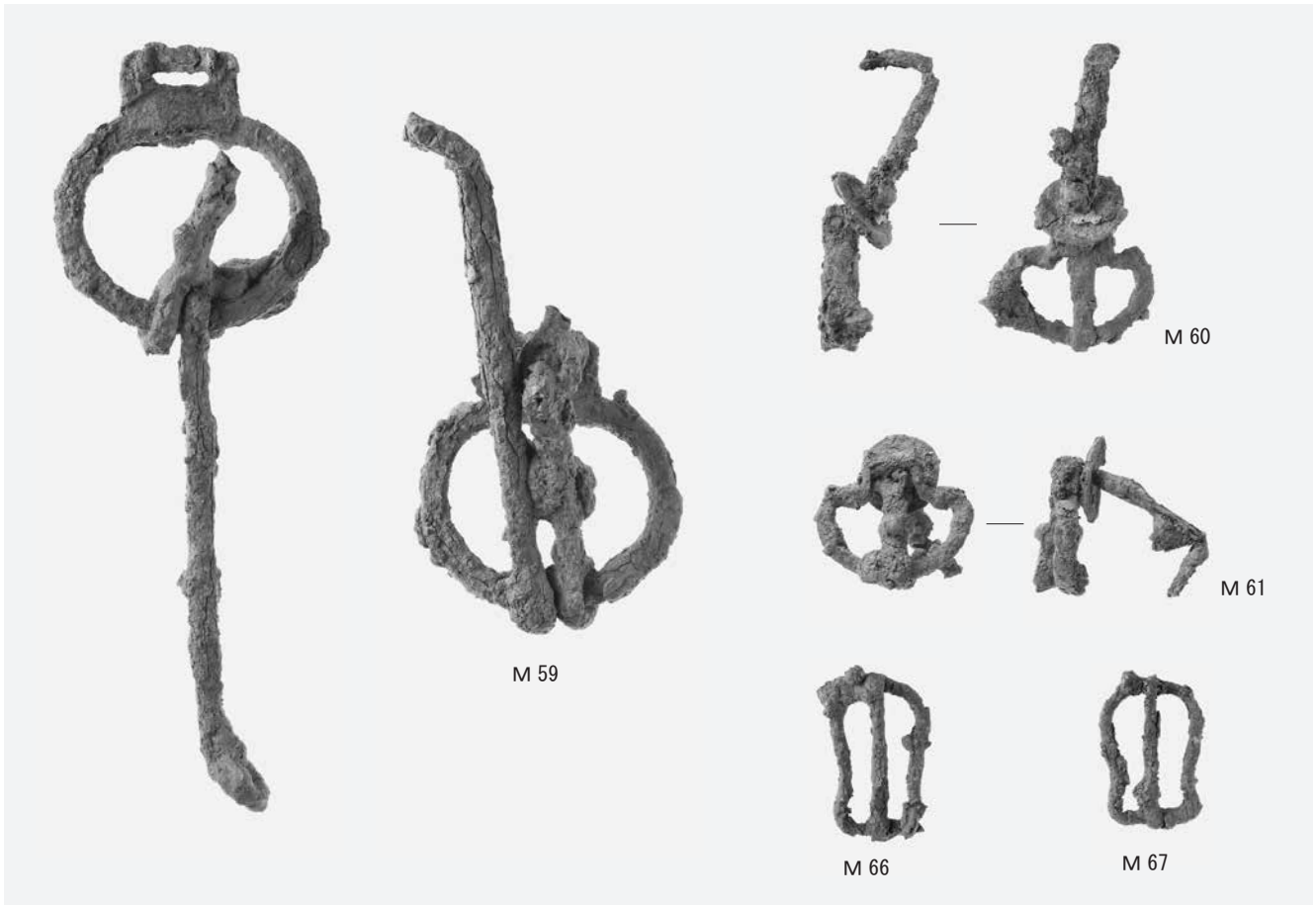

58


32

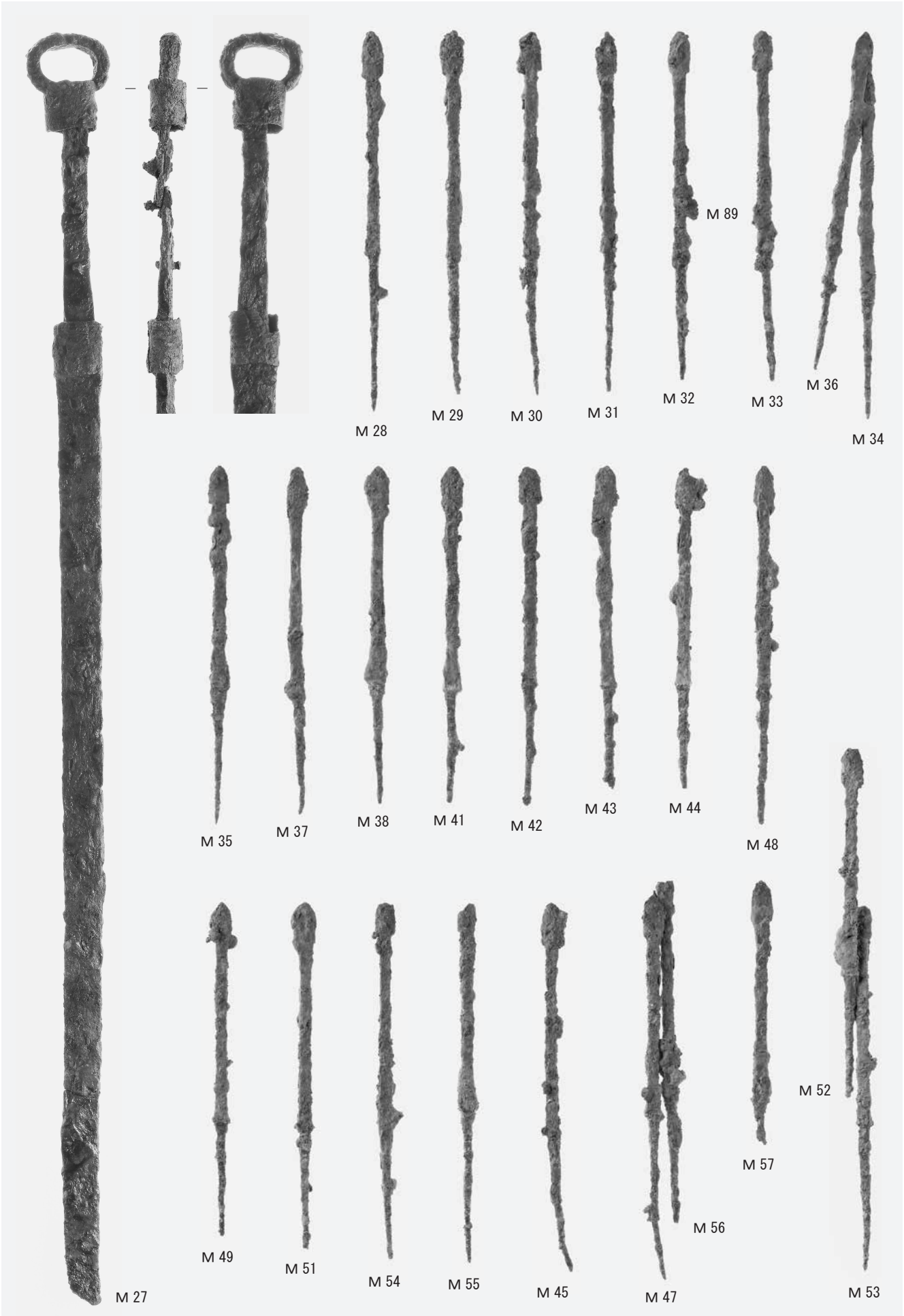
桑山１号墳周溝及び墳丘出土遺物



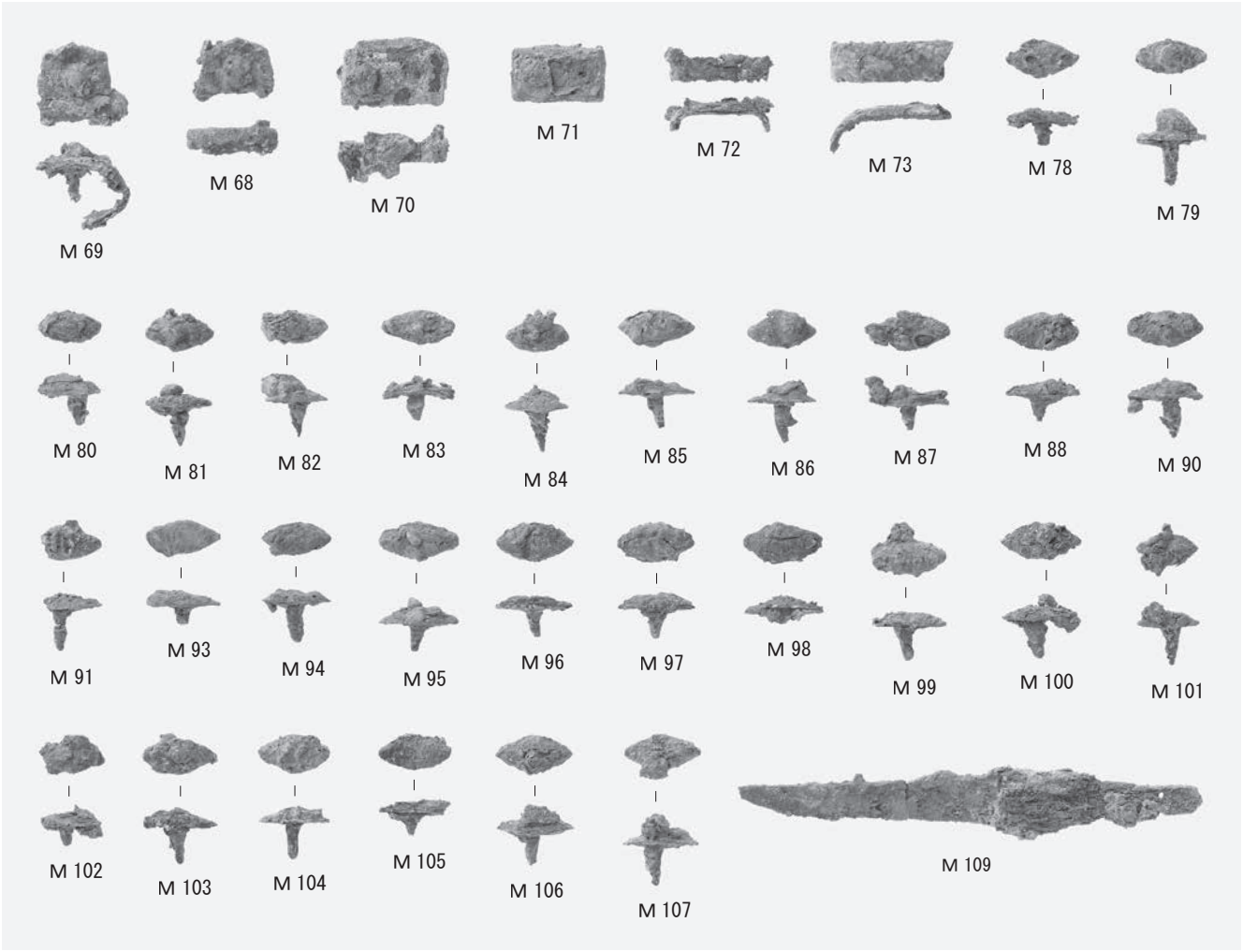
1　桑山２号墳石室内出土土器



2　桑山２号墳石室内出土鉄器①



桑山２号墳石室内出土鉄器②



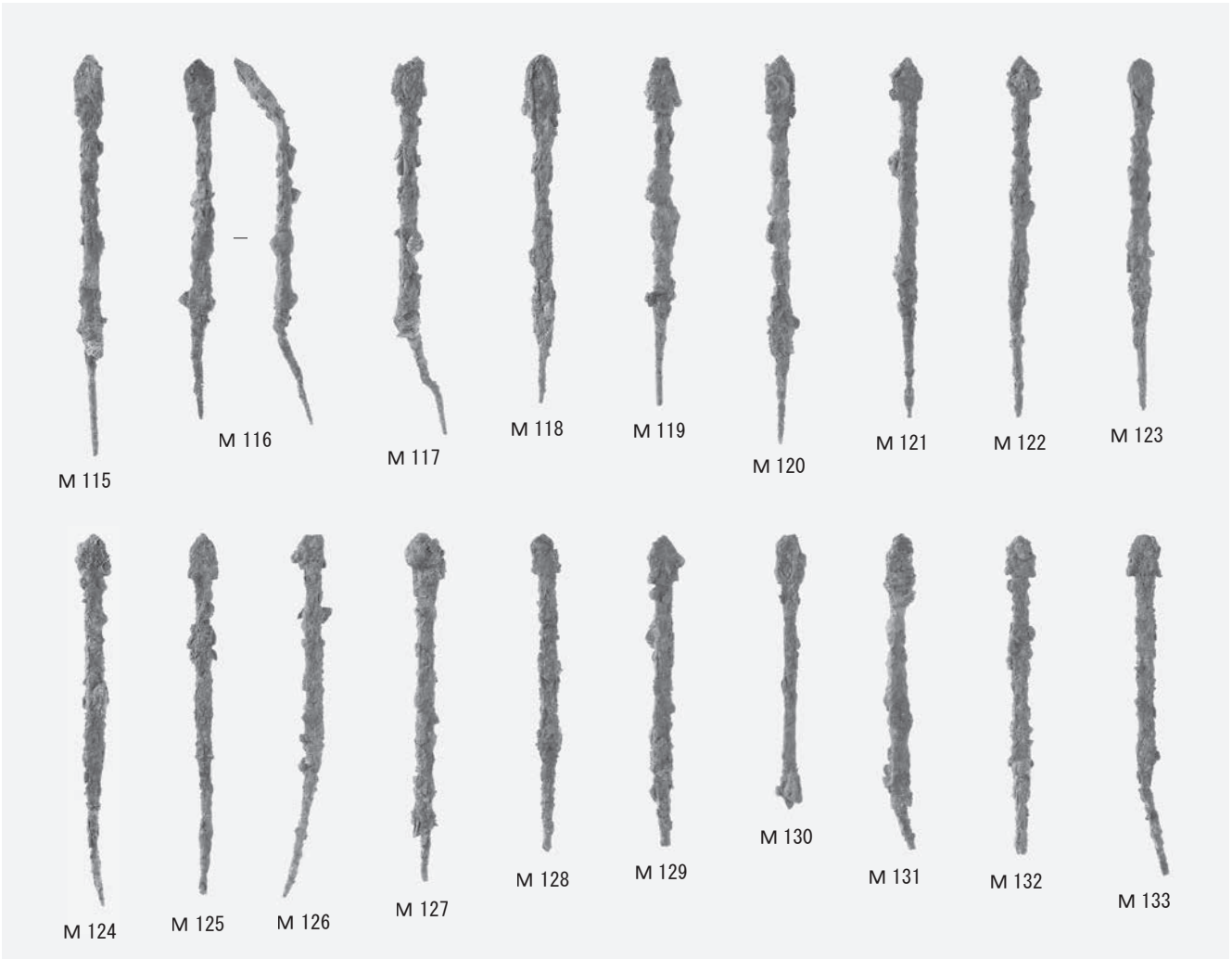
1　桑山２号墳石室内出土鉄器③



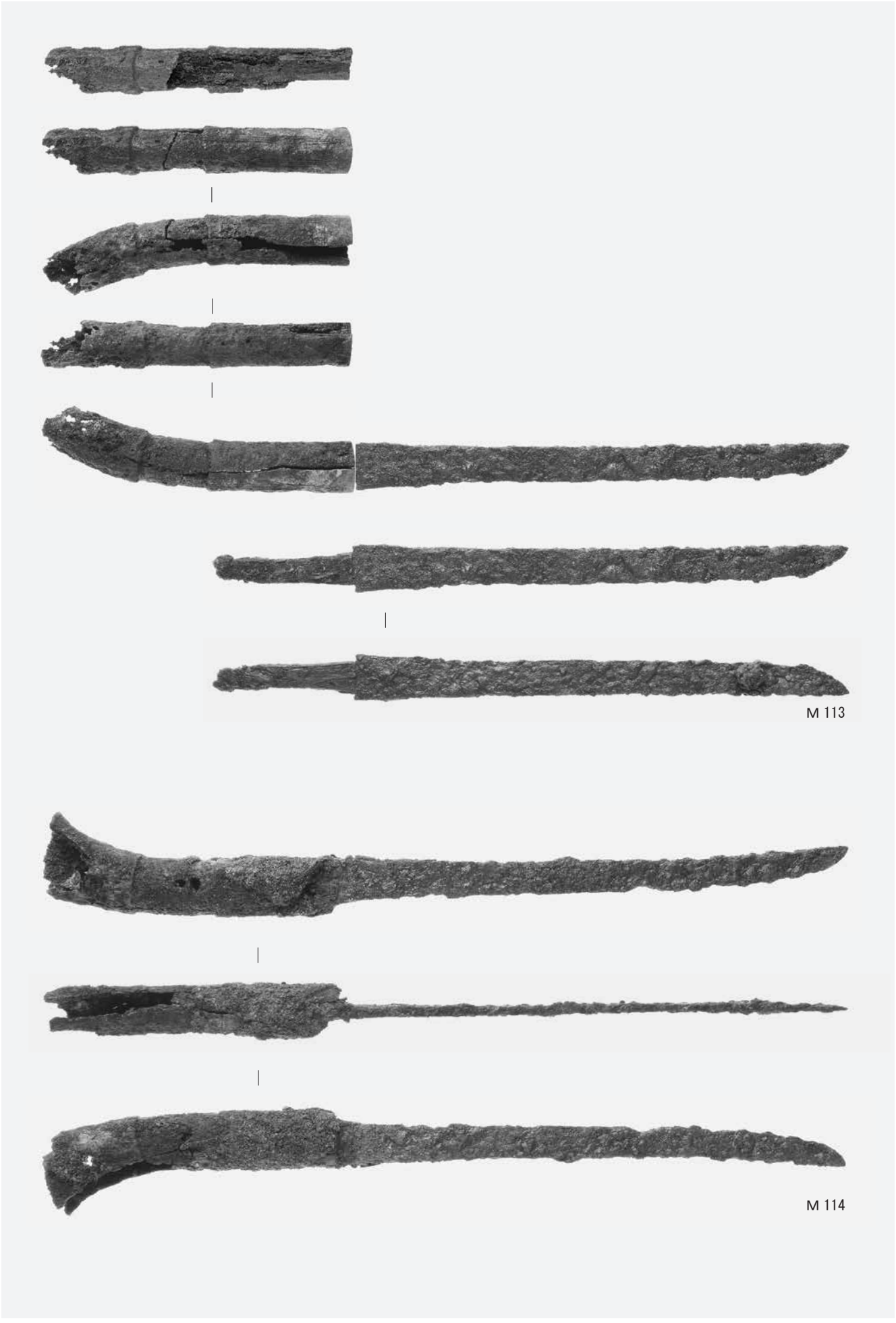
2　桑山２号墳周溝及び墳丘出土遺物



1　桑山３号墳箱式石棺出土土器



2　桑山３号墳箱式石棺内出土鉄器①



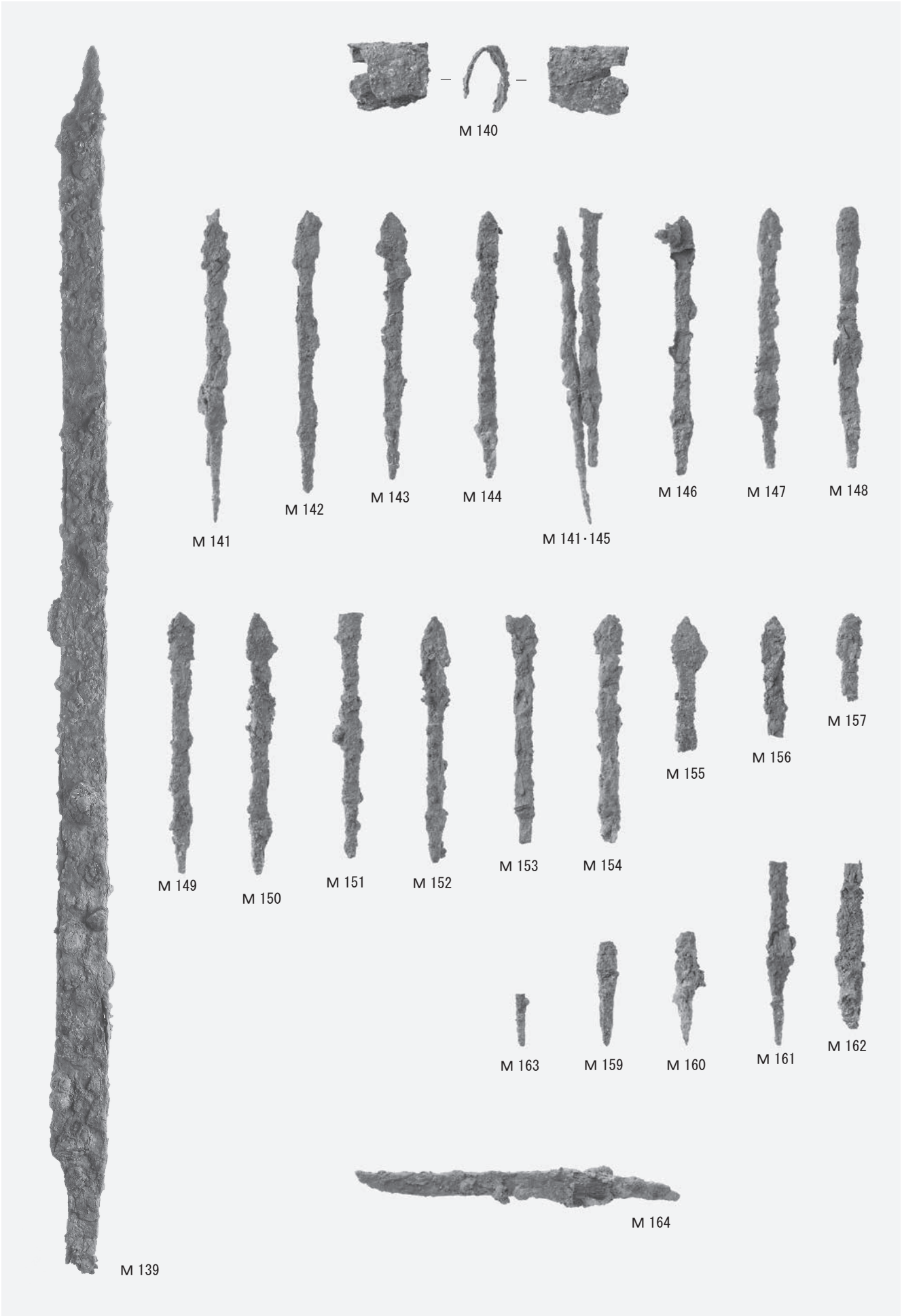
桑山３号墳箱式石棺内出土鉄器②



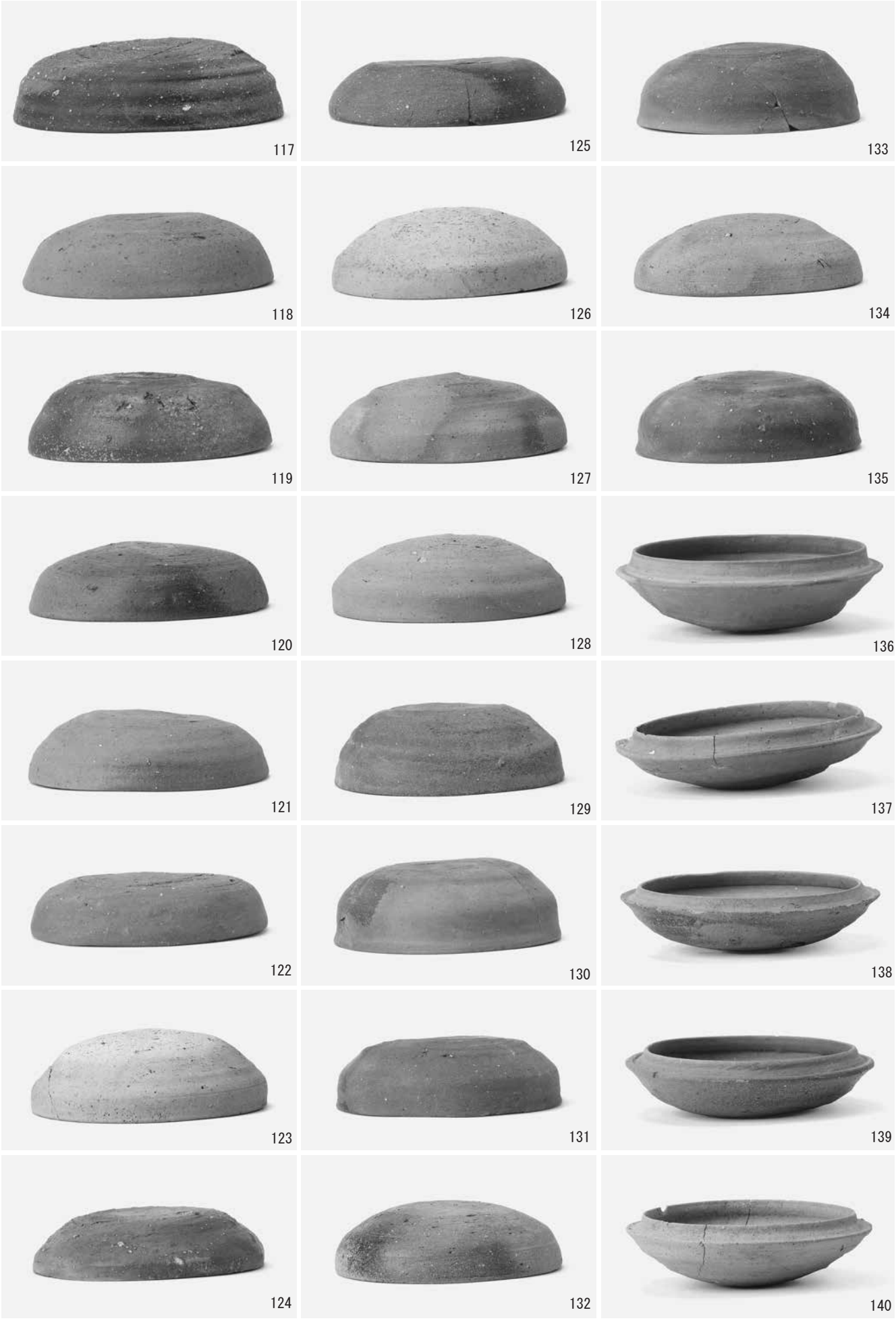
1　桑山４号墳竪穴式石室１内出土土器・鉄器



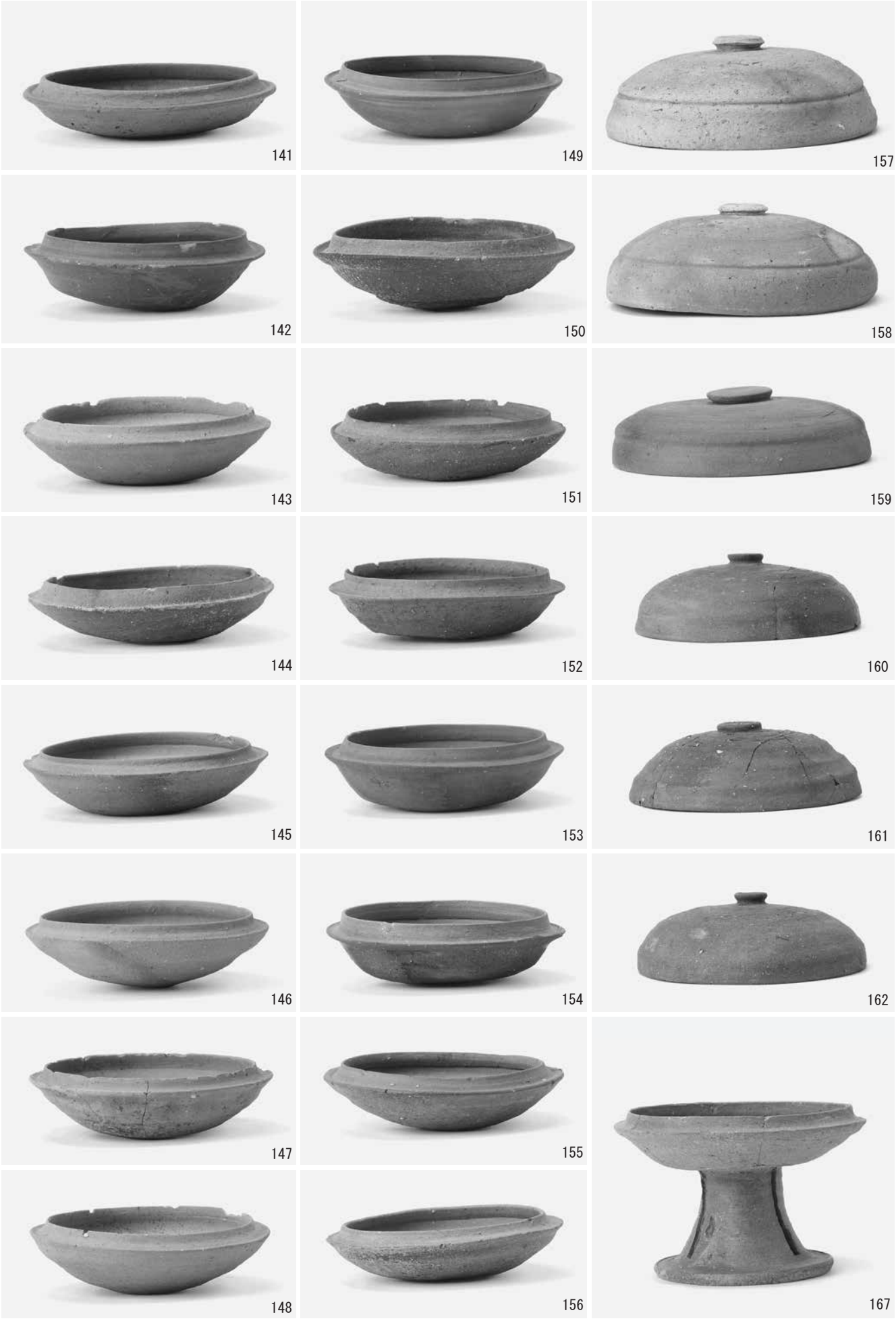
2　桑山４号墳竪穴式石室２内出土土器



桑山４号墳竪穴式石室２内出土鉄器



桑山５号墳石室内出土土器①



桑山５号墳石室内出土土器②


163


164


173


174


165


168


169


175


166


170


171


175

桑山５号墳石室内出土土器③


176


179


185


177


181


187


178


182


188


189


180


186


190

桑山５号墳石室内出土土器④


183


193


194


195 拡大


184


191


192


195

桑山５号墳石室内出土土器⑤


196


198


199


197


200


201

桑山５号墳石室内出土土器⑥


202


204


203


211


212


207

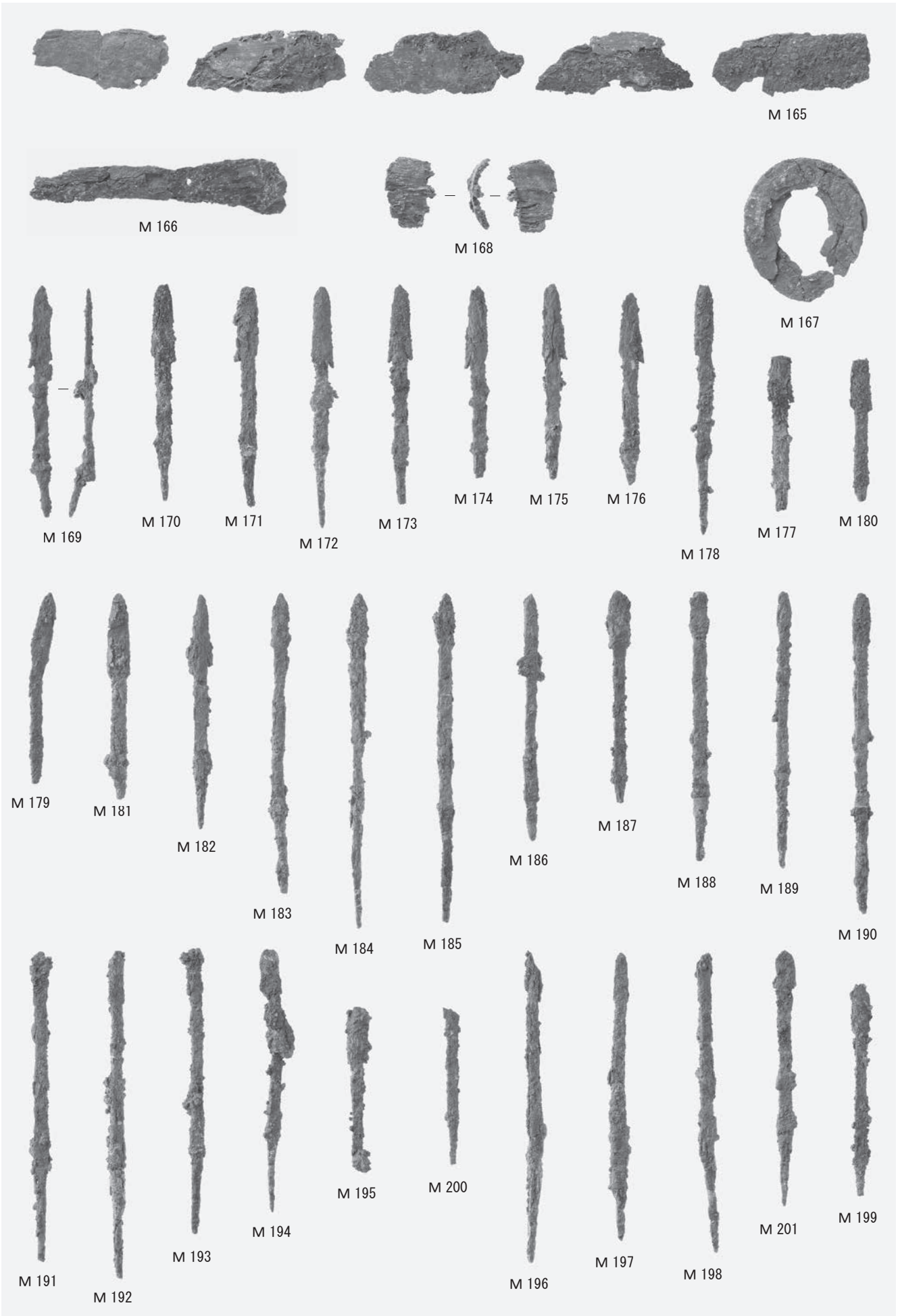

206


209

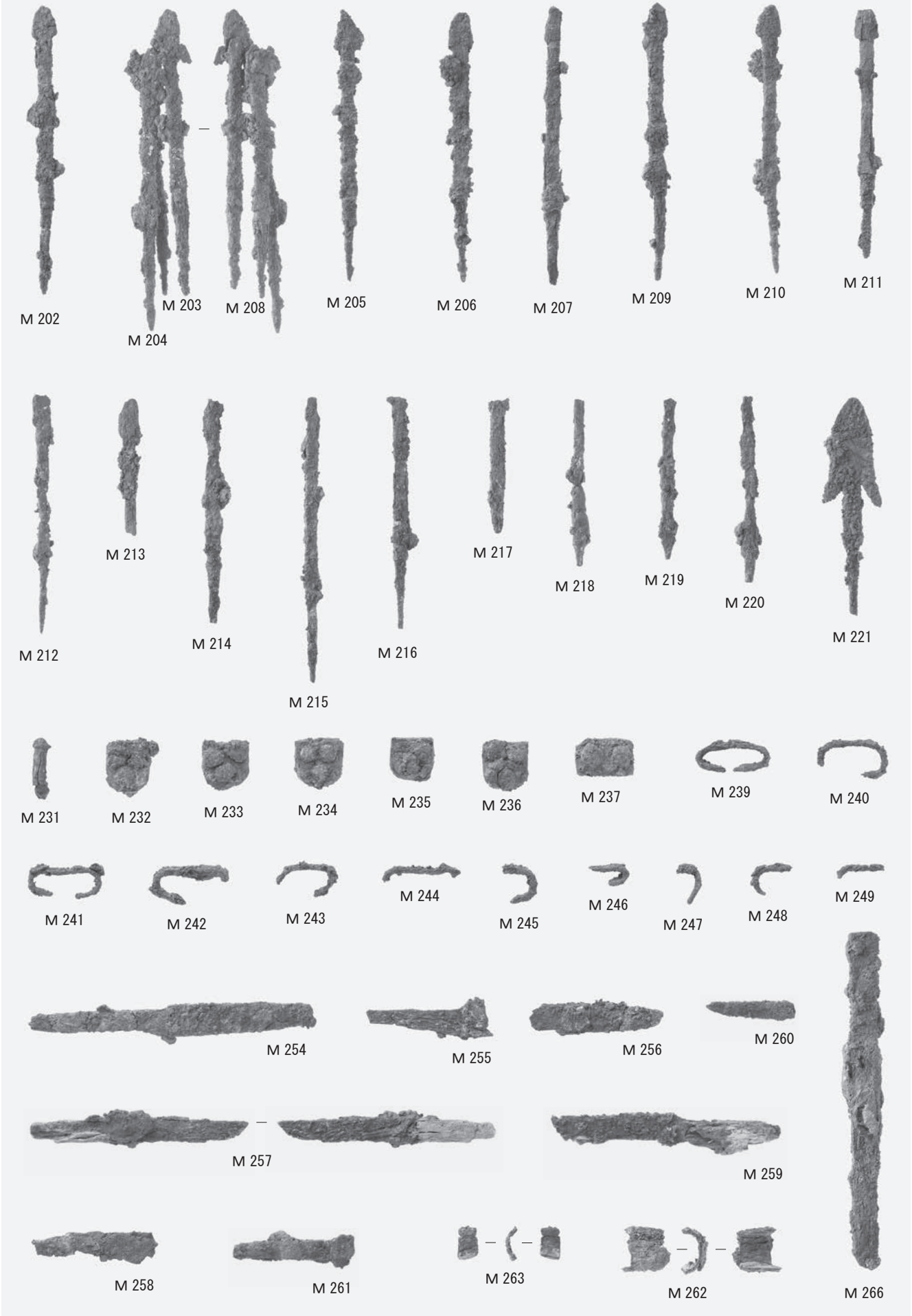

208


210

桑山５号墳石室内出土土器⑦



桑山５号墳石室内出土鉄器①



桑山５号墳石室内出土鉄器②


213


219


222


231


232


215


228

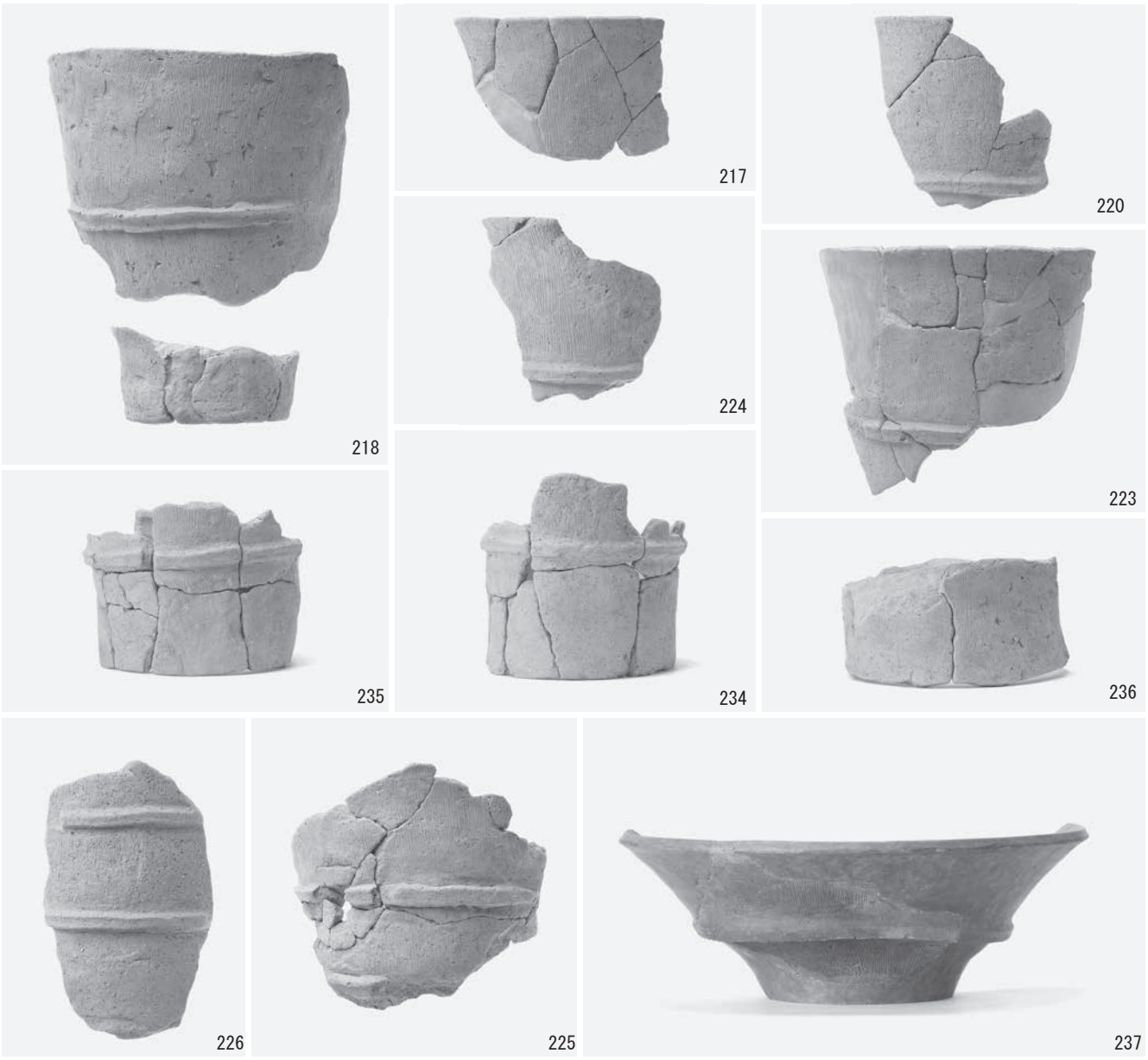

229


216

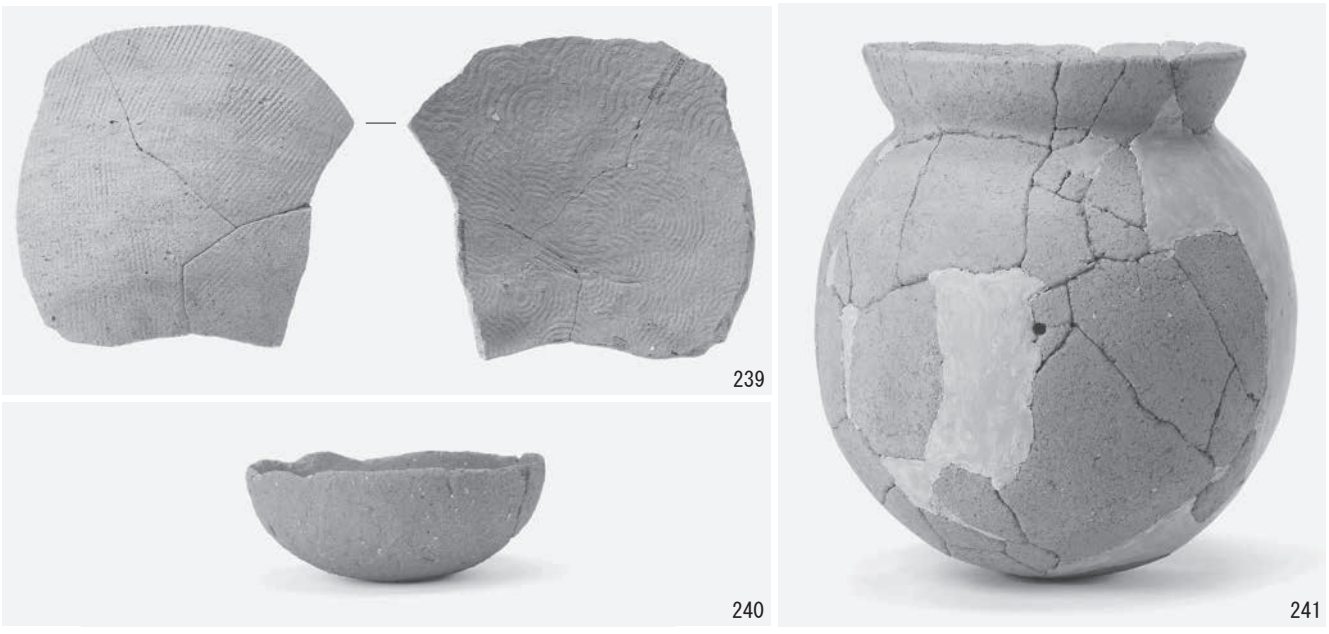

227


230

桑山５号墳周溝及び墳丘出土遺物①



1　桑山５号墳周溝及び墳丘出土遺物②



2　桑山古墳群箱式石棺墓１・土器棺墓１出土土器

報告書抄録

ふりがな	しょうぶさこいせき　くわやまいせき　くわやまこふんぐん
書名	勝負峪遺跡　桑山遺跡　桑山古墳群
副書名	一般国道 53 号（津山南道路）改築工事に伴う発掘調査２
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	262
編著者名	小嶋善邦　藤井雅大　尾上元規　氏平昭則　藤井翔平　四田寛人　大橋雅也　柴田英樹　鈴木真太郎 山下勝行　岩本紗采　白石純　パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒 701-0136　岡山県岡山市北区西花尻 1325-3　TEL 086-293-3211　FAX 086-293-0142 URL　https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒 700-8570　岡山県岡山市北区内山下 2-4-6　TEL086-224-2111
発行年月日	2023 年 3 月 17 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積（㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
勝負峪遺跡	岡山県 津山市 平福 668 ほか	33203	332031236	35° 2′ 40″	133° 57′ 58″	20200406 ～ 20201016	1,790	記録保存調査
桑山遺跡	岡山県 津山市 平福 666 ほか	33203	332031238	35° 2′ 35″	133° 57′ 57″	20181106 ～ 20190315	3,620	
桑山古墳群	岡山県 津山市 平福 666 ほか	33203	332030433（１号墳）	35° 2′ 35″	133° 57′ 58″			
		33203	332030434（２号墳）	35° 2′ 34″	133° 57′ 57″	20190408 ～ 20200226		
		33203	332031186（３号墳）	35° 2′ 35″	133° 57′ 56″			
		33203	332031234（４号墳）	35° 2′ 36″	133° 57′ 57″			
	岡山県 津山市 平福 667 ほか	33203	332031235（５号墳）	35° 2′ 37″	133° 57′ 59″	20200406 ～ 20201016	555	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
勝負峪遺跡	集落 墓	弥生時代	竪穴住居１軒、段状遺構５面、石列２列、土坑墓 21 基、被熱痕跡１か所	弥生土器、紡錘車、磨製石斧、磨製石包丁、石鏃	小口溝、側板溝を持つ土坑墓群。
	集落	古墳時代以降	掘立柱建物１棟、柱穴列１列、段状遺構２面、土坑６基、道１	土師器、須恵器、刀子、鉄滓	
桑山遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居４軒、段状遺構３面	弥生土器、磨製石包丁、石鏃、尖頭器、石錘、磨製石斧、磨石、砥石	焼失住居１軒。段状遺構から脚付鉢出土。
	集落 生産遺跡	古墳時代以降	竪穴住居２軒、段状遺構４面、土坑７基、土器棺墓１基、土坑墓１基、炉１基、製炭窯１基、粘土採掘坑２基、溝２条	土師器、須恵器、短刀、刀子、銙帯（丸鞆）、鉄滓	
桑山１号墳	古墳	古墳時代　後期	古墳１基	須恵器、大刀、石突、鉄鏃、馬具、鉋、玉類、円筒埴輪、石見型埴輪	導入期の片袖式横穴式石室。板石閉塞。大型提瓶、把手付高杯出土。

桑山２号墳	古墳	古墳時代　後期	古墳１基	須恵器、素環頭大刀、鉄鏃、馬具、刀子、耳環、円筒埴輪、石見型埴輪	導入期の両袖式横穴式石室。石室内から素環頭大刀出土。
桑山３号墳	古墳	古墳時代　後期	古墳１基	土師器、須恵器、鹿角装短刀、鉄鏃、刀子、玉類、円筒埴輪、人骨	埋葬施設は箱式石棺と木棺墓。箱式石棺内に小児人骨遺存。
桑山４号墳	古墳	古墳時代　後期	古墳１基	土師器、須恵器、大刀、鏃、鉄鏃、刀子、玉類	埋葬施設は２基の竪穴式石室。
桑山５号墳	古墳	古墳時代　後期	古墳１基	土師器、須恵器、大刀、鏃、鉄鏃、弓飾金具（両頭金具）、馬具、刀子、釘、玉類、円筒埴輪、朝顔形埴輪	片袖式横穴式石室内から装飾壺と鈴付高杯出土。

要約

勝負峪遺跡

丘陵端部に営まれた弥生時代中期の集落・墓及び古墳時代以降の集落である。弥生時代中期には 20 基の土坑墓が９ｍ四方の範囲に集中して造られ墓域を形成していた。土坑墓の大多数は小口溝や側板溝を持っており、木棺が設置されていたと考えられる。副葬品は全ての土坑墓で認められなかった。墓域を区画するものと考えられる石列も見つかった。

桑山遺跡

丘陵端部に営まれた弥生時代から中世にかけての集落及び古墳時代以降の生産遺跡である。弥生時代の竪穴住居の中には焼失住居が含まれる。古墳時代以降には粘土採掘坑や製炭窯が造られた。特徴的な遺物として、桑山３号墳の周溝埋土から出土した銙帯（丸鞆）がある。製錬滓が多く見つかることから、近隣に製鉄遺跡があると考えられる。

桑山古墳群

６世紀中頃に丘陵端部に築造された５基の円墳で構成された古墳群。竪穴系の埋葬施設を持つ３・４号墳は眺望の良い高所に、横穴式石室を持つ１・２・５号墳は低所に位置していた。また３号墳の西側には６世紀中頃～後半に造られた箱式石棺墓と土器棺墓があった。

桑山１号墳は、径約 19 ｍの円墳である。周溝からは須恵器、円筒埴輪、石見型埴輪が出土した。周溝の北西側には土橋状に掘り残した部分が認められた。埋葬施設は南西に開口する全長 6.3 ｍの片袖式の横穴式石室で、閉塞は板石閉塞である。石室内は攪乱を受けていたが、須恵器、大刀、石突、鉄鏃、馬具、鉇、玉類が出土した。

桑山２号墳は、径約 13 ｍの円墳である。周溝からは円筒埴輪、石見型埴輪が出土した。埋葬施設は南西に開口する全長 3.68 ｍの両袖式の横穴式石室で、塊石と板石を用いて閉塞していた。石室は大きく攪乱を受けていたが、床面の礫床は良好に遺存しており、その上から須恵器、素環頭大刀、鉄鏃、馬具、刀子、耳環が出土した。

桑山３号墳は、径約 9.5 ｍの円墳である。周溝からは円筒埴輪が出土した。埋葬施設は箱式石棺と木棺直葬墓である。箱式石棺は地山整形後に設置され、埋葬後に盛土を施して墳丘が構築されていた。未盗掘の箱式石棺からは小児人骨が見つかり、その周囲で須恵器、鹿角装短刀、鉄鏃、玉類が副葬されていた。墳頂から掘り込まれていた木棺直葬墓からは遺物は出土しなかった。

桑山４号墳は、径約 10 ｍの円墳である。周溝の北西側には土橋状に掘り残した部分が認められた。埋葬施設は２基の竪穴式石室である。どちらの石室も天井石は失われていたが、床面は良好な状態であった。竪穴式石室１では木棺痕跡と棺台が認められ、須恵器、土師器、刀子、玉類が出土した。竪穴式石室２では礫床の上から須恵器、大刀、鉄鏃、刀子が出土した。

桑山５号墳は、径約 10.5 ｍの円墳であると考えられる。周溝からは円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土した。周溝の北西側には土橋状に掘り残した部分が認められた。埋葬施設は南西に開口する全長約 7.0 ｍの片袖式の横穴式石室である。天井石は失われていたが、床面は良好に遺存していた。石室内からは、装飾壺や鈴付高杯などを含む多量の須恵器、土師器、大刀、鉄鏃、馬具、刀子、釘、玉類などが出土した。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 262

勝負峪遺跡
桑 山 遺 跡
桑山古墳群
一般国道 53 号（津山南道路）
改築工事に伴う発掘調査２

令和５年３月 17 日　印刷
令和５年３月 17 日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
　　岡山県岡山市北区西花尻 1325-3
発行　岡山県教育委員会
　　岡山県岡山市北区内山下 2-4-6
印刷　株式会社 中野コロタイプ
　　岡山市北区玉柏 390